

# ゾイドバトルストーリー異伝 —機獣達の挽歌—

あかいりゅうじ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——これは一人の男の視点で語られる、もう一つの『第二次大陸間戦争』。

銀河の果てに存在する、『惑星Zi』。そこには優れた戦闘力と明確な自我を持つ金属生命体・ゾイドが存在した。ヘリック共和国とガイロス帝国——惑星を統べる二つの大国は、積年の因果を清算するべく、最強兵器ゾイドを以って激突する。第二次大陸間戦争の幕が、異邦の地——西方大陸エウロペで、切って落とされた。

ZAC2099年11月。共和国軍高速戦闘隊の士官ジェイ・ベック少尉が、西方大陸・ロブ基地へと降り立った。第一次全面会戦に敗れ劣勢に陥った母国のため、ジェイ達高速戦闘隊へと下された任務は、最前線『ミューズ森林地帯』でゲリラ戦を敢行し、帝国軍の追撃を食い止めることだった……。

本編完結済。タカラトミーより展開されているZOIDSシリーズの二次創作、設定はバトスト準拠です。興味をお持ちいただけただけの方、是非ご一読下さい。

# 目次

## 第一部：エウロペ

### 登場人物紹介

①	序章	1
②	着任 — ロブ基地 —	8
③	従軍 — 307小隊 —	13
④	実戦 — ミューズ — (前編)	18
⑤	実戦 — ミューズ — (後編)	23
⑥	不安	28
⑦	再起	35
⑧	強襲 — グラム湖畔 — (前編)	41
⑨	強襲 — グラム湖畔 — (後編)	47
⑩	暴風	53
⑪	死闘	59
⑫	夜明け	64

## 第二部：テクノロジー

①	プロローグ	69
②	『パラメヌ』にて	73
③	システム	79
④	ブレードライガー (前編)	85
⑤	ブレードライガー (後編)	91
⑥	指令	97
⑦	出立	104
⑧	ツヴァイン (前編)	111
⑨	ツヴァイン (後編)	119

⑩	攻撃	125
⑪	怒り	130
⑫	灰の山	136
⑬	ブラツクオニキス	142
⑭	『テクノロジー』	148
⑮	リンク	155
⑯	帰還	162
幕間：エリサのデイバイソン		
	エリサのデイバイソン	① 167
	エリサのデイバイソン	② 172
	エリサのデイバイソン	③ 177
	エリサのデイバイソン	④ 184
	エリサのデイバイソン	⑤ 191
第三部：暗黒の軍勢		
①	プロローグ — 終結	199
②	予兆 (前)	205
③	予兆 (後)	211
④	治安維持 (前)	217
⑤	治安維持 (後)	223
⑥	邂逅 — クロイツ	229
⑦	クロイツの騎士 (前)	234
⑧	クロイツの騎士 (後)	239
⑨	少女	246
⑩	シルヴィア (前)	252
⑪	コンボイとエラ	258

⑩	終末の序曲(後)	422
⑨	終末の序曲(前)	415
⑧	終焉(ニクス)への旅路(後)	407
⑦	終焉(ニクス)への旅路(前)	401
⑥	前夜	394
⑤	微熱	387
④	陽炎   フレイム	380
③	ミラージュ	372
②	暗夜航路	365
①	プロローグ	358
第四部：ニクスへの旅路		
☒	エピローグ   終結	353
☒	暁に墜つ	347
☒	夜明け前	339
☒	超越者(イモータル)	332
☒	シルヴィア(後)	326
⑳	深淵	320
⑱	これから	314
⑱	暗黒の軍勢	308
⑱	慟哭	301
⑱	焦燥	294
⑱	離散(後)	288
⑱	離散(前)	281
⑱	『パイロット・デザイン』	274
⑱	虎嵐	266

	⑪ 決別	428
	⑫ 機獣達へと捧ぐ挽歌(前)	433
	⑬ 機獣達へと捧ぐ挽歌(後)	440
	⑭ どうか終わる事の無き旅を	449
	幕間：『ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼』	
	幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼	① 454
	幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼	② 459
	幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼	③ 464
	幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼	④ 470
	幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼	⑤ 475
	幕間：ニクスの幽鬼(、)、ゼネバスの竜鬼(、)	482
	追補編：『回想録』	
	回想碌：機獣達の挽歌	488
	回想碌：機獣達の挽歌	493
	回想碌：機獣達の挽歌	497
	回想碌：機獣達の挽歌	502
	回想碌：機獣達の挽歌	510
	挽歌絶えぬ争いの星に 葬送の華を捧ぐ	519
	挽歌絶えぬ争いの星に 葬送の華を捧ぐ	519

## 第一部：エウロペ

### 登場人物紹介

―ヘリック共和国―

ジェイ・ベック

本編の主人公的存在。共和国軍特殊工作師団・高速戦闘隊に配属された新米士官。25歳。実戦経験が無く未熟さも目立つが、西方大陸戦争、そして暗黒大陸戦争を通して戦う意味を見出し、成長していく。階級は少尉で、乗機は《シールドライガー》、《ブレードライガー》。

スターク・コンボイ

ジェイの所属する、第307高速戦闘小隊の隊長を務める。階級は大尉。高速戦闘のプロフェッショナルであり、『レオマスター』に次ぐ操縦技術と、冷静な判断力を持つ実直なゾイド乗り。乗機は装甲に迷彩塗装を施した《シールドライガーDCS》。

グロック・ソードソール

第307高速戦闘小隊のゾイド乗りで、スターク大尉の片腕的存在。たたき上げの軍人で、実践に不慣れなジェイと衝突する。階級は少尉で、乗機は迷彩塗装を施した《シールドライガー》。

ツヴァイン

西方大陸出身の傭兵で、第307高速戦闘小隊と行動を共にする。ゾイド乗りとしての力量は高い一方、皮肉屋で毒舌家。愛機は《コマンドウルフ》、後にアタックユニットを装備した《コマンドウルフAU》。

マクシミリオン・ペガサス

ヘリック共和国軍中佐。西方大陸派遣軍の副官にして、ロボ基地の

副司令官を務める男性。47歳。自らも《ゾイドゴジュラスMkⅡ》を駆り、常に最前線に身を置く歴戦の猛者。

エリサ・アノン

ジェイよりも三か月程先に西方大陸へと赴任した女性士官で、重砲隊所属。23歳。階級は少尉。乗機は《カノントータス》、《ティバイソン》。

レイモンド・リボリー

軍属技術局より派遣された技術者で、『オーガノイドシステム』研究のため、ジェイ達307小隊に同伴する。

—ガイロス帝国—

ヘルマン・シユミット

帝国技術開発局所属のゾイド乗り。28歳。西方大陸に残された古代文明技術『欠けたピース』を求める。階級は大尉。乗機は改造レッドホーン・《ブラックオニキス》。旧大戦で用いられた改造機《クリムゾンホーン》の仕様を踏襲した局地戦用機。

レンツ・メルダース

ガイロス帝国軍のエースパイロット。27歳。ガイロス帝国軍撤退後のエウロペで暗躍する残党軍『クロイツ』に参加し、ニクシー基地奪還を目論む。プライドが高く、激情家。階級は中尉。乗機は改造ジェノザウラー《ジェノブレイカー零式》。

シルヴィア・ラケーテ

ガイロス帝国残党軍『クロイツ』の女性パイロットで、レンツ中尉と双璧を為す優秀なゾイド乗り。レンツとは反対に冷静沈着。《ライトニングサイクス・カスタム》を乗機とし、卓越した技量でヘリック軍を圧倒する。



ガース・クロイツ

ガイロス帝国残党軍『クロイツ』の指導者。38歳。階級は少佐。ヘリック共和国に奪われたニクシー基地奪還を目論む。愛機は《アイアンコング・マニューバ》。

## ① 序章

——ZAC2099年 十一月某日 デルダロス海上空

空高く照らす日差し之光に、ジェイ・ベック少尉は眉を顰めた。

遮蔽物の一切ない海上の日差しは、ジェイを乗せた船の甲板を白ませるほどに眩い。ヘリック共和国本国——中央大陸デルポイ・ユピト港を出て、はや三日。船旅に飽きて潮風を浴びようと外に出たジェイ少尉だったが、ジリと熱してくる陽光に怖じけて、後悔した。

大型軍用貨物空船《ネオタートルシップ》——少尉を乗せたそれは、彼の故郷より遙か西方の異邦・エウロペ大陸を目指して揺れる。半年程前、北方のニクス大陸を統べる大国『ガイロス帝国』が、半世紀にも及ぶヘリックとの軋轢を清算しようと宣戦布告、大海を隔てた両国に直接の戦争は難しく、侵攻の中継地として選ばれたのが、強力な統一国家を持たない、西方大陸エウロペだったのである。

曲がりなりにも母国を守るべき軍隊に志願したジェイだ。戦争が始まるというのならば、従軍するのは道理である。侵略戦争を仕掛けるガイロスへの義憤はあったし、戦いの場に命を掛ける覚悟もあった。そのはずなのに——故郷を離れてから、ジェイの胃の腑は妙な圧迫感に苛まれ続けている。落ち着いてもいられず、出航以来毎度の如く船内を闊歩していた。開戦当初から従軍していたのならばまた違ったのかもしれないが、士官学校を卒業したてだったジェイは、半年近く本国警備隊で任を与えられ、ようやくとこの冬、エウロペ大陸第二次派遣軍の一員として、西方へと渡航したのである。

このまま自分とは関わりの無い所で、戦いは終局するのではないか——そんな淡い期待を抱いていた矢先の指令であった。入隊時には確固たるものとしてあった、『戦場への覚悟』が揺らいでいるのを、否定できない。

「——船酔いかい？ 少尉殿」

しゃがれ声に、振り返る。見ると、油汚れですすけたツナギを纏った老整備兵が、ジリと汗の雫を浮かべながら笑っていた。片手には、

缶コーヒー。積載された兵器達の最終調整を行っていて、今はさしずめ、休憩を与えられて風を浴びに来た所か。

ハハア、と、老整備兵は乾いた笑いを零した。ジェイ少尉のつま先から視線を上げて観察して行き——その顔先で止まると、「ロックスターみたいな頭してんな、お前なあ」と、彼を茶化す。茶髪を頭頂部付近で逆立てた、ジェイのソフトモヒカン。彫り深く、程々に端正な顔立ちの青年士官に当たった老兵の言に、嘲笑の意図は無かったが——続く彼の言葉は、ジェイの気に触れた。

「そうやって尖ってるくせに、もう母国が恋しくなっちゃまったのかい？」

「……なんだって？」

聞き返したジェイの不服そうな表情を気に留める風も無く、「顔に書いてある。戦場に行くのが怖い、ってな」と、老整備兵は続けた。

そうではない、と内心で濁し続けてきた真実を、あっさりと言破されたジェイ・ベック少尉。真一文字に口元を結んで、立ち尽くす。

士官学校をそれなりの成績で卒業し、入隊後もそつなく任務をこなして来た。二十代半ばで既に尉官というのも、決して遅い進級ではない。そうやって自信を付けて来たはずなのに——ここ数日のジェイは、すっかり気落ちしている。

「——着いて来い。ちと手伝って貰うかな」

老整備兵はそう言って、ジェイを手招きした。「手伝うって？」と、気乗りしない返事を返しながらも、ジェイの足は彼の背を追っている。つべこべ言わずに来い、と返した老兵の向かう先は、《ネオタートルシップ》の中心部に作られた格納スペース出会った。道中、汽笛に似た轟音が上がって、「快晴だ——今日はコイツも機嫌がいいらしい」と、足元を小突いて見せた老兵。

「……コイツ？」

「分かってるだろ？ お前さん達は何も、一人で戦場に赴く訳じゃない。ビビってるなら、一緒に戦ってくれる『相棒』に、慰めて貰え」

空きかけのシャッターを潜った先に、広大な格納庫があった。全長四百メートルを超える、巨大貨物船の大半を割いた格納スペースに

は、その規模に相応しい大仰さの、『兵器』にして『乗員』が存在する。

——ゾイド。

この『惑星Zi』に存在する。巨大な金属生命体。この星に住まう者達は、鋼鉄の獣達を捕獲・育成し、その肉体を軍用機械に置き換えることで兵器化した、戦闘機械獣を用いて行われる。そして——ゾイドはただの兵器ではない。全身を機械化されていながら、明確な意思を持ち、乗り手へと影響を与える『戦友』なのだ。

老整備兵の意図が分かって、ジェイ・ベック少尉は格納庫内を仰ぎ見た。

軍用機として完成されたゾイドの姿は、元となった金属生命体の姿を踏襲する。二足歩行の恐竜型、二十メートルを超える体高と、二百五十トン近い重量を誇る巨大ゾイド《ゴジュラス》は、高い格闘能力と防御力を併せ持つ、ヘリックの象徴的ゾイド。逆に六足の昆虫を模した青い《ダブルソーダ》は、《ゴジュラス》の片足分の大きさしかない小型ゾイドで、主に飛行能力と火力を駆使して地上勢力を掃討する『戦闘ヘリ』的運用が為される。それぞれが、持って生まれた生物としての特徴を生かす形で改造され、運用される。

さらに奥まで歩みを進めると、ジェイの所属する『特殊工作師団』向けのゾイド達が並んでいた。その中の一角——高速戦闘隊の機獣達は、狼型やライオン型と言った、高い速力を持つ金属生命体がベースとなっている。

整列する高速ゾイド達の中に、ジェイは自分に割り当てられた機体を発見した。濃灰色の稼働部品で構成されたマッシブな四肢、各部分から駆動部たるシリンダーフレームが露出し、無骨な印象を与える。頭部や背と言った、機体の要所を覆う装甲は軍用機らしから鮮やかなブルーで、これはヘリック共和国の中でも最多の民族、『風族』のシンボルカラーだ。高速戦闘時の空力を意識したスリッドが、高速ゾイドとしての意匠を感じさせる。火器は少なく、一部内装された物を除けば、腹部に備えられた三連衝撃砲のみである。

軽装を補うのは、元となった猛獣型金属生命体の、爪や牙の延長——口腔に並んだ『レーザーサーベル』と、四肢の先に持つ『ストライククロー』。この機体は機動性と運動性を駆使して高速で敵機に接近し、白兵戦で敵機を破壊する事を主眼に置いている。

先に述べた《ゴジュラス》程ではないが、大型の機体であった。ライオン型ゾイド・《シールドライガー》。共和国軍高速戦闘隊の主力ゾイドにして、同隊の旗艦的存在。新米士官に与えられる物としては、最高峰のゾイドである。

「ゾイドは生きてる。お前さんがコイツへの信頼を示して見せれば、助けてくれるさ——どんな過酷な戦場でもな」

脇に置かれた工具入れをまさぐった老整備兵は、中からレンチ取るなり、ジェイに投げて寄越した。「今夜中にはロブ基地に着くだろうよ。時間を持て余してるってんなら、それまで相棒の整備でもしてな」と、言い残した彼は、そのまま背を向けて己が職務に戻っていく。

再び《シールドライガー》の機体を見上げたジェイ・ベック少尉。コクピットブロックを備えた頭部は半透明な強化キャノピーが大半を占め、生物であるはずの機獣の『表情』を見取る事は出来ない。それでも——目の前に屹立した機獣から、生命感とでもいべき動悸を、ジェイは感じた。

ジェイ・ベック少尉を乗せた《ネオタートルシップ》は、西方大陸エウロペへと向けて飛ぶ——人が、そして機獣達が戦い、命を散らす、修羅の戦場へと向けて……。

## ② 着任 ― ロブ基地 ―

――ZAC2099年 十一月某日深夜 ロブ基地

藍色の空に、管制塔に付けられた航空障害灯の光が朧と浮かぶ。着陸した《ネオタートルシップ》から降り立ったジェイ・ベック少尉は、思いのほか冷え込んだ西方大陸の風に呆気に取られた。共和国領として保持されている北エウロペ大陸の東部は、『ロブ平野』と呼ばれる乾燥地帯が広がっている。

鼻孔を擽る空気はどこか土っぽく、此処が異邦の地であると実感せずにはいられない。

ガイロス帝国軍の進軍に合わせ、急ピッチで作られた共和国の前線基地――ロブ基地。淡泊なコンクリート造りの内装は、何処まで行っても同じような景色が続き、深夜という時間帯のせいで人の気もほぼない。まるでこの大陸には自分しかないのではないか、という、奇妙な錯覚さえ覚えそうになる。

そんな事を考えながら、数分――ようやくとたどり着いた司令官室前のドアで、ジェイ・ベックは「失礼します」と声を張った。間髪入れずに、「――入りましたまえ」と硬い男性の声が聞こえて、ジェイはオープンボタンを押して入室する。

相変わらず、なんの装飾も無い淡泊な部屋。デスクの向こうに腰掛けた、角刈りの士官が面を上げると、ジェイは目の前まで歩みを進めて踵を合わせ、

「ジェイ・ベック少尉、ただいま着任しました」

と、敬礼して見せる。

「ああよく来た……と言いたい所だが――この時間だ、生憎司令官は既にお休みになっておられる。私はこのロブ基地の副官を務める、マクシミリオン・ペガサスだ」

ガタと椅子を立って、男は右手を差し出した。彼の胸元に光った階級章をチラと一瞥し、「恐縮です。ペガサス中佐」と、ジェイは両の手でそれを取る。うむ、と頷いたペガサスは、デスクの上にあったりモ

コンを操作して、背後のモニターの電源を入れた。

「詳しい事は後日、配属先の上官からブリーフィングがあるだろうから、手短かに話そう。現在映し出されているのが、我がヘリック共和国軍とガイロス帝国軍の、この来たエウロペ大陸における勢力図だ」モニターに映し出されたエウロペの地図は、共和国陣営が管轄する地域をブルー、帝国領と化した地域をレッドで塗りつぶして表示している。「……見ての通り、我らはこのロブ基地を初めとする、大陸東部に陣を強いているが——」と、ペガサス中佐は眉を顰めて、

「開戦当初は五分五分だった勢力図も、現在は八割が帝国の支配地域となっている。現在輪が軍は、ロブ平野の西に存在するミューズ森林地帯に防衛線を敷き、辛うじて持ちこたえている状況だ」

共和国軍の現状が芳しくない、というのは、以前から聞き及んでいた物の——実際に勢力図として目にする、事態は想像以上に思わしくないと分かる。既に西方大陸の大半が帝国軍の手に落ちており、戦いの大勢は決まっているように思えた。

この状況で着任するというのは、実践を知らぬジェイにとって、かなり間が悪い話である。気落ちするジェイを余所に、

「今回の派兵で、君を初めとする高速ゾイド隊を優先的に呼び寄せたのは、他でもない」

と、言葉が続けるペガサス。

「現在戦線を維持しているのは、特殊工作師団——奇襲戦隊と高速戦闘隊による、森林間でのゲリラ活動だ。特に、先に行われた特務の影響で、高速戦闘隊の消耗が激しい。さっそくだが、君も明日にでも前線に赴いてもらう事になる」

「は……ッ」

即答した裏で、ジェイの心は曇る。最前線——それも、圧倒的多数の敵が待ち受ける死地への出向を命じられたのだ。先にも言ったが、士官となって日が浅く、しかも先日まで本土守備隊に配されていたジェイに、実戦経験は無い。その矢先にこの命令だ。不安が無いと言え、嘘になる。

ジェイの緊張を見取ってか、マクシミリオン・ペガサスはフツと表

情を緩め、「長旅だっただろう、機体の搬入を済ませたら、今日はもう休みたまえ。詳しい事は、折り入って話す」と話を打ち切った。

共に西方大陸まで輸送された乗機をロブ基地の格納庫に移動させるため、《ネオタートルシップ》の整備室に赴いたジェイ。既に大半の機体の移動が住んでいるらしい、がらんどろになった格納庫内で、自分の《シールドライガー》を見つけるのは容易かった。

コクピットハッチを開けて、シートに流れ込もうとしたジェイだが、その動きに機敏さは無い。老兵に喝を入れられて、少しは戦意というヤツを取り戻していたつもりなのに——ペガサス中佐の任務を受けてから、再び憂鬱な気がジェイを取り巻いている。

怠慢な動きのジェイ。そんな彼の背後で、甲高い音が鳴る。

格納庫に残響した高音に、何事かと振り返ると——駆動系の交換部品だろうか、パイプ状の部品が床を転がって、ジェイのゾイドの爪先にぶつかった。それを追いかけるように若い女性士官が駆けてきて、「ご、ごめんなさい」と狼狽える。どうやら、彼女の運んでいた荷物の中から零れて落ちたものらしい。両の手に担いだ箱には、似たようなパーツと工具の類が煩雑に詰め込まれていた。

予想だにしない程大きな音を立ててしまい、緊張したのだろう。転がったそれを拾おうと荷物を放り出して——また、倉庫中に木霊した。女性士官の頬が、朱色に染まる。

落ち着かない挙動の彼女に、ジェイは親近感を覚えた。船の中では見かけなかった顔だが、もしかしたら彼女も自分同様の新兵で、今夜派遣されてきたばかりなのかも知れない。乗り込んだコクピットから、ズイと身を乗り出したジェイは、

「——大丈夫？」

と、その女性士官に声を掛けてみた。

どうやら、頭上にも人が居るのに、気づいて無かったらしい。ビクと震えて空を仰ぎ見た女性士官は、ライガーのコクピットにジェイを見つけて、目を丸める。

「あ……大丈夫です。すみません」



おずおずと頭を下げた女性士官。肩までで切り揃えた栗色のポプヘアー、クリと見開いた瞳は大きく、幼い少女の風貌を濃く残していた。遠目から見ただけでは、「本当に士官か」と疑ってしまいうくらいで、ジェイは思わず機体を降りていた。

「……キミも、本国から来た新兵か？」

「あ、いえ——、手の空いてる作業員は、搬入作業を手伝って言われて……暇してるの、私だけだったから……」

「ああ、この時間だしな——作業員？」

女性の言葉尻に違和感を覚えて、思わず反芻する。彼女は士官服を着ているし、階級章はジェイと同じ『少尉』の物だ。ジェイの感じた違和感に気づいたのだろう、女性士官は遠慮がちな笑みを浮かべて、「第六重砲支援師団所属、エリサ・アノン少尉です。三か月くらい前に、このロブ基地に派遣されました。」

と、自己紹介をした。

「ああ、俺は本日付けで特殊工作師団所属・第307高速戦闘少隊に配属されたんだ。ジェイ・ベック少尉だよ」

と、ジェイも敬礼して返す。ジェイの階級章を見て、一緒ですね、と微笑んだエリサに、「三か月前って言ったら、共和国軍が大規模な反攻作戦に出た時期じゃない。もう実戦も経験してるの？」と問い返したジェイ。垢抜けない少女みたいな雰囲気のエリサが、自分よりも先に本当の戦場を経験している、というのが、妙な感覚だった。

「後方支援でしたから、面と向かって帝国軍を見てはいないんですけど……私、ゾイドの扱いもあんまり上手くなくて。あんまりとろかったからか、今はこのロブ基地で雑務に回されています」

自嘲気味に言った彼女は、己が不甲斐なさを呪ってる一方で、どこか安堵した風だった。それが『実戦』という、ジェイの想像が及ばぬ激務から解放された事より来るものなのか、彼には分からない。「そっかあ……」と、曖昧な相槌を返す。

数秒考えて、（——まあ、なるようになるか）と開き直った。本土守備隊時代は訓練か、哨戒任務ばかりだったとはいえ——士官学校時代のジェイの成績は、決して悪くない。与えられた《シールドライガー》

の特性は理解しているし、完璧に乗りこなす自信もある。精神面だつて、気弱そうな女性士官のエリサとジェイでは、精神的な意味での耐久力だつて違うはずだ。

やれるはずだ——と内心で自らを鼓舞したジェイに、「——どうだ少尉殿。ここでやっていけそうか？」と、別の声が掛けられた。ニヤと笑みを浮かべ己が鼻先を擦ったのは、先にジェイに発破を掛けた老整備兵の男だ。

ジェイ・ベックは愛想笑いを浮かべると、「——やれるだけやります」と、簡単な返事を返す。

「——まあ、今はそれで十分だわな。だが、いつまでもそんなんじや、戦場では死ぬぞ」

引つ掛かる物言いをした老兵に食い下がろうとしたジェイだが——男が誘導灯を振り始めたのに気づいて断念すると、ライガーのコクピットに戻り——機体を始動させた。

？

③ 従軍 — 307小隊 —

——翌日。

輸送用の甲虫型ゾイド《グスタフ》に揺られる事、数時間。ジェイと《シールドライガー》はロブ平野を抜けて、ミューズ森林地帯の東端に差し掛かっていた。共和国の劣勢は陸上だけではない。優秀な空戦機——ドラゴン型ゾイド《レドラー》を有する帝国空軍に制空権を抑えられている共和国軍だ、道中に空爆を受ける可能性も危惧していたジェイだったが、彼の杞憂を余所に、輸送隊は順調に目的地へと向かっている。木々の深いも森林地帯に入ってしまったえば、空からの偵察隊に遭遇しても、目視で発見される可能性は低い。此処からの旅路は、少しばかり気楽に行けるだろう。

——ジェイの読み通り、共和国軍ゲリラ駐屯地までの道に、さしたる問題は発生しなかった。

グスタフのコクピットから降り立つと、緑の青臭さと、鉄の焦げた匂いの混じった大気が、ジェイの鼻孔を擽った。焦げ茶色の皮を張ったテントが立ち並ぶ野营地。周囲の森には、ジェイのゾイドと同じ《シールドライガー》や、その随伴機として運用される中型の高速ゾイド《コマンドウルフ》が並び、停留していた。

ついに、最前線まで来たのだ——一層の緊張に、ジェイの鼓動は高まった。ゴクリと生唾を呑んで、司令部の置かれたキャンプテントへと足を延ばす。「失礼しますっ」と硬い声を張ったジェイに、テーブルを囲んだ野戦士官達の注目が集まった。

テントに集まっていたのは、三人——部屋の最奥にある席に座った、痩せぎすの中年男性が、おそらくはこの隊の隊長であろう。踵を付けて背筋を伸ばし、

「ヘリック共和国軍特殊工作師団所属、ジェイ・ベック少尉。ただいま着任いたしました！」

と、声を張り上げた。

「ああ——本国から呼びつけた、ノルド少尉の後任ですよ。コンボイ

大尉」

数秒の沈黙の後、手前に居た大柄の士官が、最奥の男性士官へと話しかける。コンボイ、と呼ばれた名を聞いて、ジェイも合点が行く。彼が派遣された第307高速戦闘小隊の隊長の名が、スターク・コンボイ大尉だ。会うのは初めてだったが、なるほど、痩せぎすながらその相貌に隙は無く、歴戦のゾイド乗りの風格を漂わせている。

大男の士官に無言で頷くと、スターク・コンボイ大尉はジェイに向き直って、「ペガサス中佐から伝え聞いているよ、ジェイ・ベック少尉」と、柔らかな笑みを浮かべて見せる。

「長旅ご苦労。そして、これからよろしく頼む。私が307小隊の小隊長を務める、スターク・コンボイだ」

座ったままのコンボイ大尉を見下さぬよう、テントの縫い目を一心に見つめたジェイは、「ハッ……ヘリックのため、全力でガイロス軍とぶつかる所存であります、小隊長」と、あらかじめ用意していた抱負を伝える。

「ああ、頼もしいな。——グロック」

コンボイに呼びつけられて、件の大男も立ち上がった。日に焼けて色黒の男は、肉食獣の如き獰猛な眼差しでジェイを見据えると、

「小隊の副官を務める、グロック・ソードソールだ。階級は少尉——よろしく頼む、ベック少尉」

と右手を差し出す。

咄嗟に差し出された手を取り、握手を交わしたジェイだが——グロックの妙に力強い握手に、呆氣に取られる。痛みすら感じるそれは、この男の本心——遅れて来た新米士官への牽制の意が、如実に現れている気がした。「ご指導、ご鞭撻の程……よろしく願います」と取り繕ったジェイだったが、いきなりに向けられた警戒の意に、内心では不貞腐れている。

「おうおう……もう補充要員が届くなんてな。共和国軍も、この戦線を瓦解させまいと必死、ってわけか？」

ハハ、と乾いた笑みを混ぜてそう煽ったのは、テントに居た三人目の男だった。年はジェイとそう変わらないであろうその男は、コンボ

イヤグロツクとは少々趣が異なる。ヘリックの軍服を纏わず、動きやすさを重視した装い。言葉遣いも、ジェイに対する礼節等、微塵も感じさせぬ無法さだ。この場に不釣り合いなならず者に、思わず眉を顰めたジェイ。すると、

「——彼はツヴァイン。傭兵だ」

と、コンボイ大尉が紹介した。

「……傭兵？」

「ああ、我らヘリック共和国とガイロス帝国の戦力には、一朝一夕では埋められぬ開きがある。それを少しでも補うため、彼のようなエウロペで徴用したゾイド乗り達が、共に戦ってくれているわけだ」

その説明で納得した。

ツヴァイン、と呼ばれたこの男は、正規軍人ではなく、金で雇われた『戦争屋』というわけだ。粗暴な印象は気のせいではない、敵であるガイロス帝国だけでなく——エウロペに派兵し、この大陸を戦場としたヘリックに対しても、この男は一物抱えているのだろう。

「——ま、よろしく頼むぜ。ベックさんよ」

軽い調子で締めたツヴァインだったが、ジェイは黙って頷くことしかできないかった。

「さっそくだが、任務の話をしたい。ベック少尉の装備を見せてもらえるか？」

コンボイ大尉の提案で、一行はテントの外に出る。既にグスタフから降ろされていたジェイの《シールドライガー》を見るなり、「ほう——『ブルー・ブリッツ』か」とグロツク。『ブルー・ブリッツ』とは旧大戦時に使われた《シールドライガー》の愛称で、中央大陸戦争初期に投入された青い装甲の機体を言う。戦争末期、第一次大陸間戦争になると、装甲のカラーリングを白に変更した後期型『Mk-II』が生産されたが——此度の西方大陸戦争に投入されたモデルでは、再び最初期の機体と同じ青がメインカラーとなっている。

「ヘリックにおける『正義』の色——勇ましい色だが、俺達の任務には不適だな」

と、ツヴァインが頭を振った。

「数で押されている今の俺達は、森に溶け込んで奇襲を仕掛けるのが常だ。んな青ざめた馬みたいな色をしてると、すぐに連中の目に付いて、やられちまうよ」

見て見ろよ、と、駐屯した他の機体を指差したツヴァイン。確かに、ズラと並んだ他の小隊所属機の中で、正式採用のカラーで残された機体は殆んどない。いずれもこの森林地帯での戦いに備えてか、装甲の一部、または全てに緑化迷彩塗装を施してある。

彼らの意図に悪気はないのだろうが——着任早々に自分の不手際を指摘された気がして、ジェイの心は曇る。ゲリラ戦では、敵に発見され難くするのは基本中の基本たるセオリーだが、指摘されるまで気づかなかつた。

隣に立つてこちらを盗み見たグロツクが（——甘ちゃんめ）と嘲たような気がして、ジェイはギリと奥歯を噛む。

「このままでも構わん。どの道センサーに引っかかれば、敵には感づかれる。重要なのは、遑敵時に迅速な対処ができるか、だろう」

グロツクとツヴァインの小言をコンボイが遮り、ジェイを覗く。先に見せた柔和さは無く、真剣そのものの表情だ。射抜くような視線に総毛立ちながらも、「——やれます」と即答するジェイ。よし、と頷いたコンボイは、

「——作戦時、小隊はさらに三分隊に分けて行動してもらおう。各《シールドライガー》に、随伴機として《コマンドウルフ》を二機ずつ。私とグロツク——そしてジェイ少尉で、一分隊ずつ受け持つ事になる。各隊の連携で敵機をかく乱、個別撃破を目指す」

小隊の内訳は、《シールドライガー》三機に、《コマンドウルフ》が七機。そのうち、正規兵でないツヴァインの《コマンドウルフ》は、各隊の連携の補助や損傷機の出た隊のフォロー、そして斥候などの遊撃的任務をこなす、という事になる。隊の方針は、大かた理解した。

やってやるさ、とジェイは内心で気を昂らせる。コンボイ大尉はともかく、グロツク少尉と傭兵ツヴァインは、あからさま新米のジェイを侮っていた。ならば実戦で——戦場に出て実力を示し、考えを改め

させればいい。彼らの持つ一日の長を覆す程のセンスを見せれば、彼らだって小言など言えないはずだ。

むしろ、彼らには感謝するべきだ——二人の敵意は、ジェイの感じていた『実戦への不安感』を忘れさせる。そう考える事で、ジェイは燻った気持ちを抑えようとしていた。

「——隊長！」

話し込む四人の元に、一人の下級士官が駆けてくる。テントから飛び出してきた兵士は、隊の通信を傍受する役目を与えられていた者だ。「——どうした？」と眉を顰めたコンボイ大尉に、通信兵は荒い息を整えながら、こう伝えた。

「エリアBに配置していたスリーパーゾイド部隊の信号が途絶えました。帝国軍かと思われます」

その返答は、コンボイ大尉の想定していた物と相違なかったらしい。眉一つ動かさないうで頷いたコンボイは、「全員を招集しろ」と通信兵に指示を出すと、ジェイ・ベックの方へと振り返った。

「……ベック少尉。早速だが、働いてもらう事になる——307小隊、出撃するぞ」

#### ④ 実戦 — ミューズ — (前編)

《シールドライガー》のコクピットになだれ込んだジェイ・ベックは、操縦桿を取り、力強く機体を始動する。ジェネレーターに火が入ると同時、ゾイドの持つ『意識』が急速に表面化していくのが伝わって来た。ズイと首を持ち上げた《シールドライガー》が、己が本能に従って力強い咆哮を上げる。

「——ッ、……！」

本国で警戒任務に当たっていた頃も、これほどの躍動感を与えてくれるゾイドに搭乗した経験はなかった。《シールドライガー》——共和国の主力戦闘ゾイドの思惟は、それまでのジェイを支配していた煩わしい感情を、一瞬で忘れさせるほどの支配力があつた。無敵の力を得たのでは、とさえ錯覚させる。

「少尉さん同様——相棒も、エライ張り切りっぷりじゃないか」

回線越しに、傭兵ツヴァインの軽口が聞こえた。ふと見ると、キャノピー越しに《コマンドウルフ》の頭があり——コクピットには、ツヴァインの姿がある。彼のウルフは307小隊の中では数少ない『白』——つまり、共和国の正式採用カラーの《コマンドウルフ》で、ついさつき、ジェイの『ブルー・ブリッツ』を嗤った物とは思えない。

矛盾した言動のツヴァインにムツとしたジェイが、文句の一つでも言おうとした時、

「無駄口は止せ。スリーパー部隊がロストしたエリアは、そう遠くはない。ブリーフィング通り、三分隊に別れて敵機を包囲、かく乱する。ツヴァイン機、先行して、敵部隊を発見しろ」

と、コンボイ大尉の冷静な指示が飛ぶ。

あいよ、と気だるそうな返事をして、ツヴァインの《コマンドウルフ》が一足先にジャングルに消えていく。「残りの《コマンドウルフ》は、私とグロック——そして、ジェイ少尉の機体に随伴する」と、残りの機体に促したコンボイ大尉の《シールドライガー》は、緩やかな足取りでミューズの密林へと踏み込んだ。ジェイ、グロックの機体も、それに倣い、続いていく。



全高十メートルにも迫る《シールドライガー》ですら、すつぽりと覆い隠されてしまう程の、高木の群れ——それが『ミューズ森林地帯』である。密集した幹達に視界は狭められ、また日中でもほとんど陽光が射さない。ヘリック共和国の最終防衛戦として、この森林地帯が機能しているのは、これらの要因にあった。数の不利を、地の利で覆す事ができる場所——そして、元よりヘリック領として押さえたい共和国側は、地形への理解に一日の長がある。

だが——西方大陸に派兵されたばかりの新米士官にとっては、その限りでは無い。未知の森林地帯で、いつ敵と遭遇するかもしれぬ、という状況。《シールドライガー》の持つ獰猛な思惟に影響され、恐怖こそ感じぬものの——言葉少なく、ジェイは五感を研ぎ澄まし、敵の気を探る。

「ジェイ少尉、我らC チャリー 分隊だけ、先行し過ぎています。コンボイ大尉達との連携のため、歩速を緩めましょう」

通信回線が開かれ——自分に呼びかけていると気づき、ハツとするジェイ。ジェイの指揮下に入った《コマンドウルフ》のパイロットの一人・マーチン軍曹からの通信だった。すぐさま、もう一機のパイロットを務めるフリーマン軍曹からの通信が入り、「孤立すれば、敵機と遭遇した際に、真っ先に叩かれます」と警鐘が告げられる。

「分かってる——各機、歩速を緩めるぞ！」

部下に言われるまで、周囲に気を配る余裕すら失っていた。これも実戦の緊張感に気圧されている故か、と自らを疑ってしまうジェイ。逸る気持ちに息を吐いた時、新たな通信が入る。先行した傭兵・ツヴァインからの通信だった。

「こちらツヴァイン。スリーパーたちの残骸を発見した。《ガイサック》が七機——いや、八機か？　ともかく、小隊単位で全滅してる。圧殺だ……大物が来てるぞ」

《ガイサック》は、共和国軍の奇襲攻撃隊に配備される、サソリ型の小型ゾイドである。個々の性能は小型機の中では凡な物だが、この『ミューズの森』のような視認性の低い場所では視認され難く、また集

団での先制攻撃は、十分に大型ゾイドを撃破し得るポテンシャルを持つている。スリーパー——自動操縦機だったとはいえ、それが為す術も無く敗れたとなれば、敵は奇襲を物ともしない堅牢な装甲を持つ大型ゾイド——しかも、手練れのパイロットが引つ張っている機体だ。

そこまで推察した途端、ツヴァイン機から新たな報告が飛んだ。

「敵部隊を歩速した。センサーに反応がある……一番近いのは、チャーリーC分隊！」

ゾクリと、全身が総毛立つ。ジェイの指示よりも早く、《コマンドウルフ》のパイロットは索敵を始めていたらしい。マーチン軍曹が叫んだ。

（レーダーに反応あり！　すごい数です、十、二十……いや、三——）  
彼が言い切る前の事だった。

——火線。火花の爆ぜる轟音が連なって、ジェイの眼前を横切った。撃ち込まれた三発の砲撃は、彼の後方に待機していたマーチン軍曹の《コマンドウルフ》の両の前足——そしてその頭部に直撃し、炎上させた。

「マーチン……ッ！」

もう一機の《コマンドウルフ》パイロット、フリーマンが、戦友の名を叫ぶ。頭と両足を失ったマーチン機は、バチバチと燃え上がりながら崩れ落ち、動かなくなった。

射線の先に振り返り、目を凝らしたジェイ少尉は、密林の先で微妙に揺れた影に気づく。四足で歩く大型の機体だが、《シールドライガー》のような獣型ではない。帝国軍が開戦時より運用するステイラコサウルス型のゾイド——堅牢な装甲と多彩な火器を併せ持った帝国機甲師団の中核・『動く要塞』、《レッドホーン》。その背に備えられた主砲、三連装リニアキャノンが火を吹いたのだ。

森林を往くには目立ちすぎる濃紅の装甲。それが、目視できるだけで六つ。さらに随伴機として、同じく帝国軍強襲戦闘隊の中核を為す二足歩行の恐竜型ゾイド《イグアン》が二十以上。総数はジェイ達の三倍、中隊規模の襲撃だった。

「大型ゾイドを、こんなにな——」

壮観な光景に、さしものジェイも息を呑んだ。五十年前の天災『惑星Zi大異変』以来、国家予算の七割を軍事費に費やしたガイロス帝国軍。その西方大陸派遣軍は、ヘリック共和国全軍の、優に三倍の規模を持つ。ヘリック軍のゲリラ戦によって停滞した戦線を、圧倒的な物量で押しつぶしにかかってきた、という事だ。

現れた帝国機甲軍は、既にジェイ《シールドライガー》と配下の《コマンドウルフ》を、目視でも捕捉しているらしい。指揮官機と思われる《レッドホーン》が一吠え雄叫びを上げると、随伴する《イグアン》達の銃口が、こちらへと照準を定める。

——やられる、と、ジェイの思考が塗りつぶされた時だった。

「ぼさつとするな——下がれ少尉！」

雄叫びと同時に二本の光線が伸びると——眼前に居たイグアンの機体に絡まり、その装甲を焼き切る。一機がダメージを負ってよろめいたかと思うと、次はその後方の《イグアン》、そして《レッドホーン》に砲撃が掠め、かく乱していく。

ようやくと自我を取り戻したジェイが背後を仰ぎ見ると……密林に紛れていたB分隊<sup>ブラボー</sup>——グロック少尉の《シールドライガー》が、帝国軍を攻撃していた。

「——聞こえるか、ジェイ少尉」

コンボイ大尉からの通信が入る。

「数の不利を覆すための、ゲリラ戦だ。《シールドライガー》の能力を生かせ。機動力を持ってかく乱し、敵機を分断・確固撃破していく。分かるな」

「……っ！」

小隊長の指示を聞きながら、グロック少尉率いるB分隊<sup>ブラボー</sup>の戦いに目を遣る。《レッドホーン》や《イグアン》の放つ砲撃の雨の中を駆け

抜けるグロツクの《シールドライガー》は、時に躲し、時に木々を盾にして攻撃をいなし、衝撃砲とレーザーによって反撃を見舞う。小刻みに撃ち込まれるジャブのような攻撃。だが、それによって既に多くの《イグアン》が、大なり小なり損傷していた。

「ジエイ少尉——っ」

残った《コマンドウルフ》のパイロット・フリーマンが、震えた声でジエイを呼ぶ。チラと碎け散った《コマンドウルフ》の残骸を一瞥したジエイは、意を決して応えた。

「分かってる——俺達も行こう。マーチン軍曹の仇を取るんだ」

愛機《シールドライガー》の操縦桿を握り直して、アクセルを踏み込む。獰猛な本能をむき出しに咆哮したライガー。そのまま大地を蹴りあげて、一目散に敵部隊を指すと、フリーマンの《コマンドウルフ》もそれに続く。

「行くぞ、《シールドライガー》……ッ」

初めての实战——それも、膨大な数の敵を前にした、圧倒的に不利な戦況。それでもジエイは、《シールドライガー》の闘争本能に心を託すことで、必死に自らを奮い立たせた。

⑤ 実戦 — ミューズ — (後編)

帝国軍機甲部隊の数は、圧倒的だった。

『動く要塞』と仇名される程の《レッドホーン》の砲撃力は、伊達ではなかった。見通しの悪い森林地帯も相まって、高機動ゾイド《シルドライガー》と《コマンドウルフ》ですら、近づくことさえままならない。僚機の《イグアン》も、単機ならばさしたる問題ではないのだろうが、こちらの数倍もの数で放つレーザー機銃の一斉掃射は、決して無視できるものではない。現に、グロック率いるB分隊ブラボーの《コマンドルウルフ》の内、一機が《イグアン》の機銃によって小破し、後退している。

現在動けるのは、ジェイのC分隊チャーリーが二機、グロックのB分隊ブラボーが二機。そして、つい先ほど合流した小隊長コンボイの率いるA分隊アルファが三機だ。ツヴァインの《コマンドウルフ》は——どこで道草を食っているのか、発見できない。

こちらの攻撃でも一応の成果はあり、何機かの《イグアン》を撃墜してはいるものの、それでも相手は二十機以上で、しかも主力の《レッドホーン》六機が健在だ。戦力差は三倍以上。絶望的状况だった。

乱戦の中で、ジェイ・ベックは狼狽した。圧倒的多数の敵に包囲され、既に僚機が二機戦闘不能——実戦に対する認識の甘さを、心の隅で痛感している。そして、その後悔は既に手遅れなのかもしれない。先に撃ちぬかれた僚機のパイロット、マーチン軍曹のように——いつジェイの機体が《レッドホーン》の砲弾を浴びて、爆散するとも知れない。

「どうする——このままじゃ……っ」

沸き立つ焦燥の念は、おそらくジェイだけのものではないのだろう。操縦桿越しに伝わってくる。砲弾の雨の中を出鱈目に駆けてしのご愛機——《シルドライガー》もまた、この状況に気を乱されているのだ。

猛獣型金属生命体を原型とするゾイド《シルドライガー》は、本来その爪牙を用いた白兵戦で真価を發揮する機体である。だが今は、

敵の砲撃と密林で進路を阻まれ、接近戦に持ち込む事が叶わないでいる。

絶望的な戦況を覆すには、まず機体の性能を十全に発揮できるようにしなければならない。

弾幕の薄い場所を縫って駆け、接近戦に持ち込む——そう決めたジェイが、敵陣にライガーの機首を向けようとした時だった。「それ以上距離を詰めるな、ベック！」と、グロック少尉の怒声が飛ぶ。

「多勢の中に一人で突っ込めば、蜂の巣にされてすぐに終わるだろうが！ ゲリラ戦で正面から向かってどうする、銃座を使って応戦しろ！」

砲撃を見舞っては駆け、敵陣を翻弄するグロックの《シールドライガー》。確かに彼の言うとおり、撃ち合いになった今の戦場で我武者羅に突っ込めば——下手をすると、味方の流れ弾に落とされかねない。

決断を急かすように、帝国軍の砲撃が勢いを増した。閃光。とつさにペダルを踏み込み、《シールドライガー》を後方に跳躍させる。バキバキと周囲の木枝をへし折りながら飛び退いたライガーが、地面に打ち付けられて膝を着き、同時に先ほどまで居た地面が砲撃で吹き飛び、土砂と木屑が舞ってコクピットキャノピーを打つ。

「クソ——クソッ！」

衝撃に揺られながら、ジェイはグロックの指示に従う事を決めた。コントロールパネルを操作して、《シールドライガー》の背部装甲奥に収納された『AM D2連装20mmビーム砲』を展開させる。が——、ガリ、と鈍い音が鳴って、ライガーが身を振った。どうやら周囲の高木から伸びた枝にカバーが引っかかって、砲座が引き出せないらしい。苦境を打開しようと策を弄しても、何もかもが上手く行かない。煩わしさに、ジェイは頭を掻きむしる。

高速戦闘に重きを置いた《シールドライガー》は、空力特性を高めるため、火器の大半を内装式にしてある。唯一外付けされているのは、腹部に備えられた『対ゾイド3連装衝撃砲』。ジェイはすぐさまそちらに切り替えて、トリガーを引いた。

放たれた衝撃波は、大地を抉りながら《レッドホーン》を指し、その装甲を打ったが——ライガーを揺すった発射時の反動に反して、驚くほど威力が無い。

『3連装衝撃砲』は実弾やビームではない、マグネツサー技術の応用で作りだした気流を弾丸のように撃ち出す、言うなれば「威力を伴う空砲」である。ビーム兵器に比べれば低燃費であり、また実弾のように弾切れや、全備重量の増加による機体バランスの変化を考慮する必要の無い、高機動ゾイドにはうってつけの兵装——だが一方で、射程が短く、距離の増加による威力の減退が著しい、という欠点があった。また、砲座全体が胴体に固定されているため、射角の調整にも難がある。本来ならば機体の機動力を生かし、適正な射程・射角まで距離を詰めてから用いるのだが、それができない今の戦場において、これらの特性は完全に足を引っ張っていたのである。

唯一取回せる兵装が、乱戦での撃ち合いで役に立たない——こちらの状況を把握しきれていないのだろう、「ソイツじや当たらんדרろ！ 間抜けめ。内装兵器——ビーム砲座か、ミサイルを使い！」と、グロックの指図が弾ける。煩わしくて、ジェイは無線を切った。

どうにかしてライガーを立ち上がらせながら、（落ち着け……落ち着け……）と自らに言い聞かせる。幸い、A <sup>アルファ</sup>分隊とB <sup>ブラボー</sup>分隊の攻撃に気を取られてか、敵機の攻撃はジェイから逸れつつある。態勢を立て直し、次のアクションを起こすための余韻は、十分にあった。

初めての实戦は、ジェイの想定を遥かに超えている。だが、それでも諦める事は出来ない。（——ここで死ぬるか）とジェイは猛り——そして結論付ける。

《シールドライガー》は武装の量・装甲の強度共に、《レッドホーン》の後塵を拝しているのだ。グロック達がこれまでどう戦ってきたのかは知らないが、このまま撃ち合いをして生き残れる展望を、ジェイはどうしても抱けない。ライガーが勝っているのは、機動性と運動性——こちらの長所を生かすのならば、やはり接近して白兵戦に持ち込

む他ない。そのためには、敵の砲撃を凌ぎ、懐に飛び込む手段が必要になる。

そして——《シールドライガー》には、その『手段』があった。

よし、と意を決したジェイ・ベックが操縦桿を引くと、《シールドライガー》の鬣が展開して、光を放つ。ライガーの前方に生じた、光の揺らぎ——撃ち込まれた《イグアン》のレーザーが、揺らぎに弾かれて四散する。

《シールドライガー》の名の由来となった兵装——『エネルギーシールド』。元となったライオン型野生体が持ち合わせていた、「量子力場発生能力」を由来とする、《シールドライガー》の固有兵装。高出力のジェネレーターから展開されたビームの膜が、敵機の光学兵器に干渉し、それを相殺するのである。

『Eシールド』の出力を、さらに引き上げる。最大値——シールドジェネレーターの駆動音と振動がコクピットまで響き、フルパワーで発生したシールドの熱量が、周囲の木々を焼き焦がす。最大出力を維持できるのは十秒にも満たないが、この状態ならばビーム兵器は無論、小口径の実弾ならば自機に接触する前に焼き払う事さえできる。行ける！ 確信したジェイが、《シールドライガー》を疾走させた。今度は砲撃を避けるような真似などしない。眼前に立ちはだかる《イグアン》、そして《レッドホーン》の群れに向けて、一直線。突貫したジェイのライガーは真つ先に敵機の標的となり、《イグアン》達のレーザー機銃が光線が伸びるが——全てEシールドに捌かれた。

計器が指した速度は、時速200キロを超えている。一気に間合いが詰まり、ジェイは再度『三連衝撃砲』のトリガーを引いた。今度は、適正距離。一射で二体の《イグアン》が弾け飛んだ。これで目前の《レッドホーン》を守る者は居ない。

ジェイは叫んだ。

「おおおっ！」

乗り手と同期したかのように、《シールドライガー》も咆哮、跳躍す



る。それを迎え撃つかのごとく、《レッドホーン》の背から伸びた『三連装リニアキャノン』が撃ち放たれたが——最大出力のEシールドに干渉され、弾丸はライガーの眼前で爆散した。爆風が頬の装甲の一部を焼き焦がし、キャノピーを傷つけるが、ジエイとライガーは引き下がらない。

「うおおおッ！」

怖気づいたかのように《レッドホーン》が後ずさるのを見て、ジエイはもう一度叫ぶ。

次の瞬間、《シールドライガー》の機体は《レッドホーン》の首筋に鋭い牙を突き立てると——その巨体を乱暴に引き倒していた。

## ⑥ 不安

地面に叩きつけられた《レッドホーン》が、喰らいつく《シールドライガー》を引き剥がそうと身を振る。必死の抵抗——それを畳み掛けるかのように、ライガーは両の前足で《レッドホーン》の胴と頭部を抑え付けた。全体重が乗った電磁爪・『ストライククロウ』が、『動く要塞』の重装甲を踏み砕き、土色のオイルが吹き出す。

白兵戦へと移行した《シールドライガー》の力は、圧倒的であった。ビームコートを纏った口腔の牙・『レーザーサーベル』が重装甲を軽々と突き破り、喉笛の奥へとめり込んでいる。武装の精度だけではない、100に近い自重持たずの《レッドホーン》を、易々と引き倒す膂力。一度喰らいつけば離さない、獰猛すぎる程の闘争本能。その全てが、《レッドホーン》を蹂躪したのだ。

脊椎を噛み砕かれた《レッドホーン》が完全に機能を停止すると、その亡骸から、己が頭を乱暴に振り抜く《シールドライガー》。勢いで《レッドホーン》の頭部は千切れ飛び、赤い装甲片と機械油が、血飛沫のように辺りに散った。

さつきまでの悪戦が、まるで嘘のようだ。——勝てる。今の自分は、《シールドライガー》の力を完全に引き出せている——ジェイ・ベックが、そう確信した時だった。

凄まじい程の衝撃が、《シールドライガー》の機体を跳ね飛ばした。もう一体の《レッドホーン》が突貫を掛け、『クラッシュヤーホーン』の一撃を、その土手っ腹に叩き込んだのだ。今度はライガーが横転し、地面へと打ち付けられる番だった。「グッハ……ッ！」と嗚咽を漏らしたジェイは、直後に自分の置かれた状況に気づいて驚愕し、目を剥く。

単機で接近戦を挑んだジェイの《シールドライガー》は、帝国機甲軍に完全に包囲されていた。

未だ健在の《レッドホーン》は、五機。《イグアン》に至っては十機強が健在である。そのど真ん中で、ジェイのライガーが硬直し、動けないでいる。

《イグアン》達のレーザー機銃が、一斉に火を吹いた。咄嗟に『エネルギーシールド』を展開したジエイだったが——最大出力を限界まで維持したせいか、パワーダウンを起こしているらしい、防ぎきれなかった光線がライガーの手足を撃ち貫いて、火花が上がった。

《イグアン》だけではない。僚機を破壊され、怒りに燃える《レッドホーン》達が、一斉にリアキャノンの銃口を向ける。

「クソ……早く立て——立ってくれッ！」

絶叫したジエイは、必死に操縦桿を揺するが——損傷著しい《シールドライガー》のコンバットシステムは、既に停止していた。これではコクピットから機体を操作する事ができない。すなわち、次に飛ぶ敵機の一斉射撃を躲す事は、不可能——。

今度こそ、最期。浅はかな突貫で高揚した自分の行いを、ジエイは悔いた。——やられる、と目を伏せたその時、

「——ベエエツク！」

高密度ビームの光弾が眼前を横切り、《レッドホーン》達の機体に直撃する。

次いで、《コマンドウルフ》達のビーム砲座。レーザーが《イグアン》の装甲を撃ち抜いた。たちまち包囲陣形が乱れ、後ずさる帝国軍——噴煙に曇るキャノピーに目を凝らし、ジエイは悟った。

通信機に爆ぜた声は、小隊長・コンボイ大尉の物だった。振り返ると、大尉の《シールドライガー》率いるA アルファ分隊が前に出るや、帝国軍に集中砲火を見舞っていた。コマンドのビームに《イグアン》が砕け——そしてコンボイの《シールドライガー》の砲撃が、あの《レッドホーン》の装甲を粉碎する。

小隊長コンボイの機体は、ただの《シールドライガー》ではない。その背には、自身の全長の半分以上あろう長大な砲塔を、二門背負っている。《シールドライガー》の弱点である砲撃力を補うべく、エネルギータンクと直結した大型のビームキャノンと二門追加した改造機——旧大戦時『Mk-II』型として製造されたモデルと同型のそれは、《シールドライガー・ダブルキャノンスペシャル》と呼称される特別機であった。運動性と機動性は幾分か低下するものの、その重火力は、

大型ゾイドの装甲を容易く撃ち貫くものだ。ジェイ機の撃破に気を取られていた《レッドホーン》達は完全に浮き足立ち、内二機にダブルキャノンが直撃、爆散した。

「今だ、撃ちまくれえ！」

「——ジェイ少尉イッ！」

グロツクのBフラボ分隊、フリーマン軍曹の《コマンドウルフ》も、Aアルファ分隊の攻撃に同調して、集中砲火を掛ける。コマンドのビーム砲座が、ライガーのミサイルポッドが火を吹いて、帝国軍の機体を焼いた。さらに三機のイグアンが爆散し、《レッドホーン》一機が中破、苦悶の咆哮を上げる。

——数の差はあるものの、戦いの流れは307小隊に向きつつあった。

帝国軍の部隊長は、次軍の不利を見取ってたのであろう。指揮官機と思われる、クラツシャーホーンの後ろ、コクピットハッチに小角の装飾を付けた《レッドホーン》が嘶き、全軍に後退の指示を出した。こちらを睥睨したまま、ゆっくりと下がっていく《レッドホーン》と《イグアン》の部隊。

「——深追いはするな。敵の増援が現れる可能性は高い、我々も早急にこの場を離れる」

指示を出したコンボイ大尉に、異を唱える者は居なかった。

再び、通信が入る。「ジェイ少尉……ご無事ですか？」と部下の声が聞こえて、

「ああ……大丈夫だ。ライガーも、動けるまでには回復した」

数秒の間の後、ジェイは返答を返した。

放心状態だった——あの時コンボイ大尉の援護が無ければ、ジェイの《シールドライガー》は敵の集中攻撃で終わっていたのだ。この戦い、上官の冷静な判断と偶然が重なって、ジェイは生き延びる事が出来たのだ。

野営地まで戻って来た「307小隊」の人員に、言葉は無かった。予想外の大部隊と邂逅して、交戦の結果——<sup>ブラボ</sup>B分隊の《コマンドウルフ》一機が中破、<sup>チャーリー</sup>C分隊の《コマンドウルフ》一機が損失、同機の隊員一名が死亡。そして、ジェイ少尉の《シールドライガー》も損傷した。どうにか退けたとはいえ——総力で勝る帝国軍は、次々と同規模の部隊を送り込んでくるだろう。対して共和国軍の消耗は、確実に蓄積していく。戦況の不利は、小隊の皆に先の見えぬ不安を与えている。

日が落ちて、ミューズの森を深淵が包み込む。先の戦いの残滓か、それともどこかで別の隊が帝国軍と交戦したのか、森を往く夜風は、どこか鉄の焦げた匂いを孕んでいた。《シールドライガー》のメンテナンスに勤しみながら、ジェイは鼻孔を掠める匂いに気落ちする。

幸い、ライガーの損傷はそれほど大きくなかった。金属生命体・ゾイドは、自らの傷を修復する「自然治癒能力」がある。戦闘兵器として改造された後にもそれは失われず、多少の損傷は時間経過に合わせ再生していく。帰還早々、代謝を高めて再生を促す『ゾイドコア活性化イオン』を投与した甲斐もあり、レーザー機銃で受けた弾痕は、既に治癒しつつある。クラッシュヤーホーンを受けた腹部の損傷は大きい。それでも二日もすれば十全に動けるようになるだろう。

先の戦いでビーム砲座のハッチに詰まった木片を取り除こうと、ライガーの背に登ったジェイ。すると、

「——ベックッ！」

荒々しい怒声が真下から響いた。

夜闇のせいで姿は確認できないが、グロック少尉の声だ。彼の意図は分かっている、ハッ、と短い溜息を吐くと、ジェイは《シールドライガー》から飛び降りた。案の状、仁王立ちしたグロックの巨体が在り——その双眸から、怒りの籠った眼差しがギラと光る。

「……分かっているんだろうな？」

「……と、言いますと？」

「とぼけるなッ！ 貴様は俺の指示を無視した揚句、一人突貫して隊

列を乱した！ お前の尻拭いをする羽目になったコンボイ隊長は、一歩間違えれば撃墜されていたんだぞ……分かってるのか！」

グロツクの言い分はもつともだ。しかし、あの状況で火器を取り扱う事ができなかったジエイは、隊に貢献するため——生き残るために、最善の判断をしたつもりでもあった。

「自分は、火器は使えなかった。ライガーで《レッドホーン》を倒すには、白兵戦を挑むのが最善だと、自分は——」

思わず言い返したジエイに、グロツクの拳が飛ぶ。

「それで貴様一人が死ぬというのなら、構わん。だが、実戦は違う。一人の判断ミスが、隊の全体に関わる。軽率な行動しかできぬというのなら、ゾイドに乗る資格など無い！」

背を向けてキャンプへと戻るグロツク。その叫びに、何も言い返すことはできなかったジエイ。呆然とへたり込んだまま、遠ざかっていく背中を見つめていた。

痛感する。実戦で戦っているのは、目の前に立つ帝国軍だけではない。自らの命を失う恐怖、最善の判断を下さなければ、己が呼び込んだ『死』に、仲間達を巻き込んでしまうという恐怖。自らを苛む多くの恐怖に堪えながら、彼は自分を、そして仲間を守らなければならぬのだ。ただ我武者羅に戦うだけでは敵わない『責務』が、ジエイという個人に押し掛かる。

戦死したマーチン軍曹の断末魔が、脳裏に焼き付いている。考えも無しに先行し、敵部隊の攻撃を許した。マーチンの死だって、遠因はジエイに在る。

（次に実戦に出て、もしもまた……隊を危険に晒してしまえば……俺は——）

今の自分に、戦えるのか——このまま戦場に出て過ちを犯せば。次は何人が死ぬのか。自分だけじゃない。コンボイ大尉、グロツク——もしかしたら、ヘリック共和国全軍かもしれない。

戦意を喪失しかけたジエイに、《ネオタートルシップ》で出会った、あの老整備兵の言葉が蘇る。

(ゾイドは生きてる……お前さんがコイツを信頼すれば、助けてくれるさ——どんなに過酷な戦場でも)

「《シールドライガー》……俺は……俺達は、どうしたら——」

身を起こしたジェイは、愛機《シールドライガー》を振り返った。土埃に汚れ、損傷の跡が残った蒼い機獣。機体に触れたジェイは思わず一人ごちた。

ガサ、と、草を踏み締める音が鳴った。この深夜、野営地を訪ねる者——森に住まう生き物か、それとも帝国軍の放った偵察兵か。感傷を吹き飛ばされたジェイが、ホルスターから自動小銃を引き抜いて森へと向けると、

「おいおい……あんまりいきり立つなよ、『ブルー・ブリッツ』」

気だるそうな唸れ声が、ジェイを諫めた。「お前——ツヴァイン……」と、ジェイは男の名前を呟く。307小隊に同行していたはずの傭兵。だが、出撃と同時に索敵に出てから、姿を眩ませていた。帝国軍との戦闘にあつても現れなかったその男が、今戻つて来た。訝しげに眉を顰めたジェイは、銃を突きつけたまま問う。

「今までどこに行つてた？ 俺達が戦つてる間、お前は何を——」

ハッ、と笑つたツヴァインが、ワザとらしく両手を上げると、「吠えるなよ。俺は、俺の役目を全うしてただけさ」と、悪びれもせず即答する。

「役目だと……?」

「そう、役目さ。コンボイの旦那が言つただろう？ 先行して、探つて来いって。それをやって、今戻つて来たんだよ」

「ふざけるな。敵と邂逅しても、お前は現れなかった」

「ああ、お前らがアイツらを引き付けてくれたおかげで、やりやすかつたぜ」

どうにもかみ合わない会話に、ジェイは怪訝を深める。

彼の葛藤をまるで意に介さず、「もういいかい？ コンボイの旦那に会わせてくれよ」とツヴァインは飽きた風に懇願した。

「——森の向こうに、帝国軍が前哨地を作ってる。大部隊を派遣する気だ……早急に潰しておかないと、このゲリラ前線、瓦解するぜ」



⑦ 再起

ジエイ達『307小隊』が帝国陸軍機甲中隊と交戦している間——ツヴァインはミューズ森林地帯の西端まで単機で進出し、帝国の動向を探っていた。完全な命令違反だが、コンボイはそれを咎めなかった。彼の持ち帰った映像を凝視し、ただその眉を顰める。

森林地帯が途切れてすぐ、『グラム湖』の湖畔に作られた建造物の影。

その麓にズラと並んだゾイド部隊は、先に小隊が交戦した帝国機甲軍と同じ、『レッドホーン』《イグアン》、そしてイモムシ型量産機《モルガ》を加えた混成部隊に、奇襲・陽動で力を発揮する中型機・水陸両用のイグアナ型ゾイド《ヘルディガンナー》、陸戦ゾイド部隊に対して絶対的優位性を持つ帝国軍の小型戦闘ヘリ・カブトムシ型の《サイカーチス》——。

解像度は低く臃げながら——確認できる機影たちは、明らかにミューズの森のゲリラ部隊を掃討するための機体たちだ。それが、最前線にほど近いグラム湖畔に作られた駐屯地に集結している。数は現段階で六十機弱。駐屯地のキャパシティにはまだ余裕があるようにも見え、おそらくは大隊規模の運用を視野に入れているのだろう。基地はそれらを効率良く運用するための中継地であり、急速な領土拡大で伸び切った補給線を補い、大攻勢をかける為の物だ。

本格的に機能すれば、先に307小隊が遭遇した規模の部隊が、絶え間なく送り込まれる事となる。そうなれば、間違いなく共和国の防衛線は瓦解する。

「……独断専行は、褒められたことではないがな」

ツヴァインに軽く釘を刺した後、コンボイは直ぐに、その情報を共和国軍本部に電信した。

——二日後。

最前線の上級士官達に、召集が掛かった。ミューズ森林の東端に作られた、共和国最終防衛ラインの中核『バラーヌ基地』。そこで、帝国

軍グラム駐屯地を攻略するための、緊急ブリーフィングが行われる。先の第一次全面開戦、続くオリンポス攻略のための大反攻作戦で大幅な犠牲を出した共和国軍だ。現状、大規模作戦を遂行する余力は無いのだが——それでもこのグラム駐屯地だけは、何としてでも破壊しなければならなかった。

前線でゲリラを行う奇襲工作隊・高速戦闘隊、ロブ平野を死守する共和国強襲戦闘隊・重砲隊から、各部隊長級の士官が集められる。307小隊のスターク・コンボイ大尉も、前線のゲリラ部隊の指揮官を代表して、この作戦会議に出席する事となった。

「——ベック少尉。君も同行したまえ」

不意に掛けられたコンボイの声に、目を剥いたジェイ。「——自分も、ですか？」と反芻した彼に、コンボイは頷いて、

「前線に来て間もない君は、別部隊との連携も加味した、初めての大規模作戦になる。ブリーフィングに参加しておいた方が、都合の良い事もあるう」

数秒考えて、ジェイは彼の提案を受け入れた。《シールドライガー》の機体も十分に回復し、手持ち無沙汰だったというのものもあるが——何より、先の一件以来グロック・ソードソール少尉との関係に軋轢があった。隊内ブリーフィングでは、コンボイが上手く取り持っていてくれていたものの、彼が出向してしまった後には、次いで階級の高いジェイとグロックの二人が、隊の留守を預かる事となる。それが、今のジェイには億劫だったのである。

隊に来て日の浅いジェイに、気を許せる仲間はまだいない——分隊行動時にジェイの指揮下に入ったフリーマン軍曹は、あくまで上官と部下の関係を崩す気はないらしいし、傭兵ツヴァインの掴み所のない性格は、ジェイをむしろ気疲れさせるくらいだ。結局の所、コンボイ大尉と同伴するのが、一番気楽な選択だった。

ガイロス帝国の西方大陸進出を察知して、慌てて軍を派遣した共和国軍だ、その進軍は帝国以上に急進的で、真つ前に前線基地の建立もできないまま開戦と相成った。この『バラヌ基地』も、その大仰な

名前に反して簡素な作りであり、言ってしまうえばあばら屋のようながらみどりの格納庫と、プレハブと見紛うこじんまりとした司令部が置かれた領地を鉄条網で囲んだだけだ。そこに共和国前線を支える、十数人の将校が集まる事となっている。

空調も整っていない作戦室で、扇風機の回る音だけが鳴っていた。到着早々、「司令官に挨拶を済ませてくる」とコンボイ大尉は席を外してしまい、一人ポツンと残されたジエイ。時間にはまだ余裕があり、他の隊の者も到着してないらしい。

ムアと熱い会議室のデスクに腰掛けて、ジエイは一人呆けていた。

「——あの……ジエイ・ベック少尉、ですよね？」

ギ、と戸口が軋んで、澄んだ女性の声が出た。

退屈に目を伏せていたジエイが、名を呼ばれたのに気づいて顔を上げると——数日前格納庫で会った、栗毛の女性士官が立っていた。覚えのある顔に、「アツ……」と息を呑んだジエイ。慌てて立ち上がると、「確か——」と、彼女の名前を思い出す。

「エリサ・アノン少尉です。……覚えてますか？」

女性士官が、遠慮がちに問うた。

無論、彼女の事は覚えていた。頷いたジエイが、「アノン少尉も、今回の作戦に？」と首を傾げると、エリサは困ったような微笑を作って、「今回の作戦、重砲隊も参加します。人手不足ですし……私みたいなへっぽこでも、いないよりはマシだ、って」

隣いいですか、と確認して、ジエイの横の席に着いたエリサ。埃っぽい作戦室の空気の中に、彼女の女性らしい柔らかな香りが混じり、鼻孔を擽る甘いそれが、訳も無くジエイを緊張させる。

沈黙が続いた。

一人呆けているのも退屈だったが、これはこれでやり辛い。仕方なく、デスクに置かれた今作戦のレジユメに目を遣ったが——案の状、碌に頭に入ってこなかった。こうしているうちに、何分立っただろう。まだ他の隊の人員も、コンボイ大尉も戻ってこない。

「ベック少尉……もしかして、もう実戦に出られましたか？」

不意に、エリサが問うた。クリと大きいエリサの瞳が、ジツとジエ

イの顔を見つめていた。彼女の問いかけに目を向けたジェイは、それを真正面から見つめてしまい、気恥ずかしくなる。

「……なんで分かる？」

「少尉……疲れた顔をしているから。違ったらすみません」

エリサは微かに表情を曇らせ、自信なさげにこちた。

「私がこつちに来た時、一緒にエウロペに渡って来た士官がいらっしやって……少尉と同じ、高速戦闘隊でした」

エリサがエウロペに来た頃——ちょうどヘリック共和国の大反攻作戦が実施された頃だ。当時最前線に赴いたのは、独立第二高速戦闘大隊。オリンポスの山頂を巡る攻防で、全滅したと聞いている。

「その人は、生きて帰ってこれたんです。部隊が全滅した中、ただ一人救援隊に救われました。でも——同僚も上官も、みんな失って帰ってきた彼の目は……何となく、今の少尉に似ている」

エリサが言わんとしている事——それはおそらく、『人の死』に触れて来た者の目なのだろう。

ミューズの森で帝国軍と遭遇戦を行ったジェイは目の前でマーチン軍曹を失い、自分もまた死にかけた。オリンポスの大山から生還したその士官とは、比べるべくもない当たり前の戦場かもしれない。それでも、ジェイもまたあの時『死んでいた』かもしれないのだ。

「アノン少尉……初めての实战で、隊の人が死んでしまったんだ。俺の指揮下に入った部下が、あっさり死んだ。そして、俺も死にかけた」  
彼女の言葉が、ここ数日ジェイを苛み——そして彼が、必死にこらえていた不安を、氾濫させる。

「生き残れたのは偶然のおかげさ。でも……この戦争が終わるまでに、俺達は後何回実戦に出る？ その全てを、今回みたいな偶然で生き残らなきゃいけないのか？ ——無理だ。そう考えると俺、やるせなくなっちゃったよ」

自分も、隊の仲間も——終戦まで生きている可能性は、限りなく低い。そう予感したジェイは、戦うためのモチベーションを見いだせなくなっていた。不安がどす黒い霧のように湧き上がり、ジェイの胸を穢していく。

ほとんど無意識に、ジエイは——隣に座る少女のような女性士官に「助けてくれ」と懇願していた。

「これ以上は、戦えない。俺の下す判断で、俺が——俺の隊の人間が死んでいくかもしれないんだ。その重さに、俺は耐えられない。助けてくれ、アノン少尉」

「ベック少尉……」

ジエイの告白に、エリサ・アノンは戸惑っていた。

ジエイ自身、情けない事を言っているのは分かっている。唯、口に出さずにはいられなかったのだ。この重圧を誰かに聞き入れて欲しかった。叶うのならば——「もう戦わなくていい」と、言っただけで済んだ。

「……ベック少尉。後方支援しかしていない私は、少尉達の戦ってる戦場を知りません。だから、ベック少尉がどんな悲しみを背負って戦う事になるのかも、まだ、分からないんです」

暫しの間の後、エリサはそう言って、ジエイの独白を拒絶した。

当然だろう——彼の言ってる事は、母国を守ると誓って入隊した士官としてあるまじき発言である。あどけない少女の風貌を遺す女性士官でも、それに手放し同意する程、甘ちゃんではないのだ。

落胆したジエイ。だが——「……でも」と、エリサは続けて、

「少尉が感じている悲しみや怖れは、この戦いに従軍する上で——ゾイドに乗る上で、とても大事な事だっと思うんです。だから、何があっても自分を責めないで。少尉が守りたいって思ったモノを守るために、戦っていいんです。みんなを死なせたくないって思って少尉がした行動なら、どんな結果になっても——それはきつと、間違いないから」

「俺の守りたいモノのために……」

エリサは、ジエイの弱音を肯定してはくれなかった。

それでも、彼女の言葉は曇ったジエイの心に、少しでも安らぎをくれた。悪しき微睡から覚めたかのように、ジエイは顔を上げる。エリサ・アノンは、微かに潤みを帯びた瞳でジエイを見つめると、「ごめんさい。私なんかが、説教がましかったですよ」と頭を下げた。

「アノン少尉——」

ありがとう、とジェイが礼を伝えようとした時だった。ギツ、と戸口が開いて、コンボイ大尉や他の隊の士官達が、作戦室に入ってくる。その中には、このバラーヌ基地の指令官や、ロブ基地の副指令を務めていた、あのマクシミリオン・ペガサス中佐の姿もあった。

二人の会話は、そこで途切れた。士官達が次々と席についていくと、最前のデスクに立ったペガサス中佐が、皆の面持ちを眺めまわす。

「——全員集まっているようだな。これより、『グラム駐屯地制圧作戦』のブリーフィングを始めるぞ」

## ⑧ 強襲 ―グラム湖畔― (前編)

――ZAC2099年十一月 某日未明 ミユーズ森林地帯

夜も更けかけたミユーズの森。本来は早朝の静けさだけがあるべき時と場所。

しかし、この日はそうではなかった。朝焼けも昇りきらぬ薄明りの中――戦闘機械獣達の巨影が、ズラと立ち並ぶ。木々のざわめきをかき消すほどの轟音。ジェネレーターの駆動音、木々を踏み砕く足音――そして、機獣達の吐く獰猛な呼気が、幾重にも重なっている。目指す先は、森の西。森林地帯と荒野の境――そこに築かれた、帝国の前線基地である。

「各隊、配置に着いたか……用意はどうか、応答せよ」

今作戦のために設定されたオーブン回線の通信に、指揮を取るマクシミリオン・ペガサス中佐の声が流れた。

ペガサス中佐はロブ基地の副指令官であり、エウロペ大陸派遣軍・総司令部の末席に名を連ねる要人だ、本来ならばこのような最前線で、成功の見込みも高いとは言えない奇襲作戦に出張る必要はない。しかし、グラム駐屯地の制圧――ヘリック共和国最終防衛線の存亡が掛かった作戦の指揮を、中佐は自ら執ると言って譲らなかつた。この戦いに西方大陸戦争の命運がかかっている事を、彼自身理解していたのである。歴戦の将であるペガサスが総指揮を執る事に、兵達の異論は無かつた。

歓迎されたのは、彼自身の有能さだけではない。ペガサスの乗機はヘリック共和国軍の象徴であり、現行の機体で最強の戦闘力を誇る巨大恐竜型ゾイド《ゾイドゴジュラス》――しかも旧大戦・中央大陸戦争での就役から現在に至るまで、ヘリック共和国機甲師団の中核として軍を支え続けた『Mk-II』、ゴジュラスキャノンと称される二門の長距離砲を背負ったタイプである。

先の天変地異以来個体数を減らした《ゾイドゴジュラス》の配備数は、決して多くはない。今戦争で強襲戦闘隊に配備された機体数は200にも満たず、その内の一機が指揮官機として同じ戦場に立つとい

う事は、今作戦に参加する者達の士気を高めるに、十分すぎる物だった。

マクシミリオン・ペガサス中佐の呼びかけに、各隊の指揮を執る隊長の応答が返る。

「強行偵察隊、ダスト・バインド大尉以下、配置完了」

「奇襲工作隊……シニアン・レイン中尉以下、配置完了しました」

「高速戦闘隊——スターク・コンボイ大尉、以下……配置、完了した」

各隊の指揮を執る上級士官達の通信に、「よし」と頷いたペガサス中佐は、再びレシーバーを取ると、力強く宣言した。

「……重砲隊の配置も完了した。これより、グラム駐屯地制圧作戦を開始——各員の奮闘を期待する！」

グラム湖畔が目視できる、ミューズ森林の外れ——その草藪の中、ジェイ・ベックの《シールドライガー》はアイドリング状態で待機していた。僚機は《コマンドウルフ》が二機。マーチン軍曹が欠けた穴埋めに、傭兵ツヴァインの機体が加わっている。

作戦は至極単純で、各部隊による波状攻撃だ。まずはペガサス中佐の指揮の元、強襲戦闘隊・重砲隊による長距離砲撃、陽動が行われる。これによって基地送電施設の破壊と、敵戦力——特に地上戦力に対して脅威となり得る《サイカーチス》部隊の数を減らせば、後は高速隊・奇襲隊が混乱に乗じて接近——残存戦力を殲滅する、という筋書きだ。

絶対数で不利にある共和国軍としては、密林という地形的有利を捨てて主力部隊敵陣に送り込む、危険度の高い作戦である。すぐ向こうには帝国の防衛線が開かれていたのだ、そこからの救援が到着する前に、なるべく大きな打撃を与えなければならぬ。

作戦遂行可能時間は、長く見積もっても二時間はあるまい。主力の強襲戦闘隊にリスクな戦いを強いるには行かず、実際に基地へと突入するのは、機動力に優れる特殊工作師団の機体に限られている。だからジェイ達は、いつ敵の探知機に引つかかるとも知れない、最前線



で待機しているのだ。戦域に《ゴルドス》の部隊を展開しているのは、味方通信網の整理・敵通信傍受のためだけではない。敵レーダーの感度を低下させ、主力部隊接近を感じられないようにするためだ。

ペガサス中佐が下したミツシヨン開始の号令は、ジェイの機体も滞りなく傍受している。再び始まる実戦——それも、先にジェイが経験したそれが小競り合いに思える程の、大規模作戦だ。操縦桿を握る手がジワと汗ばみ、緊張にジェイの呼気は乱れていく。

(……ベック少尉)

通信機から、エリサ・アノンの声が聞こえた。作戦行動中の無断通信は基本的に禁止されているのだが、別回線で入電してきたらしい。「……どうかした？ アノン少尉」と、恐る恐る返答を返したジェイ。(一緒に戦うんですね……私達。少尉もどうか、お気をつけて) それだけ言つて——エリサの通信は途切れた。

「——つ放てイッ！」

《ゴルドス》部隊の全天候レーダーより送られたデータを元に、森林奥地で待機していた重砲隊へと砲撃命令が下される。主力となるのは小型のカメ型ゾイド《カノントータス》一個小隊で、同サイズの機体が備えるには最大級の火器『液冷式荷電粒子ビーム砲』を主砲としている。それが、一斉に火を吹いた。

そしてもう一隊——ペガサス中佐の《ゴジュラスMk-II》と、両の腕に積載限界量ギリギリの長距離砲を接続した改造小型機《ゴドスキヤノン》で構成された部隊も、それに同調して砲撃を開始する。

総計二十機にも及ぶゾイド部隊が撃ち放った砲撃——星の雨とも見紛う光が、アーチを描いて夜明け前の空を横断する。ミューズの上空を越えてゆつくりと落ちていく流星群に、前線で待機していたジェイ達も、思わず目を奪われた。

——閃光。そして爆発。落雷でも落ちたかと思われる轟音が、ミューズの森に木霊する。微かに伝わってくる振動に揺すられながら、

「《ゴルドス》隊、着弾状況は？ データをすぐに返せ、追撃の必要性

を把握したい！」

と、ペガサス中佐が叫んだ。元より目標の目視が叶わぬ、射程ギリギリでの長距離射撃だ。重砲隊の目は、《ゴルドス》達から送信されてくるレーダーサイトしかない。

着弾状況を把握したペガサスが、「全機前進——第二射を掛けるぞ」と、次の指示を出す。排気口から余熱を吹いた重砲ゾイド達が、ゆっくりと機体を進ませて、100メートル程前進する。

「液冷式荷電粒子ビーム砲、冷却終了。——リロードします……ッ」

《カノントータス》隊の一人として砲撃に参加したエリサ・アノン少尉も、コントロールパネルを操作して、再度照準を合わせる。受信した目標座標に合わせて、カノントータスの砲座がゆっくりと持ち上がり——ゴッ、と反動に機体が揺れて、エリサの躰を揺ると、再び光の柱が空を往った。

大規模な電子ゾイド部隊を展開して行った長距離射撃は、概ね作戦通りの成果を發揮したといい。光の雨の大半が『グラム駐屯地の敷地内』に降り注ぎ、コンクリート詰めめの地面を抉る。

まず、屋外で停留していた《サイカーチス》達の大半が砲撃の余波で損傷、うち数機は直撃、爆発四散した。格納庫内の機体への被害は把握できなかつたが、少なくとも第二射までで建物の半分が崩落。起動できる機体も、そう簡単には出撃できまい。即座に動けるのは、哨戒任務に当たっていた《レッドホーン》《イグアン》《モルガ》の混成小隊ぐらいだ。

施設への被害も甚大だった。管制塔のブリッジにも液冷式荷電粒子のビームが注がれる。長距離攻撃で幾分威力が減退したとはいえ——非装甲目標に対しては、尚十分すぎる威力がある砲撃。幾重にも交わった光の奔流に撃ちぬかれて、管制塔は音を立ててへし折れると、瓦礫の雨となって基地内に散らばる。

非常事態を知らせるサイレンが鳴り響く中、第三射が着弾する。実弾・ビームの入り混じる砲撃の雨は、ここにきて最大の攻撃目標——基地送電施設を破壊した。

最前で待機していたジエイ達『特殊工作隊』の面々にも、決定打が入ったのが見て取れた。紅蓮の炎に照らされたグラム駐屯基地の証明がダウンし、基地システムが停止。

すぐにフリーマン軍曹の《コマンドウルフ》から、通信が入る。

「《ゴルドス》隊より入電、敵基地システムのダウンを確認しました！」  
「把握している——コンボイ隊長！」

隊内通信に切り替えて、ジエイは小隊長の指示を仰いだ。

「第一段階は恙無く進んだか——高速戦闘隊、全機前へ……先行して、グラム駐屯地に侵入するっ！」

コンボイ大尉の判断は早かった。そして、各人員の指揮も高い。敗北続きの共和国軍にとつて、この戦いはいわば、背水の陣でもある。決死の覚悟が追い風となったかのごとく、作戦は順調に進んでいるのだから、士気が高まるのも道理であろう。

無線越し、「ツシヤアオラッ！」と気迫を叫ぶグロツクの声が響いた。

《シールドライガー》が、《コマンドウルフ》が——次々と密林を飛び出して、疾走を掛ける。荒野の中を一直線、共和国軍の砲撃で不夜城の如く照らされた、『グラム湖』湖畔の前線基地だ。ただでさえ建造途中で、満足に数もそろえていなかったのだろう迎撃用トーチカは、送電系がやられて完全に沈黙している。往く手を遮る物は、何も無かった。

全力疾走を掛けるコンボイのA分隊・グロツクのB分隊に微かに遅れて、ジエイのC分隊が続く。チャーリー昂る仲間達の背を追うジエイの士気は、決して低い物ではなかったが——やはり、心のどこかで曇った物がある。それが、《シールドライガー》の歩速にも現れているのだろう。

「おいおい、どうした『ブルー・ブリッツ』。トイレでも我慢してるのか？」

並走したツヴァインの《コマンドウルフ》から、通信が入る。相も変らぬ、傭兵の人を喰ったような態度にジエイは眉を顰めると、「無駄

口はいい。目の前の戦いに集中しろ」と吐き捨て、即座にそれを切断した。

⑨ 強襲 ― グラム湖畔 ― (後編)

コンボイ大尉の《シールドライガーDダブルキャノンスペシャルC S》がビームキャノン  
を撃ち放ち、グラム駐屯地の正面ゲートを吹き飛ばす。「基地深奥ま  
で侵入し、主要施設を完全に破壊する。が、無理はするな。敵増援が  
到着する前に脱出するのが大前提だ」と念を押して、大尉の《シール  
ドライガーDCS》は真つ先にゲート内へと飛び込んだ。次いで彼の  
配下の《コマンドウルフ》が、グロック少尉率いるBブラボー小隊の機体たち  
が、基地内部へと侵入していく。

「散開しろッ。この施設は二度と使えぬよう、完膚なきまで破壊する  
！」

ジェイの《シールドライガー》率いるCチャーリー分隊もまた、グラム駐屯  
地の内部へと突入した。重砲隊の砲撃で崩落した瓦礫が散乱する中、  
基地の心臓部たる司令部、そしてゾイド格納庫を直指して歩みを進め  
ていくが、その道のりは決して単調な物ではない。共和国軍の襲撃に  
気づき、ようやくと迎撃の準備が出来た「帝国機甲師団」の機体たち  
が次々と出撃し、待ち構えていたのである。

先の戦いで遭遇した《イグアン》に、イモムシ型の小型突撃ゾイド  
《モルガ》。各二機ずつが、ジェイのライガーとの邂逅に気づいて、臨  
戦態勢を取る。だが、いずれも先の砲撃で損傷し、万全とは程遠い状  
態だ。

「そんな様の小型機で……ッ！」

獯猛な雄叫びを上げた《シールドライガー》が、まず《イグアン》に  
体当たりを見舞い、跳ね飛ばした。間髪入れず、足元の《モルガ》に  
『ストライククロウ』の一撃を見舞う。小型ゾイドの中ではずば抜け  
た装甲強度を誇る《モルガ》だが、体重の乗ったライガーの一撃の前  
では問題にはならない。拉げた装甲板が千切れて飛ぶと、剥きだしに  
なったコクピットブロックを踏みつぶす。

瞬く間に二体を潰された《イグアン》と《モルガ》。怖気づいて後退  
しようとした二機を、ジェイ機の後続として控えていたフリーマン軍

曹、そしてツヴァインの《コマンドウルフ》が砲撃した。ビーム砲座の一撃が《イグアン》を撃ち抜いたが、《モルガ》の機体は自慢の装甲で持ちこたえている。

「めんどくせえな——ッ」

ツヴァイン機が飛び出すと、《コマンドウルフ》の牙で《モルガ》を捕えた。中型ゾイドである《コマンドウルフ》のパワーは、《シールドライガー》に比べれば幾分劣るものの、電磁牙『エレクトロンファング』によつて電装系を破壊し、無力化することが出来る。ショートした《モルガ》を、ツヴァインの《コマンドウルフ》が投げ飛ばし、むき出しになった機体下部——非装甲部分にビーム砲座を叩き込むと、今度こそ爆発、四散する。

小型ゾイド達を退けたジェイ達の前に、高密度のビーム光弾が撃ち込まれた。《シールドライガー》の足元が爆ぜて、コクピットが激震に揺れた。「なんだ——ッ」と、火線の先を煽ぎ見たジェイは、瓦礫の中を這いまわる黒い中型ゾイドを見つける。

イグアナ型の《ヘルデイガンナー》。帝国奇襲部隊の主力機で、ミューズでのゲリラ掃討を目的としていたこの駐屯地には、大量に配備されていた機体だ。その主砲・『ロングレンジアサルトビーム砲』が、ジェイ達を狙撃したのだ。純粋な戦闘力では《シールドライガー》《コマンドウルフ》の方が上だろうが、残骸の散乱したこの戦場では、《ヘルデイガンナー》の方が小回りが利き、有利に立ち回れる。

やり辛い相手だ——と、ジェイ達が警戒した瞬間、不意にコンクリートの地面が捲れ上がり、別のゾイドが這い出した。

ブラウンカラーの装甲を持つヘビ型の小型ゾイド——共和国奇襲戦隊の主力《ステルスバイパー》が地中から飛び出すと、その瞬発力を持つて、瞬時に《ヘルデイガンナー》の機体に絡み付き、締め上げる。完全に虚を突かれた《ヘルデイガンナー》に、反撃の手はなかった。

「《ステルスバイパー》……奇襲戦隊の突入も始まったか」

小型機に分類されているものの、その長大な全身を使った《ステルスバイパー》の締め付け攻撃は、自身より優れた体躯の相手をも粉

砕し得るパワーがある。全身を破碎され、グニヤグニヤに拉げた《ヘルデイガンナー》——その残骸を放り出すと、《ステルスバイパー》の機体がジェイのライガーに近づいて、鎌首をもたげた。

「こちら奇襲戦闘隊、シニアン・レイン中尉。基地の主要施設は？ 既に破壊できているのですか？」

《ステルスバイパー》から通信が入る。落ち着いた女性士官の声——確か、今作戦で奇襲部隊の指揮を執っている女性士官だ。

「コンボイ大尉の指示の元、散開して主要施設の制圧を進めています」  
ディスプレイに映った金髪の女性士官に、ジェイも返答を返した。数秒考え込んだシニアン中尉は、「それでは非効率ですね」と眉を顰め、

「基地主要施設に対する破壊工作ならば、私達の装備の方が向いています。貴方は——」

「高速隊の、ジェイ・ベック少尉であります」

「……ベック少尉。貴方達はコンボイ大尉達と合流し、ゾイド部隊の対処と敵機格納庫の破壊に注力してください。《レッドホーン》級の機体に遭遇すれば、私達奇襲戦闘隊のゾイドでは対応できません」

高速戦闘隊がゾイド部隊の足止めをしている間に、奇襲隊が基地中枢を叩く——中尉の提案は、理に適っている気がした。「了解しました」と即答したジェイは、ツヴァイン機、フリーマン機を伴いながら機体を反転させると、

「ゾイド部隊を叩くぞ。格納庫に向かいつつ、残存兵力を無力化する」と指示を出す。二人も異論はないらしい、ジェイのライガーに続いて、機体を反転させた。

スターク・コンボイ大尉率いるA<sup>アルファ</sup>分隊、グロック少尉のB<sup>ブラボー</sup>分隊は、既に基地の奥深くまで侵入していた。遭遇した帝国守備隊をことごとく退け、コンボイの《シールドライガーDCS》は今、グラム駐屯地のゾイド格納庫を前に立っている。建物は先の長距離射撃を受けて半壊していたが、中には未だ損傷していない《レッドホーン》や《ヘルデイガンナー》が、数多く残っていた。

おそらくは近々、ミューズ森林のゲリラ部隊に対する大規模掃討作戦が行われる予定だったのであろう。コンボイ機の横で、グロツクの《シールドライガー》が獯猛な呻り声を上げる。

「こいつらを破壊すれば、ガイロス野郎共に灸を据えてやるって目的は、一先ず果たせますかね」

昂ぶるグロツクに、コンボイは冷静な応答を返す。

「奴らの物量は侮れんから、どうだかな。なんにせよ、見つけておいて破壊しない手は——無いッ！」

《シールドライガーDCS》の背負った大型ビームキャノンの砲口が、まばゆい光を放った。それに同調するかのように、グロツクの《シールドライガー》、そして配下の《コマンドウルフ》達も、ビーム砲を照射した。撃ち放たれた閃光が最前に納められていた《レッドホーン》の横腹を貫き、金属生命体の心臓部・ゾイドコアを掠める。高熱を蓄えて膨れ上がったレッドホーンの機体が、まるで風船のように爆ぜて周囲のゾイド達を巻き込み、炎上した。

「——ぬうんっ！」

コンボイの気迫に合わせるように、《シールドライガーDCS》も咆哮し、最大出力を維持したまま、光線を剣のように撃ち振るう。砲身が焼切れる程の長時間照射で、格納庫内の帝国ゾイドは完全に破壊された。

これで帝国側の防衛戦力は、大半が損失した事になる。後は司令部を完全に破壊すれば、『グラム駐屯地』の戦略的価値は、完全に失われるだろう。

これからだ——と、一行が勇んだ矢先の事だった。最前線に立った特殊工作師団の機体全機に通信が入る。戦域の索敵・警戒を続けていた《ゴルドス》部隊からの、緊急入電だ。それはすなわち、帝国軍の救援部隊が作戦領域に侵入した事を意味する。コンボイ達の想定していたタイミングよりも、遥かに早い出現だ。

「心苦しいが……ここままでだな」

まだ基地を完全に無力化したとは言い難いが——このまま深追い



すれば敵部隊に包囲され、全滅する。そうならないためには速やかに戦域を離脱し、ミューズ森林地帯の共和国軍防衛線内へと立ち戻る必要がある。

高機動ゾイドの《シールドライガー》や《コマンドウルフ》は勿論、《ステルスバイパー》や《ガイサク》と言った奇襲隊の機体も、俊敏性は高い。負傷兵の救援という役目もあるはずだから、敵の追撃の手は万全ではないはずだ。それならば、今から撤退しても十分に帝国軍を振り切れる。

「目標は十分に破壊した。引き上げるぞ！」

オープン回線で号令を掛けると同時、コンボイ機のミサイルポッドに装備された照明弾が空高く打ち上げられた。事前に決めておいた撤退信号だ。ジェイ達 C 分隊、そして基地主要施設の破壊を目指していた奇襲戦闘隊のパイロット達も、合図に気づいて機体を反転させた。

炎上する『グラム駐屯地』を背に、コンボイ率いる高速戦闘隊が疾走する。既にミューズの森林地帯は目前だった。多少機体の損傷があるものの、高速戦闘隊に死傷者は出ていない。敵の追撃があっても、森林に待機した重砲隊の支援射撃が食い止めてくれる間に振り切る事ができるだろう。二度目の実戦——それも大規模な作戦行動が、これほどまでに上手く進んだのは、ジェイに大きな安堵感を与えた。「あっさりしたモンだったなあ。こんなだったらあの基地が完成して、大物部隊を森に送り込んでくれた方が、刺激的だったかもしれないねえよ」

すっかりと気を抜いたツヴァインが、通信越しにそんな強がりを見た。無論、大勝の高揚感が言わせたジョークなのだろうが——、

——直後、彼は後悔する事になる。

レーダーに反応が出た。全速で疾走するジェイ達の機体に、ピツタリと追従する程の高機動。けたましいアラーム音に、「——敵!？」と振り向いたジェイは、猛スピードで駆けてくる赤い猛獣型ゾイドの群れを見た。

「——《セイバータイガー》……ッ！」

コンピュータが弾き出した敵機のデータを受け、ジエイが叫んだ。シルエットは《シールドライガー》に良く似ていながら、ガイロス帝国軍の機体らしい装甲化されたボディ。それでいて無骨な感はなく、曲線的なカウルはむしろ気高ささえ感じさせる。紛れもなく、旧大戦時代より帝国機動陸軍を支えた名機、《セイバータイガー》の形質であったが——異様だ。うち一機の背には、高機動ゾイドの武装らしからぬ、大型のビームランチャーが備えられていた。

凄まじいスピードで追撃する《セイバータイガー》部隊。既にジエイ達と肉薄しているそれは、重砲隊の援護射撃では止められない。隊長機と思われるタイガーのビームランチャーが照準を合わせると——撃ち放たれた光線が《コマンドウルフ》の後ろ脚を切り裂いた。「ナアアア……ッ！」

絶叫と共に横転したのは——ツヴァイン機。

倒れ込むツヴァインのウルフを、タイガーの前足ががちりと踏みつける。

帝国の『紅き暴風』——《セイバータイガー》が吠えた。それはまるで自らに背を向け、逃げるように森を目指す共和国軍の機械獣達を、挑発しているかのようだった。

## ⑩ 暴風

宵の闇の中に在って尚鮮烈な、真紅の猛獣——ガイロス帝国の高速戦闘ゾイド《セイバータイガー》。中破した《コマンドウルフ》を足蹴にして、ジエイ達高速戦闘隊の機体を睥睨したそれは、まるでこれから始まるであろう『狩り』に猛り、逸っているかのようなだった。

森林地帯への撤退を目指していた、コンボイ大尉率いる『高速戦闘隊』は、眼前に現れた帝国軍の追手に立ち尽くした。敵の数は六機。損傷したツヴァインの《コマンドウルフ》を除いても、数の有利はまだこちらにあるはずである。にも拘わらず、ジエイは肌を粟立てる程のプレッシャーを感じ、固唾を呑んだ。

それにしても、何と言う追撃の早さだろう。帝国の救援部隊から高機動ゾイドだけが先行して追撃したのか？ 否、おそらくそうではない。この《セイバータイガー》達は、『グラム駐屯地』の救援要請を受けて、真つ直ぐミューズ森林地帯に侵攻して来たのだ——『森』という隠れ蓑からのこのこ出て来た共和国の主力部隊を、根こそぎ掃討するため。そうでもなければ、この進撃の速度は説明できない。

友軍の危機を顧みず、むしろそれを釣り餌にしたかのような、狂氣的な采配。それは軍の指揮系統から独立した『特殊部隊』でもなければ、決して不可能な判断だ。この《セイバータイガー》部隊は、おそらくそれなのだろう——帝国における高速ゾイドのスペシャリスト、『タイガーライダー』達によって構成されたエースチームだ。

此処まで肉薄されては、如何に《シールドライガー》《コマンドウルフ》と言えど、振り切れる相手ではない。下手に森林地帯へと逃げ込めば、足の遅い《カノントータス》や《ゴルドス》の部隊を、戦いに巻き込んでしまうことになる。そうなれば、無用の犠牲が増えるだけだ。

「……やるしかあるまい」

コンボイ大尉が、無線越しに呟く。いつも冷静沈着の小隊長だが——その声には微かな緊張と、焦燥の念が滲んでいるように思えた。

「高速戦闘隊は何をしている？ 早くミューズに——味方の防衛線内に後退しなければ、帝国の増援に包囲されるぞ！」

当初の予定よりも先遣部隊の帰還が遥かに遅くなっている事に、今作戦の総司令官、マクシミリオン・ペガサスは苛立った。「状況知らせい！」と、偵察隊へと怒鳴った彼に、《ゴルドス》部隊の長を務めるバインド大尉が返答する。

「詳細は不明ですが——敵追撃部隊に追いつかれたようです」  
「追いつかれたけど？ 馬鹿な……」

地上では最速を誇る、《シールドライガー》を主力にした部隊。それが、こども簡単に捉えられる——導き出される答えはただ一つ、敵もそれと同等の戦力を仕込んできた、という事である。

ペガサス中佐は、即座に『紅い暴風』と仇名される高速ゾイドを連想し、「——『タイガーライダー』共か……」と奥歯を噛んだ。《セイバータイガー》はその俊敏性を武器に、パワーで遥かに勝る《ゴジュラス》すら翻弄する難敵である。生半可な救援を送っても、焼け石に水——それどころか、無駄に兵を失う事になりかねない。かといってこのまま彼らを見捨てれば、共和国の戦線を支える『特殊工作師団』は大きな損害を被るだろう。そうなると、『グラム基地の破壊』という成果が、水泡と帰すことになる。

前線の状況は、重砲隊のパイロット達にも伝えられていた。撤退時における支援砲撃のため、尚森林地帯で待機していた重砲隊《カノントータス》三番機のパイロット、エリサ・アノン少尉。

「ベック少尉……」

高速戦闘隊に所属する、顔馴染みの士官の名を呟く。戦う事に後ろ向きになりながら、それでも自らを奮い立たせ、戦場に向かった若い士官の姿が、脳裏に浮かんで離れない。ようやくと死地より帰還できると思った矢先に、敵の追撃——彼は今、どんな思いで戦っているのだろうか。そんな事を考えていると、胸中が疼く感じがした。

指揮官が、一兵が——様々な感情を抱いて待機していた最中の事であった。通信回線に、（て、敵襲——ッ！）と、焦燥の音が乗った。発

信元は、森の中に展開していた《ゴルドス》部隊の指揮官。「どうした？ 大尉、応答しろ！」と、ペガサス中佐が叫び返すが、直後、無線が切断され、レーダー上の《ゴルドス》の反応が、次々と消失していく。

「まさか——っ」

ペガサスの背に悪寒が走った、その時だった。

隣に控えていた僚機《ゴドスキャノン》の頭部が、レーザーに撃ちぬかれた。コクピットを破壊された機体が、火花を散らして崩れ落ちる。次いで、第二射。今度は重砲隊の《カノントータス》六番機の装甲を掠め、副砲である『二連装高速自動キャノン』を爆散させる。かく乱するかののように、次々と撃ち込まれるビーム——だが、センサーに反応はない。

「ステルス機——ッ!？」

微かに残った火線の跡に目を凝らし、ペガサス中佐の《ゴジュラス Mk-II》が機首を反転させる。背丈の低い《ゴドス》や《カノントータス》のパイロット達では、気づかなかつただろう。だが、《ゴジュラス》の巨体、その高い視点から、ペガサスは森林の合間に何かが蠢く違和感を見つけた。

足音も無く密林を駆ける、四足の小型ゾイド《ヘルキャット》。《セイバータイガー》の僚機であり、高いステルス性を持つ高速ゾイドが、斥候として既にミューズの戦線に侵入していたのである。

六体の《セイバータイガー》が織りなす連携は、見事な物であった。《シールドライガー》に匹敵する超高機動ゾイド——それらの軌道が、最高速度を維持したまま複雑に絡み合い、変幻自在の疾走を見せる。迎撃に撃ちこまれた《コマンドウルフ》達の射撃を、縫うように擦り抜けた六機は、そのまま接近して白兵戦を仕掛けて来た。

<sup>ブラボ</sup>B 分隊のウルフが、まず最初の餌食となった。六体の《セイバータイガー》が、擦り抜け様に次々と爪牙を見舞い——まるで削岩機の中でも放り込まれたかのように、瞬く間に解体された《コマンドウルフ》。その残骸が荒野に散らばるのを目の当たりにして、ジェイ・ベツ

クは戦慄する。

「そんな——一瞬で……ッ!？」

ゾイド一機を、瞬時に粉々にする程の猛攻。あの『暴風域』に捕らわれたら、《シールドライガー》の機体と言えども持たないだろう。

動揺し、硬直したジェイだったが、

「密集しろ。奴らは単機でいる者を集中攻撃してくる」

冷静に分析したコンボイが指示を出す。

彼の《シールドライガーDCS》が、《セイバータイガー》達に追隨するように駆け出すと、彼の配下は勿論の事——グロツクのB分隊<sup>ブラボー</sup>、そしてジェイの配下であるフリーマン軍曹も、その後が続く。小隊長にどのような算段があるのか理解できないジェイだったが、孤立すればやられる、というのは理解できる。とつさに、ジェイもライガーを追従させていた。

《セイバータイガー》部隊程の練度は無い物の、共和国軍側も密集陣形のまま疾走を始める。これならば迎撃に用いる事の出来る火力の密度は高まり、敵も迂闊に白兵戦を挑むことはできない。が——、ジェイ達に後ろを取られた《セイバータイガー》部隊は急速に旋回して方向転換し、密集したライガー達へ正面から突っ込んでくる形になった。

「真つ向から挑むつもりか!？」

と動揺したグロツク。すると、タイガー達は陣形を組み替えて——あの『ビームランチャーを背負った機体』が最前へと躍り出る。砲塔が照準を定めると、収束器によって研ぎ澄まされた高密度ビームが撃ち放たれた。

「いかん、散れ!」

コンボイが叫んだ。咄嗟に全機が身を振って回避したものの、爆風にじりじりと装甲が焼かれている。追撃のビームランチャーが尚も火を吹き、密集しようとする共和国軍を次々と引き離していった。そして——一際大きく距離を取ったB分隊<sup>ブラボー</sup>の《コマンドウルフ》が、虎の餌食となる。

「グワアアア……ッ!」

《コマンドウルフ》のパイロットの断末魔を聞きながら、ジエイは敵の連携の、全てのギミックを理解した。超高速で瞬時に距離を詰め、集団による接近戦で各個撃破していく。密集し、弾幕を張ろうとする敵には、あのビームランチャーを背負った《セイバータイガー》が砲撃によって分断し、それによって孤立した者を狩るのだ。

「よくも……よくもオーツ！」

分隊を全滅させられたグロツクが、怒りに逸って前に出た。それが、無謀な戦略だというのは、誰の目から見ても明らかであり、「——止せ、グロツク少尉！」と、ジエイは咄嗟に制止する。が——、頭に血の昇ったグロツクは止まらない。

『エネルギーシールド』を展開したグロツクの《シールドライガー》が、《セイバータイガー》の群れに向かつて、真正面から突貫していく。全速の突撃。しかし、それを阻むかのように、セイバーたちも砲撃を見舞ってきた。

銃器の大半を外付けにしているセイバータイガー達は、高速戦闘時でも火器の取り回しに手間取ることは無い。火力としては突出していない、標準的な範疇であったが、それが六機ともなれば話が変わってくる。グロツク機のエネルギーシールドは耐えきれずにショートし、そこにビームランチャーが叩き込まれる。衝撃。ライガーの左前足が粉々砕け散り、「グオオ……」と呻いたグロツク。体制を崩し横転した彼のライガーに、セイバーの群れが迫る。

「グロツク少尉——……ッ！」

——ジエイの時が、完全に静止した。

彼は迷った。このまま行けば、グロツク少尉は確実に死ぬ。助けようとしても、ジエイが一人突貫したところで、少尉の二の舞になるだけだろう。それどころか隊の連携を見出し、更なる犠牲を生んでしまう可能性さえあった。隊の、仲間の——そして自らの安全を願うのならば、彼は動かないべきであった。

だが——それはすなわち、目の前で死にかけている仲間を見捨てる事でもある。自らの判断で、同じく隊の者の命が失われるというのなら、同じことだ。307小隊に赴任してきて構築されたグロツクとの

関係は、ジエイにとって良い事だけではない、複雑な思いの孕む者であつたが——だからこそ、記憶に深く染みついた『グロック・ソードソール』がこの世から居なくなってしまうのが、怖かった。

脳裏に、様々な声が弾ける。

——ゾイドは生きてる。お前さんがコイツへの信頼を示して見せれば、助けてくれるさ——。

——少尉の守りたいモノのために、戦つていいんです。みんなを死なせたくないって思つて、少尉がした行動なら——どんな結果になつても、それはきつと、間違いじゃないから——。

「……う、うおおおッ！」

意を決したジエイが、コクピット内で絶叫する。

《《シールドライガー》》も、また吠えた。愛機の轟咆を合図にして、ジエイは機体を始動させる。全速力の疾走。エネルギーシールドをフルパワーで展開し、グロック機を躡る《《セイバータイガー》》部隊に向かつて、一直線。

守りたいモノを——仲間を守る。それが、ジエイの下した判断だつた。

「《《シールドライガー》》、力を貸してくれ——俺は、仲間を守りたい……ッ！」

操縦桿を握る手に、思惟を込めると、それに答えるかのように、ライガーはもう一度咆哮して、より激しく地を蹴り上げ、突撃する。その疾走は、目の前に立ちはだかる獰猛な『虎』の群れに対する恐れなど、微塵も感じさせない力強さだった。



## ⑪ 死闘

ジェイ・ベック少尉の《シールドライガー》が、最高速度で《セイバータイガー》の群れへと突っ込んでいく。グロツクの機体を撈るのに気を取られていたセイバー達は、ほんの僅かに迎撃の手を鈍らせてしまう——そして、それを真っ先に感じ取ったのが、小隊長・スターク・コンボイ大尉であった。

「少尉を援護しろ！」

《シールドライガーDCS》の腰部にアタッチメントされた、『八連装ミサイルポッド』が、《セイバータイガー》の群れに撃ち放たれた。雨のように降り注ぐミサイル。地面を穿つ爆撃に土埃が上がり——コンマ数秒の差で避けた《セイバータイガー》達が、煙から逃れるように這い出てくる。『タイガーライダー』達は、相当な手練れなのだろう。損傷は殆んど無い——だが、予想だにしない事態の対処に気を割き過ぎたのか、先までの曲芸的連携走行が、この一瞬のみ完全に乱れていた。

その隙を見切って、コンボイ大尉はビームキャノンのトリガーを引く。光弾の一撃をもろに浴びて、タイガーの機体が爆ぜた。

これで、残りは五機。残ったタイガー達が、態勢を立て直そうと背を向けた。それを横目に見ながら、コンボイ大尉は尚も疾走を掛けたジェイの機体へと無線を繋ぎ、叫ぶ。

「ジェイ少尉、ヤツを——ビームランチャーを背負ったタイガーをやれ！」

「——ッ！」

小隊長の指示に、ジェイはタイガーの群れを見据える。ミサイルポッド、そしてビームキャノンの連撃に足止めを喰らった《セイバータイガー》達は、まだ最高速まで加速しきれていない。そして、その中でもとりわけ精彩を欠いているのが、追加武装で機体重量が増えている「ビームランチャーのタイガー」だ。敵部隊はあの機体を中心にフォーメーションを組んでいる、敵の連携の要であり——おそらくは『タイガーライダー』の指揮官も、あの機体のパイロットが務めている

のだろう。つまり、ランチャーを装備した機体を仕留めれば、敵の指揮系統は瓦解するのだ。

この機を逃す手は無かった。《セイバータイガー》達が持ち直し、再び『暴風』の如き連携攻撃を仕掛けてきたら、今度こそジェイ達はやられる。「ぬおおお！」と気迫を吐いたジェイのライガーは、ビームランチャーを背負った《セイバータイガー》目掛け跳躍した。口腔の『レーザーサーベル』を煌めかせ、敵機の喉元を食い破ろうと猛る。

ジェイの追撃に気づいたタイガーもまた、最大出力のビームランチャーで迎え撃った。あらかじめ展開されていたライガーの『エネルギーシールド』に、高密度ビームが突き刺さる。衝撃——そして閃光。《シールドライガー》と《セイバータイガー》、旧大戦より続くライバル機同士が、激突した。

——一瞬の交錯。

高出力ビームランチャーを至近距離で浴び、《シールドライガー》のEシールドジェネレーターがオーバーヒートしている。それでもセイバーの一撃を無力化する事には成功しており、攻撃を凌いだライガーの牙が、ビームランチャーを噛みちぎっていた。衝撃にタイガーは横転し、土砂に塗れながら苦悶の声を上げる。二大高速ゾイドの一騎打ち。その形勢は、ジェイの《シールドライガー》に傾いていた。

チラと、グロツク少尉の機体へと振り返る。「どうして助けた……？ ベック……」と、中破した《シールドライガー》から無線が入った。息も絶え絶えなグロツクの声から、いつもの威勢の良さは感じられないが——それでも、彼はまだ生きている。

「俺は、隊を危険に晒した。激情に駆られて一人突貫し、敵に付け入る隙を与えた。ここで死んでも、仕方がない男だった。なのに——」  
「仲間を助けるのに、理由なんていらなはずだ……グロツク少尉。後退してください、その《シールドライガー》はもう戦えない」

「……済まんッ」

失った左足の付け根から火花を散らして、死に態のグロツク機が起

き上がる。

無謀な賭けではあった。しかしジェイは——彼の下した判断は、仲間の危機を救う事も出来た。生き残るために必要な物は『偶然』や『運』だけではない、自らに纏わりつく死に抗おうという『心意気』だつて、戦場では立派な要因になり得る。それを実証できたジェイは、ようやくとこの戦争に向き合える気がした。

ビームランチャーを失った《セイバータイガー》がよると起き上がると、激情の双眸を向けてジェイの《シールドライガー》を見据える。他のタイガー達はコンボイ大尉率いる《コマンドウルフ》部隊の砲撃に追われて、援護を出せないでいる。正真正銘、一対一の格闘戦だ。

咆哮した《セイバータイガー》。己が牙・『キラーサーベル』を煌めかせてジェイのライガーへと飛び掛かると、その喉元へと食らいついた。《シールドライガー》も、負けじと爪を立ててタイガーに組みつき、『レーザーサーベル』でその肩口を抉る。纏れ合ったまま地面へと打ち付けられる、二体の獣。どちらも獰猛な獣型金属生命体をベースに開発された機体、格闘能力・闘争本能——その全てが互角だった。「グッ……ウウウ……い！」

激震に揺れるコクピットの中で、ジェイ・ベックは呻いた。外付けの武装を使った砲撃戦とは異なり、白兵戦においては『戦闘機械獣』そのものの闘争心が、大きく事を左右する。操縦桿は機体を焚き付ける『手綱』や『鞭』程度の役割しか果たさず、ライガーの攻撃の指向性はまだ影響を及ぼす事はない。爪牙にレーザーコートを通し決定打を上げてやれば、後はただひたすらに攻撃命令を出す——ジェイのできる事は、それだけであった。

それだけに、ゾイド乗りと機体の相性がもろに出るのも接近戦である。熟練の『タイガーライダー』と《セイバータイガー》は、その点に一部の粗もない。《シールドライガー》の装甲を噛みちぎり、打ちのめすと、渾身の頭突きでライガーの鼻先を潰した。レーザーサーベルの一本がへし折れ——コクピットにほど近い部分の損傷だ、衝撃でコンソールパネルが砕け、火花が吹き出す。

「ウワアアアッ！」

爆発がジェイの顔を焼き、絶叫する。

苦悶に仰け反ったジェイとライガーの隙を見逃す、『タイガーライダー』ではない。瞬時に腹部『三連衝撃砲』のトリガーを引き、至近距離の衝撃波を見舞ってくる。直撃。《シールドライガー》の同武装が粉々に砕け散り、機体胴体に大幅の亀裂が広がった。

大破しゆつくりと崩れ落ちる《シールドライガー》。出力がみるみる低下していく……ライガーの命は、長くは持たないだろう。

ここまでか——朦朧とする意識の中、ジェイが覚悟を決めた時だった。

「ベエーックー！」

グロック少尉の雄叫びが響いた。倒れ込んだジェイのライガーの影より、グロックの《シールドライガー》が飛び出すと、『レーザーサーベル』でセイバーの横っ腹に喰らい付く。メリメリと音を上げて装甲板が拉げ、のたうつ《セイバータイガー》。

その光景に顔を上げたジェイは、「グロック少尉——なぜ戻って来た？ そんな機体では無理だ！」と狼狽えた。事実、満身創痍のグロック機は、かなりのパワーダウンを起こしているらしい。暴れる《セイバータイガー》を御しきれず、動力部が炎上している。

「俺が生き残って、代わりにお前が死ぬのならば、隊の損失が変わらんだろうが！」

「——でも……ッ！」

「——借りを返すと言ってるんだ！ 抑えているうちに、早くやれエ——ッ！」

考える時間は無かった。メットを脱ぎ捨て、血まみれの額を拭いたジェイは、再び操縦桿を手に取る。

「《シールドライガー》、頼む……最期の力を、振り絞れ！」

渾身を込めて機体を始動すると、ライガーが全霊の力を振り絞って身を起こし、咆哮した。残った『レーザーサーベル』が発光する。狙うのは相手の頭脳——『タイガーライダー』の収まったコクピットがある、《セイバータイガー》の脳天を貫く。一撃で終わらせるには、そ

れしかない。

「——行けエエエツ！」

ジェイ・ベックの絶叫と共に、《シールドライガー》が突貫した。しかし——セイバーのパイロットは、相当の熟練パイロットなのである。暴れる《セイバータイガー》の背中に残された砲塔、『ビームランチャー』の副砲として背に装備されていた『ソリッドライフル』の照準を、ジェイ機に向けて来た。既にEシールドを失い、また機能停止寸前で機動力も損なわれているジェイのライガーに、避ける手立てはない。

(……やられる——ツ!?)

——閃光が、爆ぜた。《セイバタイガー》の『ソリッドライフル』が暴発し、機体背部のサブユニット全体を吹き飛ばす。

丸腰になった《セイバータイガー》の背後に、一体の《コマンドウルフ》が立っていた。後足を失い、また機体は踏み砕かれ土埃に塗れているものの、その装甲はコンボイの指揮下にあつて、唯一の白——共和国軍正規軍カラーを遺した、ツヴァインの《コマンドウルフ》だ。  
「ブルー・ブリッツ！ 今だア！」

ツヴァインが叫んだ。

グロツクもまた「やれえ、ベエエツク！」と声を重ねる。二人の気迫を後押しにして——ジェイの《シールドライガー》が牙を剥いた。

装甲化された《セイバータイガー》の頭蓋へと突き立てられた牙は、その脳天を貫き、タイガーの上顎まで貫通する。バチバチと火花を散らし、セイバーのカメラアイが砕ける。

やがて命の灯火が尽きたかのように、タイガーが噴煙を上げると——《シールドライガー》はさらに力を込めて、その頭を思い切り噛み砕いた。

## ⑫ 夜明け

ミューズの森で、共和国の砲撃部隊は防戦を続けていた。

森林の中を駆ける《ヘルキヤット》の総数は十二。帝国の主力部隊が突入してきたというには、あまりにも少ない数だ。おそらくはグラム湖畔で高速戦闘隊が遭遇しているという《セイバータイガー》共の随伴機が、先行して森に侵入し、かく乱してきているのだろう。敵は小型機だが、足の遅い電子専用ゾイドや重砲隊の機体では、相性の悪い相手である。現に索敵部隊の《ゴルドス》は鈍重で、装甲も貧弱な機体だ。先の襲撃で、既に全機ロストしていた。

ヘルキヤットの主砲『対ゾイド20m二連装ビーム砲』が、シャワーのように共和国軍の陣地を横断する。足の遅い重砲ゾイドに攻撃を当てるのなど、高速ゾイド乗りの彼らからすれば、演習より楽な作業であろう。《ゴドスキャノン》が、《カノントータス》が次々と破壊され、倒れ込んでいく。

「ぎゃーっ！」

すぐ隣の《カノントータス》が爆発し、エリサ・アノンは悲鳴を上げた。

装甲の堅牢な胴体部分にコクピットを格納するギミックを持つ《カノントータス》だが、既にエリサの機体には何発のレーザーが撃ち込まれ、弾痕と煤だらけになっている。反撃しようにも、機動性に優れる《ヘルキヤット》に、鈍足の《カノントータス》で砲撃を当てるのは、至難の業だ。一矢報いる前に撃墜されるのが、目に見えている。「どうしよう……私、どうすれば……」

焦燥し、うわ言を呟くエリサだが、切羽詰まった彼女の頭脳に妙案が降り立つことは無かった。眼前に《ヘルキヤット》が飛び出し、銃口を向ける。ロックオンされた事を告げる警告灯が点滅するも、《カノントータス》の瞬発力では躲せない。

やられる！ と、思わずエリサが目を伏せたその時であった。周囲の木々をなぎ倒して巨大な鉄蛇が傾れ込み、《ヘルキヤット》の火線を

遮ぎる。

「生き残りたいというのなら、戦場で怯むな！」

無線越しに一喝されて、エリサは面を上げた。撃ち込まれるビーム砲を弾く、重装甲の塊——それは『グラム駐屯地攻略作戦』の総司令官、マクシミリオン・ペガサス中佐の駆る《ゾイドゴジユラスMk-II》の尾であった。重砲隊の機体達を囲うように身を屈め、尻尾を巻いた《ゴジユラス》が、その全身で《ヘルキャット》の射撃を受け止めている。

「中佐……ペガサス司令官、無茶です！」

「狼狽えるな。《ゾイドゴジユラス》の装甲の前では、この程度の火力など無きにひとしい！」

エリサの声に応じたペガサスの声は、単なる強がりではない。事実《ヘルキャット》のレーザー機銃は、《ゴジユラス》の重装甲で固められたボディに、傷一つ付ける事が出来ていなかったのである。共和国最強を誇る機体は、伊達ではなかった。

味方を鼓舞するかのように振り返った《ゴジユラス》——そのキャノピーの奥にある双眸が緑色に輝くと、「今の内に態勢を立て直せ。反撃するのだ！」と扇動の声を上げるペガサス。

ペガサス中佐の声に、重砲隊のパイロット達は戸惑った。沈黙の後、「でも、《カノントータス》の脅力では、《ヘルキャット》を捕えられない。砲撃は当てられません」と、エリサが異を唱える。

「及び腰でいたら、出来るかもしれない事も不可能になってしまう。危機的状况にある時こそ、冷静になれ」

諭すように言ったペガサス中佐は、ゆっくりと《ゾイドゴジユラスMk-II》を起動させた。巨獣の始動を警戒し、再び森の中へ身を隠そうとした《ヘルキャット》達に、「さあ行くぞ、戦い方を教えてやる」と啖呵を切った中佐は、そのまま《ゴジユラスMk-II》の主砲のトリガーを引いた。

巨大な《ゾイドゴジユラス》の全高さえ上回る程の、長大なキャノン砲——通称『ゴジユラスキャノン』が火を吹いた。轟音と閃光が至近距離で爆ぜると周囲の木々が一瞬で消し飛ばされる。碌に狙いも

定めずに撃ち込まれた砲撃だが——その衝撃波だけで、小型の《ヘルキャット》の機体は半壊していた。闇に紛れていた何機かの機体がなぎ倒され、痙攣している。そうして身動きの取れなくなった機体を《ゴジュラス》が踏みつぶし、引き裂き、そして噛み砕いていく。

「小型ゾイドの性能で、この《ゾイドゴジュラス》を破壊できると思うな！」

ペガサス中佐が快哉を叫んだ。

《ゾイドゴジュラス》の活躍は、動揺の広がった共和国軍パイロット達の士気を見事に取り戻していた。「ペガサス司令官に続け！」と、兵達も再び操縦桿を取り、《ヘルキャット》達へと相對した。スピードで翻弄してくる《ヘルキャット》だが、火力に乏しい欠点がある。重装甲の砲撃用ゾイドなら、致命傷を受けなければ倒される事はない、根気強く砲撃を続ければ、やがては敵機を捉える事だつて有り得るはずだ。

「そうだ……私だつて、ボケつとしてちやダメなんだ」

エリサもまた、失いかけていた戦意を取り戻す。森の中を蠢く《ヘルキャット》の影を注視して、ゆっくりと機体を反転させていく。主砲で当てようと、思わなければ……ッ！」と、トリガーを引いた。『液冷式荷電粒子ビーム砲』が、轟音を上げて森を突つ切る。

《ヘルキャット》の未来位置を予測して撃ち放ったが、結果は不発。しかし、ビームの余波と熱量で、《ヘルキャット》の装甲が焼けただけだった。機体に施されたステルスコーティングが失われ、その姿が明るみに出る。

動揺したキャットに対して、今度は副砲の『二連装高速自動キャノン砲』を見舞う。照準設定を手動に切り替え、狙いを付けた一射。撃ち放たれた弾丸が、《ヘルキャット》の胴を撃ち貫いた。

「——やったあッ！」

エリサが高揚したのも束の間、今度は背後から衝撃が走る。

いつの間にやら回り込んでいた別の《ヘルキャット》に、足を撃ちぬかれた。自重の支えを失い、ガクンとつんのめった《カノントータ



ス》。「痛……、このお！」と、機体を反転させようとしたエリサだったが——元々獣型金属生命体と比べて臆病な機体だ、《カノントーラス》のコンバットシステムが、今の一撃で停止してしまっている。これではもう戦えない。

危機的な事態。追撃を見舞おうと銃座を向けた《ヘルキャット》だが——不意に地面が割れて、ヘビ型ゾイド《ステルスバイパー》が飛び出すと、至近距離から『40mmヘビーマシンガン』を叩き込んだ。砲撃がメインジェネレータを撃ち抜き暴発させ、《ヘルキャット》を炎上させる。

「《ステルスバイパー》！ シニアン小隊の機体か！」

基地の破壊工作を終えて、奇襲戦隊の機体に戻って来た。それだけではない。森を掻き分けて《シールドライガーDCS》、《コマンドウルフ》が姿を現すと、浮足立った《ヘルキャット》達を蹂躪する。

「コンボイ大尉の高速部隊……じゃあ——ッ」

エリサの眩きに応えるかの如く、無線が入った。「……アノン少尉、無事か？」と問うた、青年士官の声。コンボイ達に遅れて、満身創痍の《シールドライガー》が二機。そして傭兵ツヴァインの《コマンドウルフ》が、それを護衛するかのようには追従し、姿を現す。

モニターに映ったジェイの顔は、額を切って血だらけだった。「ベック少尉ツ、大丈夫ですか？」と、動揺したエリサだったが——ジェイ・ベックは比叡しながらも、どこか吹っ切れた様子で「ああ。俺、やれたよ」と微笑む。

ジェイの一撃で、ビームランチャーを背負った《セイバータイガー》は爆散し、崩れ落ちた。指揮官を失った『タイガーライダー』の部隊は、それまでの統率と息の合った連係を失い、やがて撤退していったのである。追撃を振り切り、高速戦闘隊は今、共和国の防衛線内へと戻って来たのだ。

「アノン少尉、ありがとう。君の言葉のおかげで、俺は戦えた」

頭を下げたジェイに、エリサは「え……？」と小首を傾げる。

ジェイは続けた。

「俺は、実戦ってやつを分かっていたいなかった。戦いの中で、敵も味方も次々に死んで行って、『死にたくない』とか、『殺されたくない』って気持ちに捕らわれていたけど——そんな後ろめたい気持ちじゃない、誰かを『守りたい』って思いが、俺を生き残らせてくれた。その気持ちに気づけたのは、少尉のおかげだよ」

「ベック少尉……」

晴れ晴れとしたジェイの表情は、この青年士官が先日まで苛まれていた『死の闇』から、解放された事を表していた。エリサはそれがまるで自分の事のように——そして彼女が見送った、『独立第二高速戦闘大隊』の唯一の生き残りの男の事のように思えて、歓喜した。オリンプスで地獄を見て失意に沈んだあの若手士官も、このジェイ・ベック少尉のように再起する事ができるかもしれない。エリサの心に引かかっていた悲劇は不治の病ではないと証明してくれた——それが、エリサには嬉しかった。

共和国軍の士気は高かった。高速戦闘隊、奇襲戦闘隊の参入によって優位性を失った《ヘルキャット》部隊に、勝ち目はなかったのは、言うまでもない。

——翌日。

『グラム駐屯地』制圧部隊は、任務完了の榮譽と共に『バラーン基地』へと凱旋した。今だ劣勢のヘリック共和国にとっては、全軍撤退の終焉を僅かばかり延命したに過ぎないかも知れない。しかし——戦場を知ったばかりの一人の青年士官にとっては、とても大きな——価値のある、『勝利』であった。

## 第二部：テクノロジ―

### ① プロローグ

——ZAC2099年 十月 オリンポス山頂

一面が、焔に包まれていた。

西方大陸エウロペの各地に点在する、古の古代遺跡達。<sup>いにしえ</sup>そこには、かつてこの惑星Ziで繁栄していたという旧人類『古代ゾイド人』達の、高度なテクノロジ―の断片が残されているという。古代文明の技術など、現行の戦争に何の影響を及ぼせようか。前線の兵たちは常日頃から首を傾げていたが——ガイロス帝国軍も、そしてヘリック共和国の司令部も、古代文明の技術に、異常なまでの拘りを見せていた。

此度の任務もそうであった。『エウロペの屋根』とも称されるオリンポス山の山頂、そこに存在する古代遺跡をガイロス帝国の手から奪い取り、叶わぬというのならば、いかなる犠牲を払ってでも、それを破壊する。

『彼』の所属する部隊に与えられた極秘任務は、「埃っぽい土くれのために命を捨てろ」という意味にも取れた。

だが——多大なる犠牲を払い、ようやくとたどり着いた目的の場所で、『彼』は全てを理解した。ガイロス帝国が西方大陸エウロペを侵略の中継地を選んだ理由、ヘリック共和国が、『彼』と仲間達に死を命じた理由。目の前に立ちはだかった巨大ゾイド——パイロットすら乗っていない、それどころか、機体フレームは上半身だけ、心臓部ゾイドコアすらむき出しの未完成さで動き出した、黒い『死竜』。その姿が、全てを物語ってくれたのだ。

——《デスザウラー》。

既に、動ける者は居なかった。

死竜《デスザウラー》の吐き出した光の渦が、全てを飲み込んだ。『彼』も、彼の仲間達も——それだけではない、遺跡を守っていた帝国守備隊も、両国が血眼で探し奪い合っていた古代遺跡さえも……全てが、狂える『死竜』の吐いた光の奔流に吞まれ、消えて行った。帝国の意図的な作戦ではない。おそらくは眼前で発生した両軍の小競り合いが、ゾイドの生存本能を刺激し、暴走させたのであろう。

そして、不完全なままでその力を振るった《デスザウラー》自身もまた、内部崩壊を起こして消滅しようとしている——このオリンポス山と、周辺に駐屯した両軍のゾイド部隊を巻き込んで。

これは神罰だ。

戦争に勝つという我欲のためだけに、眠っていた神秘の力を掘り起こそうとした両国に対する、神罰。だが、何も知らず、命じられるままに前線に立った自分と仲間達がその罰を浴びるのが、『彼』にはやるせなかった。既に愛機《コマンドウルフ》もコアに致命傷を負い、逃げる事さえ敵わない。

空しさに、彼は自然と涙をこぼしていた。

(……私が新兵の頃、兵隊は国のために死ぬ事が仕事だと教えられた)

通信回線から、ノイズ混じりの音声が届こえた。

よく知った声であった。『彼』が西方大陸に赴任し、この第二独立高速戦闘大隊へと配属されてからまだ二か月ほどだが——それでも、「この人になら着いていける」と、心から信頼できた上官。大隊長として皆を導き、幾度なく降りかかった危機に真っ先に飛び出して、部下を、そして母国を守って来た『最高のゾイド乗り』。

(だが——私はそれを、諸君らに言ったことは無い。人は、信念のために死ぬべきだと思うからだ。諸君らが帰還の見込みの薄いこの任務に同道する事を決めたのも、諸君らの信念に基づいた決断であったと思う)

涙を拭った『彼』は、焰の中で大隊長の乗機を探す。そして——自己崩壊の苦悶に喘ぐ《デスザウラー》の傍で、失った半身を庇いなが

ら這い進む青い《シールドライガー》を見つけて、目を剥いた。

スピーカー越し、（——だが今、敢えて言う）と続けた大隊長の言葉。その先に続く言を、『彼』は待った。

（ヘリックのためでも、己が矜持のためでもいい……諸君の愛機が指一本でも動くのならば——這ってでも進め。そして、奴のコアを噛み砕くのだ！）

未完成の『死竜』が限界に達し、メルトダウンを始める。膨大なエネルギーを秘めたゾイドコアが暴走し、周囲の大气さえ燃やし始めた。すぐ傍に居た《シールドライガー》も、内部から炎上し、紅蓮の炎に包まれていく。未だ繋がっている無線越しに、大隊長の苦しい息遣いが聞こえて、「——隊長ツ！ ダメだ！」と『彼』は叫んだ。

大隊長は、退かなかった。灼熱の焰の中を、神罰を下した煉獄の世界を《シールドライガー》は駆ける。そして——、

——『最高のゾイド乗り』とその愛機は、ついに全てを焼き尽くさんとする『死竜』の核を捉え、噛み砕いた。

両軍を巻き込み未曾有の被害をもたらすはずだった《デスザウラー》の自己崩壊は、莫大なエネルギーを生み出し続ける『ゾイドコア』を取り除かれたことで、どうにかオリンポス山麓付近の焼却という被害だけで留まった。だが——この戦いを知らぬ者達は、それが『最高のゾイド乗り』が命を賭して上げた功績のおかげであると、思いもよらぬのだろう。

救援に訪れた《ダブルソーダ》に、『彼』は救われた。独立第二高速戦闘大隊に所属した者の中でただ一人、『彼』だけが生き残った。それは持ち合わせた天運のおかげかもしれないし、ただの運命のいたずらのせいかも知れない。もしくは、『死竜』に立ち向かう勇氣を持てず、臆病風に吹かれたせい——放心状態の『彼』には、どうでも良い事であった。

燃え堕ちる『エウロペの屋根』を見下ろした彼には、一つだけ確かな思いがあった。この戦いで命を落とした、「名もなき英雄達」の志を

継ぎ、語り、伝えていく事。全てを見て来た『彼』にしかできない事をやる——それが『彼』に託された、ただ一つの使命であるように思えた。

——そして、もう一つ。

彼と共に救出された《コマンドウルフ》のコクピットブロック。ダウンしていたはずのメインコンピュータが突然起動し、謎のプログラムを表示する。帝国に占拠されたオリンポス山頂の『古代遺跡』。突入時、真っ先に古代遺跡のデータ解析を進めていた《コマンドウルフ》に、その断片が読み込まれていた。ウルフの命は失われていたが、コンピュータによる解析は尚も続き、それが今完了したのだ。

未知のプログラムを次々と表示していく、亡き愛機のメインモニタ——。『彼』はそれを撫でて、悟った。『彼』の同胞、『最高のゾイド乗り』達が命を賭して斬り落としたのは、戦いの終幕ではない——一層激しさを増す、激戦の火蓋であると。

## ② 『バラージュ』にて

——ZAC2100年 四月 ヘリック領・ミューズ森林地帯『バラージュ基地』

「……オーガノイドシステム？」

『バラージュ基地』に作られた兵舎の一階、その食堂兼コミュニケーションルームで、ジェイ・ベック少尉は聞き慣れない言葉に小首を傾げた。向かいの席に座ったグロック・ソードソール少尉、傭兵ツヴァインに目配せをするが、どちらも覚えのない響きらしい、「さあな、なんだそりゃ？」と肩を竦める。

「……なんでも、このエウロペ大陸に眠っている古代の技術なんだとか。ゾイドの戦闘力を飛躍的に上昇させるモノで、帝国も共和国も戦争の合間を縫いながら、あちこちの遺跡に調査部隊を送っているらしいですよ」

そして——答えたのは、エリサ・アノン少尉だ。三人の掛けたテーブルにコーヒーマグの注がれた銀のカップを並べると、自分もジェイ少尉の隣の席に座る。

『グラム駐屯地制圧作戦』から、既に半年が過ぎようとしていた。あれ以来、ミューズ森林地帯で大規模な戦闘は発生していない。急進的な支配地域拡大によってガイロス帝国軍の食料・弾薬の補給は滞り、またヘリック共和国もミューズの森で粘り強い抵抗を続けた。どちらにもじわじわと疲労が蓄積した結果、慢性的な膠着状態に陥ったわけである。小競り合い程度の戦闘は時たま発生したが——それでも、小休止というには長すぎる拮抗に、前線の兵士は大分気を緩めていた。

それは、ジェイ達にとっても同じことである。

307小隊は今、前線を離れてこの『バラージュ基地』へと召集されている。技術部が完成させた新武装・新型ゾイドを用いた装備の再編成のため、とのことだったが、既に一週間が経とうとしているのに、一向にその新装備を拜めていない。技術部とのブリーフィングにはコ

ンボイ大尉のみが出ずっぱりで、ジェイやツヴァインは勿論、小隊の副官であるグロックすら手持ち無沙汰の状態だ。自分達の命を預ける事になるゾイドすらお目に掛かれず、不貞腐れた小隊のメンバーは、以来ずっとこの兵舎食堂で時間を潰している。

そして、そんな一行と一緒に居るのが、『バラーヌ』の基地守備隊に配属替えとなったエリサ・アノン少尉だ。機体も碌に与えられず、コーヒーばかり仰いでいた三人の愚痴を耳に挟んで、こう声を掛けて来たのである。

ジェイ達の新しい装備には、関係部外秘の特殊技術を注いで開発された、新型の機体が混じっている、と。

グロックやツヴァインは無論の事——彼女と親しくしていたジェイでさえ、その胡散臭さに苦笑いした。すると、「ほ、本当ですよ。私、技術士官の方とコンボイ大尉がお話ししてるの、聞きましたもん」と、向きになってエリサが言い出したのが、自身が小耳に挟んだという『オーガノイドシステム』の話だった。

——新技術の有無の話はともかくとして、確かに昨今の両軍の動向は、不自然な点があった。

共和国軍を主戦場・『北エウロペ大陸』の東端まで追いつめていながら、先月ガイロス帝国軍の取った戦略は、ヘリックの影響力が乏しい『南エウロペ大陸』への派兵であった。普通に考えれば、むぎむぎ戦力を分散させるような愚策である。そして——驚く事に共和国軍もまた、真つ向からそれに相對しようとした。ロブ平野に敷かれた最終防衛部隊から一個大隊もの戦力を引き抜いて、南エウロペに派遣したのである。結果、隊は全滅。報せを受けた前線の将校たちは、司令部の采配に揃って首を傾げ、不信を露わにした。

エリサの話からそれを想起したジェイは、（——まさか、な）と頭を振る。ガイロス帝国が古代文明の技術欲しさに戦線を拡大し、あまつさえヘリックが、それを阻止しようとする戦略を割いた、などと言う話があり得るだろうか。ゴシップ誌に載る陰謀論染みた、荒唐無稽な妄想



だ——一瞬でも真剣に考えた自分が、気恥ずかしくなる。

そんなジェイの横、欠伸を噛み殺して、「——ねえよ」とエリサを一蹴したのは、ツヴァインだ。

「エウロペ人の俺が言うんだ。この大陸には吐いて捨てる程古代遺跡があるが——そこで朽ちてるのは、昔話に出てくるような突飛な神話だけさ。それがゾイドを強化して——あまつさえこの大戦争の行方を左右するような物だなんて、馬鹿げてるぜ」

ハッ、と鼻で笑ったツヴァインに、隣のグロツクも頷いて同意する。たたき上げの軍人、しかも実質剛健を地で行くグロツクだ、元よりこの手の噂話に興味はないらしい。目に見えて気落ちしたエリサは、「ベック少尉は……？」と、縋るような目を向けてジェイに問うた。

妙なタイミングで応える羽目になった、とジェイは頭を掻く。

無論彼だつて、碌に確認の取れていない情報に浮かれて右往左往するほど、未熟ではない。ただ——そんな『噂話』を楽しそうに語った、エリサの子供っぽい笑みが、ジェイは嫌いではない。だから、(少なくともここに居るメンツの中では)エリサと一番親しくしているであろう自分がそれを否定して、これ以上彼女をしよげさせたくないからである。

悩むフリをしながら時間を稼いだジェイに、思わぬ助け舟が出た。アナウンス音の後に、落ち着いた女性士官の声が響いて、

(特殊工作師団、307小隊所属のパイロットへ——至急、第三格納庫に集合せよ)

格納庫への招集。

どうやら、ようやつと307小隊の新装備とやらがお披露目されるらしい。スピーカー越しの声言い終えると同時、「……ようやくか」と欠伸をしたグロツク。残ったコーヒーをグイと飲み干すや、席を立ててジェイとツヴァインを手招く。

「百聞は一見に如かず……行くぞベック、ツヴァイン。ロストテクノロジー由来の極秘技術を、使つていようがいまいが——俺達が気にするのは一つ。信頼するに値する兵器かどうかだ」

兵舎から格納庫への直通の道は無く、一度外に出なければならぬ。エアコンの利いた食堂を一步出ると、刺すような熱気がジリと肌に纏わりつく。晴天に焼けたコンクリートの匂いと、周囲の木々の青臭さが混じって、独特の風味を醸す大気が鼻孔をくすぐる——気だるさに、ジェイは溜息を吐いた。西方大陸に赴任して早半年が経つ、未だこの極端な気候に慣れないでいる。

熱さにうんざりしているのは、グロック少尉も同じらしい。「——で、なんでお前さんが一緒に来る？」とエリサに問うた声は、普段のそれよりもドスが利いていた。

年少の女性士官は強面のグロックに怖じ気ながらも、「そうですね……でも、本当に『オーガノイドシステム』を積んだゾイドがあるのか、気になって」と、おずおずと応えた。つまりは、好奇心——あまりにも子供染みた返答をしたエリサに溜息を吐くと、グロックはそれ以上追及しなかった。

格納庫の中は、屋外以上に鬱屈している。日が当たらない代わりに、四方を壁に囲まれて、風もない。中に籠もった湿気と、ジャンク部品の山から漂う油臭さに酔いそうだ——薄暗い中をカラカラと回る換気扇を見ていると、余計に気だるさが増す。『バラージュ』は最前線のオンボロ駐屯地だ、仮に極秘開発のゾイドが存在していたとしても、いきなり此処に持ち込まれるのは有り得ないだろう。

「暑いなあ、何だこりゃ」

と、愚痴を言ったツヴァイン。同意しようとして口を開きかけたジェイだが、眼前に立った上官を見つけて、思いとどまる。黒髪を短く刈り上げた、長身痩躯の男性。小隊長スターク・コンボイが、整備兵、そして技術士官らしき男性と話し込んでいる。

「——コンボイ大尉っ。招集に応じて参上いたしました」

駆け足気味に寄ったジェイが敬礼をすると、部下たちに気づいたコンボイは「ん。ああ、よく来た」と歓迎した。語調こそいつも通りの温厚さだが——心無しか、難しそうな表情をしている。

逆に、揚々とした声で一行を歓迎したのが、コンボイの隣に居た技術士官だ。年齢は三十代前半、無雑作に伸びた金髪を一纏めに結い上

げ、油汚れに曇った眼鏡を掛けている、小太り気味の男。如何にも技術屋と言った風貌で、

「君達が歴戦の307小隊かつ。大分待たせてしまったて申し訳ない。ようやくと、君達に引き渡す新装備の調整が終わったんだ」

と、必要以上に張った声でジェイ達を歓迎する。

軽快なしゃべり方の技術士官が気に入らないのか、唸るように「前置きはいいい。早く装備を見せてくれ」と催促したグロック。一瞬呆けた技術士官だったが、すぐに笑顔を取り戻して、「ああ、いいとも」と頷き、整備兵達に灯りを付けるよう促した。

照らし出された格納庫内に――307小隊の新装備達が立ち並んでいた。

まずは、隊の主力《コマンドウルフ》。

それまで主砲として装備されていた、背部の『二連装ビーム砲座』兼ビークルユニットが撤去され、代わりに二門の長砲身ビーム砲と大型スタビライザーの複合ユニット『ロングレンジキャノン』が備えられている。重量増加によつて崩れた機体バランスは、後脚部に追加されたバーニアで補うのだろう。

「《コマンドウルフAU》――アーティ、と僕らは呼んでるけどね。運動性を落とさずに火力を増強したカスタム機だ。いずれは全軍の《コマンドウルフ》を、この仕様に転換していく」

自身満々に語る技術士官に対して、隊員の反応は様々だ。「ウルフの最大積載量を越えている。脚部のバーニアだけで補い切れるのか？」と訝しむグロック、「俺は嫌いじゃねえけどな。こういう思い切った改造は」と、ツヴァインは肯定的だった。

その奥には、《シールドライガー》が二機。一機はコンボイ大尉の搭乗していた《ダブルキャノンスペシャル》で、もう一機はノーマルタイプのままだが、その隣にもう一つ『ビームキャノンユニット』が準備されていた。《DCS》装備は火力増強と引き換えに若干の運動性低下を引き起こすため、任務によつて切り替えていけ、という事なのだろう。

技術士官の男が機体を順々に説明していく中、

「あの〜。それで、『オーガノイドシステム』を搭載してるのは、どれでしょうか……?」

と、エリサ・アノンが手を上げた。

話を遮られた技術士官がほかんと目を剥いて、その横、部外者の女性士官が着いてきていると気づいたコンボイは溜息を吐く。

——馬鹿、と、エリサを小突いたツヴァイン。

「んな眉唾モンの話、本気でするヤツが居るか。飯食つてた時のお喋りはもう終わって、俺達は今仕事なんだよ」

まくし立てられるように言われて、「す、すみませんッ」と頭を下げたエリサだったが――、

「ああ——それはこっちだ」

技術士官の男が返した返答に、今度はジェイ達が目を丸めた。

案内された先——二体の《シールドライガー》のさらに奥、格納庫の深奥に、見たことの無い蒼いライオン型ゾイドが立っていた。

大方の機体フレームは《シールドライガー》と同様だが——スラと伸びた鬣や延長した尾、両足を覆う装甲・冷却ユニットの大型化も相まって、シールドよりも一回り大きく見える。それでいて、青い装甲の中に所々白いラインが混じる様は気品があり、この機体が高速ゾイドのハイエンドモデルである事を強調していた。何よりも特徴的なのは腰部に装備された一対の『レーザブレード』で、これらの形質が合わさって構成した鋭利なシルエットは、力強さだけでなく優雅さすら感じさせる。

技術士官の男は、誇らしげにその『新型ゾイド』を見上げると、こう呟いた。

「オリンポスの古代遺跡より、独立第二高速戦闘大隊の生き残りが持ち帰ったオーバーテクノロジー、『オーガノイドシステム』……こいつは、それを解析し組み込んだ新型機の試作モデルさ——ロブ基地で完成した、十五機の《ブレードライガー》、そのうちの一つだよ」

### ③ システム

「《ブレードライガー》ねえ……」

格納庫に収められた新型ゾイドを見上げながら、ツヴァインがその名前を反芻する。

今回の『西方大陸戦争』に導入された両軍のゾイドは、大半が半世紀以上前の『中央大陸戦争』時代に設計されたゾイドを、現行技術で近代化改修した機体である。つまりこの《ブレードライガー》は、今大戦でヘリック共和国が完成させた、初めての新型機種と言っている。だから、ツヴァインだけではない、グロックもエリサも——無論ジエイも、物珍しさにマジマジと、新<sup>ニュー</sup>ライガーの姿を眺めていた。

——ただ一人、眉間に深い皺を刻みつけたコンボイ大尉を除いては。

「すごいだろう？ 完成して間もないゾイドだが……司令部の御達しでね、お偉いさんが選定した、前線での活躍目覚ましいパイロットが所属する部隊に、このアーリータイプを先行して引き渡している。その栄えある部隊の一つに、307小隊——正確に言えば、スターク・コンボイ大尉が選ばれたって訳さ」

大袈裟なくらいに抑揚をつけた技術士官の男。「すごいです、コンボイ大尉」と小さく拍手したエリサの横、ジエイは黙り込んだコンボイ小隊長に気づき、違和感を覚える。グロックも、大尉の難しい表情にきづいたのだろう、

「十五機、と言ったな。つまりコイツ、生産ロットの確立どころか、まだ正式採用の目途も立っていない実験機だろう？ そんなモノを実戦に出すつもりか？」

と疑問を呈した。

フフン、と誇らしげな笑みを見せた技術士官は、「今は、ね」と頷いたが——、

「だが、《ブレードライガー》は確実に、次期共和国軍の主力戦闘ゾイドの座を手にするだろう」

「確実に？ 何故そんな事が言える？」

鼻に掛かった物言いをする技術士官の態度が気になって、ジェイも食い気味に追及する。すると彼は、簡単な事さ、と前置きを言つて、「——強いからさ」と言い切つて見せた。

「この《ブレードライガー》は、これまでのゾイド戦の常識を覆す性能を秘めている。既存の高機動ゾイドを上回る運動性・速力に加えて、あの《ゾイドゴジユラス》にも比肩し得る戦闘能力を持っているんだ」「《ゾイドゴジユラス》と同等だと……？」

高速ゾイドの瞬発力と、共和国軍最強の《ゾイドゴジユラス》にも劣らぬパワー——それが技術屋特有の誇張表現でなければ、間違いない。共和国軍の最強ゾイドと言う事になる。だが、どうにも引つ掛かるのは、コンボイ大尉の深刻そうな表情だ。

意を決して、ジェイは「大尉……どうか為されましたか？」と、小隊長に問うてみた。

大尉は、応えない。口元に手を当てて暫く沈黙した後、件の技術士官の方へと目を遣つたジェイ。大尉は彼と幾度と無く新装備のブリーフィングを行っているのだ。何か知っているかも、と考えたジェイだが——その前に、小隊長が口を開いた。

「単刀直入に聞かせて貰う。『オーガノイドシステム』とは、一体なんだ？」

「——ッ」

この《ブレードライガー》に搭載されているという新技術。エリサが小耳に挟んだ話だと、西方大陸に残された古代文明に起因するロストテクノロジーだという。返答を待ったジェイ達は、一様に技術士官の男に目を遣る——男の軽薄そうな笑みが、すっかりと消えていた。

さらに言及するコンボイ大尉。

「……私は、このゾイドを操れなかった」

コンボイの言葉に——ジェイ達だけではない、整備兵達もざわめき出す。

スターク・コンボイは歴戦のパイロットだ。小隊の一員として彼の戦いを間近で見て来たジェイは、誰よりもそれを理解している。常に冷静沈着で、ゾイドの性能を限界まで引き出すだけの技量も併せ持つ——おそらくは、最高峰の高速ゾイド乗り『レオマスター』に次ぐ腕前の持ち主であろう。その大尉が「乗りこなせなかった」と言う——どういう意味なのか、理解できなかった。

ツヴァインが、「どういう事だよ、コンボイの旦那。コイツと旦那の相性がいまいちだったってのか？」と聞き返す。ゾイドは兵器であるが、同時に生物でもある。乗り手と機体の相性が合わずに不便を感じる、という話は、全くないわけではない。だが——「そんな次元の話ではないのだ」と、コンボイは頭を振った。

「稼働試験のために、二度ほどこの新型機のシートに座ったが……直後、気が狂いそうな程の破壊衝動が、私の心に流れ込んできた。すさまじいまでの凶暴性だ。とても人の手に負えるゾイドではない。それが『オーガノイドシステム』とやらに起因するというのはなら、なんらかの違法性があるのかとさえ疑えてくる——違うというのなら、私と、私の部下の前で説明してみろ」

日頃の穏やかさを微塵も感じさせぬ、厳しい物言いをする小隊長。その気迫に、周囲の空気が凍りつく。沈黙の中で、皆は一樣に技術士官の男を見遣った。

——ハッ、と短い溜息を吐いた技術士官の男は、数秒考え込んだ後、ようやくと重い口を開ける。

「何、と言われましてもね……『オーガノイドシステム』の全容は、未だ解明できていないのです。噂になっただけですが、システムは半年前にオリンポス山の古代遺跡より帰還した『高速戦闘隊の生き残り』が持ち帰ったデータを元にしています。が、解析出来たのは断片的なモノだけ——確実に言えるのは、ゾイドの生命力・パワー、そして大尉の御指摘通り、その『凶暴性』も大幅に引き上げるプログラムだという事」

「なんだそれは。つまりは未完成って事じゃないか」

技術士官の歯切れの悪い物言いに、グロツク少尉が憤慨した。「完

全な物になっていない兵器で実戦に出ると？ 我々はテストパイロットではない。命掛けの戦場で、信頼性の低い実験機で戦えなどと、無礼極まる！」と声を荒げた少尉。手厳しい物言いをされて、温厚な技術士官も「だからこそですよ」とムキになる。

『オーガノイドシステム』も、それを搭載した《ブレードライガー》が不完全なものも、こちらはよく分かってるんです。同時に開発した次世代小型機は、システムの機能を限定して安定化を図っていますが、そのやり方ではここまでの高性能は期待できない。でも……帝国に勝つためには、『オーガノイドシステム』を完成させるしかないんです」「システムを完成だとお……？」

訝しげに反芻したコンボイ大尉に技術士官は頷くと、「ガイロスとの戦力差を埋めるには、『オーガノイドシステム』を搭載した、次世代主力機の量産が不可欠だ」と念を押す。

「それほどまでに、このシステムは画期的なんです。《ブレードライガー》の総合性能は、従来の《シールドライガー》の二倍ないし三倍。後はその凶暴性から来る『操縦性の低下』を解決すれば、完成します。そうなれば——数の不利を鑑みても、共和国は勝てる」

技術士官の男の言葉に、一行は黙り込んだ。反論が無いと見て幾分冷静さを取り戻した男は、軽く咳払いをして調子を整えると、

「既に先月、レオマスター・『クレイジーアーサー』が、『ブレードライガー』一号機の実戦テストを行いました」と言葉を足す。

「無論、コンボイ大尉のおっしゃった『操縦性の難』には触れておりませんがね。容易ではないですが、全く人の手に負えないってレベルではないんです。だから今は、少しでも多くのデータが欲しい。アーリータイプを前線のパイロットに預けるのは、システムを搭載したゾイドを乗りこなすためのノウハウを確立してもらいたいからでもあります」

技術士官のいう理屈は理解できたが——コンボイ大尉は、険しい表情を崩さなかった。

無言のまま、ジェイは新型ゾイド《ブレードライガー》の機体を見



上げる。初めて目にした時は、その流線型のシルエットに厳かさを覚えていたが——先のコンボイの指摘を受けてから見ると、各部からせり出した鋭角的な意匠が、どこか異形にも思えた。未知の試作機、それもいわくつきの『古代技術』を搭載した機体……まったく興味が無い、と言えば嘘になるが。

そんな事を考えていると、格納庫内にけたましい非常警報が鳴った。

「ああ？　こんな時に敵襲かよ……？」

面倒くさそうに、ツヴァインがごちる。おそらくは帝国軍の斥候部隊がミューズの防衛線を擦り抜け、『バラヌ基地』の索敵領域に接触したのだろう。

「話は後だ……出撃するぞ」

と促したコンボイが、クルと踵を返すと、グロツク、ツヴァイン、そして他の小隊メンバーも後に続く。

「大尉、《ブレードライガー》に——」

技術士官の男が呼び止めるが、コンボイはそれを無視して《シールドライガーDCS》のコクピットへと向かっていた。「——大尉っ！」と、もう一度叫んだ技術士官だったが、

「実戦で、不確定要素は持ち込めない。《ブレードライガー》の動作テストは後日だ」

と、小隊長は冷たく突き放した。

二人の会話に数秒呆けていたジェイだ、気が付くと、小隊のメンバーと随分離れてしまっていた。「あつ」と慌てて《シールドライガー》二番機へと向かおうとしたが——既にその機体にはグロツク少尉が乗りこんでいる。次いで目をやった《コマンドウルフAU》のコクピットにも、全て人影が収まっており、続々とエンジンに火が入っていく。

しどろもどろしたジェイは、《シールドライガーDCS》の足元まで駆けると、そのコクピットを見上げて、「隊長、自分はどれに乗れば——

「と叫んだ。が……聞こえていないのか、それとも意図的に無視したのか——コンボイ大尉はそのまま機体を始動させ、出撃してしまう。」

小隊の構成員で、ジェイ一人だけ格納庫に取り残されてしまった。

——とんだ災難だ、と溜息を吐く。傍に控えていたエリサが、「いいんですか？ ベック少尉、一緒に行かなくて……」と、心配そうに覗き込んだが——良いも何も、乗れるゾイドが無ければ出撃できない。出撃命令の掛かった兵士が出撃しないなどと、言語道断。情けなさに、ジェイは眩暈を覚えた。

行く宛ても決めぬまま、格納庫を出ようと思ったジェイ——呆然と仰いだ視界の中に、見慣れないライオン型ゾイドが飛び込んできた。《ブレードライガー》、307小隊に配備されていたながら、『実戦には使えぬ』と断じられた新型機。

それを見つめたジェイは——ふと、単純な事を思い立つ。

《ブレードライガー》の足元に居たあの技術士官も、同じ事を考えていたのだろう。数秒ジェイの顔を見つめた後、ニコリと愛想笑いを浮かべると、

「——出撃するかい？ この《ブレードライガー》で」と、冗談めかして言った。

#### ④ ブレードライガー（前編）

技術士官の操作でキャノピーが開くと、ジエイは《ブレードライガー》の真新しいコクピットを、興味深げに覗き込んだ。このクラスタンデムタイプのゾイドでは珍しい複座型のコクピットで、メインシートのすぐ後ろに後部座席が設けられている。一見して、搭載された武装はベース機の《シールドライガー》よりも少ない。分担が必要な程複雑な火器管制システムを持っているようには見えないが——疑問に思ったジエイに、「ああ」と技術士官が説明する。

「さっきも言った通り、《ブレードライガー》は現状、操作性に難がある機体だからね——パイロット・機体のコンディションチェックと稼働データのモニタリング、そして方が一の時に後方まで機体を引っ張るためのアシスタントが同乗できるよう、アーリータイプは後部座席が備えられているんだ。最初の実戦テストは『レオマスター』が担当したから使わなかったけれどね、君には必要だろう」

なるほど確かに、この『新型ゾイド』はあのスターク・コンボイ大尉をして「乗りこなせない」とまで言わしめたじゃや馬だ。技術士官の物言いは、普段なら自分の腕を軽んじられたようで気にするだろうが、この場合は気にならなかった。むしろそれくらいの保険が無ければ、未知の実験機を預かるのは恐れ多いだろう。

コンバットシステムを起動させた技術士官が、「よし、ベック少尉はメインシートに乗ってくれ。後ろにボクが同乗して、モニタリングを——」と言いかけた時だった。二人の後ろから背伸びして新型ライガーのコクピットを覗き込んでいたエリサが、

「あの——同乗するの、私がやってもいいですか？」  
と質問した。

想定外の提案に、ジエイは目を丸める。同じく驚いた技術士官が、「まあ……難しい事は無いから、構わないと言えば構わないけれど……」と口ごもると、エリサは「いいんですか？ やったっ」と手を合わせて、パタパタと後ろ座席に乗り込んだ。

腑に落ちない、という風に、技術士官の男はしばらく立ちすくんで

いたが——万が一の際のサブパイロットとしては、技術者の自分よりエリサの方が適任だ、とでも判断したのだろう、それ以上の言及はしなかった。彼が頷くのを見取って、ジェイもメインシートに座る。

「アノン少尉、どうして——」

キョトンとしたジェイ。「やつぱり気になるじゃないですか、『オーガノイドシステム』搭載の新型ゾイド」と、エリサは照れながら答える。その瞳は、真新しい新型ゾイドのコクピットに興味津々、と言った風に、キラキラと光りを湛えていた。「アノン少尉は、ゾイドが好きなんだ」と問うたジェイに、エリサは満面の笑みで頷くと、

「ジェイ少尉ならお願いしても許してくれるかなって思っ……ダメでしたか？」

「いやあ——そんなことは無いけれど」

勿論、ダメなわけがない。が——キャノピーをロックすると外気が遮断されて、コクピットにエリサの存在が充満する。女性らしい柔らかな香りが鼻孔を擦って、ジェイは妙にそわそわした。これから実戦に出るというのに、相応しくない高揚感が満ち溢れる。

通信回線が開いて、「聞こえるかい？ ベック少尉、アノン少尉」と、あの技術士官の声が鳴った。

「通信は基本的にアシスタント——アノン少尉の方に振るから、ベック少尉は操縦に集中してくれ。繰り返す言うが、かなり面倒な機体だ。無理はしないでくれよ」

「了解です。……えーと……」

口ごもるエリサ。そう言えば、こんなにも長話をしているのに、まだこの技術士官の名前を聞いていなかった。小太り気味の技術者は、ハハア、と苦笑いすると、「ボクの名前はレイモンド。ヘリック共和国軍属技術局・第三研究室主任、レイモンド・リボリーだよ」と自己紹介した。

レイモンドさん、と小声で名を反芻したジェイは、モニターに向けてグツと親指を立てると、操縦桿を握り直し力強く機体を始動する。

「新型機、確かに預かった。レイモンド主任——ジェイ・ベック少尉、《ブレードライガー》、出撃する！」

「——なんだ、このゾイドは？」

『バラーン基地』から数キロ程離れた森の中で、先に出撃していた307小隊は未知の帝国軍ゾイド部隊と遭遇していた。敵部隊を構成しているのは、小型のヴェロキラプトル型ゾイド——あずき色の外殻にダークオリーブのカメラアイは、今戦争でガイロス帝国軍が投入した機体に共通する色調だ、ガイロス軍であるのは間違いない。

多い。森を往く敵小型ゾイドは、十五はいる。さらに問題は、一機一機のそのパワーだ。未知のヴェロキラプトル型ゾイドはコンボイ達に遭遇するなり、恐るべきスピードで距離を詰めると、背に背負った小型の曲刀を駆使して早々に《コマンドウルフ》二機を中破させたのだ。

小型機が白兵戦で、体躯で勝る《コマンドウルフ》を破った——目を疑うような光景に、グロツクもツヴァインも、コンボイ小隊長も戦慄する。森の中を縦横無尽に掛ける敵機の瞬発力は、《イグアン》や《モルガ》の比ではない。「気を付ける。こいつらは帝国の新型だ！」と警鐘を鳴らしたコンボイ大尉は、敵機から感じる妙なプレッシャーに覚えがあった。

(似ている——『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドの……《ブレイドライガー》の感覚に)

まさか、と、嫌な予感が過ぎる。ガイロス帝国もまた、西方大陸に眠るロストテクノロジーに執着し、研究を続けていたと聞く。彼らの執念が実を結び、ヘリツクより先にシステムを実用化し、それを搭載した新型量産機を完成させたのだとしたら……。

未知のヴェロキラプトル型ゾイドの武装は、小型機らしいシンプルなものだ。両の腕に、帝国軍共通の汎用ビームガンをアタッチメントしているだけで、他に火器は無い。しかし——それを補って余りある俊敏性と格闘能力、そして闘争本能を持ち合わせている。

邂逅早々、ツヴァインは「なるほどな……」と理解した。307小隊の《コマンドウルフ》に施された強化は、確かに実戦的なモノだ。白

兵戦・瞬発力で《コマンドウルフ》を上回る小型機の出現——まるで予期していたかのように、《コマンドウルフAU》にはそれに対処できる装備が与えられている。

「距離を取るしかネエな！ 砲撃戦に持ち込んで片付ける！」

強化されたコマンドの主砲『ロングレンジキャノン』を撃ち放つ。二発の光弾が同時に放たれて——一発を躲した敵機だが、もう一撃の余波を受け、小破する。かなりの攻撃力。それに、多少のクセがあるものの、増設されたバーニアのおかげで、《コマンド》の機動力は以前と遜色ない。上手く距離を稼いで『ロングレンジキャノン』を見舞えば、勝てない相手ではない。

《シールドライガー》のグロツクも、果敢にヴェロキラプトル型を攻め立てる。「強いつて言っても、所詮は小型機だろうがあー！」と猛り、ライガーの爪で一機を蹴り飛ばした。宙空を舞ったヴェロキラプトルは、添え立った木の幹に激突した。小型機の強度ならば、即座にコマンドシステムが停止するレベルの衝撃だ。「よし、次イ！」とグロツクの機体が背を向けた時だった。

——ムクリと起き上がった新型の小型ゾイドが、その爪で《シールドライガー》の後ろ足を挟む。

「がはあー！」

ガクンと傾いたコクピットの中で、グロツクが悶える。不意打ちを受けて生まれた隙に、次々と新型小型機が群がった。さしもの《シールドライガー》も、多勢に無勢。振り切れないまま、徐々にパワーダウンを起こしていく。

その光景に、307小隊のメンバーは、「なんて生命力だ……」と戦慄した。コンボイの疑念は確信に変わる。『オーガノイドシステム』を搭載した帝国ゾイドは、既に完成していた。それが、最前線のミューズにまで姿を現したのだ。そうならば、拮抗していた前線は瞬くまに打ち砕かれるだろう。

「グロツク少尉！」

《コマンドウルフ》のパイロット達が、副官を案じて叫ぶ。助けようにも、コマンドの格闘性能を持ってしても、敵新型は振り払えない。

かといってビームを見舞えば、囲まれたグロツク機に誘爆し、巻き込んでしまうだろう。さしものツヴァインも、普段の飄々とした風を潜め、「グロツク！……クソ、どうすりゃいい!？」と狼狽える。

「——くッ！」

救出できる見込みがあるのは、パワーで勝る《シールドライガーD CS》。だが、もし突っ込んだ挙句に囲まれてしまえば、ミイラ取りがミイラになる可能性もある。いちかばちか——決死の覚悟でコンボイが、前に出ようとした時だった。

後方から、鮮やかなブルーの機体が飛び出す——速い。鬱蒼とした木々の中を疾走するそれは、周囲の木枝をへし折りながら、一直線に帝国小型機の群れに飛び込んだ。

「アレは——ッ」

グロツク機に群がったガイロスの新型小型機を、噛み砕き、爪で穿ち——そしてその臂力で引き倒し、踏みつぶしていく蒼きゾイド。あまりにも荒々しい戦い方だ、人が乗っているとは思えない。野生の獣、という表現でも足りぬ『獰猛さ』、『執拗さ』を持って、蒼きゾイドはヴェロキラプトルの群れを振り払った。

次々と蹴散らされ数を減らしたヴェロキラプトル達が、動揺して密集する。それをギロと睥睨した新型ライガーは、ボロ雑巾のように千切れたヴェロキラプトルの残骸を喰えると、残った群れの先頭に向かって放り投げた。地べたに打ち付けられて粉々になる残骸を見遣りながら、新型小型機達はさらに後退する。

ライオン型ゾイド——だが、《シールドライガー》ではない。鬱蒼とした森の中にあつて一際鮮やかな、ブルーとホワイトの装甲。頭部からスラと伸びたブレードアンテナとエアロバランサー、そして背に背負った二本の長刀が合わさって作り出す、流線型のフォルム——見紛うことは無い、つい先ほど一行が格納庫で眺めていた新型ゾイドだ。

「ブレード、ライガー……ッ」

ヨロと起き上がった《シールドライガー》のコクピットで、グロツ

ク少尉がその名を呼んだ。



## ⑤ ブレードライガー（後編）

言い得ぬ程の緊張感に、ジェイ・ベック少尉は焦燥していた。

ガイロス軍と邂逅したからではない。敵は未知の新型機であったが、所詮は小型機だ。最新鋭の高速ゾイドを預けられている今、万に一つも不覚を取る事は無いだろう。現に——先に仕掛けた格闘攻撃で、既に敵部隊の半分を蹴散らしている。新世代ゾイド《ブレードライガー》の性能は本物だ。

（だが——ッ）

問題は、その《ブレードライガー》にある。

真つ直ぐ歩かせるほど困難な程の、凄まじい自我を持ったゾイドだった。後部座席に乗っていたエリサも、何度「わっ」とか「ひゃっ」とか悲鳴を上げたか分からない。戦域に赴くだけで、かなりの気を割いたのだが——こうして敵ゾイドと相對した時、更なる異変がジェイを襲った。意識の全てを塗り替えられそうな程の闘争心が、ジェイの心に流れ込んできたのだ。

「《ブレードライガー》？ 誰が乗っている!？」

コンボイ大尉からの通信だ。「大尉、ご無事ですか?」と、エリサが応じる。

「君は確か、エリサ・アノン少尉……。君が操縦しているのか?」

「いいえ、《ブレードライガー》のパイロットはジェイ・ベック少尉です。私はアシスタントで……」

応え終わるとエリサは、キャノピー越しに見える未知の小型ゾイドに、「このゾイド達は——帝国軍の新型?」と首を傾げた。《ブレードライガー》のパワーに圧倒されて退いたヴェロキラプトル型ゾイドの群れだが、その闘争心はまだ失われていない。隙あらばライガーに飛び掛かり反撃を見舞おうと、機を窺っている。

「……気を付ける。小型機だが、伊達ではない。格闘戦では《コマンドウルフ》すら下すゾイドだ」

起き上がったジェイ機の横で、ゆつくりと起き上がった《シールドライガー》、その無線からグロックが告げた。《ブレードライガー》か

ら送られたモニター映像を目にしたのだろう、基地に残った技術士官・レイモンドが、「こいつらは《レブラプター》だっ」と声を上げて、

「帝国軍が新たに導入した新型量産機。一月前に南エウロペ・エルガイル海岸で、《ゾイドゴジュラス》すら潰して見せた機体だ。もう最前線まで配備が進んでいたのか、油断するなよっ」

「了解です——だそうです、ベック少尉！」

話は全て聞いていたが——ジェイは返答しなかった。否、できなかった。絶えず流れ込んで来る狂気に吞まれぬよう、堪えるのに精いっぱいだった。

苛立ちを紛らわすかのように、その前足で幾度も地面を蹴りつけていた《ブレードライガー》が、帝国の新型——《レブラプター》達に向かつて、思い切り吼えた。大気を揺すり、周囲の木々すらも震わせる轟咆が、ミューズの森中に木霊した。

ライガーの雄叫びが、戦いの合図となった。《レブラプター》達も負けじと咆哮を返すと、森の中に散って四方から《ブレードライガー》を狙う。視線だけ動かして、敵機の動きを追ったジェイは、「コンボイ大尉達は、後退してください！」と叫んだ。一人でやる——そう決めたのは、慢心したわけではない。ジェイは機体を御しきれていない、下手をすればこの《ブレードライガー》は、味方機にすら襲い掛かりかねない。

コントロールパネルを操作する。ジェイの目算通り、《ブレードライガー》の火器はシンプルだが——腹部に装備された『AZ二連装ショックカノン』、ブレード基部に配置された『パルスレーザーガン』、共に最新規格のモノだ。威力・射程共に優秀で、この密林の中でも十分に対応できる。

よし、とジェイがトリガーに指を掛けた時だった。

ガクン、と機体が揺れて、ライガーが一目散に疾走を掛ける。ジェイは、アクセルを踏み込んでいない——操縦者の意図を抜きにして、ライガーは動き始めていた。

「うおッ!？」

「きやつ!？」

コクピットの二人が、動揺に呻いた。「どうなってる!？」とブレーキペダルを踏み込んだジェイだが、止まらない。関節から火花を散らしながら、ライガーは一直線に敵機を直指した。真正面から《レブラプター》を捉えると、思い切り頭突きを見舞って跳ね飛ばす。めちやくちやに拉げた《レブラプター》のボディが、ライガーの凄まじい膂力を物語っている——そして、その衝撃は、もろにジェイ達のコクピットを揺さぶった。

二機目の《レブラプター》が飛び出して、《ブレードライガー》の後ろ脚に爪を立てた。が、怯まない。逆に、自身の間合いへと入った敵機を、前足の『ストライククロー』で、思い切り殴打した。粉々に砕けた《レブラプター》の頭部——その瓦礫の中に、挽肉見たく千切れた敵パイロットの躰が混ざっているのを、ジェイはもろに見てしまう。

(なんだこのゾイドは——全部、格闘戦で倒すつもりかつ)

操縦が、全くとっていいほど聞かない。コンボイ大尉が乗りこなせなかった、というのは、比喩ではない。文字通りの意味で、『操れない』のである。「ベック少尉、もうちよつとゆっくり……っ!」とエリサが喘いだ——どうしようもないのだ。どうすればこの機体を制御できるのか、全く見当がつかない。

「《ブレードライガー》、俺の操縦に従えっ!」

激震に見舞われるコクピットの中で、ジェイは叫んだ。だが、反応は無い。むしろ一層の闘争本能がジェイに流れ込み、眩暈が起ころ。まるで、パイロットとして介入する事を全否定されたかのような感覚だった。

そつちがその気なら——っ!

《ブレードライガー》が跳躍して 空中から《レブラプター》を踏みつぶす。グルと振り返って次の獲物に狙いを定めたライガーが駆け出そうとした時——ジェイは『二連装ショックカノン』のトリガーを引いた。射程・威力共に大幅に強化された衝撃砲が、ライガーが動く

よりも先に《レブラプター》を吹き飛ばした。

操作できないというのなら、好きにさせればいい。《ブレードライガー》が格闘戦を繰り返すのならば、その動きに合わせて最適な武装を選択し、獲物を横取りしてやる。ゾイド相手に何を向きになっっているのかとも思うが——それでもジエイは、ライガーに否定された事を認めたくなかった。

『オーガノイドシステム』だかなんだか知らないが——今、お前のパイロットは、この俺のはずっ」

残る《レブラプター》は一機。

狙いを定めた《ブレードライガー》が駆け出すと同時に、ジエイは新たに追加された二本の操縦桿を引く。ライガーの腰部装甲が開閉して——背負っていた二本の長剣『レーザーブレード』が展開、機体と水平に構えられた。エネルギーが満ちたかと思うと、それまでの主兵装……口腔の『レーザーサーベル』とは比べものにならない程の高出力ビームコートが、ブレードを覆う。

（——もつと右に寄れ。アイツを仕留めたいって言うなら、コイツで爽快にやらせてやるからっ！）

操縦桿を振るって、ライガーの機体を誘導する。手綱に逆らう暴れ馬の如く、《ブレードライガー》が身を捻ると——『レーザーブレード』の正面に、丁度《レブラプター》の躰が立った。これならば当たる、と判断して、今度は背部に装備された加速機『ロケットブースター』に火を入れる。すさまじい衝撃。ジエイの躰が無理やりにシートに叩きつけられるほどの推力だ。

瞬間的に加速した《ブレードライガ》の機体が、彗星と変わる——ジエイは叫んだ。

「——行けエッ！」

——一閃。

一陣の疾風の如く擦り抜けた《ブレードライガー》の光刃は、周囲の高木ごと《レブラプター》の上半身を攫って行った。何が起こった

のか分からない、と言う風に立ち尽くした《レブラプター》の下半身は、千切れ飛んだ上半身が地面に激突すると同時に、ゆっくりと崩れ落ち——爆散した。

猛獣型ゾイド特有の、猛々しい雄叫びが響く。

戦いの昂りが治まらないとでも言うように、残骸の散らばる戦場の中で《ブレードライガー》が咆哮していた。戦線から外れて戦いを見守っていたコンボイ達は、その様子を呆然と見つめている。

皆の意を代弁するかのように、ツヴァインがごちた。

「なんてゾイドだ。敵の新型もそうだが……《ブレードライガー》、あの凶暴性は化けモンだぜ。とても量産できる代物じゃねえよ」

「《ブレードライガー》の戦闘データは取っているんだろう……司令部も、ある程度情報が集まれば考え直すだろうな」

溜息を吐いたコンボイ小隊長は、「帰投するぞ」と機体を反転させた。各々、新世代ゾイドについて論じたい思いはあれど——その指示に従って『バラヌ基地』へと戻っていく。

「——アノン少尉、大丈夫か？」

片頭痛に頭を抑えながら、ジェイは後部座席を振り変えた。返事は無く、《ブレードライガー》の獣染みた挙動で昏倒したのか、と心配したが——そうではないらしい。口元を手で押さえたエリサは、涙を湛えた目でジェイを見ると、「舌噛んだ……」と、か細い声で伝える。恐る恐る手を退けて、チロと見せた彼女の舌先は、確かに少し切れていた。

パイロットの負担を完全に無視した滅茶苦茶な動きだったのだ、それぐらいで済んだのは朗報だろう。相変わらず獰猛なライガーだが、敵が居なくなつて、少しは落ち着いたらいい。安堵したジェイの眼前、通信回線が開いて、モニターにレイモンドの顔が映る。

「——終わったようだね。どうだい？ 《ブレードライガー》の力は？」

「どうって……」

今の戦いを見ていけば、ジェイ達が手放しに褒められないのは分かっているだろうに——レイモンドは、相当この新型ライガーに入れ込んでいるらしい。彼の気を慮ってか、「えーと、すごく気分屋なゾイドですね」と濁したエリサ。すると技術士官の男はハハ、と笑って、「面白い偶然だなあ、一号機のテストをした『レオマスター』も、『ブレードライガー』をそう評価したって聞いたよ。確かに『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドは、乗り手に反抗的になる……でも、それを解決した時——その圧倒的力を完全に制御出来た時、システムは最高の武器となるんだ」

熱弁するレイモンドにジェイは曖昧な返事を返すことしかできないが——彼は気に留めなかったらしい。「君達が『ブレードライガー』を動かしてくれたおかげで、コンボイ大尉も考えを改めてくれたかもしれない。ありがとう。戻ってゆっくり休んでくれ」と、通信を締めた。

久方振りの実戦を終えて、ジェイは『バラーン』に帰還した。戻って早々アナウンスが掛かり、エリサ・アノン少尉が指令室に呼ばれる。『レブラプター』の襲撃に際して、基地の守備隊も戦闘配置に付いているらしい——任を放り出して遊び歩いていたと思われたのだろう、レイモンド主任が事態に気づいて弁解に行くまでの間、たつぷりとお説教を喰らっていた。

## ⑥ 指令

——ZAC2100年 五月 ミューズ森林地帯・バラーンヌ基地

さらに、一月の時間が過ぎた。

この月、ヘリック共和国軍が絶対不利と目されてきた西方『大陸戦争』に、転機が訪れた。きっかけは、空戦。共和国軍が《ブレードライガー》と同時期に、極秘裏に開発していたプテラノドン型空戦ゾイド《ストームソーダー》がロールアウトし、帝国空軍からエウロペの制空権を奪取したのである。《レドラー》を上回る大型飛行ゾイドであり、さらに『オーガノイドシステム』も搭載した、超高性能戦闘機。ヘリック空軍の主力戦闘機として採用され、順調に配備数を増やしている。

空軍だけではない。共和国軍の主力たる強襲戦闘隊にも、同じく『オーガノイドシステム』を搭載した小型ゾイド《ガンズナイパー》が配備されている。先んじてガイロス帝国が実戦投入した《レブラプター》と同様、エウロペ大陸に広く生息するヴェロキラプトル型金属生命体を元に製造された機体で、高い俊敏性と射撃能力を重視した武装配置でバランスのとれたスペックを実現している。

二機の新世代ゾイドが配備されたことで、劣性の共和国に、少しずつ巻き返しの展望が見えてきたのである。

ヘリック共和国軍の『オーガノイドシステム』搭載機による主力機種転換」は、順調に進んでいるように思えた——ただ一つ、《ブレードライガー》を除いて。

『《ストームソーダー》も《ガンズナイパー》も、『オーガノイドシステム』の機能を大幅に限定した事で、操作性の問題を改善している。前者は元々デリケートな飛行ゾイドだ、完全に解明されていないテクノロジーを機体中枢に導入するのはリスクが大きいいし、広く兵達に普及するであろう後者——量産小型ゾイドも、信頼性を高めるために冒険

を控えるというのは、堅実な判断と言えるだろうね」

バラヌ基地の格納庫にズラと並んだ各ゾイド達を眺めながら、レイモンド主任が考察を言った。307小隊の機体達の一番端に置かれた、真新しいライオン型ゾイドに目を留めると、「——対してこの『ブレードライガー』は、『オーガノイドシステム』の占める比重が大きいんだ」と続ける。ジェイ、そしてエリサの二人がコーヒーを啜りながらそれを聞いた。

「『ブレードライガー』は現行ゾイド『シールドライガー』をベースにすることで、開発に掛かる費用・時間、そして人手を大幅に削減している。わが軍における『オーガノイドシステム』搭載ゾイド・第一号で、他の二機以上に、システムが期待に及ぼす影響を顕彰するための『実験機』としての側面が強いからだ。代わりに解析出来た『オーガノイドシステム』のプログラムを、出来る限り実装してあるからね、システムの弊害も多く、量産兵器としてはかなり不資格だが——総合的な戦闘能力では、『ストームソーダー』や『ガンスナイパー』よりもさらに上だ」

「……実験機、ですか？」

反芻したエリサに頷くと、「無論、その強さに目を付けた司令部や技術者——ボクもその一人だけだね……とにかく、そういう人の後押しもあって、コイツも次世代量産機のコンペに参加する事にはなっていないけど」とレイモンド。

コーヒー飲み干したジェイは、「で、実際の所どうなんだ？」と、太りの技術士官に所感を聞いた。数秒考えて、レイモンドは難しいね、と頭を振る。

「さっきも言った通り、基本的なフレームを『シールドライガー』と共有しているから、量産するのは難しくないけれど……数を揃えた所で、乗りこなせるのはエースパイロットでも十人に一人としない。一番見込みがある解決策は、『オーガノイドシステム』のレベルにリミッターを掛ける、というアイデアだけど……根本的な解決にはならないし、今みたいな圧倒的な戦闘力を失う可能性も高い。そうになると、やっぱり量産機としては『不資格』だ」



つまり、現状のオーガノイド技術では、『ブレードライガー』で露呈した欠点を覆す事は出来ない、という事になる——レイモンド主任の解説を聞きながら、ジェイ・ベック少尉は自身の新たな愛機となったそれを、感慨深げに見上げた。

——一月前。

『レブラプター』部隊との戦闘を終えた後、『ブレードライガー』に関する処遇を話し合った。機体の実戦テストを兼ねて307小隊に（——もつと正確に言えばコンボイ小隊長に）預けられた『ブレードライガー』だが、コンボイはおろか隊のほぼ全員が、真つ直ぐ歩かせることすらできなかつた。あまりに扱いづらい事から、代わりに別の機体を回してもらおうよう要請する事さえ検討されたが——それに待ったを掛けたのが、他ならぬジェイだつた。

自分でも何故かは分からない。だが、あの日初めてコクピットに座ってから、ジェイはこの私の強すぎる『新型ゾイド』に、奇妙な愛着を感じていたのだ。

だから、隊の大半が見限っていた状況にあつて、ジェイはダメ元で「自分が乗りたい」と志願してみたのである。元々は小隊長・コンボイの実力が評価されて送られてきた最新鋭機だ、それを掠め取るような真似に後ろめたさは覚えたものの——物が物だつたというのもあり、隊のメンバーの関心は、驚くほどに低かつた。その場では「……検討しておく」と濁したコンボイも、次の日には正式にジェイを『ブレードライガー』のパイロットとして登録してくれた。

以来ほとんど毎日のように、ジェイはレイモンドの指揮の元、『ブレードライガー』の稼働試験を重ねている。

ツヴァインやグロツクは、ジェイを物好きと称した。コンボイ隊長は表だって否定はしなかつたものの、やはり期待はしていなかつたのだろう、「無理はするな。欠陥品に入れ込み過ぎてお前が軀を壊したら、意味が無かろう」と突き放した言い方をする。唯一、エリサだけは暇な時間にジェイ達に会いに来て、時たまアシスタントとしてライガーに同乗してくれたが。

相も変わらず、コクピットに着いた瞬間に強烈な破壊衝動が襲ってくるし、操縦桿は殆んど意味を為さず、予定通りのテストを行うこともままならない。それでもジエイは訓練を続けた。獯猛さの奥に、《ブレードライガー》が何か大きな感情を秘めている気がしたから……などと言うのは、自分のセンチメンタルかもしれないが。

夕時に差し掛かって、格納庫に斜陽が差す。

「今日はこれぐらいにしよう。ボクはいつまでやっても構わないけれどね、君達パイロットは、夜だつて休めるとは限らないからな。無理は禁物だ」

と、レイモンドが切り上げようとした時だった。司令部からアナウンスが発せられて、ジエイ、そしてレイモンドの二人を招集する。何事か、と、顔を見合わせながら、二人は数秒呆けた。

エアコンすらついていない灼熱の会議室に入るのは、『グラム駐屯地制圧作戦』のブリーフィング以来だ（というより、このバラーン基地で真つ当な空調機が備えられているのは、兵舎一階の食堂だけだったりする）。ガタついた扇風機がぎこちなく首を振る部屋に、スターク・コンボイ隊長、バラーン基地の司令官——そしてマクシミリオン・ペガサス中佐が集まっているのに気づいたジエイは、慌てて姿勢を正した。

「固くなる事はない、ベック少尉……それに軍属技術局の、レイモンド主任」

デスクの上座に腰掛けたペガサス中佐が、柔和な笑みを浮かべる。「座りたまえ」と指示した中佐に従って、二人が席に着くと、「僕らに何か御入り用ですか？ マクシミリオン中佐」と、レイモンド。

ああ、と短く返事をしたペガサスは、

「バラーンで『オーガノイドシステム』の試作機をテストしているのは、君達だと聞いてね。《ブレードライガー》と言ったか、アレはどうだ？ コンボイ大尉の評価は芳しくないようだが……」

二人が呼ばれる事があるとすれば、やはりそれに関連した事だろ

う。予想はしていたが、いざ聞かれると答えられない。お世辞にも順調だとは言えない動作テストだが、下手な事を言って機体を回収されるのも困る。

言いよんだ二人に、「そう勘繰る事はない」と、ペガサス中佐。

「君達の他にも九隊ほど《ブレードライガー》のテストを行っているチームがあるが、辛うじて許容できる結果を残せたのは、『レオマスタール』アーサー・ボーグマン少佐の隊だけだ。一筋縄でいかない物だと理解はしているよ」

「ハッ……」

言葉少なに応じたレイモンド主任。バラーンの司令官もコンボイ小隊長も、意図の読めぬ無表情でジェイ達を見据えている。彼らから見れば、一体の試作ゾイドにあってこそだと熱中しているジェイ達は、任を放つて遊んでいるように見えるだろう。視線が痛くて、ジェイは思わず俯いてしまう。

ジェイの億劫を余所に、ペガサス中佐はレイモンドに質問を続ける。

「現状の『オーガノイドシステム』のデータだけでは、これ以上の進展は見込めないように思うが——どうか」

「……否定は、できません。《ブレードライガー》に関しては、『オーガノイドシステム』にリミッターを設定すれば、実用化の範疇に達するかもしれません……」

「そうすれば、機体の性能低下は否めない——だろうか？」

レイモンドの返答を察して、コンボイ大尉が言葉を継いだ。

脂汗を浮かせながら、無言で頷いた小太りの技術士官。フム、と呻ったペガサス中佐は、「だが——司令部は現行の《ブレードライガー》のスペックを、高く評価している」と、頭を振って、

「現状、システムを大幅に縮小して量産化している《ストームソーダ―》《ガンズナイパー》両機にも、ゆくゆくは《ブレードライガー》と同等のシステムを取り込んだアップデートを行いたい、というのが、上の要望でな。そのためには、システムの出力を下げずに操作性を改善する技術が確立されなければならない」

「……おっしやる通りです、ペガサス中佐」

レイモンドの返答は、ことごとくペガサスの想定通りであったらしい。そこでだ、と食い気味に言ったペガサス中佐は、ジェイ、次いでコンボイ小隊長へと視線を動かすと、ガタと席を立て、

「『ブレードライガー』のデータ収集も兼ねて、コンボイ大尉の307小隊に調査任務を依頼しようと思う。エウロペにはまだ見ぬ古代遺跡が多数眠っている。その中に、現状の『オーガノイドシステム』に足りないピースが埋没している可能性も、十分にあるだろう。技術者として、レイモンド主任に同道してもらいたいのだ」

「それは……構いませんが——」

口ごもったレイモンドだが——額の汗を拭って意を決すると、

「北エウロペの大半は、未だガイロスの支配地域です。我々の行動できる範囲に、システムの欠点を補える遺跡があるかどうか——」

その反論も、ペガサスは想定していたらしい。「それに関しては問題ない。既に丁度いい場所に目を付けてある」と、小脇に丸めてあったエウロペの地図を広げると、とある一点を指差した。ミューズ湖の先——ヘスペリデス湖のさらに西に位置する円型の湖。赤のインクで大きく×を付けられたその場所は、レイモンドのみならず、ジェイもすぐに察しが付いた。

——オリンポス山。

半年前に、共和国の独立第二高速戦闘大隊が帝国軍と戦った挙句、未曾有の大災害を引き起こした地。そして——共和国が今現在手にしている、『オーガノイドシステム』技術のひな形となる情報を、持ち帰った地である。

絶句したジェイ達に、ペガサス中佐は淡々と告げた。

「半年前の山体崩壊以来、山頂付近は絶えず地殻変動が続いている。周辺にはわが軍も帝国軍も駐留しない、ある種の不可侵地域となっている場所だが——『オーガノイド技術』の隠された全容は、この山の中に眠っていると考えられる。キミ達307小隊に、それを回収して

「きてもらいたい」

## ⑦ 出立

早朝の格納庫で、ジエイは愛機《ブレードライガー》のコントロールパネルを操作する。

『ミューズ森林』の南西——『オリンポス山』の調査を命じられたジエイ達307小隊は、今日の昼ごろにはこのバラーンヌ基地を離れて、南方の荒野に設けられた拠点・『西アレクサンドル駐屯地』へと移動する事になっていた。翌日、そこから帝国領・オリンポス山に入り、『オーガノイドシステム』完成のためのデータを手に入れるのだ。

ガイロス支配地域での、長きに渡る調査任務だ。敵の偵察部隊に発見されて、戦闘に入ることだって、決してありえない話ではないだろう。肝心な時に機体を乗りこなせず、隊を危険に晒すわけには行かない。これまでの稼働テストを踏まえて最終調整を終えた機体を、朝一番に試しておきたかった。

「——ベック少尉」

コクピットで難しい顔をしたジエイは、掛けられた声に振り向く。ライガーの足元で微笑んだ栗毛の女性士官に気づき、ジエイはアン少尉、とその名を呼んだ。二人分のコーヒーカーップを持ったエリサは、「今日は一段と早いですね。気合十分、と言う感じでしょうか?」と、ライガーのコクピットを見上げていた。

「ああ……午後には『バラーンヌ』を離れてしまうからね、最終チェックをしておきたくて。この後、少し走らせて来るよ」

「……そっか。少尉達、今日からアレクサンドル大地の方に転属するんですよね」

エリサの声のトーンが、僅かばかりしよげたように思えた。数秒考えた後、エリサはコーヒーカーップを小脇の整備棚に置くと、

「テスト走行、ご一緒にしますよ。後ろの席でモニタリングする人が必要でしょうか?」

と提案する。

断る理由はない。「オーケー、ちよつと待つて」と頷いたジエイは、

ゆつくりと《ブレードライガー》の頭を垂れさせて、彼女をコクピットへと迎えた。

テスト走行は、順調に進んだ。アーリータイプ《ブレードライガー》の扱い辛さは、最後まで改善されなかったが——それでも、根気強く向き合った成果だろうか。基地周辺に設けられたテストコースを走らせる程度なら、既に問題にならなくなっていた。後部座席で機体をチェックするエリサが、

「《ブレードライガー》、速度・機体コンディション共に安定しています……すごいです少尉、ほとんど乗りこなしているんじゃないですか？」

と、声を弾ませる。

自分でも何となく手ごたえを感じ始めていた事だ。エリサにそれを指摘されて、ジエイも嬉しくなる。ハハア、と照れ笑いを浮かべながら、「俺一人の力じゃない、レイモンド主任やアノン少尉が、いろいろと手伝ってくれたおかげだよ」と謙遜を返して、

「『オーガノイドシステム』はすごい力だ……ゾイドの潜在能力を完璧に、引き出す。完全な物にできれば、この戦争だつてすぐに終わらせる事が出来るかも知れない。《ブレードライガー》の心は、その獰猛さで固く閉ざされているけれど——コイツと一緒に居れば、システムを読み解く片鱗だつて見えるかもしれないんだ」

言い終えるとほぼ同時、予定していたテスト走行カリキュラムを全てクリアする。

<sup>ニュー</sup>新ライガーで挑戦し始めてからの、自己最高記録だ。これならば実戦で《ブレードライガー》を扱う事になつても、手間取ることはないだろう。よし、と高揚したジエイに、「ベック少尉はこの戦いを早く終わらせるために、『オーガノイドシステム』と向き合う事にしたんですか？」とエリサが問うた。

質問に、

「無論、この《ブレードライガー》に、何か魅せられるモノがあつたのは事実だけど……」

と言いよごんで、ジエイは目を伏せる。

「ミューズでゲリラ戦をして、多くの人間が死んでいくのを見て来たんだ。マーチン軍曹、帝国の奴ら——人だけじゃない、俺と一緒に来た《シールドライガー》だって、グラム湖での戦いでダメにしてしまった。戦争なんて、やっぱりいつまでもやってるべきものじゃないんだよ」

だからこそ——『オーガノイドシステム』がこの戦いを終わらせる鍵となり得るのならば、ジエイはそれに貢献したいと思った。《ブレードライガー》の湛える激情はただの狂気ではない、この戦争を終わらせる、大きな意思のうねりに思えたから。

「……すごいですね、ジエイ少尉」

エリサの相槌は、少し間が空いてから帰ってきた。テスト走行を終了し、帰投しようとライガーを反転させながら、「すごいか？ これまでは、思っているだけだったから……」と、ジエイは前置きを言う

「でも、今度の任務は、『オーガノイドシステム』解析のための、大きな一歩になり得る。オリンポスで何があったのかは、聞き及んでいく。本当なら、気安く踏み荒らしていい場所じゃないのかもしれないけれど——帝国との戦いを終わらせるためなら、割り切るさ」

改めて、己が決意を言う

「でも、本当に大丈夫ですか？ 帝国軍の領土に入るんだから、きつとたくさん戦う事になりますよ？」

「……分かってる。けど——」

「——心配だな。少尉がまた怖くなって、『助けて』って泣いても、今度は私、聞いてあげられないですよ？ 傍にいないんだから……」

「ハハア……あの時に覚悟は決めたんだ、もう言わないよ、そんな事」挑発するみたいな物言いが、普段の彼女らしくなかった。ジエイがそれを奇妙に思った直後、ピシユ、と、シートベルトを外す音が聞こえて——身を乗り出したエリサが、シート越しにジエイの胸元まで腕



を回す。背後から抱かれる形になって、ビクと痙攣したジェイ。すぐ横にエリサの顔を見つけると、その瞳がキラキラと光を湛えているのに気づいて、息を呑んだ。

視線を交えると、エリサはフツと微笑して見せる。数秒呆けていたジェイは、やがて彼女の意図に気づくと、

「——大丈夫だよ。心配しないで」と、微笑み返した。

『ミューズ』の森を抜けた307部隊の一団が、荒野帯・『アレクサンドル大地』を南下していく。戦闘を往くのは、コンボイ大尉の《シールドライガーDCS》と、《コマンドウルフAU》二機で構成されたA<sup>アルファ</sup>分隊。少し遅れて最後尾、ノーマルタイプの《シールドライガー》に、《コマンドウルフ》二機で構成されたB<sup>ブラボー</sup>分隊が続き、こちらの指揮はグロック・ソードソール少尉が執る。そして、二隊の間に挟まれるように、ジェイの任されたC<sup>チャーリー</sup>分隊が行軍した。ジェイの《ブレードライガー》にツヴァインの《コマンドウルフAU》、そしてフリーマン軍曹が担当する通常の《コマンドウルフ》で構成された分隊だ。

もう一人。隊員の他に、軍属技術局のレイモンド・リボリー主任が同伴している。遺跡での調査解析役であり、実戦での《ブレードライガー》の戦闘データをモニタリングするのも彼の役目だ。ジェイが普段エリサと一緒に稼働テストを行っているのを知っていた彼は、「後ろに居るのがムサイ男が変わるのは、嫌かもしれないけど——我慢してくれよ、少尉殿」などと軽口を言う。今朝エリサとの別れを惜しみ、未だ後ろ髪を引かれているジェイにとっては、笑えない冗談であった。

既に《ストームソーダー》の配備によって空の安全を確保されている、共和国領内における行軍は気楽な物であった。出発から二時間、目的の『アレクサンドル西駐屯地』は目前に、コンボイ大尉の通信が入る。

「アレクサンドルの駐屯地で、グスタフを三機ほど手配してある。簡易ドックと補給物資——そしてキャンプコンテナを受け取ったら西を目指し、ヘスペリデス湖の一本橋を渡ってオリンポスに入る」

「——了解」

回線越し、グロツク少尉が応答するのを聞いていたジェイ。その後、モニターに別の顔が映り込んだ。痩せた狼のような男——鋭い眼光の傭兵ツヴァインが、「よう少尉殿。じゃじゃ馬ならぬじゃじゃ獅子は、手懐けられたのかい？」と、薄笑みを浮かべた。

「その蒼い新型ゾイド……『ブレードライガー』だっけか。新しいゾイドも『ブルー・ブリッツ』たア、アンタ、相当な堅物だ」

以前ほどジェイを見下した風は無くなったが——彼の口汚さは生来のモノらしい。ムツとしたジェイは、「軽口はいい、ツヴァイン」とそれを制したが、

「そう言うなよ。敵さんのウジャウジャいる帝国領に入って、古代遺跡の石ころを拾いにいく羽目になったんだぜ？ 投げやりにもなるってもんだ」

と、ツヴァインは喋り続ける。

古代文明断片を石ころ扱いされては黙っていられなかったのだろう、後部座席で二人のやり取りを聞いていたレイモンド主任が、「ツヴァイン君、この任務は酔狂で行うものではないよ。『オーガノイドシステム』を完成させて、ヘリックの戦力を高めるための、大事な一歩だ」と反論を言った。すると、ハツ、と息を吐いて、「戦争に勝つために考古学を始めるってのが、俺に言わせりゃ酔狂さ」と、鼻で笑うツヴァイン。

「戦争ってのは遊びじゃねえんだよ。戦いに勝つために必要なのはそんなロマンズじゃない、如何に生き汚く足掻くかって事だ。ガイロス我倒したいって言うんなら、張りぼての新型ゾイドで夢を見せるんじゃない、そこんところを前線の兵士に仕込んでやらなきゃな」

ツヴァインの言っている事が、道理である事は否めない。劣勢の共和国の戦線を今日まで維持できたのは、母国のため、そして己が生のために諦めずに抵抗を続けた特殊工作師団の奮戦おかげだ。一方で、

『オーガノイドシステム』研究によって生まれた《ブレードライガー》は、未だ問題を解決できず、この戦いに貢献できているとは言い難い。

——それでもジェイは、この作戦に掛ける思いがあった。

「《ブレードライガー》の力は本物だ。『オーガノイドシステム』搭載ゾイドを完成させれば、帝国を倒せる——そうすれば、この戦争は終わるんだ。エウロペに平和が戻るって言うんなら、エウロペ人のお前にだって、決して悪い話じゃないだろ？」

ジェイの熱弁に目を剥いたツヴァインは——少し間をおいて、プツ、と吹き出して笑う。

「前から甘ちゃんだとは思っていたが、そこまでとはな。栗毛の女——アノンちゃんのケツばっか追いかけてるうちに、さらに腑抜けになったか？」

「——なんだとツ！」

ムキになって顔を顰めたジェイに、「言い訳がましいこと言うなよ。この戦いに勝って得があるのは、お前らへリックだけだろ？」と、ツヴァインは冷たく言い放った。

「エウロペはな、傷ついているんだよ。戦争の勝敗がどう転ぼうが関係ない……争い終わっても癒やされる事が無いほどに、お前らの戦いが、エウロペに爪を立てている」

通信が、切れる。

モニターの映像が無くなって、ジェイの視線はふとキャノピー越しに見える風景へと移った。そして——彼の言う傷跡が、ジェイの視界に広がった。

西の空は、暗かった。遠方に見える山々を覆い隠すほどの灰色の噴煙が、本来あるべき青空を覆っている。西へ行けばいくほど濃くなる黒雲の層は、時たま蒼白い稲妻を湛えて震えた。

ジェイの後ろでその景色を眺めていたレイモンドが、「オリンポスの上げた噴煙だ……」と呟いた。まだ遙か先に在るはずの目的の場所、『オリンポス山』。半年前に紅蓮の炎に包まれたという大山は、今

なお『破滅の火』を吹き上げ続けていた。

## ⑧ ツヴァイン (前編)

——ZAC2100年 五月

レッドラスト  
赤の砂漠

西方大陸戦争の開戦から、既に一年。先に行われた全面開戦の勝利によって、ガイロス帝国は主戦場・北エウロペ大陸の大半を自国の支配地域として押さええている。大陸の中心に位置する広大な『赤の砂漠』レッドラストも、本来ならば帝国の哨戒部隊が見回っているはずであるが——307小隊の侵入した砂漠南部には、一切その気配が無かった。

ジェイ・ベック少尉達は今、『ヘスペリデス湖』に掛かる一本橋を越えて、砂漠の南端にたどり着き——目的地『メルクリウス湖』を、既に目前にしている。湖の中心に聳えた『オリンポス』が常に噴煙を吹きあげる為、辺りは昼夜問わず薄暗い。まるでこの世界から陽光という概念が消失してしまったかのような、異様な光景であった。一行は時計の指し示す時間だけを便りに、行軍の予定を遂行している。

隊の者達が野営の準備を終えた頃、足元を振動が伝った。本日で、既に五度目の地震だ。戦闘機械獣の行進によって生ずるような、表面的なモノではない。大地の深奥で巨大な何かが蠢いているかのような、そんな振動である。

ジェイ少尉、グロツク少尉、そしてレイモンド主任という、隊の中枢メンバーを呼び集めたコンボイ大尉。アレクサンドル大地の駐屯地で貰い受けた『グスタフ』に引かれた居住コンテナの中、カタカタと音を立てるコーヒーカップを見つめて、

「また、揺れているな……」

と、グロツク少尉が顔を顰める。これから赴くであろうオリンポスの地殻変動が、既に感じ取れる程の距離に来ているのだ。帝国も共和国も近寄らぬ、大災害の爪痕が残る地——一層の緊張感に黙り込むジェイ達。だがコンボイ隊長だけは、つとめて平静を保っていた。「——『ヘスペリデス湖』を越えた今、帝国軍と遭遇する可能性は低く

なった」と切り出して、翌日の作戦に向けたブリーフィングを始める。「明日、いよいよオリンポス山に入る事になるが——レイモンド主任、留意点は？」

一行が囲むデスクの上に広げられた、北エウロペの地図——その南端に付けられた赤いチェックを凝視しながら、小太り気味の技術士官は「そうだな……」と険しい表情を作る。

「半年前に起こった何らかの外的刺激によって、オリンポス山は急速に火山活動を再開し——そして崩壊した。おそらく山頂付近は、磁気嵐の吹き荒れる『原始の惑星Z・i』に、限りなく近い環境にあると言っているんじゃないかな。実際に行って目にして見ないと、何とも言えないけれど……」

「惑星Z・i大異変の再現と言うわけか……だがそうなると、我々のゾイドは制御不能に陥るのではないか？　磁気嵐の中では、あらゆるゾイドの活動が不可能になる」

レイモンドの見解に、グロツク少尉が首を傾げた。今から五十年程前に起こった、巨大彗星の飛来による天変地異、『惑星Z・i大異変』グラントカタストロフ。数千万人も命が奪われたこの未曾有の大災害では、同時に吹き荒れる磁気嵐によってあらゆるゾイドの活動が制限された。ヘリック、ガイロスの両国が以後四十年もの間睨みあいを続けていたのは、人的被害だけではない、この磁気嵐によって戦闘ゾイドの使用を著しく制限されていたことにある。

「大異変以来、磁気異常によるゾイドの機能不全を予防する研究は続けられてきた。パルスガード技術の進歩によって、ある程度は機体の変調を阻害することができるようになってきているけれど——それでも山頂付近での調査は、二時間が限界だろうね」

「——よかろう。その時間内で帰還できるように、最適なルートを模索する」

レイモンドの見解を受けたコンボイ小隊長は、「明日から、本格的な調査任務になる。各員、今の内に英気を養っておけ」と会議を締めた。

噴煙によって陽を遮られたせいか、野営地の夜は一層冷え込んだ。

時々煌めく雷鳴の灯りだけが、深淵を照らす標となる。そんな中で、307の各員が明日の登山へと備えて、愛機の最終チェックを行っていた。

ジェイもまた、もう一機の《グスタフ》に引かれた簡易整備ドックに《ブレードライガー》を預けて、機体の調整を続ける。すると――、「――少尉さんよ」

と、ツヴァインに声を掛けられた。

ガラの悪い傭兵の隣には、コンボイ小隊長。妙な組み合わせだな、と頭の片隅で感想を言ったジェイに、「暇してんだろ？　ちよいと付き合えよ」とツヴァイン。その親指で指した先には、彼の乗機《コマンドウルフAU》が、既にアイドリング状態で待機している。

「メルクリウス・オリンポスの周辺には大規模な地殻変動が起こったんだ。明日アドリブで進んで、不意の事態が発生したら洒落にならないだろう？　斥候役だ、今夜の内に俺と少尉さんと、周辺の道程を調査しに行く」

「俺が？　同じウルフに乗っている、フリーマン軍曹の方が適任じゃないのか？」

疑問に思っただけでコンボイ小隊長を見たが、「万が一、って事もあるだろう？」と応えたのはツヴァインの方だ。

「無いとは思わがな――もし《レッドホーン》級のゾイドを伴った哨戒部隊に遭遇したら、《コマンドウルフ》二体じゃ手こずっちゃう。その点、《ブレードライガー》は計器の類も最新だし――何より、戦闘では百人力だ。……お前が乗りこなせれば、の話だがな」

相変わらず、一言多い男だ。挑発だとは分かりつつも、ジェイは怪訝そうに相をしかめて、ライガーのコクピットから飛び降りる。小隊長に向き合って、「コンボイ隊長、チャーリーC分隊で先行します」と、敬礼するも――、

「おいおい、明日から過酷な登山だぜ？　フリーマン軍曹は休ませてやれよ。たかだか偵察任務、俺とお前で十分だろう？」

と、ツヴァインが煽って、ジェイの言を遮る。

二人のぎこちない会話に、コンボイ小隊長は微かに貌を顰めた。

「——どうする？ ジェイ少尉」と、淡々とした調子で問うた小隊長から、厳格な意を感じ取ったジェイ。傭兵とはいえ、自らの部下を御しきれない彼に、コンボイ大尉の厳しい目が光っている。

「……ツヴァインの意見を尊重します」

咄嗟にジェイは、そう返答した。ジェイの決断に対して、小隊長は険しい表情を作ったが——それを咎めるような真似はしなかった。

行くぜ、と無線で短く告げるや、ツヴァインの《コマンドウルフ》が低い呻り声を上げながら始動する。《グスタフ》の整備ドックよりゆっくりと降り立ったジェイの《ブレードライガー》もまた、その後について駆け出した。深夜の荒野帯を土埃を上げながら走り行く、二体の機獣。視界を確保するため、キャノピーハッチの上に備えた小型の前照灯を点灯させると、ジェイは機体を加速させツヴァインのウルフと並走すると、「どういうつもりだ？」と問うた。

「あん？ 何がさ」

通信回線を開いたジェイに、素っ気ない態度で応じるツヴァイン。先のツヴァインは、意図的にジェイと二人で出撃する事を望んでいた風に思えた。真意を知りたくて、モニターに映った傭兵の顔を見据えるジェイ。彼の思惟を見取ったのか、「……言つたらうが。斥候だよ、斥候」と、面倒くさそうに頭を掻いたツヴァイン。

「俺は元々この辺の生まれでなア、多少は土地勘ってのもあるんだ。『オーガノイドシステム』なんて眉唾モノに、共和国のお偉いさんが躍起になるのは理解できないがな、それがコンボイの旦那に与えられた役目だつてんなら、手を貸すさ。俺はそのため雇われてんだから」と、長々しく理由を述べる。

筋の通った話だが、肝心のジェイが同伴する理由には触れていない。なおも追求しようとしたジェイだったが、んな事より——と、ツヴァインは話題を変えた。

「少尉殿、寂しいだろ？ しばらくはあの、アノンって嬢ちゃんと乳繰り合えないんだからな」

「……なんだと？」



余りにも無礼な物言い、ジェイは思わず呆けた。呆然とした彼に、ハッ、と見下した風を醸す傭兵。

「まったくいい御身分だよなあ、ジェイ・ベック。戦争の真つ最中……しかも余所の土地を戦場にしておいて、お前さんは同僚の女に見惚れて、ナニおつ勃<sup>た</sup>てる暇があるんだからよ」

他の隊員や、コンボイの目が無くなったからか——ツヴァインの態度には、取り繕った体裁など微塵も無い。完全にジェイ・ベックをこき下ろした、辛辣な物言いだった。激発したジェイは、「キ……キ、貴様アーツ！」と声を荒げたが、

それを無視して——不意にツヴァインの《コマンドウルフAU》が停止する。

「——おうっ!？」

慌ててブレーキペダルを踏み込むジェイ。心地よい疾走を咎められてか、《ブレードライガー》は煩わしそうに首を振って、大きく咆哮する。《コマンドウルフAU》を抜き放って数十メートル程言った挙句、ガクン、とつんのめって停止したジェイ機。それを見遣ったツヴァインは、「降りろベック。こつからは歩きだ」と、抑揚のないトーンで告げた。

「……濁すな！ 正規兵じゃないとは言え、お前の無礼は余りある！」  
「まあ見ろよ。《コマンドウルフ》の索敵能力は折り紙付きだ——そのセンサーが、敵の痕跡を発見している」

「……ぬっ……!？」

モニターに送信されてきたのは、ジェイ達の走って来た大地の画像データだ。大地の凹凸、石ころや道草に残された痕跡から、ツヴァインの《コマンドウルフ》は大型ゾイドの足跡を検出していた。

《レッドホーン》級と、それに追隨する中型ゾイドだ……ツイてねえなベック。どうやらこの辺りには、ガイロスの先客が居るらしいぜ」

オリンポスの吹いた火山岩だろうか——近くに屹立していた大きな黒岩の傍に機体を寄せると、《コマンドウルフ》は屈み込んでキャノ

ピーを開ける。何もかもツヴァインのペースで事が進み、「くっ……」と奥歯を噛み締めたジェイだったが、同様にライガーを遮蔽物まで寄せると、キャノピーを開けて機体から降り立つ。

辺りは、微かに焦げ臭い。オリンポスの崩壊で焼かれた、土や草木の匂い。そして大気に混じった灰の香りが、ジェイの鼻孔を掠める。異様な雰囲気を感じ目を剥いたジェイに、ツヴァインが歩み寄ってくると、「教えてやるよ」と不遜な声で言った。

「お前さんに着いてきてもらったのはな、お前さんのお気楽さを改めてもらうためだ。戦争をやるってのがどういう事か、自分の目で見て感じろ」

——しばらく行つた先で、ジェイ・ベックはそれを見た。

小さな村であった。メルクリウス湖より流れ出た河川より水を引く、荒野の中のオアシス。だが、先にオリンポスが引き起こした大災害にやられたのだろう、田畑は一面灰色に塗れて、放置されている。しかしジェイが言葉を失つたのは、それだけが理由ではない。

ツヴァインが投げ渡したスコープで村を眺め、絶句するジェイ。

立ち並ぶ家々は、無惨にも破壊されていた。崩れ落ちた家屋、道には弾痕。あちこちから火が燻り、黒々とした煙を上げている。そして——そんな街の中を、ガイロス帝国のゾイド達が、悠々と闊歩していた。

緩やかな足取りで建物を踏み躪るステイラコサウルス型の機獣は、ジェイのよく見知ったシルエットだが、機種は違う。装甲は漆黒、背には巨大な砲塔の束『ハイブリッドバルカン』を背負った強化改造機『ダークホーン』。それに追隨するのは、前者によく似た黒い装甲と、ドリル状の角を備えるサイ型の中型ゾイド『ブラックライモス』だ。帝国機甲師団所属のゾイド達——三機編成の分隊が、二つ。

そして——驚く事に、その足元で蠢いた小さな影があった。

人がいる。蹂躪される家屋から逃げ惑う村人達。それを追いかけるのは、ゾイドから這い出たガイロス軍人達だ。男性は銃底で打ちの

めされ、蹴られ、そして射殺された。その光景に泣き叫ぶ女性達は、髪を引っ掴まれて引き摺り回された揚句、嬲られる。目を覆いたくなるような『地獄』であった。

「あの災害にあつて避難していないのか？ ……何故、まだ村人が——」

呆然と呟いたジェイに、ツヴァインは冷めた言葉を返す。

「どこに逃げるつていうんだ？ 辺りは一面過酷な砂漠で、しかも俺ら軍隊がドンパチやつてる真つ最中だぜ？」

打ち倒された家屋の影から、新たに三機のゾイドが身を乗り出した。

二機は件の中型機《ブラックライモス》だが、残る一機は《ダークホーン》では無い。漆黒のボディは同様だが、大きく膨れ上がった背には『ハイブリッドバルカン』ではなく、ターレット旋回式の小型連装ビーム砲を二機。その両サイドには、通常機の主砲たる『三連装リニアキャノン』が備えられるが、間接を備えたアームに繋がれ、砲の裏側に鈎爪状のマニピレーターを潜ませたそれは、銃座と言うよりも背から生えた二本の『腕』に見える。最も印象的なのは頭部で、扇状に広がったエリマキの合間に、大型化した銀色のビーム砲塔が六機並んでいた。さながらドレッドヘアのような印象を与える『異形』である。ジェイがこれまでに見たことのない改造ゾイドであった。

計十機、おそらくはガイロスの哨戒部隊だ。指揮官機と思われる異形の改造《ダークホーン》が大きく咆哮し、『ドレッドヘア』からレーザーをばら撒く。

昼と見紛う明るさに包まれた集落に目を細めながら、「これが戦争だ」とごちるツヴァイン。

「帝国に牙を剥く気なんてさらさら無い……災害に、戦火に揉まれながら、それでも必死でやって来た片田舎の集落が、軍隊の都合で——奴らの補給のために略奪され、踏みじられる。ミューズの戦線で戦い、戦場を知った気になってたろうが……甘いんだよ。エウロペでは、死ぬ覚悟なんて微塵もできてない民衆が、ああやって焼かれて死んでるんだ。自分達とは全く関係の無い、『余所の国同士』の戦いで

な  
」

　耳朶を打つツヴァインの言葉が、頭蓋の中で残響する。まるで躰の全てが弛緩したかのように硬直したジエイは、ただただ蹂躪されるだけの村を、呆然と眺めていた。

## ⑨ ツヴァイン (後編)

——ZAC2100年 五月 メルクリウス・湖畔の村

朦々と立ち上がる煙が、集落を包み込んでいた。廃墟と化した建物の合間を、ユラと漂うそれは、まるで死んでいった者達の情念が未練がましく彷徨っているかのようにも見える。ドレッドヘアを備えた異形の《ダークホーン》を駆るパイロット——ヘルマン・シュミット大尉は、コクピットの中でそんな感慨を抱いていた。

モニターが開いて、通信が入る。

「技術大尉殿、村の制圧は完了しました。以後、此処を拠点に調査任務を継続します」

そう述べたのは、《ダークホーン》を伴って此度の任務に随伴した、機甲師団所属の将校である。武器開発局所属のヘルマンとは畑の違う者ではあるが——それを気に掛ける素振りを見せず、相応の礼節を持って接する男であった。なんでも、祖父は旧ゼネバス帝国の高級将校だったとかいう、由緒ある軍人家系の出であるらしい。

モニターに映ったかの将校の顔を、ヘルマン・シュミットはつまらなそうに眺める。

「……貴公らは残り、この拠点を守れ。オリンポスには、私と私の部下だけで入る」

「シュミット大尉達だけで、オリンポスに入るといいますか？ しかし我々は、大尉の警護を司令部より仰せつかっております」

「——必要無いのは、この戦いを目にしたのならば理解できよう？」  
シュミットの言葉が虚勢でないことは嫌というほど理解していたのだろう。《ダークホーン》のパイロットは暫し考え込んだ後——やがて心苦しそうに、「しかし」と意見を述べた。

「我らの求める『欠けたピース』は、山頂の地中深くに埋没していきましょう。たった三機のゾイドで搜索しては、みつけられるはずが——」

既にシュミット大尉は、その顔を見ていなかった。「出来るさ——」

私の《ブラックオニクス》が、それを見逃すはずがない」と即答して無線を切ると、ハッチを開けてゾイドから飛び降りる。

——《ブラックオニクス》。

ヘルマン・シュミット大尉の駆る、異形の《ダークホーン》に与えられたコードネーム。このオリンポスに埋没する『オーガノイドシステム』の残滓、ガイロスが求める『欠けたピース』を見つけるため、シュミット大尉自らが改造した機体だ。彼自らがチューンナップしたOSを搭載し、磁気異常地帯での長時間活動が可能となった局地専用機。

その形質は、かつてガイロス帝国が同様の環境を想定して開発した改造《レッドホーン》、《クリムゾンホーン》のそれを踏襲している。同機の開発に用いられた技術は、かの『惑星Zi大異変』で失われたが——この《ブラックオニクス》は『オーガノイドシステム』の応用で、限りなくそれに近い性能を備えることに成功していた。

作品は《ブラックオニクス》だけではない。随伴する中型機・《ブラックライモス》もまた、彼が構築した独自理論によつて復元・再配備された機体である。『オーガノイドシステム』研究の第一人者・博士<sup>ドクトル</sup>Fの元で研究を行った彼は、システムの持つ特性の一つ「生命力の異常なまでの強化」を利用して、金属生命体の強制培養・成長と、それによる絶滅危惧種的大幅な個体数増加を可能とした。

だが、と、ヘルマン・シュミットは一人ごちる。

（——私が求めるのは……その先にある物）

すなわち——絶滅し、化石化したゾイドコアの再生。

純血のニクス人であるヘルマン・シュミット大尉は、旧ガイロス帝国の主力であり、最強軍団『暗黒軍』の象徴でもあった幻獣型ゾイド達の復活を渴望していた。そして、その実現に限りなく近い技術を行使しようとしていた研究機関が、このオリンポスに根城を構えていたという。

それは、摂政ギウンター・プロイツェン直轄のゾイド開発機関であった。彼らの研究は成就する直前にまであつて、半年前の大災害には研究の『被験体』——今は亡きゼネバスの象徴、『死を呼ぶ竜』が関

係している、と、技術部の中ではまことしやかに囁かれている。

共和国軍の妨害に会って研究はとん挫したというが——噂が真実ならば、その残滓は山頂に積もった死の灰の中で、今も鼓動している。

——必ず手に入れる。

ヘルマン・シュミットは村の背後にそびえる黒い影、未だ崩壊を続けるオリンポスの山を見遣って、不遜な笑みを浮かべた。

廃墟となつた家屋の中から、耳を劈くような悲鳴が聞こえた。

キンと耳を突く女の悲鳴に、シュミットは眉を顰める。声の鳴つた家屋の前に屯した、ガイロスの兵士達。瓦礫に腰掛けた彼らは、皆荒い息で——どこか気の抜けた、下卑た笑みを浮かべていた。不快を露わに踵を返したシュミットに気づくと、まるで蜘蛛の子を散らしたかのように、急ぎ小走りで去っていく。

廃屋の中には、シュミットの想定した通りの光景があつた。家財の散乱した部屋を中心、服を裂かれた村娘の上に、獣の息を吐きかけながら、一人の帝国兵士が覆いかぶさっている。両の手を縛られ磔にされた少女が、必死にもがくのを——無理やりに押さえつけ、殴打し、そして一心に腰を振る男。その無防備な後ろ姿が、自らの配下《ブラツクライモス》のパイロットであると見取つたシュミットは、男の肩口を掴み、無理やりに少女から引き剥がす。

「——止せ」

アガ、と間抜けな悲鳴を上げた部下に、シュミットは冷徹な眼差しを向けた。自らを見下した上官の意が読めぬかのように、暫く呆けていた部下の男は、やがて「——なんでじゃ！」と声を荒げる。享樂を邪魔されて血が上っているのだろう、自らの立場を鑑みぬ態度を持つて、シュミットを睨んだ。

そんな兵士の男を、シュミットは冷徹な眼差しで捉える。

「——貴様は、ニクスの者だ。ヒトモドキとまぐわって忌み子を為し、誇り高きガイロス人の血を貶めるか」

淡々とした風で放たれた言葉。

しかし、ヘルマン・シュミットのその言には軽蔑と侮蔑、そして残忍なまでの『怒り』が滲んでいた。食い下がろうとした配下の男だったが、息が詰まるような悪寒に目を剥き——やがてシュミットの右手が拳銃のホルスターに掛かっていると気づくや、「ヒエ……ッ」と声を上げて、ジタバタと走り去る。

部下の醜態を見送ったシュミットは、暗がりの中で微かに漏れた嗚咽に気づき、振り返る。地べたに礫にされた村娘が、息も絶え絶えに彼を見上げていた。

若い女だ。まだ十代半ばくらいの、少女。

「助けて」

と、微かに聞き取れた声に眉を顰めると、ガイロスの技術士官は少女の躰を見遣る。甚振られ青くなつた素肌、土埃と、男達の唾液に塗れた乳房、涙でクシャクシャになつた小さい顔……全てが貴く、弱々しい。

しかし——モゾと揺れた少女の白い柔肌は、彼にとって、地べたを這う肥えたウミウシにしか見えなかつた。

醜いな、と胸中で呟いたシュミットは、ホルスターから拳銃を引き抜くと——なんの躊躇もなく、その引き金を引いた。

※※※

——同じ頃。

乗機を留めた地点まで戻つて来た、ツヴァインとジェイ。《コマンドウルフAU》のコクピットに着くや、ツヴァインはガイロス軍の無線を傍受しようと、通信機を触る。高速機でありながら、《コマンドウルフ》は共和国軍の戦力の中では《ゴルドス》に次ぐ電子戦能力を持つゾイドである。しかし、オリンポス山の崩壊によって発生した磁気嵐の影響か、機体頭部の高感度イヤーを持ってしてもその精度は低い。無線から聞き取れるのは、ノイズ交じりの数単語だけだった。

(……………シ、ユミツ……………けで……………オリンポ……………入——すか……………?)

(……………るさ……………ブラック……………ニキスなら——)



しばらく無線機と格闘していたツヴァインだが、やがて深い溜息を吐いてそれを切ると、「駄目だな、こりゃ」と頭を振って、  
「だが、一つ分かる事がある。やっこさん、『オリンポス』について話してやがる。もしかしたら、目的は俺らと同じ『古代遺跡の残滓』かもしれないねえ」

そうひとりごちたツヴァインは、ウルフのкокピットから飛び降りると、『ブレードライガー』の足元で呆けていたジェイ・ベックに寄る。放心状態とも取れるジェイの呆け顔に、微かに眉を顰めたツヴァインは、「——お前は戻れ」とその肩を叩いた。

「コンボイの旦那に、ガイロスの連中も来てるって事を伝えなきゃなんねえからな。作戦は練り直した。アイツらの目を盗んでオリンポスに入る手筈を考えなきゃいけねえ」

言い終えると、すぐにウルフのкокピットに戻ろうとするツヴァイン。

ジェイ・ベックは、思わずその背中を呼び止めていた。掛けられた青年士官の声に、傭兵は「……あんだよ？」と、面倒くさそうに振り向く。数秒間誤付いた後、ジェイは恐る恐る、こう問うた。

「お前は、この近くの出身だって……。じゃあ、お前の故郷は——」  
「……ッ」

ジェイの問いに、ツヴァインは応えなかった。が——決まり悪そうに視線を逸らした彼の態度が、何となく返答を物語っている。それを慮ってジェイが口を開こうとしたのを、あーあ、とぞんざいに喚いたツヴァインが遮って、

「ホントにムカつくな、甘ちゃんのくせによ。俺はお前に憐れんで欲しくて、こんな事やってるわけじゃねえんだ」

イライラとした風に、頭を振る。

「関係ねえよ。戦争が始まる前から俺はゾイド乗りで、傭兵だった。故郷だなんて言っちゃって、本当にガキだった頃にしか住んでなかった場所さ。無くなったところで何も無い、俺に身寄りなんて——死んで悲しむような相手なんて、あそこにはいなかった」

——嘘だ。

ジエイにはすぐに分かった。故郷には、彼の掛け替えのない人が居たのだろう。もしかしたらそれは、彼が散々に詰った、ジエイとエリサミたいな関係だったかもしれない。そして——多分その人は、もういないのだ。今のツヴァインはそれを認めたくて、必死で自分に「なんでもない」と言い聞かせているように見えた。

ハツ、と、自嘲気味の笑みを浮かべたツヴァインは、「でもな、何も憎んでいないと言えば、嘘になるな」と、遠くを見て、

「俺の澄んだ町、俺と過ごした人——俺の過去を、勝手な都合で燃やしちまった戦争屋共は、大嫌いさ。そのきつかけとなったガイロス野郎どもに、うんと嫌がらせしてやろうって決めたんだよ。そのために、ヘリツクを利用する。その戦いの果てに、お前さんとアノンちゃんみたいな甘ちゃんいろんなモノ失っても、構いやしねえ。戦争の中じゃ、いずれみんなそうなるんだ——俺がそうだったように」

「……ああ、そうかも知れない」

ツヴァインの言葉を、ジエイは咎めなかった。エウロペの民である彼は、ヘリツクとガイロス、そのどちらも呪う資格がある。先みたいにジエイが怒り出す事を期待していたのかもしれない、ジエイの肯定に、ツヴァインはどこか寂しそうな笑みを見せると「話は終わりだ。戻るぞ」と、ウルフによじ登って、コクピットに座り込む。

「——ツヴァイン」

キャノピーを閉じようとしたウルフの頭部目掛けて、ジエイは声を張った。ピクと揺れたツヴァインの肩。返事は無かったが、ジエイは構わず言葉を続けた。

「その前に、ガイロスに嫌がらせをしに行こう。あの村を奪い取ってやるんだ——お前と、俺で」

驚いたツヴァインが目を剥いて、じつとジエイの顔を見つめる。数秒、無言のまま立ち尽くした二人だったが——やがて、どこか吹っ切れたかのように傭兵は笑うと、「言うじえねえか、甘ちゃん……いや——『ブルー・ブリッツ』め」と、ジエイを詰った。

## ⑩ 攻撃

ツヴァインの《コマンドウルフAU》が、そしてジェイの《ブレイドライガー》が、ゆつくりと起動する。目指すは、先に帝国軍の襲撃を受けていた村——決意を新たにして機首をメルクリウス湖の方角位へと向けたジェイに「……本気でやる気か？」とツヴァインから通信が入る。

「コンボイのヤツから言い遣ったのは、オリンポスへの道程を探るって事だけだ。帝国を見つけて勝手にドンパチやりましたなんて言ったら、正規兵のお前はどんな処分をくらうか知れないぜ」

今なら引き返せるぞ、と、ツヴァインは遠回しにそう告げている。

これからやろうとしている事は、完全な独断専行——本来の任務には無い行動だ、コンボイ達の助力を得ることはできない。オリンポスの調査、という使命を全うするのなら、帝国軍に発見されるのは極力避けるべきなのだ。それを、身を隠すどころか、むしろ真つ向から攻撃しようという——小隊規模の相手に、たった二機で。

正気の沙汰ではないにも関わらず、ジェイの気は不思議と落ち着いていた。「大尉はきつと分かってるさ。ツヴァインの言う『偵察』は、『独断専行』と同義だつてさ」などと、軽口返す余裕すらあった。多分、このままあの村の惨状を見て見ぬ振りをした方が、ジェイの心を乱していただろう。自分の心に従う——それが戦争の時を生きる上で最も大切な事だと、ジェイは先の戦いで知っていた。

ハッ、と笑ったツヴァインも、心なしかどこか晴れやかな顔をしている。

「言つとくが、死ぬんじゃねえぞ『ブルー・ブリッツ』。あんな事言つた俺でもな、目の前で死なれたら寝覚めが悪い」

「ああ——分かつてる」

力強い返答を返して操縦桿を握ると、アクセルを踏み込んで機体を前進させる。ジェイの扇動に、《ブレイドライガー》は猛る咆哮を持って返した。相変わらず獰猛なゾイドだ、操縦を受け付ける度、ブルと身じろぎしていらいらと地を蹴るから、乗り心地はすこぶる悪い。

それでも——凶暴すぎる彼の愛機にしてみれば、驚く程素直に従ってくれた。

空を覆う噴煙に生じた微かな隙間から、藍色の空が見える。

夜明けが近い。かの帝国軍部隊も、村の制圧という一仕事を終えて、幾分気を抜いているはずだ。数の不利を覆すには、その油断を最大限利用する。

「ベック。俺が先行し、陽動を掛ける。お前はちよいと遅れて着いて来い。こつちが上手く掻き回せれば、後は《ブレードライガー》のパワーで、どうとでも出来るだろ」

「陽動って……大丈夫なのか？」

不安を感じて問うたジェイに、「任せとけよ。そう言う面倒事ばかりこなすのが、傭兵つてやつだ」と、ツヴァインは自信ありげに頷く。彼の言葉尻に、確かな熱意を感じて、ジェイは彼の意気を察する——あの川沿いの村に、ツヴァインは失った『故郷』の姿を重ねているかもしれない。ならばこの戦いは、彼にとっても大きな意味がある物のはずだ。

それならば死に急ぐような無謀をするとは思えない。完全に懸念が払しょくされたわけではないが、ジェイは信じて彼に従った。

廃破りの荒野も、時速二百キロを超える《コマンドウルフ》と《ブレードライガー》の足をもつてすれば、狭い箱庭のようなものだ。既に件の村は目視できる距離まで迫っている。未だ制圧の火の手が冷めぬかのように、朦々と煙を上げた家々。その町並みの隅で、《ダークホーン》と《ブラックライモス》が駐留していた。

数は前者が二機、後者が四機で、計六機。

ドレッドヘアを備えた、あの改造《ダークホーン》がいない。不審に思ったジェイだったが、「——手間が省けるぜ。戻ってくる前にこいつらを潰して、数の不利を減らしとくとするか」と、ツヴァインは強気に言う。

主の気迫に応じるかのように、《コマンドウルフAU》が白い息を吐

き、唸りを上げた。

さらに加速して前に出るや、ウルフの背負った『ロングレンジキャノン』が微動し、火を吹いた。中型ゾイドに詰める火器としては最高クラスの威力を持つ光弾が空を駆け、待機した《ブラックライモス》の横腹を撃ち貫く。直撃。有効射程ギリギリの攻撃だ、ビームの威力はかなり減退しているものの、それでも《ブラックライモス》の駆動系に深刻なダメージを与えたのが見て取れた。

「この距離で当てるのか……ッ！」

傭兵ツヴァインの腕前に、ジェイ・ベックは驚愕する。村の外からの狙撃——それも高速走行中に撃ち放った一射で、直撃弾を決めたのだ。思えば、ミューズの森で『タイガライダー』と戦った時も、彼はグロックの《シールドライガー》と肉薄しもがいた《セイバータイガー》の背部装備を、正確に撃ち貫いて見せた。射撃の腕前なら、307小隊でも随一の実力だろう。

さらに二射、三射。全てが村の建造物を擦り抜け、正確に敵機の装甲を焼いた。連続砲撃に敵パイロットも気づいたのだろう、慌ててゾイドに乗り込み、迎撃に向かってくる。《ダークホーン》は無論の事、《ブラックライモス》も中型ゾイドとは思えぬ堅牢な装甲を備えているらしい。ダメージはあれど、十分に戦えるだけの余力を残している。「これ以上は壊せねえな」と奥歯を噛んだツヴァインは、《コマンドウルフAU》を停止させる。

「村を戦場にはしたくない、ここで引きつけるぞ！」

重武装を誇る《ダークホーン》、《ブラックライモス》だが、どうやら《コマンドウルフ》の『ロングレンジキャノン』を上回る射程の火器は持ち合わせていないようで、ツヴァインの目論見通り次々と村を出ると、灰の降り積もった荒野を猛進して、ジェイ達に迫る。

ツヴァインは、既に次の手に移っている。静止した《コマンドウルフ》の腰部——突き出た四本のマフラー状の機関から、黒々としたガスが噴出した。『スモークデイスチャージャー』と呼ばれるそれは俗

に言う「煙幕」の発生装置で、相手の視界を奪う事で被弾率を下げ、《コマンドウルフ》軽装甲を補うのだ。数で劣る今の戦場では相手に同士の討ちのリスクを与え、一層の効果を發揮する。一目散に掛けて来た《ダークホーン》達は、不意に閉ざされた視界に惑って、一瞬動きを止めた。

「今だア！」

ツヴァインが、通信機越しに叫んだ。

ジェイもこの機を逃さない。十分に引きつけた今なら、《ブレードライガー》に搭載された火器の射程でも命中させられるだろう。煙幕は濃い、最新の3Dデュアルセンサーを尾部に持つ《ブレードライガー》ならば、視認できずともある程度融通の利いた射撃が出来るはずだ。

主兵装『レーザーブレード』の基部に備えられた『パルスレーザーガン』のトリガーを引く。断続的に撃ち放たれるビームガンだ、一射一射の威力はそこまででも無いが、単一装甲目標への威力は《シールドライガー》の二連装レーザー砲を上回る。ばら撒かれた弾幕が《ブラックライモス》の前足を繋ぐ駆動節を粉碎し、転倒させた。

よし、と高揚したのも一瞬——次の瞬間、凄まじい轟音が耳を劈く。煙幕を吹き飛ばす程の勢いで撃ち放たれたレーザーバルカン。地面を抉りながらジェイ機の足元まで迫ると、ライガーの肩部装甲を穿つ。

「グア——ッ！」

衝撃に揺られたジェイは、眼前に現れた黒いゾイドを見据える。煙の晴れた先に立ちはだかった《ダークホーン》、その主砲『ハイブリッドバルカン』が火を吹いたのだ。

「——ベック！」

ジェイの被弾に気を割いたツヴァインの《コマンドウルフAU》にも、二体目の《ダークホーン》が『ハイブリッドバルカン』を見舞う。ウルフの軽装甲であれを喰らえば、ひとたまりもない。砲弾の雨の中を、どうにか掛けて躲すツヴァインだが——光弾が掠めて、脚部のアシスタントブースターが一基爆ぜる。

「——くっ！」

《ブレードライガー》を起こしたジェイは、ツヴァイン機を狙う《ダークホーン》に向けて腹部の『二連装ショックカノン』を撃ち放った。衝撃波はホーンの背部を掠め、『ハイブリッドバルカン』の弾倉を粉碎する。付随する火器類を暴発させて、《ダークホーン》が炎上し、倒れこむと——これで、三機撃破。残るはライモスが二機に、《ダークホーン》が一機だ。

二対三。数の不利は、大方覆したと言っている。

押し切れる——、と判断したジェイだが、直後バチと火花が爆ぜて、機体を高圧電流が襲う。側面に回り込んだ《ブラックライモス》の主砲『大型電磁砲』が直撃したのだ。損傷はそうでもないが、制御回路が変調を来たした。操縦が利かない。動きの鈍ったライガーに、《ブラックライモス》はドリル状の角を振りかざして突貫して来る。

（——まずい！）

このままだと、ライモスの一撃は《ブレードライガー》の頭部に直撃する。強靱な生命力を持つライガーは問題なからうが、ドリルがキャノピーを碎けば、ジェイは精肉機に掛けられたみたく粉碎されるだろう。「ウワアアッ！」と、腹の底から絶叫したジェイ。「——おい！」と叫んだツヴァイン機の援護も、これでは間に合わない。

もうだめだ、と目を伏せた瞬間——《ブラックライモス》が閃光に呑まれた。高出力ビームだ、頭部を吹き飛ばされて、ゆっくりと崩れ落ちるライモス。何事か、と振り返ったジェイは、火線の先に立つ、高速ゾイドの群れに気づく。

「——まったく。本当に、おまえの独断専行には手を焼かされるな……ツヴァイン」

通信機越しに聞き取れた、コンボイ小隊長の声。《コマンドウルフ》二機を従えて、彼方の荒野に屹立した《シールドライガーDCS》が、力強い咆哮を上げる。ジェイとツヴァインは、思わぬ援軍の参戦に呆けて——目を剥いた。

## ⑪ 怒り

現れた《シールドライガーDCS》と、二機の《コマンドウルフAU》——コンボイ小隊長の率いる307小隊・A分隊の機体達だ。アルファツヴァインとジェイに斥候を任せて、野営地で待機しているはずのコンボイ達が、何故此处に——？ 疑問に思ったジェイ達に、小隊長からの通信が入る。

「いつまでも戻ってこないから、何処で油を売っているのかと思ったが——やはり、まだ死んではいなかったようだな」

「し、小隊長……」

決まり悪そうに言葉を濁したジェイを、モニターに映った小隊長は怪訝そうに睨む。「話はいい……今は帝国軍を殲滅する方が先決だ。お前達が始めた戦いだというのならば、まずはそれをやり遂げろ」と、その場に立ち尽くすA分隊の機体達。アルファコンボイの砲撃で、さらに一機が破壊されたから、敵も残りは二機——《ダークホーン》と、《ブラツクライモス》が一機ずつだ。

「……はっ！」

コンボイの叱咤に、ジェイは腹の底から返答を叫ぶ。愛機も、電磁砲で受けたダメージから立ち直りつつあった。操縦桿を引き、再びライガーを始動させると、ほぼ同時に、視界の端で蹲っていたツヴァインの《コマンドウルフAU》もゆっくりと起き上がって、残る《ブラツクライモス》へと飛び掛かる。

《ブレードライガー》が咆哮した。手傷を負わされたことに対して激発したかのような、凄まじい気迫を吐く。心を噛み砕かれるかのような凄まじい破壊衝動とプレッシャーがジェイを苛んだが、それを受け止めて、ジェイは機体を力強く扇動した。

「ぬおお……行くぞ《ブレードライガー》！」

ジェイ達の再起に気づき、《ダークホーン》が嘶く。背に背負った『ハイブリッドバルカン』が轟音を立てて火を吹くが——《ブレードライガー》の瞬発力は、さらに早かった。バルカンが撃ち放たれるとほぼ同時、既にライガーは跳躍し、口腔の牙で《ダークホーン》の喉元



に喰らい付いた。そのまま膂力だけでホーンの躰を持ち上げるや顎力を込め、ミシミシと首筋を軋ませる。

苦悶にもがいた《ダークホーン》が錯乱し、装備していた火器を煩雑に撃ち放つ。だが、既に懐に潜り込み、死角たる首筋を捉えている《ブレードライガー》には掠りもしない。

「うおおおッ！」

絶叫したジェイの気迫を合図に、《ブレードライガー》はさらに力を込めると——《ダークホーン》の中樞は完全に噛み砕かれ、停止した。

戦いの後……《ダークホーン》、そして《ブラックライモス》達の残骸が散らばった荒野で、307小隊の全員が合流した。グロック少尉率いるB分隊の《シールドライガー》、《コマンドウルフ》が警戒に当たる中、レイモンド主任はジェイの《ブレードライガー》、ツヴァインの《コマンドウルフAU》の損傷を診る。

そして——当のジェイとツヴァインは整列し、小隊長スターク・コンボイ大尉の詰問を受けていた。

「何か弁解はあるか？ ジェイ少尉」

真顔かつ物静かながら、コンボイはジェイへの不信を露わにそう問うた。帝国領での調査任務、それも隠密性が特に重要な斥候の任を任されているながら、帝国軍に真っ向から戦闘を仕掛けた。本来ならば返り討ちに合って、小隊の侵入を敵に露呈させる事態だって起こり得たのだ。

どのような処遇を受ける事となっても、文句は言えまい……そう思っ、ジェイが事の次第を喋ろうとした時だった。

「——ソイツは、なんも後ろめたい真似はしてねえよ」

と、ツヴァインが仏頂面で言った。

「とろ臭いベック少尉を置いて俺が先行したら、この村に屯ってる帝国軍を見つけた。旦那への手土産にしようと思って、勇んで挑んだんだが……ドジっちまってな。危なくなつた所を、勇敢な少尉殿が一人助けに来てくれたんだよ」

ツヴァインの言を聞いて、コンボイは訝しげに眉を顰める。

当然だ——いくらツヴァインが凄腕で、自らの腕に圧倒的な自信を持つていたとしても、《ダークホーン》級のゾイドを複数含んだ部隊に単機で挑むのが無謀だと分からはずはない。現に彼はそれを懸念して、《ブレードライガー》に乗るジェイを同伴者に選んだのだから。余りにも苦しいウソで濁そうとした傭兵を、ジェイはチラと盗み見た。それに気づいてか、フンと荒い息を吐いたツヴァインは、（——余計な事は言うな）と目配せする。

コンボイも、当の昔に違和感に気づいているのだろう。暫しジェイとツヴァインの二人を見据えていたが——、

「今は止そう。ペガサス中佐に託された任務を完遂してから——ジェイ少尉、君の処遇を決める」

そう言つて、小隊長は背を向けた。

アルファ A 分隊のパイロット達、そして チャーリー C 分隊のフリーマン軍曹に向けて、「村に入って、生存者を探せ」と指示を出すと、ジェイとツヴァインにもそうするよう促す。

……はっ、と返事を返してその背中に敬礼したジェイは、次いで歩み寄ってくるレイモンド主任に気づいて、振り返った。やあ、と笑顔を見せたレイモンドは、先ほどまで整備していたジェイの《ブレードライガー》を振り変えると、「たった二機で、機甲師団のゾイド部隊に挑むとはね。君は本当に破天荒なパイロットだよ」と、苦笑いする。

「だが——それぐらいのパイロットの方が、《ブレードライガー》とは相性がいいのかも知れない」

冗談めかして付け足した技術士官に、ジェイは愛機の容体を聞いた。特に、《ダークホーン》の主砲をもろに受けた脚部の損傷が気になる。

ジェイの懸念を、問題ないよ、と、レイモンドは即答して、

「元々装甲部分はかなり堅牢に作ってあるけれどね——それでも特筆すべきは、『オーガノイドシステム』の再生力だ。ビームガトリングが直撃したのに、肩口の亀裂はもう塞がり始めている……やはり性能だけなら、《ブレードライガー》は我が軍最強のゾイドたり得るスペック

を持っているよ」

「……あの扱い辛さを改善できれば、ですが」

「そうだね。そして、その打開策を得るために、僕らは此処まで来ているんだけど……」

レイモンドは廃墟とした集落、そして散乱した帝国軍のゾイド達を見渡した。技術士官である彼にとって、この凄惨な光景は見慣れた物ではなからう。動揺、怖れ——そしてここへ住んでいた者達への同情を滲ませる、彼の表情を見取ったジェイだが、

「さあ——少尉も行きたまえ。まだ村には生存者がいるかもしれない。それに、帝国軍達の目的が僕らと同じなら、この村にはその手掛かりが残されている、というのも有り得るだろう」

「……ああ。そのために、俺もツヴァインも戦ったんだ」

既にツヴァインの姿は無く、コンボイ達と共に村へと入っていた。レイモンドの言葉に後押しされて、ジェイも村の奥へと歩みを進める事にした。この村を救う事が出来ていればいい、と、彼は切に願った。そうすれば、傭兵ツヴァインの心を苛むモノを——故郷を失った、という彼の負い目も、少しだけ清算できるかも知れないのだから。

靄の掛かった視界は、朝方の冷え込みのせいではない。廃墟の間を、灰色の空気が立ち込めている。焼き払われた村の節々から煙が立ち込め——その焙じられた空気の中に、血と『死』の臭いが混じっているのを感じたジェイは、眼前に広がる光景の凄惨さに眉を顰めた。

瓦礫の中で銃殺されたであろう村人達が、無雑作に転がっている。崩落した瓦礫に塗れた者、ゾイドに踏みつぶされたのであろう、『血の華』の如き粉碎死体が、そこら中にだ。ベック少尉、と駆けて来たフリーマン軍曹に気づき、「……軍曹、生存者はいたか？」と問うたジェイだが——軍曹は神妙な面持ちで、頭を振る。

「やはり奴らも、我らと同じモノを求めて……？」

「いや——分からない」

フリーマンの問い質に頭を振ったジェイ。だが、ただ享楽のために、未だ地殻変動の収まらぬ危険地帯の村を破壊するとも思えなかつ

た。

——そこまで考えて、ふとあの改造《ダークホーン》を想起する。帝国部隊を退けたジェイ達であったが、まだ奴と、その配下の《ブラツクライモス》達の行方が知れない。もし増援を引きつれて戻ってくるような事があれば、今のジェイ達の戦力では手に負えないだろう。ならば、ここに長居をするわけには行かない。

墓場と化した町並みを直視しないよう目を細めながら、ジェイはコンボイ小隊長を探した。すると、道中にあつた一件の空き屋の前で、傭兵ツヴァインの後ろ姿を見つけて、立ち止まる。

「ツヴァイン……？」

廃屋の中にある何かを、ジツと凝視して固まったツヴァインに、ジェイは恐る恐る声を掛け、歩み寄つた。そして——深淵の中に横たわつたそれに気づき、呆然とする。

凌辱された、少女の亡骸。青白い肌と、銃弾を浴びて吹き出した血の痕——頬を伝って、まだ乾ききつていなかった涙の痕がやるせない。それを、立ち尽くしたツヴァインが、ジツと見据えている。その唇はワナワナと震え、硬く握りしめた拳からは血が滴つて落ちた。

「……同じだ。戦争屋共は、こうやって踏み躪つていったんだ。エウロペを——俺の生きた世界を」

抑揚無く言つたツヴァインに、ジェイは駆ける言葉を持ち合わせていなかった。ツヴァインは——そしてジェイは、この村を救えなかつた。

「——少尉」

煙にぼやけた視界の果てから、コンボイ小隊長が戻ってくる。絶望に呆けたジェイ、そして物言わぬツヴァインを一瞥した彼は、「生存者はいない。この村を発つぞ」と短く言つた。小隊長の手には、幾枚かのデータディスクが握られている。おそらくは村を制圧した先のガ

イロス軍の所持品であろう。

「ガイロスの特務隊が、既にオリンポスに入っている。このディスクに残されていたのは、奴らの取った周辺の見取り図だ。我々もこれより山頂に赴き——奴らよりも先に、『オーガノイドシステム』のデータを発見、持ち帰らなければならぬ」

データディスクを翳して宣言したコンボイは、つとめて冷静だった。それは、この戦いを生きる兵士としてなくてはならない、軍人としての精神力の表れだろうが——痛々しいツヴァインの背を前にしたジェイには、やるせないものがあつた。

## ⑫ 灰の山

——ZAC2100年 五月 メルクリウス・オリンポス

半年前、ヘリック・ガイロス両軍の激突が引き起こしたオリンポス山の崩壊は、周辺の地図を書き換えなければならぬほどの大災害を引き起こした。『エウロペの屋根』と称された山を囲むように広がっていたドーナツ状の湖・メルクリウス湖もその煽を受けており、噴き出した溶岩と地殻変動によって湖の一部は隆起し、今、山頂と周辺の荒野とは陸続きになっている。

戦火とそれに伴う災害によって湖を渡るための橋は崩落していたため、307小隊にとつてはありがたい誤算ではあった。コンボイ小隊長の《シールドライガーDCS》が筆頭となって駆けると、後を追うようにグロック少尉の《シールドライガー》、ジェイの《ブレードライガー》、そして各隊の《コマンドウルフ》達が続く。

蒸気を上げる黒土の足場は、形成されたばかりの原始の大地だ。日頃目にするこの無い異様な光景に、息を呑んだジェイ。すると、「——ベック少尉」と、後部座席のレイモンドが声を掛けてくる。

「フリーマン軍曹からの入電だ。《コマンドウルフ》の解析によると、何者かがこの道を通った痕跡があるらしい。中型ゾイドが複数……そして一機は《レッドホーン》級の機体だ」

「《レッドホーン》級……」

送られてきた解析データに、ジェイは眉を顰めた。地面に残されたそれは、帝国製ステイラコサウルス型ゾイドの足跡と一致する痕跡。ジェイには覚えがある——おそらくはあの村に駐留していた、エリマキに六つの房を生やした、異形の改造《ダークホーン》が率いる部隊だろう。それが、未だ地殻変動の収まらぬオリンポスの山頂に向かっているのだ。

彼らの目的はやはり、ジェイ達と同じ——『オーガノイドシステム』。

「分かりきっていた事だ」

と、コンボイ大尉がオープン回線で告げた。

「この道程はあの廃村で解析した、奴らのデータディスクに残されていたルートだ。間違いなくオリンポスに通じているだろう。そして、既に帝国の調査部隊が山頂に到着し、何らかの古代テクノロジーを手にしている可能性は高い。戦いは避けられんだろうな」

コンボイの推測に、「望む所ですよ隊長。任務をこなすついでに、ガイロス野郎を叩き潰せるなんて、願ったり叶ったりだ」と、グロツクが気合いの入った物言いですべて応じる。ジェイとツヴァインが帝国機甲師団と交戦したと聞き及んだ時も、自分も戦いたかった、と残念がったグロツクだ。血気盛んな彼らしい反応だったが——ツヴァインの気持ちを慮り沈んでいたジェイは、温度差を感じてしまう。

亡骸達を吊って村を後にしてから、ツヴァインは一言も口を開かなかった。虚ろで——しかしその中に、確かな憎悪を宿したツヴァインの眼差し。戦争を始めたガイロス、そしてヘリックへの怒りに曇ったその目は、ジェイの脳裏にしかと焼き付いている。ただ黙々と歩みを進める彼の乗機に、ジェイは《ブレードライガー》を寄せて声を掛けようとしたが——相応しい言など、見つかるはずもなかった。

山中を進む307小隊が、ようやくと山の中腹辺りに差し掛かった時だった。「ジェイ少尉」とジェイに連絡を入れたのは、コンボイ小隊長だった。暫し会話の無い行軍が続く、物思いに耽っていたジェイだ、「ハッ……」と慌てて身を引き締める彼に、小隊長は神妙な面持ちで問うた。

「少尉が懸念しているのは分かっている……ツヴァインの事だろうか？」

「——ッ」

見事に言い当てられたジェイは、思わず口ごもる。

「彼の過去は、私も多少聞き及んでいる。この赤の砂漠レッドドラストに住まう、『砂の民』の出身である事。そして……半年前、両軍のオリンポス争奪戦の最中——彼の故郷は戦火に巻き込まれ、全滅した」

淡々と語ったコンボイ小隊長は「救いの無い話だが……戦時中に置

いては、良く在る悲劇の一例に過ぎない、と言わざるを得んな」と頭を振った。

その通りであろう。いつだって戦争では、平穏な生活を営む者達の本場が戦場と変わる物だ。その中で、理不尽な争いに巻き込まれる罪なき人々が何人居ようか、おそらくは数えきれまい。

だが——エウロペの地を砲弾の飛び交う戦場に変えたのは、異邦より侵略してきた帝国と共和国だ。ツヴァインはヘリックの正規兵ではない。彼を戦いに駆り立てるのが、本当ならあるはずの無かった『悲劇』であると思えるからこそ——ジエイはやるせなかつた。

「……我々は、正しい戦争をしているのでしょうか？ 軋轢があるのはガイロスとヘリックであって、エウロペは関係ない。ツヴァインを……エウロペの民を死地に駆り立てて、俺達は……」

苦虫を噛む思いで、戸惑いを口にしたジエイ。それをコンボイは、「少尉よ、戦いに正しきなどありはしない」と断じた。

「我々として、エウロペの者達を巻き込みたく思ってたのではない。戦争とは、『戦い』とはそうやって、大きな余波を拵げながら起こる物なのだ。争いの火種となったガイロス、ヘリックは、悪と言って差し支えなからうが——その業は、既に両国が償える範疇をとうに越えている。彼らの傷を癒せるのは、他ならぬ、傷を負った彼ら自身しかないのだ」

コンボイの言葉は、道中に広がった景色が証明してくれている。両国の争いは、美しい山であったであろうオリンポスの山体を見るも無残に崩落させ、メルクリウスの湖畔にあったであろう美しい緑を焼きつくし、灰の中に鎮めた。そして今度は——本来ならば秘匿され然るべき『古の技術』を、盗掘紛いの真似をして持ち出し、戦争の武器として利用しようとしている。

おそらくは、両国がその全てを捧げても癒やしきれぬ傷だ。それをジエイ一人が慮った所で、何が出来ようか——答えは、出るはずもなかった。

歯がゆさに目を伏せたジエイに、「ツヴァインは今、正念場に立っている」と続けたコンボイ大尉。



「そして、それは君も同じだ、ジエイ少尉。ヘリックのゾイド乗りとして、彼らに何か手向けたらという思いがあるというのなら、まずは君自身が生き残らなければならない。戦いの果てに贖罪の道を探すために……今は生き延びろ。それが君のためでも、ヘリックのためでも——そしてエウロペのためにもなる」

「はっ……」

迷いを断ち切れぬまま、ジエイはその言葉に頷いた。

直後、ライガーの計器が異常な数値を示し始める。暗雲立ち込める空に、雷鳴……異常な雰囲気に逸る乗機達。磁気嵐の影響が強まってきた事に気づいて、各員は事前にインストールしてきた『パルスガード』システムを起動させた。標高は本来のオリンポスからしてみればまだ中腹程度であろうが——既に道は無く、これより先は崩れた山肌より、灰と、泥流が滲み出るのみだ。

「どうやら——この先が今でいう『山頂』になるらしいな」

グロックが緊張気味に呟く。うむ、と短く頷いたコンボイは、数秒の『無言の思考』の果てに『パルスガード』の限界は二時間弱だ……、往くぞ」と扇動して、《シールドライガーDCS》を走らせた。

焼けただれた崩落の後を、獅子が、狼が駆け昇り——その先に在る死の世界へと、足を踏み入れようとしていた。

たどり着いた果て——小隊員の全員が、『山頂』の光景に息を呑んだ。

一面が灰と泥流の塊で覆われていた。強烈な磁気嵐によって発生した灼熱の暴風が、辺りの煤を舞い上げ、眼前を黒くそめる。曇った視界に目を凝らすと、原始の岩場の中、所々に人工物の欠片が混じっていた。オリンポス山にガイロス帝国が築いていたという、秘密研究所の跡。

それだけではない。周囲に散らばる黒焦げの鉄塊は、よく見ると燃え残ったゾイド達の軀の一部だと分かる。《ヘルキャット》、《イグアン》……帝国の機体だけではない、微かに残った白の塗装、灰で曇ったオレンジ色のキャノピーは、見覚えがある。《コマンドウルフ》——

オリンポスに突入し全滅したという、『第二独立高速戦闘大隊』の機体だ。

そして——もう一機。この地獄の中心に佇んでいた『竜』の彫像が、皆の視線を奪った。

灰の中に突き刺さったそれは、上半身だけでありながら《シールドライガー》を見下ろすほどの身の丈。胸より下は空洞で、張り裂けた装甲が花卉のように広がっている。おそらくは灼熱地獄の中で内部から暴発したのであろうが——強靱な装甲で編まれた外骨格は、焼けただれていながらもその原型をしっかりと留めており、さながら巨大な黒髑髏のようでもあった。苦悶の咆哮を上げたまま固着する威容は、まるでこの『竜』の怨嗟の叫びが、辺り一面の地獄絵図をよびおこしているかのような錯覚さえ引き起こさせる。

「なんだ……ゾイドの亡骸なのか……」

竜の髑髏に気を取られ、呆然と呟いたジェイに、「少尉……アレを！」と、レイモンド主任が警告を叫ぶ。

パルスガードを用いても、磁気嵐の影響を相殺しきれていないのだろう、センサーの反応はまばらだったが——目視できる。既にほかの小隊メンバーも捕捉しているらしい、《シールドライガー》が、《コマンドウルフ》が、髑髏の向こうで揺れた三つの機影へと機首を向けた。  
「野郎……」

ジェイの《ブレードライガー》の横、ツヴァインの《コマンドウルフAU》が、ジリと一步前に出る。彼が昂っているのは、すぐに分かった。機影の正体は、ガイロス帝国に所属するゾイド達に間違いない。メルクリウス湖畔の村を焼き払った、帝国軍の残党。ジェイ達が執り逃した、残る三機。

二体は《ブラックライモス》。そして残る一機は、六つの房を頭部に生やした、ドレッドヘアの《ダークホーン》——コードネーム『ブラックオニキス』。異形の改造ゾイドは、緩やかな足取りでその機首を翻す——通常の機体とは異なる、真紅の眼を持って、ジェイ達を睥睨

した。

### ⑬ ブラックオニキス

バチバチと稲妻の爆ぜる暗雲。視界すら曇らせる熱砂の暴風の中、《ブラックライモス》を引き連れ悠々と練り歩く異形の《ダークホーン》に、307小隊の一行は警戒を強めた。敵は三機で、こちらは戦闘ゾイド九機——数の上では圧倒的に優位でありながら、あの改造ゾイドのもつ不遜な雰囲気も嫌でも目に付いて、不安をそそる。

「なんだ？ あの《ダークホーン》は、見たこともないカスタムタイプだが……」

キャノピー越しに揺れた威容の機体の影に、グロックが眉を顰める。「あの村を襲った奴らの残党だ。けど——」と応じるジェイも、彼の問いに明確な答えを与えることはできない。謎の機体は《ブレードライガー》のデータベースに記録された、どの帝国ゾイドとも一致しないのだ。帝国の作り出した、完全な新型か？ と、皆が首を傾げた時だった。

「まさか……《クリムゾンホーン》？」

と、レイモンド・リボリーが謎のゾイドを呼んだ。聞き慣れぬ名に、「知っているのか、レイモンド主任」とコンボイが聞き返す。

「ああ……先の大陸間戦争の、末期も末期という時期に導入されたとされるゾイドだよ。グランドカタストロフ惑星Zi大異変で発生した磁気嵐の中でも活動可能とされた、数少ないゾイドの一機だが——現存するとは……」

磁気嵐の中の活動を前提としたゾイド——つまりは、この『オリポス』に置いてても、長期に渡り運用する事を可能とした機体だ。おのずと、その目的も見えてくる。「求める物は同じか。なににせよ……これで奴らの狙いは分かった」と頷いたコンボイ小隊長は、グロック、そしてジェイの分隊に展開するよう指示を出すと、通信回線を開いて敵機に呼びかける。

「こちらは、ヘリック共和国軍特殊工作師団・第三高速戦闘隊所属、307小隊のスターク・コンボイ大尉。正面のガイロスゾイド三機に告げる——速やかに武装を解除し、投降せよ。貴様らは、完全に包囲されている」

通信を聞いていたツヴァインが、「なんで——ッ!」、と苛立つ。それを「定石だよ。我々の任務は彼らを殲滅する事ではなく、この山に残されたシステムの残滓を見つける事なんだから」と、レイモンドが制した。

無益な殺生をするくらいなら、投降してくれた方がいい……ジェイもその考えには同感であったが、事が平穩に運ぶとも思えなかった。事実、307小隊の機体達にグルと包围されつつありながら、異形のゾイド——レイモンドが《クリムゾンホーン》と称した改造機の挙動に、一切動揺の色は見られない。

《シールドライガー》のグロックも、ジェイと同じ意見らしい。「まあ——これで投降するような連中なら、苦勞はしねえわな」とごちた彼の思惟は、既に臨戦態勢にあった。

(……私は、帝国軍武器開発局所属、ヘルマン・シュミット技術大尉)

コンボイの呼びかけに、数秒の間を置いて返信が返った。発信元は、あの改造《ダークホーン》。若い男性の声だ。ヘルマン・シュミット、というのが、あの異様なホーンタイプのパイロットの名前らしい。抑揚のない男の声色は、空虚さの中に、どこか底の知れぬ冷徹さを垣間見せた。

言い得ぬプレッシャーにゴクリと生唾を呑んだジェイは、改造《ダークホーン》の機首がこちらを見据えるのに気づく。

(……そのゾイドは、《ブレードライガー》か? ガリル遺跡で、我が軍の『オーガノイドシステム』搭載機を破壊した、共和国の実験機) クク、息を吐いて微笑した帝国軍の技術士官は、(だが——、私の《ブラックオニキス》はどうか?)と続ける。

「《ブラックオニキス》……あの《クリムゾンホーン》も、『オーガノイドシステム』を搭載した実験機か?」

と、今度は、レイモンド主任が帝国士官に呼びかけた。

「シュミット大尉。ボクは共和国軍属技術局のレイモンドだ。キミ達の目的も、この山に眠る『オーガノイドシステム』のデータか?」

ならば、ここには何がある？」

技術士官の問いかけに、シュミット大尉は（——『力』さ）と即答する。

（圧倒的な『力』。ゾイド生命の全てを手繰り、意のままに操る事の出来る古代テクノロジー

それが『オーガノイドシステム』だ。この山には、その真髓が眠っている）

「力……？」

思わせぶりなシュミットの物言いにジェイはたじろいだ。山頂に上がってから、『ブレードライガー』の機体が、妙に落ち着かぬ挙動を見せる。磁気嵐のせいだけではない。目の前の『ブラックオニキス』、灰に埋もれし巨竜の骸、廃墟——ここにあるあらゆるものに、闘争本能を掻きたてられているかのようなだった。

——この山に、何が眠っている？ 『オーガノイドシステム』の真髓とは、何を意味するのか？

ジェイの緊張を余所に、307小隊の面々は交戦の意思を強めていく。「——退くつもりはない、という事か？ ヘルマン・シュミット大尉」と問うたコンボイ。『ブラックライモス』、そして『ブラックオニキス』を包囲した307小隊の『コマンドウルフ』達は、臨戦態勢を整えつつシュミットの返答を待った。沈黙の果て、（逆に問おう）と嘲笑の意を滲ませた声で返したシュミットは、

（オリンポスは既にガイロスの物、なぜ貴様らに促されて、我らが去らねばならぬというのだ？ デルポイの、下等種族共）

と、一行を嘲笑る。

シュミットの挑発に、「——では、仕方あるまい」と、コンボイは淡々とした風に返して、通信を切る。次いで各分隊機に電信を送り、「たつた三機だ、包囲して片付けろ——後の任務の事もある、遺構には極力傷を付けぬよう気を遣え」と、指示を出した。

307小隊の機獣達が、一斉に牙を剥く。

コンボイの指示を待つまでも無く、『コマンドウルフ』達は駆け出し

ていた。先陣を切る、ツヴァインの《コマンドウルフAU》が、甯猛な吐息を吐きながら《ブラックオニキス》に迫る。「……関係ねえよ」と、ツヴァインがごちた。

「関係ねえんだよ。お前が何者かなんて、お前の目的が何なのかなんて！ あの村を、俺の故郷を——エウロペの村を焼いて回ったガイロス帝国は、俺の敵だ！ ぶっ殺してやる！」

『二連装ビーム砲座』が、『ロングレンジキャノン』が火を吹いて、ヘルマン・シユミット率いるゾイド部隊に光弾を見舞う。重装甲を誇る《ブラックライモス》とさえい、《コマンドウルフ》級のゾイドに集中砲火をされてはひとたまりもない。動くこともままならず、ジリジリと密集していくライモスたちに、「くたばれ、ガイロスの人でなし共！」と、ツヴァインは猛った。

すると——猛撃に爆ぜる大地の中で、ギロと、《ブラックオニキス》の眼差しが光る。

（愚か者共よ、括目せよ——『オーガノイドシステム』の真髄を模索し作り上げた、私の『黒い宝石』の輝きを）

怖気が背筋を伝って、ジェイは呆けた。

真つ先に飛び込んでいった《コマンドウルフ》達の背後で、ジェイの《ブレードライガー》は出遅れていた。並走する《シールドライガー》から、「何してるベック！ 俺達も行くぞー！」と、グロック少尉がまくし立てる中——プレッシャーを感じたジェイは、ブレーキを思い切り踏み込んで、ライガーを急停止させると、

「ツヴァイン止せ——突っ込むなっ！」

と、声を張り上げた。

ジェイの警鐘は、遅かった。

《ブラックオニキス》の角ばった背中からせり出す、五機の『30m m二連ビーム砲』——一機二門・計十門もの砲塔から、一斉に光線が撒かれたのである。光のシャワーが《ブラックオニキス》の周囲360度を薙ぎ払う。停止し、機体を屈ませていたジェイと、彼の言を聞いて警戒していたグロックの《シールドライガー》は、どうにか一斉照射を避ける事が出来たものの——突貫に気を割いた《コマンドウルフ

フ》部隊は、そうは行かない。

高出力のレーザーが次々と《コマンドウルフ》の機体を薙いでいく。ある機体は心臓部・ゾイドコアを貫かれ、またある機体は頭部コクピットを正面から焼き払われた。重装備・『ロングレンジキャノン』を破壊され、誘爆で花火の如く爆ぜる機体もある。

「グアアアア！」

先頭を往くツヴァインの《コマンドウルフAU》も、レーザーを避けきれずに被弾した。右の前足をレーザーで焼き切られたのだ。勢いを余して横転すると、衝撃で『ロングレンジキャノン』の砲身が曲がり、スタビライザーが千切れ飛ぶ。

「なんて火力だ……ッ！」

ジェイの後ろで、レイモンド主任が絶句した。《ブラックオニキス》の吐き出したレーザーで、小隊はほぼ壊滅したのだ。十門もの火砲を最大出力で照射し続ける、強大なジェネレーター出力。それを支える《ブラックオニキス》のゾイドコアは、通常の《ダークホーン》とは比べものにならないだろう。『オーガノイドシステム』搭載機としての完成度は、《ブレードライガー》と同等か——それ以上だ。

「ヤロオ！」

レーザーの弾幕が途切れるのを見取って、グロックの《シールドライガー》が跳躍する。『エネルギーシールド』を展開し、必殺の『レーザーサーベル』を煌めかせた突貫攻撃だ。最高速の疾走で、《ブラックオニキス》の首筋を狙う。が——、

《ブラックオニキス》の背から伸びたりニアキャノン・マニユピレーターが、ライガーの突撃を見切り、受け止めた。時速200キロを超える疾走を、あっさりと捉える瞬発力。そのままアームに力を込め、ライガーの首根っこを締めたまま持ち上げる。ミシミシと軋んだ《シールドライガー》が拘束から逃れようともがくが、『オーガノイドシステム』で強化された《ブラックオニキス》の臂力に、歯が立たないでいる。

「ツヴァイン、グロック——くそッ！」

次いで、ジェイの《ブレードライガー》が挑みかかった。『二連装



シヨックカノン』を撃ち放ち、グロック機をとらえたアームを破壊せんとするが——通じない。細身ながら堅牢に作られたアームユニットは、最新の衝撃砲を見舞われてもその握力を緩めなかった。

ならば、と意を決したジェイは、疾走を掛けて体当たりを見舞う。轟砲を上げ、闘争心をむき出しに牙を剥く《ブレードライガー》。『クラッシュヤーホーン』を翳して迎え撃つ《ブラックオニクス》と、正面からぶつかるが——、

「——グアッ！」

グイと傾くコクピットの中で、ジェイは呻いた。『オーガノイドシステム』で強化された機体同士ながら、《レッドホーン》と《シールドライガー》、ベース機のパワーで《ブラックオニクス》が勝っている。地べたに打ち付けられた《ブレードライガー》を足蹴にして、異形の帝国ゾイドは甲高い嘶き声を上げた。

（脆いな、《ブレードライガー》）

嘲りの言葉と共に、ジェイのライガーを蹴り飛ばす。宙空を刎ねて墮ちるライガーのコクピットで、ジェイとレイモンドが絶叫した。それを横目に見た《ブラックオニクス》は、捕えたグロック機も放り捨てると、頭部に備えた六本の房——特徴的な『ドレットヘア』を展開し、微動させる。

（貴様ら劣等種に、私の崇高な目的を咎めることはできない。此処に散らばる骸達、その一つとなるがいい）

六つの房が、それぞれの先端にバチバチと閃光を収束させたのを見遣って、ジェイは理解した。あの『ドレットヘア』は、ただの装飾ではない。六つのシリンダーは、先の弾幕以上の破壊力を持った光線を撃ち出すためのバレルなのだ。背後の座席、負傷し、頭部から血を流したレイモンドが、稲妻を湛えた《ブラックオニクス》に気づいて、固唾を呑む。

「か、荷電粒子砲——ッ!?!」

次の瞬間——凄まじいまでの光の奔流が、307小隊の機体達に向けて撃ち放たれた。

⑭ 『テクノロジー』

『荷電粒子砲』。

惑星Ziにおけるそれは、大気中の静電気を吸収・増幅させて撃ち出す光線兵器であり、その一撃は照射対照を原子レベルまで分解する。物理装甲での防御は不可能、大出力の物であれば《ゾイドゴジュラス》のような超大型ゾイドすらも丸ごと消滅させることが可能な、名実共に最強の装備である。かつてヘリック共和国を度々崩壊の危機に陥れた帝国のゾイドは、軒並みこの『荷電粒子砲』、もしくはそれを応用した殺戮兵器を搭載していた。

《ブラックオニクス》に搭載された『加速荷電粒子偏向砲』は、出力自体は極端に高いわけではない。だが、稼働する六基の砲塔から撃ち出されるその弾速は速く、「回避不可能」と断言しているほどの射角を誇る。降り注いだ光線が、生き残った《コマンドウルフ》を、《シールドライガー》を、そしてジェイの《ブレードライガー》を、次々と捉えていく。

「ク……ッ」

何とか機体を起こして跳躍させるが、光線がさつきまで居た地面を抉り、爆風がライガーの頬を焦がす。さらに一射、二射——六つの房から次々と荷電粒子ビーム砲を放つ《ブラックオニクス》は、碌に狙いを定めていない。ビームの絨毯爆撃に、残る《コマンドウルフ》が次々と撃ちぬかれていく。そして——、

「ア……ウワァーッ！」

爆散した《コマンドウルフ》から聞こえた断末魔に、ジェイは蒼白となった。「……フリーマンアァンツ！」と部下の名を叫ぶが、返事はない。ジェネレーターを撃ちぬかれたフリーマン軍曹の《コマンドウルフ》は、やがて水風船の如く膨れ上がり、爆発・四散した。

死したのはフリーマン軍曹だけではない。アルファ A・ブラボー B 分隊の《コマ

ンドウルフ》達も——それだけではない、《ブラックオニクス》の友軍であるはずの《ブラックライモス》までもが、『六連加速荷電粒子偏向砲』の一撃を浴びて、粉碎される。

「味方ごとやるのか!? 同じガイロスだろうに——ッ!」

ボロボロの機体、必死に『エネルギーシールド』を張って耐える《シールドライガー》のкокピットの中で、グロックが戸惑った。（——同じではない）と、それを嘲笑ったヘルマン・シュミットは、あろうことか残る一機の《ブラックライモス》も荷電粒子の渦に曝した。光流に吞まれ悶絶するライモスを横目に、シュミット大尉は不快そうに眉を顰める。

（私の仲間は、正統なる飛竜十字の血族のみ。ここに同伴したのは、かつて暗黒の軍門に降った異邦の者達の末裔——霸王ガイロスの情けに縋り同胞となった、翼の生えた蛇共に過ぎない）

ガイロス帝国は、群雄割拠にあつた暗黒大陸を、先代皇帝霸王ガイロスが武力で統一して生まれた国家である。現在は混血が進み、その慣習は失われているもの……ブラッディゲート、ゴッドクライ、デビルズメイズ——同じニクス人と称されてはいても、古代都市トロイヤを発祥とする真のガイロス族と、これらの国より合流した者との間には、明確な身分差が存在した。そんな帝国の中で、今なお冷遇される位置にあるのが、かつてヘリック共和国に滅ぼされた『ゼネバス帝国』出身の者達である。彼らの多くはこの西方大陸戦争においても下級兵士として、ガイロス出身の上級士官の駒となり、従軍している。《ブラックライモス》のパイロットも、そんな出自にある者だ。

そして——ヘルマン・シュミットは、自らが純血のガイロス人であることを信じて疑わなかった。

「差別主義者が……とち狂ってるぜ、オマエエツ!」

ボロボロの機体を必死に手繰りながら、ツヴァインが吠えた。荷電粒子のシャワーを縫って《ブラックオニクス》に隣接すると、辛うじて機能する『ロングレンジキャノン』の一門から、光弾を撃ち放つ。

——閃光。会心の一撃が漆黒の角竜の右肩に直撃するが……ダメージはなかった。重装甲の《ブラックオニクス》には、最新鋭の『ア

タックユニット』すら通用しない。反撃にレーザーを撃ち込みながら、(貴様は、エウロペ人か)と《コマンドウルフAU》嘲ったシユミット大尉。

(古の秘宝を守るために生まれた、エウロペの埴輪共。ヒトモドキ 貴様らに理解してもらおうとは思わない。我らはただ、お前達の持つ『力』を徴収し、あるべき権威を取り戻すのみ——ニクスの竜、誇り高き竜騎兵ドラグーンたる我らの友を)

「何を、言つてやがる……っ!?!」

呆けたツヴァインに、シユミット大尉は返答しなかった。その代わりとばかりに、《ブラックオニキス》の房から放たれた雷霆が飛び——《コマンドウルフAU》の半身を吹き飛ばした。

《ブラックオニキス》の砲撃が止む頃には、ほとんど全てのゾイドが沈黙していた。ツヴァインの《コマンドウルフAU》も、グロツクの《シールドライガー》も、既にまともに動ける状態に無い。辛うじて動けるのは、比較的損傷が少なく、強靱な生命力を有する《ブレードライガー》。しかし、荷電粒子の雨の中を避けるのに全霊を使い果たしたジェイには、既に反撃に転じる余力が無かった。

遮るものの無くなったオリンポスを、《ブラックオニキス》が悠々と練り歩く。

(私の目的は、『オーガノイドシステム』の力を用いて、かつてガイロスを支えた飛竜型ゾイド達を復活させることに在る)

と語ったヘルマン・シユミットは、灰の中に屹立した、あの『巨竜の骸』の前で歩みを止めた。

(『オーガノイドシステム』の真の力は戦闘力の向上ではない。ゾイド生命体の代謝を高め、急激な成長を促す。その特性を応用することで、既に石化したゾイドコアから、新たな幼生を生み出す事が可能なのだ。オリンポスでは、その実験が行われていた……この《デスザウラー》が、その被験体だったらしい)

シユミットの告げるオリンポスの真相に、息も絶え絶えの307小隊が固唾を呑む。「《デスザウラー》だと……ッ!?!」と、レイモンド主

任が驚愕し、灰に埋もれた『死竜』の黒髑髏を見上げる。

ジェイも、そのゾイドの名は聞いた事があつた。ジェイの生まれ、遙か前の話——ヘリック共和国と中央大陸の派遣を争った『ゼネバス帝国』が開発し、一度は首都ヘリックシティを陥落させるにまで至つた、最強の機動兵器である。ガイロス帝国は、それを復活させようとしていたというのだ。

混戦の疲弊すら忘れて、レイモンド主任が声を上げた。

「馬鹿なツ。確かに『オーガノイドシステム』はゾイドの生命力を高め、コアの活動を活性化させる。でも、ゾイド因子からクローニングを行い、あまつさえ戦闘ゾイド化できる程に急成長させること等、できるはずが——」

（我々は、その過程を最も如実に観測できるサンプルを用いて実験を行い成功させたのだ——その埒輪共を使つて）

《ブラックオニクス》の紅い眼が、半壊したツヴァインの《コマンドウルフAU》を見つめる。その意図が分からず、「どういう……事だ？」と小首を傾げたジェイは、やがて悍ましい推論にたどり着き、生唾を呑んだ。

愉悅に破顔しながら、『オーガノイドシステム』は、ゾイドコアに作用する強化プログラムだ」とシユミット。彼は直後、ジェイの予想を確信に変える一言を放つ。

（金属生命体のゾイドコアとは、ゾイド生命体の脳や臓器と言つた、生命活動に必要な全ての機能の凝縮だ。ならば……それと同様の機能を備えた人体とは、最も変化を観測し易いゾイドコアと言えるのではないか？）

荒唐無稽な話、とさえ思えた。

しかし、惑星Ziの生命の始まりは海、金属成分を多分に含んだ海水が機械獣ゾイドの発展の由縁となつたのだが——生命の起源を同じくする惑星Ziの人類もまた、微かながら金属細胞を持つ生命体なのである。『オーガノイドシステム』が金属生命体に作用するテクノ

ロジードとすれば、その対象が『ゾイド』だけとは限らない。

(なぜ我らが、開戦後ごくわずかの時間で、エウロペのテクノロジーに目を付けたと思う？　ヘリック軍が上陸し戦いの支度を整えるまで、我々はただ手をこまねいて待っていたと思うか？　——否、我々はその間、あらゆる研究を行使し知つたのだ、このエウロペに眠るテクノロジーの素晴らしさを。そこに住まう『ヒトモドキ』共を糧にするこ  
とでな)

「人体を……征服したエウロペの人々を『被検体』にして、システムを解析したのか……ッ！」

悪魔の所業——恐怖と驚愕に声を震わせたレイモンドの問い質に、  
(——左様)と即答したヘルマン・シュミットは、その全容を語る。

(受容器となるゾイド因子を思考体に埋め込み、『オーガノイドシステム』がゾイドコアに作用する際に発生するノイズを、電気信号として送り続けた。それによって生じるバイタルの変調、思考の変化、身体強度、演算能力まで——幾人ものサンプルを遣い、その全てを事細かに記録した。被験者は皆『感情』が破壊されて廃人となるか、細胞崩壊を起こすかして、みつとも無い最期を遂げたがな)

想像するも悍ましい光景を、ヘルマン・シュミットは高揚すら感じさせる調子で謳つて見せた。

無線越し、「テメエエツッ！　人を、人の命を何だと思ってやがるウウツ！」と、ツヴァインが絶叫する。が——彼の怒りに反して、既に愛機《コマンドウルフAU》は停止し、微動だにできない。空しく響き渡った傭兵の怒声を無視し、シュミットは続ける。

(そして、もう一つ。システムの影響下にある人体から検出された体内物質を細胞に取り込む事で、既存技術とは一線を画す精度の『クローニング』が行えることも分かった。オリンポスの《テスザウラー》復活計画、そして私の悲願を叶える力が、システムにはある——私は、必ずそれを手に入れるッ！)

《ブラックオニクス》が踵を返し、一行に止めを刺そうと迫った。

真つ先に狙われたのは、シュミットへの怨嗟を叫び続ける、ツヴァ

インの機体。動くこともままならぬ《コマンドウルフAU》を《ブラツクオニクス》の蹄が踏みつぶそうとした時だった。疾風の如く駆けた《シールドライガーDCS》が、漆黒の巨体に体当たりを見舞って、その軌道を逸らす。

ガクン、と揺れた《ブラツクオニクス》のコクピットで、シユミツトは舌打ちをした。この場には不釣り合いな、緑化迷彩を施した《シールドライガーDCS》——その機体から、エース級パイロットの持つ気迫を感じ取ったシユミツト。（そう言えば、隊長機がまだ残っていたな——スターク・コンボイ大尉と言ったか）と呟いて、機首をライガーDCSへと向ける。

（——だが遅かったな。既に貴様以外、動ける機体は一機も無い）

勝ち誇るシユミツトの《ブラツクオニクス》が、頭部に備えた大角『アッドクラツシャーホーン』を振りかざして、ライガーの喉元を狙った。紙一重で突きを凌いだコンボイ大尉は、『八連ミサイルポッド』に『二連ビーム砲』、そして切り札の『ダブルキャノン』を見舞うが——重装甲の《ブラツクオニクス》には通じない。

コンボイ大尉の《シールドライガーDCS》と《ブラツクオニクス》の一騎打ちを横目に、ジェイは無力さに歯ぎしりする。無線には、絶えずツヴァインの絶叫が流れ込んでいた。「ウオオオオ！ 動け、動いてくれエエエ！」と、必死に操縦桿を引く音が混じる。彼の無念が痛い程伝わったジェイは、どうにか《ブレードライガー》を立ち上げさせようとしたが、

「——ッ、クソ……ッ！」

ナイーブになった今のジェイとは相反する、《ブレードライガー》の破壊衝動が、彼の精神を苛んだ。ここ数日、どうにか受け流す事の出来ていたはずの思惟が、異様な程膨れ上がって、ジェイを蝕む。

「何故だ……何故、思い通りにならないっ！」

と、苛立ちを吐き出した直後——ふと気づく。

この《ブレードライガー》もまた、『オーガノイドシステム』によって心を捻じ曲げられ、望まぬ力を持って余した実験機。ゾイドもまた人

と変わらぬ『命』であるのなら、ヘルマン・シュミットの口から語られた人体実験の被験者たちと、なんら変わる事は無い。《ブレードライガー》の怒りは表面的なモノではない、同胞を弄ばれた今のツヴァインと同じ——システムに自らを穢された憂い、哀しみが宿っているのではないのか。

絶え間ない破壊衝動の奥に、ジェイは新たな情念を見つけた。『オーガノイドシステム』の深奥に隠された、愛機の本質。怒りに混じって湧き上がったそれに、初めて触れる事が出来たジェイは、「《ブレードライガー》……」と愛機を呼ぶ。ジェイの心に応えるかのよう  
に、《ブレードライガー》は吠えた。

ツヴァインの叫び、ライガーの咆哮——それだけではない。あの《ブラックオニクス》の嘶きも、吹き荒れるオリンポスの嵐さえも——ジェイには、呪われた『テクノロジー』によって生み出された慟哭に聞こえた。



⑮ リンク

コンボイ小隊長の《シールドライガーDCS》が、《ブラックオニキス》へと果敢に挑む。『オーガノイドシステム』搭載機の猛猛性は、身を持って体験している小隊長だ。接近戦となれば、《シールドライガー》と言えど歯が立つまいと、理解しているのだろう。機動力を生かして距離を取り、火砲の撃ち合いになる状況を維持している。

並みの大型ゾイド三機分に匹敵しよう重装備の《ブラックオニキス》に対して、ライガーは火力の面でも有利とは言い難いが——その性能差を機動力と『エネルギーシールド』、そしてコンボイ大尉自身の卓越した腕前で賄い、必死に食らいついていく。

「……無理だ。あの《クリムゾンホーン》のシステムは、我々の解析した『オーガノイドシステム』よりも完成されている。ノーマルの《シールドライガーDCS》では、どうあっても適わない」

絶えず砲撃音の続く戦場を横目に、レイモンド主任はやるせなさに咽せ、呟いた。

彼の言葉通り、《ブラックオニキス》の砲撃力を前に、徐々に損傷していく《シールドライガーDCS》。守りの要たる『エネルギーシールド』の限界が来た時に、決着の時は訪れるだろう。

「奴らは……あのシュミット大尉が語った鬼畜の所業を持って、システムを完成させた。『オーガノイドシステム』は、我々の叡智を遥かに超えたテクノロジ、悪魔にならねばモノにすることなどできない」

既にレイモンド・リボリーは、この作戦の——そして帝国と共和国における『オーガノイド争奪戦』の敗北を覚悟していた。絶望を俯いて、《ブレイドライガー》のコンディションを表示したモニターを撫でると、

「帝国のやり方が正しいとは思えないけれどね……僕ら技術屋はそういう存在なんだ。どんな悍ましい真似をしてでも、軍に益のある兵器を提供しなければならない。でも、司令部がそれを命じたとしても、ボクはシュミット大尉のように実行する事は出来ないだろう。綺麗

事染みたヒューマニズムを語っても、エウロペの人々に赦してもらえないわけがないのに……それでもボクは、できないんだ」

額から流れる血を拭ったレイモンドは、ひび割れた眼鏡を外して放る。自嘲気味に笑うと、前の操縦席に座ったジェイに向けて、「すまない少尉。ツヴァイン君の言うとおり……ボクはキミ達戦場のゾイド乗りに張りぼての新型ゾイドを渡し、エウロペを傷つけただけだった」と、詫びを言った。

ジェイは、応えなかった。

只々《ブレードライガー》から流れ込んで来る思惟を感じて、心を研ぎ澄ます。荒れ狂う闘争心——だが、その中に混じった怒りや憎しみ、そして悲しみと言った、ライガー本来が持ちえる心を、今のジェイは感じ取る事が出来るようになっていた。後部座席へクルリと振り返ったジェイは、

「……主任。貴方も俺も、まだ終わっていない」

と、レイモンドを叱責する。

「貴方の言うとおり、『オーガノイドシステム』は人の手に余る、恐ろしいテクノロジーだ。ゾイド生命体の存在を歪め、変えてしまう……だが、貴方一人が諦めた所で、帝国も共和国もそれを捨てはしないだろう。一人絶望し、ここで死んでいいのか？ システムの研究で犠牲になった人々やゾイドに報いる『何か』それを見つけてることこそが、『オーガノイドシステム』を目覚めさせ、利用した技術者や——俺達『戦争屋』が出来る、唯一の贖いなんじゃないか？」

「……っ」

そう問うたジェイの脳裏には、先にコンボイ小隊長が彼に説き伏せた言葉の片鱗が木霊していた。

——彼らに何か手向きたいという思いがあるというのなら、まずは君自身が生き残らなければならない。戦いの果てに贖罪の道を探すために……今は生き延びろ。

そうだ——多くを巻き込んだ戦争の当事者であるジェイ達は、安易

な死を選ぶことなど許されない。自分達の都合で変質してしまった、エウロペの人々やゾイド達——ツヴァインや《ブレードライガー》は、今も必死に、ジエイ達と共に戦ってくれている。それを無碍にして死を選ぶなど、できるはずがなかった。

改めて操縦桿を握り直したジエイ・ベックは、目を閉じて念じると、静かに愛機を再起動させた。疲弊した機体に力が満ちて行き、ジエネレーターがフル回転する。

《ブレードライガー》、今だけは……頼む！

胸中で叫んだジエイ。

まるで心に立ち込めた暗雲が晴れるかのように、どす黒い破壊衝動が鳴りを潜めていく。ゆっくりと身を起こした青い機獣——そのコクピットの中、ジエイは愛機の機首を《ブラックオニキス》へと向けると、思い切りアクセルを踏み込んだ。戦うべき相手を見定めたかのように、大きく頭を振り被った《ブレードライガー》は、ジエイの操縦に応えるかのように、力強く咆哮した。

これほどとはな、と、スターク・コンボイ大尉は胸中でごちた。

再三に試みた砲撃も、重装甲と脅威的な生命力を併せ持った《ブラックオニキス》を破壊するには至らなかった。通信機越し、(無駄だ、『オーガノイドシステム』を持たぬ貴様のゾイドでは、私の相手には成り得ない!)と勝ち誇ったシュミット大尉の声を拾い、「チツ……」と舌打ちをする。

臨界稼働を繰り返し、すでにDCSのジエネレーターは限界が近い。「ならばっ!」と意を決したコンボイ大尉は、初めて《シールドライガーDCS》を前に出した。幾重にも絡まった《ブラックオニキス》の火線を縫いながら、最高速で駆け抜ける。

既に『Eシールド』は使い物にならず、躲しきれなかったレーザーが装甲を抉り、駆動系を焼いた。それでも、コンボイは加速を緩めない。

(破れかぶれの特攻か。見苦しいぞ、小隊長)

眼前に迫ったライガーを貫こうと、《ブラックオニキス》が鼻先の大

角を振りかざした時だった。

「——どうかな！」

と返したコンボイ大尉が、思い切り機体を跳躍させた。躲した——否、『デッドクラッシュシャーホーン』がライガーの下腹を抉り、『三連衝撃砲』が削げ落ちている。凄まじい損傷に呻きながらも、着地した《シールドライガーDCS》は《ブラックオニクス》の横っ腹へと密着し、狙いを定めていた。

「——行けッ！」

背負った『ダブルキャノン』の銃口を《ブラックオニクス》の脇腹にねじ込むと、コンボイ大尉は渾身の一撃のトリガーを引く。高密度ビームの零距离射撃。炸裂弾とも見紛う凄まじい閃光が爆せて、《ブラックオニクス》、そして《シールドライガーDCS》自身すらも巻き込む。

『ビームキャノン』の砲身が砕け散り、最前にあったライガーの頭部装甲が焼け爛れた。激震に眉を顰めながら、コンボイは敵の損傷具合に目を凝らす。《ブラックオニクス》も、ただでは済んでいない。脇腹を覆った重装甲が粉碎され、後ろ脚の駆動輪が破断されている。

ガクリと膝を着いた《ブラックオニクス》の姿に勝利を確信したコンボイだが——、

オニクスは、死んでいなかった。

（——シャアッ！）

背中に備えた『三連装リニアキャノン』兼アームユニットが展開し、刺突を見舞う。躲しきれなかったライガーの喉笛が抉られ、「グハ……ッ」と呻いたコンボイ大尉。かなりの深手に、みるみるパワーダウンしていく《シールドライガーDCS》。倒れ伏したその機体を見下して、ヘルマン・シュミット大尉が破顔し、叫んだ。

（なかなかの腕前だ、コンボイ大尉。その機体で、《ブラックオニクス》を此処まで破壊するとはな……だが、健闘もこれで終わりらしい！）  
迫りくる《ブラックオニクス》の攻撃を躲そうと後ずさったコンボイ大尉だが、その挙動は余りにも鈍かった。次の一撃は躲せない。

小隊長が死を覚悟したその時だった——『パルスレーザーガン』の

光弾が降り注いで、《ブラックオニクス》の機体を傾けさせる。

衝撃に揺れたコクピットの中で、ヘルマン・シュミット技術大尉は目を剥いた。既に目の前の《シールドライガーDCS》以外、彼に戦いを挑む余力のある機体などいかなかったはずだ。（どこから……ッ）とごちて周囲を見回した《ブラックオニクス》——その赤い瞳に、見慣れない蒼のライオン型ゾイドが映り込む。

蒼い機獣……共和国軍の『オーガノイドシステム』実験機、ジェイ・ベック少尉の《ブレードライガー》が、そこにいた。

ヘルマン・シュミットだけではない。コンボイ大尉、そして半壊したゾイドの中で戦いを見守っていたツヴァインとグロツクも「ベック少尉……」と、立ち上がった機体に驚愕し、視線を注ぐ。皆の思惟を一身に受けた《ブレードライガー》は、自らの再起を声高に叫ぶかのごとく、暗雲に向けて咆哮して見せた。

敵部隊制圧を目前に、再び立ち上がってきたジェイ達だ、煩わしさにシュミットは声を荒げた。

（まったく手を焼かせてくれる……貴様はもう消えていい、私の前から今すぐ失せろ！）

乗機《ブラックオニクス》の頭部に備えられた六つの『荷電粒子砲』が、バチバチとうねりを上げ、雷霆を吐き出す。六つの稲妻は一直線に《ブレードライガー》を目指し、着弾した。ライガーの機影を、周囲の地面ごと爆炎の中に沈めたが——、

巻き上げられた粉塵が治まっていくと……鬣を展開し、光の壁に守られた《ブレードライガー》が、尚も顕在していた。

（『エネルギーシールド』だと……ッ）

初めて、ヘルマン・シュミットが焦燥する。

《ブレードライガー》が《シールドライガー》をベースに開発された新型機である事は、先に交戦した『南エウロペ先遣隊』の持ち帰ったデータより判明していた。『エネルギーシールド』を搭載しているであろうことも当然想定していたが——それが六門の『荷電粒子ビーム砲』を受けとめる程の高出力を維持しているのが、信じられなかった。

「ヘルマン・シュミット大尉……お前だけはッ！」

ジェイ・ベックが叫んだ。同時に《ブレードライガー》が疾走し、《ブラックオニキス》へと突貫を掛ける。（貴様らアアア……ッ！）と激発したシュミット、全ての火器を解放してそれを迎え撃った。『六連荷電粒子砲』、五機の『二連レーザー砲』、さらには両のアームユニットに備えた『三連リニアキャノン』……積載された火器の照準を、全て《ブレードライガー》に向けて撃ち放つ。

流星群の如き光の嵐を、ジェイは真っ直ぐに見据える。

背部に備えた『ロケットブースター』を全開し、さらにライガーを加速させる。次々と落ちてくる光の雫の中を、猛スピードで駆け抜ける《ブレードライガー》。凄まじい瞬発力、絨毯爆撃の如き《ブラックオニキス》の猛攻が、一発も当たらない。

（何故あんな動きが出来るっ?! 『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドを、己が手足のように……ッ！）

——マスター・リンク。

その言葉が、ヘルマン・シュミットの脳裏を過ぎった。ゾイド乗りとゾイドの精神が完全な同調を果たし、人馬一体の超機動を完遂する。超一流のゾイド乗りと、長年それに添い遂げたゾイドが揃って、初めて到達し得る『境地』を、言語化した言葉だ。だが、それを一軍人が——ましてや『オーガノイドシステム』に汚染されたゾイドと共に、為し得る事など、ほぼ不可能な話である。

有り得ぬ事態に動揺したシュミットの操縦は、徐々にその精彩を欠いていった。

最高速度を維持したまま、地面を穿つ砲撃を蛇行して躲し続ける《ブレードライガー》。《ブラックオニキス》を目前に捕えると、背負った『レーザーブレード』を展開する。最大出力。システムへの狂気に憑りつかれた男を断ち切る覚悟が、光刃に宿り——、

「うおおお当たれエエエエッ！」

ジェイが、渾身の気迫を叫んだ。レーザーコートに包まれた刃を煌

めかせて跳躍した《ブレードライガー》に、慄き嘶く《ブラックオニキス》。だが、先にコンボイ大尉の攻撃で駆動部を損傷し、神速のライガーに対処しきれない。

振り下ろされた光刃がオニキスの角を断ち切り、そのまま頬、首筋、胴——そして尻尾の先へと切り裂いていく。

(ウ——、ウワアアアアア……ッ!!)

ヘルマン・シュミットの断末魔が木霊した。

返り血の如き白熱の火花をぶち撒けて碎ける《ブラックオニキス》と交錯しながら、もう一度《ブレードライガー》が吠える。漆黒の改造ゾイドを完全に真つ二つになるまで断ち切ると、ライガーは四肢で地面を抉りながら着地し、停止した。

「カツフ——ッ」と、息を吐いたジェイは《ブラックオニキス》へと振り返る。シュミットとの通信は途絶している、噴煙を上げた《ブラックオニキス》はよると崩れ落ちると——やがて閃光と共に燃え上がり、爆散した。

⑩ 帰還

《ブラックオニクス》の上げた焰が、吹き荒れる磁気嵐に舞って火の粉を散らす。大破、炎上——パイロットも生きてはいまい。《ブレードライガー》のコクピットの中、緊張が解けて異様な虚脱感に襲われながらも、ジェイ・ベック少尉は仲間達を振り返った。

「フリーマン軍曹……」

亡き部下の名を呼ぶ。《コマンドウルフ》部隊は、ほぼ全滅。残骸も《ブラックオニクス》の放った絨毯爆撃の余波を受け、ほとんどが吹き飛ばされている。軍曹の遺体も、死の山と化したオリンポスの灰に呑まれてしまっただろう。

辛うじて無事なウルフは、傭兵ツヴァインの愛機だけだ。半壊したそれを庇うように、グロック・ソードソール少尉の《シールドライガー》が『エネルギーシールド』を固着させ、寄り添っていた。

「——ジェイ・ベック少尉」

コンボイ小隊長からの通信。損傷によるめいた《シールドライガーDCS》が、ジェイ機の傍に寄ると、「生存者の救助は、私とグロックで行う。ジェイ少尉はレイモンド主任と任務を遂行しろ。遺跡に残るデータの残滓を回収するのだ」と指示を出した。

即答は、できなかつた——あくまでコンボイ大尉は、任務を全うしようとしている。それが意味するのは、『オーガノイドシステム』の更なる解析と、それに伴う犠牲の拡大だ。ジェイは今、システムに蝕まれた愛機の思惟と繋がっている。胃の腑を押し上げるような破壊衝動の濁流。これが全てのゾイドに取り込まれれば、システムの狂気は機体を通じて、人々へと感染していくだろう。たとえそれが侵略から母国を救う術だとしても、今のジェイには即断できなかつた。

「——了解したよ。コンボイ隊長」

口ごもったジェイの代わり、応えたのはレイモンド主任だった。

頼む、と通信を終えて、グロック、ツヴァインの元へと踵を返した小隊長の機体を横目に、ジェイは戸惑いながらレイモンドに振り返



る。「どうして……」と問いかけた彼に、

「ボク以外には解析できないんだ……探した振りをして、『ここには何も無かった』と——そう伝えればいい」

そう応えたレイモンドの顔は、まるで憑き物の落ちたかのような、晴れやかな微笑を湛えていた。

熱砂に埋もれてゆく遺跡の残滓を追いながら、データ収集に励む《ブレードライガー》。そのコクピットの中で、「シユミット大尉のおかげで、あらかた理解できたよ」と切り出したレイモンドは自らの見解をジエイに告げる。

「おそらく、『オーガノイドシステム』搭載機の操作性を、根本的に解決する方法は無い。ゾイド生命体のリミッターとでも言うべき何かを廃して、その潜在能力を引き出しているんだ。無理やりに力を引き出されたゾイドの気性は、当然荒くなる。『凶暴化』という過程も、システムを構成する重要なプログラムなんだろう」

荒すぎる気性が『オーガノイドシステム』によって引き起こされてしかるべきというのならば、《ブレードライガー》はシステム搭載機として未完成ではなく——限りなく完成された機体と言える。それはすなわち、《ブレードライガー》を現状兵器として安定させる方法はない、ということでもあった。技術士官である彼にとって、それはとても不本意な結果だろうに——彼の瞳は晴れやかだ。

「でも、これでよかったんだ。仮にシステムを安定させる方法があったとして、あのヘルマン・シユミットのような真似をする気には、ボクにはなれないから……じゃじゃ馬に付き合わせて、悪かったね、君にとっても、その《ブレードライガー》はさぞやり辛い機体だっただろう?」

詫びを言ったレイモンド主任に、ジエイは「いいや」と頭を振る。

「《ブレードライガー》はじゃじゃ馬じゃないよ、主任。システムの狂気の奥に隠された、ゾイドの本来の心……それに気づく事が出来れば、応えてくれたんだ」

《ブラックオニキス》のパイロット、ヘルマン・シユミット大尉が

『オーガノイドシステム』への執着を語った時——ツヴァインの怒りに同調して打ち振るえたジェイに同調するかのように、ライガーの持つ破壊衝動も高まった。パイロットの気持ちを感じ取り、それに呼応したライガーは、決して凶暴性だけに吞まれた機体でないと証明している。ジェイとライガーが、共にシユミットを倒さねばならないと理解したからこそ、二人は限界を超えた力を発揮し、《ブラックオニキス》を打ち破る事が出来たのではないか。

「システムの奥に隠された心を知る——それが『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドを乗りこなす、真の方法、か……」

ジェイの言葉を反芻したレイモンドは、フツと表情を緩めると、

『オーガノイドシステム』をこんなにも早く理解するなんて、君は意外とすごいゾイド乗りなのかもしれないな、ジェイ少尉』と微笑して見せた。

直後にアラーム音が鳴って、ライガーの計器が乱れ始める。パルスガードの限界が近いらしい、モニターを確認し、機体が磁気嵐の影響を受けつつあるのを知ったレイモンドは、「引き上げ時だ。退こうジェイ少尉——オリンポスのテクノロジーは、灰の中に眠っているべきなのかもしれない」と、作業を終える。

その意見に異論は無かった。ああ、と短く領いたジェイは、砂塵に埋もれてゆく遺構を横目に見ながら《ブレードライガー》をコンボイ達の元へと向けた。

暗雲の山頂を抜けると、既に日は傾いていた。

コンボイ大尉とジェイ、グロツク、そしてツヴァインの四人だけになってしまった『307小隊』が、オリンポスを下っていく。麓に残した《グスタフ》と合流し、機体の応急処置を終えたら、夜の内にヘリック領へと帰還しなければならない。犠牲の大きさに対して、収穫は無かった——一行の足取りは重かったが、それでも今は生き残る為、立ち止まる事は許されない。

《シールドライガーDCS》が先頭を往き、グロツクの《シールドライガー》が、自走できないツヴァインの《コマンドウルフ》をワイヤー

で牽引した。損傷の激しい三機を守るように、ジェイの《ブレードライガー》が隊列に寄り添う。

「……ツヴァイン」

ライガーの足並みを緩めて、ジェイは地面を引き摺られた《コマンドウルフ》の半身に目を遣った。キャノピーの向こう、ガタと揺れるウルフのコクピットで、ツヴァインはジッと瞼を閉じたまま、瞑想している。

構わずに、ジェイは通信を続けた。

「戦争を起こしたのは、ガイロスだけじゃない。お前の怒りは、ヘリックにも——俺達にも、向けられてしかるべきものだ。だから……」

反応は無かった。彼の負った心の傷が、ジェイの口から出た言葉でどうこうできるとは思っていなかったが——それでも何か、ツヴァインに伝えておかなければならないような気がした。

言葉を足そうとしたその時、「……うるせえよ」と、短い返答が返ってくる。

「前にも言ったじゃねえか。俺はお前に憐れんで欲しくて戦ってるんじゃない。ただ——あの《ダークホーン》のパイロットが気に入らなかつたから、少しばかり本気になつただけさ。アイツを倒したところで、犠牲になつた連中が生き返る訳じゃないけど……そうせずにはいられなかつた」

目を開けたツヴァインは、不貞腐れたかのように視線を逸らした。だが、怒っている風ではない。遠くを見遣ると一言、「一応、礼は言つとくぜ……お前がいなければ、俺達はアイツにやられて、死んでいた」と、消え入るような小声で、ジェイを賛美する。普段の毒気が無い、正真の言葉だった。

戦いを終えたツヴァインは、これまでの彼とは違う気がして——「なあ——これから、どうするんだ？」と、ジェイは何故か、問うていた。

ハッ、と息を吐いて、傭兵ツヴァインは即答する。

「別に、どうもこうもしねえよ。戦争は終わって無い。これからだつて、エウロペは戦火に撒かれて傷ついていく……だが、そいつに背を

向けた所で、何も変わらねえんだ。俺は俺が出来る事をして、戦い続ける——それだけさ」

夕暮れを、『307』のゾイド達が往く。目指すは東——赤の砂漠レッドラストを越えた先にある、共和国の防衛ライン。今は、時間が必要だった。傷ついた心と躰、そしてゾイド達を癒やすだけの時間。未だ戦いの続くエウロペが、どれだけの猶予をくれるかは分からない。

それでもジエイ達は——生きるために、歩みを進めた。

西方大陸エウロペで戦われた、ヘリック共和国とガイロス帝国の戦い——『西方大陸戦争』の名で語られるこの戦いは、惑星Zi史に置いても極めて特異な、古のテクノロジー『オーガノイドシステム』を奪い合う戦争でもあった。北エウロペのオリンポス山・南エウロペのガリル遺跡で立て続けに繰り広げられた「技術争奪戦」は、共にガイロス帝国の勝利で終わっている。

ヘリック共和国は《ブレードライガー》・《ストームソーダー》・《ガンスナイパー》、計三機種三機種の量産化を持って、システムの研究を凍結する。一方で更なる技術解析と研究を為し得たガイロスは、その後も試作機の開発を継続し——やがてはヘルマン・シユミット技術大尉の悲願でもあった『絶滅機種の再生』までも成し遂げていくのである。

——両国の争いは、まだ終わらない。

幕間：エリサのデイバイソン

エリサのデイバイソン ①

——ZAC2100年 七月 ロブ平野中央部・アイザック要塞

砂塵吹き荒れるロブ平野の真ん中、エリサ・アノン少尉は汗ばんだ手を裾で拭う。

演習開始から一時間半、新しく割り当てられたゾイドの習熟運転のため、ぶっ続けで座ったコクピット。既に集中力は切れ掛かっており、モニター越しの風景が霞んで見えた。

（——少尉、集中しろ。最後のターゲットだ）

司令塔よりの通信。演習を監督する、マクシミリオン・ペガサス中佐の声が聞こえた。「は、はい！」と慌てたエリサは、瞼を擦って気を持ち直すと、操縦桿を握り直して、機体を前進させた。

エリサに新しく与えられたゾイド——形式番号RZ-031《デイバイソン》。分厚い装甲と『十七連突撃砲』を始めとした重火器、そして白兵戦用の『ツインクラッシュヤーホーン』を備えた、バッファロータイプの大型突撃ゾイドである。兼ねてより本国で再配備の準備を進めていたというこの《デイバイソン》が、先の『共和国軍最強師団・エウロペ派遣作戦』の実行と共に就役した。これに伴って重砲隊の中より新たに『突撃隊』が新設され——その第一期メンバーとして、エリサ・アノン少尉も選ばれたのである。

荒野の中に配置された、最後のターゲットプレート。ズンと歩みを進めて、指定された射撃位置まで機体を誘導する。大型ゾイドの中でも気難しくなく、比較的扱いやすい《デイバイソン》だが、それまで乗っていた小型機《カノントータス》と比べれば、やはり勝手が違う。習熟運転も今日で三日目、予定されていたカリキュラムはこれで終了するのだが——、

（『COMBAT-Ⅱ』、起動）

「はいっ……『COMBAT-Ⅱ』、起動しますっ」

オペレーターの指示に従って、モニターを操作する。

元々《デイバイソン》はメインパイロットの他に、砲手兼通信兵担うサブパイロットの搭乗を前提とした二人乗りの機体だ。が——人員の不足からか、今戦争での配備に当たりサブパイロットを設けず、単独で機体の操縦を行うように指示されている。それに伴い生じるであろう負担を軽減するために導入されたのが、複雑な火器管制を肩代わりする戦術補佐プログラム『COMBAT—II』——ようするに、サブパイロットの代わりにコンピュータ制御で賄おうというのである。

一見画期的なシステムだが——エリサは、その扱いに手を焼いていたのだ。

「照準合わせ……、『105mm十七連突撃砲』、発射！」

《デイバイソン》のから突き出された砲塔の束から、立て続けに砲弾が撃ち放たれる。轟音と共にターゲットプレートが撃ちぬかれ、砕け散っていく。十七発全てを同一目標に命中させるのが、この演習におけるカリキュラムの一つなのだが、

「……あ、あれ？ あれ？」

砲撃の衝撃に、《デイバイソン》の機体が少しずつブレていく。射角が変わり、打ち込んだ砲弾がターゲットの横をすり抜け地面を抉る。

（アノン少尉、機体を持ち直せ！ 射角を調整しろ！）

と、司令部から指示が飛んだ。「は、はい！」と叫び返したエリサは、慌てて機体を持ち直そうとするが——砲撃の反動で重くなった操縦桿を、上手く手繰れない。もたもたしているうちに、撃ち込んだ弾の半分以上が、目標とは関係の無い大地に吸われていた。

流れ弾でムアと舞い上がる土埃を、呆然と見つめるエリサ。司令塔のマクシミリオン・ペガサス中佐が、深い溜息を吐いたのが、通信機越しに聞き取れて、一層の気落ちをすることになった。

演習終了後、すぐに指令室に戻り総評を貰ったのだが——案の定マクシミリオン・ペガサス中佐に、機体制御に関する手厳しい指摘を受ける。

両の腕を組んだペガサス中佐は、難しい表情のままエリサに詰問した。

「砲撃の所作は、『COMBAT』がオートマチックでやってくれる。照準を合わせてトリガーを引くだけの作業だ、何を手間取る事がある？」

「すみません、言われた通りに操作したつもりなんですけど……」

咄嗟に応えたエリサだが、「他の候補生たちは問題なく、出来ているのだぞ」と、ペガサスは取り合わない。事実、エリサと一緒に突撃隊として招集されたパイロット達は、既に《ダイバイソン》の習熟運転カリキュラムをクリアしているのだ。もう一度深い溜息を吐いた後、ペガサス中佐はいらいらと頭を振って、こう続けた。

「制空権を取り戻した我が軍の戦況は、変わる。反撃の時が来たのだ、突撃隊に転属したアノン少尉はこれまでのような後方支援ではない、ベック少尉達高速戦闘隊のように、最前線で戦ってもらう事になるのだぞ？」

「——っ……」

中佐の言葉が、エリサの耳には痛かった。これまでのように、最前で立つ味方の影から——安全な場所から支援砲撃を行うのとは、訳が違う。その事を理解して、必死に新しい愛機と馴染もうとしているつもりだったエリサは、「あの……私、ちゃんとやっています」と、思わず口答えしてしまう。

「ちゃんとやってる、だと？　ならば、何故君だけがカリキュラムをクリアできない？　応えてみる」

厳しい詰問が、エリサの心を抉る。中佐の掛けるプレッシャーに、口ごもったエリサは、つい「……『COMBAT』が扱い辛いんです。二人乗りのゾイドを、機械と一緒に扱うなんて——」と、先ほどから感じている鬱憤を言ってしまった。

「——甘ったれた事を言うんじゃないッ！」

部屋中に響き渡る、ペガサス中佐の怒声。

オペレーターや、共に訓練を終えたテストパイロット……指令室に集まった皆の視線が集まって、エリサはビクと肩を竦める。険しい相のペガサス中佐が、フンと荒い息を吐いて、言葉を続けた。

「無論、息の合った二人のパイロットが《デイバイソン》をコントロールした方が、優秀なのは分かっている。だが、乗りこなせる練度を持った人材、それを育成する時間、そして——そうやって手間を掛けた者達が万が一撃墜された時、損失をどうやってカバーする？ 少尉の目には、我が軍にそこまでの余裕があるように見えるのか？」

正論に次ぐ正論。返す言葉などある訳も無く、エリサは唇を噛み締めて俯いた。そんな彼女を見定めるように、ジロと睨みを利かせたペガサスは、やがて「……もう行け」と、抑揚なく言う。

「実戦に出る時までには、《デイバイソン》を——『COMBAT—II』のシステムを、使いこなせるようにしておけ。そうでなければ、苦労するのはお前だ。アノン少尉」

と、突き放すような物言いで締めたコンボイは、クルと踵を返して、指令室を後にした。

格納庫に戻り、《デイバイソン》の整備を行うエリサだが、その足取りは重い。元よりゾイドの操縦が得意というわけではなかった彼女だが、オペレーションソフトを利用して『二人乗りの機体を一人で操縦する』というのは、専門外もいところである。気落ちした彼女には、喧噪に湧く格納庫も、どこかよそよそしい場所に思えた。

今、この『アイザック要塞』の格納庫は、人とゾイドでこった返している。先日の輸送作戦により、本国からの増援を受けた軍は、機体・部隊の再編で、昼夜問わず整備作業が続けられていた。バラータ基地守備隊に配属されて二か月もしないうちに、エリサがこの『アイザック要塞』に転属となったのも、増援に寄る新隊創設が理由だ。《ゴジュラス》や《ゴルドス》と言った従来の主力戦闘ゾイドから、《ガンズナイパー》や《ストームソーダー》といった最新鋭機まで、様々な機体が所狭しと立ち並び、誘導を待っている。

ズラと並ぶ、色とりどりのゾイド。普段のエリサなら、興奮にキラ



と瞳を輝かせるだろうに——今の彼女は、そうは行かない。

エリサはゾイドが好きだった。

子供の頃より、共和国軍人だった父と、彼の乗るゾイドを見て育った。同じ年頃の友人達が華やかな趣味に傾倒していく中で、密かにゾイドを追いかけた。街往く作業用ゾイドに目を留め、父の伝手で軍用ゾイドに乗せてもらったりもした。体力に自信があつた風でも無い、愛国心が人一倍強かつたわけでもないエリサが、軍に入隊したのも、一重にゾイドへの興味からである。パイロットとしての才は、決して優れていると言えなかつた彼女だが——こうして様々な機獣に囲まれているだけで良かった。

それなのに——今はどうにも、はしやぐ気に慣れない。ペガサス中佐の癩癩が、頭蓋の中で何度も反芻し、胃の腑に重く圧し掛かる。一層自信を失つた彼女は、もはや愛機の姿を見るのすら、億劫に感じていた。

誘導灯を振る整備兵達を躲し、停止したばかりのゾイド達の足元を抜けながら、新しい愛機の元を目指す。同じ四足歩行型で形質の近い高速戦闘用ゾイド向けのエリアに、《テイバイソン》は格納されていた。先の演習で土埃に塗れているが、黒々とした重装甲は真新しく、力強い。かつて父の書齋から拝借して見た、旧大戦の戦場写真——そこに写っていた『鋼鉄の猛牛』が、目の前にある。

(……《テイバイソン》は、嫌いなゾイドじゃなかったんだけどな)

立ち尽くした《テイバイソン》の機体を見上げながら、エリサはもう一度、深い溜息を吐いた。

## エリサのデイバイソン ②

気乗りしないなりに《デイバイソン》の整備をこなしていたエリサは、背後で湧いた整備兵の喝采に気を取られて、振り向いた。エリサの《デイバイソン》の隣——空いた整備ラックの中に、鋭角的な意匠を持つ、蒼いライオン型ゾイドが入って来る。

見慣れぬ新型機にざわつく整備兵達の中、エリサは「あつ——《ブレードライガー》」

と、その機体を呼んだ。ほんの数か月前に、エリサはそのゾイドの稼働試験を手伝っていたから、そのシルエットにも馴染みがあった。真つ先にジエイ・ベック少尉の顔が浮かぶ。

オリンポス探索の任務を与えられた彼は、帰還後もすぐにミューズの森を初めとする最前線を転戦しており、エリサとは二か月以上会っていないかった。彼も此度の再編で、この『アイザック要塞』に転属してきたのか、と、僅かに期待したエリサだが——機体を停止させ、コクピットから出て来たのは、ジエイとは似つかぬ赤髪の青年だった。よくよく見ると《ブレードライガー》も、エリサの知る『アーリータイプ』とは細かな差異がある。尾や頭部アンテナ、シールドジエネレーターが形状が異なり、装甲も既存の《シールドライガー》により近い、深みのあるブルー。そして何よりも、コクピットが一般的なシングルタイプに変更されている。おそらくは、正式採用された量産タイプであろう。

かつては《ブレードライガー》を乗りこなせず腐心していたジエイなら、今の自分の気持を理解して、身になる助言をくれたかもしれないのに——当てが外れてがっかりしたエリサが整備に戻ろうとした時だった。

「——エリサ？」

と、ライガーから降りた男性士官が、彼女を呼び止めた。

赤毛の士官の顔に覚えは無かったが、その声はどこか聞き覚えがあった。改めて振り返ると、彼女の背後で「ああ、やっぱりエリサだ」と、青年が笑っている。自信の滲んださわやかな笑みに、

「——シユウ君？」

と、エリサも彼を思い出す。

青年を、エリサは知っていた。

シユウ・フエーン中尉。士官学校を共に卒業した仲で、同期の中ではいち早く中尉への昇進を果たした出世頭。理論・実践共に優秀な彼は、どちらかと言えば落ちこぼれ気味だったエリサとは対極にある。碌に話もしたことが無かった間柄だが、向こうは覚えていたらしい。

ハハア……、と笑った赤毛の青年は、いまいち覇気のないエリサを見るなり、「相変わらずボーつとしてるなあ。そんなんでここまで生き残れたなんて、ラッキーだよ、お前は」と彼女を軽んじた。

暫らく振りの不躰さに、エリサは思わず回想する。

士官学校時代から、フエーン中尉の齒に衣着せぬ物言いは有名だった。同性からは疎んじまれていたものの、フエーン中尉の才覚は本物だったから、誰も面だつて反目はしなかった。キザな言い回しとあいまつて自信過剰にも見え、それが華やかな女性達に良く受けたが——遠慮の無い言葉遣いを、エリサは好きになれなかった。

気落ちした所を蹴たぐられたかのような気がして、思わず嫌な顔を出してしまうエリサ。フエーン中尉はそれに気づかなかつたらしい、彼女の背後にそびえ立つ黒いゾイドを見上げて、

「——《ディバイソン》か。もしかしてお前も、今回の再編で新鋭機を与えられたクチかい？」

と、薄笑みのまま彼女に尋ねる。

「え、うん……」

齒切れの悪い返事をしたエリサを、「ハハア……」と見た赤毛の青年士官。次いで、今しがた停止させたばかりの自分のゾイドを振り変えると、

「僕もそうだけど——どうやら君とは、『上層部から掛けられる期待の程度』が違うらしい。与えられたのは、最新鋭機。共和国軍が細心のプログラムを解析して作り上げた、次期主力ゾイドの——」

「……《ブレードライガー》ですよ。知ってます」

誇らしげなフエーン中尉を遮って、エリサがそれを呼んだ。

目を剥き、「知っていたのか、お前程度のゾイド乗りが……」と驚愕した彼の表情がおかしくて、エリサは思わず胸を張る。

「試作型を、友達の士官が預けられていたんです。稼働試験のお手伝いをしてたから、同乗した事もあるんですよ。すごく扱いが難しいゾイドなんですよね?」

あからさま面白くなさそうな顔をしたフェーン中尉は、「……なるほどね。実戦には出ず、テストパイロットをやったから生き残れたのか」と曲解した。否定しようと口を尖らせたエリサを無視して、

「でも、これからは違うぜ。我らヘリック軍は、前に出るんだ。悪逆を尽くすガイロス野郎共を押し返して、エウロペから叩き出す。その先陣を切るのが僕と、新しい『ブルー・ブリッツ』・『ブレードライガー』さ——君も遊んでばかりいないで、そろそろ共和国に貢献したらどうだい?」

「あのツ、私、遊んでなんて無いです。ちゃんと実戦も経験してますし」

ムツとして、ついに言い返したエリサ。気弱な彼女を知っていたフェーンは、それに驚いたらしい。数秒呆けたが——すぐに持ち直して「へえ……さっきの演習の、あんな様でかい?」と、嫌らしい笑みを浮かべる。

挑発した彼の言、その意味を咀嚼すると、エリサはカツと紅潮した。

「ツ、シユウ君、見てたの?」

「ちようど僕が到着した時に、この《デイバイソン》がテストを行っていたからね。嫌でも目に入ったよ。君の下手くそっぷりは」

「あれは、システムのせいだ——」

言い返しかけたエリサの言葉を、「どんな事情があれ、戦場は待つてはくれないよ。あんな無様じゃ、君は生き残れない」と、フェーン中尉が遮る。正論だ、何も言い返せず押し黙ったエリサに、この若い青年士官の自尊心は満たされたらしい。勝ち誇った笑みを浮かべるとクルと踵を返して格納庫を出ようとした。

「二応は君、僕の同期——つまりは友達だしね。目の前で死なれたら寝覚めも悪い。そうならないように、精々頑張れよ」

去り際に手を振って、形だけの激励をするシユウ・フェーン中尉——それが一層エリサをへこませているとは思いつらなかつたらしい、自らの立ち居振る舞いに酔いながら、悠々とその場を後にした。

シユウ・フェーン中尉の背中を見送りながら、一層深い溜息を吐いたエリサ。すると今度は、

「フェーン中尉とアノン少尉は、士官学校時代の同僚だったな」

と、背後からペガサス中佐の声が聞こえた。ようやくと気を抜けた矢先に、上官に声を掛けられて、エリサはビクと飛び上がる。

振り向くと、マクシミリオン・ペガサスともう二人。三、四十代くらいの男性士官二名が、缶コーヒーを片手に、フェーン中尉の持ってきた《量産型ブレードライガー》を見上げている。エリサの視線に気づいた内一人が、小さく会釈をして、

「どうもアノン少尉。フェーン中尉の随伴機を任せられております、クラフト・モラレスです。こっちは、ラムセス・クーバ軍曹」

と、柔和な笑みを浮かべた。

随伴機——シユウ・フェーンの《量産型ブレードライガー》の奥、青いヴェロキラプトル型の小型ゾイド《ガンズナイパー》が並んでいるから、その事であろう。本来は《ゴドス》に代わる強襲戦闘隊の主力戦闘機として開発された物だが、《コマンドウルフ》と遜色ない高機動性、『オーガノイド・システム』搭載機同士の連携の取りやすさから、《ブレードライガー》の僚機として高速戦闘隊への配備も進んでいると聞く。

モラレスとクーバ、どちらも歴戦の兵士らしく、隙の無い相貌だ。自分と同期であるフェーンがこの二人を従えているという事実には、エリサは妙な感覚を覚える。シユウ・フェーンは特別優秀な士官ではあったが——何となく、自分だけが取り残されたかのような気がした。

居心地悪そうに唇を噛んだエリサに、マクシミリオン・ペガサスが歩み寄ると、「口数の多い男だがな、優秀さは本物だ。……同じ学び舎で戦い方を知った少尉なら、理解していよう」とフェーン中尉を評し

て、彼女の肩に手を掛ける。

「何も少尉に、意地悪がしたくて言っているわけではない。彼のように、君も最前線で戦える力を持つてほしい。そして、生き残れば良いのだ。そのための力、そのためのゾイドを、君は必要としている」  
「はい……分かってます」

頷いたエリサだが、迷いが断ち切れたとは言い難かった。フエーン  
中尉だけではない、あのジェイ・ベック少尉だって、紆余曲折を経て  
先行型《ブレードライガー》を乗りこなしている。まるで自分だけが  
取り残されたかのような気がして、焦燥を覚える。

まるで落ち着かないエリサの心模様にも共鳴したかのように——格  
納庫の天井が、静かな音を上げ始めた。

小川のせせらぎのような繊細な水音は、やがて乱暴に鍵盤を叩いか  
ような、騒々しい雑音に変わる。搬入されてくるゾイド達のキャノ  
ピーが滴に濡れているのを見て、「……雨か」とペガサス中佐は眉を顰  
めた。乾燥帯型の気候を持つ北エウロペで、雨が降るのは珍しい。そ  
れだけではない、どうやら風まで出て来たらしく、ヒュウと甲高い音  
が、格納庫の通気孔を通してハウリングした。

今夜は、嵐になる。だが——この嵐に紛れて、ガイロス帝国軍の大  
攻勢が差し迫りつつある事を、ペガサス中佐もエリサ・アノン少尉も、  
知る由は無かった。

## エリサのデイバイソン ③

雨音を裂いて鳴り響く非常警報に、『アイザック要塞』が動揺した。制空権をモノにしている今、ロブ平野の中央、ヘリック共和国領のど真ん中に位置する要塞が、敵襲に晒される事など有り得ない。それはすなわち、ヘリックの共和国の最終防衛線——ミューズ森林地帯に築かれた『ゲリラ戦線』が、突破された事を意味するからだ。簡単には起こり得るはずの無い事態——「何事かア!？」と、マクシミリオン・ペガサス中佐が分かりきった事を問うたのも、そんな認識故だった。「敵襲ですっ!」

通信兵が叫び返す。

要塞を包囲するかのようになり、ズラと並んだ敵機の反応——大軍だ。ペガサス中佐だけではない、要塞を任された司令官、整備兵、ゾイド乗り……この場に居合わせたほぼすべての共和国兵が、絶望を覚えた。本国からの増援と部隊再編に向けて、アイザック要塞には許容量を遥かに超えたゾイド達が集まっている。そのほとんどがまともに稼働できない状況で、帝国軍の総攻撃から基地を守らなければならぬのだ。

敗色濃厚でありながら、それでもペガサス中佐は皆を鼓舞する。

「司令官……城壁に動けるゾイド部隊を配置しろ。それと——ロブ基地に、救援の要請を出しておけ」

《ストームソーダー》に制空権を奪われてから、ガイロス軍の補給は滞っているはずだ。戦いを長引かせる事が出来れば敵の弾薬は尽きて、攻撃の手は緩むであろう。その頃になれば、再編成の住んだ基地内のゾイドも出撃できる。すなわち、この戦いは時間との勝負だった。

ペガサス中佐の算段を理解していた『アイザック要塞』の指令官は、意を決したかのように頷いて、そして静かに言った。

「どうやら……こいつは我が共和国軍の、命運を掛けた戦いになりそうですね」

格納庫は、怒声と喧噪の嵐だった。

雨風、の打ち付ける音、けたたましく鳴り続ける非常警報、そして絶えず響く帝国の砲撃音が木霊する中、できるだけ多くのゾイド部隊を出撃させようと、整備兵やパイロットが奔走する。

「何してるッ!? 道を塞いでいるゾイドを——入口前の《デイバイソン》を、早く出撃させろ!」

叫び続けてガラガラになった整備兵の声に、ビクとエリサ・アノン は振り向いた。彼の怒りの矛先にある黒い《デイバイソン》は、先の演習でエリサが乗っていた物だ。日が落ちる直前まで習熟運転をしていたエリサの機体は入庫したのも遅く、倉庫の入口にほど近い場所に留めてあったのである。

ゾイドの数に対して圧倒的に整備兵が足りていない状況だ、請われるままにその雑務を手伝っていたエリサだが——痺れを切らした見知らぬ士官が、《デイバイソン》を動かそうとコクピットに足を掛けたのに気づいて、

「——それ、私のゾイドです。すいませんっ」

と、咄嗟に手を上げていた。

人垣を掻き分けて寄って来たエリサに、チツ、と舌打ちをした士官は、「なら、早く乗って出撃しろ! 今は一機でも多く、味方の機体を出さなきゃならんのだ!」と、彼女を急かした。その剣幕に気圧されて、慌ててコクピットに乗り込んだエリサだが、

「あの、出撃命令は——っ?」

「そんなモノ待っていられるか? この状況で指揮系統の機能してる部隊が、どこにある!」

もはや、まともな編成をしている時間など無かった。出入口口に近いゾイドから、手当たり次第に出撃させ、要塞を困った城壁の防備に向かわせる状況だ。混乱の格納庫で気持ちを整理することもできぬまま——整備兵がやくそくそ気味に振った誘導灯に従い、エリサは《デイバイソン》を出撃させた。

外は、地獄絵図と形容していい。空を駆けて来た帝国の砲弾が舗装



を穿ち、基地内の建造物を破壊している。火の海の中無事に外へ出たは良いが、統制など全く取れていない状態だ。何をすればいいのかわからずに二の足を踏んでいるゾイド達——強襲隊《ゴルドス》、奇襲隊の《ガイザック》、高速隊の《コマンドウルフ》——所属も用途もバラバラで、エリサの《デイバイソン》は、その最後尾に居る。せつかく出撃しても、これでは中でもたついている後続と、何ら変わりない。

「……いつまでもここに居ても、仕方があるまい」

すると——通信機越しに、しゃがれた男性士官の声が響いた。蠢いた共和国ゾイドの中、一機の《ゴルドス》が最前に出ると、「俺はアイザック強襲戦闘隊所属・ローラン・セルジオ大尉。もし、より階級の高い者がいなければ——」先ずこの場の指揮は、俺が取らせてもらう。異存ないか？」と、居合わせたゾイド乗り達に問いかける。

異論を唱える者は居なかった。エリサを含め、この混乱の中、頼る者も無いまま戦場に出るといふ事を、皆不安に感じていたのだろう。温厚ながら芯のある喋り方をするセルジオ大尉が指揮を申し出られたのは、むしろ歓迎だった。

反論が無いのを確かめると、よし、と頷いたセルジオ大尉。

『「アイザック要塞」は城壁と岩山で囲われた砦、帝国連中の砲撃でも、簡単に破られる事は無いがな。ウィークポイントとなるのは、比較的装甲の薄い城門部分——正面ゲートだ。集中砲火を受ければ、そこから敵が傾れ込んでくる。我々は、それを防ぎに赴く。いいな?」

軍備再編に伴いかき集められたエリサ達とは違い、セルジオ大尉は元よりこのアイザック要塞の守備隊として任に着いていた士官である。砦の防備に対する理解は信用に値するものだろう、と、皆理解していた。

「大尉に従います。私達の指揮を、お願いします」

と、無線に応じたエリサ。他の者達も同様に頷くと、セルジオの《ゴルドス》に追従した。

大尉の懸念は当たっていた。固く閉ざされていたはずの正面ゲートは、エリサ達が到着する頃には既に弾痕塗れであり、大きく広がっ

た亀裂から、ガイロス軍のイモムシ型の小型突撃ゾイド《モルガ》が断続的に侵入してきていた。迎撃に当たっているのは《ゴドス》《ゴルドス》で編成された最小限度の基地防衛隊。城壁の外では、エウロペ人傭兵部隊が土塁を気づいて防備に当たっていたはずだが——なにぶん非正規軍だ、その装備は小型機か、『アタックゾイド』と呼ばれる超小型機で、貧弱という他ない。おそらくはガイロスの大軍に押しつぶされて、既に崩壊しているだろう。

猛進してくる《モルガ》を足蹴にしたセルジオ機《ゴルドス》は、エリサの《デイバイソン》に振り返ると、  
「質の良い銃器を備えたゾイドは城壁に上がって、少しでも敵の数を削れ」

と指示を出す。城壁の上では長距離砲を備えた《ゴドスキャノン》が立ち並び、要塞へと群がってくる帝国軍へと、必死の砲撃を見舞っていた。

時たま撃ち込まれる敵の反撃に、一機、二機と損傷し、墜落してくる《ゴドスキャノン》——激戦の光景にゴクリと生唾を呑み、怖じけたエリサだが、セルジオに「——早く行け！」と急かされて、城壁を駆け昇る。

「……ッ！　なんて、数……」

《デイバイソン》のモニターに映った、城壁の向こう側の景色に、エリサは息を呑んだ。

眼前に広がるロブ平野から遠く望むミューズの森の端まで——敷き詰めた絨毯の如き、ガイロス軍ゾイドの群れ。最前で要塞を攻撃するのは、重砲『キャノリーユニット』を搭載した改造機《キャノリーモルガ》。そのすぐ後に、《イグアン》と《レッドホーン》の隊列、空は戦闘へり《サイカーチス》が飛び交い、最奥には共同で指揮を執る大型のゴリラ型ゾイド《アイアンキング》達が見えた。

大隊——否、師団規模の大軍が動いている。これほど大規模な侵攻は、開戦当初の全面開戦以来であろう。一目で分かるほどの戦力差、

現状の要塞守備隊だけではどう足掻いても持ちこたえられない。

戦慄したエリサに、

「……援軍か？ 部隊の再編が、終わったのか？」

と、疲れ切った兵士の声が弾けた。

隣に立つ、煤だらけの《ゴドスキャノン》からの通信だ。目も眩みそうな程の敵の群れに、それでも臆さず、必死に立ち向かい続けたパイロット。城壁へと駆け上がったってきた真新しいエリサの機体に気づき、希望の眼差しを向けていると分かる。再編の済んだ予備兵力が動けば、持ちこたえる事が出来る——そんな彼らの『希望』が見て取れて、エリサは口ごもった。未だ格納庫は混乱していて、碌に統率のとれていない機体を小出しにしている——本当の状況を言う気にはとてなれない。

「……すぐに、残りの方々もやってきます。もう少しだけ堪えてくださいっ」

彼らの心を挫きたくなくて、エリサはできるだけ明るい声を取り繕い、そう伝えた。なんとなく察する物があったのだろう、《ゴドス》の士官は微かに戸惑ったが——すぐに「……了解ッ」と応答するや気力を振り絞り、再び城壁へと群がる敵機へと砲撃を開始する。

その横で、エリサも萎えかけた心を奮い立たせた。

(そうだ……諦めないで、出来る事をしなくちゃ)

モニターを操作し、デイバイソンを臨戦態勢にさせる。コンバットシステムの機動に伴って、機体に搭載された火器管制の補助装置『COMBAT-II』の機動サインが点灯した。演習では碌に扱えなかった機構だが、最前に立った今、弱音を吐いている時間など無い。バラヌ基地で、一緒に新型のテストをした青年士官の姿を思い出す。彼だつて、「じゃじゃ馬」と称され、ベテランパイロット達さえ匙を投げた『新型機』と根気強く付き合い、モノにして見せたのだ。エリサも、それに倣うつもりだった。

視界に映る敵機を捕捉し、システムが自動で最適な火器を選択してくれる。照準カーソルが全てロックしたのを確認すると、エリサは祈るような思いでトリガーを引いた。

重々しい嘶きを上げた《デイバイソン》。その背に聳えた『105m十七連突撃砲』の砲塔達が、一斉に光を放つ。

轟音と噴煙を連ならせて撃ち放たれた砲弾が、地を這う《キャノリーモルガ》達に次々と命中し、炎上させた。凄まじい火力。だが同時に反動も大きく、砲撃に大きく傾いた機体は、徐々に射撃の精度を落としていく。

演習の時と同じトラブルだ。やっぱりダメだ、と泣きそうになったエリサだが——今回は事情が違った。大地を埋め尽くす程の大軍を前にして撃ち込んだ攻撃は、多少のブレがあっても別の敵機に損傷を与えてくれる。不本意だが、今はこれで撃ちまくるしかない。

「《デイバイソン》……お願い！」

《デイバイソン》の圧倒的火力は、城壁の上に立った友軍たちの目にも、その勇壮さを持って十分な鼓舞として映った。「おお！」と上がった歓声と共に、兵士達も折れかけた心を立ち直らせ、一層の砲撃を返す。

勢いを取り戻した共和国の防衛隊に、僅かだが帝国の攻勢が緩んだ。破られかけた正面ゲートも、セルジオ大尉の《ゴルドス》率いる烏合の部隊が、付け焼刃とは思えぬ連携で死守している。敵の補給が尽きるまで持たせる——勝利への糸口が、微かに広がった気がした、その時であった。

——一筋の光が、帝国軍の中より伸びた。

不健全そうな、蒼白い閃光の帯。それはアイザック要塞・城壁の正面ゲートへと真っ直ぐに照射され、凄まじいまでの大爆発を巻き起こした。城門を丸ごと消し飛ばし、周囲の城壁を崩落させた『一撃』。エリサの《デイバイソン》も、崩れ落ちる足場と共に大地へと投げ出されてしまう。

「ぎゃあー！——なにっ……っ？」

悲鳴を上げたエリサは、視界の端、共に此処まで駆けつけたゾイド達が、光の奔流に吞まれて消滅するのを見てしまった。セルジオ大尉

の《ゴールドス》も、何が起きたのかさえ理解できないまま、白んだ閃光に押し流され消えていく。

たったの一撃で、守備隊が見出しかけていた『活路への希望』が、打ち消された。

閃光が止むと、粉塵舞う城門の瓦礫を乗り越えて、ガイロス軍の《モルガ》が、《イグアン》が、《レッドホーン》が、ついに要塞内へと侵入を開始する。そして——緩やかな足取りで、あの閃光を撃ち放った機体もまた、城壁の向こうへと足を踏み入れていた。

瓦礫に塗れ動けない《テイバイソン》の中、エリサはモニターに映った漆黒のゾイドに目を剥く。

二足歩行の、黒いテイラノサウルス型ゾイド。これまでに一度も見ることが無い機体だった。自身の体軀に匹敵する大型の二連ライフルを背負っていないながら、頭と尾を水平に持ち上げた完全二足歩行。巨軀に見合わぬ小さな前脚には、鎌のような鋭い爪を備え、紅く輝く細長いカメラアイが、酷く無機的な印象を与える。

《ジエノザウラー》。

ガイロスの完成させた、『オーガノイドシステム』搭載の新型ゾイド。《ブレードライガー》と同様、操作性の不調を改善できずにいた次世代ゾイド——試作機完成から二か月、ようやくと量産体制が確立された『虐殺竜』。その一機が、アイザック要塞攻撃部隊の中に紛れ込んでいたのだ。

## エリサのデイバイソン ④

『アイザック要塞』。

現在は北エウロペの東部を勢力圏に加えたヘリック共和国が入城し、前線とロブ基地を繋ぐ拠点としてゐる要塞だが——元々はロブ平野一帯を縄張りとしていた、北エウロペの一部族が築き上げた城である。天然の岩山を利用して作られた要塞本部と、それをぐるりと囲む肉厚の『城壁』は、比較的戦乱の少なかつた西方大陸の地では珍しい、実戦的な要塞であつた。開戦から二時間、守備隊の十数倍はあろうがいロス帝国軍の攻撃を凌げていたのは、この要塞の守りがあつたからに他ならない。

——しかし、それも限界が訪れたらしい。

落雷でも起きたのかと疑う程の轟音——司令部の天井に微かな歪が生じ、土埃が落ちる。振動によるめいたマクシミリオン・ペガサス中佐は、「駄目だ……城壁が破られましたッ！」と叫ぶ通信兵の声を聞いた。

モニターに映る戦況にギリと歯を食いしばると、「ロブ基地との連絡は？ 援軍は、まだ来ないのか!？」と怒鳴り返す。

ペガサス中佐の切望も虚しく、吉報は無かつた。『アイザック要塞』からロブ基地に飛ばされた電信への返答は、終ぞ帰つてこなかつた。それもそのはず——前線での大攻勢開始とほぼ同時刻、ガイロス軍はロブ基地に対しても改造〈アイアンコング〉率いる特務中隊と、〈ブラキオス〉〈シンカー〉で構成された海兵隊による『挟撃奇襲作戦』を発動していたのである。不意の全面開戦で混乱しきつた共和国軍は、帝国特殊部隊の侵入をまんまと許してしまった。

混乱は、前線だけではない。最早共和国側でまともに機能している司令塔は、一つも存在しない状態だつた。

降りしきる雨だれの中に、瓦礫の礫が混じる。

帝国軍の隊列を割つて現れた、漆黒の新型ゾイド・〈ジエノザウラー〉——その口腔より吐き出された一筋の雷霆によって、堅牢なア

イザツクの城門は砕け散った。万全とは程遠い共和国守備隊の、文字通り心の『拠り所』となっていた城壁が、ついに破られたのである。

最前線の兵達を襲う焦燥は、司令部の比では無かった。破られた城壁の切れ目より、帝国軍の第二陣、大型主力量産機《レッドホーン》や、最新鋭の《レブラプター》で構成された本命、『主力部隊』がなだれ込んでくる。頼みの城壁を破壊されて浮足立った共和国守備隊は、完全に戦意を喪失していた。本領を發揮した帝国部隊に、《ゴルドス》が、《ゴドス》が、《コマンドウルフ》が——一機、また一機と破壊されていく。全滅は、時間の問題であった。

そして——疾走する帝国ゾイドの群れの中、ただ一機悠々と歩みを進めた《ジェノザウラー》もまた、崩れ落ちたアイザツク城塞の城門を潜る。

「黒い恐竜型ゾイド……ガイロスの、『オーガノイドシステム』搭載機？」

崩落した城壁の土砂に塗れ、動けない《テイバイソン》の中で、エリサ・アノンは呟いた。衝撃で朦朧とした視界に、《ジェノザウラー》のシルエットと、その頭部で光った赤い眼光が焼き付く。カメラアイの下に輝く細長い楕円系の赤光は、一見無機的な印象だが——しかし、全身を総毛立たせる程の『プレッシャー』を蓄えていた。

この殺気に似たモノを、エリサは知っていた。ジェイ・ベック少尉がテストを行った共和国の新型機、《ブレードライガー》に同乗した時に感じたプレッシャーだ。それと同じ力を、あの《ジェノザウラー》も備えている。

『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドの戦闘力は、エリサもよく分かっていた。疲弊した《テイバイソン》で、どうこうできる相手ではない。捕捉される前に後退し、態勢を立てなおすべきだ。が——

生き残った共和国軍守備隊へと群がっていく帝国軍の中、《ジェノザウラー》はそちらには目もくれず、ゆつくりと崩れた城壁に振り返る。散乱した瓦礫と残骸を注視した『虐殺竜』は、やがてその中で動けないでいた《テイバイソン》を見つけた。先の一撃から唯一生き

残ったエリサ機に気づき、その獰猛な眼光を真っ直ぐに差し出してきた。

「……ヒッ！」

気づかれた、と理解したエリサは、慌てて操縦桿を引き、《デイバイソン》を起き上がらせる。しかし——崩落で城壁の上から地べたまで叩き落とされたのだ、駆動系はボロボロで、驚く程挙動が鈍い。これでは、常識を超えた瞬発力を備える『オーガノイドシステム』搭載機からは、逃げ切れないだろう。

「う、く……っ！」

生唾を呑んだエリサは、苦渋の決断で《ジェノザウラー》に砲口を向ける。

《デイバイソン》の主砲『十七連突撃砲』の火力は、同クラスのゾイドを遥かに上回る。如何に《ジェノザウラー》と言えど、この至近距離で浴びればただでは済むまい。損傷させた隙に、活路を見出すつもりだった。が——、

トリガーを引いたエリサは、沈黙した愛機に絶句する。見ると、コクピットのメインモニターから、『COMBAT—II』の機動アラートが消えていた。

旧大戦より共和国の最前線を支えた《デイバイソン》の信頼性は高いが——今戦争に置いてパイロット一人で運用できるような投入されたシステムデバイスとのマッチングは、習熟しているとは言い難い。城壁の崩落によって生じた衝撃で、システムがダウンしたのだ。

「ツウソ——!?!」

息を呑むエリサに、容赦ない『虐殺竜』の攻撃が迫る。その背に背負った二門のレーザーライフルから光弾が爆ぜ、《デイバイソン》の足を穿った。『オーガノイドシステム』によって強化された、高出力ライフルの一撃だ。突撃ゾイドだけあって装甲は堅牢な《デイバイソン》、損傷は少ないが——衝撃は殺せない。再び倒れ伏す《デイバイソン》に、《ジェノザウラー》は凄まじい瞬発力で迫り、その爪牙による連撃を見舞った。

「きゃあーっ！」



グラと揺れるコクピットの中で、エリサ・アノンは惨めつたらしく悲鳴を上げる事しかできなかった。救援は無い。城壁を破られ、数で押される友軍の戦線は、既に崩壊寸前だった。柄エリサを助けに入れる機体など、一機もない——そのはずだった。

絶望に弛緩したエリサの視界に、ふと青い機体が飛び込んでくる。

ライオン型ゾイドだ。流線型のフォルム、ブルーとホワイトの装甲はヒロイックで、無骨なヘリック製の戦闘機械獣の中では異質な感がある。見慣れぬゾイドに動揺したのは、《ジェノザウラー》のパイロットも同じらしい。急襲を躲しきれず、タツクルをもろに受けてよろめいている。

「《ブレードライガー》……ッ、シユウ君——ッ?」

驚愕に目を剥いたエリサは、その『新型ゾイド』に向かって叫んだ。エリサと『虐殺竜』の間に割って入った、共和国の救援——格納庫内よりようやくと飛び出した、シユウ・フェーン中尉の量産型《ブレードライガー》。

それだけではない。後方から火線が飛んで、前進する帝国主力軍の隊列を掻き乱す。《ブレードライガー》に随伴する、ヴェロキラプトル型小型ゾイド《ガンズナイパー》の砲撃だ。たった三機——だが、見慣れぬ共和国次世代ゾイドの参戦は、帝国ゾイド部隊の士気に、微かな影響を与えたらしい。僅かだが、敵の攻撃が鈍ったように思えた。「ハアアア、ブレードッ!」

フェーン中尉の気迫に合わせて、《ブレードライガー》が猛る。未だ態勢の立てなおせていない黒い『虐殺竜』に向かって一目散に突貫すると、『レーザブレード』を展開、一気に《ジェノザウラー》へと斬りかかった。鋭い斬撃が、ジェノの左手首を飛ばす。

「すごい……っ!」

フェーン中尉の技の冴えに、エリサは息を呑んだ。直後に通信回線が開かれて、「何をしているんだい——早く後退したまえ!」と、フェーン中尉の声が弾ける。

「こいつは《ジェノザウラー》、ガイロスの作った『オーガノイドシステム』搭載機だ。普通のゾイドで敵う相手じゃない!」

「……っ！」

フェーン中尉の言っている事は、エリサにも理解できた。『オーガノイドシステム搭載機』の凄まじい生命力、闘争本能は、既存のゾイドのそれを遥かに凌駕する。まして乗機を乗りこなせていない今のエリサに、どうこうでできる相手ではないのだ。ここに居ては、足手まといになるだけ——ジェイ・ベックの《ブレードライガー》に同乗した事で、その力を理解していたエリサは、すぐにそう決断した。だが

「ヌ——、グハアツ!？」

フェーン中尉の《ブレードライガー》が《ジェノザウラー》の反撃を受けた。横倒しになった蒼い機体に喰らい付いた《ジェノザウラー》は、ライガーの肩口の装甲を噛み砕くと、その重厚な尾を鞭のように振るって打ちのめす。迎え撃とうと立ち上がる《ブレードライガー》だが、勢いに乗ったジェノを相手に気圧されているようにも見える、反撃の糸口を、全く見いだせないでいた。

「どうして? ジェイ少尉と同じ、《ブレードライガー》なのに……っ」  
フェーン中尉の苦戦に、エリサは動揺を叫んだ。目の前で戦う《ブレードライガー》は、あの時ジェイが操った機体のような、荒れ狂う獰猛さを感じさせない。

シユウ・フェーンとジェイ・ベックならば、おそらく前者の方が、ゾイド乗りとしての技量は上だろう。そのはずなのに——同じ『オーガノイドシステム』搭載機同士のはずなのに——戦いは、《ジェノザウラー》の圧倒的優位に進んでいる。

エリサは知らなかった。量産型《ブレードライガー》は、彼女の知るジェイ・ベック少尉機『アーリータイプ』と比べて、『オーガノイドシステム』の機能が大幅に限定されていた事を。未だシステムの解析が完全ではない《ブレードライガー》を量産化するために、技術部の下した処置ではあったが——結果としてそれは、機体性能を大幅にデチューンしたに等しかったのである。

ジェノの『パルスレーザーライフル』が火を吹いた。とつさに『Eシールド』を展開した《ブレードライガー》だが、至近距離だ。易々

と貫通し、シールドジェネレーターとバーニアを撃ちぬかれてしま  
う。

「シユウ君……ッ！」

戦いを見つめていたエリサは、崩れ落ちる《ブレードライガー》の  
姿に絶望した。ライガーの損傷は大きい。《ジェノザウラー》の次の  
一撃を、自力で躲すのは難しいだろう。

「誰かッ、シユウ君を……ッ」

息を呑んだエリサは、咄嗟に戦場を見渡したが——戦場は乱戦の様  
相を醸している。随伴機の《ガンズナイパー》も、既に帝国軍の大群  
に押し流されて、遙か彼方だ。フェーン中尉の救援など、とても手が  
回るまい。

エリサ・アノンには迷った。

今、彼女が出来る事など何もない。損傷し、しかも火器すらも使え  
ない彼女の《デイバイソン》が居た所で、中尉のライガー共々、まと  
めて『虐殺竜』に蹴散らされるだけだ。だが——この場で背を向けて  
逃げる事は、彼女にはできない。どうすれば、と頭を抱えた彼女だっ  
たが——、

——ふと、機体の底から呻いた嘶きに気づき、面を上げる。

「《デイバイソン》……まだ戦えるの？」

沈黙していた機体に、生命感が戻ってくる。ボロボロの愛機に、エ  
リサは思わず問いかけていた。ゾイドがその言葉の意味を理解でき  
ているかは分からない。だが、断続的に雄々しく声を上げる『鋼鉄の  
猛牛』は、フェーン中尉と《ブレードライガー》を見捨てられない、と  
いうエリサの意思に同調し、共に戦ってくれる唯一の存在に思えた。

それで分かった。最近の鬱屈、《デイバイソン》を乗りこなせなかつ  
た理由を。『COMBAT II』システムに気を割き過ぎていたエリ  
サは、《デイバイソン》自身——ゾイド本来の心と向き合う余裕を持て  
なかったのだ。ごめん……、と短く謝って、コンソール画面を撫でた

エリサは、意を決して唇を噛むと、モニターに映る戦場の様子を見渡す。

銃弾が飛び交い、地面が焼ける。帝国ゾイドの群れに、次々と打倒されていく友軍——阿鼻叫喚の地獄となった戦場に、冷たい雨が降り注いでいる。

シートベルトを解くと、エリサはコクピットハッチを開けた。《ジェノザウラー》のパワーに対抗するには、《デイバイソン》最大の持ち味たる『十七連砲』が必要不可欠。そして、ダウンした『COMBAT』プログラムを復旧させるには、機体背部にある第二コクピットに赴く必要があった。

コクピットから飛び降りたエリサは、散乱した瓦礫を足場代わりにして《デイバイソン》の背をよじ登る。大気には、鉄と土の焦げた匂いが立ち込めていた。流れ弾が飛んで来れば、生身でいるエリサにはひとたまりも無かろう。恐れはしない。ジェイやペガサス中佐——彼女と共に戦ってきた者達と同じように——エリサもまた、絶対の危機に立ち向かう勇気を持つと、と、心に決めていたから。

## エリサのデイバイソン ⑤

足元を跳ねる水たまりの雨水は、生ぬるかった。ゾイドの余熱や、巻き上がる爆炎といった『戦場の熱』によって温められたそれは、まるで人の体温みたいで——戦死した者達の思念が絡み付いてきたかのような不快さに、エリサの肌が粟立つ。

(シユウ君、みんな……)

愛機の背に指を掛けながら、エリサは戦場を振り返った。シユウ・フエーン中尉の《ブレードライガー》は中破し、ピクリとも動かない。コクピット付近は無事だから、パイロットは生きているだろうが——虐殺竜・《ジエノザウラー》のパイロットは狡猾だ。《ブレードライガー》の息の根を止める為、追撃を見舞ってくるのも時間の問題だろう。

視線を薙いで、今度はあの《ジエノザウラー》の姿を探す。フエーン中尉のライガーを倒した黒い『虐殺竜』だったが、僅かに生き残った共和国基地守備隊の砲撃に横槍を受け、止めを刺し損ねたらしい。今は踵を返して、残った《コマンドウルフ》、《ゴルドス》達にその矛先を向けている。

打ち崩されたアイザック要塞の城壁だが、崩落によって生じた瓦礫が、ガイロス軍の侵入の足を逆に鈍らせていた。主力部隊第一陣の突入以降、敵の侵撃は鈍っている。この隙にあの『虐殺竜』を破壊できなければ、今度こそ要塞は壊滅するだろう。そして、そのためには、エリサの《デイバイソン》の火力が必要不可欠だ。

「……っ」

雨に濡れた《デイバイソン》の装甲から滑り落ちぬよう、慎重な足取りでその背を登っていくと、背部に備えたサブコクピットのハッチがあった。落下の衝撃と落石をもろに受け、背の装甲は歪に拉げられていたが、中の機器類は無事に思える。これならば、システムを復旧できる可能性もあろう。

(お願い……間に合って)

祈るような気持ちで、エリサがハッチを開けた時だった。

テイラノサウルス型ゾイド特有の、金属質の高い咆哮が戦場に木霊する。《ジエノザウラー》だ、と、慌てて振り返ったエリサは、かの黒いゾイドが異様な『変形』を始めたのに気づいて、「何っ……!?」と息を呑んだ。

黒い竜が大きく顎を開くと同時、頭部から尾の先までが完全な水平になり——口腔の奥からバレルが、尾部を構成する各ユニットより放熱フィンが展開される。大きく両の足を開き、アンカーによって体制を固定したそれは、大よそ機動兵器としての機能を放棄し、まるでゾイドを一つの固定砲台へと様変わりしたかのようにだった。エリサの知り得る限り、このような機能を持ったゾイドは、古今東西どこにも存在しない。

バチバチと、ジエノの口腔内で光球が膨れ上がる。凄まじい熱量だ、夜が明けたかと思ふ程の、蒼白いスパークが辺りを照らす。十分に肥大化した光源を《ジエノザウラー》が口腔のバレルの中へと飲みこむと、一瞬視界がブラックアウトした。そして——、

——次の瞬間それは、一筋の『雷霆』となって撃ち出される。

凄まじい衝撃に、エリサは思わず目を伏せ、悲鳴を上げた。

《ジエノザウラー》の吐き出した、蒼白い閃光——大袈裟な発射体制からすれば拍子抜けするくらいの、細長い光線。だがその出力は、彼女の見たどんな火砲よりも強力であった。光の槍のようにスラと伸びたそれは、周囲の礫塊を巻き上げながら共和国残存部隊へと向かい、陣形の中心へ突き刺さる。

直撃を受けたのは、一機の《ゴルドス》。まるでピンバイスでくり抜かれたかのように、小さな穴を穿たれたそれは、凄まじい熱量を溜めこんでポコポコと膨れ上がり、やがて爆発四散する。それだけではない。寸前で回避したはずの他のゾイド達さえ、光線の余波を浴びて内部メカから崩壊し、粉々に砕け散った。

たった一発のレーザーで、前線の共和国部隊が壊滅した。

——『収束荷電粒子砲』。

ガイロス帝国が次世代ゾイド《ジェノザウラー》に与えた、最大の武装。帝国軍の持ちうる最大の光学兵器『荷電粒子砲』を中型ゾイドに搭載できるまでに小型化、それに伴い生じた出力低下を、砲塔に搭載した収束リングによるエネルギーの圧縮・一点化によって解決した、最新テクノロジーの粋である。発射シークエンスが長く、またかつてヘリック共和国を崩壊寸前まで追い込んだ死竜《テスザウラー》の『大口径荷電粒子砲』と比べれば遥かに劣るものの、それでも中型ゾイド程度ならば丸ごと消滅、また余波だけで複数の機体を損壊させる程の破壊力を持つ。

堅牢な『アイザック要塞』城門突破は、この『収束荷電粒子砲』を備えた《ジェノザウラー》単機によって為された。そして驚くべきが、これほどの大出力兵器を短時間の内に二度使用して尚稼働できる、『オーガノイドシステム』搭載のゾイドコアである。《ジェノザウラー》は、まだ余力を残していた。もし『収束荷電粒子砲』が、未だ動けぬゾイド達が多数ひしめく格納庫に直撃したら——。

間違いない、アイザックは壊滅するだろう。

「——っ……！」

《ジェノザウラー》の破壊力を目の当たりにしたエリサは、焦燥を堪えながら、《テイバイソン》の第二コクピットを開いた。ショートしているであろう、『COMBAT-II』制御機器のコードを片っ端から引き抜き、再起動させる事で、復旧を促す。

与えられた時間は、ほんの僅かであった。

鳴りやまぬ非常警報、絶えず叫ばれる通信兵の被害報告——城壁が破られて三十分、司令部は喧噪と絶望に包まれていた。ギリと、奥歯が折れそうな程に噛み締めたペガサス中佐に、「中佐、脱出用プレラスの準備が完了しました……参りましょう」と、背後より掛けられた声。

振り返ると、アイザック要塞を任せられていた司令官が、血の気の引いた顔で立ち尽くしていた。眉を顰め、「脱出？」と聞き返すペガサス。

「ハッ……城塞の陥落は時間の問題です。せめて指令たる我らは、こ

の報本部に持ち帰り、事態の打開を促す義務があるかと」

もつともらしい事を言うが——彼が己の保身を思つてそうしているのは、目を見れば察しが付いた。「許可した覚えは無い。それに、何処へ逃げるといふのだ？」と問い返したペガサスに、司令官は淡々と答える。

「——ロブに」

「ロブ基地との通信は途絶えているのだぞ。ガイロスの襲撃を受けているのは明らかだ、逃げ場など無い」

「では、此処で死ぬと言うのですか？ アイザック要塞と——母国の地ではない、異邦の岩山と、運命を共にし、灰になれと言うのですか！？」

平静を保てなくなり声を荒げたアイザックの指令に、周囲の視線が集まる。

ペガサスは目を伏せ、その叫びを脳裏に反芻させると、静かに頭を振った。彼の言うとおり、格納庫のゾイド出撃は未だ円滑に進んでいない。その上敵の先兵には相当な戦闘力を誇る兵器が加わっているらしい、守備隊の全滅も時間の問題であった。

それでも——マクシミリオン・ペガサスは、その提案に賛同できなかった。

「——では、貴官は他の将兵を捨てて、一人生きながらえれば良いというのか？」

「……………」

問い質に、司令の男は口ごもる。

彼も分かっているのだ、そんな真似をして生きながらえたとして、如何程の価値があるのかを。沈黙からその良心を読み取ったペガサスは、それ以上の追及をしないまま、踵を返して部屋を出ようとする。

「どっこへっ……………」

呼び止めた司令官に、格納庫だ、と、振り返らないまま応えようと、「ゾイド乗りとしての、矜持を貫く。司令であろうが一兵卒であろうが、変わる事が無い——最期の時に臨むのは、名誉ある戦いだけだ」



《ディバイソン》の復旧は、万全とは言い難かった。

『COMBAT—II』の再接続は済んだが、その機能が十全に作用しているかは、分からない。もともと技術士官でないエリサに施せる処置は限られている、このまま戦線に復帰する以外、選択肢は無かった。そんな中、ギロと一機の《レッドホーン》がこちらを見据えたのに気づき、エリサは悲鳴を上げる。まだ余力がある《ディバイソン》の機体に目を付けたのだろう、背負ったカスタム装備・『ビームガトリングユニット』の砲塔が旋回し、こちらに向けられる。直撃すれば、自身のエリサは爆炎に吞まれ、消し炭になるだろう。

吼え声を上げて、カスタム《レッドホーン》がビーム光弾を撃ち放とうとした時だった。ズイと飛び出した青い影が、《レッドホーン》の背負った銃器を噛みちぎる。衝撃に倒れ伏したホーンの頭部を、思い切り踏み砕いて——満身創痕の《ブレードライガー》が立っていた。シユウ・フェーン中尉の機体だ。クルとエリサの《ディバイソン》に振り返ると、

「何をしてる……早く逃げろと言ったろオッ！」

と、スピーカー越しに叫んだ。

悲壮な決意の滲んだ叫びに、「シユウ君……でも」と口ごもったエリサだが、フェーン中尉の気迫が、それを遮る。「分からないのか、君には死んでほしくないと言ったんだ。ボクは——」と、彼が思いの丈を叫ぼうとした時——その機体を、『パルスレーザーライフル』の光弾が撃ち抜いた。

《ジェノザウラー》が、二人に止めを刺そうと迫っていた。

《ブレードライガー》の両足は先ほどの直撃弾で砕け散り、フェーン機はもはや、逃げる事さえ叶わない。圧殺を確信したジェノが勝利の咆哮を上げると、再び機体を変形させ——あの『収束荷電粒子砲』発射態勢を整える。クワと開かれた罅の向こうより銀色のバレルが伸び、青白い稲妻をスパークさせた。

「し、シユウ——ッ！」

荷電粒子の光を目前にしながら、平伏しピクリとも動かないフェーン中尉に、エリサは悲痛な叫びを掛けると、全速で《ディバイソン》の

メインコクピットへと戻る。シートに飛びつき、安全ベルトを締めるのすら忘れて操縦桿を取ると、メインジェネレータを再起動させ、立ち上がらせた。

しかし——『COMBAT』の機動アラートは、まだ灯いていない。「エリサ逃げるんだ、ボクはもういい！」

無線にフエーン中尉の声が弾けるが、エリサには聞こえなかった。アクセルを踏み込み、《ブレードライガー》と《ジェノザウラー》が相対した間へと、一足飛びで機体を割り込ませる。既に荷電粒子の収束は十分、『虐殺竜』の口腔で、光が膨れ上がる。

「お願い——《ディバイソン》、お願い……ッ！」

泣きそうな声で、エリサはもう一度祈った。雷霆が撃ち放たれるまで、コンマ数秒——システムの復旧を確かめられぬまま、『十七門砲』のトリガーを引く。ほぼ同時に、《ジェノザウラー》も光を飲み込み——

——暗転した視界の向こう、轟音が爆ぜた。

死を覚悟し、エリサ・アノンは目を伏せていた。硬直したまま数秒が過ぎ、生きている、と理解すると、ゆっくりと面を上げる。

眼前では、炎上し苦悶の断末魔を上げた《ジェノザウラー》が、のた打ち回っていた。次いで、コンソール画面、『COMBAT—II』の機動を表す赤いアラートが煌々と点灯している。決死の覚悟でトリガーを引いたエリサの砲撃は、ジェノが止めの一撃を撃ち放つよりも早く、その全身を撃ち貫いていたのである。

「やった……！ やったよ！」

呆然から高揚へと移り変わるエリサの気持ち。弾んだ声に応えるかのように、《ディバイソン》は力強く咆哮した。

死に態のジェノが業火に焼かれてなお、《ディバイソン》に牙を剥こうとする。勝利を確信していたエリサは、その攻撃に虚を突かれる格好となったが——、攻撃が《ディバイソン》を捉えるより早く、ジェ

ノの後方で轟砲が弾けた。『虐殺竜』の下半身を粉々に吹き飛ばした一撃に、残る帝国軍も、エリサも、皆一様に基地の奥へと目を凝らす。ズイト、緩やかな足取りで《ゾイドゴジユラスMK-II》が前進していた。その後ろには、僅かな手勢の共和国ゾイド達。格納庫から出る事の出来た機体達を引きつれて、マクシミリオン・ペガサス中佐が出撃したのだ。

「良くやった、アノン少尉——みんな」

通信と同時、『ゴジユラスキャノン』が火を吹く。二発の巨大な火球は、城壁の切れ目に群がったガイロス軍の第二陣へと注ぎ、彼らを焼き払う。

「私も共に行こう……圧倒的不利に怖じ気ず戦い、貴官らが見せてくれた、人と、ゾイドとの絆。私も、それに倣い、共に戦わせてくれ」  
宣誓と共に、『ゾイドゴジユラス』が力強い咆哮を上げる。

《ゴジユラス》を含むとはいえ、たかだか数機の増援だ。帝国機達は味方の死骸を踏み越えながらも進撃し、アイザック要塞を攻め立てんとする。ペガサスと部下たちの士気もまた高く、それを真っ向から迎え撃ち、退けていく。

「中佐……」

戦いの様相を見守り、呆けていたエリサを鼓舞するかのようになり、乗機《デイバイソン》が嘶いた。同時……ノイズ交じりの通信回線が開いて、「エリサ……」と、シユウ・フェーン中尉の弱々しい声がする。数秒瞳を伏せて瞑想すると、エリサは意を決して、「シユウ君は休んで」と、その声に応えた。

「大丈夫、守るよ——シユウ君、ありがとう」

優しく、宥めるように——しかしどこか心強い、芯のある声色で、エリサはフェーン中尉に告げる。フツ、と息を吐いたフェーン、

「このボクが君に救われるなんて……認めるよ、ボクア——君の成長を」

と、歯切れ悪く言った彼に、エリサも微笑を返した。

思わぬ苦戦を強いられて、ガイロス軍には疲弊の色が目に見えて滲んできている。《デイバイソン》の機首を、その真正面に向けると——

エリサも正真の決意を持って、ペガサス達に続いた。

### 第三部：暗黒の軍勢

#### ① プロローグ — 終結 —

ZAC2100年 十月 『ニザム高地』北部

夜明け前の暗がりの中で、ジェイ・ベックはジッと息を潜めていた。アイドリング状態の愛機のコクピット。ふと暗転したモニターに映った自分の顔に目を遣ると、妙にやつれていた。小じわの増えた目元。頬骨が妙に這った顔が暗がりにはボヤと浮かぶ様は、まるで骸骨みたいで、先まで被っていたメツトのせいで乱れた自慢のソフトモヒカンの中には、二、三本の白髪が混じっていた。

一年前——大海原を渡り、今は遙か東の『ロブ基地』へと降り立った自分は、こんな顔をしていただろうか。多分、違う。この一年間の戦いが、ジェイを疲弊させた。幾度と無く死にかけ、また幾度と無く死んでいく者達を見送った。そんな戦いの日々を繰り返していくうちに、それも気にならなくなり——感じる心を失ってしまったのかと思っていたが、そうではないらしい。戦場の緊張感は確実にジェイを蝕み、こうして外見にも現れている。

だが——戦いは、もうじき終わる。

切り立った岩場がズラと続く中、一際高い台地の上で、ジェイ達は待機していた——その山間の一角で、まばゆい閃光が煌めく。続いて、轟音と震動。朦々と上がった煙と紅蓮の炎が、朝焼けよりも赤い燈でジェイ達を照らす。

横を見ると、キャノピー越し、隣でズラと並んだ友軍のゾイド達が、ジェイ同様、麓で煌々と照った爆炎を睥睨していた。《シールドドライガー》に《コマンドウルフ》……この戦争を共に駆け抜けた、戦友たちの乗機。幾重もの死線を潜り抜けてここに立っている者達だ、機体

各所に刻まれた擦り傷や弾痕が、それを証明している。

「ようやくと、か」

サウンドオンリーの通信回線……グロック・ソードソール少尉の声が聞こえた。ジェイ機の隣に立った彼の《シールドライガー》は、一月前に開始されたヘリック共和国大攻勢に際して、緑化迷彩塗装から、ホワイトを基調とする伝統的な『Mk-IIカラー』へと塗り替えられた。悪戦から抜け出し、ヘリックの正義を執行する——此度の戦いに挑む、兵達の心意気の表れだ。全滅と隣合わせで、ただ生き残るためにゲリラ戦を繰り返していた半年前では、そんな偽善を振りかざす余裕など無かった——戦況の変化が、それを可能にしたのだ。

そう——ヘリック共和国は勝ったのだ。一年半にも及ぶ、異邦の地・西方大陸での戦争に。

決定的となったのは、三か月前にエウロペ全土で繰り返された、二度目の全面開戦であった。《ストームソーダー》によって制空権を奪われ、慢性的な補給不足に悩まされていた帝国軍は、短期決着を狙おうと、全軍を動員した総攻撃に踏み切った。ヘリックの防衛線たる『ミューズ森林地帯』を乗り越え、バラヌ、アイザック、ロブ……共和国の重要拠点を直接攻撃したガイロスであったが——粘り強い抵抗の前に、終ぞその内の一つも陥落できなかつたのである。

敗北の代償は大きかった。敵地の奥深くまで侵入し、精力を使い果たした主力軍は、勢い付いた共和国軍の猛反撃を浴びる事となったのである。それまでヘリックに先んじて西方大陸のオーバーテクノロジ―『オーガノイドシステム』の解析し、それを搭載した次世代ゾイドを送り込む事で戦いを有利に進めてきた帝国軍だ。此度の危機に際しても、開発された新型ゾイド部隊を惜しみなく投入し、戦線の後退を食い止めようとしたが——数に乏しい特殊戦力では、一度傾いた形勢を覆すには至らなかつた。

そして今、攻勢に転じたヘリック軍の主力部隊が、ガイロス帝国西方大陸派遣軍の本拠『ニクシ―基地』を、その間合いへと捉えている。全軍の指揮を取るのは、旧大戦・ZAC2037年のロールアウト以来、一貫してヘリック共和国軍の旗艦とされた巨大ゾイド《ウルト

ラザウルス』、半世紀前の『大異変』を乗り越え現存する、『大統領専用機』。決戦兵器『ザ・デストロイヤー』へと改装され、西方大陸派遣軍へと預けられた機体は、今宵ついに『ニクシー』への直接攻撃に成功したのだ。

ニザム高地に集ったジェイ・ベックから『主力部隊』が見下ろす先、台地の麓で二発、三発……と、夜明けの群青の中幾重もの光球が膨れ上がる。《ウルトラザウルス》の主砲『1200mmウルトラキャノン』の砲撃が、ニクシーの主要設備を破壊しているのだ。全ての砲弾を撃ち切り、主要施設を完全に破壊した後で主力部隊が突入。敵の残存兵力を掃討する手筈となっている。

通信機越し、行くぞ、と号令が入った。小隊を指揮し、共に戦ってきたスターク・コンボイ大尉の声。隊列の戦闘に立った彼の《シールドライガーDCS》も、グロック少尉の機体同様の『Mk-IIカラー』に改められている。神妙な声色、彼のこの一戦に掛ける心意気も、ジェイと同じらしい。

轟と力強い咆哮を上げた《シールドライガーDCS》が疾走し、ニザムの台地を駆け下りていく。《シールドライガー》が、《コマンドウルフ》が後につき、麓に見える一点の灯——炎上する『ニクシー基地』を目指した。粉塵を上げる高速ゾイド達の疾走は、荒野に巻き起こった一陣の疾風のように、その壮観さ、勇猛さに、ジェイは一時感慨を忘れ、呆けた。

「どうしたベック……行かないのか？」

掛けられた声に振り返ると、キャノピー越しに白い《コマンドウルフAU》の姿があった。

「怖気づいたなら、そこに居ろ。俺は行く。ようやくと、このクソツタレな戦争が終わるんだからな」

勇んで言う、傭兵ツヴァインの声。この戦争で共に戦った、エウロペのゾイド乗り。ヘリックとガイロス、異邦から現れた二つの大国が始めた抗争によって故郷を荒らされた彼は、それでも平穏を取り戻せる時が来ると信じ戦い続けた。共に危機を乗り越える中でその悲し

みを垣間見ていたジエイは、この一戦が彼の待ち望んだ、悲願の時であると知っている。

「いや……行くよ」

静かに応じて、ジエイもまた愛機を始動する。シート越し、グンと揺れた後ゆつくりと歩みを進めるゾイドの振動は、この一年間毎日味わってきた『戦いの予兆』の一つだ。最近は気にも留めてなかったそれが、今日は妙に胃の腑を擦る。

「なあ、ツヴァイン」

並走を始める《コマンドウルフAU》に、今度はジエイが通信を送る。駆動音の響くコクピットの中、スピーカーから来る音に意識を割いて数秒、「……なんだ？」と傭兵の返答が返ってきた。言おうか言うまいか、迷った後、ジエイは呟く。

「……本当にこれで、終わると思うか？ ガイロスは戦いから手を引いて——争いの無かった時間が、この惑星にもう一度訪れると、そう思うか？」

返答は、無かった。

ジエイ自身、それを問われた立場だったら応えられなかつただろう。そうあって欲しいと願っていても、心のどこか、『戦いは終わらない』と悲観している自分が居る。『平穏』という概念を忘れさせるに十分な程の戦争が、この一年半には在ったのだ。

それでも、と、ジエイ・ベックは己を奮い立たせる。たとえこの戦いの果てに、更なる死線が立ちはだかつているのだとしても。彼にも、彼の仲間達にも、そしてこの星に住まう戦闘機械獣達にも——その運命から逃れる術など無いのだから。

——※※※——

——同時刻。

西方大陸戦争終局の戦いが行われたニザム高地の、遙か南西。未だ残る夜闇の残滓に身を隠し、数機の帝国軍ゾイド部隊が行進していた。先頭を往くのは、指揮官機たる《アイアンコング・マニユーバカ



スタム》。従うゾイドは様々で、旧式の《レッドホーン》や《イグアン》、《レブラプター》、あの虐殺竜《ジェノザウラー》と言った最新鋭機……迷彩塗装を施された辺境拠点の機体もあれば、帝国決死隊の残存戦力も混じっている。

戦闘ゾイド一個中隊クラスの烏合の軍勢が、『ニクシー』とは真逆の方角へと歩みを進めていた。向かう先は、この北エウロペと唯一陸続きとなっている一点——西エウロペ大陸・マンスター高地。行軍の指揮を執るのはガース・クロイツ少佐、帝国陸軍第七強襲戦闘大隊の隊長を務めた歴戦の雄である。しかし——既に彼の部隊は壊滅して久しい。故に今は、ニクシーへの後退戦で取り残された者達を率い、新たな再起の地を探していたのだ。

ふと、レーダーに紅点が光る。今や北エウロペの全土がヘリック領になろうとしているのだ、いつ邂逅してもおかしくはない。警告のアラート音を耳にして、咄嗟に臨戦態勢を取ったガース少佐だが——すぐにそれらが友軍の識別信号を発していると気づき、警戒を解く。

驚くべきスピードで迫って来た紅点は、すぐに肉眼でも目視できる距離に現れた。《セイバータイガーAT》に《レブラプター》、そしてガイロス軍がこの戦争の暮れに投入した新型の高速ゾイド《ライトニングサイクス》によって構成される、『特務高速部隊』の連中だ。《ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー》の迎撃に向かい、その任を果たせぬまま生きながらえた者達が、ガース少佐の行進を発見し、合流してきたのだろう。

「——ああ、驚いた」

部隊長であろうガンメタルカラーのチーター型ゾイド・《ライトニングサイクス》より通信が入る。耳に纏わりつく、艶っぽい女性の声だ。ガース・クロイツ少佐には聞き覚えがあった。

「その声、シルヴィア・ラケーテ少尉の部隊か」

聞き返したガースは、モニターに映ったサイクスのパイロットに目を凝らす。

異様な出で立ちの女だ。大仰なスコップユニットで顔の半分を覆った彼女の表情は読み取れず、瞳の代わり、ゴーグルに映った赤い

ポインターの光が、隻眼の如くガースを見据えていた。色白で華奢な口元と、メットから垂れた金糸の如き長髪、そしてその声色が、辛うじて彼女が年若い女性士官であると伝えてくれる。

共和国の進撃を食い止める、という任を果たせず、今や落ち武者同然の境遇と化したはずなのに——《ライトニングサイクス》のラケーテ少尉は、楽しそうに口元を歪めて、

「本当に驚いたわ、ガース少佐。愛国主義者の貴方が『ニクシー』の危機に参ぜず、西エウロペの辺境に逃げ去ろうとしているとは」

と、ガースを嗤った。

ラケーテの挑発的な物言いを聞いていたのであろう、傍に控えていた《ジェノザウラー》が、燃えるような瞳で《ライトニングサイクス》を睨む。ジェノに搭乗しているのは開戦以来ガースの元で仕えた士官だ、上官を侮辱されて怒りを露わにしたのだろうか——「良い、メルダース中尉」とそれを諫めて、ガースはサイクスへと向き直ると、「我らが行ったところで、変わるまい。ガイロスはエウロペでの戦いに敗れたのだ……だがそれは、削ぐべき汚名でもある。我らはこのエウロペで、ヘリッククへと再起の牙を突き立てる『クロイツ』となる」「へえ……面白そう」

ガースの宣誓にシルヴィア・ラケーテは声を重ねると、ゆつくりとサイクスの歩みを一同に同調させた。

ズラと並ぶガイロスゾイドの列——西エウロペの新天地へと赴く、数もまばらな落ち武者達。しかしそれは間違いなく、ヘリッククへの新たな脅威の火種となろう『暗黒の軍勢』だった。

## ② 予兆（前）

——ZAC2100年 十二月 北エウロペ・ニクシー基地

ニクシーの演習場に、砂塵が舞った。

屋外に張った日よけのテントに、ズラと並んだ共和国の士官達。皆本で行われている、『新型ゾイド』の走行試験を見るために集まった野次馬達だ。ジェイも馴染みの士官達に誘われて見に来たのだが、愛機の整備を見るために格納庫へ顔を出していたせいで、出遅れてしまった。

エウロペよりガイロス軍が去って、一月半。ヘリツク共和国大統領、ルイーズ・キャムフォードは、ガイロス帝国軍に停戦を勧告。未だ返答は無いもの——世は束の間の平穏を取り戻していた。出撃の機会も減り、兵達も時間を持て余しているのだろう。本来は持ち場を離れてふらふらしている身分の者などいないだろうに、此度の新型ゾイドを一目見て酒の肴にしようと、基地中の兵士が集まっている。人垣の中、ジェイが見知った顔を探して練り歩いていると、

「……ジェイ少尉、こっちでーすっ」

と、掛けられた声に振り返る。

呆けたジェイに、笑みを向けた栗毛の女性——エリサ・アノン少尉が手を振っていた。隣ではグロック・ソードソール少尉が、相も変わらず敵めしい表情で、演習場を駆ける機影を目で追っている。

二人に駆け寄るや、「他の皆は？」と小首を傾げたジェイ。すると、「コンボイ隊長の耳には入れられんだろう、こんな所でサボってるのがバレたら、お咎めを喰らうぞ。それに……ツヴァインは、俺達戦争屋の新兵器に興味ない」と、グロックが即答した。その目はジェイの方を見ていなく、疾走を続ける新型ゾイドの試作機を追ったままだ。

ジェイも釣られて、陽射し注ぐ荒野の果てへと視線を遣った。

地を駆ける四足のライオン型ゾイド。だが、白を基調としたカウルに身を包み、キャノピーではない、ツインアイタイプのカメラを備え

た装甲式の頭部を持つそれは、《シールドライガー》とも《ブレードライガー》とも異なるセンサーシヨナルな外観の持ち主だ。

名を、《ライガーゼロ》と言う。

なんでも元はこのニクシー基地で、ガイロス帝国が次世代高速ゾイドとして開発していた試作機らしい。ニクシー攻略戦の最中、それをヘリックのとあるパイロットが奪取した。鹵獲後解析されたその機体は、ヘリック軍のゾイドとして正式に量産化が決定。今、実戦に耐えうる機体として完成させようとしているのだ。

これまでの共和国ゾイドらしからぬデザインは、そう言った出自もあるのだろう。ゾイド好きのエリサも興味津々らしい、砂塵の中を疾走する白いライオン型ゾイドの姿を熱心に追いながら、「精悍な雰囲気ゾイドですね。あの機体にも『オーガノイドシステム』が搭載されているんでしょうか？」と、問うた。

その声にグロックは頭を振ると、

「いや。アレは違う。『オーガノイドシステム』の強化プログラムに頼らず、ゾイド本来が持つ力を引き出す、というコンセプトで設計されているらしい。エウロペ産の上質な野生体をベースにしてるって言うからな、知り合いの技術屋が言うには、《ブレードライガー》と同等の性能と、それを上回る拡張性・操作性を持った機体として完成するだろうとき」

既にこの《ライガーゼロ》は、共和国機動陸軍の次期主力戦闘ゾイドとして採用される、という目途が立っている。そしてその初期ロット生産分は、ガイロスの本土『暗黒大陸ニクス』攻略作戦のために編成される特務隊<sup>タスクフォース</sup>として、共和国のエースパイロット達へと供給されるのだという。その選考メンバーには、おそらくコンボイ大尉やグロック、そしてジェイも含まれていた。

へえ、と感心するエリサの横、ジェイもまた次世代ゾイドの勇姿を感慨を持って見つめていた。ゾイド生命体の兵器応用に革命をもたらし、先の『西方大陸戦争』を激化させる遠因となったテクノロジ―。『オーガノイドシステム』だが——次世代ゾイドへの採用を見送られた今、混沌の時代に在った徒花の一つとして忘れられていくのだから

う。

——そう在るべきだ、とも思う。『オーガノイドシステム』は戦いの激化だけではない、それに伴う多くの悲劇を生み出してきたものなのだから。

「《ライガーゼロ》の完成度の事を気にしている、と言うなら——問題ないよ、コンボイ少佐」

未だ焦げた臭いの抜けきらない、ニクシーの地下工廠。だが、崩落した瓦礫の撤去作業はあらかた終わっており、今は軍属技術局のスタッフが、残された帝国の開発データの採取・解析を進めている。

現在テスト走行を行っている《ライガーゼロ》の外装も、こうしてサルベージされたデータから復元したものだ。これまでのゾイドと違い、フレームと装甲・武装が独立した特異な構造を持つ《ライガーゼロ》は、戦況に応じた装備の更新・換装が可能なマルチロール・タイプである。ゼロの特性をフルに発揮できるようにするためにも、本来の設計者たるガイロスの技術部が残したデータを発掘するのは、火急の懸案であった。

技術部の調査に立ち会っていたスターク・コンボイは、馴染みの技術者、レイモンド・リボリーに

「慣れぬな、『少佐』と呼ばれるのは」  
と硬い顔をする。

「誇っていいはずさ。貴方の功績が評価されての昇進なんだから」

人の良さそうな笑みを浮かべながら、小太り気味の技術士官はコンピュータに向き直り、メインデータバンクへとアクセスし、

「本当に、ガイロスの技術力には舌を巻くよ。ここ最近の高速ゾイド開発ノウハウは、ボク達共和国側に一日の長があると思っていたけれど……短期間の内にこれほどポテンシャルの高い機体を設計していたとはね。それだけの技術があっただけに——『オーガノイドシステム』での失敗は、彼らにとって頭の痛い問題だったのだろう」

レイモンドが目留めたフォルダには、とあるゾイドの名前が含まれる報告書がズラと並んでいた。スターク・コンボイも、禍々しさす

ら感じさせるその字面に、思わず眉を顰める。

——《デスステインガー》。

此度の戦争に置いてガイロスが完成させた、最強の決戦兵器。南工ウロペの古代遺跡より発掘された、先天的にオーガノイド機関を備えたというゾイド生命体『真オーガノイド』をベースに、帝国の技術の粹たる最新兵器の数々を与えて完成させた、最強の戦闘機械獣であった。ただ一機の試作機が実戦に投入された《デスステインガー》は、ヘリックの投入した《ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー》と対を為す、ガイロスの命運を握ったゾイドでもあったと言えるだろう。

だが、その力が帝国を勝利に導く事は無かった。

二度目の全面会戦に敗れ、後退する主力部隊を救うために投入された《デスステインガー》は、あろうことかパイロットの手を離れ暴走、両軍に壊滅的な打撃を与えたのである。人の制御下にあったゾイドがパイロットを殺害し、自立行動を開始する——戦闘機械獣の兵器利用は百年近くの歴史を持つが、そのような事態が起こったのはこれが初めてであった。

それまでも様々な問題を懸念されてきた『オーガノイドシステム』搭載機だが、この《デスステインガー》の暴走事故は、これまでに類を見ない未曾有の事態であった。早々にオーガノイド計画を凍結させたヘリックに対し、システムの完成に固執していたガイロス帝国だったが——この事件によって、彼等もまた方向転換を余儀なくされたのだろう。《ライガーゼロ》はそうした時勢の中で、新たな試みの元ゾイドのポテンシャルを引き出そうとした結果、生まれた機体だった。

「そんな時期に生まれた機体だからこそ、ゼロの信頼性は高い」と、レイモンド主任は大見得を切る。

「これまでの動作試験を鑑みるに、既存のあらゆる高速ゾイドを凌駕し得るポテンシャルを秘めているんだ。ニクシーの陥落は、ガイロスの想像よりも遥かに早いペースで進んでいたらしい、ここには多くのデータが残っているから、彼らが次の一手を打つ前に、《ライガーゼロ》はヘリックの最前線に、万全のコンディションで供給されるだろ

う」

レイモンドの解説に一区切りがつくと同時、遠方より、「——主任見  
つかりました、《ライガーゼロ》に関する、ガイロスの開発報告書です  
！」と、別のスタッフの声が掛けられる。

今行くよ、と頷いたレイモンド・リボリーは、ガタと立ち上がって  
コンボイに背を向けた。去り際、チラと彼に振り返ると、「少佐……そ  
れに、グロック少尉とベック少尉。功績を鑑みれば、君達は確実に  
タスクフォース、レイフォース、レイフォースの特務隊・閃光師団への転属を命じられるだろう」と、抑揚無く告げる。

『閃光師団』——ガイロス帝国の本土、暗黒大陸ニクス攻略を想定し  
て、ヘリック共和国軍上層部が設立を予定しているという独立遊撃部  
隊の名前だ。その任務は、電撃的にニクスの奥地へと進行し、敵部隊  
中枢を攻撃・かく乱する事。配属されれば、これまで以上に過酷な戦  
いが、一行を待ち受ける事となる。

訝しげに眉を顰めたコンボイに、レイモンドは穏やかな笑みを浮か  
べて、

「大丈夫だ。今度こそボクは作り上げて見せるよ——信頼に足る、兵  
器を」

運動不足気味の躰を揺らしながら、速足気味に駆けていくレイモン  
ド主任の背中。

それを見送ったスターク・コンボイは、フウと一息を吐いて、主任  
がつけっぱなしにして行ったモニターへと視線を返す。帝国技術部  
のデータバンク。レイモンドの言うように、帝国軍の撤退作戦はよほ  
ど切迫した状況で行われたらしい。数多くの研究データ、報告書類が  
残されたままだ。

今開かれているのは、《デスステインガー》の暴走問題に関する物  
達。流石にそのスペックノートや、兵装等に導入された技術に関する  
データが含まれるものは破棄されているらしい。ズラと並ぶのは『真  
オーガノイド』への考察論文・上層部への報告文書。何の気なく一瞥  
していたコンボイだが——その最後尾にあった、一つのファイルへと  
目を留めた。脳裏に焼き付いた名前が、そこにあったからだ。

タイトルは、『パイロットデザイン』とそれに依るOS機関導入機体の制御不全改善案に関する報告」。そして、その作成者は――

――皇属武器開発局・第三研究室所属――ヘルマン・シュミット技術大尉。

半年前にコンボイの隊が作戦行動中に遭遇した、ガイロスの『オーガノイドシステム』研究者である。『パイロットデザイン』という、聞きなれぬ単語の含まれたそのファイルは、他の《テスティング》に関連した報告書の、さらに三か月程前に作成されたものだった。シュミット大尉は《テスティング》の就役前に戦死している、おそらくは機体の暴走事件を受けて、関連する技術のデータを取り纏めていたのだろう。

オリンポスでシュミット大尉と戦った彼の部隊は、ほぼ全滅と言っていいほどの被害を被った。苦い戦いを思い出したコンボイは、フツ、と荒い息をついてマウスと取ると――カーソルをクローズアップアイコンを重ねて、画面を閉じた。



### ③ 予兆（後）

一口に『西方大陸』と称されてはいるものの、エウロペは大きく南北、そして西の地方に区分され、それら三大陸を合わせた総称でもある。その内、ガイロスの本土『暗黒大陸』と最も近かったのが北エウロペ大陸であり、結果此度の『西方大陸戦争』の主戦場として荒廃する事となった。

各大陸は基本的に内海によって隔てられているものの、極僅かながら、大陸間を陸路で横断出来る道が存在する。北エウロペ・ニザム高地南部の荒野を横断し、西エウロペ・マンスター高地へと至るルートも、その一つであった。

——ZAC2100年 十二月 西エウロペ・マンスター高地

その夜は、快晴であった。

雲一つ無い藍色の空の下、二つの銀弧が草木一つ無い岩場を照らす。その中で、ひととき大きな岩塊——雨風にさらされ続けたそれはかなり風化しているものの、よくよく見ると人の手によって作られし被造物であると分かる。今は亡き『ゼネバス帝国』の作り出した大型輸送船『ホエールカイザー』の残骸。帝国・共和国双方と縁遠い地であったはずの西方に、どのような経緯を持ってたどり着いたのかが定かではないが——此度の大战より遙かに前に、それはこの地で墜落し、朽ち果てたのだ。

真つ二つに千切れた『ホエールカイザー』の船体より、星の光にも似た微かな灯が、キラと零れている。広大な乾燥地帯、ただでさえ三つのエウロペの中では人口の少ない『西エウロペ』においても、ここに寄りつく者は多くはあるまい。まして、荒廃した廃墟をめぐらにする者となると、その境遇は自ずと分かる——北エウロペより逃亡した、ガイロス帝国軍の落ち武者達である。

朽ちた外装とは対照的に、小奇麗に整備された『ホエールカイザー』

の格納庫。電力の節約と、ヘリックの残党討伐隊の目から逃れるために、明かりは最小限のものしか使用していない。そんな薄明りの中、ズラと立ち並んだ帝国ゾイド達を数えながら、ガース・クロイツ少佐は倉庫の深奥へと向かっていた。

漆黒に塗りつぶされた空間に、巨大な鉄塊が鎮座している。ゾイド——それも、かなり大型の機体だ。

歪なシルエットの機体であった。低く構えた姿勢のせいで、全高だけならばその巨軀に反して、《コマンドウルフ》のような中型機にも劣りかねない。代わりに、全幅と体長はかなりの物だ。横に広がった扁平な軀と十六の脚部ユニット、そしてそれだけで巨大な蛇型ゾイドと見紛う程の尾部が格納庫を占有していた。

巨大な、節動物型の戦闘機械獣——《ゾイドゴジュラス》や《アイアンコング》と同等の体躯が、その異形を一層際立たせた。

深淵に蹲ったそのゾイドは、まるで糸の切れた人形のように巨体を投げ出して、微動だにしない。警戒色の如き毒々しい濃紫と赤で彩られた装甲は土埃と煤に塗れ、頭部のカウルに至っては完全に千切れ飛んでいる。むき出しのカメラアイに光は無く——この《ホエールカイザー》同様、完全にその機能を停止していた。

「——どうか」

闇に塗りつぶされた空間の先へ、ガース少佐は問うた。数秒の間の後件の巨大ゾイドの足元より数人のメカニックと、白衣を纏った技術者が一人、這い出てくる。

「どうか、と聞いている——フジヨウ博士」

一層険しい表情で、ガースは問う。問い質向けられたのは、白衣の中年男性——フジヨウ博士、と呼びつけられた彼は、白髪交じりの髪を掻き揚げながら、「最善は、尽くしておりますが……」と、小声で応じる。

「機械化フレームは、他のゾイド因子を取り込み自己進化していった影響でしょう、設計時とは異なる部分も多く——ほとんど野生化している箇所さえございます。再び兵器としての体裁を整えるとなると、時

間が——」

「良い。『超越者』<sup>イモータル</sup>たるこのゾイドに、人の手の指図など不要」

言い訳めいた言を続けたフジヨウは、そう断じたガース・クロイツに遮られ、竦んだ。

「私が言っているのは、かの者を微睡から覚ますための手筈は、どうなっているか、という事だ。鍵は、完成しているのか？」

詰問されているフジヨウ博士だけではない、機体を整備していたメカニック達すら、思わず背筋を正してしまうような威風だ。矢継ぎ早に、「どうなのだ、フジヨウ」と声を荒げたガース少佐。観念したような垂れたフジヨウ博士は、やがて静かに頷き、

「——バイタルは、安定しています」

と、返答した。

齢を重ね、深く皺の刻まれた口元。それを一層歪めて、ガースはニヤと破顔した。

「では、覚醒は？」

「マッチングチューンが終了すれば、可能かと……ヘルマン・シユミット技術大尉の理論に、綻びが無ければ、ですが」

自信なさげに——というより、どこか気乗りしていない風に言ったフジヨウ博士。生まれてこの方学問だけに精を注いできた、という部類の人間なのだろう。年は四十代後半、あと十年もすれば還暦を迎える、というガースと比べても、大きく若輩と言うわけではない。だが、いかにも文民という彼は、歴戦の勇士たるこの将に対し、(階級や立場を抜きにした根本から)頭が上がらないのだ。

「なんとしても成功させよ。貴殿らに託した計画は、我ら騎士団<sup>クローイツ</sup>の要——くれぐれも、だ」

激励とも脅迫とも取れるような、熱の入った言を被せて、ガースクロイツが踵を返した時だった。夜風が入り込み冷え切った格納庫の中に、突如熱と轟音、そして、ティラノサウルス型ゾイドの持つ力強い生命感がなだれ込んでくる。バーニアを吹かし、ホバー状態でドリフトしながら基地を掛けた機体は、ガースの目の前にあった待機スペースで停止する。

砂塵で黄ばんでいながら尚寧猛さを感じさせる、漆黒を纏った猛竜——《ジェノザウラー》。ガイロス帝国軍残党・『クロイツ』へと合流した兵達の機体の中では、数少ない新鋭機である。

パイロットを務めるのは、開戦以来ガースへと仕えた青年士官、レントツ・メルダース中尉。コクピットハッチが開き、艶のある黒い長髪をなびかせたレントツが姿を覗かせた。長身瘦躯で色白、一見中性的な印象を与える男だが、すると伸びた切れ長の目じり、その奥にある瞳には、同胞すら一目置く冷徹さが宿る。

足元のガース・クロイツに気づき、フ、と息を吐いたレントツ。機体から飛び降りて彼に寄ると、「主君」<sup>マイスター</sup>と敬礼して見せた。

ああ、と頷いたガースは、

「遅かったのではないか？ 我らは今、敵の目を逃れ力蓄える時。あのシルヴィアのみならず、そなたまでつまらぬ遊びに興じられては困るな」

と、怪訝そうに眉を顰める。「今宵のは、遊びではありません」と頭を振って、メルダース中尉は愛機《ジェノザウラー》のマニユピレーターに握らせた残骸を見上げる。

「——共和国の連中が、我らの所在を嗅ぎまわっています」  
「……ほう」

ジェノの鉤爪に引っかかって揺れているのは、バキバキにへこんだ共和国の狼型高速ゾイド《コマンドウルフ》の頭部ユニット。通常の機体とは異なる、鮮やかなブルーに彩られたウルフの生首だ。キャノピーを破碎され原型をとどめるコクピット周りからは、かつて期待を操っていたであろうパイロットの紅い血が、ぽたぽたと滴り落ちていた。

「蒼い《コマンドウルフ》の部隊……ヘリック共和国が組織した落ち武者狩り共です。ニクシから南下し——既に『ニザム回廊』付近まで足を延ばしている」

『青の軍』か……奴らが迫ってきているというのならば、我らも相應の歓迎をくれてやらねばなるまい——来たるべきエックス・デイの前座として、な」

バサと纏った軍服を翻して、ガース・クロイツは座して動かぬ『超越者』へと向き直る。「復活は近い、と？」と眉を顰めたメルダースに、不敵な笑みを伴って頷いた。

「人の手には制御できぬ『狂戦士』……本当に蘇らせようというのですか？」

「ヘルマン・シュミットは異常者であったがな、白痴ではない。真なるオーガノイドたる『超越者』を御しきることが出来る術があるとすれば、『パイロットデザイン』だけだ——私はそう信じる」

かつて帝国武器開発局は、制御に難航していた『オーガノイドシステム』搭載機を、その性能を引き下げることなく完全にコントロールするため、様々な技術試験を行った。中には一定の効果を認められながら、上層部の正式な認可を得る事なく凍結された物もあり——故ヘルマン・シュミット技術大尉の提唱した『パイロット・デザイン』もその一つである。

クロイツはニクシー陥落に際し、本国への撤退を叶えられなかった多くの帝国勢力を取りまとめたが、その中には、かの『オーガノイドシステム』研究に携わっていた技術団の姿もあった。乏しい戦力・資源で、ヘリックへの反抗を企てるに必要な切り札として、ガースはそれに目を付けたのである。

そして、もう一つ——ガース・クロイツは西方大陸派遣軍総司令部の中に、とりわけ懇意にしている高官が居た。二か月前、《ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー》によって、両国の形勢が傾きつつあった時、ガースはかの高官と密約を交わしていたのである。

ガイロスが西方の地を去る事となった日に、三月を加える朝——軍はニクシーへと帰ってくる。

帝国は初めから、エウロペの敗北で停戦する気など無かった。

ガース・クロイツはこの束の間の小休止がいつ終わりを告げるのかを伝え聞いていた。ガイロスが再びニクシーへと舞い戻る時、騎士団もまた勃ち、ヘリックへの報復を果たすのだ。そのための力、騎士団

の旗艦が『超越者』、ガイロスがこの地で得た最強ゾイドである。

そこまで思い至った時、行方の知れぬ同士の一人が脳裏を過ぎつて、「シルヴィアは？　あの女は何処へ？」と、ガースはメルダースへと振り返る。あからさま苦々しい相を浮かべたメルダース中尉は、「……手勢を率いて、北へ。ヘリックの辺境駐屯部隊への襲撃を繰り返しているようです」と、頭を振った。

クロイツの同胞として隊列に加わった、シルヴィア・ラケーテ少尉の隊。帝国陸軍のエースチーム、『タイガーライダー』に名を連ねた者達だが——潜伏の時、と意を決めたガースに反し、独断で出撃したまま戻ってこない。時たま聞こえてくる彼らの戦果は舌を巻くものもあつたが、それはこのエウロペに未だガイロスの火が燻っていることを、共和国側に露呈する行為でもある。昨今残党狩りの目が厳しくなっている、というのも、無関係ではあるまい。

「信用ならぬ女です」

不信任を露わに、メルダースが言った。その言に概ね同調していたガースであつたが、「だが、あの女がいなければ、フジヨウ達も『パイロット・デザイン』を完成させることはできなんだ。好きにさせておけば良い。あの女が一層共和国共の注意をひきつけてくれれば、逆に我らの事も進めやすくなるう」と、部下の怒りを諫める。

「——そなたも備えよ。その《ジェノザウラー》もまた、ガイロスの再起を掲げるに相応しい力を得て、クロイツの最前に立つ事になる。再起は近い……束の間の勝利に浮かれたヘリックに、我らの剣を突き立てようぞ」

#### ④ 治安維持（前）

ZAC2100年 十二月 北エウロペ・ニクシー基地

この日も、ジェイ・ベックは一日の大半を格納庫で過ごした。

培った勘が鈍らぬよう、午前中は演習場に出ていたのだが、乾燥帯のエウロペ大陸では珍しい曇り空が、遠方より見え始めた頃、指令室や整備兵達がざわめき出した。なんでも長距離走行のテストに出ていた件の新鋭機《ライガーゼロ》との通信が、天候の乱れによって途絶してしまっただけらしい。

ジェイの演習を見ていたスタッフもロストした機体の追尾に駆り出される事となり——結果、こうして戻って来て、一人機体の手入れをしている。と言っても、手持ち無沙汰になる度にそうしているものだから、機体は常時万全の状態と言って差し支えない。小隊長とグロツク少尉は事あるごとにブルーフィングに赴いており、ツヴァインは傭兵だ、正規兵のジェイ程肩肘を張る必要はない。隊の尉官でただ一人『仕事があるフリ』をしているようなもので、ジェイはこの退屈が苦痛に変わり始めていた。

手持ち無沙汰でいると、妙に周りの視線が気になる物だ。他の者達に気取られぬ様、曇り一つない愛機のキャノピーを一心腐乱に磨いていたジェイだったが——格納庫に反芻した兵士達の会話が、聞こえて来て、思わず手を止める。

「マミキ——じゃなかった、ブリジット少尉っ」

一区画隔てた飛行ゾイドの格納ラックの方から、エリサ・アノンの声がした。

ズイと身を乗り出して窺うと、先ほど搬入されてきた《ストームソーダー》の足元で、エリサと、その《ストームソーダー》のパイロットであろう若い女性士官が立っている。銀色の機体は雨の雫で濡れており——どうやらあの嵐の中より帰還してきたばかりらしい、パイロットスーツの半分をばだけタンクトップ姿になった女性士官は、煩

わしそうに首を振り、額に張り付いた前髪を乱した。

「どうやらエリサは顔見知りらしい、「ああ、アノン少尉」と、疲れた表情で返事を返した彼女は、ずぶ濡れの愛機を振り返って、

「まったく……これで二度目。新型ライガーのお守りをする、いつも失敗しちゃう。もしもゼロに何かあったら、始末書じゃ済まないかも」

と愚痴を言う。

「《ライガーゼロ》の長距離走行試験、モニタリング役だったんですよ？」

「ええ……でも、この嵐だもの。風で機体の制御はガタガタなのに、ゼロはどんどん先に行っちゃうし。結局逸れて、こんなザマよ」

ブリジット少尉、と呼ばれた《ストームソーダー》のパイロットは、どうやらテスト走行に赴いた《ライガーゼロ》の僚機を務めていたらしい。しかし、あの雨雲に捲かれた際にゼロを見失い、渋々このニクシーに戻って来た、という所か。

二人の会話に聞き耳を立てていたジェイが、そこまで推察した時だった。「——ベック少尉」と、野太い声が木霊する。いつの間にか足元で、スターク・コンボイ小隊長とグロック・ソードソール少尉が、彼を見上げていた。

「出撃できるようにしておけ、ベック。テストに出ている《ライガーゼロ》がロストしている。このまま戻らなければ、ニクシーから捜索隊を出さなきゃならんかもしれん」

「ああ、……了解した」

小気味いい程に、丁度いいタイミングで呼びに来たものだ。ただっ広い格納庫で、ジェイが聞き耳をたてられたように——ホールみたく残響したグロックの声で、エリサ達もこちらに気づいたらしい、視線を難いでジェイを見つけた彼女が、ぺこりと会釈をするのが見えた。

久方振りの、本格的な出撃になるだろう。だが、ガイロス帝国軍の大半は既にこのエウロペを去ったのだから、今まで経験してきた戦いと比べれば、ずっと気楽な任務のはずだ。なのに——ジェイはどこか、胃の腑に押し掛かる不安を感じていた。先ほどまで疎ましく思っ



ていた退屈が、急に恋しくなる。

——そんな事を考えていた矢先だった。

サイレンが鳴り——次いで、アナウンス。メカニック達を招集する女性士官の声が響いた。先までの、シンとした沈黙が嘘のように、騒然とする格納庫。思わず呆けていると、誰かが叫んだ。

「戻って来た！ ゼロは無事だ、戻って来たぞ！」

訝しげに眉を顰めたコンボイ小隊長が、踵を返す。彼に従うグロツクが後に続き、ジェイも慌てて機体から飛び降りる。エリサやブリジット少尉、それに召集が掛かった整備兵達も、向かう先は同じだ。ニクシーの正面ゲート。そこに、帰還した新鋭ゾイドが居るはずである。

皆もおそらく、ジェイの感じた不安を覚えたのであろう——ヘリツクに訪れた束の間の平和、その均衡が今、崩れ去ろうとしている。

空は曇天に覆われ、このニクシーにもパラパラと雨だれが散っていた。既に日は落ちて、辺りは暗く鳴り始めている中——レインコートを纏った整備兵達は懐中電灯を片手に、帰投した試作機《ライガーゼロ》を見上げていた。

人垣の最後尾に着いたジェイ達もまた、ゼロの機体に目を遣って、固唾を呑む。

「……ひでえな、こりゃあ」

皆の感想を代弁するかのようには言ったのは、グロツク少尉だった。全身の装甲が弾け飛び、フレームが剥き出しとなった《ライガーゼロ》。そうとう乱暴な走りをして戻って来たのだろう、つま先から頭頂まで、泥だらけだ。それに、右足の間接からはバチバチと火花が散っている。ただ嵐に捲かれただけでは、こころはならないだろう。

煤塗れで、円筒状に抉られた傷口。戦場を経験したゾイド乗りならば一目で分かる——弾痕だ。

野次馬達がざわつく中、ゼロのコクピットが開いた。テストパイロットを務めていた男性士官が出てくると、「——整備兵、早くゼロを診てやってくれ！」と声を上げる。メカニック達が慌てて機体に群が

るのを確認するや、男はヘルメットを投げ捨てて一目散に司令部を指しはじめた。

すると、

「ボビーー・ボビー・マックスウエル少佐ー」

と、野次馬を掻き分けて往くテストパイロットの背を、コンボイ小隊長が呼び止めた。喧噪の中でもその声に気づいたのだろう、ハタと目を見開いたテストパイロット・マックスウエルは、「スタークかッ？」と叫び返して、コンボイの元を目指す。

スターク・コンボイとボビー・マクスウエル。双方とも此度の戦争の活躍を認められ、同時に少佐へと昇格した士官であり——二人は見知った間柄だったらしい。コンボイ隊長を見つけるなり、ニヤと頬を緩めたマックスウエルは、

「——つたく、碌でもねえ日だよ、今日は。ここ最近平和だったのに、俺が《ライガーゼロ》を動かせる、って時に限って、面倒事が起こるんだからな」

と頭を掻いた。

「テスト中、何が起きた？ 機体は随分損傷しているが……」

腕を組んだコンボイが訝しげに眉を顰めると、マックスウエル少佐はハッ、と荒い溜息を吐き捨てて、一言、

「——帝国軍だ。ガイロスの残党が、ニザム高地の南でうろついてやがったんだ」

マックスウエル少佐の返答に、コンボイも——その後ろに控え、二人の会話を聴いていたジェイとグロックも、ゴクリと固唾を呑む。

「あのゾイドは、《ライトニングサイクス》だった。ただのそれじゃない、追撃戦用にカスタムされた『ハンター・タイプ』……おそらくは戦争の暮れに《ウルトラザウルス》討伐に派遣された、タスクフォース特務隊の生き残りだろう」

潜り抜けた死線を思い出しか、マックスウエル少佐の額には、ジワと汗の雫が浮かんでいた。「試作装甲を全て棄てて来る羽目になっ

て——ようやく逃げおおせた」と、肩を竦めて見せる彼に、コンボイに代わってグロックが問うた。

「ニザム高地って言えば、ニクシーとロブに挟まれた、今やヘリック領のど真ん中だ。そんな所でおおっぴらに活動する残党が居るっていうのか？」

その疑問が滑稽に覚えたのか、おいおい、と頭を振ると、「戦いはまだ終わって無いんだ」と、語気を強めたマックスウエル。ジェイとグロック、そしてコンボイ隊長を順々に見て、

「上の政治屋たちは、この戦争の勝利で停戦協定を持ちかけられないかって腐心しているみたいだがな、帝国の連中はこの汚名を削ぐようと、一層の大勢力を派遣してくるだろうよ。戦いは終わらない。むしろここから、確実に泥沼化していく——いつの時代だって、『ヘリック』と『帝国』は、そうやって潰しあって来たんだからな」

言い切ったマックスウエルは、そのまま速足気味に格納庫へと去っていった。一層強まる雨足の中、ジェイはボヤとその背を見送る。彼の残した言葉が、心に悶えたまま、暫し離れなかった。

ボビー・マックスウエルの見解は正しかった。

明くる日から、ニクシー基地には断続的に『ガイロス帝国残党軍』の仕業と思われる襲撃報告が入るようになったのである。

まずは親ヘリック派のエウロペ民の村に対する盗賊行為。間を開けず、その周辺を管轄していた陸軍哨戒部隊が消息を絶ち、翌日には残骸となって発見された。さらに数日が立つと、今度は辺境にあるヘリック軍駐屯地が未知のゾイド部隊に夜襲を受け、壊滅している。

破壊された基地や部隊の規模は、決して大きな物ではなかったが——既に事は、前線の士官達で噂される小競り合いで収まる物ではなかった。エウロペの地盤が固まりきっていないとガイロスに知れ渡れば、現在大統領ルイーズ・キャムフォードが進めているであろう停戦交渉にも、小さくない影響がある。

ヘリック共和国のエウロペ派遣軍最高司令部は、既に理解していた——此度の戦争は、まだ終結していないと。

程無くして、『西方大陸治安維持軍』の隊員たちに、緊急ブリーフィングの招集が掛かった。

## ⑤ 治安維持（後）

——ZAC2101年 一月 北エウロペ・ニクシー基地

冷えた朝の空気が、肌に沁みる。開けっ放しにされたハッチから陽光が射しこんで、眩さに思わずジエイは目を細めた。今日は、特別な朝だ——年が明けて間もないこの日、ジエイ・ベツクの過ごす時間もまた変わり、新たな任務が与えられている。

### 治安維持任務。

北エウロペの全域をその勢力圏に加えたヘリック共和国だが、異国の地たる西方大陸統治の基盤は、盤石とは程遠かった。侵略戦争を始めたガイロス帝国と比べれば、多少心象は良いもの——ヘリックもまたエウロペの統治国家たちを制圧し、支配している事実に変わりない。この地に暮らす西方人の中には未だヘリック軍が駐屯している事にわだかまりを覚え、ゲリラ紛いの反抗運動をする者さえいる。停戦への働きかけが行われているとはいえ、ガイロス帝国と再度の決戦を控えたヘリック共和国にとって、現地人との同調は火急の懸案であった。

融和政策の一環として軍上層部が提案・実施したのが、『西方大陸治安維持軍』である。

未回収のスリーパーゾイドや、ガイロス帝国残党、さらには戦時の混乱に乗じて多発した、ならず者による略奪・犯罪行為を取り締まるために軍を派遣、各地域の保安組織と提携して『平和維持活動』を執り行う。だが、暗黒大陸での本土決戦を控えたヘリックにはそれだけを生業とする特殊部隊を編制する余裕など無く、実際は上層部の意向で指名された人員により構成される分隊を、各地域に出向させるに留まっていた。

ジエイ達もまたその一環として、ニザムの保安事務局へ転属する事となったのである。

格納庫の中屹立した愛機の前に立って、そのコクピットに乗り込も

うとしていたジェイに、「——ジェイ少尉っ」と、快活な声が引き止めた。振り返ると——栗毛の女性士官が、朝日にも負けないくらいの眩しい笑顔で、彼に手を振っている。

「ああ——おはよう、アノン少尉」

陽光に目を細めながら、ジェイが声を返す。エリサ・アノンと一緒に居た二人の男性士官に断りを言って、駆け足気味に寄ってくる。へへ、と堪えきれずにはにかんで、「初めてですよね、ジェイ少尉と一緒に部隊になるのは」と、ズイとその顔を近づけた。

「——ジェイ・ベック少尉ですね」

ジェイがエリサに返事を返すより先、彼女と共に来た兵士が前に出て二人の間を遮ると、「お初にお目に掛かります」と敬礼する。

「此度の『治安維持任務』に同道します。クラフト・モラレス曹長であります。この男は、ラムセス・クーバ」

モラレス曹長——金髪碧眼、すらと背の高い中年男性士官だった。階級はジェイより下だが、柔らかな物腰が、その風貌も相まって気品を感じさせる。傍らのラムセス軍曹は反対に寡黙で、実直な雰囲気を感じさせた黒人の男性だ。隙の無い相貌で、ジロとジェイを見定めた。

ニコニコと笑みを浮かべたエリサが、

「二人とも、とても頼りになる方ですよ。半年も前になるかな、ガイロスが総攻撃をかけてきた時、アイザック要塞と一緒に戦ったんです」と、言を付け足す。「へえ……とにかく、今回はよろしく頼む」と右手を差し出したジェイは、もう一度二人の顔をチラと一瞥した。

どちらも、これまで面識のない人物だった。二人の乗機はベロキラプトル型の小型ゾイド《ガンスナイパーワイルドウィーゼル》W、主に強襲戦闘隊に配備されている新鋭機であり、こちらも見慣れない（数の揃っていない）部隊でも運用されていたというが、少なくともジェイは組んだ事が無かった）。

重火力・突撃用の大型ゾイド《ダイバイソン》を乗機にするエリサも合わせて——本来は特殊工作師団・高速戦闘隊に属するジェイとは

関わりの薄い者達である。

『西方大陸治安維持軍』に下された司令は、ニクシー基地南西に位置するニザム高地と、西エウロペ・マンスタール高地を繋ぐ荒野帯——『ニザム回廊』と呼ばれる地域への出向。キャパシテイの限られる地方の警備施設に、纏まった軍を駐留させる事は難しい。任務は戦略にある程度の融通を利かせるため、特殊工作師団と強襲戦闘隊より選抜されたパイロットによって編成される、『複合分隊』によって行われる事となっていた。

ジェイの所属するチームは、高速戦闘隊側からは、指揮官を務めるコンボイ少佐とグロック。強襲隊からは『ガンズナイパー』を駆る二人と、エリサ・アノン少尉が含まれていた。他にコンボイ隊長の推薦もあつて、傭兵ツヴァインも同道する。

性質の異なる別隊の人員で組まれたチームだ。意見の衝突は待逃れないだろうが、見知った仲間が多いのは、久方の実戦に気を張ったジェイにとつても——そして今回チームの指揮を任せられたスターク・コンボイ少佐にとつても、幸運なことであろう。

そんなことを考えていると、

「皆、揃っているようだな」

と、立ち話に興じていたジェイ達の背後より、丁度スターク・コンボイ少佐の声が響いた。ジェイにとつては気心の知れた上官だが、初めて彼の指揮下に入るエリサ達は違う。「コンボイ少佐、今日からお世話になります」と、深々と頭を下げた彼女に、コンボイはうむと頷いて、

「我々のチームでは、初めての『治安維持任務』になるな——エウロペの現状は、決して平穏とは言い難い。一人も欠ける事が無い様、各員の奮起を期待する」

と、エリサ達三人に激を飛ばした。

それまではほぼ形骸化していた治安維持任務だったが、年が明けたのを境に、出撃事例は爆発的に増えていた。理由は明白である。

——『クロイツ』。

そう自称した、ガイロス帝国軍残党軍による反抗活動の活発化である。

ガイロス軍の撤退を確認した日から、ヘリック軍はブルーカラーのカスタム《コマンドウルフ》によって編成された、特殊部隊『416』、通称『青の軍』呼ばれる、ガイロスの残党狩りを専属とする部隊を展開していたのだが——大半の帝国残存部隊が掃討された今日でも、『クロイツ』の足取りは、一行につかめなかった。

（——今月中に帝国残存部隊を掃討し、来たる暗黒大陸本土決戦に備えたいというのが、上層部の意向だ。『治安維持軍』に指定されている各隊も。そのために一働きしてもらうことになる）

今やニクシー基地の司令官の座に就いたマクシミリオン・ペガサス中佐が、先日の『治安維持軍』の緊急ブリーフィングにて、直々に司令を下した。ガイロスの残党による襲撃事件が集中している地域の警備と取り締まりのため——各地にヘリック軍の監視を付けるため、である。

「——さあ、発進だ」

と、スターク・コンボイが、出撃の音頭を取った。

この朝に、一行はニクシー基地を発つ。仲間達のとの顔見せも終えて、ジェイ・ベックは気を取り直して、今回の任務に持っていく自分のゾイドへと乗り込んだ。既に準備を済ませていた強襲隊出身の三人の機体——《ディバイソン》と《ガンズナイパーWW》が、アイドリング状態のジェイ機の目の前を横切っていく。「お先しますね、ジェイ少尉」と、モニター越しに手を振ったエリサに微笑み返すと、ジェイも愛機をゆつくりと始動させた。

ジェイの乗機は変わらず、《ブレードライガー・アリータイプ》であった。『オーガノイドシステム』のデチューンによって既にある程度数が量産され、また共和国の戦線が持ち直した時期に士気高揚を狙ってか、前線の多くのライガータイプがブルーもしくはホワイトカラーに改めており、もはやジェイの乗機も取り立てて珍しい物ではな



くなっていたのだが——それでもグロツクやツヴァインは、彼を『ブルー・ブリッツ』と呼んで憚らなかつた。

エリサ達に続いて、コンボイとグロツクの《シールドライガー》、そしてジェイの《ブレードライガー》が、ニクシーのゲートを潜る。ニザム高地の切り立つ山々を越えて『回廊』と呼ばれる荒野帯へ——予定では五日後に、目的の集落<sup>コロニー</sup>へと到着する事となっていた。道中の補給物資を乗せた《グスタフ》が二機、そして最後に傭兵ツヴァインの《コマンドウルフAU》が発進すると、ニクシーの門が軋みをあげながらゆつくりと閉じていく。二か月の平穩を過ごしたニクシー基地に、幾分の名残惜しさを感じていたジェイだったが、

「平穩は終わりだ」

と、グロツク機から入った通信に、感傷を断たれる。

「初の『治安維持任務』だが……俺達が割り当てられた地域は、先日ボビー・マックスウエル詳細が『クロイツ』のゾイド部隊と遭遇した地域に近い。表向きはエウロペへの慈善活動だがな、実際は先の戦争の事後処理さ。『青の軍』だけじゃ手が回らないから、俺達もこうやって駆り出される」

不満げにごちたグロツク少尉の声を聞きながら、ジェイはボヤと辺りの風景に視線を薙いだ。ヘリツクの支配下に置かれてから、急ピッチで整備が進められているもの、ニクシーの周囲は未だ焼け爛れた帝国施設の廃墟や、砕け散ったゾイドの残骸、そして弾痕によって抉り取られた大地が残されている。キャノピー越し、速足で駆けた白い狼型戦闘機械獣が横切つて、眼前のグロツク機と並走した。傭兵ツヴァインの《コマンドウルフ》だ。二人の無線を傍受していたのだから、ケ、と舌打ちをして、

「戦争に勝ったら、もうガイロス野郎とやり合う気は無くなったってか？ 気楽なもんだな、お前さんらは」

と、二人を煽る。「ナアニイ……ッ」と憤慨するグロツクを余所に、ツヴァインは続けた。

「俺にとってはこの任務、願ったり叶ったりだ。俺がヘリツク軍と同道したのは、戦争を終わらせるだけじゃない——一刻も早く、エウロ

ペに平穩を取り戻すためなんだから」

「……ああ、分かっている」

オリンポス山でガイロス軍とたたかった際に、彼の秘めた怒りの奔流を浴びたジェイは、その言葉に静かに頷いた。彼の言うとおり、エウロペに吹いた波乱の風は、まだ止んでいないのかも知れない。そしてジェイ達ヘリック共和国の軍人には、それを取り除いてやる責務が残されている事も、理解していた。

不安が無いわけではなかった。それでも、共に戦う事となる仲間達への信頼が、ジェイの動悸を安定させてくれる。コンボイ隊長にツヴァイン、グロツク……そしてエリサ。共に西方大陸での戦いを経験し、生き残って来た仲間。

この仲間となら、どんな苦難も乗り越えられる——この時のジェイは、それを信じて疑わなかった。

## ⑥ 邂逅 ―クロイツ―

切り立ったニザム高地の峡谷を抜け、ジエイの部隊は一先ず足を止めていた。ニクシー基地を発つて早三日が過ぎ、一行は既に『ニザム回廊』と呼ばれる荒野帯の端にまで差し掛かっている。

その日の夜空は明るかった。新年早々に二度も野営で夜を明かすことになるうとは、数日前の自分には考えられなかっただろうが――遮るものの無い荒野だ。空いっぱい広がった藍色と、そこに塗された星々の光が美しく、ジエイは億劫の感情を忘れていた。

冷えた夜風に吹かれながら、一心に星空を眺める。

「こちらヘリック共和国治安維持軍第202複合連隊所属、エリサ・アノン少尉より、同503連隊長、テッド・マーカ―准尉へ……応答をお願いします」

時々聞こえてくるエリサの声に気づいて、ジエイは貌を薙いだ。野営地を囲むように停留した一行のゾイド達、その一角にある『デイバインソン』の開け放たれた背部コクピットから、通信用アンテナユニットが展開されていた。

無線を片手に間諜付いている彼女の姿を見つけて、ジエイは思わず頬を緩めた。此度の任務において、エリサは隊長たるコンボイの補佐と、部隊指揮を執る副官の役を命じられている。キャリアを鑑みればグロツク少尉の方が適任なのだろうが――おそらくは、隊の指揮官が一部隊の出身者に集中する事で、不平が生まれるのを嫌った上層部の采配なのだろう。

ヘリック軍における小隊編成は、戦闘ゾイド十機によって構成される物だ。ニクシーから出撃したコンボイの201分隊、エリサの202分隊を合わせただけでは足りず、赤の砂漠<sup>レッドラスト</sup>の駐屯地<sup>レスト</sup>よりもう一分隊が出向、明日には合流する手筈となっていた。今エリサは、件の分隊の指揮官への連絡を仰せつかっているのだが……通信機の不調か、どうやら上手く行っていないらしい。

慣れない業務にあたふたする彼女は気の毒だが、ジエイにはその様

子がどことなく愛らしく思えて、笑みを零したのだ。

「……相変わらず、あの女はどこか抜けてるな」

そんなジェイの横、簡易コンロでコーヒーをくべながら、グロツク少尉がエリサを詰った。彼の真向かいでその火を囲ったモラレス曹長と、クーバ軍曹も、ハハア、と口角を歪める。「柔らかな女性ですからね、彼女は」と、エリサを見遣ったモラレスは、

「それでも——良いと思いますよ。彼女のような人が一緒に居れば、息の詰まりそうな軍隊の中にも、華やかさが生まれます」

「馬鹿言え、下心があるだけだろ。お前はおっぱいとケツが出ていて——それでいて年下の女ばかり抱きたがるからな」

呆れた風に言ったラムセス・クーバが、カップに注がれたコーヒーを一口に飲み干す。「まあ、そうかもしれないですね」と冗談めかして言ったモラレスに、グロツクは噎れ声を上げて笑った。

所属の異なるもの同士だが、既にグロツクとモラレスたちは打ち解けているように見えた。下卑た会話は聞いていて気分のいい物ではなかったが、あたふたしたエリサを眺めて喜んでいた自分も、本質的には似たような物だろう、自分に咎める資格もない。だが——なんにせよ、隊が必要以上に緊張していないというのは気になった。ギスギスして衝突を繰り返すのは問題だが、逆にこの油断が大きな犠牲を招くとも知れない。

パン、と気付け代わりに頬を叩いたジェイは、歓談の輪から外れて瞑想する小隊長とツヴァインの元へ足を運ぶ。《コマンドウルフ》のつま先に腰掛け、紙巻タバコに火を吹かしたツヴァインは、ジェイに気が付くなり「よう」と手を翳した。ああ、と頷いて、ジェイはコンボイへと目を遣る。「隊長」と呼びかけたジェイに、コンボイ小隊長は小さな溜息を吐くと、

「——あまり、気を抜き過ぎるなよ。我々の西方大陸での戦争は終わったかも知れないが……『クロイツ』の連中にとっては、まだその最中なのだ。手負いの獣ほど恐ろしい物はない、足元を掬われるぞ」  
歓談するグロツク達を見て、ジェイと同じ懸念を覚えていたのだろう、どこか不機嫌そうな調子でコンボイは釘を刺した。

ハ、と短い返事を返したジェイを一瞥して、隊長はゆるりと『ディバイソン』の元へ赴いていく。

「アノン少尉ツ、別働隊からの連絡は？」

「あ、ハイ！ 通信を入れてるのですが、ノイズばかりで……応答ありません」

イライラとした風を滲ませるコンボイの問いかけに、テンパったエリサが声を返す。「気になるな……先日の交信に支障は無かったというのに」と、険しい表情を作った小隊長。事を見守ったジェイの横に、短くなったシガーを放ったツヴァインも立って、訝しげにつぶやく。「テッド・マーカーの隊は、赤の砂漠南の駐屯地から派遣されるんだたな……予定通り進んでるんだったら、もう『ニザム回廊』に入ってる」

「……妙だと思うか？」

神妙な面持ちで問うたジェイに、ツヴァインは「ああ」と即答した。最もな言い分だ。ジェイ達の往くルートは、先日『ライガーゼロ』が『クロイツ』のゾイドに襲われる羽目になった場所に近い。辺りにはまだ、ガイロス帝国軍の残党が潜み、ゲリラ戦を展開している可能性がある。

漠然とした違和は、更なる具現を伴って轟いた。振動と、鈍い爆発音。ジェイ達だけではない。地面に置いた銀のコーヒークップがカタカタと音を立てると、談笑していたグロツク達も異変に気づいて立ち上がり、遠方を見遣る。

藍色の夜空を水平に割く地平線の先——そこに、微かな焰が灯っていた。星の光を遮るような黒い霧は、おそらく噴煙。夜空の中にあってもはつきりと分かる。「……なんだ、ありや」と、訝しげに眉を顰めたグロツクの目は、先までの腑抜けた雰囲気を完全に顰めていた。轟音は、断続的に響いた。足元を伝う衝撃も、徐々に大きくなっていく。

「戦闘だ……どこぞでゾイド部隊がやり合ってるぞ」

ゾワと全身が総毛立つのを感じたジェイが、思わずごちた。すぐに

ツヴァインが《コマンドウルフ》のコクピットへと駆けて計器を点けると、レーダーを凝視して「反応がある……小隊規模のゾイド部隊だ」と、声を上げた。

「総員、ゾイドに乗り込め——急行するぞ」

小隊長が静かに号令を掛けると、ジエイ達は一様に敬礼を返し、それぞれ愛機へと駆けた。

「アノン少尉、無線は後回しだ。近くで戦闘が起こっている、テッド隊が『クロイツ』と遭遇したのかもしれない」

《ブレードライガー》の機体に入り込みながら、ジエイはエリサに叫んだ。直後、通信機から、「モラレス機・クーバ機は残って、《グスタフ》の警護に当たれ。現場には、私の分隊で赴く」と、コンボイの指示が鳴る。

「隊長、私は——っ?」

戸惑ったエリサの横でツヴァイン機《コマンドウルフAU》が咆哮を上げると、「先に行くぞベック!」と、声が爆ぜた。エリサが続けて何か言ったようだが、轟くウルフのエンジン音に遮られて聞こえない。ジエイもまたキャノピーをロックすると、《ブレードライガー》を力強く始動させて、疾走を駆ける。

ゾイドに乗り込み視点が高くなると、地平の先より一層濃い紅蓮が立ち上るのが見えた。ツヴァインのウルフ、そして既に先行していたグロツクの《シールドライガー》に追いつくと、

「……テッド隊の識別信号とは一致しない。あそこにいるのは間違いなく、ガイロスの残党だ」

と、ツヴァインの通信が入る。

「にしても——分からねえ話だがな。既に帝国はエウロペ大陸から手を引いてるんだ、根無し草のままヘリックに戦争を吹っかけて、ガイロスの残党共は何のメリットがある? 残党狩りが盛んになって、死期を早めるだけじゃねえか」

「さあなあ。ガイロス野郎が何を考えてるのか、分かったもんじゃねえよ。それが何なのか慮る気もねえ。俺はただ、言われた通りに戦

うだけさ」

グロツクの疑問にツヴァインが応えた直後、一層大きな噴煙が上がる。濛々と立ち込めた黒煙の麓に、もぞと蠢く黒い機影達。その向こう——焰の中で揺らめいているのは、小さな集落のように思えた。「野郎共が、性懲りもなく……ッ！」と、怒りを露わにしたツヴァイン。ジェイもまたゾワと背筋を駆けるモノがあつて、

「ああ、先行する！」

と、思い切りアクセルを踏み込む。背部の『ロケットブースター』を全開し、一機に最高速まで加速した《ブレードライガー》はツヴァイン機、グロツク機を引き離しながら、噴煙の根本へとジェイを誘った。

ツヴァインの想定した通り——無惨にも破壊されたエウロペ人のコロニーの中を、飛竜十字の国章を付けたゾイド達が闊歩していた。《レブラプター・Pパイルバンカー》B》と《レッドホーンビームガトリング B G》によって編成された、強襲小隊だ。そしてもう一機——見慣れぬ黒い竜型ゾイドが、疾走するジェイ達に気づいて真つ赤な視線を向ける。ジェイには、初めて遭遇するゾイドだった。ライガーのデータバンクから照合を取ると、聞き慣れぬ機種名が返ってくる。

「気を付けるよベック。《ジェノザウラー》だ、お前の《ブレードライガー》同様、『オーガノイドシステム』を搭載している」

後塵を往くグロツクからの通信だ。《ジェノザウラー》。『オーガノイド計画』黎明期に完成した実験機であり、後にシステムの一部を簡略化、少数が量産されたと聞いてはいたが——それがガイロス残党軍の中にも混じっていたというのだ。『オーガノイドシステム』搭載機は、使いこなせるパイロットの元であれば、単機で一個小隊と渡り合える戦力である。それを相手取る以上、たかだか残存勢力の掃討任務と侮る事は、もうできない。

《ジェノザウラー》がその首をもたげて、凜猛な咆哮を浴びせて来た。緊張したジェイを、まるで挑発しているかのような、凜猛な思惟が滲む。ピリピリと肌を刺すプレッシャーに堪えながら、ジェイもまた黒い『虐殺竜』へと機首を向けた。

## ⑦ クロイツの騎士（前）

ZAC2101年 一月某日 北エウロペ大陸・ニザム回廊

蒼穹の如き青の光を持って、惑星Ziの月が夜の大地を照らした。キャノピー越し、朧げな月明かりを便りに立ちはだかる機影達を見据えたジェイ・ベックは、その機体に刻み込まれた飛竜十字の紋章をはつきりと認識する。既にこの西方大陸にはいないはずの、ガイロス帝国の国章を掲げたゾイド部隊。ユラと燃える焔にてらされるボデーには錆一つ無く、ゲリラ、と呼ぶには小奇麗すぎる。それは小隊規模のゾイド部隊を十全の状態で稼働させる事のできる帝国勢力が、まだこのエウロペに残っているという証明にもなった——おそらくは、彼らが『クロイツ』、ここ数日ヘリツク軍に名を轟かせるガイロス帝国軍残党であろう。

直後、グロツクの《シールドライガー》とツヴァインの《コマンドウルフAU》が追いついて、ジェイ機の隣で制止した。

「《レブラプターPB》と《ジェノザウラー》か。ニクシーの防衛隊の息残りか？」

と、グロツクが一人ごちる。「『青の軍』の連中が手を焼くのも道理だな。『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドには、アタックカスタムタイプとはいえ《コマンドウルフ》じゃ適わねえ」と納得する彼の横、ハン、と鼻を鳴らしたツヴァインだが——グロツク少尉の推察を否定する気はない。《コマンドウルフ》を乗機とする彼は、半年前に遭遇した『オーガノイドシステム』実験機《ブラックオニクス》との戦いを覚えている。

理めがたい性能差がある事は承知している——無論、それを理由にこの場から逃げ出す気もなかった。虐殺竜の周囲には《レブラプター》が7機、その後陣に《レッドホーンBG》が控えている。数の上では圧倒的に不利だが、勝算はゼロじゃない。

「ジェノの相手は任せるぜ、『ブルー・ブリッツ』。露払いを済ませたら、援護に回る」



「……了解」

ツヴァイン達の意気を受けて、ジエイもまた覚悟を決めた。

治安維持軍として、正式に任地へと赴く前に遭遇することになるとは——幸先の悪さに辟易しながら、ジエイは最前に立つ敵機、黒いテイラノサウルス型ゾイド《ジエノザウラー》と、その足元に燃える鉄塊を注視した。

砕け散った機体はガイロス帝国製の小型ゾイド《ゲーター》。だが、仲間割れ……ではなからう。西方大陸を広くその支配下に置いていた頃、ガイロスは融和政策の一環として、エウロペ現地民にその戦力の一部を提供している。高い索敵能力を誇るものの直接的な戦闘力は低く、また旧式化の著しい《ゲーター》だ、おそらくはそうした過程で帝国より供給され、この村の保安局に配備されていたのだろう。「略奪目的に、近隣の村を襲う……これはもう真つ当な軍隊の所業じゃない。盗賊紛いに身を窶してまで、戦争を続けるというのか」

義憤にも似た感情に捕らわれたジエイが思わず奥歯を噛み締めた時、《ジエノザウラー》がその背に備えた『ロングレンジパルスレーザーライフル』の銃口を向ける。間髪入れず閃光が弾け、「うおっ！」

と、ジエイは咄嗟に《ブレードライガー》に跳躍を促して回避する。地面を抉りながら爆ぜた光弾を横目にして着地した《ブレードライガー》に、《ジエノザウラー》はもう一度、敵意をむき出しにした咆哮をぶつけた。まるで自分と相手を戦いに焚き付けるかのような、寧猛な咆哮だった。

「——そうだった。お前達はいつも、そうやって来たんだったな」

脳裏に過ぎったのは、半年前に赴いた灰被りの村。オリンポスの麓で、人々を虐殺する黒いゾイド達の姿を、鮮明に思い出せる。今日の前で繰り広げられた蛮行の跡は、あれと同じ——まごう事なきガイロスの行いであると断言出来た。

ならば、問答は必要ない。

戦う準備は出来ていた。《ジエノザウラー》の火炮で巻き上げられ

た粉塵が治まるよりも早く、ジェイの《ブレードライガー》が背部のレーザーブレード・アームユニットを展開すると、基部に備えられた『パルスレーザーガン』を浴びせた。先にジェノが撃ち放った砲撃に比べれば、豆鉄砲にも見えようか細い光弾だが、これで敵機を倒せるとはジェイも思っていない。《ブレードライガー》の持ち味は『オーガノイドシステム』由来の闘争本能に裏付けられた、高い白兵戦能力にある。

「——行け！」

気迫と共に操縦幹を引いて、ライガーに攻撃を促す。牽制射撃を浴びて煩わしそうに身を振った《ジェノザウラー》の首筋へと、一足飛び。口腔の『レーザーサーベル』を煌めかせて、《ブレードライガー》ががっちり組みついた。後ろ脚でグイと立ち上がるや、ジェノの躰へと全自重を乗せる。このままたまらず横転した虐殺竜を前足で押さえつけ、逃れられないようにすれば——もうこちらのものだ。

勝利を確信したジェイだったが、

（——よくも）

不意に、無線が鳴った。こちらの通信回線に割り込んできたらしい。若い男性士官の声が、ジェイの耳朵を刺し——動揺したのはほんの一瞬だったが、その一瞬の隙を突いて、《ジェノザウラー》の機体がズイと持ち上がった。《ブレードライガー》の突貫を強引に押し返すと、逆にその前足に喰らい付いて、転倒させた。

「ぐあー！」

衝撃に呻いたジェイに、（よくも、マイスター主君より賜った私のゾイドに傷を付けてくれたな……後悔させてやるぞ）と、《ジェノザウラー》のパイロットの激発が浴びせられた。どうにか拘束を解こうともがく《ブレードライガー》だが——同じ『オーガノイドシステム』を搭載した《ジェノザウラー》のパワーは肉薄している、簡単には抜け出せない。

悪戦したジェイ機だったが、咄嗟に撃ち込まれた光弾がジェノの脇腹を打って、弾き飛ばした。「油断するな、ジェイ少尉」と、コンボイ小隊長の声。彼の白い《シールドライガーDCS》がビームキャノンを撃ち放ち、援護したのだ。どうにか機体を起こしたジェイは、「助か

りました、隊長」と礼を言つて、もう一度《ジェノザウラー》へと向  
き合う。敵機との通信回線は未だ開かれたままだ。

「……こちらはヘリック共和国西方大陸治安維持軍所属、ジェイ・ベツ  
ク少尉だ。お前達が、『クロイツ』か？」

よると立ち会がる《ジェノザウラー》に、恐る恐る呼びかける。真っ  
赤な光を湛えるジェノのカメラアイが、ジェイ機、そしてコンボイ小  
隊長機を睨み付けるかのように見据えた。暫しの沈黙の後に、返答が  
あつた。

「——レンツ・メルダース中尉。主君ガース・クロイツ卿に率いられ  
し騎士団……貴様ら反乱軍に、暗黒の鉄槌を下す騎士だ」

そう宣誓したメルダース中尉に同調するかのようには、《レッドホー  
ン》が、《レブラプターPB》の群れが、《ジェノザウラー》の周りへ  
と集つていく。その様子を眺めながら「笑わせてくれるぜ」と、ツヴァ  
インが二人の会話に割つて入ると、

「どっちが反乱軍だ？ エウロペに帝国はもういないんだよ、お前ら  
にはもう守るべき大義も、信念もねえ——盗賊やテロリストと同じ  
だ」

ツヴァインの指摘に、《ジェノザウラー》のパイロットの応答が無く  
なつた。沈黙を失意の象徴と取つたのか、「——降伏し武装を解除し  
ろ、メルダース中尉。ヘリックは貴公らを適当な待遇で迎えると約束  
しよう。これ以上、互いにとつて益の無い戦いを続けて、どうするど  
うなのだ？」と、スターク・コンボイ少佐が勧告する。

クク、と、通信機越しに零れた含み笑い。やがて堪えきれなくなつ  
たかのように響き渡る高笑いへと変わったそれは、コンボイの勧告を  
一蹴する『クロイツ』の意思の表れだつた。

「……やはり貴様らは、既に我らの命運を決したモノと考えているの  
だな——たつた四機のゾイドで、そこまで強気な物言いが出るの  
も、その愚かさ故であらう」

「……ッ」

燃えるような真紅の光を灯した《ジェノザウラー》が、先までとは  
比べものにならぬ殺気を霧散させたのを感じて、コンボイの《シール

ドライガーDCSがジリと慄く。クワと首を振るって大気を震わせる咆哮を吐いた《ジエノザウラー》。その怒りに同調するかの如く、彼に従っていた《レブラプターPB》達もまた猛り出す。

「——失せよ、ヘリックの反乱軍共。今の我らは、貴様らと戯れるよりも重要な任を、主君より賜っている。今は退いて、しばしその命を永らえるがいい」

任務。

既に指揮系統から寸断された残党軍である彼らが、何かの企みの元行動している。ジエイにはその物言いが引つ掛かったが、コンボイ少佐は気にしなかったらしい。「……その忠告に、我々が従うと思うか？」と、ドスの利いた声で問い返す。予想通りだ、とでも言うように、フツ、と吐息を零した『クロイツ』・メルダース中尉は、

「そうか——では死ぬがいい」

と、一言を残して、通信を切った。

次の瞬間、再び《レブラプター》達が牙を剥くと——ジエイ達へと飛び掛かった。

## ⑧ クロイツの騎士（後）

再び攻勢へと移ったガイロス軍残党のゾイド達。その軌道を追いつながら、「ツヴァイン機は《レッドホーン》を潰すか、ジェイ機のフォーローに回れ。《レブラプター》共は、私とグロックで引き付ける！」と、コンボイ小隊長が指示を飛ばす。「分かっているよ！」と叫び返したツヴァインは、言葉通り既に《レブラプター》達の横をすり抜けて、後方より『ビームガトリング』による支援を続ける《レッドホーンBG》を目指していた。

適格な判断であろう。俊敏性と格闘性能で《コマンドウルフ》を上回り、しかも数の多い《レブラプター》だ。正面から応対すれば、ツヴァイン機は瞬間に包囲され、撃墜される。それならば、そもそも馬力で《レブラプター》を大きく上回る《シールドライガー》で軍勢を引き付け、ウルフは足が遅く孤立しがちな《レッドホーン》単機へと注力した方が良い。『ロングレンジキャノン』を装備して火力を強化したアーティ・タイプならば、重装甲のレッドホーン相手でも十分な損傷を与える事ができるはずだ。

砂塵を撒いて《レッドホーン》に肉薄した《コマンドウルフAU》は、その勢いのまま牽制の砲撃を浴びせかける。素通りされた《レブラプター》達が、ウルフを追いかけようと身を翻したが——その小脇を、《シールドライガーDCS》のビームキャノンが掠めた。余波に捲かれて火花を上げる《レブラプター》を見据えながら、

「勝手はさせん……ッ！」

と、コンボイ少佐が強い思惟を吐いた。

小隊長の采配は、数の不利を上手く埋め合わせていると言えた。乱戦にもつれ込んだコンボイ達を横目に、ジェイは残る《ジェノザウラー》を睥睨する。後は、瞳から獐猛な紅い燈を零す『虐殺竜』——コイツの足止めをするだけである。『オーガノイドシステム』を搭載して強化された戦闘機械獣は、既存のゾイドで太刀打ちできる相手ではない。必然的に、同じ『オーガノイドシステム』を備えた《ブレー

ドライガー』を乗機にしているジェイの役目となるのだ。

「——おお！」

氣迫を叫んで、《ブレードライガー》を突貫させる。《ジェノザウラー》もまた咆哮し、背負った『パルスレーザーライフル』を撃ち放ってくる。精密さと連射を両立させた、見事な砲撃技術だ。躲せない、と判断して、すぐにジェイはライガーの『エネルギーシールド』を起動させる。展開されたビーム膜が光弾を捌いて無力化すると、一気にバーニアを吹かして距離を詰め、ジェノの首筋を狙う。

「小癩な——邪魔立ては、許さんツ！」

《ジェノザウラー》のパイロット、レンツ・メルダース中尉の怒気が爆ぜた。飛び掛かって来た《ブレードライガー》の機体を、両の爪『ハイパーキラークロー』で捌く。頬と肩口が斬撃に火花を上げ、思わず怯んだジェイと《ブレードライガー》。後退し、再びパルスレーザーとショックカノンで牽制するが——勢い付いた《ジェノザウラー》は止まらない。まるで飛び回るハエでも叩き落とすかのごとく巨大な尾を打ち振るうと——殴打がライガーの機体を大きく刎ね飛ばした。

「……グヴェツ!!」

横転した《ブレードライガー》のコクピットで、ジェイは呻いた。同時、眼前で仁王立ちする『虐殺竜』の姿から、威容な圧迫感を覚える。少数勢力でのゲリラ活動を強いられているガイロスの残党軍だ、今の所は数の有利を得ているもの——彼らからすればこの状況、いつジェイ達の側に増援が来るとも知れないはずだ。本来ならばここで頑なに小競り合いを続けるよりも、引き際を見極めて後退するべきである。だが、メルダース中尉の機体に、そう言った後ろ向きの気配は全く見られない。一切退かず、ジェイ達を押し返し殲滅する……そんな意図が滲み出ていた。

先に言及された『重要な任』という言葉が、どうにも引つ掛かる。

「……何をやる気だ？ 帝国の庇護が無くなったエウロペで、戦い続ける理由はなんだ？ ヘリックへの怨念返しでもしているつもりか」

無線越し、今度はジェイから叫び返した。愛機が態勢を立て直す時間を少しでも稼ぎたい、というのもある。膝間づいたライガーを見下

ろした《ジェノザウラー》、「分からない奴らめ」と、呆れたように言ったクロイツの士官は、

「——戦争だと言っている。ニクシーを落として全てが済んだと思っているのはヘリツクだけだ、我らにとってはたった、一回の小競り合いを取られたに過ぎん。主君ガース・クロイツ卿の指揮の元、貴様らを討つための作戦行動を続けている——それだけの事」

「ガース・クロイツ、そいつが此度のテロ行為の首謀者か。ヘリツクはテロを許さない。厳正な処罰が下される事になるぞ」

ジェイの挑発を、『クロイツ』のパイロットは嗤って退けた。

「安心しろ。貴様らが我らの主君に相対する事など、一生涯無い」

「——そうかよっ！」

思慮に気を割きながらも、《ブレードライガー》の機体を起こそうとしたジェイだったが———どうにか立ち上がりかけたライガーの横腹に、衝撃が走った。火花を上げる機体、激震に見舞われて動揺したジェイは、愛機に突き刺さった銀色の杭に気づく。いつの間にか二機の決闘に割って入っていた《レブラプターPB》が、その槍を撃ち出したのだ。

《レブラプター》達の足止めを買って出たコンボイ隊長とグロツク少尉だったが、やはり数の差は簡単に覆せる物ではないらしい。ジェイの方だけではない、「——おい、雑魚共を引き付けてろ！ このままじゃ——」と喚くツヴァインの声が聞こえた。見ると彼の《コマンドウルフAU》も、《レッドホーン》と幾体かの《レブラプター》に追い立てられて、徐々に劣勢になっているのが分かる。多勢に無勢、このままでは、あと数分としないうちに全滅だ。

「——死して後悔すればいい。我ら『騎士団』の前に立った、その愚かさ——」

《ジェノザウラー》のパイロット・メルダース中尉が、勝利の高揚を叫んだ直後であった。

爆音が幾重にも重なって——砲弾の雨がガイロス軍を横断する。速射砲の如く次々と爆ぜる葉莢の輝きと、それに撃ちぬかれていく《レブラプター》達。不意の一撃を躲せず、《ジェノザウラー》も背負った主砲を吹き飛ばされて、大きくよろめく。

思わぬ援護に、ジエイは振り返った。砲撃の余波で巻き上げられた粉塵と白煙の向こうに、重装甲突撃ゾイドの巨軀が立ち尽くしている。二本の大角を翳すように振り被って、《デイバイソン》が嘶きを上げた。

「……みなさん、速すぎですって……」

通信モニターに映し出されたエリサ・アノン少尉が、額を拭って安堵の笑みを浮かべる。先行したジエイ達高速隊を追いかけて来た彼女は、今しがた追いつき——この危機に丁度良く助け舟を出してくれたいらしい。先の砲撃、《デイバイソン》の『十七連突撃砲』の一斉掃射だ。その背より剣山の如く突き出た砲身達から、炸薬の余熱が上がっている。

ようやくと機体を持ち直したジエイは、「アノン少尉……助かったよ」と礼を言つて、再度戦場を見渡した。ウジャウジャと場を席卷していた《レブラプター》達の大半が今の砲撃によって破壊され、地べたを這い癱攣している。指揮官機であろう《ジェノザウラー》も主砲の『パルスレーザーライフル』を破壊されて、大幅に戦力を削がれていた。

「おのれえ……ッー！」

状況の不利を見取ったメルダース中尉が、怨嗟の声を漏らす。暫し地団太を踏んで惑った《ジェノザウラー》だったが——やがて意を決したかのように、両の足のバーニアを吹かすと、ホバー走行でその場から後退し始めた。

徐々に遠ざかっていく黒い機竜と、それに追いつがる《レブラプター》と《レッドホーン》の残存部隊。追いかけてしようとしたジエイだったが、

「深追いは止せ。まずは任地に辿り着き、テッド・マーカー准尉の隊と



合流してからだ。ガイロスの残党狩りは、その後で行うのだ」

と、コンボイ小隊長が引き止める。

「テッド准尉の隊ねえ……それこそ件の『クロイツ』達に、既に潰されてなきやいいんだがな」

『クロイツ』のゾイド部隊が撤退して行く様を乗機のコクピットの中から見つめて、ツヴァインがこちた。縁起でもない話だが——ガイロス残党のヘリック軍襲撃は、今や大して珍しい話でもない。ジェイ達と邂逅するより前に、あの《ジェノザウラー》率いる隊に遭遇し、殲滅されたという可能性も有り得ない話ではなからう。

「……アノン少尉はモラレス曹長達に連絡を取って、呼び集めろ。ジェイ少尉、グロックは私と来い。生存者がいないか確かめる」

そんな余感は、コンボイ隊長も感じていたのだろう。ツヴァインの無駄口を咎めず、《シールドライガーDCS》はその機種を廃墟と化した村と、その前で燃え尽きた自警団のゾイドの残骸へと向ける。大破して煤塗れとなった《ゲーター》、千切れて取れた頭部コクピットブロックは、辛うじて本体の爆発から逃れている。もしかしたら、パイロットも生きているかもしれない。

ゾイドから降りたコンボイとグロック、そしてジェイは、焼け焦げた荒野の中、慎重な足取りで大破した《ゲーター》へと歩み寄っていく。相当な量の砲撃を浴びたのだろう、手足は吹き飛び、外殻さえ熱で原型を留めぬ程、完全に破壊されている。

「あのゾイド達に《ゲーター》一機で挑んだなら、こうもなるだろうよ」と納得したグロックだったが——ジェイは逆に違和を覚えた。戦闘ゾイドとしての完成度はお世辞にも高いとは言えぬ《ゲーター》だ、《ジェノザウラー》達ならばモノの一撃で撃墜できたはずである。だが、下手をすればこの残骸は、（おそらくは『クロイツ』の本来の目的であったであろう）背後の村よりも、執拗な攻撃を受けた形跡がある。それが奇妙に気に掛かって、ジェイは訝しげに、《ゲーター》の残骸を眺めた。

脱出艇として切り離された《ゲーター》の頭部は、帝国の小型ゾイ

ドに共通する扁平型のコクピットブロック。旧大戦初期に『ゼネバス帝国』によつて開発された一部の小型ゾイドは、コストの削減と機体の操作性・信頼性を高めるため、共通してこの構造を取り入れている（この手法には一定の効果が認められていたのか、同時期に開発されたヘリックゾイド——《ゴドス》や《プレラス》、《ステルスバイパー》等も、似た構造を採用していた）。だが、目の前に転がっているのは、ジェイ達の知るそれとは趣が異なつた。全体的に面長で大型、おそらくはメインパイロットの他に搭乗員席を設けたタンDEM仕様の物だ。「……妙だな、自警団のゾイドに、この形式を採用する意味など無いはずだが」

違和を覚えて一人ごちりながら、グロックが外部操作用のコンソールパネルを探し出す。数秒操作盤と格闘した末、焼け焦げたコクピットブロックが、貝みたく割れて、中に籠もつた蒸気を吹き出す。

「……………」

中の様子に、思わず目を潜めるジェイ。シートの中に、一人の中年男性が蹲っていた。火傷と流血で相貌すら判別できない状態の男は、絶え絶えの息でジェイとグロック、そしてコンボイ隊長を見つめ返している。

痛ましい姿に気を取られてから数秒、益々の妙に気づいて、ジェイは眉を顰めた。瀕死の男の身なり、薄汚れた白い白衣と痩せぎすの体軀、そして白髪交じりの長髪は、とても辺境の村の自警団員とは思えない。

男へと寄つたコンボイ隊長が、その脈を取る。眉間に皺を寄せ、険しい表情のまま俯いた彼を診れば、既に《ゲーター》のパイロットの命運がどうあるうとしているのか、すぐに察する事が出来た。男の肩へと手を掛けた小隊長が、「私はヘリック共和国、西方大陸治安維持軍のコンボイ少佐。『クロイツ』にやられたのか？ 貴殿は、この村の者か？」と、男へと問いかける。

血まみれの中年男性は、その問いに応えなかった。応えたくとも、応えられないのかもしれない。必死で肺を膨らませる、男の荒い息。それが一瞬でも途切れれば、この男の灯は消えそう思つて、皆が問い

質を放棄しようとした時だった。

タ、と、男の口が動いた。

「タ、シユ——ケ、て……。か・かノ、じヨを……タスケ、テ」

ゴフ、と血泡を吹いて、男の言葉が途切れる。彼女？ と小首を傾げたジェイ達だったが——すぐに男の後ろ、後部座席に蹲るもう一人の人影に気づく。膝を抱えてぴくりとも動かないそれは、年端も行かぬ少女だ。夜のような肩までの黒髪と、月明かりにも似た淡い白肌——それがジロと、ジェイ達に気づいて瞳を向ける。

猛烈に咳き込んだ《ゲーター》のパイロットは、ブルと痙攣して動かなくなり……。やがて果てた。スクと立ち上がったコンボイは、「アノン少尉、モラレス曹長達に《グスタフ》を持ってくるよう伝えろ——生存者を発見、保護した」と通信を入れて、少女へと手を差し伸べる。まるでその意図が分からないかのように、少女はただ、コンボイの指先を見つめていた。

隊長の背後で事態を見守っていたジェイだったが、死した男の胸に掛けられたカードに気づいて、手を伸ばす。男の血に濡れたそれは、どうやら彼の身分を証明していた物らしい。身なりからして、おそらくはどこかの施設の技術者だったのだろう。

血濡れのそれを拭ったジェイは、月明かりを頼りに記された文字を判別する。男の写真が据えられたカードには、こう在った。

『皇属武器開発局第三研究室 室長補佐 トウマ・フジヨウ』

《ゲーター》も、そのパイロットたるこの男も、自警団などではない。ぞわと背を駆けた懸念に、ジェイは思わず固唾を呑むと——そのカードをポケットへとねじ込んだ。

## ⑨ 少女

ポケットの中の懐中時計を、チラとジエイは一瞥した。秒針は既に『深夜』と呼んで差し支えない時間を指していたが、早くも『クロイツ』のゾイド部隊と遭遇した一行に、気安く休息を取るという選択肢は無かった。モラレスとクーバ、二人の《ガンズナイパー》が護衛して《グスタフ》が到着し、今一行はその居住用コンテナに集まっている。大破した《ゲーター》から救助されたあの少女も一緒に運び込まれた。重傷を負い果てたあの中年男性とは異なり、幸い彼女は大きな怪我を負っている風でもない——『クロイツ』に襲われていた者達の、唯一の生き残り、という事になる彼女に、出来る限り話を聞いて起きたかった。

——否、唯一という言い方は、大きすぎるかもしれない。此度の『クロイツ』による襲撃で命を落としていたのは、あの男だけだったから。

二十分程、前の話になる。

「……廃村？」

噴煙の上がった村の中、生存者を探しに出ていたツヴァインが戻って来て告げた言葉を、ジエイは思わず聞き返していた。「ああ」と短く頷いたツヴァインは、背後の集落を振り返って、怪訝そうに眉を顰めると、

「どの家も人の生活していた形跡がほとんどない。放棄されてかなり経つだろうな——おそらくは、一年以上前。ガイロス帝国がエウロペに上陸してこの地域を占領する少し前に、住民に放棄されていたんじゃないか」

と、推測を言って肩を竦める。

焔に包まれた集落を目にした際、ジエイ達は条件反射的に『ガイロス軍に依る、エウロペの民への略奪』を想定してしまった。だが此度のそれは違ったらしい。彼等の狙いは村では無く、何か別の目的を

持って行動していた、という事になる。先ほど拾い上げた、あの《ゲーター》のパイロットの身分証明を取り出すジェイ。「それは？」と、彼の手元に気が付いたツヴァインが問う。

数秒考えて、

「あの男が持っていた物だ。《ゲーター》のパイロット……帝国の、武器開発局員だった」

と応えると、ツヴァインが訝しげな表情を作り、

「コンボイの旦那には伝えたのか？」

「……いや、まだだ」

ジェイの返答を、予測していた、とでも言いたげに、ツヴァインはやれやれと頭を振った。「お前の事だ。それを隊長に伝えれば、あの娘の処遇に影響があるんじゃないかねえか……なんて事を気にしてんだろ」と、追及する彼の予測は正しく——ジェイは言葉無く、手元の身分証をまじまじ眺める。

ガイロス帝国の武器開発局の男、トウマ・フジョウと同伴していた、謎の少女。『クロイツ』のメルダース中尉は故在つてこの廃村を訪れていた宣言したが、それは間違いなく、フジョウに関わる事であろう。彼もおそらくは『クロイツ』のメンバーに名を連ねる者であり、何らかの理由があつて組織から追われる立場にあつたとしたら……あの少女にはガイロスの残党に追われる、何らかの理由があるのかも知れない。

そこまで考えた所で、「——ジェイ少尉っ」と、彼を呼ぶ声が弾けた。振り返ると、《グスタフ》に引かれたキャンプコンテナ——複合分隊の簡易司令室となつて居るその戸口から顔を出したエリサが、ジェイとツヴァインに手招きをしている。

「件の女の子、だいぶ落ち着いたみたいです。コンボイ隊長が軽く事情を聴くから、同席しろって」

「ああ、すぐに行く」

即答したジェイは、フジョウの身分証をポケットにしまって、彼女の方へと踵を返した。彼女がガイロスとどんな関わりがあるのか、まづは本人の口から何か聞き出せるかも知れない。フジョウの事は、折

を見て隊長へと伝えればいい。

そう自らを納得させたジエイを、ツヴァインが「ま、はよ行けや」と投げやりに急ぎ立てる。

「……お前は？」

「俺はいいよ、ガキを尋問する趣味なんてないからな。『クロイツ』の連中が戻って来るかもしれないねえし、俺は外で警戒してる」

彼が関心を示さない、という事は、少なくともあの少女は『エウロペ大陸の現地住民』ではない、ということだろうか？ 頭の片隅でそんな事を考えつつ、ジエイはツヴァインの提案を了承して、指令室へと向かった。

こうして今、ジエイはチカチカと不安定な光を灯した蛍光灯の下、《ゲーター》のкокピットより保護された少女を目の前にしている。部屋にはコンボイ少佐とグロツク、そしてエリサが集まっており、ベッドに腰掛けた件の少女を囲んでいた。

やや暗めな照明の光に照らされた少女の姿を、注視する。

年齢はおそらく十四、五。スラと引かれた目元のラインは、幼さを残しつつもどこか冷たい色気があり、色白の肌に黒髪を備えた少女の形質は、デルポイ大陸ではあまり見かけないエキゾチックな風貌だ。端正な顔立ちの、美しい少女であった。

それだけに、彼女の躰の所々に刻まれた違和が、一層目に付く。（この地域の民族衣装だろうか）彼女の纏う浅葱色のゆったりとした服、その袖口よりチラと見えた白い腕には、無数の注射痕が在り、物珍しげに辺りを窺う瞳は彼女の髪と同じ夜の川のような黒だが、左目の虹彩は黄色く濁って、光を灯さない。そして何より、指令室に入った瞬間鼻に付いたのが、彼女から発せられる『葉臭さ』だった。

おそらくは、彼と同じ感想を抱いたのだろう——目の前の娘の痛々しいなりに、エリサもハツと口元を抑えると、不安げな表情でジエイの方を見る。すると、少女の真正面に相對するように椅子を配したコンボイ小隊長が、「アノン少尉、彼女に何か温まる飲み物を出してやってくれ」と、指示を出した。

あ、と慌てたエリサが、部屋の端に据えられた給湯器に向かって、コアを入れる。湯気を湛えた銀色のカップを受け取ると、コンボイはそれを目の前の少女に「飲みたまえ」と差し出した。

ゆったりとした挙動でそれを受けとり、カップの中を覗き込んだ少女。軽く咳払いをして、コンボイは続けた。

「私はヘリック共和国軍・307高速戦闘小隊の、スターク・コンボイ少佐さ。この地域に潜むガイロス帝国軍残党のテロリスト集団『クロイツ』殲滅の任を預かり——道中、君と、君と同乗していた男性を保護した」

淡々と事実だけを説明したコンボイに、黒髪の少女が済んだ瞳を向けた。「……保護？」と、少佐の言葉を反芻すると、

「——嘘。あの人、死んでしまったんでしょ」

鈴の鳴るような、物静かな音色——だが、どこか無機的で、冷たい印象のある声だ。感慨もなげな少女の物言いに、ジェイはその腹の内が読めず、戸惑う。対して、「……彼の事は、残念だった」と平静を装ったコンボイ大佐は、仕切り直すかの如く姿勢を正して、問い質を続けた。

「——君は、エウロペ人か？ その身なりだと、この地域の者と見受けられるが……」

ブンと横に頭を振った少女。すぐに、コンボイは次の質問に移る。「君達を襲ったゾイド達は、ガイロス帝国の軍用機だった。彼等が『クロイツ』——君達は、彼らに追われていた、と考えるのが我々からすれば妥当な所だが……何か、心辺りはあるか？」と、事態の核心を端的に突いた小隊長だったが——返答を待ったジェイ達に反して、数秒の沈黙を経ても、少女は何も答えない。

暖簾に腕押し、と言うべきか。掴み所の無い少女の反応のせいでも、どうにも話が進展しない。隣に立ったグロツクがつま先で小刻みに床を打つのに気づいて——おそらくは彼も、そんな彼女に苛立っていないのだろう、と察する。堪忍袋が切れて、少女に掴みかかったりでもないか、と、ジェイは妙にそわそわした。

案の状、ズイと一歩進み出たグロツクは、

「嬢ちゃん、もしも俺達が来なければ、お前もあの男と同じ運命を辿っていたんだぜ。そして今も、俺らはお前さんを『保護』するために、こうして事情を聴いている。もう少し協力的になってもいいんじゃないか？」

と低い声を出す。自身の倍は齢を重ねていよう大男が凄んだ表情で見下しているのだ、グロックを見上げた色白の少女の表情が、一転して不安の色に染まる。

「グロック、止せ」

一番にグロックを咎めたのは、コンボイ小隊長だった。不満げな表情を見せる少尉に手を翳して制止すると、小隊長は「話したくない事があるのならば、今はいい」と少女に向き直って、穏やかな笑みを見せる。

「我々を信頼するに相応しい者どもと君が判断した時、伝えてくれれば。だからまず——せめて君の名前を、教えてはくれないか？」

コンボイの呼びかけに、少女は困ったような顔をして俯いた。やはりダメか、と合点したジェイが、溜息を吐こうとした時、「——エラ」と、呟くような細かい声が鳴る。

「エラ。私の名前」

少女との面談は、一先ずそこで幕を閉じた。指令室を後にしたジェイとエリサ、グロック、そしてコンボイ。戸口を出た瞬間、「今宵は、ここで野営する」と、コンボイ小隊長が一行に告げる。

「クロイツのゾイド部隊が、まだ近くをうろついているかもしれない。交代で見張りを立てて、夜を明かす。我らの任地——『回廊ニザミアの村』の保安施設にてテッド分隊と合流し次第、地域の複合連隊と提携し本格的なクロイツ討伐へ乗り出す」

今しがた出たドアの方へ、クルと振り返ったコンボイは、「エラは、それまで共に連れていく」と宣言する。本気ですか、と、あからさまな難色を示したグロックだったが、

「村に人は無く、身よりも無い——このまま放っておくわけには行か



ないだろう。村に着き次第、彼女の宛ては考えてやる。一日程度の辛抱だ。我慢しろ」

と、コンボイがそれを諫めた。

小隊長の考えは最もだ。年端も行かない子供を、無人の廃村に取り残していくなど、そもそも人道に反するような行いであろう。彼女は連れていくしかない——だが、どうにも引掛かる者があって、ジェイは言葉を濁した。エリサと、コンボイの言いつけに渋々従ったグロックが去っていくのを確認して、「——隊長」と、ジェイは小隊長に件の身分証を差し出す。

「——ヌ」

エラと一緒に居た中年男性——トウマ・フジヨウの身分証。手渡されたそれを一瞥して、コンボイはジェイの意を察したらしい。眉を顰めた彼にジェイは、「《ゲーター》のパイロット……死んだ男は、帝国技術局の者です。エラ……彼女は、先の『クロイツ』達が佩びていたという密命に関係があるのかも」と、懸念を告げる。

数秒の沈黙の後、フン、と一息ついたコンボイ少佐。彼もエラの体中に残された、なんらかの『処置』の跡を見ている、「あの娘に何かある、というのは、間違いなからうな」と、すんなりと同調してくれたのだが、

「だが今は、その事で隊の皆を動揺させたくはない。他言は無用だ、ジェイ少尉。エラの処遇に関しては、おって考える」

と、ジロと睨んでジェイを制する。以降の問答は受け付けぬとでも言うように、クルと背を向けた小隊長は、そのまま背を向けて指令室の奥へと戻って行った。

⑩ シルヴィア（前）

ZAC2101年 一月某日 西エウロペ・マンスター高地

レンツ・メルダース中尉の憤慨は頂点に達しようとしている。

愛機《ジェノザウラー》を破壊され、自らに下された勅命を果たせぬまま帰還した彼は、これよりその失態を主君ガース・クロイツへと報告しなければならぬ。だが、帰還したガイロス残党軍の峙、その一角にあるガース少佐の書斎には、レンツの忌み嫌う食客が居た。

屋内にあっても顔の半分を覆ったヘッドギアを外さない、気味の悪い女である。自動ドアの開く音に気づいて、ユラと頭を振った彼女の視線——バイザー越しより朧と灯ったスコープの光を受けるや、レンツは不快を露わにした。

金糸の如き髪を揺らして、クラと小首を傾げたヘッドギアの女。

「——ごきげんよう、メルダース中尉」

と、口角を歪めた彼女を無視し、レンツは書斎の奥、デスクに掛けたクロイツの首魁へと歩み寄る。ガース・クロイツは読書家だ、幾度も読み返してボロボロになった文庫本を片手に、安楽椅子へと掛けていた少佐だが——レンツに気づくとそれを閉じて机の端にやり、面を上げた。

「戻ったか、メルダース中尉。報告を聞こう」

「は……。その前に——貴公は外せ、シルヴィア・ラケーテ少尉」

毅然とした態度を装いヘッドギアの女を睨んだレンツ。だが、彼の敵意を意にも介さずにシルヴィアは立ち上がると、「どうしてそのように辛く当たるのです？ 私も中尉と志を同じくする、『クロイツ』の同士だというのに」と、背の凍るような冷酷さの薄笑みを浮かべた。

レンツと相対したシルヴィア・ラケーテ少尉の手元には、ジャラジャラと金属質なメダルが一纏めにされて、毬のように揺れている。破損の程度は違えど、それらはいずれも焼け焦げて変形・変色した、楕円形の金属プレートだ。

それはヘリック共和国軍兵士が、万が一の際に己が身元を証明する

ための装飾。俗に『ドツグタグ』と称されるモノであり、彼らの名前や生年月日等の個人情報と、所属部隊や軍における認識番号等が刻印されている。シルヴィア・ラケーテの事は、レンツもこの二か月間で幾度も耳にした——彼女が敵部隊と邂逅し殲滅した暁には、部下達を使つて残骸を漁り、必ずそれを拾い集めるという。

「……ほら。今宵もここに来る前に、『反乱軍』を仕留めて見せたわ。我らが主君も、喜んでくださるでしょう?」

絡み付いた鉄の『毬』をレンツに翳して見せたスコープの女は、その中から最近に手に入れたのであろう『戦利品』のタグを引き抜く。

——T・マーカー准尉、特務工兵分隊503所属。

刻印された文字を、謳うように軽やかな口取りで読み上げたシルヴィア。「それにしても——戦いには、常に感慨が付きまとうわ」と、高揚に上擦つた声で言つた彼女は、

「このマーカー准尉という人は、何処で生まれて、どんな生活を歩んできたのかしら? 家族は? 恋人は居た? 彼を知る皆が——それにこの人自身だつて、まさか今夜私に殺されるなどと、考えたこともなかつたでしょうね」

言い終えると同時、煤けたタグを己が頭上に翳したシルヴィアは、まるで蛇の如く舌を伸ばして、それを口に含んだ。唾液を絡ませ、口腔内で散々にそれを弄んだ彼女は、「まるで、私、この人の人生を食べてしまったみたい。そう思うと、どうしようもなく切なくて——それでいて心地いい」と、愉悦を語つた。

やはりこの女は気に食わない、と、レンツ・メルダース中尉の苛立ちが頂点に達する。「——下衆めが」と、不愉快そうに眉を顰めたレンツは、軽蔑の眼差しでシルヴィアを睨むと、

「同じだと? 貴公はただ、人殺しをしたいだけであろう。帝国のため、主君への忠義のために戦つた事など、ただの一度もあるまい貴様と……一緒にするな」

激発寸前の震え声を出した彼だったが——二人の問答を「止せ」と咎めたのは、他ならぬ主君、ガース・クロイツであった。

「レンツよ。ラケーテ少尉は、私が招集したのだ。お主の任務を引き

「継いでもらうためにな」

「引き継ぐ？ 何故——ッ」

予期せぬ言葉に声を荒げたレンツを、クロイツ少佐は淡々とした様子で抑えた。

「担当直入に聞こう……フジヨウの確保に失敗したのであろう？ そして、ヤツの盗んだ『超越者』<sup>イモータル</sup>の鍵も、失った」

その問い質は、レンツを押し黙らせるに十分な物であった。ギリと奥歯を噛み締めて、彼はここに来た本来の目的を遂行する事となる。すなわち、今宵彼に託された任務の失敗を報告する事——それもレンツが最も弱味を見せたくない、シルヴィア・ラケーテ少尉の前で。

「ヘリックの特務隊に、妨害されました。鍵とフジヨウは、奴らの手にあるものかと」

苦虫を噛むような思いで絞り出されたレンツの声に、やはりな、と目を伏せたガース少佐。その瞳に浮かぶ失望の色に、「すぐに取り戻しに参ります、どうか汚名返上の機会を——」と焦ったレンツだったが、

「——ならぬ。理由は二つ。そなたの『ジェノザウラー』は、これ以上損傷させるわけには行かぬ。既に『エックス・デイ』が差し迫っている今、すぐに魔装を施し、我ら『クロイツ』の門出の先導者となつて貰わねばならない」

「主君は私がヘリック軍に敗れて、『ジェノザウラー』を喪失するだろう、と……そう仰るのか!？」

食って掛かるレンツの言葉を遮って「——二つ！」と声を張ったクロイツの首魁。その気迫に、中尉は押し黙り——二人の問答をニヤと傍観していたシルヴィアも、薄笑みを潜めて事態を見守る。

「……二つ。我らの悲願を為し得るには、『超越者』<sup>イモータル</sup>の力が必要不可欠だ。『パイロット・デザイン』に精通したフジヨウがいない今、我らは既存の『鍵』を取り戻すほかない。ヘリックの連中に解析・破棄される前に、早急にだ。それには、超高機動ゾイド・ヘライトニングサイクス・ハンター』を駆るラケーテ少尉が適任であろう」

「しかし……!」

「くどいぞ。ジェノの修理を終えるまで待ち、その間に『鍵』を取り逃がしたら？ 再びヘリックの猛追にあつて、機体を失つたらどうする？ そなたを出せば、『超越者』<sup>イモータル</sup>と『零式』、二体の切り札を失いかねん。此度の任はラケーテに任せよ——それが命令だ」

下がれ、と断じたガースの言には、それ以上の問答を許さぬ威圧感があつた。納得できぬ気持ちを握りつぶすように両の拳に力を込めると、レンツ中尉はクルと踵を返して、その場を後にした。

墜落した輸送船・《ホエールカイザー》の残骸が、『クロイツ』のアジトである。その埃っぽい格納スペースには今、破損し修復を待つ《ジェノザウラー》が屹立していた。ガース少佐に追いつてられたレンツは、真一文字に結んだ唇を噛みながら、その碎けた機体を見上げていた。

「——メルダース中尉」

背後から掛けられた声。振り返ると、シルヴィア・ラケーテが拙い足取りでこちらへ向かい——その金糸の髪がユラと揺れている。

「あなたの主君から、正式に命を受けました。貴方が取りこぼした仕事をこなすため、すぐにここを発ちます」

告げた彼女を、レンツは無視しようとした。平静を装ってそっぽを向いた彼に、シルヴィアはメットでその大半を覆った彼女の顔の中、唯一女性らしさを感じさせる艶っぽい唇を意地悪そうに歪めると、

「歯がゆいでしよう、中尉。長年忠誠を捧げて来たガース少佐の信頼が、貴方の元から離れていくのは」

「——ッ……」

西方大陸での戦争が終結し、『クロイツ』という少数勢力へと身を窺してから——レンツが常々感じて来た煩わしき。口にしないよう、意識しないよう心掛けて来たそれを、あつさり指摘したシルヴィアに、レンツは激発した。とっさの痼癩でシルヴィアの手首を取り無理やりに引き寄せると、「パイロット・デザインが——『超越者』<sup>イモータル</sup>が何だというのだ！」と、声を荒げる。

「オーガノイド技術の進歩に注力した帝国が、ヘリックに敗れたのだ

ぞ！ 必要なのはつまらぬ技術ではない、忠誠と武力に裏付けられた『力』だ。だといふのに……すでに時間も十分な資金力も無い状況にありながら、主君はマイスター何故、つまらぬ実験機の開発に気を割いている!?!」

激情を叫ぶと、レンツは乱暴にシルヴィアを突き飛ばす。気味の悪い立ち居振る舞いをしていても、結局は華奢な体躯の女性だ、グラと揺れたシルヴィアが倒れ込み、その弾みでメットが外れ、転がる。ブアと広がった彼女の金髪に目を遣り、我に返ったレンツが、「つ……、すまな——」と狼狽えた時だった。

薄暗がりの中、膝を着いたシルヴィア・ラケーテが面を上げた——メットとバイザーに隠されていた彼女の素顔を、レンツははつきりと見てしまった。

「……ッ、ウ……ッ!?!」

息を呑み、声を上げて後ずさるメルダース中尉に、シルヴィアは掌で顔を覆いながらヨロと立ち上がると、「……乱暴な人」と微笑みかける。おぼつかない足取りで、床を転がったメットを拾い上げると、再びそれを被るラケーテ。それを目で追いながら、レンツは恐る恐る問うた。

「なんと醜悪な……。望んで、……そうなったというのか？ 意味があるのかも分からぬ狂人の研究に、貴公は価値を見出していたのか」

レンツの畏怖に対しても、シルヴィアは薄笑みを絶やさない。

「メルダース中尉、高潔な人、真つ直ぐな人。でも戦いは、それだけでは勝てないわ。ゾイドは兵器だけれども、それでいて獣でもある——なればその『獣心』を理解してこそ、最大限機体の力を引き出せるという物でしょう？ 『パイロットデザイン』は、そのためのモノ。貴方の主君はマイスターこの摂理を理解しているから、『超越者』イモータルの制御にそれを選んだ」

言い終えた彼女の向かう先には、彼女の愛機たるチーター型の高速ゾイドが在る。

一見華奢とも形容できよう程のスリムなボディと、ブースターと主砲のライフルを兼ね備えた大型のバックパックを背負った機体は、《コマンドウルフ》のような中型ゾイドよりは大型ながら、《シールドライガー》《セイバータイガー》等の大型ゾイドとは呼び難い、独自の体躯を持つている。鋭角的なフォルムとガンメタルカラーの装甲は、精悍さの中にどこか狡猾な印象を与えた——《ライトニングサイクス》、ガイロス帝国の完成させた最新鋭の高機動ゾイドである。

シルヴィアのメットから照らされるスコープの光を浴びたサイクスは、無人のはずが一人で動き出して頭を垂れると、そのハッチを開く。レンツにはまるで、シルヴィアとサイクスがテレパスのような力で交信し、疎通したかのように思えた。

「離れ離れになってしまった半身を求めて、『超越者』<sup>イモータル</sup>は啼いているわ。私が迎えに行つて差し上げましょう」

格納庫の深奥に佇むゾイドへと振り返り、不敵に笑ったシルヴィアは、《ライトニングサイクス》を始動させる。ハッチを閉じて、クワと頭を持ち上げて咆哮したサイクスの機体が、まるでシルヴィア・ラケーテの研ぎ澄まされた残忍さが具現化した存在であるかのように見えて——レンツ・メルダースの背筋が、粟立った。

## ⑪ コンボイとエラ

夜が明けて、朝日が射す。

野営で一夜を明かしたジエイ達であったが——交代で夜警をしたために、昨日の疲労が残っているらしい。仕切り直しになるであろう行軍に備えて《ブレードライガー》のコンディションをチェックするジエイだったが、断続的に喉元から上がってくる欠伸が鬱陶しかった。今日は昨日よりも風があるらしい、吸い上げる空気はどこか土埃っぽくて、それがまた倦怠感を助長させる。

同じく疲弊が残っているのだろう、地べたに座り込んで怠そうにタバコを吹かしたグロツク少尉、エリサも日向で立ち呆けたまま、時々うとうとと目を伏せていた。二人に軽く挨拶をして、ジエイは補給のため、《グスタフ》に積まれたコンテナを取りに向かった。

躰の大半を人造兵器に置き換えているとは言え、ゾイドの根本は人と変わらぬ『生命体』だ。必要とする成分を摂取できなければその活動は停滞し、死に至る。野生の金属生命体は他のゾイドコアを捕食する事でその命を維持するが、人間の管理下に置かれた戦闘機械獣には、それも適わない。定期的に、ゾイド生命体の代謝に必要とされる『原始海水』の成分を再現した補給液を与えてやらなければならないかった。無論それとは別に、兵器として追加された武装類を機能させるため、ジエネレーターやバッテリーの消耗も確認しなければならぬ。

「——ヌツ？」

補給を終えて、駆動部の防塵フィルターを見ていたジエイは、不意にガタとなった物音に気付き、振り返る。まだ片付けていなかった補給コンテナを興味深げに見下ろしていたのは——エラだった。

光を灯さない左目、その表情は石のように固着していて、読めない。ポリタンクに残った金属生命体用の補充液を、ボヤと眺めていたかと思うと——おもむろに手を伸ばしてそれを救い取り、口元へ運ぼうと



する。

「——ッ、おい、止せ。飲み物じゃあ無いんだ、腹を壊すぞ」

慌てて駆け寄ったジェイがその手を掃うと、黒髪の少女は驚いた風  
に後ずさって、ジェイを見上げる。フラと揺れた彼女からあの『薬臭  
さ』がして、ジェイは思わず力んでいた自分に気づいた。「……ゴメ  
ン、大丈夫か？」と問うた彼に、エラはおずおずと頷くと、

「……喉が乾いてしまったの。私にも何か頂戴」

と、遠慮がちにジェイを見上げた。

「——ソイツは飲めないよ、エラ。ゾイドの生命維持に必要な高濃度  
イオンだ、人体にとつては重篤な金属中毒に繋がる。《グスタフ》にモ  
ラレス曹長が居るから、またココアでも入れて貰えば良い」

次いで聞こえたのは——エラを追いかけてきたらしい、コンボイ小  
隊長の声だった。彼女の背後に立つてその肩に手を添えた小隊長は、  
これまでジェイが見た事のない柔和な笑みを浮かべている。「さあ、  
行きたまえ。《ブレードライガー》は戦闘ゾイドだ、その足元に居るの  
は、なかなか危ない事だよ」と、少女を焚き付けたコンボイ。その  
言に、もう一度ジェイの方を振り返ったエラは「私も、アレに乗って  
みたい」と呟いて、コンボイにせがむ。

「コイツには二人分乗れるシートがある。折を見て、ジェイ少尉に乗  
せてもらえ」

頷き告げた小隊長の言葉に、嬉しそうに微笑すると——エラはクル  
と背を向けて走り去っていった。

少女の背中を見送って、不思議な子だ、と小首を傾げたジェイ。今  
しがた見せた笑みや好奇心は、年相応の——もしくは、それより少し  
幼いくらいの純粹さで、愛嬌がある。一方、初対面の際のどこか生氣  
のない瞳、心の読めぬ相貌は人形染みていて、気味悪くさえ思えた。  
どちらが本物の彼女なのか——。

「……そう言う事だから、少しの間エラを乗せてやってくれ」

考え込んでいたジェイ少尉は、小隊長の声で我に返る。

穏やかな瞳で少女を見送った小隊長の顔は、この一年彼の指揮で

戦ったジェイも見たことの無い表情だ。「……意外ですね、小隊長は子供がお好きなのですか？」と、冗談交じりに聞いてみたジェイに、おいおい、と苦笑いしたコンボイ。

「まるで私が融通の利かない堅物だとしても言うような物言いだぞ、少尉。これでも本国には、私の帰りを待つ妻子だつて居る」

「少佐、結婚なさっていたのですか？」

驚いたジェイに、「娘が二人。上は丁度、あのエラと同じくらいになる」と付け足した小隊長。全てが初耳で、ジェイはぽかんと呆けた。

感慨深げに地平の先を見つめて、コンボイは言う。

「ガイロスの残党共がどう考えているのかはともかく……エウロペでの戦いは、面向き終わっているのだ。これ以上、エラのような子供達が戦火に捲かれるのは、御免こうむりたい所だがな」

ジェイは、かつて彼が言った言葉を思い出す。戦いの果てに贖罪の道を探せ——オリンポス山での任務の際ジェイに説いた心意気は、彼自身の信条でもあるらしい。ジェイが「……それに関しては、同意です」と同意すると、小隊長は穏やかな表情のまま、その肩に手を置いた。

再び、一行は行軍を続けた。

『クロイツ』による襲撃への警戒も、無論怠らない。二台の《グスタフ》の操縦はそれぞれエリサとモラレス曹長が担当し、ジェイ、グロツク、そして小隊長のゾイドがその周囲を固めていた。ツヴァインの《コマンドウルフ》、クーバ曹長の《ガンスナイパー》は、進路上の安全確保のために先行し、索敵に努めている。

テッド・マーカー隊との連絡は、未だ取れていなかった。砂嵐サンドストームで

も迫っているのか、今日は一層無線の調子が悪い。『クロイツ』の闊歩する地域で後ろ立ての無いまま放浪し続けるわけにも行かず、コンボイ隊長は今現在の戦力だけで任地へと赴く事を決めたのである。  
ニザミア・コロニー  
回廊の村に到着し次第、最寄りの基地に連絡を取り、連携してテッド

隊の搜索を行う。

気の抜けない行軍のはずだが、ジエイの調子は付かなかつた。コンボイ小隊長の提案で、行軍中《ブレードライガー》にエラを同乗させたのだが——キャノピー越しの風景を見たり、デイスプレーを興味深げに見遣るエラの挙動を背中に感じて、どうにも落ち着かない。

小隊長から通信が入った。

「どうか？ エラ。大型戦闘用ゾイドに同乗するのは、想定より体力を消耗する。気がすんだらジエイ少尉に伝えて、《グスタフ》に降ろしてもらえ」

「うん……ありがと、コンボイ」

無口なエラだが、小隊長にだけは少し心を開いているらしい。キャノピーに反射した彼女の顔が、微かにはにかんでいるのに気づいた。ついでとばかりに「……ジエイ少尉。半刻もすれば、我々の任地『回廊の村』に着く。警戒は怠るな」と言葉を足すコンボイに、「つ、了解」と短く応じながら、ジエイは妙な感慨に捕らわれていた。これまで形作られていたコンボイの実直な軍人像と、少女を気遣う彼の姿。なかなか結びつかぬモノだ。

「——意外ですよ。コンボイ少佐、結構面倒見がいいというか……」  
小隊長との会話に区切りがついた所で、無線からエリサの声が鳴った。彼女もまたジエイと同じ印象を抱いていたらしい。「やさしいお父さん、って感じ。懐かしいなあ、私も小さい頃父に頼んで、よくゾイドに乗せてもらったんですよ」と好意的な感想を言う。

「ハハア……実際に乗せてるのは小隊長じゃなくて、俺なんだけど」  
苦笑したジエイに、

「じゃあ少尉もきつと、将来は気さくなお父さんになれますよ」  
と、エリサは冗談めかして応えた。

——※※※——

—— 妙だな、と、辺りの景色を煽いだツヴァインは眉を顰めた。

ジェイ達の十数キロ先を進んでいた彼とラムセス・クーバ曹長は、ニザム回廊の南端に位置するなだらかな丘陵に差し掛かっている。砂原の中にごつごつとした大岩と、僅かな枯草の混じる荒涼とした地だが、空は晴れ渡り、風も無い。一行の行軍を苛んでいた通信障害は、西方大陸名物たる『砂嵐』サンドストームが近くで発生してるからだ、と推測していたのだが——眼前に広がるは、そんな風は一片も感じ得ぬ穏やかな空であった。

「どう思う？ ラムセス」

無線越しに問うたツヴァインだが、クーバ曹長の返答は無かった。代わりに響いたのは、ノイズ音。通信障害だ。《コマンドウルフ》の真横に着けた《ガンズナイパーWW》のキャノピー越し、クーバ曹長がお手上げだ、と言う風に肩を竦めて見せる。

おいおい、と、ツヴァインは一人ごちた。

穏やかな気候に反して——隣に立った機体同士の通信にすらノイズが混じる程——電波状況はますます悪くなっている。これほどの事態は、人為的な介入が無ければ起こり得ない。

《コマンドウルフ》のマルチコンピュータが、周囲の環境をスキヤニングし、不審な点が無いか検索すると——数秒の内にアラーム音が鳴って、メインモニターに小さな金属片の3D解析映像が映し出された。

「電波攪乱……こいつは、『クロイツ』の連中が撒いたチャフか？」

大気中に混じっていた、電波攪乱を目的とし散布されるパッシブ・デコイだ。それが、一帯に残留している。つまり、ごく最近にこの辺りで、彼らが何らかの極秘行動をとっていた、と言う事を意味する。

——ツヴァインが、そこまで推察を立てた時だった。

視界の端から、黒い影が飛び出した。

空気中の金属粒子が、こちらのレーダー系統さえも弛緩させていたらしい。ツヴァインが気付いた時には、それは既に《コマンドウルフAU》と《ガンズナイパーWW》の懐まで入り込んでいた。

「な——ッ！」

猛獣型の帝国ゾイドだった。ガイロス帝国の開発した武装換装システム・C.A.Sの技術試験のため、《セイバータイガー》をベースに作られた実験機。起伏の激しい灰色の装甲と大型化した牙を剥きだしにした頭部は、まるで顔の皮を剥ぎ取られたかのような歪さに思えた。

歪な表情の改造機・《プロトセイバー》が跳躍し、その勢いのままクーバ曹長の《ガンズナイパー》を踏み潰した。強化バックパック『ワイルドウィーゼル』が粉々に砕け散り、横転したクーバ機。衝撃でキャノピーが破碎すると、コクピットから人型が投げ出されて砂原に激突し、水風船みたく爆ぜる。「……ク、クーバア……ッ!？」と息を呑んだツヴァインだったが——彼が呆けたその刹那に、改造セイバーはその矛先を変えていた。

一瞬で残骸となり散らばった《ガンズナイパー》から飛び退き、セイバーはツヴァインの《コマンドウルフ》へと食らいつく。長く鋭い『強化キラーサーベル』がウルフの肩口へとめり込み、勢いのままに《コマンドウルフ》を引き倒した。ミシミシと装甲が軋んだかと思うと、瞬時に右の前足が千切れ落ちる。

「ウオオツ!? ウ、オオアアア……ッ！」

絶叫し、操縦桿を手繰ったツヴァイン。砂塵に塗れながらもがくウルフを、がっしりと押さえつけた《プロトセイバー》だったが——次の瞬間に、その横腹が爆炎で膨れた。我武者羅に足掻いたツヴァインが『ロングレンジキャノン』を旋回させ、《プロトセイバー》の土手っ腹に零距离射撃を見舞ったのだ。砲撃はセイバーの駆動中枢を撃ち抜いている、たちまち生命感を失った実験機が崩れ落ちるのを乱暴に押しつけて、死に態の《コマンドウルフAU》が、ヨロと起き上がった。

「こちらツヴァイン機から、本隊へ……斥候だ、ガイロス残党の高速ゾイドが、俺達の往く手で待ち伏せしてやがる……ッ！」

激しい攻防の末に流血しながら、ツヴァインは無線を取って叫んだ。しかし、反応は無い。通信障害がある事を、忘れていた訳ではな

かったはずなのに——ツヴァインは自らの胃の腑を掻き立てる絶望に気づき、息苦しそうに喘いだ。「おい……コンボイツー！」と、小隊長の名を叫ぶが——

空しく響いたその声を、一筋の閃光がかき消す。

火線。背後から撃ち込まれたレーザーライフルの光弾が、背中の『ロングレンジキャノン』を吹き飛ばしていた。大破して地べたを這ったウルフ。ジェネレーター出力がみるみる低下し、マシンの機能<sub>能</sub>が死んでいく。

「クソ……ッ！」

立ち上がれなくなった《コマンドウルフ》のコクピットで、ツヴァインはゆっくりと迫ってくるガイロス軍属高速ゾイドの群れに振り返った。ミサイルポッドとスタビライザーで強化された《セイバーアイガー・A T》<sup>アサルトタイプ</sup>が三機、その背後に、おそらくは一連の電波障害を引き起こす怪電波を発しているのだろう、巨大なパラボラアンテナユニットを備えた改造セイバーが一機随伴していた。

そして、もう一機。立ち並ぶ《セイバータイガー》よりも一回り程華奢で、鋭角的なフォルムを持つ黒い猛獣型ゾイドが、ゆっくりとコマンドウルフに近づいてくる。《ライトニングサイクス》——それも、追撃戦用に火器と脚部をチューンナップされた『ハンタータイプ』。ニクシー基地で見た報告書——新型ライガーのテスト走行に介入し、損傷させたというガイロス軍残党が持ち出したモノと同型だと、一目で分かった。

《セイバータイガー》の群れを取りまとめるように先頭に立った《ライトニングサイクス・カスタム》が悠々とした足取りで迫り、狡猾な眼差しでツヴァインの《コマンドウルフ》を見据える。獣の眼差しだ。死に態の得物に舌なめずりし、弄び、そして喰らう者の眼差しだった。「……クソツタレ」

ジワと滲んだ汗と、負傷した額から流れ出た血が頬を伝う中、ツヴァインはかすれ気味の声で一人ごちると——ゆっくりと目を伏せる。最期の時に目にする光景くらいは、自分で決めたい。自らを貪ろうとする獣達の姿を焼き付けるよりは、瞼の裏のこの深淵の方が、幾

分マシに思えた。

⑫ 虎嵐

「——ツヴァイン、どうした？ 何が有った、ツヴァイン機、応答せよ」  
コンボイ小隊長の指示で、ジェイ達は一時進軍の足を止めた。小隊長の《シールドライガー》に向けられた、ツヴァイン機の緊急入電。ノイズにかき消されたその意図を手繰ろうと、何度も呼びかけるコンボイ少佐だったが——通信は、一向に繋がらない。

「駄目だ、ラムセス曹長とも繋がらないッ」

《グスタフ》を引つ張るエド・モラレス曹長がごちる。二人の会話を無線で拾っていたジェイは、スピーカーに混じる雑音に気づいて、眉を顰めた。通信障害だ。だが、天候は晴れ。モラレス機も小隊長機も、目と鼻の先に居る。電波を妨げる物など何一つない状況で、不意にそれが起こったというのが、ジェイには不思議でならなかった。

「——来た」

狐に包まれたような気分のジェイ。そんな彼の背後で、エラの声が漏れた。何かと後部座席を振り返ったジェイは、キャノピーの向こう——地平線の果て、その一点を目を見開いたまま、ジツと睥睨する少女に気づく。張り付いたような表情の彼女は、どこか落ち着かない様子だった。

「来た……シルヴィアが、私を連れ戻しに来たんだ」

その言葉のすぐ後に、ジェイも地平の果てを駆けてくる、帝国ゾイドの機影を確認した。高速で地面を蹴る、四足の獣達。高速戦闘用のゾイド部隊だ。カスタマイズパーツで強化された《セイバータイガー》に、見慣れない中型の高速ゾイド——《ライトニングサイクス》とか言う、『オーガノイドシステム』搭載の新型機だ。その装備を見れば、彼らが帝国のエースチーム『タイガーライダー』に比肩する部隊だと、すぐに推測できた。

「ここまで接近されるまで気づかなかったとは……この電波障害、作為的なモノか」



土煙を撒いて駆けてくる帝国の高機動ゾイド達を睥睨し、小隊長がごちる。「アノン、モラレスは《グスタフ》を退がらせろ。奴ら、問答無用で来るぞ」と指示を出しながら、自身の《シールドライガーDC S》を最前まで進ませる。「隊長、自分も——」と《ブレードライガー》を動かしたジエイだったが、

「ジエイ少尉は後ろで、《グスタフ》を守っている。今の貴様を全力で戦わせる訳にはいかん」

「……ッ」

——エラの事だ。

エラを同乗させている《ブレードライガー》に、気を遣っている。小隊長の考えをすぐに理解できたジエイだが、その胸中は穏やかではなかった。敵は五機で、こちらは四機。しかも強化型《セイバータイガー》と、《オーガノイド機関》を備える《ライトニングサイクス》の群れだ。戦力差を埋めるには、こちらの最高戦力であるジエイの機体が、率先して戦うべきに思える。後部座席のエラをチラと振り向きながら、ジエイは焦燥を噛み潰した。

ボ、と、鈍い音が爆せて、蒼天の中を灰色の帯が塗りつぶす。三機の強化型セイバー、《セイバータイガーAT》の背に装備された『八連装ミサイルポッド』が、一斉に撃ち放たれたのだ。雨の如く降り注いだミサイルが、ジエイ達の足元を次々に穿つ。弾ける爆炎に狼狽えながら、「うおお……野郎！」と、グロック少尉が叫ぶのが聞こえた。

「くっ——！」

咄嗟に機体を飛び退かせてエリサの《グスタフ》に寄せたジエイは、フルパワーで『エネルギーシールド』を展開させる。最大出力のビームウェーブがミサイルを焼き、《グスタフ》のコクピットを守ったが——さすがに数が多すぎた。装甲や通信アンテナ、牽引していたキャンブコンテナに被弾して、炎上する。

「アノン少尉は、早く《デイバイソン》に！ モラレス曹長も！」

「わわっ……、はいー！」

慌ててコクピットハッチを開けて、《デイバイソン》へと駆けていくエリサの姿を確かめると、ジエイはもう一度敵陣を仰ぎ見る。

敵の追撃はなかった。既に前衛まで出張っていたコンボイ小隊長と、グロツクの《シールドライガー》。その真正面に、鈍いシルバーレーの装甲を持つチーター型のゾイド《ライトニングサイクス》が立ちはだかつていた。

「こちらは、ヘリック共和国軍のスターク・コンボイ少佐だ。何者か。所属と、目的を——クソ」

目の前の敵機に呼びかけようとしたコンボイは、コクピット内に響くノイズ音に頭を振って、無線を投げる。通信障害が酷くなっている。巨大なアンテナを背負ったセイバータイガーの改造機《パラボラセイバー》の基部から、銀色の蒸気が吐き出されているのが見えた。おそらくは、生体チャフ——電子機器・電波環境に影響を及ぼす極小の古代昆虫型金属生命体を、大気中に散布しているのだろう。特殊な環境下で培養されたそれらは、通常数十分程で死滅するが、非常に強力な電波障害を引き起こす。通信による交渉は不可能だ。

怪訝そうに眉を顰めたコンボイだったが——眼前に立った《ライトニングサイクス》のコクピットハッチが突然に開いて、目を疑う。中から露わになったパイロットが立ち上がり、同様に無線を取ると——「私は、<sup>わたくし</sup>ガイロス帝国のシルヴィア・ラケーテ少尉です」

と、拡声器に引き伸ばされた女の声が鳴った。

「なんだ、コイツは……」

様子をコンボイ達の背後で見守っていたジエイは、女の奇抜な身なりに息を呑む。長い金髪の女だ。おそらくは佐官級の軍人が着用するものであるう、丈の長い軍服に身を包んだなりは、ガイロス軍人らしい気品がある。一方でその素顔は、頭蓋を丸々覆い隠す大仰なメットとバイザーで隠されていて——まるで何か気味の悪い人体実験を受けている最中であるかのような歪さだ。

ノイズ交じりの無線に「——こけおどしだ」とグロツクの声が響く。「ガイロスの戦争屋連中には、たまに居る……ああいうイカれた格好のヤツが」

強気な風のグロツクだったが、ジエイの感じた違和を取り除くには

至らなかつた。おそらくは彼自身も、己が言葉で奮い立たせようとしていたからであろう——シルヴィア・ラケーテ少尉と名乗った女の異様は、伊達や酔狂に依るモノではない。どこか底知れぬ狂気によって見繕われたものだ、グロツクも余感している。

「……私はヘリック共和国軍、スターク・コンボイ少佐」

数秒の間の後にハツチを開いた小隊長が、ラケーテ少尉と同じやり方で呼びかけに応えた。

「ガイロス帝国、と言ったか。このエウロペ大陸に、ガイロスの正式な軍勢はもういない。お前達は帝国軍ではなく、軍人崩れの盗賊か、テロリストということになる。我々ヘリックは、その様に対処するぞ」  
毅然とした風に言い放った小隊長に、シルヴィア・ラケーテは微笑して、

「仰る通りね——では、言い直しましょう。私はシルヴィア・ラケーテ。少しばかり盗賊と人殺しを嗜む、ただのゾイド乗りだわ」

言い終えて、クク、と嗤いを漏らしたシルヴィア。

ガイロス帝国軍の士官には、格式を重んじる者が多いという。

その通説は大方当たっていて、事実ジエイがこれまで遭遇し、コンタクトを取ったゾイド乗りは、大概当てはまっていた。例えば、先日戦った『クロイツ』の《ジエノザウラー》……レンツ・メルダース中尉も、ジエイ達に賊軍扱いされて酷く激発したものだ。だが、このラケーテは違うらしい。コンボイの挑発を、何とも思っていない風であつた。

クク、と、楽しそうにはにかんだ口元を手で隠したラケーテは、再び小隊長へと面を向ける。

「私達は、探し物に参りました。『クロイツ』が保有する大事な資産の一つが、ここで失われた……今はそれを、貴方達が持っているのではなくて？」

「……心当たりが無いな」

「——嘘。持っているのでしょうか？ ——エラを、『超越者』<sup>イモータル</sup>の鍵を」

即答したコンボイにシルヴィアは追及して——ふとその視線が、小隊長の背後に流れる。《ブレードライガー》、そのコクピットの中の

ジエイと、後ろに座った少女を、シルヴィアは真っ直ぐに見据えた――そんな気がして、ジエイはゴクリと生唾を呑む。

「貴官の意図は何一つ分からんが……理解する必要もあるまい。盗賊風情と、交渉する気はない」

コンボイ小隊長は乱暴に吐き捨てると、愛機《シールドライガーD CS》のkokopittハッチを閉じた。再起動を掛けるライガーの咆哮を浴びながら、「そう……では、手早く済ませましょ」と、シルヴィア・ラケーテも《ライトニングサイクス・カスタム》のkokopittに戻り、友軍の機体に電信を送る。

「エラはきつと《ブレードライガー》の中に居るわ、生け捕りにして。――他は殺せ」

《セイバータイガーAT》と《ライトニングサイクス・カスタム》、次々と雄叫びを上げるガイロス帝国の戦闘機械獣。それが戦いの合図だと理解して、「来るぞー!」と、グロック少尉が一行を煽る。

「アノン少尉とクーバ曹長は後方支援をしろ。敵は高速ゾイドばかりだ。俺と小隊長――それと、ベックで迎え撃つ」

そう叫んだグロックは、既に行動に移っていた。《シールドライガー》を起動して疾走を駆けると、背部の『二連装レーザー』を展開、突貫を開始する《セイバータイガーAT》達に、牽制のビームを浴びせかける。

帝国高速戦闘隊の戦い方は、幾度も見た事があった。『グラム駐屯地攻略戦』で遭遇した時のように、フォーメーションを維持したまま電撃戦を展開、一対多で戦力を削ってくる『暴風戦法』が、タイガーライダーの基本的な戦略だ。それを防ぐには、砲撃によって敵機をかく乱し、まずは陣形を完成させない事が重要となる。

「当たって……っ!」

三機の《セイバータイガーAT》に向けて、エリサの《デイバイソン》とモラレスの《ガンズナイパーWW》も、砲撃を仕掛けた。弾丸の雨に阻まれてタイガー達の加速が鈍る。そこ目掛けて、グロックの《シールドライガー》が跳躍、『ストライククロウ』の一撃が、まずは

一機目の『アサルトユニット』を踏み砕く。

損傷に倒れ込んだセイバーを確認すると、再び疾走して距離を取る。「行けるぞ……ッ」と、グロックは高揚に勇んだ。大型のパラボラアンテナを背負った改造セイバーは、後陣より一歩も動く気配が無い。おそらくはこの電波障害を維持するのが目的で、最前で戦うのは他の四機に任せているのだろう。ならば、戦いは四対四。戦力は拮抗している。

——その直後であった。

砲撃に足止めされたセイバーの後ろから、黒い影が飛び出す。幾分華奢なシルエットを持つそれは、あのシルヴィアが乗り込んだ《ライトニングサイクス》だ。《セイバータイガー》達とは連携を取らず、単機で飛び出してくる。

「おい、アノン撃て。アイツの狙いは動けない《グスタフ》だ、足止めしないと面倒な事になる！」

叫んだスターク・コンボイ少佐の《シールドライガーDCS》が、サイクスの尻を追いかけながら『ビームキャノン』を撃ち放った。それを、空高く跳躍した《ライトニングサイクス》が、紙一重で躲す。

「何……ッ」

真後ろの、死角からの攻撃だった。それを、ラケーテの《ライトニングサイクス》は難なく躲した。

コンボイの追撃をいなしたサイクスに、今度はグロックの《シールドライガー》が飛び掛かる。が、追いつけない。スピードと運動性、どちらも《シールドライガー》を上回る《ライトニングサイクス》に、どんどん引き離されていく。「クソウ！」と、苦し紛れに『ミサイルポッド』を放ったグロック少尉だったが——弾丸の雨の中を縫うように駆けたサイクスは、既に《グスタフ》と、それを警護するモラレス曹長の《ガンズナイパー》に隣接していた。

「おお——?! おおお！」

動揺の咆哮を上げた《ガンズナイパーWW》が威嚇し、全身の火器を展開したが——《ライトニングサイクス》は止まらない。「——シヤアア！」と気迫を吐いたシルヴィアに合わせてもう一度跳躍すると、

その爪を煌めかせて《ガンズナイパー》を飛ばした。

ナイフのような鋭利さを持つサイクスの爪『ストライクレーザーロー』が、モラレス機の右前脚、そして首を刎ねた。千切れ飛んだヴェロキラプトル型ゾイドの生首が地面に叩きつけられて、砕け散る。

「モラレ——」

叫び振り返ろうとしたジェイは、次の瞬間閃光に目を晦まされた。サイクスの『パルスレーザーライフル』を浴びて爆散する《グスタフ》のkokopitto。

声も上げぬ間もないうちに、二機が撃墜された。

動揺はグロックやエリサにも伝わっているらしい、攻撃の手が緩んだ隙に、《セイバータイガーAT》達が持ち直してくる。シルヴィア・ラケーテの《ライトニングサイクス・カスタム》も焰に照らされながら、次の得物を見定めているかの用だった。

「くっ……」

あの《ライトニングサイクス》を止めなければ、まずい……そんな余感に苛まれて、ジェイが《ブレードライガー》の機首をラケーテ機へと向ける。だが、一見してサイクスの運動性・機動性は、ジェイのライガーすらも上回っている風に見えた。そして——シルヴィア・ラケーテ少尉はエースだ、おそらくはこれまでに遭遇したどの敵よりも強い。

「ジェイ少尉……退がれ、……た筈だ——サイクスは、私がやる」

電波障害が、どんどん進行しているらしい。ノイズ混じりのコンボイ隊長の声が聞こえて——《ブレードライガー》の横に、小隊長の《シルドライガーDCS》が並ぶ。「隊長、お一人では……ッ！」と引き止めようとしたジェイだったが、その声が届く前に、コンボイのライガーは《ライトニングサイクス》へと挑みかかっていた。

追い縋ろうとするも、背後からの衝撃に阻まれる。《ディバイソン》の弾幕を振り切った《セイバータイガーAT》、その一機が、ジェイのライガーに喰らい付いていた。

「この——このおー」

煩わしさに身を揺すった《ブレードライガー》——その眼前で、コ

ンボーイ隊長とラケーテ少尉の《ライトニングサイクス》が交錯した。

⑬ 『パイロット・デザイン』

「このお……退いてろおーっ！」

ジェイの激発に合わせて、『ブレードライガー』が大きく身を振った。腰部に喰らい付いた『セイバータイガーAT』の機体を、その膂力で放り投げると——地べたに打ち付けられたタイガーの頭に、爪牙を見舞う。

頭蓋をベキベキに踏み砕かれた『セイバータイガーAT』が痙攣するのを横目に、ジェイはコンボイ小隊長の援護に入ろうと踵を返したが——次の瞬間彼が見たのは、『ビームキャノン』の一門を爆損し、大きくよろめいた『シールドライガーDCS』の姿であった。

「——ツ隊長！」

「構わん、来るな！ エラの——民間人の保護を最優先にしろ！」

叫び返した小隊長に、「しかし——」と言葉を濁したジェイだったが、それ以上の問答は続けられなかった。頭部を大きく損傷した『セイバータイガーAT』が起き上がり、怒りの咆哮を上げたのを聞いた。「まだ来るのか……ウツ！」

牽制の『三連衝撃砲』を撃ち込まれ、今度はジェイのライガーがよろめいた。短く舌打ちをして再びタイガーに向き直ると、背部の『パルスレーザーガン』を展開して撃ち返す。

砲撃戦だ。流れ弾が地面を抉り土埃が上がると、小隊長は勿論、エリサやグロツクの様子さえ分からなくなる。

「グ……ッ」

撃ち合いの振動が、機体を激しく揺さぶった。

激震に呻いたジェイは、ふと後部座席に座る少女を思って、振り返った。衝撃に身を揺すられてはいるものの、エラは悲鳴一つ上げない。真一文字に唇を結び、ただジツと、己が膝元を見つめているだけだ。

「……どういう事なんだ、エラ。『クロイツ』の目的は君だ——一体奴らと君に、なんの関係がある!?!」



衝撃に奥歯を噛み締めながら、ジェイがいらいらと問うた。返事は無く、代わりに《セイバータイガーAT》の砲撃が《ブレードライガー》を傾かせる。「くそ……グロック！ エリサア！」と仲間を呼ぶが、応答は無い。二人とも他のセイバーに追い立てられているのだろうか——援護は、期待できそうになかった。

ジェイの悪戦から少しばかり離れた所で、コンボイ小隊長はシルヴィア・ラケーテの《ライトニングサイクス》と戦っていた。

時速三百キロ以上の高速を維持しながら、シルヴィアのサイクスは正確に『パルスレーザーライフル』の光弾を撃ち込んでくる。総合的な破壊力はシールドDCSの『ダブルキャノン』に比べて劣っているものの——ブースターパックのジェネレーターに直結によって生みだされるエネルギーの供給効率は、相当に良いらしい。この威力では考えられない程の連射性で、コンボイのライガーをかく乱してくる。『エネルギーシールド』を常時展開しどうか致命傷を避けてはいるが、破られるのは時間の問題であった。

Eシールドによって捌かれた光弾の余波が、《シールドライガーDCS》の間接を焦がす。チ、と短い舌打ちをしたコンボイ小隊長は、背部に据えられた『八連ミサイルポッド』のトリガーを引いた。撃ち出されたミサイルが、サイクスの往く先を覆うかの如く降り注いでいく。先に《セイバータイガーAT》達がやって見せたのと同じ戦略、まずはサイクスの最大の武器たる『機動性』を、この絨毯爆撃で削ぐのだ。

「ン——フフ……」

頭上から散らばるミサイルを見上げながら、シルヴィア・ラケーテが笑うと——《ライトニングサイクス・カスタム》はさらに加速する。

「ッ、——死ぬ気か!？」

動揺したコンボイは、最高速度を維持したまま砲弾の嵐の中を縫うようにして駆ける《ライトニングサイクス》の姿を見た。火線はおろか、爆風の余波・土埃すら掠らぬまま、ミサイルを凌いだサイクスが、噴煙から飛び出し——再び『パルスレーザーライフル』が煌めく。反

応が遅れて、コンボイはそれを避け損ねた。

肩口を撃ちぬかれて痺痺したライガーの機体が、ガクンと傾く。

「……ッ、どういう、事だ……ッ!？」

小隊長は、思わず苛立ちを口にしていた。

最高速度を維持したままでの複雑な軌道・急旋回と、連続する精密射撃——その全てを正確にこなしたシルヴィア・ラケーテ少尉が、優れた操縦技術を持っているのは間違いない。サイクスの性能が《シールドライガーDCS》を上回っているのは勿論、ラケーテ少尉の腕前も、コンボイ以上。おそらくはヘリック有数のライガー乗り『レオマスタール』に匹敵するレベルであろう。

だが、コンボイの感じた違和は、そこには無い。

優れたゾイド乗りとさえ、逃れられない制約が存在する。如何に反射神経に優れたパイロットも、機体の操縦系、そのレスポンス速度を越えて挙動を反映させることはできないし、逆にどれだけ高い運動性を誇るゾイドを駆ろうとも、人間の軀に耐えられるGには限界がある。

だが、コンボイを翻弄し続ける《ライトニングサイクス・カスタム》の超高速戦闘は、そう言ったゾイド乗りの制約を、全て超越していた。『人馬一体』……: 比喩ではない、文字通りパイロットとゾイドが融合しているものでなければ、とても為し得ない動きだ。

「……いい腕をしている、ラケーテ少尉。だがこんな操縦を繰り返していたら、いずれは貴官の肉体に限界が訪れるぞ」

コンボイは、無線を通じてシルヴィアに呼びかけた。損傷著しい自機の態勢を立て直す時間を稼ぎたかったのもあるが、何よりも今感じている違和感を払しょくしたかった。平静を欠いた状態で、倒せる相手ではない。

通信障害に苛まれる中、彼の言が届くかは賭けであったが——意外にも返信が在った。

「私の心配をしてくださるの? でも、それは無用な情けです、小隊長。私は『パイロット・デザイン』によって、このハンタータイプ・サイクスの挙動と完璧に同調できるよう調整されていますから」

「パイロット……なんだって?」

聞き慣れぬ単語に戸惑ったコンボイ少佐は、ふとある日の光景を思い出す。確か、ニクシー基地に入ってから間もなく、技術士官レイモンド・リボリーと帝国の地下工廠を探索した時だった。故ヘルマン・シュミット技術大尉が遺したファイルを発見し——そこで『パイロット・デザイン』という言葉を目にしたのである。

「帝国が誇大妄想に狩りたてられて生み出した、忌むべき技術の遺児と言った所か。ラケーテ」

コンボイの挑発を意にも留めずに、シルヴィアは悠々と語る。

「貴方もご存じでしょう? 『オーガノイドシステム』を搭載したゾイドの、特異な性質。『パイロット・デザイン』はそれを改善するために編み出された技術です」

と、シルヴィア少尉は続けた。

西方大陸戦争時、ガイロス帝国が『オーガノイドシステム』の解析に費やした執念には、ある種の異常さすら垣間見る事が出来ただろう。それは《テスザウラー》に代表される、惑星大異変に際し失われた『戦域支配級の巨大ゾイド』を再生させる為であったり、もしくはそれらを代替するレベルの戦闘力を持つ新型機を開発するためであったが——常に問題となるのが、大幅に引き上げられた戦闘力の代償、ゾイド自身の異常なまでの凶暴化であった。乗りこなせるのは、エースパイロットと称される者に限っても、十人に一人。戦場に広く普及されるべき戦力として、致命的な欠陥である。

「ガイロスの皇属武器開発局が、人体への『オーガノイド機関』移植を試していたのは、ご存じ? コンボイ少佐」

「……貴公らが、そうやって『オーガノイドシステム』の解析を進めたということなら、聞き及んでいる」

「ならば、話が早い。『パイロット・デザイン』はその延長です。ゾイドの闘争本能に乗り手が付いて行けず、それが精神負荷となるというのなら——人もまた『オーガノイドシステム』による調整を受けなければならない。機体と同様のゾイド因子を脳髄に移植する事で、ダイレクトにゾイドの思惟を受容し、同調する事が出来る。自分のゾイドと、文字

通り一心となるのです」

シルヴィアとの問答は、ある程度コンボイの平静さを取り戻させた。

超高機動ゾイド《ライトニングサイクス・カスタム》に追随するシルヴィアの反射神経、その正体が、臃げながら見えてくる。

「……貴官はつまり、ある種の強化人間、という事か」

『オーガノイドシステム』搭載ゾイドを乗りこなすために精神的・肉体的に人為的措置を施されたパイロット。ガイロス帝国の科学技術は、ヘリック共和国の十年は先を往っていると称される物だ。共和国の常識からすれば荒唐無稽に思える話も、あり得ぬことではない。

そして、もう一つ合点が行く。『クロイツ』が執拗に狙う少女・エラの事だ。

「ええ——そして、お分かりでしょう？ 少佐。貴方が保護した少女は、民間人ではない。私たちが『超越者』<sup>イモータル</sup>を制御するために開発した、帝国の資産です。速やかに返却して頂けないと、一層手荒な真似をする事になるわ」

「——断る！ 軍とは関係のない民間人を、人体実験の糧としたというのか？ 恥を知れ！」

即断して語気を強めたコンボイに、「……それは、私の意思でそうしたのではないのだけれど」と、シルヴィアは困った風に言葉を濁して、『超越者』<sup>イモータル</sup>は特別なゾイド、シュミット技術大尉のやり方に倣って、まずはサンプルを取り——ある程度のノウハウが確立されてから『本命』に処置をする予定だった。けれど、肝心の技術責任者たるフジヨウ博士が組織を逃げ出して、しかも死んでしまったとあっては、これ以上の開発は出来ない。そこにいるエラが、唯一『超越者』<sup>イモータル</sup>《と心を通わせる事の出来るゾイド乗りとなる」

その時点で、コンボイ小隊長の不快は頂点を極めていた。「子供を戦争に使うか、『クロイツ』。なればこそ、なおさら——ここで退くわけにはゆくまい！」と激発し、再度《シールドライガーDCS》を起動させる。損傷で失われかけていたパワーが蘇り、猛々しい咆哮を上

げるライガー。その姿をスコープ越しに見据えていたシルヴィアも、不敵に笑った。

「さあ、往くぞー！」

先に仕掛けたのは、コンボイだった。残された一門の『ビームキャノン・ユニット』を、最大出力で撃ち放つ。まるで光の鞭のように砲撃を薙いだ《シールドライガーDCS》、その攻撃から逃げるように、《ライトニングサイクス》も跳躍した。熱線を軽やかに踏み越えようと、大きく弧を描くように軌道を取り、DCSの側面を目指す。

「グ——きせん！」

サイクスを追いかけるように、射線を傾けるコンボイ機。だが、シルヴィアも既にライガーを主砲の射程圏内に捕えていた。『パルスレーザーライフル』から爆ぜる光弾。萎えかけたEシールドで、コンボイがそれを受け止めようとした時だった。

《ライトニングサイクス・カスタム》の背の装甲が展開して、小型の『八連ミサイルポッド』が撃ち放たれる。空を這う多数の熱源を目で追いながら、「何イ!？」と叫びたコンボイ。回避行動を取ろうにも、フルパワーの『ビームキャノン』を撃ち振るっている今現在、ライガーは衝撃に堪えるのに手一杯だ。硬直したライガーは、火の雨を諸に浴びる事になる。

出力の低下したEシールドでは、降り注ぐ実弾を焼き払う程の力が無かった。炸裂したミサイルが《シールドライガー》の首元を破碎し、シールド展開の要たる鬣を損傷してしまう。炸裂に怯んだライガー。その隙に、《ライトニングサイクス》はどんどん距離を詰めてくる。

迎撃のビームキャノンを見舞おうとするが——既に大勢は決していた。光線をその膂力・運動性を持っていなした《ライトニングサイクス》が、反撃のパルスレーザーでライガーを打ちのめす。ついに残った一門の『ビームキャノン・ユニット』も吹き飛ばされて、コンボイの《シールドライガー》は完全に丸腰となった。

「グッ……クラッ……！」

スターク・コンボイは、久しく感じていなかった感情に呻いた。突貫してくる《ライトニングサイクス》から退くように、機体を後ずさ

らせようとするが、既に《シールドライガー》には、その余力すらない。操縦桿を引く音が空しく響く。

サイクスが、空高く飛び上がる。その両の前足に備えられた、ナイフのような鋭利さを持つ爪。『ストライクレーザークロウ』が展開され、発光すると——湧き上がった『恐怖』をついにせき止められなくなって、コンボイ小隊長は絶叫する。

「う、ウオオオオアアア……ッ！」

次の瞬間、《ライトニングサイクス・カスタム》の渾身の一撃が、《シールドライガーDCS》の腰部を貫いた。

撃ち合いの粉塵で視界を奪われていたジエイは、ボツ、と爆ぜた鈍い音に気づいて、息を呑んだ。大気を震わせる衝撃と、爆発。それが意味する事は、先の戦争で嫌と言う程に分かっている。

まさか、と感じた予感に、ジエイは《ブレードライガー》を反転させる。グロツクとエリサも、戦況の一変を感じ取っていたのだろう、砂塵を逃れた先には、《セイバータイガー》をどうにか振り切った二人の機体もあった。

一行の視線の先に、怖れていた光景が在った。武装を失い、腎部を貫かれた《シールドライガー》が、断末魔の悲鳴を上げて、ゆっくりと崩れ落ちていく。次いで、爆発と炎上。「——隊長オッ！」と、呻くようなグロツクの声が爆ぜた。

コンボイ小隊長が、やられた——眼前に上がった焰に、ジエイは茫然と目を見開き、戦慄した。

⑭ 離散（前）

無風に近い状態だったニザム高地の荒野の気は、徐々に変調していた。時たまブアと強い風が吹いて、乾燥した大地から砂塵を巻き上げる。だがジェイ達は、そんな気候の変化を気に留める余裕などない。眼前で大破し、崩れ落ちた《シールドライガーDCS》の機体――あのスターク・コンボイ少佐が撃墜されたという信じがたい事実が、一行の思考を完全に停止させていた。

「隊長……嘘だ、応答してくれ！」

絶望に狼狽したグロック少尉の声が、ノイズ交じりの無線に空しく木霊する。ジェイに至っては、ただ茫然と焰に包まれるライガーの残骸を見つめる事しかできないでいた。細かな爆発を繰り返し、徐々に原型さえも失っていく、小隊長の《シールドライガー》。その火の子に照らされながら、漆黒の獣型ゾイド《ライトニングサイクス・カスタム》が、勝利の咆哮とでも言うべき力強い雄叫びを上げる。鋭利な見た目に違わぬ、大気を裂くような鋭い咆哮だ。力強さと、それ以上の狡猾さが滲む。

そのコクピットの中で、シルヴィア・ラケーテは愉悦にはにかみながら、呟いた。

「さあ――次はどなたを食べようかしら」

次の獲物を見定めるように、《ライトニングサイクス》がその頭を下げて、威嚇する。臨戦態勢のサイクス――予想だにしない事態に弛緩しきったジェイ達を、「――ジェイ少尉！ グロック少尉！」と引き戻したのは、《ティバイソン》からの通信だった。

「二人とも態勢を立て直ししましよ、後退するんです！」

同時、衝撃が走る。

まだ三機もの《セイバータイガーAT》が健在なのだ、おそらくは敵機の追撃の砲撃が爆ぜて、ライガーの態勢を乱したのだろう。激震に揺られたジェイは、「――逃げる？ ふざけるな！」と喚いたグロックの声を聞いた。

「隊長がやられたんだぞ……それを見捨てて、このまま黙ってやり過

「ごせって言うのかよ！」

「でも……でも！ このままじゃ、みんな殺されちゃいますよう！」

二人が言い合っている合間にも、《セイバータイガー》は着々と迫ってくる。立ち尽くしたジェイの《ブレードライガー》、その後ろ脚に、先陣を切ったセイバーが食らいついた。苦悶の咆哮を上げたライガーの中で、ジェイは必死に冷静さを取り戻そうとする。

エリサが正しい——そう感じた。グロツクの怒りは、痛いほどに分かる。だが、あのコンボイ小隊長さえも数分の間、に撃墜した《ライトニングサイクス》のパイロットに、今の自分達が何を出来るのか——おそらくは、何も出来ない。《ブレードライガー》ならサイクスの性能にも対応できるだろうが、ジェイとシルヴィアの操縦技術には、おそらくは一生を掛けても埋める事の出来ない力量差がある。

「ああ、遊び過ぎたわ……私わたくしの悪い癖ね。まずは『鍵』を、エラを回収する事が、ガースが私に下した御遣いでした。まずは《ブレードライガー》を壊して、それを成し遂げることにしましょう」

シルヴィア・ラケーテの、浮遊感のある声色が聞こえた。

おそらくは意図的に、こちらの通信回線の周波数にあわせて発言したのだろう。それは実質、ジェイに対する宣戦の言葉である。ドツと汗が噴き出して、慌ててシルヴィアの《ライトニングサイクス》へと振り返ったジェイ。すると、サイクスの背後——炎に包まれた死に態の《シルドドライガー》がおもむろに起き上がり、その背中へと飛び掛かるのを見た。

「いい判断だ……アノン少尉」

バチバチと火花の上がる音に混じり聞こえた、小隊長の声。《シルドドライガーDCS》からの通信だった。

「——小隊長っ！」

急くように叫んだグロツクの《シルドドライガー》がコンボイ機に駆け寄ろうとする。それを「——来るなッ！」と、鬼気迫る叫びで塞ぎ止めたコンボイ少佐は、業火に燃えた機体に更なる力を込めて、逃



れようとする《ライトニングサイクス》へと押し掛かる。

コンボイが言った。

「全機、戦線を離脱せよ……生き延びて敵の情報と能力、ここで伝え聞いた、その目的を持ち帰れ。援軍を呼び、必ずや『クロイツ』を殲滅するのだ」

その言を噛み締めて、生き残った三人が立ち尽くす。彼等を追い立てるかのように、「アノン副隊長、君が指揮を！ グロツク少尉は先陣を切り、退路を開け！ ……しんがりは、私が務める！」と指示を出す。コンボイはシルヴィアのサイクスへと思惟を向け直した。

「さあラケーテ、この焰に焼かれて、名誉ある死を迎えるがいい。……私が、共に逝ってやる」

まるでコンボイの執念が具現化したかの如く、《シールドライガーDCS》を包む炎が勢いを増していく。爆炎を上げ徐々に崩壊していきながらも、ライガーは咆哮を上げて《ライトニングサイクス》を抑え付けた。その拘束は、まさに鬼神と呼ぶべき猛々しき、力強さであつたが――、

「ああ……ああ、ああっ！」

恍惚の声を上げたシルヴィア――《ライトニングサイクス・カスタム》が身を振り、ライガーの肩口に『キラーサーベル』で喰らいつくくと――いとも簡単に、その拘束を引き剥がす。

《ライトニングサイクス》が横転したコンボイ機へと逆に喰らい付き、引き摺り回す。その衝撃に耐えられず《シールドライガー》の片足は千切れ、放られた機体が地を跳ねた。

追撃を掛けようと、尚迫るサイクス。瀕死のライガーを覆い被さると、その爪牙で機体を貪る。

「グアアアア！ ウ、グアアア……ッ」

この世の者とは思えぬ、コンボイ少佐の凄惨な叫びが木霊した。《ライトニングサイクス》の爪が、ライガーの装甲をまるでバターのように抉り、踏み砕いていく。砕け散る《シールドライガー》を甚振りながら、シルヴィアは笑った。

「素晴らしい……コンボイ小隊長、貴方の技量、闘争心、執念……ゾイド乗りとして、その全てが素晴らしい。貴方の命を食べれば——私も……『最高のゾイド乗り』に近づけるかもしれない！」

シルヴィアがコンボイに手こずっているこのタイミングが、ジェイ達が生き残る最期のチャンスであった。足の速い《ライトニングサイクス》に本気の追撃を掛けられれば、逃げ切れない。小隊長が文字通り『命を賭して』時間を稼いでくれている今、戦域を離脱しなければならぬ。

「隊長！……隊長オツ！」

「グロツク少尉、行きましよう……今だけは、私の指揮に従ってください！」

サイクスに嬲られる《シールドライガー》から目を離せないグロツクを、エリサが咎める。

グロツクは荒い気性の持ち主であったが——そうである以上に『一流の軍人』でもあった。ここで取るべき行動は、撤退する事——例えば敬愛する指揮官を見殺しにすることになっても、それが軍の今後に繋がる選択だと、彼は知っていた。

慟哭の雄叫びを上げながら、グロツク少尉は機首を反転させて、撤退行動を開始する。

ジェイもまた、エリサに従った。「アノン少尉は先に行け。重装の《ディバイソン》は加速が悪い。軌道に乗るまで、俺が《セイバータイガーAT》共を引き付けて、時間を稼ぐ！」と、《ブレードライガー》を、迫りくる《セイバータイガー》軍団へと向ける。

三機のセイバーATは既にジェイ達の撤退行動を見越し、追撃に移っていた。得意の暴風陣形を組みながら《ディバイソン》と《シールドライガー》を追いかけようとするそれに、ジェイは牽制の『パルスレーザーガン』を連射する。

攻撃に気づいた《セイバータイガー》連隊は、その機種を一転し、《ブレードライガー》へと向けた。挑発に乗ってくれたらしい、これでグ

ロックとエリサが後退する時間は稼げる。二人が撤退する目途が立てば、《ブレードライガー》の機動力でセイバー達を振り切れる、そう考えたジェイだったが――、

「う、……何イ!？」

《セイバータイガー》達はジェイの射撃を巧みに躲し、一気に距離を詰めて来た。三機のタイガーが一齐に跳躍し、『キラースーベル』や『ストライククロウ』による攻撃態勢に入る。咄嗟に機体を屈めさせたジェイだったが、躲しきれていない。すれ違い様、ライガーの肩口と頬を損傷させたタイガーは、再び疾走を駆けて距離を取る。巧みな連係による一撃離脱戦法――『タイガーライダー』の術中にはまりかけていた。

「完璧な連携……どうして？ 生体チャフによる電波障害は、タイガー達にも影響を与えているはずなのに！」

ジェイの苦戦に気づいて、思わず機体を立ち止まらせたエリサ。戦場からある程度の距離を取れた彼女は、《デイバイソン》のモニター越し、戦場の端で戦いを見守るもう一機の《セイバータイガー》に気が付いた。

シルヴィアが率いた隊の、最期の一機――改造機《パラボラセイバー》が、その背に背負った巨大な電波塔を、まるで巨大な触覚の如く伸縮させている。

その姿で合点が行った。《パラボラセイバー》が、帝国側の通信環境を整えているのだ。おそらくはチャフの影響を受け難い独自の通信回線を構築し、《セイバータイガーAT》達の連携を補助しているのであらう。

「――COMBAT、スタンバイ！」

《デイバイソン》の火器管制システムを起動させると、遠方の《パラボラセイバー》へと照準を合わせる。『十七連突撃砲』の全砲身がその機影を捉えると、エリサは躊躇なくトリガーを引いた。大気を震わせる轟音と共に砲弾の雨が吐き出されて、改造セイバーへと降り注ぐ。《デイバイソン》の猛砲撃が《パラボラセイバー》を捉え、その背に背負った通信ユニットと『生体チャフ噴射装置』を焼き払った。自身の

全高の倍は有ろう巨大な電波塔が焼け落ち、崩れて来るのを見上げて、改造セイバーは断末魔の咆哮を上げた。

「——いよし、今だッ！」

《パラボラセイバー》の撃沈に気を取られ、《セイバータイガーAT》の連携に微かな隙が乗じた。ジェイはその微かなタイミングを見逃さず、《ブレードライガー》に疾走を促す。『レーザーブレード』を展開し、連携の中心を担っていた最前のセイバーへと斬りかかる。ブースター全開、一気に最高速まで高められた《ブレードライガー》の突貫に、《セイバータイガーAT》は文字通り両断されて、爆散した。

(これでいい……これで後は、後退するだけで——)

ジェイが安堵しかけたその時だった。《パラボラセイバー》によるチャフの供給が途絶えたせいで、幾分か通信状態が好転したのだろう——あまりにも鮮明なコンボイ小隊長の断末魔が、無線越しに弾けて、ジェイは振り返る。

「アハハ、アハハハハッ！」

視界の先、散々に痛めつけられてボロ雑巾のようになった《シールドライガーDCS》が転がっていた。それに、狂気的な高笑いを上げながらシルヴィアの《ライトニングサイクス・カスタム》が『パルスレーザーライフル』の砲塔を向ける。既に微動だにしない《シールドライガー》に、何発も何発も——執拗な程に、砲撃を重ねていく。

最早焰さえ上がらぬ燃え滓、黒焦げの鉄塊へと変わってしまったシールド。その頭部、コクピットブロックは集中砲火で完全に碎け散り、無くなっていた——今度こそ、コンボイ小隊長は死んだ。

「う、ウワアアア、ワアア……ッ」

原型さえ判別できぬ残骸と化したコンボイ機を見つめながら、ジェイは絶望に喘いだ。《ライトニングサイクス》が、ゆっくりと頭を《ブレードライガー》へと向ける。次の獲物として、ジェイが見定められたその時だった。

「ジェ…尉、——、……ジェイ少——尉っ！」

ノイズ交じりのエリサの声が、機内に木霊する。

チャフの滞留は減っていたはずなのに、再び電波が乱れ始めていた。それだけではない。計器の類が全て、滅茶苦茶な方向を指し示している。

事態が理解できず呆けていたジエイは、後部座席、「——あれ！」と声を上げたエラの声で我に返った。

少女の指差す方向——キャノピーの向こう側には、先の攻撃で自身の通信ユニットの下敷きになった《パラボラセイバー》が蹲っていた。その背後から、まるで巨大な砂のカーテンの如き黄土色の波が舞い上がり、刹那の内に《パラボラセイバー》を飲み込んでいく。ツ巻き上げられたセイバーの機体は暴風域の中で火花を上げて爆散し、熱砂の中の不純物と変わる。

轟と音を上げて進んでくる、巨大な大気の波——『サンドストーム砂嵐』が、目の前まで迫っていた。

「早——こっちに！ ジエイ、逃げて！」

エリサの呼びかけが爆ぜる中、ジエイは無我夢中でライガーのアクセルペダルを踏み込んだ。

⑮ 離散（後）

——ZAC2100年

どれくらい時間が流れたのだろうか。

数時間程度の逃走か、それとも数日か——無我夢中で駆け抜けたジエイに、時間の感覚は無かった。突如現れた砂サンドストーム嵐に巻き込まれかけながら、必死で走り続けたのだ。悪天の生み出す磁気の乱れに、無線も計器の類も役には立たず——いつの間にかエリサとも、グロツク少尉ともはぐれてしまった。二人の事は気がかりだったが、それよりも大きな感情——『恐怖』がジエイを突き動かし、終わりの無い逃走へと駆り立てた。

気が付くと、ジエイの《ブレードライガー》は、鬱蒼とした森の中を、ただ一機で彷徨っていた。

ミューズの森を彷彿とさせる一面が高木で覆われた光景は、ニザム高地の荒涼とした風景とは似ても似つかない。どれだけの道のりを越えて逃げおおせて来たのか、それだけでも察する事が出来た。

草木を掻き分ける《ブレードライガー》の駆動音だけが響く。木々の合間より微かに零れた陽の光は朱色で、今が夕暮れ時である事を教えてくれる。荒い息のまま疾走を続けたコクピットの中は湿気が籠もり、蒸し暑い。ライガーのコクピットの中に幽閉されたかのような錯覚さえ覚える息苦しさ——発狂しそうな鬱屈に堪えていたジエイだったが、

——不意に、視界が開ける。

密林の切れ間に広がる、青い湖。斜陽の光を浴びてキラキラと反射するそれが、ジエイの忍耐を揺さぶった。逃走劇を続けて随分経つが、『クロイツ』の追手が来ている様子も無い。張りつめた緊張の糸が、プツリと切れた気がした。

「ああ——、ああ——」

ジエイが息苦しさに喘ぐと同時、ガクンと《ブレードライガー》の

機体が傾く。砂塵の影響で防塵フィルターが詰まり、機能不全を起こしたのだろうか——まるでジェイにシンクロして、ライガーもまた力尽きたかのように思えた。

夢中でキャノピーを開けたジェイ。青臭い、新鮮な空気が肺を満たすと、一層の開放感を求めて機体を降りようとする。平静を失ったジェイは、足を滑らせてコクピットから転げ落ちた。

「——アー！」

グラと揺れた躰が装甲を滑り落ちようとした時、ジェイの腕を冷えた体温が掴み取る。ガツと支えられた衝撃で肩を痛めながら、ジェイはゆっくりと面を上げた。見るとライガーの後部座席より、咄嗟に手を伸ばしたエラが、ジェイの腕を支えてくれている。彼女を同乗させていたのをすっかりと忘れていたジェイは、数秒呆けた。

怠慢な夜が、ゆっくりと訪れる。

月光にキラと輝く湖畔、そこから吹く涼しげな風を浴びながら、ジェイとエラはここで一晚を超す事に決めた。『クロイツ』の襲撃で補給物資を積んだ《グスタフ》を潰されたのだ、《ブレードライガー》に残る燃料は少ない。計器はイカれて今どこにいるかも分からない状況だ、単機で共和国の勢力圏まで帰還できる保障がない以上、下手に動き回る気にはなれなかった。

「コンボイ、は——死んでしまったのね」

沈黙の中、ふと——携帯コンロの乏しい焰に照らされた黒髪の少女が、ポツリと呟く。

無言を貫いていたジェイは、その言葉に面を上げた。砂塵の中で《ライトニングサイクス・カスタム》に撃ちぬかれる、小隊長の機体。その姿が脳裏に蘇り、ギリと奥歯を噛むと、「そんな、突き放した言い方をするなよ。小隊長は、俺達を——いや、君を守るために散って行ったのに」と、俯いてごちる

小隊長は死んだ。

クーバ軍曹もモラレス曹長も——そして『クロイツ』の襲撃前に音信普通となった傭兵ツヴァインも、おそらくは殺されてしまったのだ

ろう。この場に居ないエリサとグロツクは、無事だろうか。やるせない思いが、ふつつつと沸いた。

落ち着かないジエイだったが、不意にエラが面を上げて、こちらを見つめている事に気づき、目を丸める。少しの間、迷った風に瞳を伏せたエラだったが――やがてジエイを見つめ直すと、

「ガイロスに捕まる前は、爺様と兄様と、三人で住んでいたの。兄様とは随分と年が離れていて、大事にされていたわ――コンボイ、が、そうしてくれようように」

と、静かに語り出した。

「……君の、素性か？」

驚いたジエイ。コクリと頷くと、エラは続ける。

「でも、ガイロスがエウロペに来てから、変わってしまった。爺様は殺されて、私も兄様も、ニクシーの研究所に幽閉された。たくさんエウロペ人が集められて、帝国の作るゾイド技術の実験に使われて、死んだ……もうずいぶんと会っていないけれど、きつと兄様も、もう生きてはいないでしょうね」

エラの言葉には感慨は有れど、それを憂う気持ちは感じられなかった。半ば諦めきったような物言いで、静かに頭を振る少女。「分からないじゃないか。君がここまで生き残れたように、お兄さんだって、どこかで生きているかもしれない」と、ジエイが慰めを言うと、

「分かるわ。死んだのよ、コンボイや、フジヨウ博士のように。私の傍に居る人は、皆死んでいく」

「じゃあ次は、俺が死ぬのか」

「……かもしれない」

ジエイはエラの言葉を否定しなかった。彼女と関わったから、などと言う事は関係なく、今のジエイは十分に、『死の瀬戸際』に立っていると言えたから。

——※※※——

「シルヴィア・ラケーテは、まだ戻らんのか？ 来たる『エックス・デ



イ』を前に、ヤツは今、何をしている!？」

怒りを抑えきれず、レンツ・メルダース中尉は声を荒げた。格納庫に並び立った『クロイツ』の残存機体達。いずれもメイン動力炉に火が入り、出撃の準備が整っていた。

無論、メルダース中尉の《ジエノザウラー》——『魔装』を施し終えて完成した、漆黒の《ジエノブレイカー・零式》も。

六機の『ハイマニューバスター』と、巨大な楕円形の大盾『フリーラウンドシールド』、そして盾に内蔵された鋏状の武器『エクスブレイカー』からなる大型バックパックを備えた機体は、最早恐竜型金属生命体のシルエットから大きく外れた、異形の怪物に見える。ガイロス帝国が先に完成させた、最強ゾイドの一角《ジエノブレイカー》——『クロイツ』はそれを、各基地より回収した予備部品と、代替品となり得る既存量産機のパーツを用いて再現したのだ。

既に、『クロイツ』の決起を表明出来るだけの戦力は整っている——ただ一つ、ガース・クロイツ少佐が切り札と信じる巨大ゾイド・『超越者』<sup>イモータル</sup>を除いて。

メルダース中尉の任を引き継いで、『超越者』<sup>イモータル</sup>起動の鍵たる資産を捜索しに出たシルヴィア・ラケーテ少尉の部隊だが、未だ音信が無い。道中砂<sup>サンドストーム</sup>嵐が観測されたとは言いが——それを加味しても、不在期間が長すぎる。いらいらと地団太を踏むレンツだったが、

「——ラケーテ少尉を待つ必要はない。メルダース中尉よ、そなたは『クロイツ』を率いてニクシーへ迎え」

と、背後より掛けられた声に平静を取り戻し、振り返る。

暗闇の中、未だ起動する気配の無い大型の節足動物型機動兵器・『超越者』<sup>イモータル</sup>。その足元で、ガース・クロイツ少佐が血の気の引いた顔で佇んでいた。

「主君……軍を率いるのは、貴方でなければならぬ。私はその僕として、傍に寄り添うのみ」

淡々と答えて膝間づき、頭を垂れたレンツに、「ならぬ」と頭を振ったガース。

「私はこれより手勢を率い、イモータル『鍵』を取り戻してから、ニクシーに赴く。だが、我らの再起を意味する狼煙は、ガイロス本国軍のニクシー攻撃と同時に掲げなければ意味が無い。遅れて参じる事となる。このガース・クロイツに代わり、そなたが証明するのだ……エウロペのガイロス軍・『騎士団』クロイツ此処にあり、とな」

「——馬鹿な！『鍵』の行方は未だ知れない、我武者羅に探し回った所で、とても間に合うまい。未だ微睡むイモータル超越者……《アスステインガー》の事は諦めて、潔く我らと、ニクシーを目指すべきではないか、マイスター主君よ！」

苛立ったレンツは、つい礼節を忘れて、主君たるガースに叫んでいた。

「……我武者羅に、ではない。レンツよ」

そう応えて、ガース・クロイツは自らの右腕を差し出すや、袖をまくって自らに施された『処置』を見せる。彼の腕には幾つかの注射痕と、そしてその僅か上に、キラと輝く藍色の金属編が埋め込まれていた。何を意味するか、レンツには直ぐに分かった。

「……『パイロット・デザイン』を？ フジヨウ博士抜きの技術団の処置で、イモータル超越者のゾイド因子を自らに移植したと？」

驚愕するレンツに無言で頷くや、「成功したとは言い難いな。既に我が精神は、狂戦士の思惟に侵され始めておる」と、荒い息を吐くガース。

「だが——今の私には分かる、見つけられる。イモータル超越者の片割れたる『鍵』の息遣いが聞こえるのだ。ニクシーの勝利だけではない、人の手による制御を為し、『帝国の剣』として完成した真オーガノイドを手土産に、我らは帝国へ帰還する——それが『クロイツ』の得る完全勝利、完全勝利以外、我らの目指す者は無い」

ガース・クロイツは、それ以上の問答を望まなかった。

クルと踵を返した彼の先には、愛機たる《アイアンコング・マニユールバカスタム》と、その指揮下に入る《レブラプター》《レッドホーン》、そして《サイカーチス》の混成部隊。合計十機、戦闘ゾイド一個小隊分の戦力が、出撃準備を済ませて待機している。

「手勢はこれだけあればよい。残りの機体は全て、レンツ・メルダース中尉の指揮の元、ニクシーへと向かうのだ」

言葉少なに命令を下すと、ガースは《アイアンコング》へと乗り込んで、出撃を駆ける。

モニター越し、口元を真一文字に結んだメルダース中尉が敬礼しているのを見つけて、ガースもまたそれを返した。その表情は未だガースの決断に納得している風ではなかったが——彼はやってくれる、という確信がある。レンツ・メルダースは決して『クロイツ』の期待を裏切ったりはしない。西方大陸着任から今日に至るまで、ガースが彼を副官として重用したのは、その愚直なまでの忠誠心を買っていたからでもある。

「いよいよだ。いよいよ……」

無意識にそうごちたガースは、格納庫の奥底で眠る、超越者<sup>イモータル</sup>へと目を凝らした。深淵に溶けたかの者の機体<sup>からだ</sup>、その頭部に備えられた複眼がキラと、怪しく輝いて見えた。

①6 焦燥

その日の夜は、眠れなかった。

深夜、月明かりに映える水面を眺めながら、ジエイはボヤと感慨に耽る。これからどうすべきかを考えなければならぬ。砂嵐サンドストームにやられた通信機器の復旧を試してはいるが、進展はなかった。食料は携帯用のレーションのみで、水の残りも少ない——軍の搜索隊を待ち続けていたのでは、持たないだろう。

「軍に戻るの？ まだ、戦えるの？」

不意に掛けられた問いかけに、振り返る。

毛布にくるまったエラがジッと、彼の背を見つめていた。光を灯さない灰色の片目も、真つ直ぐにジエイの貌を捉えている。数秒の間の後、「俺はヘリックの軍人だ。このまま逃げたりなんかしない。隊に復帰して、『クロイツ』を倒す。コンボイ小隊長の仇を取るんだ」と強がったジエイだったが、

「——嘘」

と、エラは断じた。

「嘘よ。コンボイが死んだ時、貴方、泣いていたもの」

「——ッ」

澄んだエラの瞳を前に、ジエイの息は詰まり、何も言えなくなった。

同時、ふと旋風つむじが吹き、二人の上空を黒い影が横切る。静寂を割いた巨大な影、微かに貌る金属油の臭いに、ジエイもエラも、ハタと面を上げた。バリバリと轟音を上げて吹いた旋風の正体は、小型の戦闘ヘリ型ゾイド《サイカーチス》。サーチライトを地上に向けて低空飛行するそれは、まるで何かを探しているかのように見えた。

「ッ、伏せろ！」

咄嗟にエラへと駆け寄り、身を屈めたジエイは——次いで遠方で爆ぜた爆発に目を剥いた。

グイと爆発の方へと機首を振った《サイカーチス》が、ゆつくりと移動していく。その浮力で並みだった湖畔の飛沫を浴びながら、

「……『クロイツ』の捜索隊だ」と一人ごちたジェイは、『ブレードライガー』のкокピットへと振り返る。

「どうするつもり？ ジェイ少尉」

ジェイの判断を看取ったのだろう——起き上がったエラが、すかさず彼を呼び止める。

「決まってる……あの爆発は、多分共和国軍が『クロイツ』連中と戦っているんだ。もしかしたら先に逸れたグロツクと、アノン少尉かもしれない。助けに行かなくちゃ」

幸い、遠方の爆発に気を取られた『サイカーチス』のパイロットは、夜闇に紛れたジェイの『ブレードライガー』を発見できなかつたらしい。戦闘ヘリ型ゾイドの低空飛行なら、超高速戦闘ゾイド『ブレードライガー』の速力で、十分に追跡できる。

「……逃げればいいのに。軍も、私のことも置いて行つてき……貴方きつと、この仕事向いてないよ」

ライガーのкокピットキャノピーを開けたジェイに、エラはどこか寂しげな瞳を向けた。問答に納得していない事は、すぐに分かる。

「……子供が、知った風な口を利くな」と断じるや、立ち尽くした彼女に手を差し伸べるジェイ。

「エラ……っ、俺は泣いてなんかいない。もう眼の前で、誰も死なせるものか。アノン少尉も、グロツクも——君だつて守つて見せるんだ。だからついて来い。皆で、『クロイツ』を倒すんだよ」

問答の中で揺さぶられた自身の心にも言い聞かせるかのように、ジェイ・ベックは声を荒げた。エラは何も答えなかつたが——やがて観念したかのように目を伏せると、差し出されたジェイの手を取つて、кокピットに乗り込んだ。

動力に火を入れて、ジェイ・ベックは『ブレードライガー』を駆けさせる。逸る気持ちは、『クロイツ』に襲撃されているであろう仲間を救いたい、という一心だけではない。エリサやグロツクと合流する事が出来れば、この森で遭難したままのたれ死ぬかもしれない、という不安感も、払拭できる気がしたからだ。そのためには、エラに宣誓し

た通り、誰も殺させないという決意を完遂する必要がある。

最高速まで加速して、『ブレードライガー』は空を往く『サイカーチス』を追いながら、狼煙の如く上がった爆発の根本を目指した。熱源センサーに引っかけたのだろうか、道中慌てて反転した『サイカーチス』が、『ブレードライガー』へとサーチライトを当てたが、  
「……遅いッ！」

宇宙で静止した『サイカーチス』は、ジェイ機の撃ち放った『パルスレーザーガン』を躲す事が出来なかった。連射された半身を光弾に撃ちぬかれて、グラと傾いた『サイカーチス』——そのまま頭から木々の中へと墜落し、砕け散った。

——疾走する事、数分。

行き着いた先は、朽ち果てた古代遺跡であった。幾年も前に放棄されたのであろう、木々に覆われた巨大な石の城。ジェイが駆けつけた時には、『クロイツ』の砲撃の余波に巻き込まれ、あちこちが炎上・崩壊している。

散乱する瓦礫の中には、比較的真新しい金属壊も混じっていた。帝国ゾイド『レブラプター』の残骸——その先には二体の共和国ゾイドが、まるで互いを庇いあうかのように背中合わせになって、包囲陣形を組んだ帝国ゾイド軍団に相対している。

二機の姿を一目見て、ジェイは確信した。

「アノン少尉の『デイバイソン』に、グロック少尉の『シールドライガー』！ 二人とも、無事だったか！」

高揚を露わにして通信機越しに叫ぶと、（ジ——、ベック少尉……？）と、どこか戸惑った風の、エリサの声が返ってくる。「そうだよ」と頷いて、ジェイは二人の機体に目を凝らした。どちらも被弾してはいるが、戦えない程の状況ではない。が、遺跡の建造物を背にした両機は、辺りを『クロイツ』のゾイド達に囲まれて、脱出できないでいる。

敵の数は、7、8機——うち2機が『レッドホーン』、そして1機が指揮官機と思われる『アイアンコング・マニューバ』、残りは小型機『レ

ブラプター』だ。

『エネルギーシールド』を持つグロツクに比べて、エリサのデイバイソンは消耗しているように見えた。グイと機体を前進させて、ジェイは彼女に呼びかける。

「待つてろ、今助ける。このくらの数の、『ブレードライガー』で——」  
言い終える前、ババ、と乾いた音が無い、衝撃が機体を揺さぶった。機銃の掃射、空からの一撃だ。煩わしそうに頭を振って、ジェイが上空を仰ぎ見ると——先に沈めたのと同型の小型戦闘ヘリタイプ・『サイカーチス』が、ライガーの頭上で揺れている。「クソ……もう一機いたのか」とごちたジェイは、次いでブンと剛腕を振るい、配下の機体達をまくし立てる『アイアンコング』の姿に気づいた。

コングの号令に合わせて、『レッドホーン』と『レブラプター』の大半がエリサ達への包围を解き、ジェイの『ブレードライガー』へと振り返る。あからさま、敵の注意がジェイへと集中していた。

突っ込むつもりではいたが、こうもあからさまに大勢の相手をする事になるとは、さすがに思わなかった。想定しえぬ事態にゴクリと生唾を呑んだジェイだったが——「好都合だ、ベック！」と、昂ったグロツクの声が弾けて、我に返る。

「しっかりと、雑魚共を引き付けてろ！ こつちが包围を突破できたら合流して、お前をフォローしてやる、それまで持たせろ！」  
「……ッ、分かった」

コンマ数秒の思案で、ジェイは頷いた。予期せぬ形ではあったものの、これでエリサとグロツクを阻むのは、指揮官機の『アイアンコング・マニニューバ』だけになった。『ゾイドゴジュラス』に匹敵する重装甲・高火力の強力な機体だが、二機がかりなら抑え込むことだって可能はずだ。二人の命の危機は、大幅に解消されたと思った。ならば——残りの敵機は、『ブレードライガー』のパワーでしのぎ切る。

「よし……行くぞエラ、しっかりと掴まってる！」

ライガーを力強く始動させたジェイの胸中は、驚く程穏やかだった。コンボイ小隊長の時は、何もできないまま彼の敗北を見守ったが、今度は違う——自分が来ることでエリサとグロツク、二人の仲間

を救えたと、確信したから。

「ベック少尉……っ」

モニターの端で激しく立ち込める粉塵を見つめながら、エリサ・アノン少尉はその名を呟いた。群がる《レブラプター》達に喰らい付いては放り投げ、《レッドホーン》より爆ぜた火線を浴びては煩わしそうに身を振る、ジェイの《ブレードライガー》。『オーガノイドシステム』搭載の次世代機とはいえ、多勢に無勢だ。それなのに、ベック機は一步も引かず、果敢にガイロスのゾイド軍団と立ち回っている。

居ても立っても居られなくなり、「……ベック少尉、私——ッ」と、ジェイ機の方へと機首を向けた、エリサの《デイバイソン》だったが、「馬鹿な女が……アノン、集中しろ！」

と、煩わしそうに唸ったグロック、彼の《シールドライガー》が、エリサの進路を遮る。

「生き残るために、此処までやってきたんだろうが……今は俺と共に、《アイアンコング》と戦え。お前の気まぐれに付き合わされてくたばるのは御免だ、俺はコンボイ小隊長のように、死ぬ気はない！」

《シールドライガー》が一声吼えると、立ちはだかった《アイアンコング》へと突貫を掛ける。「奴の重装甲を抜くには、お前の『十七門砲』が不可欠だ。俺が引き付ける、隙を見つけて、そこを撃て……いいなあ!？」と、グロックが一息にまくし立てると——「……了解」と、エリサは歯切れ悪く応えた。

エリサの戸惑いを、グロックはさして気に留めなかった。彼女が要求通りの行動をしたとしても、もしくはできなかつたとしても——彼は自分の攻撃だけでコングを倒さんと言う意気込みの元、挑みかかっていた。

クワと牙を剥いて、《シールドライガー》が《アイアンコング・マニューバ》の懐目掛けて飛び込んでいく。背に増設された大型の補助ユニット『ハイマニューバスラスタター』から高熱を吹きあげて、それを横滑りで躲した《アイアンコング》。すぐさま追撃を掛けようと身を翻した《シールドライガー》だったが、その顔面目がけて、大槌と



も見紛うコングの前腕『アイアンハンマーナックル』が炸裂した。乱暴に薙がれた裏拳がライガーの下顎を千切り飛ばし、二本の『レーザーサーベル』を粉々に砕く。

「ゲアアア……っ」

衝撃に呻いたグロツク。怯んだ彼の乗機を乱暴に掴み取ると、今度は土手っ腹目がけてコングの『ハンマーナックル』が捻じ込まれた。メリメリと軋みを上げながら弾け飛んだ、《シールドライガー》の機体。宙空を舞い——やがて密林に佇む遺構の中に激突する。土煙を上げて崩落する瓦礫の中に捲かれて、グロツク機は完全に沈黙した。

グロツクと《アイアンコング・マニユーバ》の攻防は、ほんの二分にも満たないうちに決着したが——それはエリサ・アノンが再起を決意するには十分な時間であった。《シールドライガー》との白兵戦に思惟を割いた《アイアンコング》の注意は、その間完全に《デイバイソン》から外れていた。

「ッ、当たって……っ！」

グロツク機が吹っ飛ばされ、砲撃の余波に巻き込まれる事が無いのを確信すると、エリサは『十七連突撃砲』のトリガーを引く。《デイバイソン》の背から立ち並ぶ重砲の束が、ボツ、と轟音を上げて弾けると、閃光が《アイアンコング》を包み込んだ。爆発、そして閃光。コングの上半身が紅蓮の炎に吞まれ、よろよると立ち眩む。

朦々と炎上する《アイアンコング・マニユーバ》の姿を見て、エリサは敵機の沈黙を確信した。「……っ、ジェイ少尉」と、もう一度一人ごちたエリサは、機体を《ブレードライガー》の方へと反転させる。

——あの日。

敗走の中で狂乱したジェイは気づかなかつたが——『クロイツ』の高速戦闘ゾイド部隊に襲われ、サンドストーム砂嵐によって一行が離散してから、既に五日の時が過ぎていた。それはエリサが、しんがりを務めたジェイ・ベックの生存を諦めるに、十分過ぎる時間だったのである。

だから——彼が再び目の前に現れて、エリサは一瞬、動転した。

エリサ・アノンは急いでいた。抱えていた、とある憂いを和らげるために、一刻も早くジェイ・ベックと言葉を交わす必要が、彼女には在った。そしてその焦りが、混乱の戦場の中で命綱と成り得る『残心』を、エリサから欠かせることとなった。

大型ゾイドらしい重厚な呻り声が響くと、猛煙を掻き分けて《アイアンコング》が飛び出した。『十七門砲』の直撃を受け、『マニニューバ スラスター』と肩に備えた主砲『六連ミサイルランチャー』は爆損し、右半身の装甲は打ち砕かれ、フレームが剥き出しになっている。

しかしコングの闘争心は萎えるどころか、一層の昂りを見せていた。胸部装甲を激しく打ち鳴らし、背を向けた《テイバイソン》に向け、恐ろしいまでの俊敏性で飛び掛かる。

完全に虚を突かれる格好になったエリサは、声にならない悲鳴を上げた。振り返った《テイバイソン》の二本角を掴み取ると、《アイアンコング》はそこを支点に力づくで引き倒す。横転した機体を足蹴にして動きを封じると、渾身の『アイアンハンマーナックル』をその頬目掛けて叩き込んだ。

鉄拳は《テイバイソン》の頬に備えられた『八連ミサイルポッド』を粉碎し、誘爆させた。コクピットにほど近い部分の火器が暴発し、制御回路を伝ってコクピットまで損傷を拡げる。メリメリと鋭い音を上げ一瞬の内に爆ぜた業火。狭いコクピット内で、それを避ける手立てなど無く——立ち上る紅蓮が、エリサの右腕から肩口までを焼き払った。

「う——ッ、あああああつ！」

まるで指先から肩までを一息に裂き広げられたかのような苦痛に、エリサは絶叫した。

モニターが死んで行っているのか、それとも遠のいていく意識がそうさせるのか——暗転し霞む視界の中で、エリサは必死に焦れた姿を探した。倒れ伏し、傾いたコクピットが作る、傾いた地平——その先では、ジェイ・ベックの《ブレードライガー》が尚も、帝国の戦闘機械獣達とせめぎ合っていた。

⑰ 慟哭

「ぬうんうおおおー！」

渾身の気迫が、叫ばれる。

獲物に群がるハイエナの如き執拗さで喰らい付いてくる《レブラプター》達を、ジエイの《ブレードライガー》は強引に引き剥がし、逆に追い立てた。ある機体を臂力の籠もった爪の殴打で踏み砕き、またある機体には体軀の差を生かした体当たりを見舞って、叩き潰す。

敵は地上だけではない。直後、真上から急降下した《サイカーチス》が機銃を掃射し、背部バーニアを撃ち抜いたが——激震に見舞われても、それでジエイの闘争心が折れる事は無かった。機体を翻して『パルスレーザー』を展開、コンマ数秒のうちに照準を定めると、すぐさま反撃の一撃を撃ち放つ。恐ろしい程正確に、銃撃は《サイカーチス》の頭部ユニットを撃ち抜いた。機首を失って蚊トンボの如くふらつた《サイカーチス》は、そのまま頭から地表に激突し、爆散する。

ジエイ・ベックの戦いぶりは、まさに『獅子奮迅』と形容するに相応しかった。

（死なせるものか——守るんだ、エリサもグロックも、これ以上仲間を見送るのは……もう、たくさんだ！）

ジエイの脳裏を占めるのは、クーバとモラレス、ツヴァイン、そしてコンボイ小隊長——共にニクシー基地を出た同胞達、目の前で死んでいった仲間達の姿だった。傍らで共に戦っていながら、彼等を守れなかったという後悔。それがジエイに、一層の力を与える。

《ブレードライガー》もまた、そんなジエイの全霊に応えるかの如く、猛々しく吠える。百獣の王の如き轟咆に怖じけた二機の《レッドホーン》。動きの鈍ったそれらの懐へと一足飛びで飛び込んだライガーは、『レーザーブレード』を展開し、すれ違い様、二機の体をまとめて両断した。

一機は二本の脚を断ち切られ、苦悶の声を上げながら倒れ込む。そしてもう一機は、光刃が胴体までめり込み、文字通り両断された。断末魔の悲鳴すら上げる間も無く、破断されたゾイドコアが暴走し、爆

炎へと腫れ上がる。

『クロイツ』の展開したジェイ・ベックへの包囲陣は、崩壊寸前だった。既に半分以上の機体が半壊、または撃墜され、残存機もまた鬼神の如き《ブレードライガー》に怖気づいて、動けないでいる。ライガーの損傷もかなり蓄積されていたが、ジェイは確かに、この戦いの中で希望を見出しかけていた。

——その時だった。

「……そこまでだ」

スピーカーより、ノイズ交じりの声が聞こえた。

暗く深い、壮年男性の声。次いでザリと鉄塊を引き摺る音が聞こえて、ジェイは機体を反転させる。怖気づいた《レブラプター》の群れを掻き分けて現れたのは、焼け焦げた一機の《アイアンコング》。背負った主砲も、『ハイマニューバスター』も失い、また全身の装甲を砕かれ、焼け焦げたフレームを露出させたその姿は、まるでゾンビのようにも見えた。

そして、満身創痍の《アイアンコング》が牽き回した鉄の塊——それに気づいて、ジェイの顔面は蒼白となる。

「そんな……アノン少尉っ！」

コングが掴み取って持ち上げてみせたのは、まるでボロ雑巾の如く全身を引きちぎられた、エリサ・アノン少尉の《デイバイソン》の姿だった。完全に破壊され微動だにしないそれを目にしたジェイは、酷く取り乱す。《デイバイソン》の頭部——コクピットにほど近い部分<sup>が</sup>、大きく損傷していたからだ。

「……我はガイロス帝国軍、ガース・クロイツ少佐だ」

再び通信が入り、あの男の声が弾ける。発信元は確認するまでもなく、眼前に立ちはだかった《アイアンコング》。ガース・クロイツ——男が名乗ったのは、先に遭遇した『クロイツ』の騎士から聞いた、賊軍の首魁の名前だった。

「《ブレードライガー》のパイロットよ。矛を納め、『超越者』<sup>イモータル</sup>の鍵を渡せ——《デイバイソン》のパイロットは、まだ生きているぞ！」

ジェイの眼前に見せびらかすように、《アイアンコング》は《ディバイソン》の亡骸を揺すって見せる。糸の切れた傀儡のように力無く揺れたそれから、バチバチと火花が爆ぜると、堪えきれなくなつて、「ああ、やめろオー！」と喚いたジェイ。

直後、「ウウ……ウヴツ！」と、苦しそうに呻くエラの声が聞こえた。「っ、エラ……？」

戸惑い振り返つたジェイは、ガチガチと歯を鳴らして痙攣する、青ざめた少女の顔を見た。まるで精気を失つたかのような、たがの外れた表情を剥いたエラは、「気持ち悪い……あのゾイドには、私が乗っている！」と、荒い息で叫ぶ。

(どういふんだ……何が起きている!?)

戸惑つたジェイは次いでライガーを襲つた衝撃に嗚咽を上げた。《アイアンコング》の出現に戸惑つて動きを止めた《ブレードライガー》に、残つた《レブラプター》達が一齐に群がったのだ。押さえつけられて、地べたを這つたジェイの機体。それを前に、『クロイツ』の技術の粋が生み出した、<sup>イモータル</sup>超越者の分身・エラよ。貴様を見つけ出すため、私はその命さえ捨てる意気を持って、ここへきた」と、ガースは語る。

「エラをよこせ……ヘリックを滅ぼすための『クロイツの剣』、なんとかしてでもここで取り戻す——わが命に代えても」

「ヘリックを滅ぼすためか。まだ殺したりないか……戦争を、し足りないのか」

ギリと奥歯を噛んだジェイに、クロイツの首魁は淡々と応じた。

「ガイロスがヘリック共和国に敗れる事など有り得ぬ……あつてはならぬ。エウロペでの敗北は、貴様らの不遜が見せた、仮初めの光景。その幻を吹き消すためなら、我ら『クロイツ』の兵達は、喜んでその命を捧げようぞ」

「くっ——意味が、分からねえよ！」

分からない事が多すぎる——葛藤して、ジェイは声を荒げる。

「自分の命を捨てても良いというか？ そうまでして戦争を続けて……それで母国を勝たせて、お前はどうなる！ 帝国が勝つても、そ

ここにお前はいない……自分の世界を守るために戦った挙句、そこに自分が残らなければ、本末転倒じゃないか」

ジェイの激発に、『クロイツ』の首魁は返答しない。その反応に苛立って、ジェイはさらに吼えた。無理やりに《ブレードライガー》を起き上がらせると、自身を拘束する《レブラプター》の一機を引き剥がして打ちのめし、その頭部を踏み潰す。

「ようやっと、エウロペでの戦いは終わったのに！　これ以上、皆が傷つかなくても良い時が来たと思ったのに……お前達が足掻いたせいで、何人死んだ？　モラレス、コンボイ小隊長、それだけじゃない、お前に従って戦ったガイロスの兵士だって、こうやって死んでいるんだ——見ろ！」

粉々に砕けた《レブラプター》の頭蓋から、どす黒い機械油が血潮の如く散る。痙攣する残骸を足蹴にして、ジェイは真っ直ぐ《アイアンコング》の機体を見据え返した。真正面から叩き込んだ思惟、それが『クロイツ』の首魁を挫くと、ジェイは信じていた。

——だが。

「……貴様は、何を言っている？」

冷淡な風を醸したガース・クロイツの声色に、ジェイはビクと怖じた。同時、静止していた《アイアンコング》が不意に起動して、エリサの《ティバイソン》を持ち上げると、それを力任せに地べたへと叩きつける。地響きとともに砕け散る機体に目を剥いたジェイは、「ああ、エリサ！」と絶叫した。

ガースは、続ける。

「——逆に、貴官に問おう。軍人が『国のため』という大義を除いて、一体何のために戦うというのだ？」

「……っ」

ジェイの時は、その言葉を前にして止まった。

まだ軍に入隊して間もない頃。国を守るため——そんな義憤を胸に、ジェイは軍服の袖に己が腕を通した。そしてそれは、エウロペで

経験した初陣の際に、いとも簡単に打ち砕かれてしまった信念でもある。ミューズの森で、初めて受け持った隊の部下を目の前で殺された時——我武者羅に戦って自分を、隊の仲間を危機に曝した時にジェイの義憤は脆くも崩れ去った。

代わり、今日までジェイを戦争の重圧から支えてきたモノが在った。

（——少尉が守りたいって思ったモノを守るために、戦っていいんです。みんなを死なせたくないって思って少尉がした行動なら、どんな結果になっても——それはきつと、間違いじゃないから）

守りたいモノのために戦う。

失われた義憤の代わりにジェイを支えた『全て』であり、それに気づかせてくれたのは確か、エリサ・アノン少尉だったと思う。

以来、ジェイは必死に戦った。フリーマン軍曹や小隊の仲間達、力及ばず失った戦友も多くいたが、それでもジェイは、全てを守るつもりで戦場に立った。今回も同じだ、コンボイやツヴァイン、長年連れ添った友と死に別れても、まだ——ようやっと再会できた、エリサとグロックを守るためなら戦える。そう信じて、ここまで来たのだ。

——貴方、泣いてるわ。

——泣いてなんかいない、泣くものか。戦うんだ。守りたい仲間が、一人でも生き残っている限り戦って、守るんだ。

自らに言い聞かせるかの如く、ジェイは必死に己が胸中で唱えた。まるで彼の意思に反するかのように、その頬を熱い涙が伝った。

「……愚か者が。同胞の命が惜しいか、己が世界のために戦うか——否、そのような雑念、戦いに赴くと決めた時、とうの昔に諦めて然るべきであろうが。我らはただ一つ、実態等無い『国の名誉』を背負って戦う。貴官に軍人を名乗る権利など無い、我ら『クロイツ』の前に、立ちほだかる資格などない！」

ガース・クロイツは静かに憤慨すると、めちやくちやに拉げた《ディ

バイソン』の機体を再度持ち上げるや、力無くうなだれた頭部に手を掛ける。唯一原型を留めた二本角の内の一を掴み取ったコングは、渾身の力を込めて、その首を引き千切ろうとした。まるで血飛沫の如く火花を散らした《デイバイソン》の残骸に、「ああ……ああ！」と狼狽したジェイ。

「——待て、投降する！ エラも、お前達に引き渡すつ！ だから……」

「笑止！ まだ分からんのか？ 遊んでいるのではない、情や感慨が介在する余地など、戦いの場にはどこにもないと知れ！」

《アイアンコング》の剛腕に、《デイバイソン》の頭部はメリメリと軋みを上げて——千切れた。ねじ切れた首の付け根から、砕け散った装甲片が、紅蓮の飛沫が、脳髓の如く尾を引いたコード類が散らばると、コングは用済みになった《デイバイソン》の胴体を捨てる。残されたコクピットを地面に打ち付けると、それを足蹴にして、全体重を掛けようとした。

「ああ、やめろ……やめろやめろやめろオオオオ……ッ」

ジェイの絶叫が、空しく響く。ガース・クロイツの思惟に、圧倒されていた。平静を失ってコクピットの中、狂ったように頭を打ち付ける事しかできない。苦悶が心を挫き、絶叫が喉を焼いた。濁った血吐を吐き、緋色の涙を零しながら、ジェイは慟哭した。

——ガース・クロイツの信念が、ジェイ達の全てを制圧しかけたその時だった。夜闇を裂いて、一陣の光弾が横切ると、《アイアンコング》の首筋に突き刺さる。ボツと爆ぜた爆炎、激震に揺られたコングはバランスを崩して《デイバイソン》の頭蓋を——ジェイの心を、潰し損なう。

「……なんだ？」

煩わしそうに頭を振ったガースは、センサーに反応する無数の敵影に気づき、顔を顰める。直後、もう一度火線が走り——今度は《ブレードライガー》を拘束する《レブラプター》の群れを撃ち抜いた。次々と倒れていく自軍のゾイド達に奥歯を噛み締めると、ガースは火線の



先に見えた、新手の敵機へと目を凝らす。

「《コマンドウルフ A <sup>アタックカスタム</sup> C》……青の軍、忌々しい狼 <sup>テムジン</sup> 共か」

ブルーカラーで塗装されたカスタムタイプ・《コマンドウルフ》は、西方大陸戦争の大勢が決した時より帝国残存部隊の掃討した特殊部隊の機体であった。主戦場であった北エウロペより距離を置いていた『クロイツ』は、これまでその追撃を上手くいなす事ができていたが、おそらくはロストしたこの《ブレードライガー》達を搜索するために、その行動範囲を広げていたのであろう。

此度の大規模反抗作戦に、敵も本格的な掃討任務に乗り出したと見える。敵影は優に二十を超えている、既にガースの部隊は、完全に包囲されていた。退く場所など既に無い。疲弊した隊共々、ここが己が死に場所となる——覚悟を決めたガースだったが、

「うおおおお……ウワアアああああアッ！」

「——ッ、ンン!?!」

劈くような発狂が、スピーカー越しに弾けた。先に問答をした際に接続した、《ブレードライガー》との回線からだ。クワと目を剥いて機体を反転させたガースは、押し掛かる《レブラプター》達を破碎しながら立ち上がった《ブレードライガー》を見た。満身創痍のそれは、まるで搭乗者の思惟に呑まれたかのように、苦悶の咆哮を上げると、一足飛びでガースの機体へと飛び掛かった。

展開されたライガーの『レーザーブレード』が、眼前に迫る。志半ばにて途切れる己が命の果てを悟ったガースは、ギリと奥歯を噛み締めると、渾身の気迫を叫んだ。

「帝国の雄達に栄光あれ、我らクロイツの騎士達に——その全ての胸元に、誇り高き飛竜十字の勲章を！ ガイロス帝国、万歳イイイイイイ……ッ」

次の瞬間、剣閃が《アイアンキング》の胸元を横断し——ガース・クロイツは果てた。

## ⑱ 暗黒の軍勢

——ZAC2101年 1月 ニクシー基地近郊 早朝

眼下の光景に目を顰めて、レンツ・メルダース中尉はほくそ笑んだ。夜を徹してニザム高地を駆け抜け、ようやく目の前に現れた古巣——今はヘリック共和国軍の駐屯地となっている『ニクシー基地』を視界にとらえた彼は、高揚を抑えられなかったのだ。夜明け前の空は、黄昏時にも似た紫色。それを、立ち昇る噴煙が分断している。主君ガース・クロイツとガイロスの高官が躲していた密約通り、帝国本隊によるニクシー攻撃が敢行された証だ。

ヘリック共和国による停戦勧告の返答期限でもあったこの日に（もつとも、ゲリラとなり帝国本隊と隔絶されていたレンツ・メルダースは、そんな両国の背景など知るはずもなかったが）、ガイロス帝国がよこした答えは、高度三万メートルより迫る大艦隊の派遣であった。改造ホエールキング《モビーディック》によつて、超高度よりニクシーに接近した帝国艦隊は、そのまま大量の爆撃機を投下。通常の航空機型戦闘ゾイドではどうあつても到達できぬ天空だ、ヘリックは何の手立てもないまま空爆に晒され——ものの一時間で、基地の主要設備を半壊させられたのである。

薄明り色の空の中を、まばらな数の黒い影が闊歩していた。

蝙蝠型ゾイド《ザバット》。レンツの見た事が無いその機影は、おそらくはエウロペでの敗退後に帝国が完成させた新型の航空爆撃機であろう。《レドラー》はおろか、ヘリックの《プテラス》よりもさらに小さな体の『超小型飛行ゾイド』であり、惑星Ziのゾイド戦史において類を見ない無人戦闘ゾイドである。

パイロットの安全を考慮しない、極限まで簡略化された構造・虚弱的な装甲は、この《ザバット》に優れた量産性を与えた。無人制御によつて可能となった死を恐れぬ特攻が、空を覆い尽くすほどの無数で降り注ぐ。応戦に出たヘリック空軍の《ストームソーダー》、そして新たに

配備された翼竜型航空機《レイノス》は、いずれも優秀な戦闘ゾイドだが——圧倒的な数を誇る《ザバット》の群れを追い切れないでいるのは明らかであった。

「——素晴らしい」

モニター越しの紅蓮を見下ろして、レンツは呟いた。

「これこそが、反乱軍を焼く贖罪の火だ。我ら『クロイツ』を迎え、ニクスへの帰路を照らす焰だ！ 我に続け、『クロイツの騎士』達よ。血塗られた道を駆け、この勝利と共にニクスへと凱旋するのだ！」

レンツの演説に応えるかのように、彼の手勢たる『クロイツ』のゾイド達が咆哮を上げる。《レブラプター》に《レッドホーン》、シルヴィア小隊から預かった《セイバータイガー》達……総勢は一個中隊にも満たない微弱な戦力だが、それでも士気は高かった。ニクシー基地は混乱し、また空には無尽蔵の友軍爆撃機が舞っている。

敗北は無い——否、勝利だけがそこにあると確信して、『クロイツ』の騎士達は突貫を掛けた。

爆撃で混乱したヘリックの迎撃部隊は、冗談に思えるほどの貧弱さであった。格納庫も相当の被害が出ているのであろう、ニクシーの正面ゲートへと群がるレンツ達の前に現れたのは、既に幾何か損傷を抱えた《ゴルドス》や《ゴドス》、《ガンズナイパー》だ。数もまばらで、瞬く間に残骸へと変わる。

逆に、ヘリック軍のゾイドを葬るレンツの愛機の挙動は、彼の想像を上回る迅速さである。

《ジェノブレイカー零式》と名付けられた彼の改造《ジェノザウラー》は、その名の通りかの『魔装竜』の形骸と、それに迫る性能を与えられていた。急造の機体ゆえ、お世辞にも操作性が高いとは言えない。それでも、与えられた帝国の最新装備達は、死に態のヘリック守備隊を躡るには十分すぎる威力を秘めていた。

邪魔立てをする敵影は、すぐに無くなった。

高揚の笑みを漏らしたレンツは、黒ずんだニクシーの正面ゲートの前に立つとトリガーを引き、ニクシーへの道をこじ開ける。噴煙を上

げて崩れ落ちる外壁、その衝撃が収まるのすら待たずに、友軍の《レッドホーン》達が基地内へと飛び込んでいく。

崩壊するヘリック基地を目にしてもう一度、すばらしい、と、レンツは一人ごちた。

レンツ・メルダースは、勝利に飢えていた。

彼が西方大陸エウロペへと渡って来たのは、一年前の8月。

丁度両国の第二次全面会戦を経て、帝国の優勢が傾きつつある時期だった。高官ガース・クロイツに招かれ、当時最新鋭の《量産型ジェノザウラー》を与えられたレンツは、本来ならばヘリック共和国の息の根を止める栄誉を与えられるはずだった。それが今、彼はガイロス敗北の混乱に際してゲリラまで落ちぶれている——レンツは、その事が腹立たしくて仕方が無かった。

(もはや、<sup>マイスター</sup>主君への忠義さえどうでも良い。ヘリックに死を与え、わが手に栄光を取り戻せれば、それでいい)

猛る『クロイツ』はニクシーの深奥まで到達し、気が付くとヘリック共和国のゾイド工廠にまでたどり着いていた。

炎上し、崩れ落ちた鉄骨の向こうに、巨大な銀色の首長竜型のゾイドが項垂れている。《ウルトラザウルス》。ガイロスの西方大陸戦争敗戦を決定づけた、ヘリックの旗艦にして決戦兵器だ。おそらくは暗黒大陸上陸作戦を視野に入れていたのであろう、機体は大型の発着用飛行甲板を備えた航空戦艦へと改造されていた。

《ザバット》の空爆によって損壊しているものの、その破壊は完全ではない。レンツの胸が、カツと熱くなる。ガイロスをニクシー基地より追い立てた、『ヘリックの象徴』——それを破壊することが出来れば、この戦いの勝利は決定的なモノになる。

「勝った！ 我々の勝利だ、『クロイツ』の一撃が、ヘリックの精神の具現たる巨大ゾイドを撃ち滅ぼす——グアッ!？」

ウルトラに気を取られたレンツの機体を、衝撃が襲う。次の瞬間爆炎が弾けて、横に付けていた友軍の《レッドホーン》が爆散し——火線の先より、ズイと巨大な機獣が顔を出す。

「——ヌッ」

せり出した巨軀へと目を向けたレンツは、その威容を見上げてギリと奥歯を噛んだ。格納庫にて動けずにいる《ウルトラザウルス》を守ろうと出て来たのは、同じくヘリックの象徴たる巨大ゾイド《ゾイドゴジュラス》であった。二本の『ロングレンジバスターキャノン』を背負ったMk-IIタイプであり、全身をライトグレーの装甲で彩ったそれは、おそらくは旧大戦時代より稼働を続ける、名実共にヘリックの守護神であろう。パイロットも、それに類する剛の者に違いあるまい。

最新鋭の《ジェノブレイカー零式》であるが、瓦礫が散乱し、敵味方入り乱れる混乱の基地攻略戦に置いては、その高機動・高火力を存分に振るう事は叶わない。体軀に勝る《ゾイドゴジュラス》の頑丈さに追い詰められ、白兵戦に持ち込まれば、撃墜されることも十分に考えられ得る。

『クロイツ』の快進撃を止め得る楔が眼前に現れたというのに、レンツは尚も不適に笑っていた。「面白い……ヘリックのもう一つの象徴たるゾイドだ、丁重に相手をしてくれねばな」とその機首をゴジュラスに向ける。漆黒の《ジェノブレイカー零式》、その両眼がギラと紅く輝くや——ゆつくりと、《ゾイドゴジュラス》に挑みかかった。

——同時刻 北エウロペ大陸ニザム高地・モンスル駐屯地

あの密林での死闘から、三日を経っていた。

三日三晩を遭難して過ごしたジェイ達は、『クロイツ』の追撃部隊との交戦中に駆けつけた、ヘリック共和国の遊撃部隊『青の軍』に救われた。今は彼らが拠点として使っているの駐屯地一つである、この『モンスル駐屯地』で療養している。

元々はガイロス帝国が赤の砂漠越えレッドラストのためにゾイド部隊を中継するために作った拠点であり、ヘリック共和国が占領してからは、ニクシー攻略のための前線基地となった。大戦が終結してからは戦略的用途が薄れ、現在は帝国残党軍討伐のため、『青の軍』が補給基地に使うのみであった。

人の気の無い廊下に据えられたベンチで、ジェイ・ベックがボヤと天井を仰ぎ見ていると、「——よう」と、しゃがれた男の声が投げかけられた。視線だけを返して見つめた先には、よく見知った傭兵の男がいた。

「……ツヴァイン、か？」

恐る恐る問い返したジェイの隣に、傭兵ツヴァインが座り込む。

躰のあちこちを包帯で撒かれた彼からは、消毒液の匂いが立ち込めていた。ニザム高地でジェイ達と逸れた彼は、おそらくは『クロイツ』の襲撃に遭い、負傷したのだろうが——それでも、以来消息不明だった彼が生きていた事に、ジェイは安堵した。

『クロイツ』の《ライトニングサイクス・カスタム》に愛機を潰されたが……どうにか生き残って、『青の軍』の連中に拾われた。一緒に出たクーバには悪いが……俺の方にはツキが残っていたらしいな」

両の手に持った缶コーヒーのうち、一つを投げ渡したツヴァインは、「オマエさんも、ちったあ誇れ。コンボイの旦那の事は聞いているが、生き残るのもパイロツトの器量の一つさ」と肩を叩く。

ジェイは応えなかった。

ずつと一緒に戦ってきた戦友たちの多くを失った今、自らの生還を喜ぶ気にはなれそうにない。そんな彼の心情は理解してつもりだったのだろう、予想どおり、と言う風に溜息を吐いたツヴァインは、「エウロペのガイロス軍残党は、ほぼ完全に制圧された」と、切り出した。

「各地に展開されていた『治安維持軍』と、青い《コマンドウルフ》部隊が提携して、大方のヤツは取り締まったが……今朝がた知らせがあつて、ニクシー基地にガイロス帝国の空襲部隊が来ているって話だ。狩り損なつた最後の『クロイツ』連中も、それに合わせて特攻を仕掛けているらしい。それを片づけければ、エウロペは正真正銘、ヘリックの支配下に置かれる」

「……だが、それで戦いが終わる事は、ない」

ボソと零したジェイに、ツヴァインが眉を顰める。

数秒の間の後に、手にした缶コーヒーを一口に飲み干すと、「ああ——

「確かにな」と、ツヴァインは椅子を立つと、

「だが、嘆いても始まらない。俺は行くぜ。怪我はしたが、幸いゾイド乗りを廃業する程の傷でもないんでね。『青の軍』の隊長さんから、ウルフ乗りとして一緒にやってかないかって、声を掛けられてる。そこでやり直すさ」

ジェイは、そんなツヴァインに一抹の寂しさを覚える。

座り込んだまま彼の横顔を見上げると、「コンボイ小隊を、離れるのか？」と問いかける。肩を窄めて、「旦那が逝っちまったなら、小隊はもう解散だ。お前もこれからの身の振り方くらいは考えて置け」と頭を振ったツヴァインの目は、微かに寂しげだった。

「エウロペの同胞、コンボイの旦那……死んじまった連中のために俺がしてやれる事は、ガイロスを倒して手向け代わりにするぐらいしかないからな。暗黒大陸に渡って、戦い続けるよ」

そのまま振り返ることなく——ツヴァインはジェイの元を去って行く。

ボヤとその背を見送ったジェイは、自らの右手がぐくぐくと震えているのを、必死に押さえつけていた。

（同胞の命が惜しいか、己が世界のために戦うか——否、そのような雑念、戦いに赴くと決めた時、とうの昔に諦めて然るべきであろうが）  
ジェイの脳裏に、先にまみえた《アイアンキング》のパイロットの糾弾が焼き付いている。グロックを、ツヴァインを、エリサを。仲間を守るためにジェイは戦って来た。その心意気が正しいと信じていたが、ガイロスの将は否定し——今、ジェイの元には誰も残っていない。それが怖かった。折れそうな自分を支えてくれる者が居なくなって、戦場に立っていられる自信が無かった。

ツヴァインが立つて数分後、ジェイ・ベックも椅子を立ちあがり、医務室に向けて踵を返す。受け取った缶コーヒーはベンチの小脇に置いたまま、一口もつけていなかった。

①9 これから

医務室の戸口を開けると、彼女の姿は直ぐに見つかった。

四つずつ並んだ寝台のうち、使われているのは一つだけで——グロック少尉は一足先に、動けるぐらいまで回復したと聞いている。部屋の中に、彼の姿は見当たらなかった。

「——アノン少尉」

忍び足でベッドの小脇まで近づいたジェイは、目を伏せて眠る彼女の名前を呼んだ。

エリサ・アノン少尉。クロイツの《アイアンコング》に撃墜されて重傷を負った彼女は、今朝がたようやく面会可能になったのだ。呼びかけから少し間を置いて、エリサの脛がゆっくりと開き、顔を向ける。久方ぶりに再会した彼女に、ジェイはもう一度、「ああ俺だよ、エリサ」と彼女の名を呟き、思わず微笑した。

アノン少尉はそんな彼に気づいて、困ったような笑みを返す。

「ジェイ少尉……良かった。少尉も、ご無事でしたね」

「あれくらいで、死ぬものか。……怪我の具合はどう？」

問いかげながら、ジェイはエリサの右腕に目を遣った。

指先から肩口、首を伝って頬に至るまでを焼かれた、彼女の躰。取り換えたばかりの新品の包帯のはずが、その奥には薄っすらと、紅く血が滲んでいる。痛々しさに、ジェイは思わず押し黙ったが——自らの傷に目を落としたエリサはゆっくりと頭を振った。

「私より、《デイバイソン》がかわいそうで……私がすっかりしていたら、《アイアンコング》にやられることも無かったのに」

彼女の愛機は『クロイツ』に破壊され、再起不能になった事は知っていた。ジェイは少し戸惑った後、「君の命に代えられるモノじゃない。《デイバイソン》もそう思って、君を守ってくれたんだ」と告げたが——エリサは寂しそうな笑みを見せて、首を振る。

「……すみません。初めて一緒の隊で戦えたのに、私、少尉の足を引つ張っちゃったみたい」



「馬鹿言わないでおくれよ。君が居なければ、俺は戦えなかった。君に生きていて欲しくて、俺はあの時、最後まで足掻いたんだ」

三日前——森の奥、朽ち果てた遺跡の中で《アイアンコング》と相対した時。

『クロイツ』、ガース・クロイツ少佐との問答で、ジェイの戦意は完全にかき消されていた。毅然としたガースの鉄の意思に押さえつけられ、思考の全てを筆記取られた彼は、獣のように慟哭する事しかできず——それでもただ一つだけ残っていた想いが、コングの手の中で弄ばれたエリサを、救い出す事だった。

「……俺には、君しかいなかった。君だけは、死んでほしくなかったんだ」

追想に目を伏せた後、ジェイはもう一度、ベッドに横たわったエリサ・アノン少尉の顔を見た。傷だらけの彼女の横顔は、どこか儂げで、そして美しい。全てを失い、全てを挫かれたと思っていたジェイだったが、ただ一つ——西方に渡って以来、ずっと一緒に居たエリサを守りきる事が出来たという確信だけが、彼にとって救いだった。

「ありがとう、エリサ。君が生きていてくれて、嬉しかった」

もう一度、正真の思いを告げた——その時であった。

「——ごめんなさい、ジェイ少尉……」

かすれ気味のエリサの声に驚いて、ジェイが目を開けると——自由の利く左の掌で、必死に涙を拭った彼女があった。嗚咽を堪えるように歯を食いしばった彼女は、まるでジェイの思惟を避けるかの如く顔を逸らして、やがて言う。

「……私、貴方に思われる資格なんて無い。あの日——《ライトニングサイクス》と戦ってる最中、サンドストーム砂嵐で少尉と逸れた時、少尉は死んでしまったと信じて、疑わなかった。だから——グロック少尉に求められて、それに応じた……ッ」

暫しの間、沈黙があった。

「え……っ?」

ジエイは初め、エリサが何を言っているのか理解できず——ただ呆けて、泣きじやくる彼女を見つめていた。彼がようやくその懺悔の意図するモノを察すると、頭の中が真っ白になって——全身の力が抜け落ちる。

同時、エリサは「なんて惨めなんだろう」と自棄になり、己が唇を噛み締めて言った。

「モラレスとクーバが死んで、コンボイ小隊長が死んで。少尉まで居なくなってしまうって……怖かった。でも——それでも、貴方が生きていると信じて、待っているべきだったんだ」

後悔に急ぎ立てられたエリサは、平静を失っているように見えた。彼女が取り乱すのは見ていられなくて、ジエイは放心した自我を取り戻す。「もういいんだ……それ以上昂ると、傷に障るよ」と、波立つ心の動揺を必死に堪えて、ジエイは彼女を宥めたが——エリサは尚も続けた。

「森で『クロイツ』に囲まれた時……私、死ぬべきだった。少尉を裏切った私が、少尉に助けられるなんて！」

「——止めてくれ！ 死んだ方が良かったなんて、言わないで。それでも俺は、君に生きていて欲しかったんだ。だから——」

「こんな醜態って、無いよ……こんな惨めな思いをするくらいなら、私——」

泣き喚いたエリサの顔は、まるで痲癩を起こした子供みたいで——ジエイが知っていた彼女の大らかさも、気丈さも、欠片も残っていないかった。

何を喋っても、彼女を取り持てる気がしなくて、ジエイは「……そうか……」と、力無く笑う。

消え入るような声で、ジエイはポツリと呟いた。

「俺は、エリサを救えたつもりだったけれど、実際は違った……何よりも守りたいと願った、最愛の一人さえ——俺は助ける事が出来なかったんだね」

(……アノンは、馬鹿な女なんだ)

病室から出たジェイは、廊下口でグロック・ソードソール少尉と鉢合わせて——そんな言葉を聞いた。

(あの遺跡で身を潜めてる間、俺は何度もアイツを抱いたが——無理強いはしてない。仲間が死んで……お前も死んだと思っていて、アレの心は相当に参ってたんだ。だから、俺が救ってやった。誰かに想われている、守られているって安心感が無ければ、生き残れなかったんだよ)

そう語ったグロックは、ジェイと視線を合わせようとはしなかった。ジェイがその言葉を聞き入れる余力が無い事に気づかないまま、彼は続ける。

(無論、俺にとっても、それが生きる気力になった。当然だろ？ コンボイ少佐が死んで、俺だって恐かったんだ。アイツを自分の女だと思って——庇う相手が居るって思って、どうにか自分を奮い立たせていた。だからこうして、俺も生還してる)

生来の不遜さか、それとも後ろめたさを感じて、敢えてそうしているのか——グロックは悪びれる素振りも無く、そう言った。

全てを吐露したグロックは、ようやくとジェイを見遣って(俺が気に入らないか？ 自分の女を取られたと、そう思うか？ それならそれで、俺を恨めばいい)と、威嚇するような低い声で吐き捨てる。

数秒の沈黙の後、ジェイはゆっくりと面を上げて(……いいや)と絞り出した。

(——アノン少尉、の、傷の具合は芳しくないらしい。医者は、中央大陸デルポイに戻って治療に専念する事になるだろうって言うんだ。彼女に付いていてくれないか？ 今のアノン少尉には、君が必要だ)

力なく笑って見上げたジェイに、グロックの仏頂面が一瞬崩れた。苛立ちか、それとも葛藤か——爪を立てて己が頭を掻きむしったグロックはやがて(——いや)と頭を振る。

(……それはできない。俺の行先は中央大陸デルポイじゃない、『閃光師団レイフォース』になつて、暗黒大陸に行く。コンボイ小隊長の分まで、ガイロス野郎をぶっ潰すんだ)

ジェイの最後の頼みを、グロックは素っ気なく突き放すと、彼はそのまま踵を返し、その場を後にする。速足気味で去っていく彼に、掛ける言葉など無く——ジェイはその背が見えなくなるまで、ボヤと立ち尽くしていた。

グロック・ソードソール少尉の姿を見たのは、それが最後だった。

最後にジェイが向かった先は、格納庫だった。

外はすっかりと日が落ち——元々人員も少ない『モンスル駐屯地』だ、照明も碌に灯っていない倉庫には、宵の闇がズイと押し掛かっている。がらんだの格納庫の中、ジェイは自分の《ブレードライガー》が一機、ポツリと佇んでいるのを見上げていた。手持ち無沙汰気味だった整備兵達の暇つぶし代わりになってたのか、『クロイツ』との戦闘で負った損傷はほぼ全て修繕されていた。

それだけではない。機体にはカスタムパーツ『アタックブースター』が装着されていた。高密度ビーム砲とスラストユニットが一体となった、《ブレードライガー》専用の増加兵装。元々は《ジェノブレイカー》、《ライトニングサイクス》と言ったガイロスの新兵器に對抗するために用意された物だが、それらの仮装敵機が本格稼働する前に戦争が決着してしまった物だから、前線で使用された物は少ない。このモンスル駐屯地にも配給された物が余っていて、メカニックがお遊びで取り付けたのだろう。今のジェイには必要のない装備だが、取り外す理由も——時間も無い。

コクピットに乗り込もうとしたジェイ——それを、ズ、と木霊した物音が引き止める。誰もいないと信じ切っていたジェイは、ビクと肩を震わせて振り返った。

「……エエッ？」

薄暗闇に溶け込むような黒髪、そして黒い瞳の少女が、そこにいた。苦しそうに膝を着いた少女、ジェイは思わず駆け寄って「……何してる？　なんで、こんな所に？」とまくし立てる。呼びかけに顔を上げ

た彼女の表情は苦しげで、その額にはジワと汗が浮いていた。

「呼んでいる……アイツの存在が、私の中でどんどん大きくなって  
の」

「アイツ？ と、眉を顰めるジェイ。」

『クロイツ』の将、ガース・クロイツはエラを、『超越者の鍵』<sup>イモータル</sup>と呼んだ。それが何を意味するのかは分からなかったが、彼女がガイロスの残党達にとって重要な意味を持つ『何か』である事は推察できた。青の軍に保護された際にジェイはその事に言及し、彼女を精密検査するよう要求したが——要望は跳ね除けられた。ガース・クロイツが戦死した時、既に帝国残党には軍隊としての統率も、新兵器を導入する技術力も無いと考えられていたのである。結果エラは、ヘリックの支援するエウロペの難民保護区へと送られる事になっていた。

私怖い、と、嗚咽混じりにエラは叫ぶ。

「私の精神が、アイツに喰われていく。アイツが完全に目覚めたら、きっと私は私じゃなくなるわ」

「なあ、そいつは何だ？ どこに居るっていうんだ？」

戸惑いながらも、ジェイは彼女に問い返した。荒い息で震えたその肩を抱き支えて、「どこにいるか、分かるのか？」と、その瞳を覗き込む。朦朧とした意識をどうにか保ち、エラがその問いかけ頷いたのを確かめると、ジェイも「よし」と応える。

『ブレードライガー』に乗り込んで。ソイツの元に向かって、何が起こっているのか確かめよう」

「ッ、でも……ッ」

ジェイの提案に驚いたかのように、エラはその目を見開いた。出撃命令は出ていない——ジェイが自分の裁量だけで行動する事の許されない、『軍人』という立場にある事を理解しているのだろう。

不安げなエラに、ジェイは「大丈夫だ」と頷いた。

「君を助けるくらい造作もない。余計な気遣いはしなくていい——俺はこれから、軍を抜けようと思っていたんだから」

②〇 深淵

——ZAC2101年 1月某日 深夜 西エウロペ大陸・マンスタ―高地

深夜の荒野——闇の中を、蒼き疾風が駆け抜けていく。

夜闇に紛れてモンスル駐屯地を脱走したジェイは今、エラに導かれるままにエウロペの荒野を南西に進んでいた。既に『ニザム回廊』と呼ばれる丘陵地帯を抜けて半日、北エウロペから出て、西エウロペ大陸・マンスタ―高地へと差し掛かっている——そこに、少女エラを苛む『何か』が居るはずだった。

「——君の言うとおり、僕には戦士としての素質が無かったみたいだ」  
ジェイ・ベック少尉——否、既に軍を離れる事を決めた彼は、ただの『ゾイド乗り』ジェイ・ベックでしかない——の駆る、《ブレードライガー》の疾走。そのコクピット、揺籃の如き心地よい揺れを蓄えたシートに身を預けたジェイは、一人ごとのように宛てなく語る。

思えば、エウロペに來た時からそうであつた。

ミューズの森、コンボイ小隊長の指揮する307小隊に加えられて初陣を経験したジェイは、死の気配が飛び交う戦場、己が采配一つで自分が、何より仲間達が消えてしまう可能性への畏怖に、押しつぶされそうだった。帝国の侵略から母国を救う——軍に志願した時には確かに在ったはずの信念。戦いのもたらすプレッシャーの前では、それが一瞬でチャチな物に変わった気がした。

「でも……エリサが言ったんだ。誰かを守るために戦場に立つことは、間違いじゃないって。俺はそれに救われた……仲間が死ぬのが怖いなら、俺の力で彼らを守ればいい。そう思って戦って來た。けれど——」

——今日まで、ジェイには見えていなかった。

仲間を守ろうと、誰も取りこぼさないようにと力めば力むほどに——

―失った時の積年が大きくなる。マーチン、フリーマン、モラレスとクーバ、そしてコンボイ小隊長……死に別れた者達だけではない、グロツク、ツヴァイン——そしてエリサ。仲間達が負った傷跡は、それを見届けて来たジェイの背に押し掛かって、いつの間にか背負いきれないほどに大きくなっている。

裏に焼き付いた戦火、コンボイの断末魔に、エリサの涙——もう思い出すまいと決めていたそれらがフラッシュバックして、齒がゆさが滲む。

「今の俺は脱走兵つてことになるから、国には戻らない。エウロペでどこか人気の無い土地を見つけて、ひっそり暮らそうと思ってる。田畑を耕して、魚を釣って……気ままに生きていきたいんだ。戦いの中で、大事な人が傷ついていくのは、もう嫌だから」

元々急ぐ理由も、行く宛てすらも無い。ただ、これ以上戦い続ける信念を持ってないと悲観し、軍を抜けようと思って決まっていた。だから、エラの憂いを取り除くのに付き合うだけの時間は、十分に在る。ヘリック共和国の影響が強い北エウロペから離れているというのも、ジェイにとつては都合が良かった。

全ての後悔に背を向けて逃げ出す自分を自嘲気味に笑いながら、ジェイは「君はどうする？ エラ。君を蝕む何者かが消えたら、君だつてまた、一から歩み出す資格があるはずだ」と、チラと後部座席を振り変えり、問う。が、エラは何も答えない。膝を抱えて蹲った黒髪の少女は、唯息苦しうにその顔を歪めて、両の目で虚空を見ている。

沈黙を、ジェイはさして気に留めなかった。彼女がジェイの言葉に耳を傾けていようが、そうでなからうが——彼ははただ漠然と、胸中を吐露し続けるだけだった。

月光によって照らされた、マンスターの岩場。藍闇の中で青白く輝く剥き出しの岩盤は、荒々しくも幻想的であった。草木一つ無い荒涼とした地に差し掛かったジェイは、視界の先にエラが目指していたで

あろう建造物を見つける。

「……あれか」

見通しの良い荒野帯、その中心で、一際巨大な礫塊が屹立していた。一見周囲の岩盤となら変わらぬそれは、よくよく見れば風化した装甲と鉄骨によって編まれた、人の手によって築かれた被造物の残骸と分かる。《ホエールカイザー》、かなり旧式の、輸送貨物船型ゾイドの残骸だ。ガイロスの帝国の運用するクジラ型の巨大輸送艦《ホエールキング》の前身的な機体で、おそらくは旧大戦時代に建造された物であろう。

幾年も前に墜落し、真つ二つに裂けた船体。しかしその姿には、どこかかつて誇っていた威容の面影が在った。長きに渡り放置され、風雨に晒されている割には、外装が小奇麗すぎる——まるでつい最近までこの船に人の往来が在り、手入れをしていたかのような、そんな違和感がある。それが、この地がジエイとエラの目指す目的の場所であると、証明していた。

『クロイツ』の連中は、此処を根城にしていたのか。ヘリック共和国軍の影響が強い北エウロペの地を離れ、この西エウロペ大陸に潜伏していた……ヘリックの掃討部隊が手こずっていたのは、こいつが遠因か」

キャノピー越しに鎮座した巨大な鉄塊を見上げて、ジエイは一人呟いた。ガイロス帝国残党、つまりは武装組織の本拠だ。だが妙でもある。ヘリック共和国軍用機、しかも単独で接近したジエイに対して、迎撃のゾイド部隊が出てこない。明かり一つ灯さないので、クロイツの要塞は不気味な沈黙を貫いていた。

「……降ろして」

警戒し気を張っていたジエイは、不意に背後からなつた声に驚いて振り返る。

先ほどまで息苦しそうに呻くだけだったエラが、スクと立ち上がり、面を上げていた。一つは夜の川の如く黒い、そしてもう一つは、光を灯さない灰色の瞳——両の目を見開いて、《ホエールカイザー》の中腹に広がった亀裂、その奥に蠢く深淵を凝視すると、少女は再び呟い



た。

「降ろして……アイツはまだ此処に居る、もうすぐ目覚めて、私を連れて行ってしまおうの」

「……っ」

まるで何かに憑かれたかのように、浮遊感のある声色でうわ言を言うエラ。共に『モンスル駐屯地』を発った時とは、明らかに違う彼女の様子に、ジエイは気味の悪さを覚えて眉を顰めた。

が――、

「……ああ、分かってる」

暫し考えた後、ジエイは彼女の意図を汲んだ。

「君の野暮用に付き合うと決めたんだけ、約束を違える気はない。でも、ゾイドからは降りないで。此処から先には、何か――とてつもない何かが居るって事だけは分かる。安全が確認できるまで、一緒に居るんだ。いいね?」

条件を出したジエイだが、エラはもはやその言葉の意味さえ解していないらしい。虚ろな瞳で、ただボヤと深淵を見つめるのみだった。

断ち切られた《ホエールカイザー》の残骸。その亀裂から内部の格納庫へと足を踏み入れたジエイの《ブレードライガー》は、その船首を指してゆつくりと歩みを進める。元々は、一個大隊分もの戦闘ゾイドを収容できる輸送船。しかし、廃墟と化したそれには碌な設備も残されておらず、ただ明かりの灯らぬ広大な空間だけが在った。漆黑だけが立ち込めた視界は、まるで自分だけ『暗黒』という名の異界に投げ込まれたかのような、奇妙な錯覚を与える。

いつ敵の奇襲があるとも知れない、と警戒し、メインモニターのリーダー画面をチラと一瞥するが――やはり、センサーにはなんの反応もない。罨を疑ってみたが、内部に侵入されてからも何の音沙汰がないのは、不自然すぎる。

数秒考え込んだ後、「もぬけの殻だ……エラ、やっぱり此処には何も無いよ」と、ジエイは少女に己が見当を伝えた。が――少女はクワと目を見開いたまま頭を振って、

「居る……ここに居る。私の半身が、ここに——降ろして、降ろしてつたらー！」

「——おいつー！」

不意に席を立ったエラが手を伸ばして、《ブレードライガー》のキャノピー・ハッチを開ける。戸惑うジェイの制止を聞かずにコクピットを飛び下りた少女は、そのまま夜霧の中へと走って消えた。「待て、危険だ！」と声を上げると、ジェイも慌ててライガーの前照灯を灯し、機体を降りる。そのまま備え付けていたハンドライトを手に取ると、エラの駆けた方向へと身を翻して、叫んだ。

「エラ、戻って来い！ エ——」

ジェイの動揺を裏切るかの如く、少女の後ろ姿は直ぐに見つかった。

数十メートル程進んだ先、ボヤと立ち尽くした彼女は、深奥の虚空へと視線を注いでいる。何事もなかったと、安堵の溜息を吐いたジェイだったが——、

「……なんだ、コイツは……っ?」

エラの向こう、懐中電灯に照らしだされた巨大な鉄塊に気づいて、ジェイは慄いた。

——地べたに伏したまま動かない大仰な『何か』が、そこにいた。ゾイドだ。複雑なシルエットを形成する機影は、ヘリック軍の《ガイサク》や《サイカーチス》のような、節足動物型戦闘機械獣のそれに良く似ている。が——いずれも小型ゾイドに分類されるそれらと違い、目の前の機体は地を這う扁平な態勢ながら、全容は大型機《ゾイドゴジュラス》や《アイアンコング》にも匹敵し得るものだった。そして、全身をくまなく装甲化された外観は、紛れも無くガイロス帝國軍の配備する機動兵器に共通する特徴でもある。

見たことのないゾイドだった。だが——起動する気配の無いそれから、異様なまでのプレッシャーを感じ取り、ジェイは思わずたじろぎ、後ずさった。

「——それが『<sup>イモータル</sup>超越者』」

未知の畏怖に呑まれていたジェイの耳朶を、湿り気を帯びた女の声が掠める。

「ヌツ——!?!」

直後、格納庫中の電源が起動して、まばゆい光が辺りを照らす。暗がりに慣れていたジェイは、閃光から顔を庇いながらも声の主を必死に探した。ジェイとエラ、二人以外、辺りに人の気は無い。

「ガース・クロイツ少佐が、残された全ての財をつぎ込んで復元しようとした最強のゾイドにして——『パイロット・デザイン』によってエラと繋がれた、彼女の半身。アナタ達には、《デスステインガー》と呼んだ方が分かりやすいかしら」

次いで、グルと視界を煽ぐと——壁伝いに据えられたキャットウォークの一角で、ようやっとジェイは声の主を見つける。

「お前は……ッ!」

と、自らを見下したその女の姿に、固唾を呑む。

ガイロス帝国の上級将校が身に着ける菖蒲色の軍服を纏いながら、その気品をかき消す、異様な風貌——人形のような華奢な顔の半分を覆い隠す、無骨なヘッドギアと、スコープ越しに注がれるポインターの燭光——気味の悪いなりの女性士官だった。

見紛うはずが無かった。スターク・コンボイ少佐の仇であり、ジェイ達を離散に追いやった『クロイツ』のゾイド乗り——シルヴィア・ラケーテ少尉が、そこに居た。

## ☒ シルヴィア（後）

煌々と照る格納庫の照明が、異形のゾイドの全容を明らかにする。糸の切れた傀儡のように全身を投げ出した、巨大な節足動物型戦闘機械獣。生命感を感じぬ無機の機獣だというのに、ジェイ・ベックは本能的な恐怖を感じ、射すくめられていた。

——《デスステインガー》。

その名を耳にした事はあった。先の戦争の終局に向けて、ガイロスが投入した決戦兵器。此度の戦いの鍵となったテクノロジー。『オーガノイドシステム』、その真髄たる特別なゾイド生命体を古代遺跡より発掘した帝国が、技術の粋を注いで生み出した『最強ゾイド』である。凄惨な暴走事故を引き起こした末に、ヘリック・ガイロス両国のゾイド部隊によって掃討されたとされていたが、二号機が存在したとは考えにくい。

となると——今日の前にあるこの鉄塊は、『制御不能の狂戦士』と恐れられたオリジナルのそれだ。

ジェイの気を捉えているのは、未知の巨大ゾイドから放たれるオーラだけではない。

カッ、と鉄橋を踏み鳴らす軍靴の音、クロイツの女性士官シルヴィア・ラケーテが、頭上より彼とエラを見下していた。既に包囲されているのかもしれない、ジェイは抵抗の意思が無い事を照明しようと、両の手を上げたが、

「フフ……安心なさいな。此処には私以外、『クロイツ』と縁のある者はいないわ」

シルヴィアの言の通り、やはり辺りに人の気は無い。

不適な笑みを浮かべたまま、彼女は足元の巨大ゾイドを見下して、退屈そうに語る。

「最強のゾイド『<sup>イモータル</sup>超越者』を復活させて『クロイツ』の旗艦とする、と

というのが、ガース・クロイツ少佐の目論見だったみたいだけれど……彼の同士達は、内心夢物語と笑っていたのでしようね。少佐が死んだらすっかりと見限って、自分達だけで突貫を掛けに行ったんだもの。今頃はニクシ―基地に辿り着いて、玉砕―全員討ち死に、と言った所かしら」

同士であるはずの『クロイツ』、その決断をあざ笑うかのようなシルヴィアの物言いは不快で、ジェイは思わず眉を顰めた。

「……貴様は、何故此処に残っている？ 臆病風に吹かれるようなタマでもあるまい」

異形の女性士官へと問いかけると、シルヴィアは不思議そうに小首を傾げる。

「言っていないかかったかしら？ 私は、帝国の行く末になどなんの興味も無いと。私が戦う理由はただ一つ――『最高のゾイド乗り』、それだけです」

「最高の、ゾイド乗り……？」

彼女の意図が読めず、思わず呆けるジェイ。

「――そう、最高のゾイド乗り。アナタも戦闘ゾイドに乗り込むパイロットであるというのなら、分かるでしょう？ 彼らの野生が体に流れ込んでくる高揚と快感を。私は、その全てを味わい、絶頂したいのです」

全く分からない、というわけではなかった。

初めてゾイドに乗った時、一発で魅せられた――だからこそジェイは軍人の道を選んだ。鋼の躰と、力強いまでの闘争の思惟を孕んだゾイドは、パイロットの心身を支え、守ってくれる。彼等と一緒になら、凄惨たる戦場に赴いてもいい、と――そう思えたからこそ、ジェイは軍人を志した。

かつてのジェイならば、もう少しだけシルヴィアの主張を聞き入れる事が出来ただろう。だが、実際の戦いでは、ゾイドとの絆、仲間との絆だけでは生きていけない――再三の戦いでそれを理解していたからこそ、今ジェイ・ベックは、シルヴィア・ラケーテの言に共感出来なかったのである。

「子供染みた事を……そんな理由で、お前は戦場に立つのか。何人も兵士を、人の命を奪っているのか」

「おかしいと思うのは、貴方が『最高のゾイド乗り』に必要な素質を得ていないからです。殺し合いなどと言う、人間の定義した下品な理屈で戦うのではない。私はゾイドと一つとなり、彼らの持つ野生の摂理に従って、私より弱いものを喰らっている——それだけの事」

恍惚に浸りながらごちたシルヴィア・ラケーテは、おもむろに己が腰に結わえつけておいた装飾品を手に取り、掲げる。

銀色の毬のようなそれは、良く見ると小さな金属プレートが集まりであり——ジエイには直ぐに分かった。彼女が集めているそれは、戦利品だ。おそらくは彼女自らの手で葬った、共和国軍のゾイド乗りの存在証明。一纏めにされた大量のドックタグ、その中にはジエイの上官——シルヴィアに殺されたスターク・コンボイの物さえ混じっているかもしれない。

「——私は、誰よりもゾイドを知る者になりたかった。ヘルマン・シュミット技術大尉の『パイロット・デザイン』計画に身を任せその野生と繋がり、片時も戦場から離れず、たくさんの、本当にたくさんのゾイド乗りを『食べて来た』……そうする事で、私はどんどん強くなる。最強のゾイド乗りに近いしていく。此度の戦乱は私の望みを叶える、恰好の舞台でした」

「貴様……ッ！」

俗世を捨て去ろうとしていたジエイだったが、シルヴィアの演説の前に、忘れかけていた激情を呼び起こさせられる。彼女の享樂でかき回された戦場で、どれほど多くの命が失われてきたか——コンボイや仲間達、ジエイの瞳に映っていた掛け替えの同胞達も、彼女の手にかき葬られた。

赦せない、と、そう思ったジエイは、敵意をむき出しに、彼女へと決闘を申し込もうとする。しかしシルヴィアは彼を無視し、

「——エラ」

と、ジエイの前で苦しそうに膝を着いた少女へと、湿っぽい声で投げかけた。

「私は此処で、貴方を待っていたの。貴方が、私の求める『人とゾイドの至るべき境地』を指し示してくれる存在かも知れなかったから。さあいらっしやい、そして見せて頂戴……怪物たる狂戦士を従える、ゾイド乗りの可能性の到達点を」

「……どういう意味だ!?!」

シルヴィアの言葉を遮るように、ジェイ・ベックが食い下がる。ヘッドギア・ゴーグルより零れる燭光を再びジェイへと向けたシルヴィアは、

「その少女——エラは《デスステインガー》制御のため、そのゾイド因子とエウロペの人間を掛け合わせて生み出された……ガース・クロイツが『パイロット・デザイン』技術を応用して作らせた強化人間です」と、事の真相を木霊させた。

「なん……だと……」

ゾクリと、背筋を駆けあがる悪寒。ジェイだけではない、ハタと顔を上げたエラは、青ざめた唇を震わせて、シルヴィア・ラケーテ少尉を見上げる。

「エラ……最強ゾイド・《デスステインガー》を従える資格を与えられた貴方は、いわば生まれながらにして『最高のゾイド乗り』たる素質を与えられた者と等しい。私はその可能性を見たいのです」

「——違うっ!」

悠々と語るラケーテを、少女の慟哭が遮る。

「私は、ただの人間だった。爺様と兄様と、ただ静かに暮らしていたら、それで良かったのに。お前達が滅茶苦茶にしたんだ。私の頭を弄り回して、私をおかしくしたんだ!」

声を荒げて立ち上がった少女。ギリと噛み締めた口元から血を滴らせた彼女の貌は、まるで鬼子のように——忌忌しげに《デスステインガー》の機体を睨みつけながら、叫んだ。

「ゴイツの声が、どんどん大きくなって、私を苛む……もううんざりなの。戻して! 私を、ただの人間に戻せ!」

エラの悲痛な叫びを、シルヴィア少尉は間髪入れずに跳ね除けた。ニヤと口元を歪めると、「分かっているでしょう? 貴方のその力は、

エウロペの同胞達——貴方の大切な家族達の犠牲になり経っている事」と、エラを挑発する。

「多くの被検体が、イモータル超越者に食べられていった……ただ一人、貴方を残して。皆を取り込んだのは、イモータル超越者。そしてあなたもまた——イモータル超越者」

「……ッ」

——ソウダ、エラ……オレヲウケイレロ。

シルヴィアの言葉にビクと肩を震わせたエラが、後ずさる。彼女の脳裏には、聞こえるはずの無い幻聴が鳴っていた。それは祖父の声にも、今は亡き兄の声にも似ていたが——深奥に眠る邪悪な思惟は、人が持つにはあまりにも膨大だった。

《アススティングァー》の意識が、呼んでいる。そんな余感に、エラは呻いた。彼女の動揺が目に見えたジェイ少尉は、「どうしたんだ、エラ!？」と、少女の意を手繰るが——返事は無い。

シルヴィアが、勝ち誇るかのように、ジェイへと告げる。

「——同じ『パイロット・デザイン』を施された私には、分かるのですよ。機体と己が思惟を同調する事を赦された私達は、いわばゾイドと一心同体。イモータル超越者が貴方を求めていたのではない。貴方だって、彼を求めていたのです」

既に、エラは正常な思考を失っていた。フラフラとおぼつかない足取りで、鎮座した《アススティングァー》のコクピットを目指す。「止せ——止めるエラ!」と、引き止めようとしたジェイだったが——その叫びは空しく木霊するのみだった。「——そうよ、エラ。イモータル超越者の元に。貴方の家族も皆、彼の中に居るわ」と、シルヴィアは尚も唆す。そして——、

——少女は、『超越者』の前に立った。

沈黙していた狂戦士の機体、その頭部に、ズンと赤い光が灯る。コ



クピットハッチを兼ねる頭部装甲がガバと開いたかと思うと——次の瞬間、大量のコードが蛇のように伸びて、エラの軀を絡め取った。

「グ——ギヤアアツ！」

それは超越者<sup>イモータル</sup>が己が半身に与えた、熱烈な抱擁だった。ミシミシと締め上げるコードに全身を砕かれたエラが、悲痛な叫びを上げる。ポタバタと滴り落ちる彼女の血に、「ああ……ああ……」と青ざめたジェイは、見るも悍ましい光景を、ただ茫然と眺める事しかできない。

まるで生き物のようにエラの軀を這い、貫き、そして一体化していく鋼鉄の触手は、戦闘機械獣等と言う無機な存在ではなかった。明確な自我を持つ生命体——それも人智を超えた、超常の力を秘めた『悪魔』のゾイドである。

ピクリとも動かなくなったエラを、『超越者<sup>イモータル</sup>』の触手がズイと引き摺って、その頭部の中に格納する。ハッチが閉まり、だらと投げ出された尾部が、勢いよく屹立し——次いで八つの脚部が、ゆっくりとその蹄を地面に突き立てて、身を起こす。巨大な鋏状の両腕を擡げるや、まるで周囲の生命を威嚇するかの如く、その爪を二度ほど打ち鳴らした。

シルヴィア・ラケーテが、高揚を露わに叫ぶ。

「さあ、超越者<sup>イモータル</sup>の……《テスステインガー》復活の時だ！」

巨体の脈動に合わせて、格納庫内がギシと軋みを上げる中ジェイ・ベックは目の前に顕現した巨大なサソリ型ゾイドを見上げ、絶句する。警告色の如き毒々しさの、藍と赤の装甲で全身を覆ったそれに、貌など無い。無貌の悪魔は、目の前に立ち尽くしたジェイの無力さをあざ笑うかのように、ゆっくりとその頭を傾げると——やがて覚醒の咆哮とでも言うべき、甲高い金切り声を上げた。

## ☒ 超越者（イモータル）

超越者イモータルの機動によって発生した激震に揺さぶられながらも、ジェイ・ベックはなんとか《ブレードライガー》のコクピットに辿り着き、そのシートへ滑り込む。視界の端で、キャットウオークを走り去るシルヴィア・ラケーテの姿を捉えたが——今は彼女に構っている暇など無かった。目の前の脅威、復活した暴走狂戦士《デスステインガー》を食い止めなければ、未来は無い。

始動した愛機《ブレードライガー》が、いつにもまして力強い咆哮を上げた。脳裏に流れ込んでくるライガーの思惟は、かつてないほどにジェイの胃の腑を攪る。それはまるで、ライガー自身がこの未曾有の凶獣の前に、浮足立っているかのようなだった。

凜猛なオーガノイド・システム搭載機さえ畏怖させるバケモノに、ジェイはゴクリを固唾を呑みながら、

「エラ……くそ！」

と、そのコクピットに取り込まれた少女を呼んだ。

《ブレードライガー》を前にした《デスステインガー》は、まるで己が軀の覚醒を確かめるかのように、その鏝の如き両爪を打ち鳴らし、機体を揺する。目の前の敵が見えていないかの如く、ただ茫然と己が自由を確認する『狂戦士』に、ジェイは一層の不気味さを覚え、戸惑った。数秒迷った後に無線を手に取り、「エラ、しっかりしろ！」と、もう一度《デスステインガー》へと呼び掛けたが——

——不意にグンと機首を向けた《デスステインガー》が、ライガーへと飛び掛かる。

「……ウツ!？」

低い全高と扁平なボディながら、《デスステインガー》の全容は《ゾイドゴジュラス》にも匹敵する巨大ゾイドだ。地を這い進むその異様は、まるで巨大な影が足元から迫りくるようで——ジェイは思わず呆

気に取られる。それだけではない、八本もの多脚をせわしなく動かして襲い掛かって来たそれは、大型ゾイドとは思えない俊敏さを持つてジエイ機を狙った。

《デスステインガー》の巨体が跳躍して、頭上から《ブレードライガー》を急襲する。

咄嗟にライガーを下がらせたジエイ。難を逃れたが、先ほどまで居た地面が、《デスステインガー》の振り抜いた鉾腕『ストライクレイザーバイトシザーズ』によって抉り取られた。降り注ぐ瓦礫を避けながらも敵機を注視し、（なんだ、コイツ……！）と固唾を呑む。

《デスステインガー》はガイロス帝国の技術の粋を結集して開発されたという決戦兵器、与えられた火器の類も最高峰の物だろうに——目の前の機獣はそう言った利点の全てを放棄して、巨体に依る突貫攻撃を仕掛けてきたのだ。野生をむき出しにした挙動は、パイロットの——エラの操縦が機能しているとは、とても思えない動きだった。

制御不能の怪物、という言葉が脳裏をよぎり、恐怖がジエイの戦意を削いでいく。

グンと身を起こした《デスステインガー》が真っ赤な眼光を煌めかせて、再度《ブレードライガー》へと駆け出す。「ウワアア……ッ！」と慄いたジエイは、それにエラが乗っている事さえ忘れて、思わず銃器のトリガーを引いてしまった。

モンスル駐屯地で整備を受けた際に増設されたオプシオン・『アタックブースター・ユニット』が前方へと展開し、高密度ビームキャノン『AZハイデンシティブームキャノン』が撃ち放たれる。ボ、と爆ぜた眩い光弾は、《デスステインガー》の翳した両爪に突き刺さったが——射撃をモノともせずに進んできた狂戦士の一撃が、もろに《ブレードライガー》の機体を捉えて、弾き飛ばした。凄まじい衝撃。宙空を跳ねたライガーの機体は、格納庫の壁に激突し、その崩落に巻き込まれてしまう。

もう一度、《デスステインガー》の甲高い咆哮が啼いた。まるでジエイの《ブレードライガー》という獲物を仕留めて、歓喜したかのような嘶き。人の意思等微塵も感じない狂戦士を獣と確信し、ジエイが確

かな敵意を覚え始めたその時だった。

(……ジエ、イ……少尉……)

スピーカー越しに聞こえた、ノイズ交じりの少女の声。《デスステインガー》からの通信だった。

「エラ……？ エラなのかつ!？」

咄嗟に叫び返したジエイだが、反応は無かった。《デスステインガー》と繋がったライガーの通信回線からは、ザワと耳朶を擦るノイズだけが垂れ流されている。幻聴か、と疑った自分も居たが——それでもジエイの折れかけていた意思是、微かに力を取り戻していた。

エラは生きている。あの狂戦士の中に捕らわれて、その命を蝕まれているのだ。

偽善かもしれない。それでも、彼女を助けなければいけないという確固たる思いが湧いて、ライガーの操縦桿を握りこむ。

降り積もった礫塊を押しつけて再起動した《ブレードライガー》を、ジエイは『超越者』<sup>イモータル</sup>目がけて喚けた。今度は《ブレードライガー》が、真正面から《デスステインガー》の機体へと飛び掛かる。

真つ向から相對した《デスステインガー》、その両腕を前足で抑え付けて封じると、ライガーが威嚇の轟咆を上げて、狂戦士の貌を睥睨した。

「聞こえるか、エラ。すぐにそれから……《デスステインガー》から降りるんだ！」

キャノピー越し、《デスステインガー》の頭部を眼前に見据えたジエイは、激震に堪えながら叫んだ。ミシミシと軋むライガーの機体、長くは持ちそうにない。だが《デスステインガー》からエラを剥がす事が出来れば、狂戦士は再び眠りに付くはずだ——ジエイは、その可能性に全てを駆けた。

数秒の間の後、再びスピーカーが鳴る。今度ははつきりと、エラの声聞きとった。

(逃げて……私、貴方を殺してしまう……っ！)

「……ッ！」

ゾクリと粟立つ背筋。同時、《デスステインガー》の抵抗が一層強まって、《ブレードライガー》の機体を押し返し始める。増設バーニアを全開にしてその脅力を抑え込もうとしようとするが、抵抗も虚しく、ライガーの機体はどんどん傾いていき——ついには脚部のキャップが火花を上げて、焼け切れた。

「なんてパワーだ……ッ！」

オーバーヒートで出力の低下した《ブレードライガー》を、《デスステインガー》が強引に引き倒す。地べたに打ち付けたライガーを抑え込んだ狂戦士は、その腹部へと口腔の牙を寄せ、心臓部・ゾイドコアを喰らおうと迫った。咄嗟に危機を感じ取ったジエイは、バーニアを全開にして機体を引き摺り、どうにか拘束から逃れる。

「クソ……ッ、抵抗するって言うなら——黙らせるッ！」

《デスステインガー》から距離を取り態勢を立て直すと、ジエイはクワと激発した。もう一度凜猛な咆哮を上げた《ブレードライガー》が《デスステインガー》へと向き直ると、最高速度まで加速し、突貫を掛ける。

暴走狂戦士《デスステインガー》は人智を超えた魔獣だが、この数分間に渡る立ち会いで、ジエイは勝算を見出していった。

覚醒して間もない超越者<sup>イモータル</sup>は、その機能の全てを引き出せていない。動きは怠慢、火器を使用してくる様子もなく——ライガーの生命力に魅かれ、ただ我武者羅にコアを貪ろうと突っ込んで来るだけだ。それならば、ある程度の先読みが出来る。

もう一つ、ジエイは初撃で『ハイデンシティビームガン』を撃ち込んだ、《デスステインガー》の片腕に着目する。超重装甲で全身を固めた《デスステインガー》に、通常兵器は一切通用しない。先に狂戦士と交戦したというヘリック軍のエースパイロット・故アーサー・ボグマン少佐の戦闘記録を閲覧したことがあるが——現にこの『ハイデンシティビームガン』も、その装甲に傷一つ付ける事さえ叶わなかったとされている。《デスステインガー》に弱点があるとすれば、駆動節の自由度を確保するために設けられた、微かな装甲の隙間だけだ。

にも関わらず、ジエイの撃ち込んだ一撃は、《デスステインガー》に軽微ながらも損傷を与えている。暴走状態の最中にゾイド本来の野生を取り戻した狂戦士は、自己進化によってその形骸を変化させていた。延長された躰は帝国が本来の姿に合わせて与えた『超重装甲の鎧』では覆いきれず、通常兵器の有効な非装甲部分が大幅に増えているのだ。

今の《デスステインガー》は、最強のゾイドと目されていた暴走狂戦士とは程遠い、パワーだけが突出した野良ゾイドと変わらない。これならば、十分に勝機がある。

時間との闘いであった。《デスステインガー》は、かつてレオマスタターの駆る《ブレードライガー》と、ガイロス側の最強ゾイド《ジェノブレイカー》が二機掛かりで挑み、ようやくと撃墜した程の化け物である。超越者<sup>イモータル</sup>が完全に覚醒し、その機能を十全に使いこなせるようになるれば、《ブレードライガー》単機で挑むジエイの結末は目に見えていた。

「うおおおー！」

全速の疾走を駆けながら、もう一度牽制に『ハイデンシテイビーム』と、腹部の『二連装ショックカノン』を連射する。碌に狙いもつけずに撃ち込んだ砲撃では、重装甲で身を覆う《デスステインガー》を壊すことなどできない。だが——生物としての本能か、着弾し大地を穿った閃光に、狂戦士は一瞬怖じけた。両腕で頭部を庇い、数秒硬直した巨獣。その隙で、ジエイは渾身の一撃を見舞う。

背部の『ロケットブースター』、そして増加兵装『アタックブースター』を全開にして、《ブレードライガー》が跳んだ。格納庫の外壁を利用して、三角跳びの要領で軌道を変えると、二刀の『レーザーブレード』を展開、一気に《デスステインガー》へと斬り込む。  
「喰らえ……レーザーブレード・ストライクアタックッ！」

ジエイの渾身の気迫と共に——斬撃が超越者<sup>イモータル</sup>と交錯した。

光の弾丸の如く飛び込んだライガーの突貫は、ジエイの目論見通り

《デスステインガー》の機体を砕いた。咄嗟に翳された超<sup>イモータル</sup>越者の右腕と、それにほど近い位置に在った節足の内二本が千切れ飛び、爆散する。

苦悶に呻いた《デスステインガー》が、ガクと地面に倒れ込んだのを見越して「——エラ、戻るんだ!」と、ジェイはもう一度叫んだ。が——、

《デスステインガー》のキャノピーから、一層獰猛な燭光が零れると、その尾部が《ブレードライガー》へと向けられる。

「何——ッ!?!」

爆ぜる閃光に、ジェイは固唾を呑んだ。『AZ120mmハイパーレーザーガン』と、『同ハイパービームガン』、狂戦士の尾先端部に装備されていた無数の火器が、ジェイ目がけて一斉に撃ち放たれたのだ。既に《デスステインガー》の思惟は、自身に与えられた重火器の管制系を支配するに至っていた——想定外の事態に対応できず、ライガーは火線をもろに浴びて、弾け飛ぶ。

狂戦士の攻撃はまだ続く。残された左腕の大爪を振るい足元を抉った《デスステインガー》は、その巨体を地面の中へと埋めると、地中を潜行しながら《ブレードライガー》を目指す。その挙動は、先までの怠慢さとは打って変わって鋭く、被弾の衝撃で態勢を立て直すのにもたついていた《ブレードライガー》は為す術も無かった。

突如足元を穿って飛び出した《デスステインガー》が、己が大爪をハンマーの如く撃ち振るった。棒立ちのライガーは衝撃打ちのめされ、地べたを転がりまわる。

「ゴハ……ッ——、止める……止めるんだ、エラ!」

激震の中、息も絶え絶えのジェイが、うわ言のように呟いた。

通信はまだ繋がっているが、返事は無い。ただ《ブレードライガー》を翱ろうと迫りくる《デスステインガー》の威容だけが、ジェイの視界に押し掛かるように広がる。

「エラッ!……ダメなのか……ッ」

既に《デスステインガー》は、十全の力を取り戻しかけている。絶望に目を伏せたジェイは、通信機越しに囁く、消え入るようなエラの

声を聞いた。

(私、喰われてる……《デスステインガー》のゾイドコアが……私の軀を取り込んでいく……)

ノイズの中で、グジュと疼く鈍い音がした。

まるで獣が死肉を裂き、咀嚼するような粘ついた音が、か細い少女の声をかき消していく。「ああ……ああ……ツ！」と、絶望に喘いだジエイは、目の前で展開された《デスステインガー》の尾先でスパークする閃光に気づき、慄いた。

十字型に広がった狂戦士の尾の先端、その中心には、一際巨大な銃砲が備わっている。バチバチと粒子状の火花を吸い込んでいく大砲は、暗がりの格納庫内を昼のように染め上げた。人の理解を越えた超越者——<sup>イモータル</sup>神にも等しい存在が振るう『光の鞭』の存在を、ジエイは知っていた。

閃光が全て砲身に吸い込まれ、刹那、ブラックアウト。

次の瞬間——撃ち放たれた《デスステインガー》の『荷電粒子砲』が、《ホエールカイザー》の格納庫内を粉々に吹き飛ばした。



## ☒ 夜明け前

《デススティングァー》が撃ち放った光、『荷電粒子砲』の輝きがうねりを上げて、ジェイの世界を消し飛ばしていく。超越者イモータルの放った一撃は《ブレードライガー》だけを狙ったものではない、フルパワーの光線を鞭のように打ち振るい、《ホエールカイザー》の内壁を手当たり次第に粉碎した。まるで自身を閉じ込めた深淵の檻を突き崩すように、《デススティングァー》はその力で、世界を焼いていく。

「ウワアアアアッ！ ヴ……グ、アアアアアアッ！」

閃光の中で、ジェイ・ベックはただただ己が無力を呪い、絶叫した。咄嗟にライガーの『エネルギーシールド』を最大出力で展開したが——長くは持ちそうになかった。シールドが雷霆を受け止めた途端に計器は振り切れ、メインコンソールパネルが破裂する。光の奔流と轟音に視覚と聴覚を潰されて、ジェイはまるで白い無明の中に投げ出されたかのような錯覚を覚えた。

死ぬのか……俺は——と、白雷の渦に吞まれながら、ジェイは自問する。

それも良い、とさえ思えた。仲間を——コンボイもエリサも、そして今はエラを救えないまま、慄く事しかできない自分。戦いの中で積み重なっていく『業』を恐れて、軍から逃げ出そうとした自分が憐れすぎて、今このときを生きている事さえ腹立たしく感じる。これ以上生き恥を晒す前に、消えてしまえば——。

——否。

できなかつた。

コンボイもエリサも、皆仲間を——ジェイを生かすために戦った。その顛末がどうであれ、ジェイの命は、彼らが必死に足掻いて紡いでくれた『今』の上に立っている。それを無意味だと決めつけるような決断をするのは、それこそ言いようのない醜態だ。どこまでも弱い自分が空しくて、「ウウ……ウウツ」と、ジェイは堪えられない嗚咽を漏らした。

火花の上がる自機のコンソールを、ゆつくりと撫でる。この《ブレードライガー》だってそうだ。何度もへし折れそうになったジェイの闘志を底いながら、ライガーは今も戦ってくれている。動悸を堪えるように蹲ったジェイが、もう一度苦悶の雄叫びを上げた、その時だった。

ボツ、と、歪な破裂音が爆せて、ハタと面を上げる。

最初、荷電粒子の余波に耐えきれなくなった『Eシールド』がショートしたのかと疑ったジェイだが——そうではない。むしろ目の前を覆った稲妻の層が薄れて、微かだが辺りの様子を把握できるようになっている。

数分間もの間照射され続ける『荷電粒子砲』によつて、既に《ホエールカイザー》の原型は完全に失われていた。崩落した天蓋の先から月光が零れ、光の柱が藍の空を割くように、悠々と立ち昇る。

そして——閃光の根本で、《デスステインガー》の巨体が、ガタと痙攣していた。

爆発を起こしたのは紛れもない、イモータル超越者の躰、その尾部であった。《デスステインガー》——覚醒し、異常な速度で自己進化を再開したそのゾイドコアから生成されるエネルギーは、既にガイロス帝国の想定した機体ポテンシャルを、遙かに上回る物に達している。無尽蔵に吐き出される大出力『荷電粒子砲』は、高まり続けるエネルギーを処理するため、《デスステインガー》の防衛本能が働いた結果であった。

だが、最大出力での長時間発射は、既に機体の限界照射時間をとうに上回っており——ついには砲身が溶け、過電圧を抑制するコンデンサーが焼き切れた。行き場をなくした荷電粒子が逆流し、《デスステインガー》を内部から焼き尽くしていく。

「ギイ……イイヤアアアッ……！」

苦悶にガタガタと震える《デスステインガー》からこの世の者とは思えぬ凄惨な絶叫が響き渡った。《ブレードライガー》のコクピットで、スピーカー越しに爆ぜた断末魔は、イモータル超越者と一体化したエラが、異

常なまでの高熱を溜めこんだゾイドコアの中で、焼き殺される声だった。赤熱した乗機を上げて、徐々に溶解していく狂戦士の姿。

命の灯が消えるかのように、徐々に薄くなつていく荷電粒子の帯。

数秒の後——『<sup>イモータル</sup>超越者』は、呆気なく事切れた。

「ハッ……ハッ……」

ジェイ・ベックはただ茫然と、眼前に広がる惨状を見渡す。

荷電粒子砲と《テスティング》の自己崩壊の余波を受けて、《ホールカイザー》の残骸は完全に崩落した。高熱でグニャグニャに歪んだ骨組みだけが夜空に向けて力無く伸びる様は、この地で朽ちた<sup>イモータル</sup>超越者の、そして『エラ』と呼ばれた少女の、墓標にも見えた。

「エ、エラ……」

激戦でやつれた《ブレードライガー》をゆっくりと機動させて、ジェイが凶戦士の残骸に機体を寄せようとする——一筋の光弾が伸びて、ライガーの横腹を突き刺す。

衝撃に揺れるコクピットの中で、ジェイがどうか火線の先を仰ぎ見ると、漆黒の高速ゾイドが、ジェイの《ブレードライガー》を睥睨していた。精悍さの中に、どこか狡猾な印象を塗す、細身の猛獣型戦闘機械獣。ガイロス帝国の《ライトニングサイクス・カスタム》。一目見ただけでその名が脳裏に弾ける。誰が乗っているかは、考えるまでも無かった。

「<sup>イモータル</sup>超越者……思ったよりも使えないか」

スピーカー越し、シルヴィア・ラケーテ少尉の退屈そうな声が、ジェイの耳朵を擦る。

「——同時、学ばせてもらいました。如何に優れたゾイドと言えど、やはり人の思惟による制御が無ければ、いずれは身を滅ぼしてしまう。エラは<sup>イモータル</sup>超越者に受け入れられたけれど、それはあくまで彼が失った命の一部を補うパーツとして必要とされたに過ぎない」

シルヴィアの戯言を無視して、ジェイは尚も《テスティング》の

亡骸に寄ろうとする。自失状態にあったジェイだが、ただ一つだけ――せめて少女の亡骸を見つけて、吊つてやりたかった。すると、もう一撃。サイクスの撃ち放った『パルスレーザーライフル』が、今度は《ブレードライガー》の動力中枢を撃ち抜いた。

「貴様……っ」

みるみるパワーダウンしていく機体が崩れ落ちぬよう、必死に操縦桿を手繰りながら、ジェイはシルヴィアを睨み返す。「……見ていたのか。お前の気まぐれで蘇った《デススティングガー》が、エラを道連れに滅びていく様を――お前は、ただ見ていたのか」と、堪えきれぬ激情を滲ませたジェイ。ラケーテはそれを意に介さぬまま、ケタケタと笑った。

「この顛末は、私にとって朗報です。機体性能の強さだけではない、パイロットと真に同調する事こそ、ゾイドの可能性を引き出すのだと、<sup>イモータル</sup>超越者とエラが身を持って教えてくれた。だというのならば――私と《ライトニングサイクス・カスタム》に適う者などいない」

「――貴様は、こんな事をするために……そんなつまらぬ自尊心を満たすためだけに、エウロペまでやって来たのかッ！」

愉悦に囁るシルヴィアの声が、ジェイの怒りの臨界点を煽る。激発が、二人の決闘の火蓋を切つて落とした。

死に態の機体を引き摺りながら、《ブレードライガー》が怒りの咆哮を上げた。《デススティングガー》との死闘で各所に機能不全を起し、また先の奇襲を受けて、性能は既に万全時の半分も引き出せないだろう。それでも――ジェイは残った最後の敵・シルヴィアの《ライトニングサイクス・カスタム》へと挑みかかった。

『レーザーサーベル』を剥き、その首筋目掛けて跳躍したライガー。サイクスのコクピット、モニター越しにその鬨気を浴びたシルヴィア・ラケーテもまた、ニヤと破顔して、それを迎え撃った。

「来なきいな、《ブレードライガー》。そしてスターク・コンボイ少佐のように、私と《ライトニングサイクス》が生きる野生の、糧となりなさい」

膂力を生かして後方へと飛び退いた《ライトニングサイクス》は、そのままライガーから距離を取ろうと、グルと背を向ける。「逃がすものか……！」と、猛ったジエイは、『アタックブースター』を全開にして、それを負った。全速の疾走、崩落した《ホエールカイザー》が形成する『鉄塔の森』から飛び出した、二機の高機動ゾイド——《ブレードライガー》と《ライトニングサイクス》は、そのまま月下の荒野を駆けて、電撃戦を展開する。

目前に揺れる敵機の像を見据えて、ジエイはバーニアの出力を最大にした。アタックブースターでカスタマイズされた《ブレードライガー》の機動性は大幅に強化され、シルヴィア機《ライトニングサイクス・カスタム》のそれすら、僅かながら上回っている。

十と数秒チエイスの末にサイクスを捕えた《ブレードライガー》は、その横腹に渾身の当身を見舞って弾き飛ばした。土埃を上げて転倒した《ライトニングサイクス》、畳み掛けようと、『ストライククロー』を煌めかせた《ブレードライガー》が、再度飛び掛かるが——、「フフ……ッ」

シルヴィアの高揚に合わせて、《ライトニングサイクス》もまた力を取り戻す。態勢を立て直すや、《ブレードライガー》の爪撃を紙一重で躲し——代わりその牙で後ろ脚に喰らい付き、投げ飛ばした。

「ウワアア！　クソ……ッ！」

激震に見舞われながら、ジエイはシルヴィアの反応速度に舌を巻いた。半年前のオリンポスでの死闘を経て、ジエイは《ブレードライガー》の思惟を理解し、その激情を抑制しながら力を引き出せる境地に到達している。マスターリンク、と称されるそれは、数多くいるゾイド乗りの中でも一握りしか到達する事の出来ない物のはずだ。それを——ライガーの損傷が重んでいるとはいえ、ジエイの反応をさらに上回るシルヴィアの技量は、尋常ではなかった。

大地を擦りながら吹っ飛んだ《ブレードライガー》に、サイクスの放った追撃の『パルスレーザーライフル』が来る。爆ぜる砲撃を見据えながら、ジエイもまた同時にアタックブースターを展開。『ハイデーンシティブームキャノン』を発射し、迎撃を試みた。

二つの光線は交錯し、ほぼ同時に両機へと到達する。

ジェイは『エネルギーシールド』で砲撃を受け止めたが、シルヴィアもまたグンとサイクスの機体を屈ませて直撃を避けていた。紙一重の攻防の中、「グッ……」と息を呑んだジェイに対して、シルヴィアが快哉を叫ぶ。

「無駄だ、私は、何人にも負けはしない——私こそ、誰よりも優れたゾイド乗りなのですッ」

ジェイが砲撃の応酬から立ち直るよりも遥かに早く、《ライトニングサイクス・カスタム》は次の行動に転じていた。頭部に装備された、『二連装バルカン砲』の牽制射撃。大型ゾイドの装甲を目標にするには貧弱すぎる火砲ながら、真正面に見据えられたジェイ機は視認性のために最も強度の低くなっているコクピットハッチ部分、『キャノピー』パーツでそれを受けそうになる。

咄嗟に機首を下げて凌いだジェイだが——砲撃は変わりに鬣上部に備えられ、『Eシールドジェネレーター』を破碎した。これでもう、サイクスの主砲を凌ぐ手はない。

「グッ……クッ……！」

動揺し、たじろいだジェイの思考が、一瞬停止した。

コンマ数秒棒立ちになった《ブレードライガー》、そしてその刹那の怠慢が、戦いの形勢を大きく傾けた。ググ、と四脚をバネにした《ライトニングサイクス》が渾身の跳躍を見せ、最大の兵装『ストライクレーザークロー』を持ってライガーの懐へと斬り込んだ。

「フフ——シャアアアッ！」

轟音が爆せて、ライガーの機体が傾いた。

サイクスの渾身の爪撃が《ブレードライガー》の横腹を抉り、『レーザブレード』とアタックブラスターを備えたアーム・ユニット、その片方を振り切る。中破し、地べたへと打ち付けられた《ブレードライガー》の中で、ジェイは絶望に咽ながら絶叫した。

「ああ、よかった。私は、あなたの激情よりも強かった」

沈黙した《ブレードライガー》に、ギラと輝く双眼を向けた《ライ

トニングサイクス》が、勝ち誇ったかのような緩やかな足取りで迫りくる。「私も、ヘリックの方々からすればお尋ね者でしょうからね、これでお暇します。まだ捉えられるわけには行かない……私は生きてもっともつと強い『ゾイド乗り』になる」と、静かながらに語ったシルヴィア・ラケーテは、ゆつくりと主砲の砲口をライガーのコクピットに向けた。

「ウ……ア、グウツ」

目前に迫る『死』の深淵だけが、ジエイを支配していた。目を伏せると、ニザム高地で彼女の手に掛けられたコンボイ小隊長の機体が炎上する様が、鮮明に浮かび上がる。もうすぐ自分も同じ焔に包まれて、消え去ってしまうのだろう。

頑なに『力』へと拘るシルヴィアが、ジエイには理解できなかった。ジエイや仲間達のような友愛の念も、ガース・クロイツやレンツ・メルダース、相対してきた『クロイツ』のような軍人の責務もない——ただ享楽のために戦うシルヴィアに殺される自分が、やるせなかった。「どうしてこんな事が出来るんだ……お前、精神状態おかしいよ」と、無念をこちたジエイ。

シルヴィア・ラケーテは応えなかった。ただ無言で微笑み、止めの一射へと繋がるトリガーへと指をかける。今度こそ最後だ、とジエイの心は強張り、無我夢中の悲鳴を上げた。

次の瞬間——ボツ、と細かな爆炎が鳴った。

戦場を薙いだか細い光は、崩落した《ホエールカイザー》の中から爆ぜた、蒼白い光線だった。真っ直ぐに伸びた帯はまるで流れ星の如く、ほんの数秒間だけ煌めいた幻——それが、《ライトニングサイクス・カスタム》の後ろ脚を掠めていた。

「え——、何っ!？」

戦いの中で、初めてシルヴィアが動じていた。火線の先、瓦礫の中を拡大して見ても、新たな敵機の影など見当たらない。モニターに移りこむ先には、ただ一機——自己崩壊を起こして朽ちた《デスステイ

ンガー』が、へばり付いているだけだ。

狂戦士の亡骸。その尾部に備えられた、グニャグニャに曲がった砲塔の一本から、微かながら噴煙が上がっているのに気づいて——シルヴィアは刹那呆けた。

「——ウ、ウオオオオオオッ！」

響き渡る気迫が、彼女を引き戻す。グルと仰ぎ見た先、今度はジェイの《ブレードライガー》が跳躍した。デッドウエイトと化したアタック・ブースターを切り離し、残された一本の『レーザーブレード』に全エネルギーを集中させたジェイは、シルヴィアのサイクスへと最後の突貫を掛ける。「——オオオオオオッ！」と、もう一度ジェイの気迫が木霊し——それはまるで、シルヴィア・ラケーテ少尉の時間を縫いとめたかのように、彼女から思考の自由を奪った。

斬撃が、交錯する。

剣閃が《ライトニングサイクス・カスタム》の、パックパックを横断した。主砲とブースターユニットを兼ね備えた機体中枢が破壊されて、周辺回路まで誘爆する。小刻みに爆ぜた衝撃は上半身とパックパック、そして後脚部を連結する機体腰部の駆動節を砕き——三つに裂けた《ライトニングサイクス》の機体は、苦悶の断末魔を上げながら荒野へと散らばった。



## ☒ 暁に墜つ

いつの間にか、藍色だった空が薄つすらと白んでいる。

長かった夜が、明けようとしていた。「ハッ……ハッ……」と、荒い息のまま、ジエイ・ベックは瓦礫の中の超越者イモータルの残骸に目を凝らす。

機体は、完全に碎け散っていた。《デステインガー》という肉体と、エラを失った『真オーガノイド』のゾイドコアは、再び仮死状態へと立ち戻り、崩落していく瓦礫の中へと沈んでいく。前人未踏、ガイロスもヘリックも立ち入らぬ西エウロペの砂漠で眠る彼らは——おそらくは二度と、目覚める事も無いだろう。

あの時、ジエイは確かに見た。

《ライトニングサイクス・カスタム》に追い詰められた彼を救った一陣の閃光は、《デステインガー》が撃ち放った砲撃だった。それは単に、死に瀕した『凶戦士』が見せた生への執着——惨めな獣の足掻きだったのかも知れない。だがジエイには、最後の最後でエラが自らを助けてくれたようにも思えてならなかった。

いつもそうだった。『グラム駐屯地』で《セイバータイガー》と戦った時も、オリンポスの山頂で《ブラックオニクス》と戦った時も——そして今も。仲間達が身を呈して庇ってくれたから、彼は今も、此処に居る。

（強いからじゃない。誰かに守られてばかりで……憐れなくらいに弱いから、俺はこうして、生き延びている……）

堪えきれぬ葛藤を噛み締めながら、ジエイは《ライトニングサイクス》へと振り返える。

大破し、停止した機体のコクピットハッチが開き、ズルと濡れ雑巾のような気だるさで、シルヴィア・ラケーテが地べたに転がり落ちた。ドサと土埃を上げた彼女の腹からは、赤黒い粘液が滴り落ちており——致命傷だ、その生い先が長くないのは、一目で見て取れる。

死に態の躰をヨロと起こしたラケーテは——笑っていた。《ブレー

『ドライガー』を見上げた彼女は、振り返った口腔から湧き上がる血潮を気にも留めず、声を上げてただ笑う。

「シルヴィア……」

シルヴィアの躰がフラと揺れる度に、その腰からキラと、銀の雫が零れ落ちる。まるで彼女に喰らわれた者達の魂が解放されていくかのよう——集めた戦利品の認識票が、一つ、また一つと地に落ちていく。

シルヴィアの姿をジッと見据えたまま、ジェイもまた乗機のキャノピー・ハッチを開けた。激戦で中破した『ブレードライガー』のコマンドシステムは、既にフリーズしている。ホルスターから自動小銃を引き抜くと、ジェイは機体を降りて、フラと揺れたシルヴィアを追った。

「——シルヴィア——」

荒野を駆けたジェイは宿敵の名を叫ぶと、一切の躊躇なく自動小銃を振りかざし、そのトリガーを引いた。

二度、三度と銃声が重なり、一発がラケーテの肩を、残る二発が彼女の素顔を隠したヘッドギアを撃ち抜き、砕く。衝撃でグラとよろけた彼女に追い継ると、その胸倉をつかんで引き寄せ、鉄拳をねじ込んだ。

エラの仇、コンボイ小隊長の仇。そして部隊を離散させ、エリサや、グロックとの別離を作った遠因——ジェイを苦しめた葛藤の全てが、このシルヴィア・ラケーテのせいに思えた。倒れ込んだ彼女の細身に馬乗りになり、「貴様さえいなければ……ッ！」と、激発したジェイが、その喉元に銃口を宛がった時だった。

ヘッドギアが外れて露わになった、シルヴィア・ラケーテの素顔が目につき——ジェイは思わず手を止める。

「……なんだ、お前は……」

脳天まで駆けあがった怒りが、一気に白んでいく。急激に胸中を侵食していく虚脱感に呆けながら、ジェイは呟いた。

金髪をバサと抜げて倒れ伏したシルヴィア・ラケーテは、まだ年端も行かない少女のようにも見えた。ジェイやエリサよりも年下、下手をすればエラと同じか、それより一つ二つ年上くらいの——人形のように整った顔立ちの女性。陽射しの乏しいニクス大陸に住まう者達には多い、白い肌と紅い瞳の彼女は、一見すれば雪の妖精とさえ錯覚するだろう。

そんな可憐さを醸した少女の貌が——額から頬に至るまで、血と膿を零す無数の疱瘡に侵され、爛れている。

歪な傷は、彼女に施された強化手術の弊害だった。

『パイロット・デザイン』——搭乗するゾイドとの同調率を高めるために、そのゾイド因子の一端を受容体として脳細胞に移植する、というその技術は、帝国がエウロペの古代テクノロジー『オーガノイドシステム』を解析するために行った人体実験の中で生まれた副産物である。同室のゾイド因子を共有する事で機体とパイロットの精神リンクは驚異的な値まで高まる、提唱者ヘルマン・シユミット技術大尉の思惑どおり、『パイロット・デザイン』技術はゾイドの操作性を大幅に引き上げたが——被験者の多くは異種金属細胞の拒絶反応によって変調を来たし、死んでいった。

そして、このシルヴィア・ラケーテも同様——移植された金属細胞が体内で異常増殖した結果、脳を、頭蓋を侵食し、ついには表皮質を突き破って、癒えぬ疱瘡を形成している。

ラケーテの素顔はジェイから怒りを吸い取り、哀愁と微かな憐情さえ抱かせた。「どうして……そんなにまでなって、お前は、何を——」と言葉を呑んだジェイに、シルヴィアは口元をニヤと歪めて、静かに応じた。

「……私は、『最高のゾイド乗り』になりたいの」

返ってきたのは、何度となく語られてきた、彼女の願望。「ふざけるな！ この期に及んでまだ、狂言で思惟を濁すつもりかよ」と苛立ったジェイに対し、シルヴィアは真っ直ぐに視線を射して、頭を振る。「……私、ふざけてなどいないわ。誰よりも強ければ、何も失う事はない。野生と完全に同化していれば、恐怖に苛まれる事もない——強く

在る事こそ、私達ゾイド乗りが感じる、戦場の無情や恐怖から逃れるための、これ以上ない術ではなくて？」

「……っ」

予想だにしない言に、ジエイの時が止まる。「何を、分からぬことを——と遮ろうとしたジエイに、「いいえ、貴方に分からないはずがない」とシルヴィアが言葉を被せ、跳ね除ける。

「——知った口を利くな！……お前みたいな人間が——俺から皆を奪った奴が、どうして……俺と同じ葛藤を語るんだよ！」

激発したジエイを、シルヴィアが詰り返す。

「驚きますか？ 私のような人間は、恐怖など感じない、と？ 貴方と相対してきた敵達は、死線飛び交う戦場を楽しむ戦闘狂ばかりだ——そう決めつけて、戦ってきましたか？ だとしたら貴方、高慢が過ぎるわ」

喀血し、口元を真っ赤に濡らした彼女に、ジエイは慄く事しかできない。

その語気は相変わらず淡々としたもので——嘘だ、と、ジエイは胸中で叫んだ。戦場を楽しんでいる素振りを見せ、多くの仲間を殺したシルヴィアが、戦場を強くなるための格好の場とまで断じた彼女が、人波の葛藤を見せるはずがない。ジエイを翻弄するため、彼女は言葉を武器として使っているだけだ。そのはずなのに——素顔を晒した彼女からは、かつて醸し出されていた異質さも、不敵さも感じない。故に、それが酔狂ではない、シルヴィア・ラケーテの正真の意に思えて、戸惑ってしまう。

「私の方が、強かったのに。貴方の怒りを越え、喰らう事で、私は生き残れるはずだったのに。運命のいたずらが私を殺して、貴方を生かそうとしている……理不尽だわ、そんなの」

「……止めろ」

「さあ、私を殺して御覧なさい。貴方の手で、それが出来るというのなら」

「——黙れ！ それ以上喋るな！」

取り乱したジエイが、シルヴィアの口腔に小銃をねじ込む。が——

「、自分でも何故か分からないまま、ジエイはそのトリガーを引けずに、固まった。

痛みも感慨も知らぬ怪物だと思っていた。そうであれば良かったとさえ思えた。これまで戦って来た中で気にも留めなかった『相手方の事情』が、ジエイを引き止めている。彼を苛んだ仲間達の顛末、死への恐怖。敗北という危機に在ったガイロス軍人が、それを知らぬはずがない。

もし——ジエイと同様の、もしくはそれ以上の数の別離が、シルヴィアを変えたただけだとしたら？　もしも彼女が、今のジエイと同じ葛藤の末に凶行に及び、コンボイ達を死の淵に追いやったとしたら？　それを咎め挫く資格が、誰にであろうか。

最早、何処に終わりがあるのか分からなかった。

怒りにまかせてジエイがシルヴィアを追ったように、報復は連鎖し、更なる報復を呼ぶ——「どうすれば良いんだ。戦争は終わったはずなのに……どこまで行っても、争いは消えない！」と、出口の無い葛藤にジエイが喘いだ時だった。

「ええ——消える事など有り得ない」

シルヴィアの思惟受け止めると同時——己が腹部を刺し貫く鈍い痛み、ジエイの息が止まった。

シルヴィアの隠し持っていたであろう小型の軍用ナイフが、ジエイの脇腹に突き立てられていた。

ガフ、と吐血し微睡んだジエイを押しつけて、血濡れのラケーテが立ち上がり、「愚かな人。優しい故に——高慢な人。だからこそ貴方は、誰も守れなかった。生きる為に全てを投げ出し、全てを踏みつけ——これ以上ないほどの生き汚さを晒した『私』に、貴方は全てを食べられる」と、ジエイの、全てを否定する。

朝焼けに射されてグズと疼いた顔面の膿を手の甲で拭うと、シルヴィアは手を伸ばして、ジエイの首元を弄った。パイロットスーツの

襟元を裂いて、彼の首に掛けられていた認識票を引き抜くと、そこに刻まれた名前に目を細める。

「さようなら、ジェイ・ベック少尉。私、もう行かなければ。一度足を踏み入れた現世の地獄……戦乱の中を抜け出せないというのなら、せめて目一杯楽しむわ——『最高のゾイド乗り』になるために」

朦朧とした意識の中に、ラケーテの声が反芻した。

ドクドクと流れ出る血潮に命を吸われながらも、ジェイは必死に、彼女を引き止めようと手を伸ばした。瀕死のシルヴィアの足取りは緩やかだったが、ジェイのそれはさらに怠慢だった。最後の力を振り絞って翳した手は、空しく空を掴む。

シルヴィアの背中がユラと遠のいていく中、そのさらに先、地平の彼方より、機獣の遠吠えが重なった。一機、また一機と姿を現したのは、蒼い《コマンドウルフAC》。おそらくは、モンスル駐屯地より脱走したジェイに気づき追ってきた、『青の軍』の機体だ。乗り捨てられた《ブレードライガー》に気が付いたのであろう。ズンと静かな地響きがして、次々とこちらに機首を向け、駆けてくる。

——ジェイ・ベックの意識は、そこで途切れた。

## ☒ エピローグ — 終結 —

—— ZAC2101年 1月 ニクシー基地

正午の日が射しても尚、ニクシーの空は暗かった。幾重にも重なって上がる爆炎と噴煙が、青空を閉ざし、陽光をかき消す。暖かな日差しに代わりに当たりを満たすのは、この世界そのものさえ飲み込んでしまいそうな戦火だけだった。

そして、そんな焔の中にあっても『クロイツ』は——《ジェノブレイカー零式》は健在だった。

漆黒の機体に煤を浴びた『魔装竜』の継子は、傍から見れば死を司った黒髑髏の如き異様であろう。何十、もしかしたら何百とも知れぬニクシー基地守備隊の共和国軍ゾイドを蹴散らし、その残骸を足蹴にしながら、ブレイカーは咆哮する。

そして、そのコクピットに収まったレンツ・メルダース中尉もまた、愛機同様の獯猛な意気を吐いた。

「ガイロスの本隊との通信は、まだ取れないか。空爆の第二波が行われるとなれば、巻き込まれる前に離れておかねばなるまい」

彼を苛立たせるのは、ピーキーすぎる機体の運用によって蓄積した疲労だけではない。ニクス本国より攻撃に参加している部隊との連絡が取れないのだ。地上へと攻撃を行う新型の飛行ゾイドは無人機《ザバット》ばかりであり、母艦たる改造ホエールキング《モビーディック》は、高度三万メートル上空に鎮座している。戦闘ゾイド単位の通信機器では超高高度に存在する帝国本隊との通信は不可能であり、このまま連携が取れなければ、味方の爆撃で撃墜される可能性すらあった。

多少の無理が生じるものの、ニクシーの管制塔を制圧し、基地通信設備を掌握するのが最前であろう。幸い、《ザバット》の第一波爆撃での損傷は大きくないらしい、噴煙の中、に屹立する電波設備を、レンツは見据えていた。

「——ヌツ!？」

思慮に集中していたレンツの機体を、轟と鳴った砲撃が包み込む。大火力の長距離砲——『ロングレンジバスターキャノン』の一撃だ。守備隊の大半を壊滅させた《ジェノブレイカー零式》に、しつこく食い下がってくる機体が居た。ただ一機残った《ゾイドゴジュラスMk—II》が、怒りの咆哮を上げて迫りくる。機動力の差を生かして振り切ったつもりだったが、追いつかれたらしい。

二発、三発と撃ち込まれる砲弾に、大地が抉れる。チ、と舌打ちをしたメルダース中尉は、ブレイカーのバーニアを吹かしてホバー走行に移行させると火線を縫って機体を突貫させた。『エクスブレイカー』と『レーザーチャージングブレード』を展開し、最高速で《ゴジュラス》の喉元を狙う。

瞬間的に時速三百キロ強まで加速した《ジェノブレイカー》の突貫には《ゾイドゴジュラス》の俊敏性を持ってしても反応しきれない。ビームコートを纏った刃が、共和国の守護神たる巨獣の肩口を、喉元を串刺しにしたが——《ゴジュラス》は、尚も持ちこたえている。強靱な生命力と重装甲は、最新鋭のレーザーコートを備えた白兵戦用装備の一撃にも耐えぬいていた。

『エクスブレイカー』の刃を掴み取った《ゾイドゴジュラス》がそのまま機体を翻すと、ジャイアントスイングの如く、《ジェノブレイカー》を投げ飛ばす。全身の姿勢制御バーニアを吹かし、地面への激突だけはまのがれたブレイカーだったが——間髪入れずに、追撃の『ロングレンジバスターキャノン』が飛んだ。

直撃。大盾『フリーラウンドシールド』で受けとめたが——さすがに《アイアンコング》級の大型ゾイドさえ爆散させる《ゾイドゴジュラス》の主砲は堪えるらしい、特殊合金製の盾といえども焼け爛れ、使い物にならなくなる。

ブン、と破壊された大盾を煽いで、《ジェノブレイカー零式》が《ゾイドゴジュラス》を見据え直した。両足の『ウエポンバインダー』から複合光弾を掃射して、バスターキャノンの接続アタッチメントを砕



く。長射程の主砲を失った《ゾイドゴジユラス》から、バックダイブでさらに距離を取ると、両の足をフットロックで固定、その罅を大きく剥いた。

「……フーン！」

バチバチと爆ぜる稲妻の光球は、僅か二秒弱の間に臨界まで膨張し、ブレイカーの口腔より伸びたバレルの中に呑まれる。《ゴジユラス》の機体が、追撃を掛けようと前傾姿勢を取った瞬間、『収束荷電粒子砲』の雷霆が、その上半身へと突き刺さった。増設された『荷電粒子コンバータ』によって出力を強化されたブレイカーの『荷電粒子砲』は、《ゾイドゴジユラス》の喉元を穿ち、さらに上方へと薙かれる。

巨大なエネルギーの渦に、《ゴジユラス》の頭部ユニットをみるみるうちに溶解し——パイロットごと、完全に消し飛ばされた。

ヘリック共和国の象徴——頭部を失った《ゾイドゴジユラス》の骸が、墓標の如く立ち尽くす。それは此度の戦いにおける、ヘリック共和国の完全なる敗北を具現化したかのようで、レンツの高揚を、一層煽った。

「ンハッ——ハハハ」

求めていたモノ。与えられて然るべきモノでありながら、レンツの手より零れ落ちて久しかった、『勝利』の感動が、そこに有った。「勝った、勝ったぞ！ 我らの勝利だ！ 『クロイツ』としてエウロペで戦った我らが、ガイロス帝国・西方再進出の兆しを打ち立てた！ これは後世に語り継がれるべき、栄光の勝利だ！」と、自らを——共にこの場に戦った兵達を、そして、この誇るべき場にはせ参じる事の適わなかった主君、<sup>マイスター</sup>ガース・クロイツ少佐を賛美する。

——だが。

レンツ・メルダースの演説に応える声は、一つもなかった。

《ジェノブレイカー零式》の周りには、既に一機の友軍機も残ってはいなかった。空爆による指揮系統の混乱が在ったとはいえ、ニクシー

基地には暗黒大陸進出を見越して招集された、共和国軍主力部隊の戦闘機械獣達が集まっている。「クロイツ」の手勢は戦闘ゾイド三十機弱——一個中隊にも満たぬ戦力だ。多勢に無勢、乱戦の中でその大半が撃墜されたのは、至極当然の結果であった。

敵も味方も残っていない、虚ろな戦場のど真ん中にいると気づいたレンツが、数秒呆けた時だった。噴煙が晴れ渡り——次いで、空が啼いた。

晴天の空に雷鳴が響いたかのような、ぐぐもった天の悲鳴。それは超空の覇者として君臨していたはずの、《モビーディック》の上げた断末魔だった。いつの間にやら高度を下げ、目視できる程度まで高度を下げた灰色の戦艦は、朦々と上がる焰を引きながら、ゆっくりと崩壊していく。

《ザバット》による空襲の第二波を画策していた《モビーディック》艦隊に対して、ヘリック共和国軍は切り札たる大型空戦ゾイド《サラマンダー》を導入した。旧大戦以来、今日に至るまで共和国空軍最大の飛行ゾイドとされる、翼竜型戦闘機械獣。その最大航行高度は、《モビーディック》の君臨する高度三万メートルに到達し——撃墜を為し得た。超空の安全圏を失った帝国艦隊は、既に《サラマンダー》部隊の的にしかなり得ない。

既に、戦場の多勢が決していた。

ニクシーの中を、エウロペの風が薙いでいく。まるで激戦の終結を促すかのように駆けた風が、巻き上がった噴煙を掃い、晴天の空を権限させた。戦場の熱にうなされていたレンツは、ふと刺さった青空の眩さに眩み、眉を顰めた。それは、母国の西方大陸戦争敗北以来、ずっと忘れていた蒼さでもあった。

衝撃が、《シエノブレイカー零式》を襲う。

背後より飛び掛かった機獣の爪が、ブレイカーのバックパックを傷つけた。振り向いた先には、見た事のない白いライオン型ゾイドが居る。全身を白い装甲で覆った機体——《シールドライガー》とも《ブ

レードライガー』とも異なる、キャノピーではない、緋色に煌めく『双眼』を持った機獣。余計な火器も、爪牙以外の白兵戦用の兵装も無い。精悍さと、どこか有機的な印象を与えるそれは、おそらくはヘリック共和国の導入した新型ゾイドであろう。

もう一度、銃火による衝撃が弾ける。

真つ赤なカメラアイを煌めかせて《ジェノブレイカー零式》が踵を返すと、先のライガーと全くの同型機が、臨戦態勢を取って待ち構えていた。天使にも似た純白のゾイドが二機、煤に穢れた《ジェノブレイカー零式》を囲う様に――レンツには何故かこの機体達が、ただのゾイドではない、彼を迎えるために遣わされた何かに思えた。

白いライガーの機体には、それぞれ見慣れぬペイントが施されている。一機にはチェスの駒・ナイトを表す『馬の彫像』をあしらったパーソナル・マーキングが。そしてもう一機には、蒼い盾と獅子の紋章――共和国軍最高の高速ゾイド乗り・『レオマスター』の称号たるエンブレムが刻まれている。いずれも『最高のゾイド乗り』に王手を駆けた凄腕が駆る機体、その証だった。

連戦の消耗で、機体エネルギーの残量は半分を切った。先の奇襲でジェネレーターも損傷し、『荷電粒子砲』の使用もおぼつかないであろう。だが――それでもレンツは口角を歪め、「――ハハ」と笑つてのけた。

「――私こそ、『ニクシーの騎士』だ」

レンツは高らかに宣言した。既に己が生き死にへの関心も、勝利に対する渴望も無い。「……ここで私を討った者は、歴史に名を残すであろう」と、独り言のように呟くと――レンツ・メルダース中尉は《ジェノブレイカー零式》の機体を力強く始動させ、二体の『白銀の獣』へと挑みかかった。

それから二時間の後、『クロイツ』は壊滅した。

## 第四部：ニクスへの旅路

### ① —プロローグ—

—ZAC2101年 8月 北エウロペ大陸・ニクシー基地

久方振りに乗り込んだ戦闘機械獣のコクピット、キャノピー越しに広がる視界は、記憶していたそれよりもずっと狭く感じられた。息苦しさを堪えながら、ジェイ・ベック少尉は、砂塵舞う演習場を駆ける演習相手のゾイドへと目を凝らす。

バーニアを吹かし、軽やかな足取りで荒野を行き交う猛獣型戦闘機械獣は、彼のよく知るシルエットの機体だ。《ミラージュ》のコードネームを与えられたそれは、ジェイが愛用した高速ゾイド《ブレードライガー》と同型機である。アーリータイプ・量産型双方の稼働データを元にシステムを調整し、操作性を改善した機体には、武装も最良の物が与えられていた。オプション兵装『アタックブースター』のアップデート版も標準装備した、言うなれば同モデルの決定版である。

（《ミラージュ》、良い動きをしているな——歴戦のライガー乗りたる君の目には、どう映る？ ベック少尉）

ニクシー基地司令本部よりの通信。此度の評価試験の指揮を執るグレイ・レナート大佐の声が響く。

「ええ。自分も、申し分ない性能と考えます、司令」

と、ジェイは当たり障りのない回答を寄せた。

長きに渡る謹慎を解かれたジェイに与えられた最初の仕事は、《ブレードライガーミラージュ》の最終動作テストにおける仮装敵機役<sup>アグレッサ</sup>。実戦を想定した演習の相手役を務めながら、機体の挙動に不審が無い<sup>アグレッサ</sup>か、目ざとく観察するよう言い付けられていたが——粟立った心で、久方振りにゾイドを動かしているのだ、真つ当に应对する余裕など無い。

グンと加速した純白のミラージュ・ライガーが、眼前に迫りくる。

機体を動かしているテストパイロットの腕も、相当に良いらしい。展開された『レーザーブレード』を避けられず、すれ違いざま、ジェイ機の脚部駆動節が切り落とされた。

ガクンと傾いた衝撃に奥歯を噛み締めていると、ジジ、とざわついた無線越し、（——そこまでだ。これにて、『ミラージュ』の最終稼働試験を終了する）と、レナート大佐の号令が鳴った。

システムフリーズのアラーム音が鳴り響く中、フツ、と短い溜息を着いて、ジェイは額を拭う。任務から解放されると——胃の腑に掛かった不安の圧も、一層強く感じられた。

ヘリック共和国軍がガイロス帝国の本土・暗黒大陸ニクスに進出して、早二か月。

戦線では、尚も一進一退の攻防が続けられている。今しがたニクスで完成した、三十機強の『ブレードライガーミラージュ』も、苦戦する前線への補充戦力として贈られる事が決定していた。純白の中に赤の差し色が映える『ミラージュ』の装甲は、一見共和国軍のゾイドらしからぬ派手な装いであるが、ヒロイックな外観が、逆に件の機体の特別感を煽ってもいる。

ズラと並ぶ新型『ブレードライガー』。しかし、格納庫に納まった機獣達を見上げたジェイ・ベックにとって、それは勇壮さなど欠片もなく——むしろ大げさななりが滑稽にさえ思えてしまう。如何に新型機を見繕っても、士気を高めるような雄姿を晒しても、戦場に立った兵士の多くはその恩恵を感じないまま果て、死んでいくのだから。

ジェイの胸に問えた物——今朝方聞いた、グロック・ソードソール中尉の訃報。

今月初頭。ニクス戦争の開戦以来共和国の前線を支えた特務高速戦闘部隊『閃光師団』<sup>レイフォース</sup>が、正体不明のゾイド部隊『鉄龍騎兵団』<sup>アイゼンドラグーン</sup>と交戦し、大打撃を受けた。西方大陸での戦時中、長きに渡ってジェイと行動を共にしたグロック中尉も、同部隊のライガー乗りとして加わっていたのである。

『鉄龍騎兵団』<sup>アイゼンドラグーン</sup>は、帝国正規軍には配備されていない未知のゾイド、

磁気嵐に似た電波障害・操縦阻害を巻き起こす未知の電子兵器を駆使しており——グロツクは一切の抵抗も適わぬまま、殺されたという。疼いた胃の腑に手を宛がいがながら、ジェイは数秒目を伏せる。救いなど無い、幾重にも死線が重なる戦場が今も止むことなく広がっている——そう思うと、やるせなかつた。

「——先ほどは、素晴らしい立ち合いをさせていただきました。ジェイ・ベック少尉」

背後から、澄んだ女性の声が木霊する。

振り返ると、スラと背の高い、痩せた女性士官が立っていた。「……シオン・レナート少尉」と、ジェイはその名を呟く。二週間程前に本土デルポイ大陸から派遣されてきたこの女性は、先の演習において《ブレードライガーミラージュ》のテストパイロットを務めていた人物でもあった。

今年二十歳を迎えたばかりというシオン・レナート少尉は、どこか浮世離れた印象を与える少女士官だった。

身に纏ったのは、軍服らしからぬ華美な装飾の施された礼服。ヘリックシテイの『国立士官養成上級学校』の指定礼服で、旧大統領親衛隊の女性用制服——つまりは初代大統領夫人・ローザ・ラウリの軍服を模した物である。同校を主席で卒業したというシオンは、自身のキャリアに絶大な自負があるのだろう、ゾイドに搭乗する際も、決まってこの出で立ちを守った。パイロットスーツはおろか、メットすら被らない。

「エウロペ戦争を生き抜いたエースパイロットの胸を借りられて、良かったです。おかげで私も、持てる力の全てを尽くせた——この子達  
の力を十全に発揮して上げる事ができました」

ヒールを鳴らしながらジェイへと歩み寄ると、シオンは立ち並ぶ《ブレードライガーミラージュ》の機体を見上げた。一応の賛辞はあるものの、その言の裏には、『ゾイド乗り』として自身の方が尚優れている、という、彼女の絶大な自信が滲んでいる。

キャリアへの自負、力量への自負——いずれもジェイが信じられない

くなつて久しいモノだ。彼女の在り方に危うさを覚えたジェイは、「君は——優れたゾイド乗りになるだろう。でも、君のその才覚すら、戦場では絶対の存在に成り得ないんだ……くれぐれも、過信はしないで」と、つい口を滑らせる。

シオンはそれを負け惜しみと取つたのであろう、一層嬉しそうにはにかんで、「ええ——実戦で必要な物、これからじっくりと、お傍で学ばせて頂きます」と——そう言つて頷くや、クルと踵を返して手招きをした。

「……ベック少尉、指令室に。レナート大佐から、重要なお話があるそうですよ」

ニクシーの司令官室に赴いたジェイは、キイと椅子を鳴らして振り返つたグレイ・レナート大佐に敬礼をする。

「ああ——呼びつけてすまないね、ベック少尉」

柔和な表情を作つたレナート大佐は、娘と同じ手つきで手招きした。色白の肌に、温かな光を湛えたグリーンの瞳は、生来持ち合わせた気品と穏やかな性格をよく表している。

先の帝国無人艦隊による空爆戦で戦死したマクシミリオン・ペガサス中佐に変わり、このニクシー基地の司令官となつたレナート大佐だが——その人となりは大きく異なる。実直なペガサス中佐から、大らかなレナート大佐に統括者が入れ替わつた事で、基地全体の空気も、どこかゆつくりと流れるようになっていた。

指令就任以来、何かとレナート大佐はジェイを気に掛けてくれている。半年前、脱走の嫌疑から軍法会議に掛けられていたジェイは、本来なら銃殺刑も有り得る立場だったが——、このレナート大佐が取り持つてくれた。無断出撃は当時軍上層部の軽視していた『クロイツ』最終兵器の存在を危惧したが故であり、共和国はおろか、この惑星全体の脅威となり得る『真オーガノイド』の完全復活を未然に阻止した——ジェイの功績を強調し、彼の処罰を長期の謹慎処分までに減刑し

たのである。

大佐の懇意の理由は分からなかったが、彼の人柄を見れば、それが打算や悪意による物ではない、と、予想は出来た。故にジェイは、覇気を取り戻せないながらも、レナート大佐にだけは忠実であろうと心掛けていた。

「楽にしたまえ、ベック少尉。……どうだね、今回の演習でゾイド乗りとしての勘を、幾分か取り戻してくれていれば幸いだが」  
「はっ……」

レナート大佐の表情は変わらず穏やかなモノであったが、その視線は、どこか落ち着きが無い。何か持ちかけ辛い提案を言い淀んでいるのだろう、ジェイもその気に合わせて、厳粛な面持ちで応じる。

「最前線の状況は、把握しているかね？　　ようやくガイロスの根城、暗黒大陸ニクスへと歩を進めた我々だが——知っての通り、順風漫步とは言い難い。敵の本拠だ、地の利は向こうにある。それに——  
『鉄龍騎兵団』等と言うきな臭い連中が、エントランス湾周辺をうろついているのだ」

「前線の状況は、幾分聞き及んでおります」

「なら、察しているかな。進軍は、上層部の予想より遙かに遅い。このまま戦線が停滞すれば、ニクスには長い冬が訪れるだろう。そうなる前に決着を付けたい、というのが、本部の意向でね」

浮かない表情のレナートが、ジェイに一部のデータ綴りを差し出した。

『オペレーション・ラグナロク』  
「終末作戦」……ニクス大陸への、大規模な増援計画だよ。先に完成した『ブレードライガーミラーージュ』の部隊も、再編中の『閃光師団』の穴埋めとして、前線に出張るだろう」

言葉を濁した彼に、ジェイは大方の意図を察する。

「では……シオン少尉も？」  
「ああ……五日後には、第二〇三高速特務中隊——『ミラーージュ隊』として、ニクスに渡航する事になってる」

どこか疲れた風を滲ませた愛想笑いの後、「気の強い娘だね。元は『レイフォース・エンジェルズ』に入隊したがって、実戦経験が



少ないからと、ニクス進出の一陣から外されたんだ。それで今回の『ミラージュ隊』配属だ……自分の才を示す機会だと、意気込んでいるよ」と頭を振ったレナート。やがてスクと立ち上がって、

「単刀直入にお願いしよう……ベック少尉、君も『ミラージュ隊』に加わってくれないか？」

と、ジェイに問うた。

「それはつまり……シオン少尉を守れ、という事でしょうか？」

ジェイの確認に数秒黙り込んだレナート大佐だが、やがて「そう受け取ってくれて構わんよ」と頷いて、背を向ける。

「ミラージュ隊、などと恰好を付けていても、有能なパイロットの大半は『閃光師団』<sup>レイフォース</sup>に引き抜かれているのだ。烏合の衆で暗黒大陸へと渡るというのは、危険も多いだろう。歴戦のライガー乗りたる君が一緒なら、私の胃の腑に掛かる圧も幾分和らぐのだがね」

私情を持ち込まない、というのが高潔な軍人の在り方だというのならば、レナート大佐のそれは、軍人の風上にも置けぬ行いであろう。だが、ジェイはそんな彼の気持ちが良い分かった。

——それ故に、大佐の相談に即答する事は出来ない。

誰かを守るために戦う、と言う事。それが如何に難しいかをジェイは知っている。無情な戦場においてそれを為し得るといふ事が、どれだけ困難か——そして、事を為し得なかった時に残る傷跡が、如何に心を蝕むのかを。

黙りこくったジェイに、「少し、時間が必要だろうか？ 明日のこの時間に、また話をしたい。その時に君の返答を聞かせておくれ」と告げたレナートは、彼の肩に手を添えた後に指令室を後にした。

プシュ、と自動ドアが閉まる音を最後に、静寂が指令室を包む。

残されたジェイは、大佐が置いて行つた『終末作戦』<sup>オペレーションニラグナロク</sup>のファイナルを手にとった。鏡一枚目を捲ると、今回派遣される援部隊の編制と、構成員の名簿がズラと並ぶ。

大規模輸送作戦だ。ヘリックは予備戦力のほぼ全てを導入してでも、ニクスの冬が訪れる前に、此度の戦争を終局にこぎつけるつもり

らしい。

宛てなく追っていた名簿だったが、ズラと並んだリストの中の末尾の項目で、ジエイ・ベックは目を止める。綴りの最後に別紙添えされていたそれは、短く『特務隊』とだけ名付けられた部隊の構成員名簿。僅か二十名弱の名前の横には、皆一様に「第一種情報統制対象機密」と補足されている。

そして——リストの中にあつたとある人物の名前に気づいて、ジエイは目を剥いた。

エリサ・アノン少尉。

西方大陸での戦争中、長く連れ添った女性士官の名前だった。ジエイと共にエウロペのガイロス帝国軍残党の掃討任務に赴いた彼女は、酷い傷を負った末に、祖国デルポイへと戻ったはずである。

「そんな——エリサがまた、戦場へ……？」

感じる心すら忘れかけていたジエイの胸が、ズキと疼く。堪えきれぬ嗚咽に咽ながら、ジエイはクルと踵を返すと——考える余裕などない、速足で駆けて、先に部屋を出たレナート大佐を追いかけていた。

## ② 暗夜航路

——懐かしい光景が在った。

ミューズ森林地帯・バラータ基地の古びたゾイド格納庫の中で、ジエイは手に入れたばかりの新型ゾイド《ブレードライガー》の調整に勤しむ。午前中いっぱい稼働試験を終えて戻って来た彼は、昼食さえ忘れて愛機のコンソールパネルを叩き続けていた。

昼時だ、正午を回ったばかりの格納庫に、人の気は無い。

辺りにはキリと音を立てて回る、古びた換気扇の音と——そして《ブレードライガー》のコクピットの傍ら、ジエイの作業が終わるのを見守ったエリサ・アノンの鼻歌だけが、耳朶を撥った。

ふと手を止めて、ジエイは彼女を仰ぎ見る。

アイスの缶コーヒーに口を付けた彼女は、通気口の先、ファンの回転に合わせてチラと瞬きする陽を、一心に見つめている。ここ数日ずっと一緒に居たはずなのに、彼女の横顔を随分久方ぶりに見ような気がした。

「……休憩なさいますか？ ジエイ少尉」

ジエイの視線に気づいたエリサが、振り返り微笑む。日の光を浴びてキラと光った彼女の瞳が美しく——ジエイは数秒呆けた。ああ、と粟を食って頷くと、手を止め、スクと立ち上がった。

エリサと肩を並べたジエイは、「先に休んでいてくれて良かったんだよ？ 俺が好きでやってるだけなんだから、君まで付き合う必要はない」と、その横顔に問うた。

「大丈夫です、気にしないで……少尉が迷惑だと言うなら、止めますけど」

遠慮がちに微笑したエリサ。歩みに合わせてファと舞った、彼女の甘い匂いに気を取られて、目を伏せる。心地いい感覚のはずなのに、胸の奥から沸いた動悸が痛い。

「……迷惑だなんて、まさか。嬉しいんだ、傍に居てくれるだけで」

自然と、小恥ずかしいくらい素直な感想が口から出て、ドギマギする。慌ててエリサの表情を窺ったが——彼女はニコリと笑うだけで、ジェイに言葉を返さなかった。安堵する反面、彼女の答えが聞きたかった気もして、残念にも思う。

数秒の沈黙があつた後——「……ねえ、ジェイ少尉」と、エリサはポツリと呟いた。

「私、エウロペに来て良かったです。ジェイ少尉やレイモンド主任、グロック少尉に、ツヴァインさん——いろんな方に出会う事ができました。戦いに出れば辛い事だつて多いし、怖い事だつてあるけれど……こうやって過ごす束の間の安息は、掛け替えのない物です」

立ち止まり、クルと踵を返したエリサは、「ジェイ少尉、生きて帰ってきてくださいね。またこうやって……今度は、もつとゆつくりお話ししたいから」と、囁くような声で告げる。

胸を疼かせる動悸が込み上げてくるのを感じながら、ジェイは直ぐに頷き返して——、

「大丈夫、帰って来るよ。生きて帰ってきて、それで——ずっと君を守るよ」

——※※※——

——そこで、夢は覚めた。

重々しい重機の音が木霊する格納庫の片隅に、ジェイ・ベック中尉は居た。そこで、転寝してしまつたらしい。辺りを行き交う整備兵も、兵士達も——これから最前線の戦場へと赴く戦士達だ。皆一様に緊張の表情を湛え一心に積み込まれたゾイド達の整備へと勤しむ。そんな中で一人微睡んだジェイの姿は、異質だつたであろう、時たま足を止めては、ジェイの貌を訝しげに覗き込んでいた。

ジェイを乗せた《ネオタートルシップ》はニクシーの港を発ち——今、ガイロスの本拠・暗黒大陸へと続く大海原を進む。魔の海域『トライアングルダラス』によって、長きに渡って鎖されていたニクスへ

の旅路。だが、先に勃発したアンダー海戦の最中、ヘリック共和国軍は偶然にも、開け放たれた一筋の道へと辿り着いた。磁気嵐吹き荒れるトライアングルダラスの中を射した安全圏——死の国ニクスへと続く『暗夜航路』だ。

ああ、あれは夢だったんだ——と、徐々に醒めて来た思考が、ジェイを気落ちさせた。

此処はバラーンではないし、エリサ・アノン少尉もない。微睡の中で為された会話が本当に在ったモノか、それとも夢想の中でねつ造されたモノなのかさえ、今の彼にとってはおぼろげだった。おそらく、ここ数日頭から離れなかった彼女の名前が、こんな夢を見せたのだろう。

エリサの所在は、未だ不明だった。

ヘリック共和国の大規模増援輸送計画・終末作戦オペレーション・ラグナロクには、確かに

その名前が在ったが——ニクシー基地司令官グレイ・レナート大佐に問うても、答えは得られなかった。彼女の所属する『特務隊』については、大掛かりな情報統制が為されているらしい。デルポイ本土の、それも最高司令部を初めとした上層部のごく一部しか、その詳細を知らされていないという。

手掛かりは、何一つ無い。会える可能性は無きに等しかったが——何故だろう、それでもジェイは、騒ぐ心を抑えきれなかった。限りなくゼロに近い可能性だとしても、もう一度彼女に会えるかも、と思えば、この終末作戦オペレーション・ラグナロクに加わらずにはいられなかった。

もしかしたら、彼女に会って伝えたかったのかも知れない。エウロペの別離の際に為せなかった事を——夢の中で告げたように、ずっと守るよ、と、今度こそ。

「転寝なんて……余裕ですね、ベック中尉」

物思いに耽ったジェイを、カツ、と圧のある足音が引き戻す。

チラと一瞥した先には、踵の高い女性の軍用ブーツ。そこからスラ

と伸びた小奇麗な足が、彼の前に立っていた。

おもむろに顔を上げると——案の定、シオン・レナート少尉の白い顔が在った。

「私、中尉はこの作戦に加わるの、断ると思っていました。優秀なゾイド乗りだと聞いていたけれど——心を病んでいたのでしょうか？　いつもいつも、どこか怯えた目をしているわ」

柔和な笑みを浮かべたシオンだが、語気の強さがその真意を滲ませている。手入れの行き届いた金髪を、指先で弄んだ彼女は、相変わらずの高慢さで——ジエイの葛藤を見取った上で、嘲笑している風にも思えた。

「でも、そう言った鬱屈が人を弱くするとは、限らないんじゃないか？

レナート少尉」

挑発的な物言いをするシオンを諫めたのは、彼女の背後に立った一人の男性士官だった。大柄で肩幅のある黒髪の青年には、見覚えがある。ジエイやシオンと共にニクシーからこの《ネオタートルシップ》に乗り込んだ、タクマ・I・サンダース軍曹が、二人の会話に足を止めたのだ。

「万象を恐れないというのは精強なように見えて、同時に脆いものだ。より強大な力を前にした時に生き残れるのは、怖れを知った者の方だよ。度を超えた勇猛さは、時として最前の選択を選ぶための思考を奪いかねない」

先のニクシー攻防戦、タクマ軍曹は《シールドライガー》でガイロスの量産型《デスステインガー》と交戦し、負傷したという。その経験が骨身に染みているからこそその言であろう、柔らかな物腰ながら、彼の言葉は若輩のシオンを諫めるに、十分な風格があった。

ムツとしたシオンが、「上官に対して、口が過ぎるのでは？　タクマ・サンダース軍曹」と、鋭い視線を射す。怖じける風は一切なく、タクマもまた言葉を返した。

「そう言う貴方も、ベック小隊長に口が過ぎるでしょう。シオン・レナート少尉」

小隊長、という言葉がシオンを黙らせる。

ジェイもシオンも、そしてこのサンダース軍曹も、皆特務遊撃戦闘中隊『ミラージュ』の構成員として登録されている。三人は隊の最小の行動単位である小隊編成時に行動を共にする事となっており——ジェイがその部隊長として登録されていた。

シオンがジェイの指揮下に入ったのは、多分に彼女の父・レナート大佐の意向が影響しているのだろうが——先日の演習で打ち負かした相手であるジェイが先に昇進し、上に立つというのが、彼女のプライドを傷つけたのであろう。フン、と荒い息を吐いたシオンはそれ以上の問答をせず、クルと踵を返して愛機の調整に戻っていった。

サラと揺れたシオンの金髪を見送って後、「出過ぎた真似でしたか？ 中尉」と、タクマ・サンダースがジェイに寄る。彼の好意を嬉しく思いながらも、隊として行動を共にする際に遺恨があつて欲しくない、

「……彼女も思うところがあるんだろう。胸の内では、軍曹の意図を理解しているはずさ」と、フオローを入れた。

タクマもまた、それに同意するかのように頷いて、頭を掻いたが、「それでも、貴方が過少評価されているように思えて。超越者イモータル〈デステインガー〉を倒した英雄、『ブルー・ブリッツ』……クレイジー・アースーの獅子の紋章を継ぐのは、貴方かナイト・バイケルン曹長と思っていたものですから。ピーター・アイソップ大尉も優れたライガー乗りだと、認めはしますが」

「アイソップ大尉か……」

共和国軍最高の高速ゾイド乗り集団——レオマスター。その一角、アーサー・ボーグマンが戦死して以来、長らく空席であった『赤の紋章』の後継も、この終末オペレーションニラグナロク作戦の発動に際して選定された。ミラージュ高速隊の総司令官を務める、『幻の俊足』ピーター・アイソップ大尉。優秀なゾイド乗りではあるが、長らく本土防衛隊に所属していた故に実績に乏しく、また短気な性格で女性関係に多くの問題を抱える等、悪い噂も多かった。

クレイジー・アーサーの後継としてはこれぐらいの人物像が適任なのかもしれないが——他に有能なライガー乗りが居る、というのも事実である。タクマもそう考える一人なのであろう。

「ありがとう。でも俺は、アーサー・ボーグマンやナイト・バイケルンと並び立つようなゾイド乗りじゃないよ。《デスステインガー》を倒した訳でもない……いろんな人が身を呈してくれたから、此処まで死なずに済んでいるだけだ」

自嘲気味な笑みと共に頭を振ったジェイだったが、「それでも我々にとつて、『ブルー・ブリッツ』と一緒に戦えるのは心強い」と、タクマ・サンダースが振り返る。

彼の見据えた先では、ジェイが乗機として積み込んだ《ブレードライガーAB・アーリータイプ》が、整備兵達の最終調整を受けている。白い《ブレードライガーミラーージュ》の部隊中にあるそれは、まさしく唯一無二の『蒼い閃光』<sup>ブルー・ブリッツ</sup>として、存在感を示していた。

『ミラーージュ隊』の全員が、中尉の武運に賜れる事を祈ります。勝ちましょう……勝って、皆で祝杯を上げたい。我々が、半世紀以上続いた帝国と共和国の因縁に終止符を打つ英雄になるんです」

言い残して、タクマ・サンダースもまた、愛機の整備へと戻っていった。

「英雄に、か……」

と——去りゆくタクマ軍曹の背を見送りながら、ジェイはポツリと、彼の言葉を反芻していた。

ゴツ、と、ターゲットルシップを鈍い衝撃が襲う。『暗夜航路』を抜けて、再び強電磁波の吹き荒れる異常海域へと突入したのだ。旅の終わりに近い。暴風を抜けた先には異邦の地、ガイロス帝国の本土たる暗黒大陸ニクスが待ち構えている。

久方振りに感じた戦場の緊張感は、思った以上に苦悶を感じさせた。グズと胃の腑を煮込まれたかのような不快に、手が震える。

「戦争は終わらないものだ……英雄になりたいわけでもない。俺がこの船に乗ったのは、ニクスへの旅路を、選んだのは——」



荒い呼気に肩を震わせながら、無意識に視線を薙いでいた。船には『ミラージュ隊』だけではない、終末オペレーション・ラグナロク作戦で編成された幾つかの他部隊も乗り込んでいるはずだったが——彼の望む後姿は、何処にもなかった。

### ③ ミラージユ

——ZAC2101年 8月下旬 暗黒大陸ニクス エントラン  
ス湾沿岸

《ネオタートルシップ》がトライアングルダラスの暴風域を抜けると同時、『ミラージユ高速戦闘隊』の構成員は、ブリーフィングルームへと召集を掛けられた。ニクス大陸上陸まで一時間も無いというタ  
イミングでの、緊急の招集だ。固い表情で集まった一同は、隊の指揮  
を執るピーター・アイソップ大尉から、予想通りの言を聞いた。

「——よう。長かった船旅もようやく終わりと言った所だがな、到着  
早々に、一仕事してもらおう事になりそうだぜ」

年齢は三十代前半くらいであろうか、濃い眉と目鼻立ち、金髪を  
オールバックで固めた身なりは、噂に違わぬ伊達男で——しかし、そ  
の語気からは己が実力に裏打ちされた、絶大な自負を感じさせる。な  
るほど確かに、『レオマスター』に選定されるだけの威風がある男だ、  
と、ジェイは内心で評した。

アイソップ大尉の合図に合わせて、副官のコーネル・ロドニー大尉  
がバックスクリーンを操作する。映し出されたのは上陸予定地、エン  
トランス湾に築かれたヘリック共和国の駐屯基地である。

「これは……噴煙ですね。襲撃されている」

ジェイの横、映像に目を凝らしたタクマ・サンダース軍曹が一人ご  
ちる。「そのとおり」と、彼の言を拾ったアイソップが頷いて、  
「どうやら、帝国強襲部隊による襲撃の真つ最中らしい。なんせ暗黒  
大陸はガイロス野郎の本拠地だからな、こんな事は日常茶飯事だ。今  
日からはぐっすり眠れる日なんて無くなるぞ。覚悟しとけよ」

彼の冗談を遮るように、ロドニー大尉が言を継いだ。

「おそらくは陽動目的の襲撃であろうが……混戦の中で全隊の搬入を  
強行し、せつかくの増援を危険に晒したくは無い。我々『ミラージユ  
隊』が先行して上陸し、雑魚共の露払いを済ませる。総員、出撃する  
ぞ」

ミラージュ隊の士気は高かった。ロドニーの説明が終わると同時、全兵が椅子を経つて、一斉に敬礼を返す。一同に会わせて立ち上がったジェイは、もう一方の隣、「いよいよか……腕が鳴りますね」と囁いたシオン少尉に気づいて、視線を遣る。年若い少女士官は、高揚を抑えきれない、という風に口元を綻ばせ、強気な視線をジェイへと向けていた。

（マグネツサー・カタパルトシステム、オールクリア。ミラージュ高速戦闘隊、総員出撃せよ。繰り返す。マグネツサー・カタパルトシステム、オールクリア……）

繰り返しアナウンスされる出撃命令を聞きながら、ジェイは格納庫内、《ブレードライガーAB》のкокピットへと滑り込んだ。既に機付長の手によつて、ジェネレーターには火が入っている。操作パネルを手繰つて最終チェックを行っていると、ピーター・アイソップ大尉よりオープン回線で新たな指示が下された。

「各機、聞こえるか？ アイソップ隊が口火を切る。次いでロドニー隊、オサック隊、フェーン隊——」

「——ベック隊は？」

アイソップ大尉の声を、シオン・レナート少尉の通信が遮る。

数秒間を置いて、「ベック隊は最後だ」と、アイソップ。あからさまに不服そうな声で、シオンが「何故——ツ？」と、それに突っかった。出頭に指揮を遮ったシオンに面食らったのであろう、ハハ、と乾いた笑いの後、アイソップが応えた。

「何故って？ 簡単な話さ、レナート大佐のお嬢さん。白い《ブレードライガーミラージュ》の隊列のど真ん中に、一機だけ青いのが混じっていたら、見栄えが悪いだろう。『ブルー・ブリッツ』が行くのは、先頭しんがりか殿しんがり。先陣は俺が切る、じゃあ消去法で、ベック隊は最後。どうだ、簡単だろうか？」

シオンの呆然とした顔が、目に浮かぶ。

彼女がアイソップ隊長にこれ以上突っかかる前に、ジェイは「ベック隊、了解」と返答を返した。案の定、間髪入れずに個別回線が開か

れ——イライラと眉間を潜めたシオンの貌が、モニター越しに現れる。

「待つて。ベック中尉、私は納得できません」

「その必要はない。アイソップ大尉のジョークを真に受けるな」

「ジョーク？ ではそうでない、私達が殿しんがりになる論理的な理由を、大尉に確認するべきでしょう」

頭に血が昇ったシオンを、「……落ち着けよ、シオン少尉」と諫めながら、ジェイはゆつくりと《ブレードライガーA B》を前進させて、《ネオタートルシップ》のカタパルトデッキへと向かう。

「俺達に二クスへの渡航経験はない。どんなアクシデントがあるか分からないし——君は初めての実戦だろう。仲間が先行して露払いをしてくれるならありがたい、今回は場慣れする事だけを考えろ。残存戦力の掃討と、友軍の救援に集中するんだ」

それ以上の問答を許さぬかのように、「サンダース機——了解しました。ベック隊長」と、残る隊員、タクマ・サンダース軍曹の通信が入った。いらいらと頭を掻きむしったシオンだったが——、

既にカタパルトデッキからは、半数以上の《ブレードライガーミラーージュ》が発進していた。これ以上ダダを捏ねなくとも、おのずと出撃の機械が来ると悟ったのだらう。仏頂面のシオンは「……了解」と短く告げて、通信を切った。

《ネオタートルシップ》の甲板が開き、増築された『マグネツサー・カタパルトシステム』が展開される。閃光師団専用レイフォースの移動要塞・《ホバーカーゴ》にも搭載された最新型の発進装置は、電磁力によって機体姿勢を安定させたまま、文字通り弾丸のように射ち出す事が出来るシステムだ。これならば、輸送艦本体を着艦させないまま、安全に増援を送り出すことが出来る。

射出台に機体待機させたジェイは、眼前に広がった暗黒大陸の空に眉を顰めた。魔の海域トライアングルダラスを抜けたというのに、広がる空は尚曇天のまま。陽光は無く、代わり時たま爆ぜた稲光が一面に広がる荒れた大地を射す。まさに、暗黒大陸の名にふさわしい、荒涼とした地で

あつた。

——グロツク・ソードソール中尉は、この死の国ニクスで果てた。胸中に澱んだ無常観を振り切るように、ジエイは愛機を前進させる。「ベック隊——出るぞー」と扇動するや、発進シグナルが青へと変わり、グンと引つ張られた《ブレードライガー》の機体が、宙空へと投げ出された。

「——壮观だぜ、コイツが俺達ミラーージュ隊の初陣だ。閃光師団レイフオースに変わり、この《ブレードライガーミラーージュ》が、ガイロスの背中裂く刃となる」

ピーター・アイソップ大尉の高揚した声が、無線越しに弾けると、ジエイもチラと視線を動かして、キャノピー越しの風景を見遣った。前方左右……荒野を駆ける白い《ブレードライガー》の群れは、勇猛さだけでない、どこか気品さえも感じさせる。アイソップの感じている無敵感も領けよう、雄大な光景であつた。

だが、派手な隊列を組めば勝てる程、実戦は単純ではない。エントランス沿岸基地を攻撃するガイロス兵力をモニタリングしたジエイは、敵影を冷静に分析する。

地を這いまわる無数の黒い影、イグアナ型ゾイド・《ヘルデイガンナー》。ガイロス純正の中型戦闘機械獣は、そのカラーリングを旧大戦来の暗黒軍シンボル——すなわち漆黒とライトグリーンのツートーンに改められている。

半世紀前の第一次大陸間戦争に置いて、ヘリック共和国は特殊鉱石『ディオハリコン』によつて強化された暗黒ゾイド軍団によつて、終始劣勢を強いられたという。『ディオハリコン』の生成技術は先の大異変によつて失われているが、蛍光色を湛えた当時のガイロスゾイドは、今なおヘリック軍における恐怖の象徴として語り継がれていた。

気味の悪い蛍光色を湛えた機体に、戦意を揺さぶられたのは確かだ。隊の副官・ロドニー大尉が、「ハツタリだ。ガイロス野郎のなりにビビる事は無い」と、一行を鼓舞する。

「だが、急ぎ救援に入る必要があるってのは確かだな。《ヘルデイガン

ナー』共め、ゴキブリ見たく、ウジャウジャ湧いてやがる」

アイソップ大尉の声に、ジェイもまた眉を顰めた。戦場を這い回る黒い影は、五十は下らない。対して迎撃に出ているヘリック軍・沿岸前線基地守備隊の数は、二十機弱。しかも大半が戦闘工兵用の中型ゾイド《スピノサパー》である。パワー重視の機体では、地べたを這いずる《ヘルディガンナー》を捕えられず、翻弄されるばかりだ。

「――突っ込むぞー」

アイソップ大尉の機体が、扇動と同時に加速した。紅の獅子の紋章を刻まれた《ブレードライガーマイラージュ》1番機が、アタックブスターを全開にして跳躍すると、『レーザーブレード』を展開、数に物を言わせ《スピノサパー》を集中砲火する《ヘルディガンナー》の眼前を横滑りで横断、数機まとめて切り伏せて見せる。

雷光と見紛う高速で馳せたヘリック軍の増援に、《ヘルディガンナー》達が浮足立った。アイソップの一撃を皮切りに、続く《ブレードライガーマイラージュ》達も、次々と敵機へと群がっていく。足元を這う機体を爪牙で潰し、『ハイデンシティブームガン』が、『2連装ショックカノン』が、密集した機体を纏めて四散させた。

最後陣を往くベック小隊も、すぐさまドッグファイトへと突入した。「パワーはこっちが上だが、敵は小回りが利く。油断するな」と、念を押したジェイの《ブレードライガーマイラージュ》を先頭に、《ミラージュ》サンダース機が左舷、同シオン機が右舷に立って、フォーメーションを形勢する。高機動ゾイドによる連携機動が、《ヘルディガンナー》が懐へと飛び込めるような隙を生じさせない。

複雑な軌道を描く連携走行に戸惑った《ヘルディガンナー》を、シオンの《ブレードライガーマイラージュ》が狙った。脚部リアカウルに内蔵したオプシヨソラッチが伸びて、『レーザーブレード』基部に備え付けられた火器を牽制用の『パルスレーザーガトリング』へと換装する。撃ち放たれたビーム光弾の渦は、《ヘルディガンナー》の未来位置を予測し、そのコクピットキャノピーを蜂の巣にした。

「良い腕をしている……口だけではないな、シオン・レナート少尉」

シオン機の火線を目で追ったタクマ・サンダースもまた、次の敵機

へと狙いを定める。《スピノサパー》に肉薄し、零距离射撃を見舞おうと砲塔を翳した《ヘルデイガンナー》に機首を向けると、全バーニアを噴射して加速、迫撃砲の如き体当たりを見舞ってその機体を吹っ飛ばした。グニャグニャに拉げた《ヘルデイガンナー》の機体は、地べたに打ち付けられて硝子細工の如く四散する。

『ミラージュ隊』の投入によって、戦場の形勢はヘリック側へと傾いた。戦闘開始から十分、《ヘルデイガンナー》部隊の数は半数近くまで減り、既に後退を始めている。基地防衛隊を指揮していた《スピノサパー》隊長機より、「救援、感謝する」との電信を受け取ったアイソツプ大尉は訝しげに辺りを見渡した。

「陽動作戦にしては、随分と数が多かったな。エントランス湾が俺達ヘリックの手に落ちてから、一月半は経つてるっていうのに——ガイロスめ、まだ抵抗勢力を送り込んでくる余裕があるってのか」

敗走する《ヘルデイガンナー》部隊を目で追いながら、ジェイもまたアイソツプと同じ感想を抱く。敵の引き際は鮮やかだ。おそらくは予想外の増援が加わった故に、一時的に撤退したに過ぎない。『ミラージュ隊』の参入を知ったガイロスは、一層の勢力を投入して攻撃してくるだろう。

先に閃光師団レイフォースが遭遇したという謎のゾイド部隊『鉄龍騎兵団』アイゼンドラグーンの噂も気になった。ガイロス帝国の本土守備隊に、神出鬼没のゾイド部隊——これからさらに勢力圏を拡げるとなればさらに険しい戦いに身を投じる事になる。

「エリサ……」

未だまみえぬ探し人の名を呟いて、ジェイは胃の腑に押し掛かる不安を堪えた。一刻も早く、彼女に会いたいと願う——否、会わなければならぬ。今度こそ、全てが手遅れとなる前に。

「……もうお終い？ 拍子抜けだわ、こんなの」

ジェイの不安とは対照的な——退屈そうな声が、無線越しに弾ける。ジェイの《ブレードライガー》に並び立った、シオン・レナート少尉の機体からだ。キャノピー越し、退屈そうに欠伸を噛んだシオン

が目に入ったジェイは、「こっちだって長旅で疲弊している。むしろ、これ以上長引かなくて良かったと思わない」と、彼女の不遜に釘を刺した。

覚めた目を向けたシオンは「何を馬鹿げた事を言ってるんです、中尉」とジェイを詰る。

「私達は、戦うためにニクスまで来たのでしょ？ 帝国を追い立てるのが使命、休んでいる暇なんて無いわ」

「……シオン。レナート大佐から——君の父から、君を守り、一緒に戦うように頼まれた。成し遂げられる自信が無くて返事を返さなかったけれど、その願いを完全に無碍にする気もない。自分を過信し過ぎるな。そんな事じゃ、いずれ命を落とすぞ」

論すように己が思惟を向けたジェイを、年少の少女士官は訝しげな表情で見据え返す。それはジェイの言葉を頑なに拒んだ、冷めた瞳だった。

どうにかして無謀を咎めたいと、ジェイが言葉を足そうとした時だった。

——大気を揺らす、機獣の咆哮が響く。

ティラノサウルス型ゾイド特有の、重々しい金属質の雄叫び。一抹の勝利に弛緩していた『ミラーージュ隊』のパイロット達は、瞬時に臨戦態勢へと引き戻される。

咆哮轟く地平へと機種を向けた《ブレードライガーミラーージュ》のパイロット達は、退却する《ヘルデイガンナー》達を掻き分けてゆつくりと迫りくる、未知のティラノサウルス型戦闘機械獣を見た。《ジェノザウラー》タイプのシルエットだが——両の腿部に増設された凧型のフィンと、その背に背負った小口径の銃器を除き、装甲は碌に塗装を施されていない。凹凸の少ないカウルの大半が、ライトグレーの地色を晒し、無機的な顔貌の中で爛と輝くカメラアイだけが紅く浮いた様は、まるで血涙を流しているかのような異様を形成していた。

《ジェノフレイム》。

虐殺竜《ジェノザウラー》の後継として設計されたそれは、まだ正



式採用の目途さえ立っていない実験機だった。敗走する友軍を掻き分け、ゆつくりとミラーージュ隊に向かってくる。数は——たったの六機。だがそれは、ガイロス帝国の編制する独立遊撃部隊の基本編成単位であり、すなわち彼等が通常のゾイド部隊とは一線を画すエースチームである事を示す証でもある。

ヘリック共和国による本土侵略と、未知のゾイド部隊鉄龍騎兵団アイゼントラグーンによる、度重なる帝国守備隊壊滅を受け、帝国軍首脳部はいくつかの特務隊を派遣していた。その内の一つが、偶然にも《ヘルデイガンナー》部隊の救援信号を拾ったのだ。

その名を、ガイロス帝国特務憲兵隊——『ロットティガー』という。

#### ④ 陽炎 ― フレイム ―

他のジェノ系戦闘機械獣に違わぬ『ホバリング機構』で滑走した六つの《ジェノフレイム》。黒土を巻き上げながら迫ったそれは、友軍が既に敗走を始めている中、計三十機弱、五倍もの機数を揃えた《ブレードライガーミラーージュ》の群れへと挑みかかってくる。あまりにも大胆な挙動に、ジェイを初め、『ミラーージュ隊』のパイロットは暫し呆けた。

「ミラーージュ隊・アイソップより、《ネオタートルシップ》ブリッジへ。着艦はもう少し待て――新手だ」

ズンと迫りくる《ジェノフレイム》の機影から目を逸らさぬまま、ピーター・アイソップは母艦通信兵へと提言する。次いで、部隊各機へ。

「――連戦になるが、迎え撃つぞ。敵は新型だが、《ジェノザウラー》級の『収束荷電粒子砲』を持つていた場合、基地や艦に被害が出る可能性が高い。ヤツらをこれ以上近づけるな」

適格な指示であった。既にロドニー副官の指示で、基地守備隊の《スピノサパー》達も後退を始めている。無用な犠牲を出さぬためには、高機動かつ高性能な《ミラーージュ》が敵の突貫に相対し、基地と輸送艦、そして守備隊が敵の火器射程圏内に入らぬよう、食い止めるのが最優先であろう。

アイソップ大尉機を先頭にして、白いライガー部隊が一斉に疾走を駆け始める。「ベック隊長――我々も」と指示を仰いだサンダース軍曹に頷き返して、ジェイもまた《ブレードライガー》の機首を敵影へと向けた。

「来い、サンダース、シオン。だが陣形を崩すなよ？ 敵は未知の新型だ、どんな力を持っているか、知れたもんじゃない」

ジェイの呼びかけにそれぞれの反応を返しながら、タクマ・サンダース、そしてシオンの《ブレードライガーミラーージュ》が後へと続く。性格だけ見れば正反対の二人だが――腕前は十分に一流と評し

ていいライガー乗りだ。『ミラージュ隊』として編成されてからの日は、決して長くないが——未知の新型を相手取っても、完璧な連携行動を仕掛けられるだろう。

自軍の戦力を客観的に分析出来たと踏んだジエイは、次いで敵機へと目を向ける。少数精鋭を地で往く、《ジエノフレイム》の六機連隊。時速二百五十キロ強の高速機動で、真つ向から《ブレードライガーマイラージュ》達に突っ込んでくる。一見、無謀としか形容できない采配であった。

正面突破は、案の定ライガー部隊の恰好の標的となった。アイソップ大尉率いる《ミラージュ》の第一陣がアタックブースターユニットを展開し、『ハイデンシテイビームガン』の一斉掃射を仕掛けた。《アイアンコング》級の重装甲すら難なく撃ち抜く高密度ビームの、集中砲撃だ。六機連隊は群がる光の奔流に包み込まれ、噴煙が爆ぜる。

——が、

「なん……だどつ……」

巻き上がった焰を乗り越えて飛び出した《ジエノフレイム》の雄姿に、ミラージュ隊のメンバーは固唾を呑んだ。最新の光学兵器たる『ハイデンシテイビーム』の集中砲火を浴びたというのに——傷一つない。

《ジエノフレイム》の機体前方に展開された波状の光壁に阻まれて、高密度ビーム弾は完全に四散していた。『ハイパーエネルギーシールド』。その性能はこの《ブレードライガー》に搭載された『Eシールド』を、遥かに凌駕しているように思えた。

初撃を難なく捌いて勢いに乗った異形の恐竜型機械獣が、グンと迫る。砲撃の反動で加速の鈍った《ミラージュ》達の懐に飛び込むや、バーニアを吹かして機体を翻し、鞭尾による殴打を見舞った。アイソップ達の《ミラージュ》が派手に横転し、ライガーの隊列が一気に乱れると——バーニアを獅子して急旋回、クワと開いた罅からバチバチと爆ぜた光を零す。

「——まずい、散れ！」

『荷電粒子砲』だ、とすぐに理解したジエイが、後続に叫ぶ。同時、

六機の《ジェノフレイム》が一斉に、散弾の如く拡がる稲妻の渦を撃ち放った。拡散放射式の『荷電粒子砲』——ミラージュ隊が組んだ陣形のと真ん中に突入して発射されたそれは、ほぼ全機の《ブレードライガー》を射程に捉えている。

「——ッ……！」

ジェイを初め、咄嗟に『Eシールド』を張れた機体は幸運だった。だが、完全に虚を突かれた約半数の《ブレードライガーミラージュ》は、巻き上がる熱波に駆動系を焼かれ、次々と機能不全に陥ってしまった。『拡散放射式荷電粒子砲』の破壊力は、本来《ジェノザウラー》系列の機体が装備する収束式と比べ、著しく低い。だが、広範囲にまき散らされる砲撃を乱戦の中で回避するのは不可能に近く、また至近距離の照射とあつては、非装甲部分に対してなら十分すぎる程の威力を発揮できる。

苦悶の咆哮を上げて地べたをのたうつ《ブレードライガーミラージュ》の姿が、ニクスの荒野の至る所に散らばった。

《ジェノフレイム》の設計思想は、先んじて完成していた《ジェノブレイカー》のそれとは大きく異なる。ベース機となる《ジェノザウラー》には大きな改修を加えず、対《ブレードライガー》戦を想定した追加武装を施し、所望《ジェノザウラーMk-II》的な性格を持つて完成した《ジェノブレイカー》に対して、この機体は正統な『虐殺竜の後継機』として設計された。同クラスのゾイド戦を仮定すれば威力過剰の気すらあつた『収束荷電粒子砲』を一对多用の戦略兵器として昇華させ、さらに高出力の『ハイパーエネルギーシールド』、完成して間もない加熱溶断式の白兵戦用兵装を装備。《ジェノブレイカー》のような圧倒的な戦闘力こそ持たないものの、兵器として、それを上回る汎用性・完成度を持つて誕生した。

強襲戦闘隊の次期主力量産機と目され、性能評価試験の真つ只中にあつた《ジェノフレイム》だが、ヘリック共和国軍の暗黒大陸上陸に際し実戦投入された。試作機を預けられたのは、ガイロス帝国特務憲兵隊・ロットテイガー。帝国摂政ギンター・プロイツェンと対立す

る純ガイロス系軍事派閥によって組織されたこの部隊は、ゼネバスハンターという異名を實しやかに囁かれている。秘密警察的性格を持つ特務隊に司令部が次世代ゾイドの先駆けを託したのは、前線の守備隊を襲撃する謎のゾイド部隊『鉄龍騎兵团』アイゼンドラグーンが旧ゼネバス帝国派の秘密結社に組織されたものであり、またその中枢に摂政ギウンターが関わっている——という噂に、帝国首脳部が一定の信憑性を感じていた証拠であろう。

最新鋭機《ジェノフレイム》の六機連隊は、暗黒大陸踏破を志すヘリック共和国軍にとつても、大きな脅威として在った。前線の更なる激化を伝え聞いてはいたもの——ガイロス帝国は本土暗黒大陸を守るために、次々と強力な新型ゾイドを導入している。それらを前にすれば、既に《ブレードライガー》級のゾイドですら、凡百の量産機の一つでしかなかった。

隊の半数が小破した状況で、《ブレードライガーミラーージュ》の残存機は《ジェノフレイム》とにらみ合う。

圧倒的な戦闘力を見せた新型《ジェノザウラー》だったが——打つて変わって、その挙動は慎重を期していた。動けなくなった《ミラーージュ》に追撃を掛ける事も無く、彼らを振り切つて基地や輸送艦に仕掛ける、という素振りも無い。

硬直状態の中で、数秒——そう言う事か、と、ジェイは彼らの意図を理解した。

『ミラーージュ隊』などのたまつて勇んだ結果が、これ？　なんて情けない……」

「……止せ、シオン少尉」

シオン少尉の《ブレードライガーミラーージュ》が前に出ようとするのを、ジェイは静かに制した。「何故です？　やられっぱなしで終わるつもりですか」と苛立つ彼女に、己が見解を告げる。

「あの六機連隊もおそらく、これ以上戦うつもりはない。数の不利を鑑みずに攻めて来たのは、救難信号を発信した《ヘルディガンナー》隊を逃がす時間を作るためだ。ならば、既にやつらの目的は果たされて

いる」

「何を馬鹿な事を——みすみす取り逃がすなど、隊の沽券に係わります！ あの新型は、いずれ必ずヘリックの脅威になる。高性能の《ブレードライガーミラーージュ》で包囲している今、此処で潰すべきです！」

「普通はそうだろうが——見て見ろ、今回俺達は完全に後手に回っている。疲弊した状態でこれ以上やっても、損害を増やすだけだ。態勢を立て直し、万全の状態で改めて討伐すればいい」

語気を強めたジェイだったが——シオン・レナート少尉は深い溜息の後に、彼の思惟を否定した。

「……理解できません。貴方のような臆病者が執る指揮など——私には、理解できない」

「——待て、シオンッ！」

ジェイが引き止める声を見無視して、シオンの《ブレードライガーミラーージュ》が、《ジェノフレイム》達へと挑みかかった。膠着していた六機連隊は、突貫するシオン機に気づいて、その機首を一斉に向ける。

ジェノが背部に備えた『展開式ビームライフル』が火を吹く中、『アタックブースター』を全開にしたシオン。砲撃の雨の中を縫うように駆け巡って間合いを詰めると、牽制の『パルスレーザー』を見舞った。シールドでそれを弾く《ジェノフレイム》。予想通りの挙動に、シオンの頬は綻ぶ。

《ブレードライガーミラーージュ》が『Eシールド』を展開して、真正面から《ジェノフレイム》に飛び掛かる。高出力のビーム膜同士が干渉してバチ、と火花が散ると——両機のシールドジェネレーターがショートし、一時その機能を失った。

「——邪魔ッ！」

咄嗟の事態に感った《ジェノフレイム》の喉元へ『アタックブースター』を向けると——至近距離で『ハイデンシテイビームガン』をぶち撒ける。ブヴォ、と音を上げて吐き出された高出力ビームの塊は、

《ジェノフレイム》の上半身を丸々消し飛ばした。

肩口より先を失った亡骸は、やがて誘爆の振動で揺れながら、ゆつくりと崩れ落ちる。

やった、と高揚したシオンだったが——直後その機体を衝撃が襲った。別の《ジェノフレイム》がクワと罅を開き、『拡散荷電粒子砲』を撃ち放ったのだ。『Eシールド』が機能不全を起こしていた、その隙を突かれた。光の渦がライガーの全身を粟立たせる。直撃。閃光に白んだコクピットの中で、シオンは絶叫した。

「——馬鹿な事を……ッ」

無線越しにシオンの悲鳴を聞くや、ギリと奥歯を噛み締めたジェイ。彼女の《ミラージュ》の後を追う形で、《ブレードライガー》を睨ける。

「どうするつもりです!?! ベック中尉!」

無線に弾けたタクマ・サンダースの声に、「救援に入る、まだ動ける隊と連携して、援護してくれ!」と怒鳴り返したジェイは、シオン機を包囲する《ジェノフレイム》達に目を遣った。代わる代わる撃ち込まれる『拡散荷電粒子砲』を躲しきれず、ヨロと身を振った《ブレードライガーミラージュ》。既に駆動系は完全に破壊されている、次の一撃を貰えば、直撃だ。

事態の異常に気付いた別働隊の《ブレードライガーミラージュ》から通信が入り、「何事だい、これは!」とサンダース機に問うた。初撃の『拡散荷電粒子砲』を凌いだ、シユウ・フェーン中尉率いる分隊だ。「シオン少尉が囲まれて、ベック隊長が救出に……、援護をお願いします!」

「なんだと、あの性悪女め……分かった!」

《ミラージュ》の後方支援が、《ジェノフレイム》の包囲陣形を乱した。最高速度まで機体を加速させたジェイは、(間に合え……ッ!)と胸中で叫びながら、ライガーを跳躍させる。『レーザーブレード』を展開し、シオン機に気を取られた《ジェノフレイム》二機を、背後から切りつけた。二体のジェノは胴体から真っ二つになって千切れ飛び、

爆発四散する。

直後、残った《ジェノフレイム》三機が、動けないシオンの《ミラージユ》にビームを撃ち込んだ。疾走の勢いのままにライガーを突貫させたジェイは、体当たりでシオン機を突き飛ばすと、その軌道を逸らす。コクピット目掛け撃ち放たれた光弾は、《ミラージユ》の下半身に二発、残る一発がジェイ機の左後脚部吹き飛ばした。

纏れ合って倒れ込む格好になったが、二体の《ブレードライガー》のコクピットは、ほど近い位置で重なる。

《ミラージユ》の機体は半壊しているが——キャノピー越しのシオン少尉には、大した怪我也見当たらない。自機のコクピットを開けたジェイは「——来いシオン、乗り移れ！」と手を伸ばした。

シオン・レナートは、ほとんど呆然自失状態にあつた。ガクガクと震えたまま、虚ろな目を向けた彼女に、もう一度、「早くしろ——誘爆するぞ！」と怒鳴り付けると、機体を離れてシオン機に取りつく。ようやくとキャノピーを解放した少女士官を乱暴に抱き上げると、そのまま倒れるように、愛機のコクピットになだれ込む。

「——隊長オッ！」

サンダースの絶叫が聞こえた。彼と、フェーン隊の《ミラージユ》も、残る《ジェノフレイム》に突貫を掛ける。

三機のジェノは彼等を迎え撃つのに気を取られて、ジェイ機から注意を外しているように思えた。後脚を一つ失っているが、《ブレードライガー》はまだ自走出来そうだ、小さな爆発を繰り返すシオン機を足蹴にして、ゆっくりと機体を起こさせる。

直後、《ジェノフレイム》の一機が振り向いて、『展開式ビーム砲』の砲口を向けた。気づかれた——三連発で撃ち込まれた光弾はジェイ機の足元に突き刺さる。乗り捨てられたシオンの《ミラージユ》が粉々に吹き飛び——、

——誘爆に巻き込まれる格好となったジェイは、激震の中で意識を失った。



⑤ 微熱

『ミラージュ高速戦闘隊』の奮戦で、オペレーション・ラagnaロク終末作戦の増援は無事、暗黒大陸ニクス・エントランス湾沿岸の駐屯地へと運びこまれた。ガイロス帝国軍《ヘルデイガンナー》師団を撤退させ、特務部隊ロットティガーの駆る新型、《ジェノフレイム》の六機連隊を全滅させた。《ブレードライガーミラージュ》は多数の小破機こそ出したものの、完全な損失はシオン・レナート少尉のただ一機のみで——戦果は上々と言えよう。

切り立った山岳地帯の多いニクス大陸に置いて、悪路の中を迅速に移動できる高機動ゾイド部隊の果たせる役割は多い。軍首脳部が莫大な経費を割いて最新鋭高速戦闘ゾイド《ライガーゼロ》を量産し、特殊部隊『閃光師団』レイフォースを組織したのも、その必要性を理解していたからだ。

件の閃光師団レイフォースが大打撃を受け、事実上解体状態にある今——『ミラージュ高速戦闘隊』は全軍を帝都ヴァルハラまで導く、新たな先導者の役割を期待され、迎えられた。

「——ああ、やっぱりだ！ ジェイ・ベック少尉じゃないかッ」

エントランス前線基地の格納庫。半壊し、煤塗れになった自分の《ブレードライガー》が整備ラックに吊るされるのを、ボヤと眺めていたジェイは、不意に掛けられた声に振り返った。

聞き覚えのある声だ、小走り気味で走り寄ってくる若い技術者の顔に、ジェイも思わず声を上げる。

「もしかして、レイモンド……レイモンド・リボリー主任ですか？」

一年半前にもなろう、エウロペ大陸・バラヌ基地で知り合った技術スタッフ。丸顔にクリとつぶらな瞳の浮くレイモンド主任の人懐っこい人相は、初めて出会った時と何ら変わらない。

懐かしさに思わず綻んだジェイに、レイモンドも微笑を返した。

「《ミラージュ》の中にただ一機《アーリータイプ》を見かけて、もしやとは思ったが……やっぱりキミだったのか」

ジェイの顔と《ブレードライガー》の機体を交互に見遣ったレイモンドは、まるで彼の存在を確かめるかのようには、その肩を抱く。ジェイの階級章に気づいたのだろう、「そうか——今はジェイ・ベック中尉か。君の隊の連携は、実に見事だったよ」と評した彼に、ジェイは気まずそうに頭を振った。

「冗談は止してくれ、唯の分隊長ですよ。それに——仲間を御しきれず、大きな損害も出した」

先の戦いを回想して、苦笑する。隊で唯一の損失を出したシオン少尉、彼女を助けようと突貫した揚句、ジェイ自身だって生きているのが不思議なくらいの無謀をした。タクマ・サンダーズ軍曹や他隊の《ブレードライガーミラージュ》の適格な援護が無ければ、確実に死んでいる——それくらい醜態を晒したように思っていた。

気に病むことは無い、と、レイモンド主任の柔和な声が耳朶をそよぐ。

「僕は知っているよ。君の戦いはただの無謀じゃない、オリンポスで《ブラックオニクス》と戦った時のように——君が命を掛けるのはいつも、大事な何かを守ろうとする時だ。だからこそ、君と志同じくする仲間達は力を集い、後押ししてくれる。そりゃあ、今は理解できず、反目する人だっているかもしれないけれど……いずれきつと分かってくれるさ。君はいい指揮官になるよ——スターク・コンボイ少佐のように」

「……そういう物でしょうか」

レイモンドの言葉に応えられないまま、ジェイはボヤと立ち尽くした。無言の彼に念押しするかのようには、もう一度領いたレイモンド。やがてフツと笑みを零して、背を向けると、

「君のゾイドの事なら、心配いらぬ。大方の規格は量産機《シールドライガー》と共通だし、《ミラージュ》の予備パーツだってある。すぐ元通りに直せるさ」

近々ゆつくりと話そう、と言い残して——レイモンドはクルと踵を返し、去っていく。

「——レイモンド主任っ」

立ち退こうとしたレイモンドの背中を、ジェイは呼び止めていた。  
ん？ と小首を傾げて振り返った彼に、数秒迷った後、一言——、

「……エリサを探しているんです。知りませんか？」

と、静かに問うた。

ジェイの口にした名前に、レイモンドの笑みが消える。

エリサ・アノンの事、彼だつて忘れる事は無いだろう。ジェイとレイモンド、そしてエリサ。バラヌで『ブレードライガー』を調整していた時、三人はいつも一緒で——束の間の平和を分かち合った。忘れ得ぬ、掛け替えのない時間を過ごしたのだ。

「そうか……アノン少尉も、二クスに……」

コンボイの訃報、グロツクの訃報。この暗黒大陸戦争まで、休むことなく従軍したレイモンドは、その全てを間近に見ているはずだ。逃れられぬ死線の数々、複雑な面持ちで立った彼の懸念は、想像に難くない。

「……理解したよ。守るべき戦友を失つて、しばらく最前線を離れてた君が、此処に来て出張つて来た理由を——君は、アノン少尉を探しに来たんだね」

「負傷してデルポイに戻っていたんですが——此度の増援計画オペレーション・ラグナロク『終末作戦』、特務隊として、彼女の名前が」

言葉を足したジェイに対して、レイモンドはゆっくりと頭を振る。

「……残念ながら、このエントランス前線基地では見かけた事が無い。  
が——」

訝しげに眉を顰めたレイモンドは、特務隊、と、ジェイの言葉を反芻した。「——少し調べてみよう。技術開発局絡みで、気になる噂を耳にしているんだ」と、静かに告げた彼の表情は、先までの温厚さをすっかりと潜めた、硬い面持ちであった。

どこか影のあるレイモンドの相が気になった。嫌な予感がして、さらに問い詰めようとしたジェイだったが——背後より「ベック少尉」と呼びつけた、タクマ・サンダーズ軍曹の声に引き止められる。

落ち着かない風のジェイだったが、「大丈夫、少し時間をくれ。……」

今は、君を必要としている仲間達の声に、応えてあげるんだ」と念押ししたレイモンドの声が、波立つ彼の心を、辛うじて押し留めるのだった。

サンダースの頼みを受け、ジェイは彼と共にシオン・レナート少尉の部屋へ赴いた。

激戦の最中乗機を潰され、ジェイと共に辛うじて救出されたシオン少尉だったが——基地に入ってからずっと、宛がわれた個室に引きこもっているという。そう言えば顔を見かけなかったな、と思い出したジェイに、「自信家なレナート少尉の事です。初陣で自分だけ撃墜されて、プライドを傷つけられたのでしよう」と、タクマも己が見解を告げて、深い溜息を吐いた。

シオンの部屋、その戸口へと立ったジェイが二度ノックして、「——シオン。俺だよ」と声を駆ける。

間髪入れず、（——あっち行って！）と叫んだ、シオンの甲高い声が返ってきた。

戸口越しでもキンと耳朶を打つヒステリックな悲鳴に、思わず怖じ气るジェイ。狼狽えた彼の横、今度はタクマが「少尉、基地に着いて終わりではないんです。隊のブリーフィングに参加しないと」と告げたが——返事は無い。やれやれ、と言う風に肩を竦めたタクマが、ゆっくりと頭を振った。

「サンダース、先に行っていてくれ。ここは俺一人がいい」  
「ですが……よろしいのですか？」

「グレイ・レナート大佐に、シオンの事を頼まれているんだ。此処で時間を食って、俺のせいで君がブリーフィングをすっぽかしたら、それこそ困るよ。此度の損害を鑑みて、ミラージュ隊の編制も弱冠更新されるだろうから……軍曹まで、流れに乗り遅れる事は無い」

数秒考えた様子サンダースだったが——意を決したように目を伏せ、頭を下げると、踵を返してブリーフィングルームへと向かう。

小さくなつていく彼の後姿を見送った後、ジエイは小さな溜息を一つ吐いて、戸口へと手を掛けた。

意外なことに、鍵は掛かっていなかった。ロブ基地の兵舎に似た、ベッドと小さなデスクしかない、コンクリート造りの淡泊な内装。殺風景な部屋の隅で、蹲ったシオンの姿を見つける。戦いが終わってから、ずっとここで泣いていたのだろう。クシヤクシヤになった金髪、いつも見繕っている華美な礼服も皺だらけで——シオンの姿は、いつも無く弱々しいモノに見えた。

おもむろに顔を上げた少女は、充血した目でジエイを見遣る。

瘡癩を起こされるかと心配したジエイだが——沈黙の後にその気が無いと分かると、

「タクマは、先に行かせたよ」

と、一応の報告をした。

「私、あの人嫌いです……下士官の癖に、指図ばかりして」

忌々しげに唇を噛んだシオン。「軍曹は、君を貶めたくて言ってるんじゃないんだ。分かってやってくれ」と宥めたジエイだったが、彼女はそれに耳を貸さず——貴方も同じでしょ、と、涙声で糾弾する。「私を笑いに来ましたか？ ベック中尉。大口を叩いたくせに、隊の中でただ一人機体を損失した私を、それ見た事か、と、詰りに来たんでしよう？」

「そんなつもりはない。《ミラーージュ》を潰された事を言っているのなら、気にするな。アイソップ大尉達と話をして、予備機を手配してもらうから——」

「気にするな、ですって？ 嫌よ、貴方に憐れまれる筋合いなんて無いっ！」

「——君が生きていて良かったと思ってるのは、本当なんだ！ 信じてください……」

言葉を選びながら瘡癩を鎮めようとするジエイに、「——ええ！ それはそうでしょう」と、シオンは自嘲気味に破顔する。

「貴方は私のお目付け役として、お父様に付けられたんだもの。私が

不甲斐ない敗北を繰り返し、その都度尻拭いをしていれば、貴方はほとんどグレイ・レナート大佐に自分を売り込む事ができる：『ブルー・ブリッツ』と謳われた貴方からすれば、造作もない事でしょう？ 楽な任務に就いたものね、ジェイ・ベック中尉」

語気を強めたシオンに阻まれて、ジェイは口を噤んだ。

彼女とて、本心からそう思ってるわけでは無かろう。ただ——初めての戦場で、『軍高官の父を持ち、士官学校を首席でもあった』という自分の才覚とキャリアが通じなかった事が、相当に応えたらしい。普段の人を侮ったような不遜さではない、幼子のように喚き散らした様が、それを伝えている。

少し悩んだ拳句、「……すまない。それは違うんだ」と呟いたジェイ。

「俺は……君を守るためにニクスに来たわけじゃない。国のために戦おうって気持ちも、ずっと前に失せて、ただ——もう一度、会いたい人が居るから。彼女を探すために、此処に来ただけなんだ」

ジェイの告白に、シオンは数秒呆けた。

「私を守りに来たんじゃない、って……そんな事を言うために、わざわざ会いに来たっていうの……っ？」

浮腫んだ頬を朱色に染めて、涙を零すシオン。

彼女の涙の理由が分からず——決まり悪そうに死線を逸らして、ジェイは俯いた。レイモンドは指揮官としてのジェイを評価したが、実際の所、まだ彼の言うような軍人とは程遠いらしい。自分を理解してもらいどころか、気難しいシオンの心の機微を、まったく捉えられないでいる。

これ以上刺激するよりは、出直した方がいい。そんな考えがよぎった矢先だった。

——葛藤に気を割いていたジェイは、不意にダツ、と鳴った足音に引き戻される。

何時の間にか立ち上がったシオン・レナートが、彼の胸元に縋り付いていた。躰中に押し掛かったシオンの存在に驚いたジェイは、妙に

湿っぽい彼女の声を聞いて、立ち尽くす。

「——いかないで、ベック中尉。本当は……私怖い。貴方の言うとおり、私の培ってきたモノが何の役にも立たないって言うのなら、もういつ死んだっておかしくないじゃない」

揺れた金髪、フアと鼻孔を擦った彼女の香りが、ジェイから思考の余地さえも奪う。

助けて——と囁いたシオンが面を上げ、瞳を閉じる。何を意味するのかすぐに分かって、ジェイの胃の腑にグツと圧が掛かった。シオン、と声を絞り出し、彼女を引き剥がそうとして肩を掴んだが、熱っぽいシオンの体温に怖じけて、それすら為せない。

シオンが感じる恐怖は、ジェイも感じた事があるものだ。ここで彼が拒めば、シオンはこのまま死んでしまうような気さえした。

葛藤の果て、ジェイはシオンに顔を寄せると——その唇に一秒にも満たぬ、控えめなキスをした。

彼の口づけをどう受け止めたのであろう、シオンはゆっくりと目を開けると、真っ赤に充血した瞳から大粒の涙を零した。上着を脱ぎ捨て、シャツを裂いて放った彼女は、嗚咽を堪えて目を伏せる。白い下着が露わになったのも一瞬、それすらも剥ぎ取って床に捨てると、蛍光灯の灯りの下に裸体が晒された。

美しかったが——華奢すぎる躰は触れたら折れそうで、どこかみすぼらしくも思える。

刹那、心に過ぎる残像があった。止せ、背負いきれない、と分かっていたジェイは、金縛りに在った見たく動けなくなる。

暫し惑って立ち尽くしていたが——、「恥を搔かせないで……お願い」

と——躰を寄せたシオンの声が、沈黙を赦さない。

それ以上、場を濁す余地などなかった。まるで肺や胃の腑、全ての臓物を握りつぶされたかのような、かつてない息苦しさを覚えながら——ジェイはシオン・レナート少尉を抱いた。

## ⑥ 前夜

ヘリック共和国軍が暗黒大陸ニクスに上陸して、早二か月。

既にヘリックは次世代型高速戦闘ゾイド、《ライガーゼロ》を主力に据えた特務隊『閃光師団』レイフオースの快進撃もあつて、大陸の中心部たるビフロスト平原全域をその勢力圏に加えている。快進撃の要因は、帝国の采配の裏を突く事が出来た、共和国軍の進軍経路にあらう。本来西方大陸エウロペの前哨地からニクスの地へと踏み込む場合、暗黒海域トライアングルダラスを大きく迂回する必要がある。天然の難所に守られているはずの大陸中心部の防備は手薄であり、『暗夜航路』を発見したヘリック軍は、丁度その隙を突くことが出来たのだ。

だが——今現在ヘリック軍の快進撃は大きく鈍り、戦線は停滞している。急襲を察知した帝都ヴァルハラ、ミッド平野、そしてニフル湿原に展開されていた帝国国防軍の主力部隊が、一斉にその踵を返し、平原周囲に大規模な防衛線を敷いたのである。

戦いは、長期戦の様相を醸していた。

それはヘリック共和国軍の首脳部にとって、決して歓迎出来る状況ではない。ただでさえ地の利が敵にあるという暗黒大陸に、後二月もすれば長く険しい冬が来る。そうなれば、足取りの重くなつた全軍は、場慣れしたガイロスゾイドに翻られ、後退を余儀なくされるだろう。下手をすれば、此処で全滅すらも起こり得る。

共和国軍首脳部に、選択の余地は無かつた。ニクスの冬が訪れるまでに残された一月の間に、帝都ヴァルハラを落とし、長きに渡る両国の因縁に決着を付けるのだ。そのために召集されたヘリック共和国の精鋭・総計五十個師団——。

——終末が、近づいていた。

——ZAC2101年 9月末 暗黒大陸ニクス・エントランス前線基地

再編成を終えた『ミラージュ高速戦闘部隊』は来たるべき戦いに備



えた最終ブリーフィングを終えて出撃の時を待っていた。隊に託された任務は、帝都ヴァルハラへと続く膝元『ヴァーヌ平野』へと出る為の、ガイロス帝国東部防衛線の突破。ヘリック軍総戦力の約半数を割いて行われる大規模突破作戦の先鋭として戦う事である。

出撃は、今宵。これから己が命を預ける事になるであろう愛機——格納庫に集った三十機弱の《ブレードライガーミラーージュ》を、隊員達は一心に調整し続けていた。

「——修理は終わっているよ。君の手癖に合わせて、機体の方も少し弄らせてもらった。随分と使い込んだだろう？ 壊されていない駆動系や関節も、かなり消耗していたからね」

完全な形で復元された《ブレードライガーAB・アーリータイプ》の前に、ジェイはレイモンド・リボリー主任の指差す先を見上げる。

「ついでに言うと……元々の装備で乗っている時間が長かったせいだろう、君はあまり『アタックブースター』と相性が良くないらしいね」「分かる物ですか。さすがだ、レイモンド主任」

感心した風に頷いたジェイ。

凶星だった。機体バランスを極力崩さないよう細心の設計をされている《ブレードライガー》の増加兵装だが、それでも弱冠、操縦桿が重くなった感があった。増速装置・姿勢制御のスラスターとして使用すれば、機体は安定するが——重量の増した機体をバーニアの推力で無理やりに引っ張っているのだ、軌道が直線的なモノになるのは否めない。

何よりブースター点火前と後で、運動性能に大きな差が出るのが一番の問題だった。ピーキーな挙動が、四足型戦闘機械獣の持つ有機的な挙動の利点を潰している気がした。

「《ブレードライガーミラーージュ》との連携を考えれば、なかなか難しいだろうがね……いざという時は強制排除も考えた方がいいだろう。というか、むしろそうした時に万全になるよう調整しておいたんだけど」

「……なるほど、覚えておきます」

一通りの説明を終えたレイモンドはクルと踵を返して、整備棚に置いてあったインスタントコーヒーをカップ達に注ぐ。内一つを差し出しながら、「それから」と切り出したレイモンドの表情は硬く——彼の話そうとしている内容を察して、ジエイはギョツと唇を噛んだ。

オペレーション・ラグナロク  
「終末作戦に伴って編成された特務隊についてだが……」

「——っ、エリサの所在について、何か分かったんですか？」

噛みつきそうな勢いで問うたジエイに、レイモンド・リボリーはゆっくりと頭を振った。露骨に肩を落としたジエイだったが、

「残念ながら、全容は掴めていないんだ。ただ一つだけ……本国の技術開発局は、極秘裏にとあるゾイドの戦線投入を計画している」

と、レイモンドは言葉を足す。

「新たなゾイド？ それは——」

「分からないが……予測は出来るよ。君は二月前、我が軍の精鋭『閃光師団』と、『鉄龍騎兵団』の戦闘について知っているかい？ 壊滅的な打撃を受けた戦いだ……最終局面に置いて敵方が、とあるゾ

イドを実戦投入しているんだ」

ホットコーヒーを一口に飲み干してカップを置いたレイモンドは、次いで手元のタブレットを操作すると、一枚の戦場写真を引き出した。閃光師団の母艦として追隨していた移動要塞《ホバーカーゴ》の一機が記録していたというそれには、灼熱の焰の中で佇む、一機の巨大な機影を捉えていた。

「これは……」

訝しげに眉を顰めるジエイ。混戦の中で取られた映像だ、不鮮明さも相まって、謎の機影が何なのか判別する事は難しかった。が——どこか胸に問えた違和が、ジエイを引き止める。《ゾイドゴジュラス》や《アイアンコング》さえも上回る巨躯のそれは、おそらくは正規に配備された物ではない実験機であろう。しかしジエイには、その機影をどこかで見たように思えて仕方なかったのである。

「戦いの後に掌握した謎の前線基地に、僅かながらデータが残っていたよ。コードネーム《ブラッディデーモン》——君も僕も、このゾイ

ドに良く似た骸を知っているはずだ。あの日……オリンポスの滅びの山で僕達は、コイツの始祖を見た」

「……ッ！」

レイモンドが告げた言葉に、ジェイの背筋がゾクリと粟立つ。

オリンポスの山でジェイ達が見た骸、ガイロス帝国が会戦以来再生に取り組み続ける巨大ゾイドの存在を、彼は知っていた。死を呼ぶ巨竜《デスザウラー》。完全な形で復活すれば、現存するあらゆるゾイドを含めて適う機体などいない、最強の戦闘機械獣である。

復元計画は再三に渡るヘリック軍の妨害で、半ば頓挫していたと聞いていたが——事は秘密裏に進められていたのだろう。この映像が本当ならば、すでに稼働状態にある実験機まで完成されていた、と言う事になる。

「ガイロス帝国軍が、本土決戦の切り札として《デスザウラー》を投入してくる？ そんな事が……」

「——有り得ないかと？ 君だけじゃない、僕も、共和国の首脳部だつてそう思っていたんだ。だが、この戦いからさらに一月を経ている。帝國技術部が、本領を發揮できる《デスザウラー》を完成させている可能性は、限りなく高い。そしてここからは、さらにボクの推測に依るが……此度の終末<sup>オペレーション・ラグナロク</sup>作戦の根幹には、敵の《デスザウラー》投入を見据えた『何か』が含まれている」

言葉を失ったジェイの横、レイモンドはタブレットを伏せると、「ベック中尉、十分に用心しろよ」と、念を押した。

「君達『ミラージュ隊』は、これより最前線で戦う事になるが……それだけじゃない。君がもしエリサ・アノン少尉と再会できる場があるとすれば——そこは間違いなくこの戦いの果て、全ての因果が滅びによつて結ばれた終焉の地だ」

「終焉の地……」

レイモンドの言葉は唯の文言ではない、確かな予感となってジェイの胸中に押し掛かった。

戦いに明け暮れる日々を過ごして二年近く。生き残つて来れた理

由は、ジェイ自身が一番よく分かっている。グロックやツヴァイン、スターク・コンボイ隊長——多くの仲間と共に在る事で、ジェイは本来持つ以上の力を発揮する事が出来た。だが、どうであろう？ 終わりの見えない死線の上を往き続けて、ジェイは自らの精力だけではない、育んできた絆さえも消耗して、此処に立っている。グロック、ツヴァイン、コンボイ……皆ジェイを生かすために戦い、哀しい別れを遂げてきた——既に、彼を高めてくれる絆は、ほとんど残っていない。——それでも。

死ぬ、という確証があつても、立ち止まる事が出来なかつた。死闘の中で擦り切れそうに成りながらも、最後に残った縁。たった一人になつてしまつた掛け替えのない存在さえ、この争いの中で消耗されようとしている。

それだけは防ぎたかつた。かつてジェイのために生を差し出してくれた仲間達のように、今度は自分が命を投げ出す『人柱』となつたとしても——それでも、彼女だけは取り戻したかつた。

ありがとう、と短く告げて、ジェイはレイモンドに頭を垂れる。「これで最後になるかもしれない——でも、そうだとしてもこの暗黒の地で、貴方に再会する事が出来て良かった。俺は、戦場に戻る事を恐れていた……エリサを取り戻そうと思つてニクスに渡つてからも、心の底では戦えないと……逃げ出したいと願つていたんだ。でも、ようやく確証が持てる。俺が今日まで生き残つて来れたのは、貴方に会つてここに立ち——エリサを取り戻すためだつて」

「そうか……引き止めてるつもりだったんだ、君を。だけど、その必要はないのかもしれないね」

そうごちたレイモンドは、穏やかな——しかしどこか寂しそうな笑みを、ジェイへと返す。「君が取り戻した力なら、きつと成し遂げられる。ボクは信じるよ」と、スクと差し出されたレイモンドの掌に、ジェイもまた穏やかな微笑を持つて応じた。

今生の別れになるかもしれない、という予感は拭い去れない。それでも、この再会に絶望が介在する余地など無いのだと、二人は理解していた。

——中尉、と木霊した澄んだ声に振り返ると、ジェイの背後、スラと華奢な体躯の少女士官が立っていた。彼女の瞳に請われたジェイは、名残惜しそうに握手を解いて、「もう行きます——さようなら、レイモンド」と踵を返す。小走りで去っていくジェイの背を見送りながら、レイモンドは静かに呟いた。

「……死ぬんじゃないぞ、ジェイ・ベック中尉。君だけは、絶対に……」

シオン・レナート少尉に手首を掴まれて、ジェイは喧噪の格納庫の中を往く。人垣を分け、速足気味に歩く少女士官。その揺れる金髪に、「シオン少尉、何処へ？」と問うたが、返事は無かった。戸惑うジェイを無視して、シオンは格納庫の隅——使われていない器具の並べられた整備ラックの物陰へと、彼を誘う。

「シオン——」

言葉は、続かなかった。

「シオン——」

不意に手首を力強く引かれ態勢を崩したジェイは、グイと顔を寄せた彼女に唇を奪われた。戸惑い、思わず逃れようとしたジェイだが、叶わない。まるで彼の中にある何かを奪い去るかのように、貪るように——ねっとり絡みついた接吻の果てに、シオンは囁く。

「……ジェイ、私を守って。貴方が取り戻したその力で、他の誰でもない——私だけを守って」

宝石のように澄んだ濃緑の瞳に見据えられて、ジェイは言葉を失った。無言の中、視線だけが交錯する時間が数秒——意を決したかのようには目を伏せると、彼女の肩を取って、ゆっくりと引き離す。

「……俺は、為すべき事をする。それが今は、君が生き残る事にも繋がらるって、信じてる」

短く言ったジェイは、返答を待たずにその場を後にした。今はこれ以上、彼女と向き合う自信が無かった。

——翌日。

高速戦闘隊、強襲戦闘隊、そして重砲隊を合わせて編成された二十

五個師団、『ヘリック共和国軍複合戦闘師団』が、エントランス基地を  
発った。目指すは、ビフロスト平原とヴァーヌ平野の境界に築かれ  
た、ガイロス帝国防衛線の要所・『ヘルダイム要塞』。帝国軍最大の軍  
事拠点・チエピンより出陣した二十個師団にも及ぶ大軍が、この要塞  
に召集されているという。

暗黒大陸上陸以来、最大規模となる大決戦が今、始まろうとしてい  
た。

⑦ 終焉（二クス）への旅路（前）

——ZAC2101年 10月初頭 ビフロスト平原東部・ヘルダイム要塞近郊

絶え間なく響く砲撃音が、蒼天の空を震わせた。大地の中を蠢いた振動が、足を伝って脳髓まで駆け上がる。先に出撃した強襲戦闘隊・重砲隊の混成部隊が、既に帝国守備隊との交戦を始めているらしい。

——『ヘルダイム要塞群』。

ガイロス帝国建国史上の英雄、ヘルダイム・パラクロフトの名を関したこの大要塞は、このビフロスト平原とヴァーヌ平野を隔てる山脈に沿って建造された、長大な城壁だ。帝都ヴァルハラを守る上での戦略的要所にして要であるヘルダイムだが——その規模故に数個師団規模のゾイド部隊を配置しなければ、十全には機能しない。そして共和国軍の暗黒大陸上陸戦以来後手に回り続けた帝国軍は、この要塞に十分な規模の戦力を配していなかった。

エントランス近郊より招集されて出陣した共和国機動陸軍が、ビフロスト北東部に陣を張って一週間。此処ヘルダイム要塞に入城しようとする帝国本土防衛軍と、昼夜の境無き激戦を繰り広げている。

敵の士気は高かった。総戦力数で劣っているにも関わらず、要塞への道を断ち切るようにヘリック軍が敷いた五重の防衛線を、ガイロスの大隊は既に第三層まで突破している。戦線は混乱を極め——敵味方入り乱れる戦場の噴煙が、ビフロスト平原の地平線一杯に広がった。

「上層部から命令が下りた——俺達高機動戦力で、ヘルダイムを落とす」

キャンプ内に設置された即席のブリーフィングルームで、『ミラージユ隊』のメンバーに、ピーター・アイソップ大尉が告げる。

機甲師団・特殊工作師団混成の大部隊を組織し、派遣していたへ

リック軍だが、今現在高速戦闘隊だけは唯一最前に配さず、防衛線の深奥に据えられた野营地へと待機させていた。迅速な作戦行動を起こせる予備兵力として、不意の事態に備え最後まで温存する采配であったが——均衡を破ったのは、予想外の指令であった。

ピーター・アイソップの持ち帰った命令書に、「正気か?」と、コーネル・ロドニー副官が眉を顰める。当然の反応であろう。苦戦する味方防衛部隊とは真逆に赴き、ヘルダイム要塞に籠城を続ける帝国軍へと攻撃を加える——下手に戦線を拡大して、もし仕留めきれなければ、いたずらに戦力を疲弊するだけになりかねない。

「最もな意見だがな——」

隊の総意とも取れるロドニー副官の言葉に、アイソップは頭を振った。テーブルに広げられた周辺の地形図と、両軍の配置を指し示して、

「敵が精強過ぎたんだ、数で劣っているくせに前進を続けて、既にこちらの防衛線に深々とめり込んでやがる。下手をすればこのまま突破されて、ヘルダイムの守備隊と合流されかねない。そうなれば、味方の士気はダダ下がりだ」

「——そうなる前に、彼らの目的地を……敵が入る家を潰す、と?」

チームのエース、シュウ・フエーン中尉が、アイソップの意図を予測して言葉を継ぐ。険しい表情で頷き、肯定したアイソップは、「目指すべきヘルダイムさえ潰してしまえば、敵の進撃は必ず鈍る。コイツは総力戦だ、勝つためにはまず、相手方の心を挫かなきゃならないんだ。分かるか?」と、一同に問うた。

沈黙を了承と取ったアイソップが、作戦の全容を説明する。

『ミラーージュ隊』を加えた、特殊工作師団所属の予備兵力一個師団・高速戦闘用ゾイド約1000機が先行し、ヘルダイム要塞を攻撃する。斥候部隊によると、要塞中枢部『山嶺<sup>フォルト・ゲファイオニア</sup> 砦』——ニクス大陸西部・ミミール湖畔より切り出された白岩によって建造された白亜の城であり、その外観の由縁から『ミミール砦』の通称を持つ——に駐留するガイロス軍は、約五個大隊分、戦闘ゾイド役500機に相当する戦力だ。



攻城戦において必要とされる戦力は、一般的に籠城する側の五倍ないし十倍とされる。ヘリック側の戦力は、決して十分とは言えない。だが——数の有利に反して予想外の悪戦が続く主力部隊の士気向上のためにも、この戦いには価値があった。

何か質問はあるか、と一区切りを付けたアイソップは、隊員達へと順に見遣って——やがてジェイト、彼の隣に付いたシオンに目を止める。「レナート大佐のお嬢さんは、どうだ？」と、陽気な風を装って問うた部隊長に、シオンは微かながら眉を顰めた。

「……何も。何もありません」

「ほう——知らんうちに、随分としおらしくなっちゃったな。構わんが」

ブリーフィングは、それで終了の運びと鳴った。一同同時に立つと、力強い敬礼の後にキャンプを出て——各々の《ブレードライガーミラージュ》へと乗り込んだ。

秋風吹き荒ぶビフロストの草原を、共和国軍高速ゾイド部隊が疾走していく。ライオン型、狼型戦闘機械獣が肩を並べて疾走する様は雄大だが——見かけに反して、進軍は思いのほか怠慢であった。理由は簡単で、《シールドライガーDCS》や《コマンドウルフAC》、そして、新たにミラージュ隊の随伴機として設定されたヴェロキラプトル型ゾイド《スナイプマスター》に『全方位ミサイルユニット』を増設した『重火砲隊』が、部隊の最前を往くように足並みをそろえた結果である。

要塞攻略の要はこの重火砲隊による先制攻撃で、如何に迅速に城壁を破壊できるかに掛かっていた。『ミラージュ隊』も、機体の半数を『タイプB』——アタックブースターを廃し、ゴジュラス用の『バスターキャノン』を増設した改造機《バスターブレード》へと換装して、この初撃へと加わらせている。

「見えた——あれが、ヘルダイム要塞群か」

ジェイトの《ブレードライガーAB》は部隊後衛に配し、通常型の《ブレードライガーミラージュ》と共に、城壁崩壊後速やかに突入する事

となっていた。機動力の低下した重火砲隊に合わせて、時速150キロ程の快速走行を続けると、一行の目的『山嶺<sup>フォルト・ゲファイオニア</sup>砦』の姿が露わとなる。黒岩の塊のようなゲファイオン山脈の麓、噂に違わぬ白亜の城塞が屹立していた。山沿いを果て無く困った城壁も合わせて、二クス大陸で——否、この惑星Zi全域で見ても、最大規模の大要塞であろう。「アイソップ機より、『ミラージュ隊』各機へ。ロドニー大尉率いる銃火砲隊が城壁を突破次第、俺達で突入する。それまでは露払いだ。敵が差し向けた迎撃部隊に阻まれて砲撃隊の手が緩まないよう——、ツ！」

通信の最中、角笛の音にも似た重々しい警報がヘルダイム要塞より鳴り響き、草原中を木霊した。次いで白亜の要塞より、無数の黒い機影が飛び立つ。爆撃機だ、無人の《ザバット》が二十、爆装を施して空に飛び立つ。「航空戦力か、厄介な事を……」と、アイソップがごちた時だった。

——鋭い銃撃音と共に無数のビーム光弾が放たれて、宙空の《ザバット》を次々と啄んだ。

黒い機体は閃光の中で砕け、すぐに鉄くずの雨と変わる。潜行する『ミラージュ隊』の後方より、見慣れない中型高速ゾイドの群れが追隨するの気づいて、ジェイは振り返った。形骸は《コマンドウルフ》に似ているが、黒と金で彩られた体躯はスマートながら力強く、叫ぶ咆哮は狼型戦闘機械獣のそれとは異なり、どこか品があった。

《シャドーフォックス》。『閃光師団』に配備されていたキツネ型ゾイドが、ジェイ達に先んじて《ザバット》を撃ち落としていた。背負った主兵装・最新式の『徹甲レーザーバルカン』は、遙か上空の《ザバット》を撃ち捉え、なおかつ粉碎するだけの破壊力がある。

新型の性能に舌を巻きながらも、アイソップはニヤと破顔して、「閃光師団の残党もお出ましか……まあいいさ、一気に片付けるぞ。」

——コーネル、始めろ！」

と、無線越しに合図を出した。

ほぼ同時、最前に立った『重火砲隊』のゾイド達が、ヘルダイムの城壁へと一斉に攻撃を開始した。閃光。ヘルダイム要塞の姿は、一瞬

光の中へと吞まれて、ジエイ達の視界から消えた。《シールドライガー》の『ダブルキャノン』、《バスターブレード》の『ロングレンジバスターキャノン』……光線、実弾問わぬ猛攻撃が爆せて、ヘルダイムの城壁が悲鳴を上げる。防備に付いていた《ダークホーン》の、必死の牽制射撃が飛ぶが、『Eシールド』を備えたライガー達が最前におり、有効打に成り得ない。すぐさま反撃を受けて爆散し、誘爆が一層城壁を疲弊させた。

重火砲隊の後方、アイソップ大尉率いる突入部隊が控える。

ジエイの《ブレードライガー》もまたシオン少尉の《ブレードライガーミラージュ》を伴って、戦いの様子を見守っていた。先の《ジエノフレイム》六機連隊に対する苦戦から、既に《ブレードライガー》の性能的優位が無いと証明されている。精鋭ぞろいの『ミラージュ隊』といえど単独行動は出来ず、基本的に二体一組の連携戦闘を推奨された。此度の任務では、シオンがジエイのパートナーという事になる。ズンと、地響きが鳴った。

猛攻にヘルダイムの城壁の一角がひび割れて、崩落を開始したのだ。ガラと崩れる土砂、城壁上部に潜んでいたガイロスの守備隊の機体も巻き込んで、巨大な外壁が土石流の如くなだれ落ちる。

巻き上がる粉塵を見遣って、「いよいよだな——全機、突入準備！」と、アイソップの指示が飛んだ矢先だった。

噴煙の中、ギャヒイン、とけたましい断末魔が鳴った。次いで、爆炎。重火砲隊の一角を担っていた《シールドライガーDCS》が投げ飛ばされて、空を舞うと——大地に打ち付けられて、滅茶苦茶に拉げられる。

城壁の向こうより新たな敵が現れたのだろうか、姿はまだ見えな

い。

今度は、光弾の嵐が爆ぜた。事態を理解できぬまま、重火砲隊のゾイド達が次々と撃ちぬかれていく。「なんだ、どうなってるんだー」と喚いたコーネル・ロドニー大尉が、《バスターブレード》の機首を翻すと、火線の先に『ロングレンジバスターキャノン』を叩き込んだ。

ボツ、と膨れた火球が、巻き上がった土埃を吹き飛ばし——新たな敵影を白日の下に照らし出す。

ユラと、巨軀の四足歩行ゾイドの姿が揺れた。

「あれは……っ」

ヘルダイム要塞より出陣したガイロス軍の機体に、特殊工作師団の兵達が皆、一様に息を呑む。藍色の重装甲に身を包んだ、巨軀の獣。蛇のように撓った鼻先を撃ち振るって、《シールドライガー》を、コマンドACを、そして《バスターブレード》をなぎ倒していく巨象の群れ——換装機獣《エレファンダー》の大群であった。

《エレファンダー》。ガイロス帝国の誇るゾウ型の重戦闘機械獣であり、拠点攻略・及び防衛、局地戦等、多岐にわたって高い性能を発揮する新鋭機。先のエウロペ戦争においてニクシー防衛に用いられた際には、たった100機で、その10倍もの戦力を食い止め——300機近いヘリック軍のゾイドを破壊した実績を持つ。それがヘルダイム要塞の主要戦力として、100機近く配備されていたのだ。

重装甲と『Eシールド』を持つ《エレファンダー》に並の火器・白兵戦用兵装は通用せず、しかも高機動ゾイドの格闘戦にも対応し得る機敏さも併せ持っていた。迅速に撃破するには、銃装甲を撃ち抜く大火力を投入し集中砲火、各個撃破するのがセオリーだが——それを為し得る重火砲隊は城壁突破のために先行した結果、《エレファンダー》部隊によって懐に入られた形となっている。混乱の中では、真つ当な連携は期待できない。

「なるほど……簡単には取らせてくれない、という事かい」

次々と蹴散らされていく重火砲隊の機体達を眼下にして——ピーター・アイソップ大尉はギリと奥歯を噛み、一人ごちた。

## ⑧ 終焉（二クス）への旅路（後）

ヘルダイムの城壁が砕けた事で、山嶺<sup>フォルト・ゲファイオニア</sup> 砦へと続く道が拓かれたはずだった。が——、立ちほだかった無数の《エレファンダー》に阻まれて、ヘリック共和国の要塞攻略部隊は二の足を踏んでいる。

重装甲・重火力で全身を固めた巨象の群れは、軽装甲かつ火力に乏しい高機動ゾイドにとって、かなりの難敵である。加えてライガー・ウルフタイプ戦闘機械獣の最大の武器である俊敏さ、運動性も、この混戦の中では生かしづらい。重装ながら、下手な巨大ゾイドに比べれば遥かに優れた瞬発力を持つ《エレファンダー》だ。十全に性能を発揮できない条件に在る高速ゾイドなら、ものの数手で撃ち捉えるだろう。

「コーネル、《バスターブレード》を——重火砲隊を退<sup>さ</sup>がらせる！ 《ミラージュ》以下、爆装していない機動戦力は、俺に続け。撤退を援護する！」

ピーター・アイソップの勇ましい掛け声と共に、《ブレードライガーミラージュ》が、《シールドライガー》が、《コマンドウルフ》が、最前線へと躍り出た。火砲を背負い小回りが利かず、しかも不意の反撃にあつて戸惑うばかりの重火砲隊は、《エレファンダー》の巨軀に跳ね飛ばされ、踏みつぶされ、火砲を見舞われて次々と砕け散っていく。絶体絶命の危機に落ちいった友軍を救うため——ヘリックの猛獣型戦闘機械獣達は果敢に、鋼鉄の巨象達へと挑みかかった。

「——ハアアアン！」

けたましい雄叫びと共に、『ミラージュ高速隊』のエースパイロット、シユウ・フェーン中尉の《ブレードライガーミラージュ》が飛び掛かる。跳躍と共にアタックブースターを全開にしたフェーン機は、宙空を流星の如く滑空して、《エレファンダー》の群れのと真ん中へと突っ込んだ。敵機の主砲『105mmビームガン』及び『115mmパルスレーザーガン』の集中砲火が飛ぶが——フルパワーで展開した『Eシールド』でそれを捌き、爪撃で《エレファンダー》の片耳を削ぐ。

フェーン機の果敢さに、続く友軍の士気も高まっていく。屈強な《エレファンダー》だが、不死身ではない。関節や武装との接続部と言った非装甲部分を攻撃すれば、ダメージを与える事も可能なはずだ。

今度は、《シャドーフォックス》部隊が前に出た。高出力の『徹甲レーザーバルカン』を照射し、一点集中。頑丈な《エレファンダー》と言えど火花を散らし、大きく仰け反る。牽制射撃で怯んだ所を別のフォックスが駆け抜け、『ストライクレーザークロウ』が煌めく。関節を断たれ動けなくなった巨象は、己が自重によつてゆつくりと崩れ落ちた。

ヘルダイム要塞の守備隊は精強であったが——戦局はゆつくりと、数に勝る共和国軍の方へと傾いている。

ジェイ・ベックもまた、悠々と戦場を練り歩く《エレファンダー》の一機を仕留めに掛かる。『レーザーサーベル』を煌めかせた《ブレードライガー》がその首筋へと食らい付き、ガリガリと装甲を拉がせるが——パワーに勝る《エレファンダー》だ、負けじと機体を立て直すと、巨木の如き鼻を器用に手繰って、ライガーの脇腹を捉える。先端部に備えた鉤爪状のアームユニット『ストライクアイアンクロー』で《ブレードライガー》を掴み取るや、そのまま引き剥がして宙空へと放つた。

「——、うおおおッ！」

地べたを転げた《ブレードライガー》だが、すぐに起き上ってアタックブースターを展開し、反撃の『ハイデンシティブームガン』を撃ち放つ。

砂塵を撒いて飛んだ高密度ビームの粒子は、虚を突かれた《エレファンダー》のкокピットに直撃し、その頭部を粉碎。無貌と化し、脳髓を失った藍の機体はそれでも数秒の間歩みを進めたが——やがて機能停止、立ったままの往生を遂げた。

援護を受けて立て直した重火砲隊も、支援攻撃を再開する。《エレファンダー》の猛追も勢いが削がれた、追撃をかわした幾つかの《ブレードライガーミラージュ》が、崩落した城壁を乗り越えて侵入して

いく。

「——城を盗れ！」フォルト・ゲファイオニア『山嶺砦』を落とせば、ヘルダイム要塞は潰したも同じだ！」

混戦の中、ピーター・アイソップの猛々しい声が木霊した。

友軍が次々と進撃を続ける中、ジェイの《ブレードライガー》は辺りの惨状を見回し、立ち尽くした。

味方の士気は高い。このままの勢いなら、後二時間もすれば『ヘルダイム要塞』は陥落するだろう。

だが——代償が、あまりにも大きい。

ヘルダイムの城壁に阻まれて果てた、共和国軍高速ゾイドの死屍累々。《シールドライガー》や《コマンドウルフ》だけではない。《ブレードライガーミラージュ》、果ては《シャドーフォックス》と言った新型ゾイドまで。砕け、立ち上がれなくなり、敵味方の足蹴にされた無数の残骸が、土砂に塗れていた。

不利となる条件を数の暴力で補おうとしたのだ、多くの犠牲が生まれるのは道理である——だが、それでも軍上層部は進撃を止めないであろう。ヘリックとガイロス、二つの大国の間に横たわった、積年の因果。全ての遺恨を清算するため、今、血で血を洗う総力戦の火蓋が切って落とされたのだ。

ボツ、と爆ぜた轟音が、感慨に耽るジェイを引き戻す。

(ワアアアア……ッ！)

無線越し弾けたのは、シユウ・フェーン中尉の断末魔の叫びだった。ミラージュ隊内においても有数のゾイド乗りである彼の《ブレードライガーミラージュ》が、ボロ雑巾のように引き裂かれて瓦礫の中に散らばる。撃ち捨てられたその機体の向こう、一機の《エレファンダー》が尚、共和国の一隊を相手取り、立ちはだかっていた。

一層の異彩を醸す機体であった。専用のオプションパーツを組み替える事で、戦局・用途に応じた武装を選択できる《エレファンダー》

は、『換装機獣』の異名を持つ。ジェイの眼前で狂戦士の如き猛攻を見せたその巨象は、背部主砲が近・中距離専用のミサイルポッド・ビームガトリングを折衷した『アサルトガトリング』に、鼻先が突撃戦に有用な複数の光学兵器を併せ持つ『E S C S (Energy Sword with Cannon/Shield)ユニット』に換装されている。一対多での拠点防衛を念頭に入れたフルカスタムモデル。しかも頭部ユニットは、筐体にも似た単調な面構成の通常機と比べ、遙かに複雑な形状の『鬼面』——『ガネーシャ』とも仇名される、指揮官専用機の厳めしい相貌が装着されていた。

言うなれば、『エレファンダー・アサルトコマンダータイプ』である。崩壊した城壁の切れ目から、ヘリツクの高機動ゾイドが次々と城内へとなだれ込んでいく。落城が刻一刻と迫る『ヘルダイム要塞』に在りながら、あの『エレファンダー・アサルトコマンダータイプ』の闘志は削がれるどころか、更なる昂ぶりを見せていた。肥大化した大牙『クラッシュャータスク』でライガー達をなぎ倒し、背負ったガトリング砲の掃射で、数機の『コマンドウルフ』がまとめて消し飛ばされる。被害は、甚大であった。無双の強さを見せるその雄姿に、他の『エレファンダー』残存機達も覇気を取り戻し始めている。城壁内に侵入しようとした共和国軍に追い縋るや、そのパワーで持つて引き摺り倒し、踏み砕いた。

「無益なことを……まだ続けるのか」

このままでは、無駄な犠牲が次々と広がっていくだけだ。獣達の苦悶があちこちで叫ばれる中、ジェイは『アサルトコマンダー』へと『ブレードライガー』の機首を向ける。『ハイデンシテイビームキャノン』の一射、ドツと流れたビームの奔流が『エレファンダー』へと流れ込むが——、

ジェイの殺気に気づいて先に身を翻していた『アサルトコマンダータイプ』は、既に防御態勢を整えていた。元より備えるエネルギーシールドと、『E S C S』のシールドジェネレーターを同調させて発生させた光の盾は、高密度ビームを難なく消し飛ばして見せる。ビームの余波が舞う中、煩わしそうに身をゆすった『アサルトコマンダー』。



ズンと輝くスカウタータイプのカメラアイでジェイの《ブレードライガー》を見据えると――湧き上がるプレッシャーが、ジェイの全身を総毛立たせた。

――単機で戦って、適う相手ではない。

「――ッ、シオオオン！」

ジェイの叫びを受けて、城壁上の残存戦力と撃ち合いを続けていたシオン・レナート少尉機も《エレファンダー・アサルトコマンドー・タ イプ》の存在に感づき、踵を返す。無数に朽ちたヘリツク共和国軍ゾイドの亡骸を、バリバリと踏み砕きながら迫る重装の巨象、その威容に向けて渾身の咆哮を吐きつけると――ジェイの《ブレードライガー》は、ブースターを全開にして突貫を掛けた。

《エレファンダー》の背負った重火器『アサルトガトリングユニツト』より、大量のマイクロミサイルが撃ち放たれる。最新鋭の自立式レーザーサイトとリンクした追尾反応弾が、まるで霰の如く大空より降り注いだ。

「ク――ッ」

背部の『ロケットブースター』、及び『アタックブースター』の増加バーニアを全開にして加速したジェイのライガーが、絨毯爆撃の中を縫うように駆け巡る。爆ぜる土砂の中を縦横無尽に翔けるや、『レーザーブレード』を展開、一足飛びで《エレファンダー・アサルトコマ ンダー》へと切り込んだ。

――が、巨象は尚怯まない。鼻部先端の『E S C S』を変形させ、刺突用の『ビームソード』を発振させると、ライガーの斬撃を薙ぐように剣閃を振るった。両機のレーザーコート・ブレードが交錯し、凄まじい量の稲妻が爆ぜる。

「……ッ！」

宙空でコンマ数秒の間鏖迫り合いを演じた、《ブレードライガー》と《エレファンダー》だったが――時速三百キロ以上の疾走と跳躍、さら

にはライガーの猛猛な思惟が加わった斬撃を、《エレフアンダー》膂力のみで捌ききった。跳ね飛ばされ、地べたに激突したジエイのライガーに、《エレフアンダー》が止めのミサイルランチャーを見舞う。横転した《ブレードライガー》にそれを凌ぐ術は無く、ジエイ機は轟と巻き上がった爆炎の中に呑みこまれた。

「……ベック中尉ッ！」

ジエイ機への追撃で背を向けた《エレフアンダー・アサルトコマンドー》に、今度はシオンの《ブレードライガーミラージュ》が躍り出る。霧散した闘気を感じて、すぐに『ミサイルポッドの砲口を向けた《エレフアンダー》だったが——砲弾の雨が飛ぶことは無かった。ジエイとの戦いで、残弾を使い切っている。

「——、ヤアアッ！」

バーニアを全開にした《ブレードライガーミラージュ》が、グンと加速して巨象へと迫った。グルと砲塔を回して『アサルトガトリングユニット』の予備兵装・ビームガトリングガンを取回した《エレフアンダー》だったが、ライガーのEシールドが光弾を跳ね飛ばす。迎撃を凌ぎ切った《ブレードライガーミラージュ》の一撃が煌めき、《エレフアンダー》の懐へと入り込んだ。

——だが、浅い。掠めた斬撃は、《エレフアンダー》の備える大牙『クラッシュヤータスク』を一本刎ねるに留まっている。

尚も顕在な巨象——反撃が来る、と、思わず距離をとろうとしたシオンだったが、事を起こす前にゴツ、と鈍い衝撃が襲った。《エレフアンダー》が当て身を行って、《ミラージュ》を力任せに押し倒したのだ。「——えアッ!？」と悲鳴を呑んだシオンに、追撃の『E S C S・ビームソード』が飛ぶ。光子の刃が掠めて、ライガーのマルチブレードアンテナと、片方のアタックブースターを削ぎ落した。

損傷し、ガクと傾いたシオンの《ブレードライガーミラージュ》を、《エレフアンダー・アサルトコマンドー》の振り下ろした蹄ががっちり踏み固める。ミシときしむコクピットの中で、眼前に迫った大山の如き異様を見上げたシオンは——その向こう、未だ燃え盛る噴煙の中へと思惟をやる。

「……、ジエイツ！」

激震の中で、シオンが請うた叫び。

まるでそれにに応えるかの如く——《エレファンダー》の背後より、猛獣型戦闘機怪獣の猛々しい咆哮が木霊する。直後噴煙を掻き分けて飛び出したジエイの《ブレードライガー》が、再び光刃を煌めかせて《エレファンダー・アサルトコマンダータイプ》へと斬りかかった。「——ウエアアツ！ レーザーブレード、ストライクアタックツ！」

グンと迫る《ブレードライガー》の斬撃。《エレファンダー》の乗り手も、相当な手練れなのだろう、すぐさまグルと機体を翻して、『ビームソード』で迎撃する。神速で見舞われた、必殺の一撃——だが、背後からの奇襲を迎え撃つには、それでもほんの刹那遅かった。振り向きざま突き出された刺突は、《ブレードライガー》の小脇を擦り抜けて、空を斬る。同時、ライガーの『レーザーブレード』が一閃すると、巨木の如き《エレファンダー》の鼻ごと、その前足を叩き斬った。

グラと傾いた《エレファンダー》の足元より、間髪入れずに力を取り戻したシオンの《ブレードライガーミラーージュ》が屹立すると——『ハイデンシテイビームキャノン』の零距离射撃で巨象を撃ち抜く。噴煙を上げた《エレファンダー》は、鋼鉄が軋むような鋭い断末魔を上げて数秒もがいたが——やがて事切れ、ゆつくりと崩れ落ちるのだった。

ジエイ達の死闘が終わりを告げると同時、戦場に歓声が沸いた。

荒い息を整えながらジエイが振り返った先には、噴煙を湛えた白亜の城が在った。城壁を乗り越えて城内へと侵入した友軍が、ついに『フォルト・ゲファイオニア山嶺砦』への攻撃に成功したのだ。

ボヤと立ち込めた焰を見上げたジエイ機の横、シオン・レナート少尉のライガーが肩を並べる。キャノピー越し、高揚の微笑を持って此方を見遣ったシオンの姿が見えたが——対して、ジエイの心に勝利の余韻はない。濛々と立ち込める戦場の残り火と、そこで朽ちた多くの人、ゾイド。眼前に広がった光景は、これより先に続く、果てない修

羅道の縮図にも思えた。

エリサ、と——ジエイは思わず、探し求める女性の名を呟く。

(……君がいるのかい、エリサ。この、現世に涌いた地獄の果てに、まだ君は——)

胸中で問うた疑念に、応える声など無かった。耳朶を打つは、絶えず重なるけたましい砲撃音のみ。立ち昇る紅蓮は、まるで時化した海原が小舟を薙ぐかのごとく、『ヘルダイム要塞』の中枢へと群がって、押し流していく。

——終焉<sup>ニクス</sup>への道は、今拓かれた。

## ⑨ 終末の序曲（前）

——ZAC2101年 10月下旬 暗黒大陸二クス ヴアーヌ  
平野南東部・ヘリック共和国軍駐屯地

吹き荒ぶ夜風。

既に初冬の様相を醸す暗黒大陸のそれは、しかし——驚くほどに冷たくない。昼間に勃発した乱戦の余熱が混じって、焦げた匂いを湛えた生暖かい大気と変わっている。暗夜の荒野の中、あちこちでチリと燻った焰は、まるでここで命を散らした者達の、靈魂のようにも思えた。

負傷した右の腕を庇いながらヨロと立ち尽くし、友軍の野営準備を見守っていたピーター・アイソップ大尉だが、ふと目に付いた遠景に、そんな感慨を覚えた。

「……アイソップ」

不意に呼び掛けられた声に、振り返る。見遣った先に、副官コーネル・ロドニー大尉がいた。『ミラーージュ高速戦闘隊』結成以前からの知人で、アイソップも「——よう」と、ニヤと笑みを返す。表向きは隊長とその補佐官、という立場に隔てられているが、階級は同じ、気心も知れている中だった。二人きりの時は立場を交えず、砕けた風話す事ができる。

「こないだは、悪かったな。ぶん殴ったりして」

「その事はもう良いよ。代わり、お前の親父さんに救われたんだから。彼の容体はどうだ？」

「心配ない。《バスタートータス》は堅牢な機体だった。二週間もすれば復帰するだろうよ」

二週間、と反芻したコーネルは、「存外、親父さんが復帰するよりも早く、この戦争は終わっちゃうかもしれないぜ」と、立ち並んだヘリック軍のゾイド部隊へと振り返る。休む間もなく進撃を続けたヘリック共和国のゾイド部隊。土埃と煤に塗れ、皆修理痕だらけでつきはぎ

になった機体ばかりだ。『ミラージュ高速隊』も破損機が相次いで、既に最前線に残っている《ブレードライガーミラージュ》は、10機弱まで数を減らしている。

『ヘルダイム要塞』を落としてから二か月足らず——ビフロスト平原からヴァーヌ平野へと抜けた共和国の主力部隊は、休むことなく前進を続けた。代償は大きかったが、既に帝都ヴァルハラまで一週間と掛からぬ距離まで、戦線は浸食している。上層部の目論見どおり、二クスの冬が訪れるより前に、帝国・共和国の雌雄を決する舞台が整うであろう。

しかし、コーネル・ロドニーの貌は暗かった。「正念場は、此処から始まる」と、険しい表情で頭を振ると、目指す先——帝都『ヴァルハラ』のあるう北の夜空を見つめる。

「帝国はまだ、真の切り札を出していない。アイソップ、お前も聞いているだろうか？ 先に閃光師団が遭遇した『レイフオーズ血濡れの悪鬼』の事」

「死竜、《デスザウラー》か……」

ガイロス帝国が復活を腐心する恐竜型巨大ゾイド・《デスザウラー》。

旧大戦においてヘリック共和国を滅亡寸前まで追いつめたそれは、様々な新技術が完成され、数多く新型機が実戦投入された今日の戦場においても尚、並肩する者の無い最強の戦闘機械獣である。そして此度の本土決戦において、その試作機と思わしき機体を実戦投入されていた。それが何を意味するかは明白である。

「早急な進軍で、前線の兵士達はもう満身創痍だ。この様で、もし伝説の『スケルトン部隊』の再現に遭遇する事となったら……ヘリックはお終いだ、完全に瓦解することになる」

コーネルの懸念に暫し黙りこくっていたアイソップだったが——、「上の連中だって、んなこたあ百も承知だろうよ」

と頭を振るや、クルと背後を振り返った。

「なあ、コーネル。コイツは『オペレーション・ラグナロク終末作戦』だ。長くこの惑星Ziで拮抗していた二つの力が、雌雄を決するんだよ。だとしたらヘリックだって、生半可な覚悟で臨むわけがない……そうだろうか？」

つられて振り返ったコーネルは、遙か先の地平を進むカタツムリ型の大型トランスポーターが、暗夜の地平を進む様を見た。かつて遊撃部隊・閃光師団レイフオーズの輸送に用いられていたそれは、最大積載数を二機に限定し、超大型ゾイドの輸送を可能とした改造機《ホバーカーゴ・クレイドル》である。

計10機にも及ぶ巨大輸送艦が、まるで列車の如く連なつて北東へと移動していく様を見遣り、「——あれが、終末作戦の要となる『特務隊』か」と、呟いたコーネル。そんな彼の肩を軽く小突くや、「休める時に休んどけ」と、ピーター・アイソップは踵を返す、

「司令部の意向は、大体分かつてるつもりだ。明日には帝都ヴァルハラに向けた進撃を再開する事になるだろう。今俺達を遮る敵影は無い……ガイロス皇帝の膝元に一番乗りするのは——おそらく俺達だ」  
そう言うなり、アイソップは一足先に野営キャンプへと戻つていった。

——※※※——

朱色に染まったシオン・レナートの裸体が、薄明りの中でユラと振れた。

野営地の一角、締め切った《ブレードライガー》のкокピットの中——ジェイ・ベックは彼女の、震える息遣いだけを聞いていた。二人の熱を溜めこんだ密室の中は湿っぽくて、鼻孔を擦るシオンの体臭を、一層甘美な物に錯覚させる。汗ばんだ素肌同士が触れ合えば、体温だけではない、彼女の高まった鼓動までしっかりと伝わって来て——心地いい反面、どこか切なくて、息苦しい。

助けでも請うかのように、二人の吐息で曇った天井のキャノピーへと手を伸ばしたジェイだったが——シオンの指先がそれを絡め取つて、ゆっくりと薙ぐ。残る掌で乱れた金髪をゆっくりと搔き上げたシオンは、トロと弛んだ瞳でジェイに微笑むと、

「——私、死なないわ」

と、その胸元に寄り添った。

「貴方が助けしてくれるでしょう？　ここまでそうしてくれただよように、これからも。私を守って、ジェイ——そうすれば、私も貴方を愛してあげる」

ジェイは、応えなかった。

フツ、と口角を歪めたシオンが、ゆっくりとジェイの首へと両の手を回す。ゆっくりと這った彼女の指先に、やがてギリと力がこもって、ジェイの氣道を圧迫し始める。

苦しいよ、シオン——と喘いだジェイだったが、

「——苦しんで。他の何もかもを忘れてしまおうくらいに……私で、溺れて」

と、シオンは続けた。

数秒の間、彼女の圧に締め上げられたジェイだったが、やがて優しくその手を取って、引き離す。抵抗は無く、拘束は驚くほどにあっさりと解けた。華奢な手首を掴み取ったまま、ジェイがゆっくりと頭を振ると、シオンはどこか寂しげな表情を見せ——、

——エリサ・アノン、と、不意にその名を呟く。

「何故、どうして——」

彼女の話す、シオンにした事は無かった。

驚き目を剥いたジェイに、ふると頭を振ったシオン。「不思議な事ではないでしょう？　何度貴方と寝たと思っっているんです、うなされて、その名を呼んで涙する貴方を……今日までに、幾度も見たわ」と、ジェイの頬に手を寄せて、撫でる。

苦悶の相を浮かべ項垂れたジェイは、吐きだすように内心を零した。

「俺は、エリサを助けたいんだ。俺の力の至らなさが、彼女を救えなかった。エリサの事を……深く、深く傷つけてしまったから」

「その覚悟が貴方を、必要以上に臆病にしている——貴方を、弱くしている。エリサを忘れて、私を愛してよ。そうすれば貴方は、もっと強くなれる」



観念したように俯いたジェイの耳元、「——忘れて」と、シオンの囁きが鳴った。葛藤に曇ったジェイの瞳を、真正面から覗き込んだ彼女の目は潤んでいて——そしてかつてない程に熱が籠もっている。

肩を震わせたジェイに手を添えて抱き寄せたシオンは、ゆつくりと目を伏せると、口づけをしようと顔を寄せた。

が——、

「——ダメだ。できないよ、シオン」

静かにジェイは、彼女を拒絶した。

優しくも、しかし確かな意思を持ってシオンを引き離れたジェイは、衣を見繕ってキャノピーを開ける。情事の熱が吹き荒ぶ夜風にかき消されて、ジェイがその場を去ろうと立ちあがった時だった。「——無理よ、ジェイツ」と、涙声のシオンが叫んだ。

「貴方に彼女は救えない。オペレーション・ラグナロク終末作戦の特務隊が、何を命じられて

るのか知らないから、貴方は——」

シオンの物言いは、まるでそれを知っているかのようなだった。「どいう意味だ？ グレイ・レナート大佐は、エリサの所属に付いては分からない、と……」と眉を顰めたジェイだが——すぐに、思い直す。

シオンは軍の高官たるグレイ・レナート大佐の娘だ。彼女の父は知らずとも、その交友——共和国上層部に頼る相手など、いくらでも居よう。その中で、オペレーション・ラグナロク終末作戦の機密中枢について関わっている者が居たとしても、なんの不思議はない。エリサ・アノンの名前を気にした彼女が、そうした伝手を使って、関係部外秘の特務隊について知り得たとしたら——。

「……君は、知っているのか。ニクスでエリサが何処にやられるのか、何をやらされるのか——全てを、君は知っているんだろう、シオンッ！」

シオンへと向き直ったジェイは、鬼気迫る表情で彼女を組み伏せ、問い詰めた。怒声に怖じ気け泣きじやくったシオンは、弱々しく身を振るだけで、何も答えない。

苛立ちが募り、もう一度、「シオン……ッ！」と、ジェイが詰問しよ

うとした時だった。

野営地の端、轟と爆ぜた焰。「――夜襲だ！」と叫ぶ、誰かの声が聞こえた。次いで、銃声。まるで落雷でも轟いたかのような猛々しい破砕音と共に、駐留していた《ブレードライガーミラージュ》の一機が弾ける。けたましい警報音。束の間の平穏から叩き出されたヘリックの兵達が、慌てて迎撃に出ようと走りまわるのを見取って、ジェイはギリと奥歯を噛んだ。

駐留するヘリック軍は、完全に虚を突かれた形になった。つい先日帝国の防衛線と交戦し、壊滅に追いやったばかりだったのだ。立ちほだかる敵は無く、現に哨戒に当たっていた《ゴルドス》の一団も、そのセンサーには何も捉えていなかったのである。

しかし――確かに侵入者は存在していた。

鳴り響くサイレンと立ち込めた爆炎に気づいて、慌てて踵を返した《ゴルドス》の哨戒部隊は、焰の中で揺らめいた一機のライオン型ゾイドの機影を見付けた。眼前に居ながら、レーダーにはなんの反応もない。おそらくは、ガイロス帝国が投入した最新鋭のステルス機だろう――だが、目の前に立ったそのゾイドの姿は、《ゴルドス》の乗り手達の見た事のある相貌の機体であった。

「馬鹿な……《ライガーゼロ》、だと……!?!」

誰かが、呆然と呟いた。燃え盛る戦火の蜃気楼に照らされた姿は、身にまとう装甲の形状、黒と金で彩ったシツクな色合いは違えど、確かにヘリック共和国の投入した新鋭の高機動ゾイド《ライガーゼロ》と同型機である。それが、あろうことか友軍の野営地に単機で飛び込み、停泊する兵と機体を齧っていたのだ。

（――否。コイツは《イクス》）

眼前の《ライガーゼロ》からの通信であろう。ジリとノイズが混じったスピーカーに、敵パイロットの淡々とした声が響く。次いで、爆炎。いつの間にか跳躍した黒い《ライガーゼロ》が、その背に背負った二本の長剣を展開し、《ゴルドス》の一機を切り倒したのだ。虚を突かれ、慌てて迎撃態勢を取ろうとする《ゴルドス》部隊であったが――

―バチバチと稲妻を纏った《イクス》に次々と引き裂かれ、撃ちぬかれる。

崩れ落ちた最後の《ゴルドス》のパイロットは、死の間際耳朵を打つた敵からの通信音声を聞いた。

《ライガーゼロイクス》――我らゼネバスの徒、『アイゼンドラグーン鉄龍騎兵団』の従えし、雷の司だ)

## ⑩ 終末の序曲（後）

（敵は、確かに《ライガーゼロ》だったんだな!）

（間違いありません、見た事の無いアーマーを装備していましたが……確かに《ライガーゼロ》でした——グアツ!）

《ブレードライガー》を起動させたジエイは、ピーター・アイソップ大尉と配下の者が交わした通信を傍受すると、その内容に眉を顰める。

「帝国側の《ライガーゼロ》……間違いはない、《ゼロイクス》だ」

と、ジエイは先日目にした報告書を想起した。元より《ライガーゼロ》は、共和国が西方大陸戦争末期にガイロス帝国が開発していた新型高速戦闘用ゾイドを奪取し、完成させた機体だ。ガイロス帝国が同型の機体を完成させても、なんら不思議はない。

一月前・トリム高地に築かれたヘリツクの前線基地にて初めて確認されたそれは、共和国側からは《ライガーゼロ・イクスアーマー》、もしくは短縮して《ライガーゼロイクス》《ゼロイクス》、帝国側では《ライガーゼロ》の名を冠さず、単に《イクス》と呼ばれる。光学迷彩と電撃兵装を備えた新鋭のステルス機であり、未だ最前線での目撃情報は無かった《ゼロイクス》だが——無線機越し流れてくる混乱の叫びと断末魔を聞けば、その性能は想像するに難くない。

ジエイが最前線へと辿り着いた時には、既に友軍は崩壊寸前であった。迎撃に出た共和国性高機動ゾイドの合間を、バチバチと弾ける稲妻だけが駆け巡り、次々となぎ倒していく。光学迷彩が機能しているのだろう、敵の姿は目視できず、青白い閃光がひとりでに這って《シールドライガー》を、《ブレードライガーミラージュ》を——そして後方に控えた強襲戦闘隊用の重戦闘機械獣を焼いていく様は、何か悪い冗談のように思えた。

「腐れ野郎が——こそこそしてねえで、正面切って来やがれ!」

ピーター・アイソップ大尉の怒号が響いて、彼の《ブレードライガーミラージュ》が前へ出る。蛇のように這いまわる迅雷を追いかけて、

『ハイデンシテイビームガン』を掃射。絡みつく高密度ビームの余波が掠めて、光学迷彩がショートした。夜闇より朧と浮かび上がった黒い《ライガーゼロ》の姿に、間髪入れず『アタックブースター』を全開にしたアイソップ。止めを見舞おうと突貫を掛ける。

「ケヤアアッー！」

駆ける《ゼロイクス》に、時速330キロの最高速で追い続けたアイソップ機だが——不意にイクスが回頭して、それを迎え撃った。

小回りの利いた、機敏な旋回。「何——ッ!？」と息を呑んだのも一瞬、次の瞬間展開されたイクスの長剣『スタンブレード』が、《ミラージユ》の半身を搔つ捌いた。砕け、横転したアイソップの機体に振り返ると、今度はその切っ先を翳して、高電圧の砲弾『エレクトロンドライバー』を撃ち放つ。巨大なエネルギー波が、動けないライガーの軀を横断し、そのゾイドコアごと真つ二つに引き裂いた。

レオマスターの駆る《ブレードライガーマイラージュ》が、一瞬で敗北した。

後手に回り動転した混乱を突いたとはいえ、《ゼロイクス》は単機で、既に二十機近い戦闘機械獣を破壊している。圧倒的なパワーを見せつける暗黒獣王を前に、共和国守備隊の指揮系統は完全に麻痺し、身動きが取れずに立ち尽くす機体でゴった返していた。指揮官・アイソップ大尉を落とされた《ブレードライガーマイラージュ》達も例に漏れず、「立ち止まるな、後退しろ！ 留まっても、《ゼロイクス》の的になるだけだぞ！」と、コーネル大尉の必死の扇動が響いた。

「後退は、駄目だ……アイツを叩くなら、光学迷彩が解けている今しかない」

惑う共和国軍を退けて、ジェイはどうか《ブレードライガー》を最前へと進める。時間が経てば、ビーム攻撃の余波でショートした《ゼロイクス》のステルス機能が復活し、再び一方的な戦いになりかねない。《ライガーゼロ》自体の基本性能は、共和国性のそれとは変わらないはずだ。肝心のステルス機能を失っている今こそ、正面切つての戦闘で勝利できる、最大の好機だと、ジェイは確信する。

平静を失った友軍に、率先してそれをやれというのは酷であろう。

唯一冷静なコーネル・ロドニー副官も難しい。味方の統率に手一杯だし、何よりアイソップ大尉に続き彼まで撃墜されたら、それこそ『ミラージュ隊』は立て直せなくなる。

何をすべきなのか理解したジエイの行動は早かった。今の彼には、この不作法な客人に時間を割いている余裕などない。ニクスへの旅路の中、ずっと追い求めていたモノへの手掛かりが、ようやくと見つけたのだ——逸る気持ちを抑えて、ジエイは《ブレードライガー》の機体を《ゼロイクス》へと向けた。

ジリジリと後ずさるゾイドの中、ただ一機《イクス》へと駆けたジエイの《ブレードライガー》は、その蒼い装甲も相まってさぞかし目についたことだろう。ギロと翠眼を輝かせた暗黒獣王の機体がバチバチと稲妻を湛えるや、真つ先にジエイのライガーへと放電する。爆ぜる雷電を『Eシールド』で凌ぐと、すぐさま『スタンブレード』を展開し、白兵戦へと移行してきた。

(なるほど、そう言う機体か……ッ！)

煌めいた斬撃を紙一重で躲しながら、ジエイは《ゼロイクス》の特性を把握する。後発機故の長であろう、おそらくは共和国製《ライガーゼロ》の武装体系を解析し、砲撃、格闘能力、運動性の全てを高水準でまとめている。

そして、猛獣型戦闘機械獣の高い運動性と、それを阻害しないコンパクトさで完成した射撃・白兵戦兼用の『ブレードユニット』——《イクス》の武装配置は《ライガーゼロ》のどの形態よりも、この《ブレードライガー》に近い。

コントロールパネルを操作して、ジエイは『アタックブースターユニット』を切り離れた。元より機体特性に近いのならば、次に勝負を分けるのはパイロット——如何にゾイドと同調し、その性能を完璧に引き出せるかが鍵となる。ならば、機動性・砲撃力の強化と引き換え、操作性を幾分ピーキーな物に変えてしまう増加兵装よりも、ゾイド本来の挙動を生かせる通常装備の方が、乗り手としては都合が良い。

《ブレードライガー》が跳躍して、《ゼロイクス》の喉元へと食らい

ついた。軽量化し、戦闘機械獣本来の闘争本能を十全に活かした一撃。負けじと爪を立てた《ゼロイクス》も、ガリガリとライガーの肩口を抉る。一見すれば互角——だが、如何にオーガノイドシステムの機能を制限されていない試作型《ブレードライガー》と例えば、最新鋭の技術・ノウハウを持つて産み落とされた《ゼロイクス》とでは、機体の完成度に大きな開きがある。地力の差から、徐々に押され始める。

壮絶な取っ組み合いの末に、《ブレードライガー》を跳ね飛ばした《ゼロイクス》。バチバチと稲妻を纏った『スタンブレード』を翳して、暗黒獣王が吠えた。先にレオマスターの駆る《ミラージュ》を退けた、必殺の放電攻撃が来る。

「クッ——させるか！」

ほぼ同時、ジェイの《ブレードライガー》も『レーザーブレード』を展開、ビームコートの出力を最大まで引き上げて、突貫を掛けた。霹靂が轟くまで、二秒と無い。間に合え、と身を強張らせながら、ジェイは渾身の一撃を放った。

バリバリと煌めいた『エレクトロンドライバー』の稲妻を飛び越えて、一閃。

運動性能は、やはり《イクス》が上だ。剣閃は、《イクス》を撃墜するには至らない——だが、電撃兵装を機能させる腰部の『ドラムコンデンサー』を掠めていた。暗黒獣王が纏う電撃兵装が、エネルギーの供給を断たれて光を失う。

ジェイの奮闘が、共和国の友軍を立ち直らせる時間を稼いだ。激戦の果てに微かながら損傷した《ライガーゼロイクス》を見取って、兵の士気も取り戻される。『ブルー・ブリッツ』に続け！ 所詮は一機だ、ステルス機能が使えない状況ならば、包囲して潰せる！』と、コーネル・ロドニー大尉が捲し立て、《シールドライガー》《コマンドウルフ》を初めとす高機動ゾイドが、《イクス》へと迫る。

ステルス機能と電撃兵装を失った《ゼロイクス》は、既に袋のネズミだった。ジリと慄き後退しようとするそれに共和国全軍が群がる

うとした時だった。

——不意に、轟と伸びた雷霆。

「これは——荷電粒子砲……ッ!?!」

《ブレードライガー》を起こしたジェイは、眼前を横切る不健全な光の奔流に目を剥く。彼方より伸びた蒼白い帯が、ジェイ機の鼻先に在った大地を抉り、突貫を掛けたヘリック軍の先方機達を纏めて消し飛ばした。爆発、炎上。噴煙の向こうに、《ライガーゼロイクス》と——見た事の無いシルエットのゾイド部隊が、姿を現す。

「帝国の増援か……ッ!?!」

狼狽えたコーネルの声に、……いや、と応えたのは、ピーター・アイソップ大尉だった。愛機《ブレードライガーミラージュ》は破壊されたものの、一命は取り留めていたらしい。「あの部隊章……閃光師団の報告に在ったモンと一致するぜ……」とごちたアイソップの声に、ジェイも思わず固唾を呑む。

損傷した《ゼロイクス》を庇うように大地から這い出たのは、超小型のカマキリ型ゾイド《デイマンティス》、同デトロフオサウルス型の《デトロフオス》。そして、その群れの中に在って一際勇壮な白いテイラノサウルス型ゾイドの機影が、荷電粒子砲の残留電子を湛えながら、ゆつくりと歩みを進めて来る。ジェイがこれまでに見た事の無い威容——大型のブースターパックと、それに重なった二対の大型ドリル『バスタークロウ』を抱えた重装の機影ながら、無骨な感は一切ない。全身を覆う白い装甲は凹凸が無い無機的な物で、戦闘機械獣の持つ生物性の全てを包み隠したそれは、さしずめフルプレート<sup>アイゼン</sup>の甲冑を纏っているかのようなだった。

「鉄竜、騎兵団だ……」

通信機越し、誰かが呆然と呟く。

「鉄竜騎兵団?」では、あれが《バーサークフューラー》か……?」

応じるコーネル副官の声にも、緊張の色が見て取れた。ニクス大陸に在って、ヘリック軍のみならず、ガイロス帝国の守備隊にまで攻撃



を加えているという、未知のゾイド部隊。ヘリック共和国の精鋭閃光師団レイフォースさえも壊滅に追いやったのだが、帝都ヴァルハラを目の前にしたこのタイミングで姿を現したのだ。

（——私は、アイゼンドラグーン鉄竜騎兵団のヴォルフ・ムーロア大佐）

抑揚のない、若い男の声が鳴った。眼前に顕現した《バーサークフューラー》からの通信。ズンと緩やかな足取りで最前へと進み出た白い機龍は、真っ赤に輝く相貌で、立ち尽くしたヘリック軍の一団を見据える。

（貴殿らをヴァルハラまで抜けさせるわけには行かない。ヘリックとガイロス、この戦争に勝者は必要ない。両国の全軍はこのヴァーヌ平野で全霊の下に戦い——そして共に滅びるのだ）

## ⑪ 決別

「ヘリックとガイロスが、共に滅びる、だと……？」

コーネル・ロドニー大尉が、呆然と反芻した言葉——眼前に現れた未知のゾイド部隊『鉄竜騎兵团』<sup>アイゼンドラグーン</sup>、その旗艦たるティラノサウルス型ゾイド《バーサークフューラー》から発せられた通信に、『ミラーージュ隊』と、随伴するヘリックゾイド師団の全機が硬直する。

フューラーを初め、鉄龍騎兵团の機体は、いずれも帝国守備隊には配備されていない未知のゾイド達だ。しかしその装甲には、ニクスを本拠とする暗黒軍の国章・飛竜十字の紋章が刻まれている。真正正銘、ガイロス帝国所属の軍隊であろうに——それが嬉々と、帝国の滅亡を語るといのが、コーネル、そして無線を聞いていたジェイ達ヘリックの兵士達には、理解できなかつた。

通信は、モニターに映像を移すオーブン回線で行われていた。ジェイのゾイドのコンソールにも、フューラーのパイロットたる男の相貌が映し出されている。青白い肌に、淡い金色の長髪、端正な顔立ちながら、その瞳には人の心の機微を超越した、静かな無機が宿っている。幻の兵团『鉄竜騎兵团』<sup>アイゼンドラグーン</sup>の指令官、ヴォルフ・ムーロア——感情の読めぬ男の目に、ジェイはこの戦争の裏にある、何か壮大な時勢を感じて押し黙った。

「ヴォルフ・ムーロア大佐といったか。穏やかではないな。貴官らはガイロスの地に生き、その国土を守る事を義務付けられた軍人だ。軍人が、母国の滅びを謳うなど——」

言葉を選びながら、コーネル・ロドニー大尉が問うと——ヴォルフ・ムーロアは微かに、その口角を上げた。ズン、と、緩やかな足取りで歩みを進める《バーサークフューラー》に、一層の緊張を強めたヘリック軍の機体達が、気圧されるように後ずさる。

（我らが忠誠を誓うのは、ガイロスではない。命を賭すに値するのは、今はこの地上には無い母国——ゼネバスの再興のみ）

ヴォルフ・ムーロアの言葉が合図になったかのように——遙か遠方の空より、紅蓮の焰が上がった。次いで、大気を割くような轟音。「何事か!」と声を荒げたコーネル機に、傍らに控えた《コマンドウルフ》のパイロットが、「——救難信号です!」と叫び返す。

「セスリムニル周辺に展開されていた、第七複合機甲師団より入電! 北方より、ガイロス帝国の大部隊が出現……敵主力機は——デ、《デスザウラー》です!」

通信兵が戸惑いながら告げた名前に、兵達の動揺が広がった。

夜襲を受けていたのは、ジェイ達だけではなかった。帝都ヴァルハラを目指してヴァーヌ平野を進んだヘリック共和国の全軍、数万機にも及ぶ戦闘機械獣達。既に三日の日を経て、平原の半分を踏破していた共和国軍だったが——進撃をとめるために、ガイロス帝国の本土守備隊、その総戦力の八割にも及ぶ四十個師団が、ヴァーヌの最終防衛線へと集結、夜の闇に乗じて総攻撃を駆けたのである。

「《デスザウラー》だど!? 馬鹿な!」

怒鳴り返したコーネルが、北東の空を仰ぎ見る。暗夜の空が一転し、緋色の紅蓮によつて宵の表情にも似た薄明りを灯すそこは、『ミラージュ』が駐留する現在地からまだ二千キロ近く離れていよう、帝都副都心の中枢・セスリムニル市の方角。帝国軍・ヴァーヌ平野守備隊の本隊が設置されたそこは、今大戦最大の激戦地となろう事を予想されていた地である。ヘリック軍も、ニクス上陸隊中最大規模の複合機甲師団を送り込んでいたが——死竜《デスザウラー》部隊が相手となれば、勝手が違う。控えめに見積もって、後十個師団の増援が必要であろう。

セスリムニルの攻撃隊だけではない、ヴァーヌに滞在した別働隊より次々と救援要請の電信が飛んだ。鳴りやまぬアラート音に固唾を呑みながら、「どうなっている……ッ」と硬直するコーネル大尉。

アイゼンドラグーン  
鉄龍騎兵団の言を体現するかのよう——暗黒大陸の全土で絶え間ない砲撃音と噴煙、そして人の、機獣の断末魔が上がる。既に帝国と共和国の雌雄を決する戦いが始まっていたのだ。

(エウロペでの戦い、ニクスでの戦い……ヘリックとガイロスが繰り

広げた全ての戦いは、この日のために、我が父ギユンターが仕組んだ物だ。二つの大国の終末の果て、中央大陸デルポイに再び、ゼネバスの御旗が立つ——貴公らを帝都ヴァルハラに抜けさせはしない、このヴァーヌの地で果てよ)

ヴォルフ・ムーロアの通信は、それで途切れた。ほぼ同時、アイゼンドラグーン鉄龍騎兵団の機獣達が、一齐に前進を掛ける。《ティマンティス》や《ティロフォース》の大群に、《ライガーゼロイクス》、そして《バーサークフューラー》が、戸惑う共和国軍を蹂躪した。

——終末とはまさに、この夜の事を言うのであろう。

銃火飛び交う乱戦の最中、ジェイは一人立ち尽くしていた。

「《デスザウラー》が、セスリムニルに……」

呆然として、伝え聞いた現状に戦慄する。《デスザウラー》、ガイロス帝国軍最強の戦闘機械獣が、ついに戦線に投入されたのだ。ヘリツク共和国軍にとってそれは、此処までの優勢を一機に覆しかねない、未曾有の緊急事態であろう。

——しかしジェイにとっては、それ以上に懸念するべき事が在った。

(用心しろよ——君がもしエリサ・アノン少尉と再会できる場があるとなれば——そこは間違いなくこの戦いの果て、全ての因果が滅びによって結ばれた終焉の地だ)

ヘリツクの『終末オペレーション・ラグナロク作戦』には、ガイロス帝国の《デスザウラー》投入を見込んだ中枢機密がある——行軍に出る直前、エントランス湾岸の橋頭堡にて、レイモンド・リボリー主任が口にした推測が脳裏に反芻される。「そうか、レイモンド……これが貴方の言う、終焉の時なのか……つ」と、一人ごちたジェイは、葛藤の末にゆつくりと、《ブレードライガー》の機首を反転させた。

迷っている時間などなかった——セスリムニルに向かう。

エリサ・アノンがそこにいる、という、天啓にも似た予感が在った。《デスザウラー》の闊歩するセスリムニルは、絶体絶命の戦場である

う。生きて帰れる保証は無く、また敢えてそうするべき大義もない。軍人として預けられた自分の持ち場、アイゼントラグーン鉄竜騎兵団に苦戦する仲間達に背を向けてこの場を離れるのは、あるまじき行いであると、分かっている。それでも、ジエイは逸る自らを律する事が出来なかつた。ヘリックとガイロスの遺恨、姿を現したアイゼントラグーン鉄竜騎兵団の目論み、そして、ジエイがこの暗黒大陸へと渡った理由——レイモンドの危惧した通り、全ての因果が今、収束しようとしているように思えたのだ。その時であつた。

「——ジエイ……ッ！」

固めた決意を揺るがす程に悲痛な声が、ジエイの耳朶を打つ。

ガリ、と大地を踏んで、《ブレードライガーミラージュ》の残存機が一機、ジエイのライガーに追い付き、その背後に立っていた。心の臓を撃ちぬかれたような鈍い痛みを覚えて機体を停止させたジエイは、ゆっくりと通信モニターに移りこんだ少女士官へと、視線を落とす。

シオン・レナート少尉の泣き顔が、そこにあつた。

「セスリムニルに、行くというのですか？ 私のお守りなど、もう終わりだと——そう言つて、背を向けるのですか……？ 応えて、応えてよ……ジエイ」

シオンの追及に、苦しそうに目を伏せたジエイ。

今なら、全てを察することが出来た。シオンが言い淀んだエリサの所在、彼女が救えぬと断じた究極の死地の正体。ヘリック共和国がオペレーション・ラグナロク終末作戦に編入した、もう一つの造兵計画——それはおそらく、ガイロス帝国の決戦兵器《デスザウラー》と戦うための決死隊だ。

ジエイ・ベックは、静かに問うた。

「シオン、君は知っていたんだね……エリサの居る特務隊は、帝国が《デスザウラー》を投入してきた際に備えて結成された——セスリムニルに、彼女がいるんだ。そうだろうか？」

シオンは応えない。幼子みたく俯くや、唯々嗚咽を上げて、流れる涙を拭い続ける。

「——ジエイ、行かないで。《デスザウラー》に殺されるわ。私と一緒に

に居て……お願い」

懇願した彼女に、ジエイはゆっくりと頭を振った。彼女の悲痛な姿に、「赦してくれ、シオン」と詫びたジエイは、《ブレードライガー》の機首をシオン機へと向けると、そのキャノピーを開ける。

「ヘリックのために戦いに来たわけでもない。君を守れと告げた、レナート大佐の大願も果たせないで……とつくの昔に、俺は戦えなくなっていたんだ。けれど——失った大事なモノを、取り戻したくて。ただエリサを、死なせないために……彼女の代わり、セスリムニル<sup>こ</sup>で死ぬために——俺は『ニクスへの旅路』を、ここまで歩んで来たんだよ、シオン」

ジエイの告白に堪えきらなくなったかのように、シオンは一層大きな声を上げ、泣いた。

同時、さらに強まる戦火の雨。鉄竜騎兵団<sup>アイゼンドラグーン</sup>の猛攻に、戦線は瓦解寸前だった。撃ちぬかれ、砕け散った機体達の残骸が、まるでシオンとジエイの間を隔てるかの如く、地面に散らばる。

これ以上、呆けている時間は無かった。  
「赦せ、シオン。そして——君も生き残ってくれ」

最後に言い残して——ジエイは再びメイン動力炉を起動させる。待ち受ける終焉に盾突くかのごとく、力強い咆哮を上げた愛機《ブレードライガー》、グンと加速した機体がニクスの暗夜へと全力の疾走を掛けた。

目指すは、終焉の地・セスリムニル。（嫌だ……嫌だ、嫌だ——ジエイ、待つて——ツ）と、スピーカー越しに残響する、シオンの慟哭。それを振り切るように、一層強く、アクセルを踏み込む。

（嫌だよ、ジエイ……私を守ってよ。だって……貴方は、私を——）  
直後、轟と爆ぜた雷霆が、ジエイの背後で煌めいた。

《バーサークフューラー》が撃ち放った『荷電粒子砲』の輝きが、ヘリック駐屯地を薙ぎ払うかのように、光の鞭を振るう。シオンの泣き声は炎上する焔の嘶きにかき消されて聞こえなくなり——やがてその姿も、なだれ込む光の奔流の中に吞まれ、消えて行った。

⑫ 機獣達へと捧ぐ挽歌（前）

——ZAC2101年 10月下旬 暗黒大陸ニクス・セスリムニル市郊外

戦火吹き荒れるヴァーヌ平野をひと半日越して——夜。

片時も休まずに駆け続けたジェイの《ブレードライガー》は、ようやくとその視界にニクス大陸東端の大都市・セスリムニルの遠景を捕え始めている。城塞都市・セスリムニル。帝都ヴァルハラの南東に位置する暗黒海洋湾岸の工業都市であり、ガイロス帝国軍事の主要施設の大半が密集する、国防上の要所だ。

この地にたどり着くまでに、ジェイはヘリックと帝国の両軍激突する戦場を、幾度も目にして来た。中には両軍の機甲師団が撃ち合いを続ける戦火のど真ん中を突っ切る事さえあったが——それでも、このセスリムニル近郊を漂う噴煙の濃さに、比類し得るものは無い。街の周囲数キロに渡って散乱した、敵味方入り混じる機獣達の骸。何千——否、何万機単位の死者がこの平原に転がっていて、そして街の深奥からは尚、絶える事の無い砲撃音が響き渡っている。

全面開戦の総力戦が始まって、まだ二日と経っていない状況で、これだ。鉄竜騎兵団アイゼンドラゴンが宣言した通り、両国は着々と、破滅への歩みを進めているように思えた。

「——エリサ……ッ」

求める人が生き残っているかどうかさえも、既に怪しかった。この戦場の骸の一つと化していても、何ら不思議はないほどに、セスリムニルの地には、死が蔓延している。焦燥にジリと滲む汗を拭うと、ジェイは愛機の機首を、崩落したセスリムニルシティの城門へと向けた。

戦いは、尚も続いている。

撃ち合いの果てに廃墟と化した市街地の中は、まるで迷宮のようで

——《レッドホーン》や《ライガーゼロ》、《ゴジュラス》や《アイアンコング》と言った両国の主力ゾイドが、まるで前衛的なオブジェのように、路肩へと撃ち捨てられていた。

燻る戦火と崩壊の土埃でおぼつかない視界の中を、恐る恐る歩み進めていたジェイは、不意に弾けた砲撃音に目を剥く。眼前、百五十メートル程先のスクランブルで、一機の共和国軍の機体を、帝国の高速ゾイドが三機掛かり纏っている。《セイバータイガーAT》と《ライトニングサイクス》——そしてもう一機は、先に遭遇した新型ゾイド《ジェノフレイム》であった。相対するのは、共和国軍が先日就役させたアンキロサウルス型の重砲ゾイド《ガンブラスター》で、傍らに崩れ落ちた僚機を庇うように、一对多の、しかも相性的に不利な対高機動ゾイド戦を演じている。

「……ッ！」

《ガンブラスター》が庇う瀕死のゾイドが、かつてエリサ・アノン少尉の搭乗していた《デイバイソン》だと見取った瞬間——ジェイの血が、クワと沸き立った。

声にならない絶叫を上げて機体を反転させると、『ロケットブースター』を噴射、最高速の突貫で《ライトニングサイクス》を突き飛ばす。華奢なサイクスのボディが建造物に激突し、真つ二つに折れ曲がるのを横目に確かめると、クルと機体を反転させて『レーザーブレード』を展開、急襲に浮足立った《ジェノフレイム》の首を刎ねた。

火花を上げて崩れ落ちる、新鋭機の残骸。残るセイバーへと、矛先を向けようとしたジェイだったが——不意に上空より、『ビームガトリング』の連弾が降り注ぎ、《ブレードライガー》の足元を抉る。チ、と舌打ちをして見上げた先、ビルの屋上へと陣取った《ダークホーン》が、牽制射撃を見舞って来たらしい。

『アタックブースター』を破棄してきた通常の《ブレードライガー》で撃ち合いをするのは難しい、煩わしさにギリと奥歯を噛んだジェイだったが——ズンと《ブレードライガー》を退けて前に出た《ガンブラスター》が、その背に負った大量の銃器から、閃光を吐き出す。

計二十問にも及ぶ複合光線兵器『ハイパーローリングキャノン』の



掃射だ。足場の建造物事《ダークホーン》の重装甲を蜂の巣にすると、次いで機首を薙ぎ、後退を始めていた《セイバータイガー》へと叩き込む。軽装の高速ゾイドには過剰とさえ言える砲火の雨、セイバーの半身は文字通り『消滅』し、残る半身も着弾の衝撃で大地を滑り、粉々に砕け散った。

（高速戦闘隊の援軍か……？　なんにせよ、助かった）

群がる敵機を退けて、《ガンブラスター》のパイロットから通信が入る。ライガーの踵を返して、倒れ伏した《ディバイソン》を見遣ったジエイは、砕けた機体に「エリサ……」と呼び掛けたが、（エリサ？　違う、ソイツはバルーク軍曹だ）と、《ガンブラスター》のパイロットが間へと入る。

助けたのが目的の人物でないと分かり、行かないと——とジエイが急いだ時だった。

（待て、この先は止せ！　街の深奥では、まだヤツが戦っている。そんなゾイドでは死ぬだけだ！）

ジエイ機の挙動に、慌てて《ガンブラスター》が道を塞いだ。「ヤツ？　ヤツとは《デスザウラー》の事ですか？」と語気を強めたジエイは、《ガンブラスター》へと詰め寄ると、

「オペレーション・ラグナロク終末作戦で、対《デスザウラー》を想定した決死隊が編制されていたはずだ。このセスリムニルに、それは投入されているのですか？　教えてください！」

と、声を荒げる。鬼気迫る彼に（……どこの所属の者だ、君は。一体、どんな指令を帯びてここに来た？）と、戸惑った《ガンブラスター》。やがて、無言を貫くジエイに折れる形で、重い口取りで告げる。

（確かに、決死隊の増援は到着しているが……あれでは不完全だ。《デスザウラー》のパワーは、我々の想定を遥かに超えている。未完成で、しかも数で劣っている《マッドサンダー》では、抑えきれない）

「……《マッドサンダー》？　共和国軍は《マッドサンダー》を再生させて、導入していたのか!？」

今度は、ジエイが戸惑う番であった。

《マッドサンダー》とは、旧大戦時にヘリック共和国の至宝的ゾイド設計士・ハーバード・リー・チエスター教授によって開発された、対《アスザウラー》用のトリケラトプス型巨大戦闘機械獣である。先の惑星Zi大異変でその野生体は死滅し、また機体に導入された技術の多くも失われたというが——ヘリックもまた極秘裏に、死竜に対抗するための戦力を用意していたという事になる。

（ああ……だが言ったらう、あれは完全じゃないんだ。我々が後退を始めた時点で、既に半数近い機体が《アスザウラー》部隊に破壊されていた。この戦線は、いつまで持つか分からないぞ）

それはおそらく、ジェイに対する最終通告だったのだろう。だが、引き下がる気など毛頭なかったジェイは、一切の躊躇なく機体を進めた。特務隊の配備機体が《マッドサンダー》ならば——エリサ・アノンがそのパイロットとして従軍しているのならば、間違いなくこの先に彼女は居る。

ジェイの決意の程を見取ったのか、それとも彼を酔狂な男と軽んじたのか——《ガンブラスター》のパイロットは、それ以上引き止めなかった。「……ありがとう」と短く礼を返したジェイは、朦々と噴煙の立ち込める中心市街地へと、《ブレードライガー》を進ませた。

「なんだ……これは……」

たどり着いた先で、ジェイ・ベックは戦慄する。セスリムニルの中心は、既に市街地の様相をさえ残していなかったのだ。粉碎された建造物の残骸が敷き詰められた、すり鉢状の瓦礫帯の中に、巨大な鉄塊が数機、まばらに鎮座する——いわば『巨大ゾイドの墓場』とでも言うべき光景が広がっていた。一つは、ジェイがオリンポスで目にした骸と同じ死竜《アスザウラー》。そしてもう一つは、灰色の重装で身を固めた、見慣れない巨大ゾイドだ。あの《ウルトラザウルス》にも匹敵しよう巨体だが、《アスザウラー》のような凶悪な思惟は感じない。おそらくはこれが、《マッドサンダー》であろう。

両者とも十を超える機体が、この戦場で動かぬ残骸と化している。中にはコクピットブロックを撃ちぬかれ、また抉られた機体もあり——

—ジェイは思わず、声高に叫んでいた。

「アノン少尉、何処にいる——返事をしてくれ、エリサツ！」

ジェイの絶叫に応えたのは、夜闇を劈く咆哮だった。

次いで、振動。機獣達の亡骸の合間よりヌツと這い出したのは、纏れ合う二機の恐竜型ゾイドの機影だった。一機は大型の削岩用チエーンソーを備えた改造機《ゴジュラス・ザ・バズソー》、そしてそれを追い立てるように牙を剥いた黒い巨影は——、

——まごうこと無き、死竜《デスザウラー》である。

大型の『ハイパーキラークロウ』を振るい、無雑作に《ゴジュラス・ザ・バズソー》を叩きのめした死竜が、もう一度力強い咆哮を上げた。重々しい恐竜型金属生命体の轟咆の後に、まるで管楽器でも奏でたかのような鋭い残響が遅れて響く、独特の咆哮。口腔に『大口径荷電粒子砲』の砲身と、それを使用するための超大型粒子加速器を内蔵した、《デスザウラー》独自の声帯が生み出す無二の雄叫びであり——ヘリック共和国の人間ならば、旧大戦の資料映像によって一度は耳にしたことがあるう、死竜の奏でる『滅びの歌声』だ。

ゾワと粟立つ背筋に、ジェイは一瞬動けなくなる。

ギンと紅く輝いた双眸で、《デスザウラー》がジェイ機へと振り返った。だが、必殺の『荷電粒子砲』を撃ち込んでくる気配はない。どうやら此処までの戦闘で酷使し過ぎ、背部の『荷電粒子強制吸入ファン』が焼き付いているらしい。代わり、大型ゾイドとは思えぬ瞬間的な機敏さを持って、その巨体に依る当て身を見舞おうと迫って来た。初めて直に聞いた《デスザウラー》の声に萎縮していたジェイは、反応できずに立ち尽くしている。——やられる、と、思わず目を伏せた時だった。

不意にジェイの背後で倒れ伏していた雷神《マッドサンダー》が起動して、《ブレードライガー》を庇うように前に出た。《デスザウラー》の『ハイパーキラークロウ』を、突き出た二本の大角『マグネーザー』で捌くと、その首元へ、深々と突きつける。喉笛を貫かれた死竜は口腔から火花を吐いて停止し、ゆっくりと崩れ落ちた。

（青い《ブレードライガー》……ジェイ・ベック少尉なの……？）

ノイズ交じりの音声に、ジェイの心が粟立つ。

戸惑いを滲ませ、また在りしの彼女の陽気さとは違う、幾分影のある風を感じさせるもの——生来の穏やかな性格を感じさせる、柔らかな女性士官の声色は、間違いなくエウロペで行動を共にした、エリサ・アノン少尉のそれだった。

「エリサ——そこに居るのか、エリサッ」

と、ジェイはゆつくりと、目の前に立った《マッドサンダー》の機体を見上げる。厳めしい程に重厚な機体は、この二日で相当な戦いを経験したのであろう、既に各部の装甲が砕け、後脚部の駆動節が何か所砕け散っている。歩く事さえままならなくなった《マッドサンダー》だが——それでもジェイは、エリサの無事にかつて無い程の感動を覚えていた。

「エリサ、無事なんだね……俺は、君に会いに来たんだよ」

安堵の声を漏らすジェイに対して、エリサ・アノンの返答は悲痛な物だった。（どうして、ここに……？ 来てはいけないんです、そんなゾイドじゃ——）と、戸惑う彼女の声に——あの、『死竜の唄』が重なる。

真っ直ぐに伸びた蒼白い熱線が、《マッドサンダー》の背中を掠めた。

不健全な光の奔流が、腰部に備えた雷神の生命線『ハイパーローリングチャージャー』を撃ち抜く。大出力の光線兵器だ、誘爆が更なる破壊を呼び、《マッドサンダー》の半身を完全に停止させた、苦悶にのたうったそのコクピットの中で、エリサの悲鳴が木霊する。

「——エリサッ！」

狼狽えたジェイは、視界の端より迫る、もう一体の死竜を見た。おそらくは指揮官機であろう、背部に『ハイマニューバスター』と大型『ビームランチャー』他、帝国軍Mk-II部隊の装備する特殊兵装を備えた改造《テスザウラー》だ。しかも——損傷は殆んど無い。先に撃ち倒された機体とは異なり、引き続き『大口径荷電粒子砲』を起動させる事も可能であろう。

朦々と炎上するエリサのゾイドが、ゆつくりと倒れ伏した。周囲に

は他にもう動ける《マッドサンダー》の姿もない。立ちはだかる物がないセスリムニルの中枢で、《デスザウラー》は勝利の余韻すら感じさせる、凜猛な咆哮を上げた。

通信機越し、息も絶え絶えの、エリサの声が響く。

(ベック少尉、早く逃げてください……ここに居ては、貴方まで——ッ！)

「——いいや、逃げるものか」

ジエイは即答した。《ブレードライガー》の機体を起動させると、倒れ伏した《マッドサンダー》を飛び越えて、《デスザウラー》の眼前へと立ちはだかる。自身の体躯の二倍はあろう、死竜の威容を、真正面から見据え返して、ジエイはエリサへと言葉を返す。

「——この《デスザウラー》は、俺が倒す。今度こそ、君を守るために……命を代えてでもそれを為すために、俺は此処までやってきたんだ」

返答を待たずに、ジエイは通信を切った。これが真正正銘、最後の戦いになる。そんな確証があれど——自分でも驚くほどに、怖れは無かった。

グツと力強く操縦桿を握ると——まるでそれに応えるかの如く、愛機《ブレードライガー》が《デスザウラー》へと吠え立てる。それは先の死竜の上げた雄叫びにも決して劣らぬ、勇猛な咆哮だった。

## ⑬ 機獣達へと捧ぐ挽歌（後）

夜霧漂う廃墟の中心で、死竜《デスザウラー》が吠えた。

威迫が大气すら震わせ、礫塊の合間で燻る戦の残り火すら吹き消して見せた。轟と舞った砂塵が周囲の光を奪い、深淵の中で朧と、死竜の紅い無機的な瞳孔だけが浮かび上がる。

それが戦いの合図と知るや、ジエイもまた力強く機体を扇動した。ヘリック共和国が作成した戦術シミュレーションレポートによれば、《ブレードライガー》が《デスザウラー》と同じ条件の下戦闘を行った場合、約八割の確率で後者が勝利するとされている。ライガーの勝率の二割を担うのは、ただ一筋の戦略——すなわち、最高速を持って《デスザウラー》の懐へと飛び込み、その中枢たる背部の『荷電粒子強制吸入ファン』を破壊する事——そこまでやってようやつと、万に一つしかない勝利の可能性が生まれるのだ。

状況の不利は、十全に承知している。それでもジエイは、この戦いから背を向ける気など無かった。「さあ——行くぞ！」と、自らを、そして愛機を鼓舞して、ジエイは最強の死竜へと、果敢に挑みかかった。

『二連装ショックカノン』、『パルスレーザーガン』を掃射する。狙うは視認性を確保するため、比較的装甲強度が低いと思われるコクピット周辺。スモークグレーのバイザーで覆われた、《デスザウラー》の頭部に、銃火の嵐を見舞う。咄嗟に両の腕を構えて光弾を捌いた《デスザウラー》。やはり瞬間的な反応速度は、その巨体に見合わぬ機敏さと言っている。だからこそ、この一瞬——死竜の意識が防御に向けて生まれた『隙』に、ジエイは全てを掛けた。

「今だ、——行けええッ！」

バーニアを全開にして、最高速の跳躍。《デスザウラー》の小脇を擦り抜けてその背後を取り、『荷電粒子強制吸入ファン』を潰す——ライガーの挙動は、完全に死竜の虚を突いたはずだった。だが、不意グンと、眼前を黒い影が過ぎる。《デスザウラー》の大爪『ハイパーキラークロウ』が翳されて、《ブレードライガー》の進路を遮ったのだ。

凄まじいまでの腕力でライガーの突貫を捌いた《デスザウラー》。乱暴な殴打に跳ね飛ばされて、機体が瓦礫帯の一角に墜落し、礫塊へと塗れる。「グツハ——」と、声にならない悲鳴を上げたのも一瞬、すぐさま《デスザウラー》に増設された『ハイパービームランチャー』が火を吹き、態勢を立て直す間すら与えない。

倒れ伏した《ブレードライガー》へと、ゆつくりと振り返った《デスザウラー》が、クワとその罅を開いた。バチバチと爆ぜる閃光、背部のファンに不健全な蒼白い稲妻が、急激な勢いを持って吸引されてゆく。『大口径荷電粒子砲』の発射を促すサインだ、と、一目で理解したジェイは、思わず絶叫し、操縦桿を引いた。

殴打と墜落の衝撃で《ブレードライガー》は完全に麻痺している。躲せない——、とジェイが絶望に吞まれかけた時だった。

——ズン、と、《デスザウラー》の横っ腹に巨獣の影が体当たりを見舞う。

装甲化された東部と、黄土色の装甲——二本の大鋸を背負った異形は、先ほど《デスザウラー》に退けられた《ゴジュラス・ザ・バズソー》だ。白兵戦で撃ち倒されたものの、しぶとく生き残っていたらしい。

400tもの超重戦闘機械たる死竜《デスザウラー》は、《ゴジュラス》級の大型ゾイドによる体当たりを喰らっても転倒する事はない。大きく身を仰げ反らせるに留まったものの、『大口径荷電粒子砲』の軌道は大きく逸れて、遙か遠方の廃墟群を消し飛ばした。

怒りの双眸を向けた《デスザウラー》が、『ビームランチャー』の砲口を改造《ゴジュラス》に向ける。至近距離からの一撃だ、直撃すれば《ゾイドゴジュラス》と言えど耐えられない。

必殺の間合いで光弾が撃ち放たれるよりも先に、膨大の数の光のシャワーが、《デスザウラー》を飲み込んだ。未だ状況を飲み込めずに立ち尽くしたジェイは、視界の先、『ハイパーローリングキャノン』をフル稼働させた《ガンブラスター》を見つける。（早く立て、《ブレードライガー》！）と怒鳴ったのは、先ほどセスリムニル郊外で援護したパイロットの声だった。

超重装甲を撃ち抜くには至らないが、『ハイマニューバスター』

と『ビームランチャー』を失った《デスザウラー》は、誘爆に吞まれてヨロヨロと後退した。その隙に機体を立て直したジェイ、《ブレイドライガー》を起き上がらせると、《ゴジュラス・ザ・バズソー》と《ガンブラスター》の下へ合流する。

（無茶しやがる。《ブレイドライガー》単機で、《デスザウラー》相手に勝てるかよ。死にに来たのか、お前は）

《ゴジュラス・ザ・バズソー》からの通信だ。次いで《ガンブラスター》のパイロットが（俺も引き止めたんだがな、どうやらソイツは訳ありらしい）と、短く告げて、

（今は、あの《デスザウラー》を潰す事だけ考えよう。どっちみちこのままヤツを野放しにしておけば、共和国の戦線は崩壊するんだ——動ける《マッドサンダー》はいるのか？）

と、ジェイに問うた。

チラと、エリサの《マッドサンダー》を見遣りながら、——いや、と頭を振ったジェイ。（ならば此処に在る戦力、我々三機でヤツとやるしかあるまい）と、《ガンブラスター》のパイロットは死竜へとその機首を向ける。

（だが、どうするつもりだ？ 《デスザウラー》は正真正銘バケモノだぜ。『荷電粒子砲』だけじゃない、この《ゴジュラス・ザ・バズソー》の格闘能力を持ってしても、ヤツと取っ組み合って持つのは5秒が限界だ）

《ゴジュラス》のパイロットが訝しげに問うた。

（やる事は、さつき《ブレイドライガー》がやったのと同じだ。今度は私の《ガンブラスター》の援護を受けて、お前の《ゴジュラス・バズソー》がヤツと取っ組み合う。二機掛かりでヤツの気を引いている間に、ライガーがファンを破壊するんだ。出来るな？）

念を押すように、《ガンブラスター》の機体が《ブレイドライガー》を小突く。同時、態勢を立て直した《デスザウラー》が、ギロと真つ赤な双眸を向けて三機を睥睨すると、頭部に備えた機銃を持って牽制を見舞って来た。迷ってる暇など無い、砲撃の雨を跳躍で躲すと、「——了解。行きます！」と、ジェイは再び、《ブレイドライガー》で突貫



を掛けた。

「ウオオオオオッ！」

《ガンブラスター》の『ハイパーローリングキャノン』、その二十の砲身が真っ赤に焼けつくほどの勢いで撃ち放たれる中、改造《ゴジュラス》・バズソーが《デスザウラー》へと挑みかかった。背負った二本の『レーザーチェインソー』が振りかざされると、呻りを上げて死竜の肩口へと叩きつけられる。次いで、『クラッシュヤークロウ』の一撃。《デスザウラー》の巨腕がそれを受け止め、二大巨獣が激しく纏れ合う。

大岩すら粉々に砕く『レーザーチェインソー』を持つてしても、《デスザウラー》の超重装甲には傷一つ付けられない。組み合う機体も死竜のパワーの前に徐々に赤熱し、ついには片腕が引きちぎられた。火花を散らし、苦悶に喘いだ《ゴジュラス》・ザ・バズソー。《ガンブラスター》の必死の援護が続くが、形勢はどんどん傾いていく。

クワと、《デスザウラー》が罅を剥いた。再び、凄まじい量の雷光がスパークし、その口腔へと収束していく。『大口径荷電粒子砲』——組み合ったままの《ゴジュラス》・バズソーごと、後方の《ガンブラスター》まで消し飛ばすつもりだ。

(ウグウウ……《ブレードライガー》、やれエええッ!!)

《ゴジュラス》のパイロットが絶叫した。ほぼ同時、死竜の周囲を弧を描くように迂回したジェイの《ブレードライガー》が、《デスザウラー》の背後を取る。『ロケットブースター』を全開にして、『荷電粒子強制吸入ファン』目掛け渾身の突貫を掛ける。

「——ウエアアアッ！」

渾身気迫を吐き出したジェイに、《デスザウラー》の迎撃が来た。腰部に備えられた『十六連装ミサイルポッド』、Mk-IIユニットの増加兵装である『八連装アサルトミサイルポッド』が撃ち放たれ、誘導弾の雨が、ライガーの往く手を阻む。

降り注ぐ砲弾の雨の中、爆炎が掠めてライガーの装甲を焼き、砕けた礫塊の破片がキャノピーを砕いた。それでも、ジェイは疾走を緩め

ない。『レーザーブレード』を展開し、ビームコートを最大出力へ振り切ると、もう一度雄叫びを上げる。

「——ウウウオオオオッ！」

全霊を込めた、レーザーブレード・ストライクアタック。必殺の間合いに入ったそれを、《デスザウラー》は無雑作に薙いだ巨大な尾で迎撃した。

『加重力衝撃テイル』と称される、対ゾイド兵器としても機能する《デスザウラー》の尾部は、まるで飛び回る羽虫を打ち落とすかのようには、《ブレードライガー》の一撃を薙ぎ払った。ゴム毬のように地べたに打ち付けられた機体の中、ジェイは全身を強打して、昏倒する。

「ゴ、ハ——ッ」

ジェイの敗北を見取って、《ガンブラスター》も《ゴジュラス・バズソー》もほんの数秒動転し——そしてその数秒が、彼らの命を絶つこととなった。

フルチャージされた『大口徑荷電粒子砲』が爆ぜた。《ゴジュラス・バズソー》の右半身を消し飛ばして伸びた熱線は、その背後に控えていた《ガンブラスター》に直撃し、大爆発を起こす。光の渦に吞まれ、パイロットは断末魔を上げる間さえ与えられぬまま蒸発した。

次いで《デスザウラー》は、その爪を持ってバズソーを狙った。瀕死ながら、残った『レーザーチエーンソー』で迎え撃つ《ゴジュラス》——しかしその動きは余りにも怠惰で、死竜は片方の爪で鋸を砕き、もう一方の爪で《ゴジュラス》の腹部を貫いた。ゾイドコアを砕かれて痙攣したその首元に喰らい付き、その牙で亡骸を還付無きまで引き裂いた《デスザウラー》。ボロ雑巾のように千切れた《ゴジュラス・バズソー》が、ゆっくりと崩れ落ちる。

死竜を食い止めるための最後の足掻きが——呆気なく覆された。

ゆっくりと、《デスザウラー》の機首が《ブレードライガー》へと向いた。既に立ち上がる事さえままならないジェイの下へ、緩やかな足取りで迫る。巨大な魔獣。その影に朦朧とした意識を向けたジェイ

は、静かに目を伏せた。

——やはり、駄目だった。

（何よりも守りたいと願った、最愛の人さえ——俺は守る事が出来なかったんだね）

あの日——西方大陸エウロペで、エリサと生き別れる事となった日に、自らがごちた言葉が今、喉元まで突きあがって来て、ジエイは涙した。彼女が傷ついていくのを、手をこまねきながら見ている事しか出来なかった無力の味。再びエリサが戦場に立つと知った日から、ずっと後悔していたそれに抗うための機会が欲しかった。そのためなら——死んでも構わないと願って、此処まで来たのだ。

だが——全霊を持って挽回しようと戦った今日さえ、ジエイはそれを為せそうにない。

「殺せ……ッ！俺は、死んでもいいんだ。でも、エリサだけは、彼女だけは——」

その叫びに、なんの意味があろう。《デスザウラー》が、ジエイの言葉の意図を返せるはずもない、聞き入れる事など有り得ない。クワと大顎を開いた死竜が留めの『大口径荷電粒子砲』をスパークさせる。立ちほだかる《デスザウラー》の一撃を持って、今この時ジエイは殺されるのだ——エリサを、救えぬまま。

やるせなさに、ジエイは声を上げて慟哭した。

（……ジエイ少尉ッ！）

不意に、無線越しに弾けた声。

《デスザウラー》の巨体が、大きく傾いた。いつの間にその背後まで身を引き摺り迫った、ボロボロの《マッドサンダー》が、全自重を掛けて死竜の尾部を潰す。苦悶に仰け反ったその影より雷神の力強い咆哮が弾けた。

エリサ・アノンの、《マッドサンダー》だった。「エ、エリサ……」と呆けたジエイの耳朶に、エリサの気丈な声が響きわたる。

（命に代えても守るって、自分は死んでもいいんだって、少尉は言いま

した。でも、違うんです。少尉と再会して、私が願った事は、そんなんじゃない……貴方にだって、生きていて欲しい——私が、そう願ってるんです、ジエイ少尉)

エリサの告白に、ジエイは泣いた。《テスザウラー》が怒りの咆哮を上げて、《マッドサンダー》を押しつける。『ハイパーキラークロウ』が振るわれ、満身創痕の雷神はさらに傷ついて行った。

「駄目だ……駄目だ、駄目だ駄目だッ！ 君が、死んでしまう！」

ジエイの絶叫に、エリサの時間が止まる。

——私、死ぬべきだった……こんな醜態を晒すくらいなら。

別離の日に流した彼女の涙が、ジエイをここまで急き立てた。二クスの戦場で、エリサが死のうとしている——そんな気がしてならなかった。だからジエイは、ここに来た。彼女に向かうはずの『死』が、代わり自分に降りかかったとしても——、

「……それだけは嫌なんだ。もう君が傷つくのは——君が俺の前から居なくなるのは、もう——ッ！」

（——だったらッ！）

癩癩を起こしたジエイを、エリサの涙声が引つ叩く。同時、ギラと輝いた《マッドサンダー》の眼差し、鼻先の『サンダーホーン』で、《テスザウラー》の殴打を払い除けた。苦悶によるめいた《テスザウラー》が、劈くような悲鳴を上げるが——、

（——生きて、ジエイ。私も生きるから……もう死のうなんて、言わないから——二人で、生きるんです……ッ）

死竜の咆哮に重なっていながら——エリサの声は、はっきりと聞こえた。

「ウ——ウオオオオオオッ!!」

《ブレードライガー》の全身に、力がみなぎって来る。長きに渡るもつれ合いの末に《マッドサンダー》を退けた《デスザウラー》が、身を翻してライガーへと向いた。『荷電粒子強制吸入ファン』をフルパワーで稼働させ、口腔内に莫大なエネルギーを蓄える。

同時、《ブレードライガー》もまた跳んだ。『エネルギーシールド』を最大出力で展開、『レーザーブレード』を翻すと、残された全ての力を注いだ斬撃を見舞う。死竜の『荷電粒子砲』が撃ち放たれたのは、ほぼ同時——獅子の剣閃が、《デスザウラー》吐き出す熱線と零距离で交錯した。

至近距離で撃ち放たれた『荷電粒子砲』が《ブレードライガー》捉えたのは、コンマ数秒の間——そして、最大出力で展開されたライガーのシールドはそのコンマ数秒間を凌ぎ切った。荷電粒子の奔流を突破したライガーの斬撃が、《デスザウラー》を捉える。衝突の衝撃で砕けたブレードは死竜の首にめり込み、その超重装甲を砕いて深奥に埋められた『粒子加速器』を破断した。

着地した《ブレードライガー》は、力尽きたかのように膝を突き、動かなくなる。対して《デスザウラー》は、『荷電粒子砲』を失いながらもまだ余力を残していた。首筋から血飛沫にも似た火花の雨を上げながら、ライガーへと止めを刺すべく、残された隻腕の大爪を振り被る。

ブンと大気を裂いて、大爪が降ろされようとした時だった——《デスザウラー》の胸がメリメリと音を上げて、花卉のように裂け拡がる。何が起こったのか分からない、というように、己が躰へと目を遣った死竜は、自身の胸元から生えた巨大ドリル『マグネーザー』に気づいて、ゆっくりと振り返った。

《ブレードライガー》との攻防に気を割いていた《デスザウラー》を、エリサの《マッドサンダー》が背後より貫いていた。『荷電粒子強制吸入ファン』ごとゾイドコアを粉碎し、前面胸部装甲を砕き貫通した『マグネーザー』。生命核を失った《デスザウラー》は、まるで死から逃れようとするかの如く、数秒身を振ったが——、

やがて、その眼から輝きが失われると——ヨロと傾いて、崩れ落ちた。

## ⑭ どうか終わる事の無き旅を

(こちらは、ヘリック共和国軍トリム駐屯地司令、ロブ・ハーマン中佐だ。この通信を傍受しているヘリック全軍——そして、ガイロス帝国の全将兵に告ぐ。即刻戦闘を中止せよ、繰り返す——直ちに戦闘を中止せよ……)

無線機より一人で流れ出した通信が、ジェイの意識を深淵より引き戻した。

半壊した《ブレードライガー》のコクピットの中——ボヤと霞む視界の果てに、早朝の陽と、チラと舞う北方の粉雪が見える。

どれくらい時間が流れたのだろう。一夜とも、幾年にも思える曖昧な時間の中を、ずっと微睡んでいたように思えた。

セスリムニルの街は、静寂に包まれている。

燻る戦火も消え、立ち込めた噴煙もまた朝の風に吹かれて薙がれる。焼け爛れた傷跡を包み隠すかのように、ただ静かに、二クスの雪が舞い積もるだけ——砲火も、機獣の咆哮も無い。両軍の停戦を訴えかけるノイズ交じりの通信だけが繰り返され、木霊していた。

長きに渡った戦乱が、終わりを告げようとしている。

——コンボイ隊長、グロック、ツヴァイン……。

シートを立ったジェイは、機体を降りようとしてキャノピーに触れた。コントロールパネルが破損して操作できない、ロックを解除し、手で押し開ける他ないのだが、疲弊した軀にはそれも、思いのほか難しいらしい。重いハッチを微かに浮き上げるだけで精一杯だったが——不意に起動音が響いて、勢い良くキャノピーが持ち上がる。よろけたジェイは、罅だらけのコンソール画面がゆっくりと立ち上がるのに気づいて、目を剥いた。

不安定ながら、ジェネレーターも起動している。まるで西方大陸戦争従軍以来ずっと連れ添った愛機が、自身の無事を告げ——またジェイを、向かうべき場所へと送り出そうとしているようにも思えた。

フ、と微笑したジェイは、コンソールを撫でて後、のちゆっくりと《ブ

レードライガー』から這い出る。ふらつき、地べたに打ち付けられながらも立ち上がり——朝霜に覆われた廃墟の街を、ゆつくりと歩き出した。

——『第二次大陸間戦争』。

西方大陸エウロペ、そして暗黒大陸ニクスにて繰り広げられた、ヘリック・ガイロスの戦い。

この戦争で両軍が被った損害は、一説によれば、戦闘機械獣50万機強——兵員に至ってはその四倍とも、五倍とも言われている。

惑星Zi史に残る空前絶後の大戦争の背景には、ガイロス摂政ギユンター・プロイツェン・ムーロアによる暗躍があった。かつての大陸間戦争で滅亡し、ガイロス帝国へと吸収された中央大陸の帝政国家『ゼネバス』帝国の復興のため、意図的にヘリック・ガイロスの双方が疲弊するような戦況を作り出していたという。

だが、そうした戦場の背景に精通し、大局を覆そうという志の下戦った『英雄』など、両国を合わせて、果たして何人居ようか。多くの兵士はただ我武者羅に、眼前に広がった死線を逃れようと戦った筈だ。もしくは、その死線から大切な何かを守るために——逃げ出したい程の恐怖と苦痛に、抗った。

帝国でも、共和国でも無い——人は、戦闘機械獣達は、二年間にも及ぶ長き間を、凄惨たる『戦乱』と戦い続けたのである。

(——こちらは、ガイロス帝国機動陸軍第一装甲師団長、カール・L・シユバルツ中佐。この通信を傍受した全軍に告げる。直ちに戦闘を中止せよ。繰り返し……)

——ペガサス中佐、レイモンド主任、エラ……。

廃墟のあちこちに散乱した機獣達の残骸、その通信機器から、停戦を呼びかける士官の声が鳴り続ける。辺りにはジエイと同じように生きながらえ、呆然と立ち尽くした兵士の姿も、チラと見え始めていた。



途中、瓦礫に躓いて倒れ込みそうになった彼を、近くに居た兵士が駆け寄り、支える。ヘリックの兵ではない。『飛竜十字』のワツペンを付けた、ガイロス国防軍の若い男性士官。背後には装甲が砕け、コクピットハッチを開け放った死竜《テスザウラー》の残骸が佇んでいる。つい先ほどまで、命を掛けて戦っていたのかもしれない相手。だが、驚くほど自然に、そのガイロス兵はジェイの肩を抱き留め——また支えられたジェイも、なんの迷いも無く礼を述べた。

（——この惑星Ziの地に在って、共に生命を育み、終わらぬ旅を続ける同胞達よ）

共和国軍、ロブ・ハーマン中佐と、ガイロス帝国軍カール・シユバルツ中佐の共同声明が、終焉の地にて尚響き渡る。

（我々は……ヘリックとガイロスは、半世紀にも渡る長き時間をいがみ合い、争い、互いの血潮でその身を焦がしてきた。だが、それは何のためだ？ 然るべき理由が見つかるまでの間——ほんの少しの間でいい、矛を納めて欲しい。遺恨を忘れて初めて見る事の出来る、真の地平がある。我々が戦うべきは今日目の前に立った互いではない。真なる敵は、積年の恩讐に捕らわれし者達の間にも巣食う『心の闇』——その野心だ）

——サンダース軍曹、アイソップ大尉、シオン。それに……  
どれほどの時間が流れたであろう。

朦朧とした意識の中フラと彷徨ったジェイは、荒廃した戦場の中で、ただ一人の人影を探し続けた。ボロボロの躰の足取りは重い、何度も膝を付き、這うように歩みを進めた挙句——ようやくとたどり着いたのは、一機の死竜を貫いたまま倒れ込む《マッドサンダー》の残骸の足元。砕けた機体のコクピットハッチは、空いている。

直後、背後より、ザリと大地を踏みしめた音が鳴って——  
「ジェイ少尉……っ」

と、彼女の声<sup>、</sup>が耳朶を打った。

振り返った先、エリサ・アノン少尉がそこにいた。

初めて会った時より少しだけ髪が伸びて——疲れた風貌も相まって、以前より大人っぽく見える。右腕は——怪我の後遺症があるのだろう、肩口から指先まで黒いラバー製のサポーターで覆ったそれを、胸元で不自由そうに固く握った彼女は、今にも泣き出しそうな潤んだ瞳を細めて、微笑した。

エリサ——と、ずっと焦がれていた姿を前に、ジェイもまた涙を流した。今にも倒れそうだった躰を構わずにけしかけて、彼女の下へと駆けると、

「君を、取り戻しに来たんだよ。俺が大切に育んできた絆、仲間達……皆居なくなってしまうたけれど、せめて最後——君だけは、失いたくなかったんだよ、エリサ」

涙を堪えて、ジェイは己が心情を叫んだ。

ふらついたジェイを、自由の利く左の腕で手繰り、抱き留めたエリサ。もう一度「ジェイ少尉」とその名を呼び、頬を撫でる。

「もう、会えないと思ってた……私が、弱かったから。でも、少尉は来てくれたんですね。絶望の吹き溜まりに落ちた私を、こんなにもボロボロになってまで、探しに来てくれた……。ありがとう、ジェイ少尉——傍に居ていいですか？ 今度こそ、離れないように」

ヘリック共和国とガイロス帝国の戦争は、此処に終結しようとしている。

戦乱の火が完全に消えたわけではない。帝都ヴァルハラ、そして遙か南方のヘリック共和国本土・中央大陸アルポイにおいて、この戦いを影より支配した、一人の男の野望が大成しようとしている。惑星Zに住まう人々、そしてこの星に生きる機獣達は、これより先も果ての無い戦いの歴史を往き続けるのであろう。

それでも——どうか二人、終わる事の無き旅を。

エリサに寄り添われ、戦いの時間の果てにたどり着いた場所、東の間の平穏の中に立ったジェイの心は穏やかだった。争いの中で幾度と無く取り零したモノ。ジェイはようやくと、それに触れる事が出来る。

まるで互いの存在を確かめるように、途切れ、消えてしまわぬようにと——ジエノはエリサを手繰りよせ、固い抱擁をした。

幕間：『ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼』

幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼 ①

——ZAC2101 7月某日 暗黒大陸ニクス・ニフル湿原にて

夜も深まった、ニクスの地。初夏に差し掛かりながら尚寒々とした北方の夜だが、長らくこの暗黒大陸で過ごし、来た者にとっては慣れたものである。むしろ気に障るのは、密閉された機体格納庫の中にあっても尚香る、湿地特有の水臭さだ、と、コンチョ・キャンサ少尉は胸中でごちながら、葉巻の先へと火を灯す。

暗黒大陸南西部に広がる、ニフル湿原——大陸を横断するムスペル山脈より流れ出た雪解けの水が集まるそこは、夏は広大な湿地帯に、冬は一面が銀幕に覆われた雪原へと姿を変える。その不安定な風土故極端に人の気が無いここは、コンチョの所属する『特殊部隊』が隠れ蓑とするにうってつけの場所でもあった。

ちらちらと瞬きする照明のおぼつかない光を便りに、コンチョ少尉は壁伝いのキャットウォークを往く。無精ひげに、肩まで無雑作に伸びた黒髪を掻き上げ、目元はサングラスですっぽりと隠した中年男性——コンチョの姿は、軍規を重んじるガイロス帝国軍の兵らしからぬスボラさだ。それもそのはずで、彼は本土決戦の真っ只中、という危機的状況にある『暗黒帝国』への忠誠など、一片も持ち合わせぬ無法者だったのである。

元は旧大戦時に建造されたヘリック共和国の前線基地。忘れ去られ、朽ちていた遺構を秘密裏に修復し、彼等が拠点として使っている場所で、ガイロス帝国正規軍の中でこの施設を知る者はいない。幻の機甲師団『鉄竜騎兵団』<sup>アイゼンドラグーン</sup>の拠点——その名にあやかるのなら、さしづめ『竜の巣』と言った所か。

コンチョ・キャンサ少尉は、その秘密兵団に所属する特殊工作員であつた。

「——ほう」

退屈を持って余し、たばこを吹かしながらそこかしこを歩き回っていたコンチョだったが、ふと目に付いた女性の後ろ姿に、口元を歪めた。おそらく二十代前半くらいの、年若い女性だ。肩口に触れるくらいの長さで揃えた銀髪の中には流星を思わせる蒼のメッシュが射し、微かに見えた首筋の肌は雪のように白い。落下防止の手すりに右手を掛け、眼下で整備を受ける兵団の旗艦——『竜鬼』と仇名される戦闘機械獣の姿を、一心に見つめている。

彼女の事は聞いていた。今宵、フル駐屯地に入ってきたばかりの女性士官だ、ワザとらしく鉄板の床を踏み鳴らして気を引くと、「お初にお目に掛かる。お前さんが、エーファ・アクロウ中尉だな？」と声を掛ける。

エーファ・アクロウ。

ガイロス帝国軍第三装甲師団・第28独立強襲戦闘大隊に所属していたゾイド乗りであり、帝国軍人の中でその名を知らぬ者は少ない。先の西方大陸エウロペ戦、その第一次全面会戦に置いて、弱冠二十二歳にして三十機以上の共和国軍戦闘機械獣を撃墜したエース・パイロット。加えて雪のような蒼白い肌と銀髪、そして透き通る緋色の瞳を持つ彼女は、ニクス人の理想とする美貌を体現した少女士官でもあった。

儂げな麗しさを漂わせる容姿に、天上の実力を兼ね備えた彼女を、人々は『ガイロスの白い戦姫』と讃え、持て囃した。あの日——エウロペでのガイロス帝国敗戦を決定づけた、ZAC2100年9月『赤の砂漠の戦い』までは。

コンチョの声に、エーファ・アクロウ中尉がゆっくりと振り返る。西洋人形のような整った顔立ち、切れ長の目じりから向けられた赤い瞳は、噂に違わぬ美しさを醸し、コンチョもまた見惚れて数秒言葉を失う。が——残る左半貌が露わになると、感動はある種の恐怖へと変わった。鉄製のベルトで幾重にも縛られた彼女の反面、その隙間より覗いた素肌は、まるで熱に侵された蠟人形の如く焼け爛れ、崩れていた。

『赤の砂漠の戦い』に置いて、ヘリック共和国軍の決戦兵器《ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー》が撃ち放った一発の砲弾、両国の命運を別つ決戦を唯の一撃で終わらせた、『1200mmウルトラキャノン』。エーファ・アクロウもまた、その一撃を浴びた帝国軍主力機甲師団の一員だった。至高の美と技量を兼ね備え、二クスの戦女神と持て囃された彼女だったが——その栄華は皮肉にも、ゾイド戦とは程遠い『戦略兵器による蹂躪』によって断たれたのである。

「なるほど……美姫と呼ぶには程遠い、そうやってはさしづめ——『二クスの白い幽姫』と言った所か」

痛々しい半貌の少女士官にゴクリと固唾を呑みながらも、コンチヨは精一杯強がり、皮肉を言って見せる。微かに目元を細めたエーファ中尉だったが——それ以上の反応は無かった。コンチヨの戯言などまるで意に介していないかのように、また眼下の『龍鬼』へと視線をやる。

剥き出しのフレームを覆い隠すように、薄紫の装甲を次々と張り付けられていく、テイラノサウルス型の戦闘機械獣。その頭部、黒く歪な素体の顔貌もまた、反面が凹凸の少ない装甲によって包み隠されようとしていた。何か思う事があってか、整備の様子を見下ろしたエーファは、自らの半面——溶け落ちたそれが崩れるのを防ぐかのように、きつく縛り付けられたベルトの縫い目へと手を遣り、指先でなぞった。

フツ、と、啜え煙草を一吹かしたコンチヨは、歩みを進めてエーファの隣に立つと、サングラスを外して、眼下の『竜鬼』を見遣る。「《バーサークフューラー》、我ら『アイゼンドラグーン鉄竜騎兵団』の旗機にして、ガイロス野郎の軍隊には無い——ゼネバスの使徒だけが備えたゾイドだ。コイツに、お前が乗るって言うのかい？ アクロウ中尉」

それまでコンチヨ少尉の事をまったく意に掛けていなかったエーファが、初めてその呼びかけに反応した。切れ長の瞳だけを返した彼女は一言、「——ヴォルフ様は、ご自身が使うゾイドと同じ物を、私に与えてくださいました」と、その口角を上げる。

訝しげに眉を顰め、分からねえな、とごちたコンチヨ。

「俺達は何者か、知らぬわけではあるまい、ニクスの幽姫さまよ。俺達は『ゼネバス』。ヘリック共和国だけじゃない、このニクス大陸——ガイロス帝国さえも転覆させんとする、亡国の徒だ。生来のニクス人であるお前さんにとつては、母国に仇為すテロリストつて事になる。何故それに従う？」

怪訝そうに問うたコンチョに、エーファは応えなかった。張り付いた微笑だけを向けた彼女の心が読めず、いらいらと頭を振ったコンチョはさらに続ける。

「ヴォルフ・ムーロア殿下の意図も、俺には分かりかねる。余所者であるお前や、あのカール・ウエンザーに、何故ゼネバスの精神の象徴たる『竜鬼』を託す？ 貴様らが裏切り、『竜鬼』をガイロスへと持ち出す可能性が無いと、言い切れるのか」

「ええ——言い切れます」

当然とでも言うかのように即答したエーファに、「何故——っ！」と声を荒げたコンチョだったが——真っ直ぐに見据え返してきた彼女の紅い隻眼、その光に射竦められて、氣勢を削がれる。

「私は、ヴォルフ様に忠誠を誓いました。あの方に命を救っていただけいたあの日から、私の全てを、あの方の大望へと捧ぐと決めた」

「全てを？ 余所者が口先でのたまうそれを、どうして信じろと言う？」

彼女の言葉の強さに慄きながらも、どうにか言葉を繋いだコンチョ。エーファは静かに返答を告げる。

「信じてもらうしか無い、正真の忠誠です。例えば……あのお方がこの場で私に死ねと言うのならば——私は喜んでそうするでしょう」

雪のようなエーファの白肌が、微かに紅潮したのに気づいて——コンチョ・キャンサは思わず、それより先の言葉を失った。

張り付いた微笑を崩さず、小さく会釈をした『ニクスの幽姫』は、そのままクルと背を向けて、キャットウォークを降って行く。向かう先には、全ての装甲を張り終えた勇猛の竜鬼——《バーサークフューラ

↓  
が、ギラと輝く双眸を湛えて、屹立していた。



## 幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼 ②

——半年前、西方大陸エウロペ・ニクシー基地にて

痛みが、彼女を支配していた。

「痛い、痛いッ！ 誰か、誰か来て！」

耳をつんざく苦悶の声。恐怖に喘いだ少女の涙声が、ニクシー基地の医務室に響き渡る。必要最小限の資材を纏めて、既に脱出の準備を進めていた医療班だったが——エーファ・アクロウが苦痛にもがく声に、その手を止める。

先の戦い——ガイロスの全軍を震撼させた『赤の砂漠の戦い』より帰還した、数少ない生き残りの一人たるエーファだが、その傷は深い。肉体的な傷もさることながら——精神に負ったそれが重篤であった。こうして痲癩を起こすのも、ここニクシーに搬送されてからもう何回目になるう。同情と、どこか呆れた風の表情を見せた軍医の男が、ゆっくりと枕元に寄って来るや——「エーファ・アクロウ、気を確かに。まもなくニクシーは落ちる、今はなにより、脱出の準備を進めなければならぬのだ」と、彼女を宥める。

轟と響いた轟音と共に天井が軋み、バラと塵が落ちる。軍医はもちろん、ナーススタッフ達も一人残らずこの事態の正体を知っていた。先にこのエーファ・アクロウが目にし、帝国の主力師団を壊滅に追いやったというヘリックの超兵器——《ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー》の主砲、『1200mウルトラキャノン』が、今やガイロスの本拠たるこのニクシーにも、降り注ごうとしていた。

——ガイロス帝国は、西方大陸エウロペでの戦いに敗れたのだ。

いつこの医療施設にも砲撃の余波が来るか知れない。一刻も早く脱出の手筈を整えなければ、と焦燥していた軍医だったが、

「レニー……レニーを呼んで！ 助けて！」

と、苦痛に呻きながら叫んだエーファに、彼は半ば呆れ気味に溜息を吐いた。

バゴ、と鉄の戸が跳ね開けられると、「——エーファ！」と、芯の通った女性の声が弾ける。戸惑う医療スタッフを掻き分けて入って来たのは、ガイロス帝国軍尉官級の制服を纏った、大柄の女性士官だった。

レニー・キュール・シュヴェスター少佐。齢三十にして帝国機甲師団の雄たる『第三装甲師団』んの副官を任せられた女傑であり、エーファ同様、『赤の砂漠の戦い』から生還した者の一人でもある。シュヴェスター少佐はエーファ・アクロウ中尉の直接の上官であり、また大切な友人でもあった。

「……エーファ。白く美しいエーファ」

床に伏したエーファの手を取り、その傍らに寄り添ったシュヴェスター少佐。大きく暖かな彼女の掌に、僅かながら落ち着きを取り戻したエーファは、「レニー、助けて。痛いよ、私もう戦えない」と小さくごちた。

「しっかりなさい——私の、銀の戦女神」

スルと手を滑らせてエーファの頬と、焼け焦げた彼女の銀髪を撫でたレニー・シュヴェスターは、流れ伝う涙を拭ってやると、優しく微笑む。

「ニクスの戦姫と讃えられた貴方だからこそ、ヘリツクの撒いたあの業火の中を生還する事が出来たのよ。戦えるわ——傷を癒して、力を取り戻した暁に、貴方は報復の天使となつて必ずやあの反乱軍を討ち果たす。そうでしょう?」

「……ニクスの、戦姫?」

レニーの言葉を繰り返したエーファはゆっくりと頭を振ると、「こんなになっちゃったんだもの、無理だよ」と、包帯に覆われた己が半貌を撫でた。炎上する機体を引き摺って、焦熱地獄と化した『赤の砂漠』レッドラストから、どうにか逃げおおせたエーファだったが——雪のような白肌の一部は焼け爛れ、また夜の川を思わせる深い銀の髪も半分が焦げ落ちた。熱に晒されて変形した蠟人形のように、変わり果てた自分の姿を、彼女は知っている。

「死んだんだよ。ニクスの戦姫はもういない」

悲しげに目を伏せたエーファに、「いいえ。今も変わらず美しいわ」

と、微笑んだレニー。傷ついた躰、癩癩に荒んだ心。見る影も無くなつた今の自分を真つ向から見据えた彼女に、エーファは救われた気がした。彼女の頬に触れ、涙を零し、はにかんだ。

レニーはエーファの上官で——掛け替えのない、大切な存在だつた。

胸中に涌いた悲しみを取り払われたエーファは、瞳を伏せ、レニー・キユールへと口元を寄せる。言葉だけではない、これまでと変わらぬ情愛を証明してくれれば——彼女と口づけを交わせば、立ち直れる。そんな確信の下、エーファは恋人の返答を待ったが、

「——後でね」

と、レニーはそれを素つ気なく拒んだ。

医務室に收容されていた傷病兵と軍医達は、レニーの連れて来た数名の衛生兵の指揮に従つて列を組み、建物の外を目指す。エウロペに派遣された残存兵力を、本土たる暗黒大陸へと逃がすため、ニクシーの飛行場には並べられるだけの《ホエールキング》が待機しているはずだった。未だ傷の癒えきっていないエーファもまた、車イスを引かれて一団の最後尾を往き、病院船たる輸送艦へとむかっていた。

「私は主力部隊の撤退を指揮するため、一度最前線へと戻ります。エーファ中尉は皆と共に、先に病院船に乗りなさい。いいわね？」

レニー・シユヴェスターがそう言うなり、ゾイド格納庫の方へと続いた廊下へと踵を返す。彼女の背中を不安げに見遣り、エーファは問うた。

「レニー、一緒に来てくれないの？」

呼び止められたレニーは、その言葉に数秒呆けて、目を剥いた。

「何故って——当たり前でしょう？ 隊長たる指揮を取らなければ、それに——」

訝しげに眉を顰めたレニーの意図を察せず、エーファはきよとんとする。「シユヴェスター少佐、でしょう？ さつきまでとは違う、今は

作戦行動中なんだから、程々に」と窘めたレニーの語気には、動揺と、どこか彼女の無垢に対する侮蔑の意が滲んでいた。

傍らに立っていた軍医に目配せするや、レニーはエーファに悟られぬ様な小声で会話を交わす。

『ウルトラキャノン』の衝撃が、相当にショックだったのでしょうか。情緒は不安定ですし——少しばかり、退行レグレッションしています。前線に戻れるのは、暫く先のことになりそうですよ」

「……なるほど、精神崩壊している、というのなら納得だわ。ニクスの戦姫も、こうなってしまうえば憐れなモノね」

蚊の啼くような細かい声の交錯だったが、エーファの耳朵には、確かにそう聞こえた。レニー・シユヴェスターの語気に孕まれた冷やかな思惟を感じ取り、レニーの横顔を見上げる。エーファが姉のように慕い、また愛していた妙齡の女性士官は、チラと冷やかな眼差しを持って彼女を一瞥した後、言葉無くその場を後にした。

基地の崩壊は、想定よりもずっと早く進んでいたらしい。

レニーがその場を後にして十分も経たぬ内に、轟と唸った爆雷の音が、二度弾けた。一度目の衝撃で基地内の電気系統が落ちた。進むべき廊下の照明が立ち消えて、傷病兵達も、傍にいた軍医も、衛生兵達も皆一様にパニックに陥る。

「アギヤアア！」

混乱の中で、二度目の砲撃。医療室が据えられたこのニクシー兵舎棟の、ほど近くで着弾したらしい。天蓋が音を立てて崩落し、阿鼻叫喚の悲鳴と共に、その場にいた者達は皆、瓦礫の中に吞まれていく。

エーファ・アクロウは幸運だった。咄嗟に車イスから身を投げた彼女は、衝撃に短い悲鳴を上げたものの、ただ一人瓦礫の下敷きになる定めから逃れる事が出来た。

崩れた瓦礫の中に、先まで一緒に居た者達の亡骸が混じる様は、彼女を戦慄させたが——それが彼女の、生への執着を一層に掻き立て、結果的には足しとなる。歩く事さえままならぬはずの躰を無理やりに起こして、エーファは病院船の《ホエールキング》が待っている屋

外を目指す気概を掻き立てられたのだから。

が――、

「そんな……ッ！」

ボロボロの軀を引き摺って、エーファが半壊したニクシーの兵舎棟を這い出たのは、それから一時間も経った頃であった。病院船の姿など、既に無い。ようやくとどり着いた飛行場に、《ホエールキング》の姿は既に一機だけで、その一機も既に撤退する機甲師団を積載し終えて、今まさに飛び立たんとしている。転がった礫塊と、弾痕の後だけが残る、伽藍の飛行場を呆然と見つめたエーファは、最後の《ホエールキング》の鼻先、艦内乗り込まんとする一機の《アイアンキング》の姿を見つけて、声を張った。

コングの肩先に描かれた部隊章は、エーファの所属する第三装甲師団のそれだった。右肩に『ビームガトリング』を背負った機体は、隊の副官機であり――エーファが常に傍らに寄り添って来た機体の姿でもある。

「――レニーッ！」

聞こえるはずも無かった。レニー・シユヴェスターの《アイアンキング》ガトリングカスタム G C を飲み込んだ《ホエールキング》は、ゆっくりとその口腔を閉ざした後、ブアと熱風を巻き上げて、ゆっくりと空へと舞いあがった。

幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼 ③

「レニーイッ！」

エーファ・アクロウの上げた悲痛な叫びは、彼方より響く砲声と地鳴りにかき消された。振動が彼女の細枝みたいな軀を、容赦なく揺すり、ひび割れたアスファルトの足場に素足を傷つけられた挙句、よろめいて尻もちを付く。

(レニー……ッ)

噴煙の上がる空の向こう、徐々に小さくなっていく《ホエールキング》。既に届かぬはずのそれに、呆然と手を伸ばしたエーファだったが――、

失意に耽る間も無い、伽藍の飛行場にけたましい轟咆が重なって、見たことの無い藍色の重戦闘機械獣が、群れを為して結集してくる。

ガイロス帝国軍が先に完成させた、拠点防衛・要塞攻略用のゾウ型ゾイド《エレファンダー》。完成の噂を聴いてはいたが、目にするのは初めてだった。最新鋭機。だが、ガイロス帝国の主力兵団は、既にこの西方大陸から脱出する手筈を済ませている。その状況で物々しく武装し、敢えて出撃の準備を行う部隊――それで分かった。彼等は本体の撤退が完了するまで殿として戦い、時間を稼ぐ『決死隊』だ。

崩落した瓦礫の散らばる格納庫から這い出てきた決死隊は、この飛行場で隊列を整えた後、ヘリック軍へと相對するのだろう。四方から次々と結集する《エレファンダー》の群れ。その数は既に数十機にも及び、尚途切れる気配も無い。総勢はおそらく一個大隊にも及ぼう規模であろう。

《エレファンダー》達は、足元のエーファに気づく気配も無く、行進を続ける。地鳴りと、戦闘機械獣の雄々しい呼気に耳朶を打たれながら、エーファはヨロと身を起こして、立ち上がった。

――嫌だ。

裸足を血だらけにしながらも喧噪の飛行場を後にしたエーファは、ボロボロの兵舎棟へと駆け戻った。照明が落ち、もぬけの殻と化したコンクリート造りの廊下に人の気は無く。既にニクシーには、先の

《エレファンダー》隊——死を覚悟した殿の兵達しか残っていないのだろう。だが、エーファは違う。今の彼女は死を、それを誘うヘリック軍を——彼らが持つ、あの日空より降り注いだ物と同じ白雷の弾を、何よりも怖れていたのだ。

（嫌だ——嫌だ、嫌だ……ッ）

足は自然と、ゾイド格納庫の方へと向かっていた。何かしらの思惑が在った訳ではない。しかし、身一つでこの状況を生き残れるはずがない事は、本能的に理解していたのであろう。動かせる戦闘ゾイドはまだ残っていれば、まずはそれに乗りこもうと決めていた。

轟と砲撃音が爆せて、廃墟と化したニクシー基地の天蓋が軋む。次いで、猛獣型戦闘機械獣特有の猛々しい咆哮。ヘリック共和国軍の先遣隊が閉ざされたニクシーの城門を破ったのだ、おそらくは足の速い高速戦闘大隊による突入が始まったのであろう。

迎え撃つ《エレファンダー》隊は重装甲を備えた最新鋭のゾイドだ。一対一での戦闘なら機動性と白兵戦能力に長けたライガー・ウルフタイプのゾイドとの戦いでも後れを取る事はないだろうが、何しろ相手はヘリック全軍である。高機動とパワーを兼ね備えた戦力——例えば《ブレードライガー》級の機体が数の暴力で押して来れば、如何に《エレファンダー》と言えど長くは持たない。

焦燥したエーファが、薄暗いゾイド格納庫の戸口を潜った時だった。

「——何者か！」

緊張の意を孕んだ、硬い声色が、エーファを背後から射すくめる。振り返った先には、帝国尉官の軍服を纏った大柄の男性士官が、ホルスターに手を掛けたままこちらを睨み付けていた。年齢は三十年代後半か、四十代前半くらいであろうか——隙の無い双眸の男性士官だ。純血のガイロス人ではまず見かけない、黒髪と焦茶色の瞳を持つ男。エーファの顔を訝しげに見定めるや、

「純ニクス人か？ 何故、まだこの基地に残っている？ 決死隊にガイロスの純血は選ばれないはずだ」

エーファの銀髪、そして紅い瞳に目を細めた男性士官が、険しい相のまま詰問した。語気の強さに間諜付いた彼女に、やがていらいと頭を振り近寄って来る。

「ヌ——」

彼女の包帯で隠された半貌と紗衣服姿に気づいて、その警戒を緩めると、「負傷兵か……逃げ遅れたのだな」と、一人ごちた。年相応の厳めしさと、軍人らしい固い口調の男だが——半貌を失う程の重傷を抱えたエーファに同乗したのだろうか、彼女を見遣るその眼は、どこか物哀しい光を宿している。

呆気にとられたエーファが、ボヤと彼を見上げてみると、

「帝国機動陸軍、ズィグナー・フォイアー大尉。貴官の所属と、階級を言え」

と、男性士官の硬質な声が射した。

フォイアー大尉。

耳に馴染まぬ響きだ。茶の瞳と髪、おそらくはニクス由来の血縁ではあるまい。エーファの脳裏に掠めたのは、ガイロス帝国臣民の最下層、大陸の外より連行されたとある亡国の民の存在。半世紀前、中央大陸デルポイの覇権をヘリック共和国と争い、敗れ滅びたゼネバス帝国の将兵達。彼等の多くは半ば強制的にガイロスの戦力として吸収され、今日まで飛竜十字の旗の下、戦って来たのだ。

その境遇に思いを馳せ、押し黙っていたエーファだが、ン、と短い息を吐いて返答を催促したフォイアー大尉に気づいて、「エーファ・アクロウ中尉……所属は、第三装甲師団」と声を返した。

「第三装甲師団……暗黒国防軍の要か」

眉を顰めたズィグナー・フォイアー。ガイロス帝国機動陸軍の中でも、第一から第三装甲師団はニクス大陸出身のエリート将校が上席を占有する、いわば精鋭部隊である。壊滅寸前のニクシー基地に残る事を強制されたズィグナーとその同胞達からすれば、この帝国に根付いた軋轢の象徴とさえ言えた。

「フォイアー大尉、助けて。脱出艇はもう無いのですか？」

ズィグナーの心境など知る由も無く、エーファは彼に縋って、問う。



「私、決死隊として残ったんじゃないんです。動かせるゾイドも無い、戦えない。けど、まだ死にたくないんです」

「——それは、見れば分かる」

エーファの手を振りほどいて、ズイグナーは格納庫の深奥へと目を遣る。

向かう先には、ガイロス正規軍の物ではない——第二次全面開戦時に本土から派遣されたP<sup>プロイツェン・ナイツ</sup> K 師団の《ホエールキング》が待機している。ガイロス帝国上層部の采配によって選別された決死隊の中には、『あの御方』を初めとする、この場で死ぬべきではない同胞も含まれていた。

彼等を救うための、ゼネバスの艦だ。純ニクス人<sup>ニクス</sup>を乗せる席があるはず等ない。まして一個大隊にも及ぶ同胞がその命を散らして作る退路を、怨敵たる純ニクス人が行き、生きながらえる手助けなど、どうしてできよう。

沈黙の中、数秒目を伏せたズイグナー。その脳裏に、彼の主君たる金髪の青年士官の姿が弾ける。一国の指導者となる運命を背負いながら、危うさすら覚える程純粹で、心優しきその男ならば、この怨敵<sup>ニクシ</sup>をどうするか——。

「——脱出艇は、ある。着いて来い」

自らの選択の成否に迷い、その眉間に深い皺を刻みつけたズイグナーが静かに告げた。

熱砂を巻き上げて離陸する、《ホエールキング》。眼下では、群がる共和国軍の戦闘機械獣と尚必死の戦いを繰り広げる、《エレファンダー》大隊の奮戦が在った。ズイグナー・フォイアーに連れられた一室に設けられた大型スクリーンに、一機、また一機と討ち倒されていく巨象の姿が写り込む。ズイグナーと、もう一人——部屋の深奥に佇む、スラと背の高い金髪の青年将校が、その様を無言で見守っていた。二人の背中をボヤと眺めながら、エーファは招かれた《ホエールキング》の内装が、彼女のそれとはまったく異なる赴きを放っている事に、目を剥く。

一面が朱色の絨毯で覆われた床、貴族趣味がかったクラシカルな壁沿いに、時代物の美術品がズラと並ぶ。そして何より、その天井に刻まれた黒蛇の紋章は、ガイロスの『飛竜十字』とは異なる亡国の国章であった。

「……ニクスの戦姫、エーファ・アクロウ中尉だな？」

澄んだ声色が、エーファを呼んだ。ゆっくりと振り返った金髪の青年、切れ長の瞳が半貌の彼女を見捉えるや、「貴官は知っているか？」

このガイロスの中でわだかまる、巨大な軋轢の存在を」と、抑揚ない声で問う。

「軋轢……？」

「左様。今我らは、それをこの眼下に見ている……ニクシー基地守備隊の総員五百余名、ヘリック空軍の追撃を阻止するために出る『レドラー』決死隊。その全てが旧ゼネバス帝国出身兵だ。我々は今、彼等の犠牲の上に立ち、生きながらえている。そして、この采配を振るつたのが、貴官と同じ純ニクス人出身の高官たちだ」

男の、鋭い視線。

「え……？」

刺すような冷たさのそれは、しかし敵意を孕んだ物ではなく——どこか悲しげだった。不意の発言に戸惑ったエーファに、ゆっくりと頭を振った金髪の男は、「慣習的な事だ。半世紀前、ガイロス帝国にゼネバス帝国の将兵が吸収されて以来、捨て駒はゼネバスの役目と決まっている」と、言葉を足す。

「申し訳ありません、殿下。同胞が切り開いた血路を、純ニクス人に歩ませるなど——」

青年の前に進み出たズイグナーが膝を付き、頭を垂れる。礼を尽くす彼に対して、「構わんよ、ズイグナー。一度、語り合ってみたくて思っていた。かつての遺恨を知らぬ純ニクス人と、ガイロスの歩んできた道——そして我らのこれから歩む道、その是非を」と、微笑を浮かべた青年は、改めてエーファに向き直って、告げた。

「我が名はヴォルフ・ムーロア、ゼネバスの血を継ぐ者。そなたを歓迎しよう、エーファ・アクロウ。一時ながら我らの往く道が交錯したこ

の縁に従い、貴官には我らの全て、ガイロスの全てを知ってもらおう。  
そして、その上で考えてもらいたい——この戦争の果てに在るべき、  
『帝国』の姿を」

幕間：ニクスの幽姫、ゼネバスの竜鬼 ④

ZAC2101年 七月 暗黒大陸ニクス エントランス湾沿岸  
地帯

年中を通して日射量の少ない暗黒大陸は、初夏と言えどどこか寒々しい風が吹く。水平線の彼方に間の海域・トライアングルダラスの暗雲が横たわるのを見遣りながら、エーファ・アクロウは一人立ち尽くしていた。

ニクス大陸よりダラス海を望む『エントランス海岸』の丘陵地帯。ガイロス帝国本土と、デルポイ、エウロペ以下南方地域を繋ぐ、文字通りの『ニクスの出入り口』となるここに、既にヘリック共和国軍の先遣部隊が上陸している。無論、それを手をこまねいて見ているだけの、ガイロス軍上層部でもない。海岸線には既に、帝国国防軍によって長大な防衛線が築かれていた。エーファに与えられた役目は、完璧とも言えようその防衛線を、内側から突き崩す事にある。

ブアと吹いた海風にエーファの銀髪がそよぎ、擦る冷気に痛みを覚え、失った半貌を撫でた時だった。背後から緊張の意を孕んだ、男性の声が掛けられる。

「——エーファ・アクロウ少佐。グレム・ダンカン中尉、以下十名到着いたしました。本作戦より、少佐の指揮下に入ります」

振り返った先に立っていたのはエーファと同じか、一つか二つ年下くらいの、若い男性士官。奥には、彼と共にエーファの隊へと配属された兵達が十名、微動だにせず立ち尽くしている。

グレム・ダンカンと名乗った青年士官、その短く刈り上げた金髪とブラウンの瞳は、あの日『ホエールキング』の中で謁見したヴォルフ・ムーロアや、ズイグナー・フォイアー大尉の特徴に似る。ダンカンという姓もニクス由来の物ではなく、彼が既になく亡国・ゼネバスに纏わる証明ともなろう。

振り返ったエーファの異様——溶け落ちた左半面を鉄製の拘束具で縛り上げた様を目にして、驚いたらしい。ダンカン中尉は少しばかり唇を震わせて視線を逸らす。彼の動揺を余所に、エーファはフ、と息を吐いて近くに依るや、

「……よく、私の部隊に加わってくれました。ありがとうございます」と微笑を返した。

深々と頭を下げたエーファに、兵達の相から、少なくとも動揺の色が浮かぶ。

——ガイロスの仔、純ニクス人は『竜の司』。ゼネバスの仔らはそれに仕える従者であり、『翼の生えた蛇達』に過ぎない。

誰が行ったのかも知れぬ言葉。だが、ニクスに住まう者ならば、誰もが一度は耳にしたことのある言葉だ。古代都市トローヤを起源とする覇者ガイロスと、帝国発祥より彼に従った『純血のニクス人』こそが最も優れた生命であると定義し、そもそもニクスの外より移住した存在である『ゼネバスの民』は純ニクス人に隷属して然るべき、という通説。

『鉄竜騎兵团』部隊の一員に迎えられ、一部隊の指揮すらも任せられたエーファだったが——元はゼネバス人との間に深い遺恨を持つ純ニクス人の出身である。その下に配される、というのは、これまでガイロスの社会で冷遇され続けてきた彼等にとつて屈辱以外の何者でも無かろう。だからこそ、エーファは彼等に頭を垂れた。

不意にエーファの見せた礼節に、部下達は刹那呆ける。まるで気の触れた白痴の奇行でも見たかのように貌を見合わせたが——やがてダンカン中尉が仕切り直すように、「……参りましょう。そして始めるのです、我らの戦いを」と促すと、エーファもまた面を上げて、頷いた。

「ええ、始めましょう。私達、ゼネバスの戦いを」

日が落ち——夜が訪れる。

立ち込めた夜霧に月光が映えて、淡い虹色の暈を醸す中——バサと外套を翻したエーファは、既にアイドリング状態にある自らのゾイドを目指す。赴く先に、完成したばかりの彼女の愛機、《バーサークフューラー》が屹立していた。

惑星Zi人による保護政策によって確保された物ではない、ニクス大陸南西部に生息する完全野生体テイラノサウルス型ゾイドをベースに完成した、新型戦闘機械獣。ニクシー基地の秘密工廠で研究・開発されていたこのゾイドこそ、ガイロスの国防軍には配備されていない鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンの占有機であり、同部隊の旗艦ゾイドでもあるゼネバスの『竜鬼』である。

鋭角的ながら余計な凹凸を持たない装甲で全身を覆われた姿は、本来戦闘機械獣が醸すべき獰猛さを、完全に包み隠している。完全野生体ゾイドと謳われたその素性とは相反する、無機的な風貌。しかし、全身をフルプレートフルプレートの甲冑で覆った騎士の如き姿には、同時にどこか気品があった。

エーファには完成して間もない『竜鬼』が、彼女の専用機として与えられている。対して、小隊を構成する部下達の装備は、決して強力とは言えない。秘密結社・鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンが完成させた超小型ゾイド——カマキリ型の《デイマンテイス》、水陸両用機の《マツカーチス》が、それぞれ四機ずつ。小隊の副官を務めるダンカン中尉すら、同じく超小型機に分類されるデイロフォオサウルス型ゾイド《デイロフォオス》に乗り込む事となっている。

いずれも最新技術の粋とも呼ぶべき代物だが、大型ゾイドを多数保有する機甲師団と正面からやり合うには心許ない装備である。《レブラプター》や《イグアン》と言った小型ゾイドよりもさらに華奢な機体構造で、中には《デイロフォオス》のようにコクピットさえ持たず、緊急脱出用のビークルのように剥き出しのシートに跨る操縦方式の機体さえあった。

超小型ゾイドを主力とする同部隊の切り札として、惑星Zi史上初の地底機であり、最新の電子兵装を与えられたモグラ型ゾイド《グランチャー》が存在するが——エーファの隊には配備されていなかった。

た。小隊長たる彼女がゼネバスと縁薄い純ニクス人であるが故に、十分な戦力が与えられなかったのかもしれない。

『黒の竜騎兵隊』より先行している《グランチャー》から報告がありました。一時間程前、エーベネ基地第28独立強襲戦闘大隊が出撃、海岸一帯に防衛線を敷いています。《ジェノザウラー》を含む強襲機甲部隊とのことです」

ダンカン中尉から送られてきた周辺地図と、帝国軍の部隊配置データを一瞥したエーファ。「……ヘリック側の動きは？」と問い返した彼女に、中尉は即答する。

「エントランス海岸を占領し、今は守備を固めています。前線基地を完成させ、補給線を整えるつもりなのでしよう。主力は新型のライオン型高機動ゾイド《ライガーゼロ》です」

《ライガーゼロ》。ヘリック軍が先のニクシー基地攻略戦の際に鹵獲した、《バーサークフューラー》の兄弟機から完成させたという新型機だ。共和国軍は機体を解析・量産して、このニクス大陸先遣隊の主力として運用しているというが——その総数は決して多くは無からう。国防軍の総力を結集して本土侵攻を妨げんとするガイロス軍が、数に物を言わせた波状攻撃を仕掛ければ、如何に強力な機体であろうと、押し切られる。

「私達の役目は帝国守備隊を攻撃し、その鉄壁の防御に微かな綻びを作る事——ガイロスとヘリック、両国の力が拮抗し、終わる事の無い殺し合いを続けるように……」

囁くように一人ごちたエーファ。

その様から感慨の念でも聞き取ったのか、「……何か問題でも？小隊長」と、ダンカンが問質する。エーファへの不信を隠さない、棘のある声色。ゼネバスのために謳っているも、いざかつての友軍と相対した時、彼女は躊躇するのではないかと——そう訝しんでいる。

ダンカン中尉の懸念を、察してはいた。が、「——いいえ。なんでも」と、エーファは平静のままに応じる。

確かに、エーファ・アクロウは純ニクス人だ。だが——ガイロスと

ゼネバスの因果の中で、大義はどちらに在るか。この時の彼女は、既にその応えを見出していた、と言っている。

レーダーに反応が出て、警告のアラーム音が鳴る。大型戦闘機械獣の物であろう熱源反応が、六機。おそらくは守備隊本隊から放たれた斥候・哨戒部隊であろう。向こうもこちらを捕捉しているらしい、高速で距離を詰めてくる光点に、ダンカン達の緊張が強まる中、エーファは言った。

「私が、一人でやります。皆さんは退がってください」

配下の者達が意を唱える間もないまま、エーファ・アクロウの《バーサークフューラー》がバーニアを吹かして跳躍する。

滑空と呼んでも差し支えない程の、滑らかかつ高速のホバリングで、一気に前進したフューラー。エーファの視界には、既に敵機の姿が写りこんでいた。想定通り、強襲戦闘隊に所属する戦闘機械獣達だ。《レッドホーンGC》、《レブラプター》が各二機、一機は報告に在った通り、国防軍の切り札と言えよう《ジェノザウラー》の量産型。そして最後が——哨戒分隊の指揮官機であろう、《アイアンコング》。

唯のコングではない。『六連ミサイルランチャー』を撤去し、代わりに中・近距離でのゾイド戦を想定した『ビームガトリング砲』を備えた野戦指揮官仕様——《アイアンコングGC》。一部の装甲はパイロットのパーソナルカラーであろう濃紫に塗り替えられ、肩口には所属部隊の部隊章であろう、『紫色の百合華』がペイントされている。

百合の隊章は、ガイロス帝国国防軍の雄、第一から第七の装甲師団に割り当てられたものだった。そして『紫』は、エーファにとっても馴染みのある——かつて彼女も所属していた、『第三装甲師団』所属機の証だ。

かつての友軍であった、ガイロスの機甲師団。眼前に立ちほだかったそれを、エーファは自らと同期した竜鬼——《バーサークフューラー》の紅い双眸を持って、ギラと睥睨した。



幕間：二クスの幽姫、ゼネバスの竜鬼 ⑤

——月下の平原に、竜鬼は立った。

ガイロス帝国のゾイド達——《アイアンコングGC》、《ジェノザウラー》と《レブラプター》そして《レッドホーン》で構成された帝国国防軍の哨戒分隊は、目の前に現れた未知の機竜・エーファの《バーサークフューラー》を前にして暫し動揺し、立ち尽くす。全身を覆う薄紫色の甲冑でその素性を包み隠した無機の竜は、帝国正規軍の機体に所属する物ではなく——しかしヘリック共和国の戦闘機械獣では決してない。背負った大型バックパックに付随するのは、如何にもマスプロダクツ的印象を与える淡泊な外観のスラスターユニットに、用途不明な一対の鉄杭。その近未来的重装は、技術的に帝国の後陣を廃するヘリックが作り上げたモノとは思えないであろう。

戸惑うガイロスの哨戒部隊に対して、エーファもまた静寂を返した。装甲の隙間より覗く、《バーサークフューラー》の紅い眼光を介して見据えた、ガイロスゾイド部隊の姿は、かつて彼女が肩を並べ、共に戦った友軍のモノだ。目の前に現れた未知の機竜、《バーサークフューラー》を前にしてジリと後ずさる彼等の姿に、エーファは微かに眉を顰めると——無意識に、自らの失った半貌を撫でる。

(……どここの隊の者か。所属と階級を応えよ)

長きに渡る沈黙を破って、フューラーのコクピットに通信音声が流れる。哨戒部隊を率いる、《アイアンコングGC》からだ。凜と張った女性士官の声に、エーファは微かに目を剥いた。

呼びかけを無視して、《バーサークフューラー》はゆっくりと歩みを進め、帝国軍へと迫る。シート越し、フューラーの動力機関が、ズンと振動を強めるのを感じた。まるでエーファの動悸をゾイド自身が読み取り、昂っているかのようにだった。

(——応答しろ。そのテイラノサウルス型ゾイドは通達にない未知の実験機だ……所在を明らかにしなければ敵と見なし、この場で撃墜する！)

一層強い語気で吐き付けられる、警告の言葉。敵意をむき出しにした《アイアンコングGC》のパイロット、ガイロスの女性士官の叫びに、エーファもまた無線を手にとった。モニターの電源を入れてオーブン回線を開くと、相対したガイロス軍のリーダー、エーファの知るそれと変わらぬ女傑の顔があつて——思わず、口元を綻ばせて、その名を呼ぶ。

——レニイ。

「貴方……ッ!？」

レニイ・シユヴェスターの驚愕を遮るように、バーニアの吹く轟音が爆ぜると、彼女の僚機である量産型《ジェノザウラー》が前に出る。《アイアンコング》を押しつけたジェノは、猛々しい咆哮を上げてエーファを威嚇するや、その罅を剥く。《コング》との通信が繋がったままだ、「シユヴェスター少佐！ このゾイドは敵です、排除します！」と、《ジェノザウラー》を狩るパイロットが叫んだのも、はつきりと聞こえた。エーファと同じくらいの年齢であろうか、若い女性士官の声だった。

尾の先から頭部まで——虐殺竜《ジェノザウラー》の全身が水平に伸びて各部放熱フィンが展開すると、口腔からせり出した砲塔に稲妻が爆ぜる。じつくり五秒程の時間を掛けてエネルギーを収束させた後、『収束荷電粒子砲』の閃光が撃ち放たれた。《ジェノザウラー》の主砲、それも最大出力だ。夜闇すら裂く光の奔流が、真つ直ぐエーファの《バーサークフューラー》へと伸びていく。

「……ッ」

虐殺竜の光線の発射とほぼ同時、フューラーのバックパックに備えられた二本の杭が展開し、前方へと翳された。複数の間接を備えたアームユニットによって本体と繋がれているそれは、一見古い時代の騎兵が振るつた大槍とも、現代の工兵用ゾイドが備える削岩機にも似ている。

「愚かな、その槍で荷電粒子を切り裂くつもり？」

逸った《ジェノザウラー》の女性パイロットだったが——次の瞬間、彼女の油断はかき消される。雷霆に相對するよう差し出された《バーサークフューラー》の大槍、その刃が花卉如く三つに避け拡がるや、巨大な紫煙色のビーム膜が展開されて、『荷電粒子砲』の奔流を引き裂いたのだ。

「Eシールド？ 馬鹿な！」

動揺の叫びを上げた《ジェノザウラー》に、今度はフューラーの反撃が飛ぶ。アームの中心に備えられた『AZ185mmビームキャノン』。大輪の花の如く広がっていた三つの刃が閉じて砲口に添うと、今度はビームを加速させるレールの役目を果たす。超高速で撃ち出されたプラズマの塊に、ジェノの上半身は粉々に吹き飛ばされて、崩れ落ちた。

荷電粒子砲を物ともせず、虐殺竜《ジェノザウラー》を一蹴。

「——増援を呼んで、早く！ 分からないの？ コイツがアイゼンドラグーン『鉄竜騎兵团』なのよ、半月前に海岸線の守備隊を壊滅させた、あの——」

レニイ・シユヴェスターの動揺が爆ぜる。部下の《レッドホーン》の影に隠れるよう、慄いて後退する《アイアンコング》。その姿にエーファは怪訝そうに眉を顰めると、アクセルを思い切り踏み込んで《バーサークフューラー》を突貫させた。ホバリングした『竜鬼』の躰は、瞬間的に時速三百キロ強まで加速して滑空すると、強烈な当て身を持って《レッドホーン》を突き飛ばす。

次いで、『クラッシュャーホーン』を翳して突貫してきた二機目に身を翻して、前足の『ストライクレーザークロー』を一閃。頸椎部を叩き斬られた《レッドホーン》は火花の血潮をふきながら、糸の切れた傀儡のように崩れ落ちた。『パイルバンカー』を備えた二機の《レブラプター》が飛び上がって同時攻撃を掛けてくるのを、『ストライクスマッシュユテイル』でまとめて叩き伏せると——戦場に残るのはエーファ

と、レニイのゾイドだけになる。

「……ウ、ウワアアア！　ワアアアア！」

絶叫と共に、レニイの《アイアンコングGC》が、胸の装甲を打ち鳴らしながら疾走を掛けた。『ビームガトリング』をエネルギー切れになるまで乱射した後、大鎚の如き威圧感を秘めた拳『アイアンハンマーナックル』を振り上げる。

「——ッ」

剛腕を紙一重で避けたエーファは、再び背部の武装ユニットを展開した。荷電粒子さえ寄せ付けぬ『Eシールド』、大型ゾイドを一撃で打ちのめす『バスターライフル』……それだけではない。《バーサークフューラー》に与えられたこの複合兵装『バスタークロー』の用途は格闘戦にもあつて、三本の刃を束ね、マグネッサー技術による超高速回転を加える事で機能する大型ドリル『マグネーザー』へと変形するのだ。

甲高いモーター音を上げて超高速回転する『マグネーザー』が、節足動物の足にも似た大型の稼働アームによって複雑な挙動を見せる。まるで背中から二本の腕が生えているかのような《バーサークフューラー》の異様は、所見で感じ得た無機的印象とは打って変わり——その名の通り狂戦士染みだプレッシャーを放っていた。

「ウ——ワアアアア！　ウワアアアア……！」

レニイの発狂は、《バーサークフューラー》の獯猛な雄叫びにかき消される。

『マグネーザー』の一撃で、重装甲を誇るはずの《コング》の両腕が千切れ飛ぶ。大きくよろめいた《アイアンコング》の無防備な胸部目掛けて、二撃目。ゴリラ型野生体の特性を加味し、ドラミング時の音響効果を持たされたコングの装甲は、『バスタークロー』による破砕音を一層凄惨なモノと錯覚させた。内腑を掻き出され、オイルと火花を散らした《アイアンコング》。ゾイド生命核<sup>コア</sup>を跡形も残らぬ程、文字通り粉碎された機体は、数秒の間ビクと痙攣を繰り返したが——、

——やがてボロ雑巾のような垂れて、崩れ堕ちた。

「……見事だ。エーファ・アクロウ少佐、伝え聞いた通りの実力です」  
グレム・ダンカン中尉から、通信が入る。隊の副官機である彼の《ディロフォース》が、いつの間にかエーファの《バーサークフルーラー》の傍らに寄り添っていた。

ボロボロに撃ち捨てられたガイロスの哨戒部隊。大破し、動けなくなった彼らに、方々から這い出たエーファの部隊、《ディマンティス》、《マツカーチス》達が群がり、止めを刺していく。

その光景を一瞥しながら、エーファはまた失った自らの半貌を撫でた。

西方大陸での大敗しこの傷を負って以来、実戦でゾイドを動かしたのは初めてだったが——『ニクスの戦姫』と呼ばれたかつての力の大半を、エーファは取り戻している。《バーサークフルーラー》とのマッチングも良い。『バスタークロウ』を初めとする各種複合兵装の複雑な管制をエーファは存分にこなし、さらに野生ゾイドそのものの獰猛さを持つフルーラーが、どちらかと言えば思慮深く、その分決断力に欠ける彼女を引っ張ってくれる。結果機体は、その機能の十全を持って戦闘に当たっていた。

「エ……エーファ……貴、方……何故——」

通信機越し、ノイズ交じりの音声の流れで、エーファの気を引き戻す。《アイアンコング》の残骸、その通信システムが、まだ生きているらしい。息も絶え絶えのレニイ・シュヴェスター少佐の声が聞こえた。

ダンカン中尉の《ディロフォース》がそれ気づいて、《アイアンコング》に止めを見舞おうとするが——エーファ・アクロウはそれを制した。ゆつくりと《バーサークフルーラー》の機首を向け、レニイ機へと迫る。

《バーサークフルーラー》の脚部アンカーが降りて、尾部に備えられた『荷電粒子ジェネレーター』が展開する。全身を水平に引き延ばしたフルーラーの口腔よりバレルが伸びると、バチバチと稲妻が爆ぜ

て、光球を形勢し始めた。

先に虐殺竜《ジェノザウラー》が見せたのと同様のシークエンスを踏まえた、『荷電粒子砲』の発射形態——だが、それだけではない。バックパックに格納されていた稼働アームがグンと持ち上がった、二機の『バスタークロー』ユニットが三たび展開される。三つ刃を花弁の如く拡げ、中枢に備えられたビーム砲の照準をコングの残骸へと合わせるや、そのいずれにも、口腔に湛えた雷球とよく似たエネルギー体が形成されていく。

背部複合兵装の、最後の用途——尾部に備えた『荷電粒子ジェネレーター』の余剰エネルギーを同期させる事で、口腔部主砲とほぼ同等の威力・射程を誇る副砲『プラズマキャノン』として機能する。そして、完全野生体のゾイド生命核コアに加え、バックパックに大出力のサブジェネレーターを備えた《バーサークフューラー》は、これに『荷電粒子砲』を加えた三門の同時発射・フルバースト攻撃を可能としていた。機体に多大な負荷を掛けるものの、その破壊力は魔装竜《ジェノブレイカー》の最大火力を上回り、あの狂戦士《デススティングガー》の主砲にも匹敵する。

触腕を拡げ、その砲塔から切っ先、口腔内に至るまでを爆ぜるプラズマで満たした《バーサークフューラー》の姿は、まるで巨大な巣を張りめぐらせて獲物を待ちかまえた蜘蛛のようにも見えた。「何故……エーファ、何故……ッ！」と咽び泣いたレニイ。問いかけに応えず、エーファが発射トリガーを引こうとした時だった。不意に、センサーから警告音が鳴って、彼女の意識を引き戻す。

視線を地平線へとやると、疾走を掛けるガイロス帝国軍の機獣達が粉塵を上げて迫っていた。先にレニイの指示した救援要請を拾ったのである、《セイバータイガー》《ヘルキャット》《ライトニングサイクス》からなる高速戦闘中隊だ。「少佐、退き時です」と告げるグレム・ダンカン中尉に頷いて、エーファは配下達に撤退の合図を送ると、フューラーの機首を噴煙巻き上がる地平へと向ける。そして——

——轟、と閃光が爆ぜて、三つの雷霆が撃ち放たれた。

莫大な規模の衝撃波をまき散らして放たれた《バーサークフューラー》の『荷電粒子砲』は、レニイ達哨戒部隊の機体を誘爆で爆散させながら、彼方の帝国増援軍へと伸び——突き刺さった。一点の閃光からブクブクと膨れた光球は、やがて地平の彼方、駆ける帝国中隊の機影全てを飲み込んだ後、大爆発を巻き起こす。

大出力『荷電粒子砲』発射の反動に触れたコクピットの中で、立ち昇ったキノコ雲を見遣ったエーファは、焼き払われた半貌が疼いた気がして——もう一度ゆっくりと、その傷跡を撫でていた。

幕間：ニクスの幽鬼（、）、ゼネバスの竜姫（、）

《ホエールキング》のブリッジに立ち、蒼穹の青空を覗いたエーファは、眼前を横切つて飛びかう紅い《レドラーB ブリースターキヤノン C》の群れと、真つ向からそれに相對し、撤退する帝国艦隊を追撃する銀の翼竜、ヘリツク空軍の《ストームソーダー》とが繰り広げる戦いに目を奪われる。

十機にも満たぬ《ストームソーダー》は、その倍は居よう《レドラー》達の合間を縫うように擦り抜け、『レーザーブレード』で、『パルスレーザー』で、翼に備えた『アイアンクロウ』で、啄み、撃墜していく。澄み渡る青空に紅蓮の火花が弾け、噴煙が堕ちていく——追撃を止めるために戦う決死隊、その命が咲かせる徒花は儂くも、美しい。

ふと視線を、隣に立った若い士官の方へと薙ぐ。

スラと背の高い、長身の男性士官。エーファより一つ二つ年上か、というくらいに年若い青年だが——大佐という肩書きと、あのズイグナー・フォイアーのような勇士をして臣下の如く振舞わせる姿は、まるで古い時代の貴族ノイブルを彷彿とさせる氣品を醸していた。

膨れ上がる閃光に照らされた青年の、ヴォルフ・ムーロアの横顔——エーファは暫し、それに見惚れる。

エーファ・アクロウはこれまでの人生で、一度たりとも異性に魅せられた事が無かった。

帝都ヴァルハラに莫大な資産を持つ上流階級の一角・アクロウ家に生まれた彼女は、幼少より蝶よ花よと愛でられながら育ち——生粋の純ニクス人ニクスであつたエーファ自身の美貌によつて、その賞賛は決して大げさな物では無いと裏付けられる。加えて軍学校へと進むと、なまじその血統に相応しいだけの文武の才覚を秘めていただけに、ガイロスの貴公子達は皆エーファを高嶺の華と決めつけた。及び腰なニクスの男性達は、エーファにとつても酷く矮小な存在に思えたのである。

だが、このヴォルフ・ムーロアは、彼女の知るどの男性とも——そして彼女が先まで愛していた、レニイ・シュヴェスター少佐とも違う。



彼の隣に立つただけで、エーファは自らの存在が霞むのを感じていた。彼女が傷つき落ちていいるからではない、『ニクスの戦姫』と敵味方に讃えられた全盛の自分でさえ、このヴォルフの持つ気品、滲み出る才覚とカリスマ性を前にすれば、平伏する他なからう。

そんな、気高い皇帝の頬を——一筋の涙が伝う。

驚き、目を剥いたエーファは、「……どうして、泣くのですか?」と、恐る恐る問いかけた。流星の如く頬を引いた涙の雫を拭う事もせず、チラと視線だけで彼女を一瞥したヴォルフは、「——落ちていくからだ」と短く応じて、儂い火花となり散っていく《レドラー》を見返すと、

「本当に為し得る事が出来るかどうかも分からぬ、大願。幻の母国を再建するために、彼等は私に任せ、私に託す……そんな無垢の『ゼネバスの命』達が——私のために、落ちていくからだ」

——※※※——

ニフル湿原の『竜の巢』に帰還し、《バーサークフューラー》を停止させたエーファ。格納庫にズラと並ぶ鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンの戦闘機械獣達の合間に、スラと背の高い金髪の男を見つけた。傍らには、纏う氣に一片の隙も無い武人・ズイグナー・フォイアー。彼と何やら話し込んでいた年若い士官は、ゼネバスのシンボルカラーと言えよう深い紅でありしられた外套を翻した折、《フューラー》の足元に居たエーファに気づき、一瞥する。

鉄竜騎兵団の首魁——ヴォルフ・ムーロア大佐。主君たる彼の澄んだ瞳に、エーファは理由の分からない緊張を覚える。

一瞬歩みを止めかけた彼女の傍らで、「参りましょう、少佐」と、今しがた丁度《デイロフォース》を飛び下りた副官・グレム・ダンカン中尉が促す。慌て我を取り戻し、「——ええ」と頷いたエーファが格納庫を立ち去ろうとした時だった。

「……おい、待てイ」

呼び止める嗚れ声に聞き覚えがあつて、立ち止まる。出撃前に、エーファへと声を掛けて来た中年男性、コンチョ・キャンサ少尉。サングラスの下から覗く彼の双眸は、出会った時と変わらぬ訝しげなモノで——その敵意を肌で感じ取ったエーファは、ダンカン中尉達に先に行け、と手を翳した。

「何か？ 私の部隊は、与えられた役目を忠実にこなして見せたモノと思つていたのですが」

「ああ、それはいい。今声を掛けたのは、俺の個人的な好奇心からだ。さつきお前さんが潰してきたゾイド部隊……お前さんの古巣だろうか？ 指揮官はレニイ・キュール・シユヴェスター少佐で、アンタとは相当に親しい仲だった——そうだろうか？」

不信を露わにして眉を顰めるエーファ。コンチョは悪びれる風もなく、「驚く事じゃない。俺は諜報員だ、ガイロス側の事情だつて、多少は覚えがあるんだよ」と、顎髭を撫でると、

「聞かせてくれ、エーファ・アクロウ少佐。生粋のガイロス人であるアンタを、何がゼネバスに加え入れさせたんだ？ かつての仲間達を容赦なく葬る事もいとわぬ今のアンタを……そうさせるモノとは、なんだ？」

数秒の間が、二人の合間を流れた。

黙りこくつていたエーファだったが、やがてフツと息を吐くや、自身の半貌を覆い隠したベルトへと手を掛ける。何を意味するか分かつて、コンチョも、辺りに控えていた兵士や、機の整備員たちも皆一様に表情をこわばらせたが——、

——彼等の決心が付く前に、エーファは拘束具を勢いよく引き千切つて、焼け落ちた自身の左半貌を晒した。

「……ッ」

青白いエーファの素肌、その額から頬に掛けて、痛々しいケロイドの跡が、まるで泥流のように這い流れていた。潰れた左目に光は無く、白濁と濁った眼球はルビーのような右の瞳とは似ても似つかぬ、

屍の如き無機質さを醸しだす。壮絶な戦傷を目の前に、コンチヨは思わず息を呑み、後ずさったが――、

「貴方がたと同じです。ヴォルフ様に忠誠を誓った……それだけの事」

と、微かに口元を歪めたエーファは、と、自らの傷をゆつくりと指でなぞる。

「ガイロスのためにと、ヘリック共和国の者共と戦った果て、この傷を負いました。『ニクスの戦姫』と持て囃された栄華と、それに相応しい力と誇りを、合わせて失いましたが……苦痛と屈辱に咽び泣きながらも、私は母国のために捧げたのだと、納得しようとしたのです。でも――」

レニイ・シユヴェスターは――ガイロス帝国は、エーファの不幸を泣いてはくれなかった。

コンチヨ、そしてエーファの後方に控えた、グレム・ダンカン中尉を初めとする彼女の部下達が、その言葉を無言で追う。ガイロスを捨て、とうの昔に滅びた幻へと加担する『客人』の、その真意を聞き逃すまいと、皆一様に、エーファの奏でる声へと、耳を傾けている。

「あの日、ズィグナー・フォイアー大尉に救われた私は、ヴォルフ様と直接言葉を交える機会を与えられた。殿下は大願のために果て無く続く貴方達戦いを憂い、その死に涙してくださいます。私も、そんな御方の下に仕えたい。ガイロスに残り、死に際して何の感慨も無く送られるより――優しいゼネバスの殿下が流した涙に、手向けられて逝きたいのです」

エーファ自身、語るに値せぬ『つまらぬ理由』だと思う。

ゼネバスの臣下達の死を、無意味ではない物にしよう。果たせぬ大願ではない、幻の国ではないモノとして、新たなゼネバスの再興を掲げ、成し遂げるようにしよう。そして――彼の宿命のために戦った果て、力及ばず死を迎えた時は――せめて、惜しまれながら逝きたい。

コンチヨ・キャンサ少尉は、それ以上の言及をしなかった。数秒、眉間に深い皺を刻みつけたまま立ち尽くした彼は、やがて葉巻を一本だけ取り出して火を付けると、それを吹かしながら、クルと踵を返す。

「呆けるなよ、エーファ・アクロウ。鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンの戦いはこれから始まるんだ。来たるべき中央大陸デルポイへの船出の時——お前さんの覚悟、真価は、そこで問われる。お前さんが本当にゼネバスの司になるってんなら、我らの大願が果たされたその時、もう一度吠えて見る」

立ち去って行くその背中を、残された右の紅い瞳で見送ったエーファは、不意に差し出されたベルトに気づき、振り返る。ダンカン中尉だった。エーファが放って捨てた半貌の拘束具を拾い、差し出した副官は、もう一度「……参りましょう」と促す。

「エーファ・アクロウ少佐、力をお示し下さい。我らの悲願を共に願ひ、果たすために尽力を——さすれば、新しい『ゼネバス』は必ずや、貴殿を受け入れる事でしょう」

ダンカンの言葉にはエーファへの侮蔑も、彼女への過度な崇拜も無い、ただ純粹に『共に戦う同胞への配意』だけが在った。青年士官の言葉に、エーファもまた微笑を返しすと——来たるべき戦いに備え、基地の深奥へと歩みを進めた。

——ZAC2101年12月。

ガイロス帝国より離反した鉄竜騎兵団アイゼンドラグーンは中央大陸デルポイへと帰還、ゼネバス・ムーロアの末裔ヴォルフ・プロイツェン・ムーロアの主導の下、此処に『ネオゼネバス帝国』を建国する。新帝国建国に加わった者の大半は、ガイロスの支配下において冷遇され続けた、旧ゼネバス派勢力の出身者であったが——一方で皇帝ヴォルフのカリスマに魅せられ、故郷を捨てその軍門へと下った純ニクスニクス人シも少なくなかったという。

エーファ・アクロウ少佐もその一人だ。

西方大陸戦争終結の混乱の最中、旧ゼネバス派勢力と合流した彼女は、竜鬼・《バーサークフューラー》を与えられて以後、暗黒大陸の各地で暗躍し、帝国国防軍を疲弊させた。後に共にデルポイ大陸へと渡った折には、指導者として前線を離れたヴォルフに代わって鉄竜騎兵団第一機甲師団『白の竜騎兵隊』を指揮。同じく最前で戦った女性パイロット——《シエノブレイカー》のカタリナ・ターレス大

佐、《ダークスパイナー》のレディ・コーラル中尉と共に、『ゼネバスの竜姫』と称され、恐れられた。

新帝国成立後も戦乱は終わらず、混乱の中で（——もしくは各々が抱える思惑に従った故に）竜姫達も徐々にその姿を消し、歴史の面舞台より去って行く事になる。だが、エーファ・アクロウは最後までヴォルフ・ムーロア帝に仕える事を選び——ZAC2109年春、旧共和国首都・ヘリックシティを廻る攻防戦で戦死するまで、『ゼネバスの戦乙女』として在り続けたとされる。

## 追補編：『回想録』

### 回想録：機獣達の挽歌 — 構想編 —

—はじめに—

このコーナーは小説本文ではなく、既に終了しています本編『機獣達の挽歌』に関する作者自身の振り返り、小話・解説になります。ストーリーに深く関わる物ではありませんので、基本的に読み飛ばして頂いてもなんら問題の無い、所望作者の自己満足的な物となります。また、多分に主観的な解説を含みます事をご了承ください。

第一回目は作品の執筆のきっかけとコンセプト、主要キャラクターに関する解説（という名の懺悔コーナー）となります。

—機獣達の挽歌、そのきっかけとコンセプト—

『新ゾイドバトルストーリー』に関する二次創作は、遙か以前より構想がありました。というのも、公式ファンブックシリーズによって描かれたバトルはその世界観の大きさ故、アーサー・ボーグマンやレイ・グレッグと言った特定人物の視点に絞られて物語が進んでいきます。年表上の中でさらりと流された時期もあり、また作中で活躍する機体達はいずれも兵器で、けっしてワンオフの存在ではない。アーサーやレイ以外にもブレードライガーやライガーゼロを駆り、同じだけの活躍をしたパイロットが居たかもしれない。ゾイドバトルストーリーには、公式では描かれなかったであろうエピソードを内包してくれるであろう、いい意味での大らかさがありました。ゾイドバトルストーリーの展開以来、ずっと思い描いてきた惑星Ziの世界観、あったかも知れない戦いのイメージを編纂し、ゾイドファンの方々と共有できれば——そんな思いつきが、『機獣達の挽歌』始まりのきっかけです。

バトルストーリーの二次創作を始めるに際して、

・公式ファンブックで言及された結末を改変したり、矛盾が発生するするような展開にはしない。

・ファンブックで提示されたエピソードの中で言及の少なかった時期を補完するような物語を構築する。

・上記2点を加味しつつ、バトストのキャラクター、エピソードとリンクした原作要素を取り入れる事。

以上の三点をメインコンセプトに、プロットを構築することとしました。結果、小学館様より発刊された公式ファンブックシリーズ1〜4の時系列にそれぞれ対応したエピソード『エウロペ』『テクノロジ』『暗黒の軍勢』『ニクスへの旅路』という4つの章が誕生し、を主人公となる一士官の視点でそれらを時系列順に追っていく、という現在の形が出来上がりました。

### —キャラクター雑記・主要人物— ジェイ・ベック

物語に際してまず必要となるのが、作品の視点人物となる主人公と考えます。4つのエピソードを通して、ガイロスとヘリックの戦いを垣間見、そして成長していく人物——おのずとその人物像は決まってきました。ジェイは公式ファンブックで登場した歴代の主人公的存在と比べ、ゾイド乗りとしての腕前は無論、精神的にも未熟な人物として描いたつもりです。戦場の様々な事態に我々と同じ視点で驚き、悲しみ、そして怒る人物の方が、読み手的にも感情移入しやすく、また書きやすかった、というのが大きな理由ですが、4章に渡る長い物語の中で、そんな一般人視点の持ち主たる彼のメンタル面の変化を描くことができれば、ゾイド戦に特化しすぎない、ドラマパート面も補強した作品になるのでは、という思惑もありました。

作中何度かジェイの髪型であるソフトモヒカンについて言及される場面があります。マイルドな性格のジェイですが、外観的には『若いアメリカ人のヤンキー兵士』染みたイメージを取り込みたい、という意図がありました。これは新バトストの主要人物であるロブ・ハーマン大尉のキャラデザを行った漫画家・上山道郎先生が、そのデザインに際しヘリック共和国軍のイメージとして提示した『二次大戦中の

アメリカ軍人』という形式を、私なりに拾いたかったからでもありません。

名前の由来はギタリスト「ジェフ・ベック」から——ではなく、ギャグ漫画『ボボボーボ・ボーボボ』に出てくるタマネギみたいなキャラ『J』と、有名音楽漫画のタイトル『BECK』から。……どういう組み合わせだ（笑）

エリサ・アノン

物語の清涼剤的存在となる女性キャラもいなければ、という発想の元、ジェイとほぼ同期ということになる女性士官、エリサ・アノン少尉も設定しました。物語の都合上多くの場面で危機に直面し、その都度へこたれそうになる主人公が、一緒に居て居心地の良さを覚えるような人物。どんなものだろう？ と考えた結果、エリサの大らかな性格もある種テンプレート的に決めました。

彼女を動かすに際してとにかく意識したのは、「出番を増やし過ぎない事」。ヒロイン的ポジションにいるエリサはその分動かしやすいキャラクターですが、彼女が過度に取り上げられることで原作『ゾイドバトルストーリー』の持つハードな世界観と、二次創作である『挽歌』との間に大きな剥離が生まれるのでは、という懸念があったからです。また個人的な意見として、いつも一緒にいるよりも、多くの苦難に苛まれる戦場の中で時々たま会えるかわいい女性、という方が、ヒロインとしてありがたいかと思うのですが、どうでしょうか……？

名前の由来はアニソンシンガー『ELISA』さんと、ゲーム『GOD EATER』シリーズの登場人物・台場カノンから。特に後者は、エリサの人物像にも多大な影響を与えており、モチーフといってもいいかもしれません。さすがに、戦闘中に豹変したりはしませんが（笑）

スターク・コンボイ

ジェイが配属された部隊の隊長で、ベテランのゾイド乗り。主人公ジェイがまだ戦いなれていない序盤の戦闘において、どうしても苦戦



する場面が多くなってしまう彼の代わり、彼が爽快感のある戦い方を披露してもらった意図がありました。一方でこの手の年長キャラにはありがちな、『主人公が成長することでその実力を乗り越えられ、戦闘の主役から外れる』運命を背負ったキャラクターでもあります（そこまで極端な描写ではありませんでしたが、アニメ無印のアーバインや、ジエネシスのセイジウロウも、こうした煽りを食う場面があったように思います）。

ジエイの視点から見たコンボイは頼りになる一方で、上官故の距離の遠さも目立つ人物として描く予定でした。ただ、彼との人間関係を描く前に、あれよあれよとストーリーが進んでしまい、そこまで掘り下げられる前に退場することになってしまったという……描写の上では、かなり後悔が残っているキャラクターです。

名前はガンダムシリーズに出てくるモビルスーツ『スターク・ジエガン』と、トランスフォーマーシリーズのキャラクター『コンボイ』から来ています。正に名は体を表す、めちやくちや指揮官っぽい単語の組み合わせですね……

#### グロック・ソードソール

ある種、主人公ジエイと対になるキャラクター。たたき上げのゾイド乗りで、混沌とした戦場にも一切の迷いを持ち込まない気質の人物ですから、良くも悪くもジエイやエリサの迷いを理解できない人物でもあります。一章の困難を乗り越え、ジエイと一応の和解をした後もそれは変わらず、ある種『戦場という極限状態に適応したキャラ』の象徴でもありました。物語の中盤でジエイと決別し、本編とかかわらぬ場面で命を落としてしまう彼ですが、一方で『閃光師団』レイフォースに参加して暗黒大陸で戦い、散った、という経歴は、本作のオリジナルキャラクターの中でただ一人「歴史の表舞台に立つ資格があつたキャラクター」とも考えています。ジエイとグロックの長所を足し合わせれば、公式ファンブックで描かれた英雄と肩を並べ、戦える人物になるかもしれません。

グロックは子供の頃に読んだ『デルトラ・クエスト』の登場人物から、ソードソールはキャラの性格を一目で表しつつ、語感重視で勢い

のままつけています。

## ツヴァイン

傭兵、という経歴からも分かるとおり、『機獣達の挽歌』の作風と私の人物描写能力に合わせて、アニメ『ZOIDS』のアーバインをオマージュしたキャラクターが、このツヴァインです。ただ、実際に薦めていく過程で皮肉屋な一面ばかりが取り上げられるようになり、まいちジエイが頼りにするパートナーキャラクターとしては成長できなかつたように思います。第二章『テクノロジー』で、いい感じに二人の距離感を縮めたつもりだったのですが、続く第三部が起承転結で言う所の「転」、ただひたすらに物語が揺れ動くところであり、ツヴァイン一人の力で改善できるような窮地を差し込むような予知が無かつた、というのが失敗の要因でしょう。

三部でフェードアウトした彼ですが、実は第四部『ニクスへの旅路』で再登場する構想もありました。ジエイが頼るべき仲間が誰もいなくなつた、というのを強調するために、お流れになつてしまいました。が、彼とジエイが再び共闘するエピソードも機会があれば描いてみたい、という気持ちがあります。

回想録①はここまでとなります。次回からは各章に沿って、ストーリー・ゲストキャラ・登場ゾイド等について回想していく予定です。で、興味をお持ちいただけたら、引き続きお付き合い下さい。

## 回想録：機獣達の挽歌 — 『エウロペ』編 —

### — 第一章 『エウロペ』 —

記念すべき第一章目。構想編で述べました通り、『挽歌』のメインコンセプトは公式で描かれなかった時系列・背景設定を拾ってミツシングリンク的な物語を作る、ということにあります。ゾイドファン、バトストファンの方には言及するまでもないでしょうが、第一章は公式ファンブック1の終了時から2開始時の間にある空白期間に焦点を当てました。すなわち、「西方大陸戦争第一次全面会戦に敗北したヘリックが、ミューズ森林地帯でゲリラ戦を仕掛け、かろうじて戦線を維持している」というタイミング。アニメ『ZOIDS』直撃世代の筆者ですから、バトストの二次創作においてもライガー系・ウルフ系ゾイドを主役に添えたかった。公式で言及されているミューズの森のゲリラ戦の主力は高速戦闘隊であり、まさにライガー系ゾイドの活躍するうってつけの場であったわけです（余談ですが、この時期にゲリラのコマンドウルフが帝国側に大量に鹵獲され、ライトニングサイクス開発のために解析されたり、レッドコマンドとして帝国の機動陸軍にとりこまれている、とのことです）。

物語としてはとりわけ工夫した点もない、「凡庸な新人士官が、初めての実戦に四苦八苦するも、なんやかんやあつて仲間達に認められ、強敵を倒す」という物。この手の二次創作の常として、序盤は登場するキャラクターの紹介に大きく尺を割かなければならなくなるのですが、本作もその例にもれず、主に主人公ジェイと、彼を取り巻く同僚の人物描写に重きが置かれています。登場人物の大半がバトストには登場しないオリジナルキャラばかりなので、とにかくキャラの描き分けをしようと必死でした。また、『挽歌』の隠れたコンセプトとして、各章ごとにジェイから見てスポットライトの当たるメインキャラ、というのが設定されており、グロツク少尉との関係性を取り上げたつもりです。実直でたたき上げのグロツクと、迷いの捨てきれない新米士官のジェイ——物語全編を通して完全に分かり合う事は出来なかったという設定のキャラではありますが、二人が共に戦い、互

いに生き残れるようなきつかけとして、説得力がある展開になってい  
ればいいな、と。

―登場キャラクター雑記・『エウロペ』―

マクシミリオン・ペガサス

ジエイ達とかかわるヘリック共和国軍上層部の人間であり、面倒く  
さい指令をジエイ達に持ち込む、本作の狂言回しの存在でもありま  
す。『エウロペ』編以降も登場する準レギュラー的存在の彼ですが、同  
じ上官キャラのコンボイと性格的キャラ被りが著しかったために、い  
まいち没個性的な存在となってしまうました。一方で《ゾイドゴジュ  
ラス》に乗る上級士官というのは彼だけの持ち味で、戦闘シーンを盛  
り上げるのには一役買ってくれた気がします。最強ゾイド《ゴジュラ  
ス》の登場は戦場の劣性を傾けるのに十分な説得力があり、ぶっちゃ  
けて言えば話をたたむのに便利だった……（笑）

ちなみに、外観描写のほとんどない彼ですが、筆者の脳内ではアニ  
メ無印に登場した脇役キャラ・フォード中佐のイメージで描かれてい  
ます（言うまでもないとは思いますが、『<sup>ジエンブレイカー</sup>G 包囲網』で活躍した  
ハルフオード中佐ではなく、無印少年編でちよつと出ただけなのに、  
ゲーム『ゾイドサーガ』シリーズでは何故かプレイアブルキャラとし  
て自軍に入ってる、クルーガー大佐の副官の方です）。

第四章開始時点でいつの間にか戦死したことになっているペガサ  
ス中佐ですが、実は本編中で明確に、彼の最後の戦いを描いています。  
文章中の視点人物が帝国側のキャラクターだったためにペガサスの  
存在について言及されていませんが、第三章終盤、レンツ・メルダー  
スの《ジエンブレイカー零式》と激闘を繰り広げた《ゴジュラスMk  
―II》が、マクシミリオン・ペガサス中佐機でした。もしや、と気づ  
いてくれた方、いるかな……。

名前の由来は……『遊☆戯☆王』シリーズの登場人物、ペガサス・  
J・クロフォードの米アニメ版での名前が、マクシミリオン・ペガサ  
ス……だったはず（笑）

シニアン・レイン

「そんなキャラ出てたっけ？」という方もいるでしょう。『グラム駐屯地制圧作戦』で《ステルスバイパー》の指揮官として登場した、女性キヤラクターです。チョイ役中のチョイ役なんですが、なんで彼女がこの雑記に登場するのかと言うと……実は彼女『ゾイドバトルカードゲーム』のパイロットキヤラクターが初出の、れっきとした公式バトストキヤラであります。もちろん、愛機は《ステルスバイパー》。

作中で言及された中尉という階級は、作者独自の設定です。人物設定も一切不明、本作でも会話数は少なめです。なので、とりあえず指揮官らしい冷静沈着な風を装いました。

―登場ゾイド雑記・『エウロペ』編―

《シールドライガー》

ご存知、ヘリック共和国の主力戦闘ゾイドにして、平成ゾイダーとしては、『元祖主役ライガー系ゾイド』でもあります。本作でも主人公ジェイ・ベックの初代愛機として登場した機体ですが、バトストという世界観設定に合わせて、機体はあくまで量産機、ジェイ以外にも同型機の乗り手が一話の時点で二人もいるという展開に。おかげで戦闘シーンをかき分けるのにかなり手こずりました。一応、主人公の特別感を出すための悪あがきとして、ジェイ以外の機体はいずれも森林地帯での戦闘を主眼に置いた迷彩塗装、共和国正式採用カラーのままて戦うのはジェイだけ、としています。ちなみにジェイ機の仇名となっている『ブルー・ブリッツ』は、コトブキヤさんより発売されたHMM版の設定より拝借しました。『蒼き疾風』とかの方が西方大陸戦争時の異名としては正しいのでしょうか。

《コマンドウルフ》

旧バトストから変わらぬ《シールドライガー》の相棒ポジション……なのですが、本作では共和国側の苦戦を演出する都合上、どうしてもヤラレ役としての側面が強くなっていました。構想段階で

はジェイの相棒ポジションとして設定されていたツヴァインの愛機でもあります。彼自身筆者の力量不足もあって、活躍してくれなかったし……。

様々なバリエーションのある《コマンドウルフ》ですが、筆者は白いノーマルタイプにアタックユニットを装備した《コマンドウルフAU》と、特に著名な改造機でしょう、『アーバイン仕様』がお気に入りです。

#### 《セイバータイガー》

『機獣達の挽歌』では原作バトストで描かれた対戦カードを極力避けよう、とも思っていたのですが、同時に出来る限り忠実にバトストの世界観を表現したいという思いもありました。悩んだのですが、自分流に「ライガーVSタイガー」の戦いを描く事で、『挽歌』がバトストのミッシングリンクたり得るかを読者様に判断していただけるのではないかと考えた結果、第一章のラスボスは《セイバータイガー》部隊、という展開に落ち着きました。

主人公ジェイと死闘を繰り広げる『ビームランチャー』装備の機体は、『アサルトユニット』装備の《グレートサーベル》の影に隠れていまいち存在感の無い、《セイバータイガーMk-II》仕様をイメージしています。帝国軍高速戦闘隊のエースパイロットを指す『タイガーライダー』の元ネタは、これもHMM版設定から。コトブキヤ版設定によると、シュール・ラング少佐なる人物がこの称号を持つとされ、本作でも後の第三章で登場するジェイ達の宿敵、シルヴィア・ラケート少尉は『タイガーライダー』である、としています。もともと、彼女の愛機は《ライトニングサイクス》で、既にタイガー乗りではないのですが……。

次回の回想録は第二章『テクノロジー』の解説となります。興味をお持ちいただけただけの方、引き続きお付き合い下さいませ。

## 回想録：機獣達の挽歌 — 『テクノロジー』編 —

### — 第二章 『テクノロジー』 —

第一章においてキャラクター紹介、という重要なフアクターを終え、連載モノとしての基盤が整った状態で始まった第二章。西方大陸戦争語る上で欠かす事の出来ない、古代テクノロジー『オーガノイドシステム』と、帝国・共和国によるその争奪戦を、作者なりの解釈・視点を交えて描いてみました。

と言っても、公式設定においてオーガノイドシステムが一体どのようなモノなのか、という点に関する言及は多くなく、それがゾイドを凶暴化させ、その戦闘力を飛躍的に高めるプログラムであるという事以外は分かりません。本エピソードではボスキャラたるヘルマン・シユミット技術大尉を強烈な悪役足らしめるため、帝国側は「システム解析のために非人道的な人体実験を行った」という独自設定が加わっています。本家バトストではまずありえないテイストの設定です（そもそもゾイド向けのプログラムを人間の躰に試して全うな検証結果が得られるのか、甚だ疑問ではありますが……）ここで原作との剥離を感じてしまう方も、少なくないかもしれません。

主人公ジエイと特定キャラの関係に焦点が当たる、という隠れコンセプトもこの章までは健在で、『テクノロジー』では傭兵ツヴァインとの関係がフィーチャーされています。西方大陸出身である彼の、戦火で荒んでいく故郷への心境を描く事で、「帝国にも共和国にも正義はないんだよ」的な、意味ありげで（よくよく考えると当たり前でありきたりな）テーマをちらつかせ、重厚なストーリーを展開する意図がありました。クライマックスの戦いの舞台となるオリンポス山は傷ついたエウロペ大陸の象徴的な場所として設定されたのですが、原作でも重要なエピソードの舞台となった場所を改めて掘り返して描く、というのは出過ぎた真似だったかな、という後悔もあります。

良くも悪くも『挽歌』の作風が凝縮された『テクノロジー』、それでも作者的には、プロローグ的要素の大きい一章、物語を動かすために

ドラマパートに大きく尺を取られてる三章・四章と異なつて、唯一純粹にゾイド戦を楽しんでいただくことのできるオリジナルのバトストだと言える、『挽歌』内では一番の傑作だと思うのですが、いかがでしょう？

―登場キャラクター雑記・『テクノロジー』編―

レイモンド・リボリー

本章から登場することになった共和国側の技術者キャラで、『テクノロジー』における狂言回し役であります。ぶっちゃけて言えばプロット段階では存在しなかったキャラクターであり、執筆中で必要に迫られて、急ぎよ生まれたキャラクターでした。登場後丸々一話に渡つて名前が明かさなかったのは、彼を名無しのモブにするか、準レギュラー的キャラクターにするか悩んでいた証拠だったりもします。

立場は違えど、レイモンドの人間性的な意味での完成度は一章時点でのジェイに近く、戦争の凄惨さを知らずにゾイド研究にいそしんでいた彼がオリンポスでの戦いの果てに一皮むける、というのも、物語を盛り上げるのに一役買ってくれました。最終決戦の際ジェイ機に同乗していた彼ですが、ある種技術者でありパイロットでもあるラスボス・シユミット大尉との戦いに、ゾイド乗りジェイと技術者レイモンドの二人が挑むという構図だったのかもしれない（当時は全然意図してなかったので、今パツと思いついた方便ですが）。

ジェイの仲間の大半が離散してしまつた第四章においても、レイモンドは（ヒロインであるエリサを除いて）唯一再登場します。ジェイの事情を知り、絶望の渦中にあつた彼を激励できる人物……でもゾイド乗りではないため、ジェイと共に戦い、真の意味で彼を支える事は出来ない人物として、レイモンドは最適なキャラクターでした。彼を名有りのキャラクターにしたのは、この点でも正解だったと確信しています（ちなみに初期案では前述の通り、ツヴァインが四章で再登場する予定でした）。



ヘルマン・シュミット

第二章『テクノロジ』のラスボス。一章では全く言及のなかった帝国側のキャラクターも、この二章で出してみました。帝国側のオーガノイドシステム研究者であり、生粋の二クス人以外の全て蔑視する選民思想の持ち主——という、戦争モノに出てくる外道キャラのテンプレみたいな男です。ある種のお決まりみたいなヤツですが、こういうキャラクターは必要以上にキャラの背景設定を言及しなくても、読み手の方に「ああ、こいつは外道キャラなんだな」と、ある程度推察していただける算段が付きますので、書き手としては助かるものでもあります。説明するまでもないですが、彼が散々に言及し、復活を企んでいるという飛竜型ゾイドは《ギルベイダー》や《ガン・ギャラド》と言った旧暗黒軍の主力ゾイド達の事で、上記の人物描写も相まってすさまじい厨二病臭を放っていますね……（苦笑）

研究者としての能力に拍をつけるため、本作において「オーガノイドシステムによる絶滅危惧種の強制培養技術」を生み出したのは彼であり、《ブラックライモス》はその恩恵を受けたゾイドであるとしています。また原作との関連性を醸す要素として、彼はバトストにおいて《テスステインガー》開発に携わったとされる技術者・ドクトルFの配下であると、設定も加えました。ジェイ達との激闘の果てに戦死するシュミットですが、こうした要素を伏線として、続く第三章においても、彼の残した『パイロット・デザイン』技術が重要な要素として登場します。

―登場ゾイド雑記『テクノロジ』編―

《ブレードライガー・アーリータイプ》

主人公ジェイ・ベックの二代目の愛機であり、実質本作の主役機。アニメ『ZOIDS』の主人公機として絶大な人気を誇った機体ですから、ファンも多い事でしょう。何を隠そう作者もその一人で、一番好きなゾイドがこの《ブレードライガー》でした。

完全なワンオフ機であった初代アニメ版とは異なり、バトストにおける《ブレードライガー》はあくまで共和国軍の保有する一兵器でしかなく、同型機も存在します。ただ、本家バトストでアーサー・ボーグマンが乗りこなした試作機と、後の量産型では性能に大きな差があるとされており、実質別機体と言えるでしょう。コトブキヤより発売されたHMMでは前者を『アーリータイプ』、後者を『量産型』と区別しており、外観にも細かな差異があるとしています（多少語弊がありますが、トミー版キットを説明書で言う「バン仕様」として組んだモノが『アーリータイプ』、シールドライガーのパーツを流用した「共和国仕様」として組めば『量産型』となります）。本作ではこのHMM版設定を採用しており、ジェイの乗る《ブレードライガー》を一般機と区別しました。本家試作型ブレードライガーのパイロット、アーサー・ボーグマンですが、実は彼が主役を張るファンブック2において、本人が戦闘を披露するエピソードは結構少ないんですよ（最初のガリル遺跡搜索と、最後の《テストインガー》戦だけ）。本機のファンとしては、強い《ブレードライガー》の活躍を、バトストでももう少し見たかった。そんな願望を込めて、ジェイの愛機は『アーリータイプ』の《ブレードライガー》となりました。

ただ、満を持して登場した《ブレードライガー》ですが、戦闘シーンを描写する上では結構不便な機体でもありました。何せ《シールドライガー》より火器の数が半数近く減ってしまったせいで、どうしても攻撃の描写が限られてしまいます。止めの一撃もほぼ『レーザーブレード』で斬りかかる方式に固定されてしまい、その都度迫力があり、かつバラエティに富んだ斬撃描写を模索しておりました……。

### 《ブラックオニキス》

初見でまずこのページから開いてしまった方は、間違いなく「……そんなゾイドいねーよ」となる事でしょう。宿敵ヘルマン・シユミツトの操る改造《ダークホーン》で、ゾイドリバースセンチューリーに搭載した機体《クリムゾンホーン》が、西方大陸戦争において参戦するとしたら——という想定の元登場した機体です。リバセンは新バト

ストの完結後に設定された、所望「後付け」の作品ですので、当然西方大陸戦争に《クリムゾンホーン》は出てこないのですが、そうした公式の要素を拾い上げエピソードに取り込むことで、そこはかたない公式感を醸し出したい、という、作者の思い上がりから生まれました。機体カラーは黒。ネーミングは同じくシユミットが関係したと設定した《ブラックライモス》と対、もしくは上位の存在であると匂わせるような響きで決めています。

本家《クリムゾンホーン》は惑星Zi大異変直後の磁気嵐吹きすさぶ環境での活動を想定した局地戦用機であり、本来であれば磁気嵐の治まった新バトストの世界において活躍の場はありません。本作ではその関連機である《ブラックオニキス》登場の展開に説得力を持たせるため、本機を「シユミットの開発したオーガノイドシステム搭載の実験機であり、原始惑星Ziの環境の再現となり果てた崩壊後のオリンポス山内——つまりはグランドカタストロフ時と同様磁気嵐の巻き起こった環境での活動に特化した機体である」としました。ついでにオーガノイドシステム搭載の《シールドライガー》である《ブレードライガー》に対し、同様の条件で強化された《レッドホーン》という構図を持つてきたこともあり、《ブラックオニキス》は『挽歌』作中におけるジェイ機の『対等なライバル機』として成り立っています（本来《ブレードライガー》のライバル機と言えば《ジェノザウラー》ですが、既に公式で使われた対戦カードを繰り返しても、その劣化版になりかねないと考え、あえて外しています）。両機が対決するエピソードは、作者としてはかなり満足のいくモノが描けたと思っておりますので、是非また読み返してみてくださいませ（第二部『テクノロジー』の⑬〜⑮話ですね）。

今回の回想録はここまでです。次回は第三部『暗黒の軍勢』になります。ご興味いただければ、お付き合い下さい。

## 回想録：機獣達の挽歌 — 『暗黒の軍勢』編 —

### — 第三章 『暗黒の軍勢』 —

本作の中で最長のエピソードとなっており、第三章。実はこの話、『機獣達の挽歌』を執筆しようと思いつ遥か以前に、ぼんやりと思いついていたゾイド小説の設定を流用しています。当時は現在ののような公式ファンブックのストーリーに乗っ取った4つの章から構成する、という形骸すらなく、単に「西方大陸戦争と暗黒大陸戦争の間の時期、ガイロス帝国の残党と戦うヘリックの兵士を描く」という内容で書くつもりでした。ヘリック側、ガイロス側共にやたらと登場キャラが多いのは、もともとはこの『暗黒の軍勢』部分だけで長編小説を書く予定だった名残りでもあります。

ただ、いざ書き始めてみるとキャラクター大量投入の弊害でドラマパートに大きく尺を取られ、それでも人物像の掘り下げが適わないままフェードアウトするキャラクターが続出（後述するコンボイとか、エラとか）する始末……。正直、本作の中では一番後悔の残るエピソードでもあります。第二章で帝国側のキャラを出しても小奇麗に纏められたつもりだったので、多少キャラを増やしても行けると思っていたのですが……甘かった（苦笑）

各キャラにスポットライトを当てると、という隠れコンセプトに乗っ取るのなら、ここはズバリ『スターク・コンボイ編』というべきところでもありました。が——作品全体で見た場合、このエピソードは起・承・転・結の『転』に当たる部分でもあります。次に控えたクライマックス『結』部分の下拵えとして、主人公ジエイの価値観を揺るがす強敵との戦い、そして仲間達との別離が連続し、ジエイを絶望のどん底に落とす——という作劇上の要素も入れる必要があります。結果コンボイとの関係性を深める尺が全然足りなくなつて、「この章で死別する仲間の一人」程度の、非常にあっさりした扱いになってしまいました。コンボイにおけるヒロイン的存在となる少女・エラを登場させ、彼女と交流する姿を描く事で、コンボイの人間味を深めるつもりだったんだけどなあ……。

物語も佳境に達する本章、登場する敵ゾイドもそれぞれがボス級の強敵ばかりで、『ジエノブレイカー零式』『ライトニングサイクス・カスタム』『超越者・デスステインガー』と、俗に言う『帝国三大ゾイド』の派生機を登場させています。ただ、こちらもヒューマンドラマに大きくを尺を取られた結果、面子の豪華さもいまいち生かしきれない結果に……無念です。

―登場キャラクター雑記・『暗黒の軍勢』編―

ガース・クロイツ

本章の事件の発端となる人物であり、暗黒の軍勢・クロイツの首魁。本作で唯一の「敵側に居る狂言回し」である彼は、既にヘリック軍の勝利という大勢が決した西方大陸の地で、ガイロスのために戦い続ける軍人、というキャラです。物語中盤で主人公ジェイと対決する事になる彼の役目は、ズバリ「ジェイの心をへし折る」事。『母国の名誉のために、自身や仲間の命を顧みずに戦い続ける』という彼の精神は、第一章・第二章でジェイの培ってきた『失いたくない仲間達を守るために、凄惨な戦場へと赴く』という矜持の真逆を往く存在でもあります。先に長きに渡り連れ添ってきたコンボイ小隊長を失い、その決意が揺らいでいたジェイとこのガースが真っ向から戦うことで、ジェイは大きく己のあり方を失っていく――最終的には一瞬の隙を突かれて敗死するガースですが、『信念の激突』という一点において、ガースはジェイを完全に圧倒していたキャラクターでもあります。

ちなみに、ガース・クロイツというネーミングは、ゲーム『ZOID SAGA』に登場するアーカディア王国三銃士・帝国出身のアース・クロイツとモロ被りしてます。気づかなかったというわけではなく、(もしかして、あのアースと多少関連のある人物か!?)なんて夢が膨らめばいいなあと思って、そのまま放置したモノです。

……あ、アニメ『ZOIDS』GF編に登場した共和国の退役軍人、武器密造の子悪党・ガース將軍とも被ってるぞ……。

## レンツ・メルダース

同じく帝国側の登場人物であり、『ジエノザウラー』及びその改造機『ジエノブレイカー零式』に搭乗するパイロット。愛機から逆算するならば、彼こそが主人公ジエイのライバルキャラとなるにふさわしい男なのですが、第二章『テクノロジ』部分でも言及した通り、『ジエノブレイカー』と『ブレードライガー』のライバル関係は、既に公式においてリッツ・ルンシュテッドとアーサー・ボーグマンという最高の二人によって展開されています。本作におけるジエイとレンツも、プロット段階では彼らのように幾度もぶつかり合うものとするか悩んだのですが——結果は本編の通り、ジエイの宿敵ではなく「ガイロス帝国残党軍『クロイツ』の信念を貫徹するキャラ」として、レンツは彼との決着を着けないまま去ってゆきました。

主人公との絡みが少ないせいで、『クロイツ』の面子の中ではないまいちキャラクターを深められなかった点は残念。それでもレンツの最期のバトルシーンはかなり気合入れて考えた物です。彼が最後に発した台詞——「私を討った者は、歴史に名を残すであろう」とは、一昔前に母がハマっていた韓流時代劇の台詞丸パクリなのですが……バトストを読み込んでらっしゃる方はお気づきでしょう、レンツが最後に相対した二機の『ライガーゼロ』は、彼の言及したとおり、後に歴史を大きく動かす可能性がある、エースパイロットが駆る機体達でもあります。

人物像の大まかなモチーフは、『ライガーゼロ』と激突するジエノ系の乗り手」という点から着想を得て、ゲーム『白銀の獣機神 ライガーゼロ』に登場するライバルキャラ・ソリッド軍曹（全然面影無いですが）。名前はアニメ版『るろうに剣心』のオリジナルエピソード・黒騎士団編に登場する悪役、レンツ少尉とメルダース中尉から取っています。まんまですね。

## シルヴィア・ラケーテ

帝国側の主要人物・三人目にして、敵側では唯一の女性キャラ。『ライトニングサイクス・カスタム』を愛機とする彼女は、第一章で言及

された帝国側の高速ゾイド乗りのエキスパート『タイガーライダー』の一人であり、ジェイの仲間達を次々と葬っていく、本章のラスボスでもあります。彼女もまたガース同様、ジェイが『信念のぶつかり合い』で勝てなかったキャラクターで、一見ジェイのような葛藤も、ガースやレンツの持つ軍人の矜持も持ち合わせていません。ただ戦いたいがために戦う、と振る舞う彼女は、ジェイにとって理解しがたい存在であり、彼の立ちはだから『絶望の象徴』ともなっています。作中でシルヴィアの明確な死亡シーンを描かなかったのも、ジェイが倒せなかった敵、というのを印象づけたかったからなのですが———どうでしょうか？

本作では公式のエピソード『ゼロ発進』において、ボビー・マックスウェルが『ライガーゼロ』のテスト中に遭遇した『ライトニングサイクス』が、このシルヴィアが搭乗した機体だった、と設定しています。『ゼロ発進』の中では最終的にボビーの反撃を受けてライフルを損傷し、取り逃がしてしまいうサイクスですが、逆を言えば新型のゼロに全装甲をパージさせ、捨て身の一撃を見舞わせてもなお砲塔一門の損傷で済むくらい手練れ、とも思うのですが、いかがでしょう？

女性のサイクス乗りならば、アニメ二作目『ゾイド新世紀／ゼロ』のタスカー姉妹が真っ先に思い浮かぶことでしょうか———シルヴィアのモチーフは実は違って、アニメ第四作『ゾイドジェネシス』に搭乗したデイガルド四天王の一人・フェルミ少将が、彼女の人物像の原点となっています。また本作の登場人物の中では比較的外観描写が多いのも特徴で、「金髪、ゴツイヘッドギアとスコープで貌を覆い隠している」というのは、ゲーム媒体に登場するガイロス帝国一般兵士のグラフィックイメージと、あの名作ホビー・ミニ四駆のアニメ『爆走兄弟レッツ&ゴー WGP編』に登場するNAアストロレンジャーズのリーダー、ブレット・アステリアのイメージを折衷した物です。超高速ゾイド『ライトニングサイクス』と、パワーブースターによる超加速を切り札に持つ、『バックブレイダー』……うん、あんまり似てないですね。

エラ

帝国残党軍・クロイツが共和国への反旗を翻すために切り札として用意したのが、のゾイドとの親和性を高める強化人間技術『パイロット・デザイン』と、それによって覚醒する最強ゾイド『超越者<sup>イモータル</sup>』。エラはそのいずれともかかわる本章のキーパーソンであり、スターク・コンボイと深く関わり、彼を葛藤させる超重要キャラクターのはずでした。ただ、ジェイの葛藤に大きく物語の尺を取られた結果、肝心のコンボイの人物描写がおろそかになり、それに引きずられる形でエラの扱いも少なくなってしまった、というのが正直な所です。プロット段階では「最初は無機的な印象のエラ、コンボイやジェイ達との交流で徐々に人間性を取り戻していくも、自分を守ろうと次々と死んでいく仲間達を前に葛藤し——最後は失意の中で『デスステインガー』の取り込まれる」という、悲劇のヒロインになる予定だったのに……。

名前のモチーフはズバリ『ZOIDS SAGAⅡ』のヒロイン、ユーノ・エラ。エラの設定は最強ゾイド《デスメテオ》起動の鍵となつた彼女のオマージュだったのですが……ゾイドヒロインでも1、2を争うお気に入りキャラクターであるユーノをモチーフにして扱いきれなかったのは、非常に不本意でもあります。機会があれば、またチャレンジしたい所ですが……。

ボビー・マックスウエル&マミ・ブリジット

三章における本家バトストのリンク要素として、この二人にも言及を。シルヴィアの項でも触れた通り、本章の時系列は西方大陸戦争と暗黒大陸戦争の合間にあるエピソードとして、ボビーが《ライガーゼロ》のテスト走行を行った際に帝国残党と戦う『ゼロ発進』のエピソードと同じ時期と想定しています。ボビーを散々にてこずらせた改造《ライトニングサイクス》のパイロットが、その後も暗躍していたら……そんな可能性の一つとして、この『暗黒の軍勢』を読み込んでいただければ、と。マミさんはボビーのゼロのモニター役を務め、途中逸れてしまった《ストームソーダー》のパイロットとして登場しまし



だが、これは作者のオリジナル設定。せつかくバトストの二次創作をするのだから、登場キャラの中でも特に人気の高いマミさんを、チヨイ役でもいいから「自分なりの解釈」で書いてみたかった。原作ではあの『ガリル遺跡捜索戦』に参加した事以外まったく言及の無い彼女ですが、それだけにいろんな解釈の余地があるというのも、美人なだけじゃない、彼女の大きな魅力の一つだと思います。

―登場ゾイド雑記・『暗黒の軍勢』編―

### 《ジェノブレイカー零式》

レンツ・メルダースの乗機にして、あの超人気ゾイド・魔装竜《ジェノブレイカー》の派生機体として設定したのが、この《ジェノブレイカー零式》。頂いた感想への返信としてもチラと言及した通り、あくまでも《ジェノザウラー》の改造機であり、その性能は本家《ジェノブレイカー》に比肩するものではありません。機体カラーも《ジェノザウラー》と同じ黒の装甲と（本編では言及していませんが）青紫のフレームを持つものと想定しています。また、レンツのモーターが『白銀の獣機神』のソリッド軍曹であると明言した通り、この《ジェノブレイカー零式》も、ソリッドの愛機である《スーパージェノザウラー》、もしくは作品によってはその代替として登場している黒い《ジェノブレイカー》――所望《ジェノブレイカージェット》――のイメージを踏襲して設定したものであります。

腐っても《ジェノブレイカー》の名を冠する機体ですから、これを打ち倒す共和国ゾイドの選定には一工夫を凝らしました。モーターフ通り《ライガーゼロ》とのライバル関係を決定した所までは良かったのですが、タイプゼロ形態のゼロは、量産型《ブレードライガー》とほぼ同等の性能なんですよね……これでは少し説得力がない。そこで、歴史の表舞台に立つであろう『主人公』――レイ・グレッックと、それに並び立つナイト・バイケルンの操る二機の《ライガーゼロ》が立ちはだかる、という構図を作ることとこれを解消しつつ、またレンツの最期をドラマチックに演出することにしました。個人的には、名機

《ジェノブレイカー》の継子を葬るにふさわしい舞台を整えたつもりです。

#### 《ライトニングサイクス・カスタム》

帝国三大ゾイドの二機目。散々言及した通り、この《ライトニングサイクス・カスタム》のみ、公式のバトスト派生エピソード『ゼロ発進』でも登場した機体になります。

ただ、改造機だという言葉及がある割に、外観描写も模型によるジオラマもないため、どこがどう『カスタム』なのかは一切不明、という困った機体でもあります。悩んだ結果、本作においてはコトブキヤ版HMM《ライトニングサイクス》によって設定された内臓火器——『二連奏シヨックカノン』や『八連ミサイルポッド』を多用させることで、トミー版《ライトニングサイクス》からは想像しづらい独特の戦法を披露させ、差別化することにしました。ついでにボスキャラらしい威厳を出すため、『ストライクレーザークロウ』で積極的に格闘戦を仕掛けさせたのもポイントです。一見ヒョロつとした外観で頼りないサイクスですが、戦略比較ではあの《シールドライガーDCS—J》と同等の高性能機。本作での活躍も決して大げさではないと思うのですが、どうでしょう？

本作序盤では《ライトニングサイクス・ハンタータイプ》《ライトニングサイクス・カスタム》表記が混在していますが、これはかつこいネーミングを模索していた名残りで、結局原作通り『カスタム』とだけ表記するのが一番かつこいと気づき、落ち着きました。

……尺が押しまくった結果、ラスボスたるシルヴィアとの戦いが一話分のさらに半分しかなかったのも、この章の大きな欠点ですね。

#### 《超越者・デスステインガー》 イモータル

ご存知、帝国三大ゾイドの中でも一番ヤバイヤツ。この機体が再登場するというのが、本作の中で一番のファンタジー・ポイントな気がします。原作においてリッツ・ルンシュテッドとアーサー・ボーグマンが命を賭して倒した敵が復活する、というのは、ある種原作で描か

れた苦闘と、彼らの努力を台無しにするものになり得ます。そうした事態は何としても避けたかったため、オリジナルの《デスステインガー》を再登場させるにあたり、以下の三点だけは遵守しようとした。

・リッツ&アーサーが戦った《デスステインガー》と同等の存在として扱わない（著しく弱体化させる）

・上記条件下にあっても、惑星Zi全体の脅威足り得る威厳を与える

・主人公ジエイが《デスステインガー》を撃破するような事態を描かない

本作における《デスステインガー》のパワーは上山道郎先生による漫画版『機獣新世紀ゾイド』における暴走状態に近いものと解釈しています。戦闘シーンにおいても漫画版のオマージュがあり、エラの「貴方を殺してしまう」発言からジエイの「なんてパワーだ……!」へと繋がる流れは、同作においてキルシエ・ハルトリーゲルが乗り込んだ《デスステインガー》とカール・L・シュバルツの《アイアンコング》が戦ったシーンそのままです（ついでに最終局面においてエラが『<sup>イモータル</sup>超越者』のゾイドコアに取り込まれるのは、アニメ版・ヒルツのオマージュです）。

この《デスステインガー》、プロット段階では『ZOIDS SAG A II』に登場した改造機《ヤクトステインガー》へと強化されて復活する予定でした。最後の自壊シーンも、装備された『二連荷電粒子砲』のエネルギー逆流に、不完全な機体が耐え切れなくなる、という展開だったのですが——既に散々に長引いてしまった状況での最終局面、《ヤクトステインガー》の独特過ぎる外観を説明するには尺が足りず、あえなくお流れに……。

第四回はここまで。

今回は第四章『ニクスへの旅路』の解説となります。興味をお持ちいただけただけの方、引き続きお付き合い下さいませ。

## 回想録：機獣達の挽歌 — 『ニクスへの旅路』編—

### — 第四章 『ニクスへの旅路』 —

『機獣達の挽歌』の最終章。公式ファンブック4における、暗黒大陸戦争後半の時期を舞台にしたストーリーであり、作品執筆開始時点より作者が最も書きたかった章でもあったため、このエピソードはすこぶる快調に執筆が進みました。怒涛の更新ラッシュで読んで下さった方々を驚かせてしまったかも……すみません（苦笑）

三章ではだいぶおろそかになってしまった、「主人公と特定キャラの関係を描く」というドラマパートのコンセプトですが……この章はヒロインであるエリサ・アノン少尉に焦点が当てられています。第三章までの物語で、共に連れ立った多くの仲間を失ってしまった主人公ジェイが、唯一残されたエリサの安否を思っただけで再起し、悪戦しつつも彼女を取り戻しに行く、というのが大筋で、既に戦争も後半、次々と強力ゾイドが出現し、戦いも苛烈さを増していく——そんな暗黒大陸戦争終盤における終末感が、ジェイの物語の執着を劇的なモノにしてくれるだろうと確信していました。一方で、終章であるこの章はエリサを取り扱った1エピソードではなく、彼女とかかわる一連の展開を交えて、ジェイがこれまで立ち向かってきた葛藤に決着を着ける章でもあります。本作のタイトルを思わせる終盤の二話のサブタイ『機獣達へと捧ぐ挽歌（前）・（後）』はこの第四章のボス戦であると同時に、本作全体を通した上での最終決戦でもある事を意図し、最終話『どうか終わる事の無き旅を』は第四章の副題にかけつつも、作品で描かれた冒険の果て、物語を超えたジェイ達の目指すべき展望を指して、それぞれ名づけました。

作品の根幹にあるべき「ゾイド戦」にも明確なコンセプトがあって、本家バトストではこの時期完全にフェードアウトしていた『ブレードライガー』の「暗黒大陸戦争での戦い」を描くという事に注力しています。原作バトストでは既に『ライガーゼロ』と主役交代を果たし、一線を退いていた『ブレードライガー』ですが、まだまだ通用するポテンシャルを持っているはず。『エレファンダー』や『ライガーゼロイク

ス》と言った、この時期の新鋭機と激闘を繰り広げるライガーの姿を想像するのは、書いていても楽しい作業でもありました。中でも最終決戦は、アニメ「ZOIDS」では馴染み深い光景であった《ブレードライガー》と《デスザウラー》の戦いを、バトストの設定・パワーバランスに準拠した上で再現しようと試みた結果でもありません（といっても、本来《ゴジュラス》級の大型ゾイドすら一撃で打ちのめすパワーを持つ《デスザウラー》の猛攻に晒されていたながら、ジェイの《ブレードライガー》はずいぶん粘り強く戦っている、等……ある種の「主人公補正」が働いているのは否めませんが……）。

三章が長引いた反省を鑑みすぎたのか、改めて読み返すと若干駆け足気味ですが——それでも作者的には、ドラマパート・バトルパート共に最もお気に入りの章でした。自己満足だけでない、ジェイ達の旅の終着点として、読んでいただいた皆様にもある程度の納得を与える事が出来ていればいいのですが……。

—登場キャラクター雑記・『ニクスへの旅路』編—  
シオン・レナート

暗黒大陸戦争に赴くジェイに同行した、年下の女性士官。見方によつてはヒロインのテンプレートとして確立されています。「後輩の女性キャラ」とも言えます。『ニクスへの旅路』ではエリサが終盤まで出てこないため、実質彼女が四章におけるジェイのパートナーキャラクター。その人物像は、ジェイの追い求める『在りし日のエリサの残像』と対になっていて、性格も対極——穏やかで控えめ、ジェイに対してある種の母性みたいなモノを發揮するエリサに対し、高飛車で神経質・かつ自己中心的な人物として設定しました。外観描写もそんな人物像が透けて見えるように腐心しており、金髪で痩せぎす、そして普段から華美な装飾の礼服を着て歩くというシオンは、彼女がエリサのような普通の女性軍人ではない、所望『ライトノベルのヒロイン』的存在の、浮世離れをしたキャラクターであるというのを、文中で表現しようとした結果であります。

戦場に立つ中でプライドの高さから来る精神的脆さが露呈し、以降

はジェイを求めるようになって行くシオン。実を言うと彼女もレイモンド同様、初期のプロットでは存在しなかったキャラなのですが、「主人公ジェイとの泥沼な恋愛劇を演じる」という展開は、終焉の戦いに向けてどんどん追い詰められていくジェイを描くための、良い要素の一つとして機能してくれました。これまた妄想なのですが、シオンとジェイの性格的な相性は決して悪くありません。性格に難アリなシオンですが——自律し、自らの意思でセスリムニルの死地に赴いているエリサと比べ——遙かに彼の助けを必要とし、また彼を理解しようとしている存在でもあります。鉄竜騎兵团アイゼントラグーンと戦う混乱の中で決別した二人でしたが……最後の最後でシオンがジェイに指摘しようとした言葉を聞き取っていけば、ジェイは彼女を守るため、ヴァー又平野で戦う事を選んでいたのでしよう。

名前の由来は、私が愛読してます某漫画の登場人物・お嬢様キャラの「紫音しおん」と、アニメ『ゾイドフューザーズ』に登場したラスターニの兄・レナートから。後者はシオンの愛機である《ブレードライガー》繋がりでの拝借です（周知の通り、レナート本人はライガーに乗ったわけではないですが……）。余談ですが、最初は彼女のポジションに、ゾイドバトルカードゲーム初出のキャラ「ユニア・コーリン」を出す予定でした。ただ、公式キャラをお借りするにはあまりにあんまりな役回り（性悪な性格・主人公とのラブシーン等、上げればキリがない……）だったために、あっさりお流れに……。

ピーター・アイソップ&コーネル・ロドニー&タクマ・サンダース  
これまでのメインキャラがことごとく退場したというのもあり、『ニクスへの旅路』編は慢性的なキャラ不足の状態からスタートしています。でも、残り一章しかない尺で大量に新キャラを投入しても扱いきれるわけがない、というのもあり、新キャラの投入は上記のシオン一人に抑え、代わりに背景をこの三人、読み手であるゾイドファンの方々にある程度人物像のイメージがついているであろう、本家バトストキャラクターに固めてもらう形となりました。アイソップとコーネルは『ゾイド妄想戦記』の、タクマ・サンダースは本家バトス

トの『エースパイロット名鑑』が出典です。主人公ジェイが暗黒大陸戦争でミラージュ高速戦闘隊と同行する、という展開は早期から決まっており、必然的にその絡みのバトストキャラが搭乗する形となりました。ミラージュの活躍は公式においてウエブコミック一話分しか存在しないため、比較的独自の解釈を加えやすかった、というのも……『挽歌』内のIFの歴史として、受け入れてもらえればと思います。

ちなみに、中でも一番扱い難かったキャラは、最高のゾイド乗り「レオマスター」でもあるピーター・アイソップ。本来ならばもつと活躍してくれていいはずの彼なのですが、どうしても主人公であるジェイに活躍の場を設けなければならず、必然的に苦戦するシーンが増えてしまいました。一応終盤の《ライガーゼロイクス》戦では、アイソップが後学迷彩をショートさせたおかげでジェイが真つ向勝負に持ち込めた、という形になっています。

公式でも描写の少ないミラージュ隊の活躍を描くに辺り、コトブキヤより発売していますHMM版の解説より、いくつかの設定を拝借しました。公式では《シールドライガー》乗りであるタクマ・サンダースの加入を初め、ヘルダウム城塞の戦いは彼が活躍したというミミール要塞攻略戦を、《ゼロイクス》との戦いは、アイソップが《ブレードライガー》を失ったという、アイゼンドラゴン鉄竜騎兵団幻影部隊との戦いを、それぞれ参考にしていきます。

―登場ゾイド雑記・『ニクスへの旅路』編―

### 《ブレードライガーミラージュ》

公式で暗黒大陸戦争期に活躍したとされる《ブレードライガー》のバリエーション機。公式ファンブック3以降、カメラに映る機会がめっきり無くなってしまった《ブレードライガー》ですから、それを愛機にするジェイが共に戦っても不自然じゃない僚機として、この《ミラージュ》は最適な機体でした。《ライガーゼロ》の所属するレイフォース閃光師団ではなく、《ブレードライガー》のミラージュ高速隊に所属す

る、というのも、主人公ジエイ、ひいては『機獣達の挽歌』が公式で描かれた表舞台ではない——描かれることのなかったもう一つのバトストである、というスタンスにマッチしているような気がします。作中《ミラージュ》の改造機として登場した《バスターブレード》は、公式ファンブック4にチラと出ていた改造機。《ミラージュ》との関連付けを行ったのは、これもHMM版の設定が初出ですね。

以前このハーメルンの外のコミュニティでも漏らしていたのですが、《ブレードライガーミラージュ》の象徴、パールホワイトとワインレッドの機体カラーで戦場に立ったのは、実はピーター・アイソップ機以外に無く、他の隊員たちは各々のパーソナルカラーにリペイントしていた、という設定があります。しかし、ウェブコミックや公式ファンブック4、そしてHMM版パッケージで見られる《ミラージュ》は、やはり皆一様に白赤のカラーリング。本作では視覚的な知名度のある後者に沿って、アイソップ機以外の《ミラージュ》も、チームカラーである白と赤の機体カラーを持つと設定しています。余談ですが、一度乗機を撃墜されたシオンが乗り換えた予備機の《ミラージュ》は、唯一通常機とカラーリングが違う、と描写する予定でした。実戦配備されていない予備機はパールホワイトとコバルトブルーの装甲を持ち（前述の改造機《バスターブレード》作例のカラーリング。逆に『挽歌』内の《バスターブレード》はあくまで《ミラージュ》の換装形態で、色合いは白赤のままです）、つまりは通常の《ブレードライガー》を駆るジエイと、その反転カラーのシオン機だけをミラージュ隊の他機と差別化する、という予定だったのですが……入れ忘れた（笑）。

### 《ジエノフレイム》

聞き慣れない機体名が出て戸惑った読者の方もいることと思います。初出はゲーム『ゾイドサーガII』のオリジナルゾイドで、曰く「《ジエノブレイカー》とは別のコンセプトで完成した《ジエノザウラー》強化プラン」。ゲーム内では主人公ゼルの宿敵・リバイアスの最後の愛機として立ちはだかりました（個人的には一対一の戦闘という



こともあって、この《ジエノフレイム》こそ、作中の主人公機《ブリッツタイガー》のライバルという感じがします。

原作ではゼネバス派の勢力・テラガイストにて運用された《ジエノフレイム》ですが、本作においてはガイロス帝国の開発した「純然たる《ジエノザウラー》の後継機」として設定しています。というのも、私のバトスト観においては「《バーサークフューラー》は帝国正規軍の保有しない、アイゼンドラグーン 鉄竜騎兵団の占有機である」という持論がありまして。これに乗っ取るのであれば、アイゼンドラグーン 鉄竜騎兵団との戦い以外で《バーサークフューラー》を出すわけには行かない……でもそうになると、《ライガーゼロ》を有する共和国軍に対して、ガイロス正規軍の型落ち感が目立ってしまう。悩んだ結果、ヘリツクの次世代ライガー・《ライガーゼロ》に対し、ガイロス帝国が用意した対抗馬・次世代ジエノとして、この《ジエノフレイム》に出演してもらいました。ちなみに本作で《ジエノフレイム》を有する部隊として登場した「ロットティガー」もゲームネタ。『ゾイドVS』シリーズ初出の。ゼネバス派の組織を取り締まる特務隊ですね。

『ニクスへの旅路』のゾイド戦の展開は、ズバリ三章以上の「ボスラッシュ」でもあります。一つの章でボスキャラを張れそうな強力ゾイドが次々と立ちはだかる、という絵面を作りたかったのですが、異形の改造機《ジエノフレイム》が初っ端というのも、そのコンセプトの体現と言えるのではないのでしょうか？

《エレフアンダー・アサルトコマンドタイプ》

《ジエノフレイム》に続くボスクラスゾイド。一転して正統派、《ブレードライガーマイラージュ》との対決構図が良く描かれる《エレフアンダー》です。コマンドタイプにE S C S装備、さらにアサルトガトリングを搭載した仕様は、アニメ『スラッシュゼロ』においてストラ大尉が搭乗した機体と同じですね。作中では《ライガーゼロシユナイダー》が全く太刀打ちできないほどの、圧倒的な強さを発揮しました。本作においてジエイと対決した《エレフアンダー・アサルトコマンドタイプ》も、彼と《ブレードライガー》単独では倒せないであろう威

圧感を持つ「強敵」として設定しています（前述の《ジェノフレイム》は見た目の派手さに反して、六機連隊という「群」を最大限に生かして戦闘を展開しており、この《エレファンダー》と対になっています）。

この《エレファンダー》戦、作中ではジェイとシオンの二体一で戦っているのですが、実はこれ、先のキャラクター雑記で述べたジェイとシオンの相性の良さを、それとなく匂わせるシーンとして描いたつもりでした。一人では勝てない相手を前にして、真つ先にシオンの援護を求めたジェイ。彼女もすぐさま息を合わせて攻撃を仕掛け——連携を破られ、一度は倒されかけると、今度はシオンがジェイの助けを求め反撃する。お互いの弱点や、迎えた危機を補い合って戦えるのは、ジェイが過剰な程に「守りたい」と気張ることがなく、またシオンが彼に遠慮なく助けを求められる「素直さ」がある故でしょう。以降戦闘シーンの無いシオンにとっては、この《エレファンダー・アサルトコマンドー》が『ニクスへの旅路』でのラスボス戦ですね。

#### 《ライガーゼロイクス》&《バーサークフューラー》

物語を佳境に導く存在として、アイゼンドラグーン鉄竜騎兵団が少しでも登場する、というのも、初期プロット段階から構想していました。と言っても、本作ではバトルストーリー原作で描かれた旧ゼネバス派の暗躍という要素には深く言及せず、主人公ジェイはゼネバスもガイロスもない「帝国軍」との戦いを我武者羅に戦っている状態にあります。そんな中でヴォルフ・ムーロアとアイゼンドラグーン鉄竜騎兵団が登場しても、作品の趣旨を混乱させるだけかも知れない。迷いましたが——バトルの表舞台を知るゾイドファンの方々、つまりは読者視点から見れば、彼らが表だって行動を起こし始めた事が、物語の佳境へと進んでいるという合図であると理解していただけるだろう、と考え、めでたく登場の運びとなりました。《ライガーゼロイクス》はアイゼンドラグーン鉄竜騎兵団の圧倒的な強さの一端を見せるために《ブレードライガー》と直接対決するポジションとして、そして《バーサークフューラー》は部隊の象徴として、あのヴォルフ・ムーロア共々ゲスト出演してもらっています。

作中《ライガーゼロイクス》と《ブレードライガー》の武装配置が

似ている、という言葉がありました。これは数年前にとあるファンサイトで《イクス》に関してなされた考察から着想を得た物です。確かにエレクトロンドライバー兼用のスタンブレードは、パルスレーザーを備えたレーザーブレードに通じるモノがあり、最高速度等のスペックも近い。公式で「ヘリックのC.A.S.の最大公約数的装備を持つ」とされる《イクス》は、タイプゼロ装備の直接の強化型ともいえ、また帝国版ライガーとして完成したそれは必然的に、対《ブレードライガー》を想定し、それを上回る装備・スペックを備えていても、おかしくないのかもしれませんが。

### 《デスザウラー》

『ニクスへの旅路』において、ジェイが最後に戦う帝国ゾイド。先に述べた通り、アニメ『ZOIDS』で二度描かれた《ブレードライガー》と《デスザウラー》の死闘を、バトストの設定・世界観に合わせて再構成したものをラストバトルに据える、というのは、本作を構想した一番最初の段階で決めていたことです。「破滅の魔獣」と称される超常的存在ではない、兵器として圧倒的なパワーを持つバトスト版《デスザウラー》と、あくまでオーガノイドシステムによってアップグレードされた《シールドライガー》の改造機に過ぎない《ブレードライガー》……両者の戦いには奇跡や偶然の介在する余地が無く、アニメ版以上に勝ち目のない戦いと言えるでしょう。

帝国最強ゾイド《デスザウラー》の戦闘描写としては、本作のそれは少しだけ「無敵感」が足りないかもしれません。《ブレードライガー》は無論、乱入してきた改造機《ゴジュラス・ザ・バズソー》や《ガンブラスター》も瞬殺するような真似はせず、プロレス的戦いを披露しますが——これは意図的なモノです。「向かってくる敵を一撃で倒して終わりより」も、相手が講じてきた策や技を真正面から受け止め、その上で潰し迫ってきた方が、死竜《デスザウラー》の兵器としての圧倒的戦闘力を描写する手段として正解と考えた次第です。

もう一点、作中ではやたらと《デスザウラー》の鳴き声について言及する場面がありますが、これは私の中でアニメ版《デスザウラー》の

鳴き声の独特さが、非常に強く印象に残っていたからです。ゴジラの鳴き声を意識して作られたものでしょうか、《ジェノザウラー》《ゴジラス》のそれに似た轟咆の後に、甲高い残響音が追いかけてくるあの鳴き声。子供心に非常にかっこよく思えました。バトスト版の《デスザウラー》も、是非あの声で吠えてほしいのですが……映像化の機会は、もうさすがにないだろうなあ……。

挽歌絶えぬ争いの星に 葬送の華を捧ぐ  
挽歌絶えぬ争いの星に 葬送の華を捧ぐ

——ZAC2104年 四月 西方大陸エウロペ北方・ブロント平地中腹

明朝の冷えた大気の中、射した朝焼けの陽だけが温かく、心地良い。雲一つ無い快晴の空の下、一面の平野が広がる光景は壮大で——澄んだ風が耳元を駆けるや、エリサ・アノンの栗色の髪を、フアとそよがせた。

「フフ……来て、ジエイっ」

傍らに駐機させた《ブレードライガー》のコクピットを振り返るや、丁度機体を降りようとしていたジエイ・ベックに呼びかける。

目が合って、ハハア、と短く笑ったジエイ。「すぐに行くよ」と、一息にコクピットを飛び降りて——直後、小走りで駆けていったエリサが胸に飛び込んで来るのを、受け止める。勢いに大きくよろめいたジエイは、おっと、と息を呑みながら踏みとどまり、彼女の躰を抱き寄せた。

一見なだらかな平原だが、降り立って見れば足場には碎け散った鉄くずが混じり、おぼつかない。戦傷で右腕の利かないエリサが態勢を崩さぬ様、その肩を抱いて歩き出したジエイは、足元に在る固い感触、辺りに散らばる風化した鉄塊たちへと気を遣った。

ジエイの視線を追いかけたエリサも、寂しそうに眉を顰めて、荒野で朽ち果てた亡骸達を見遣る。

雨風と砂塵に晒されて砂色に染まっているが、《レッドホーン》や《イグアン》と言った帝国機甲師団主力ゾイドと、ヘリックの機体——《ゴルドス》《ゴドス》、果ては《ゾイドゴジュラス》と言った大型機械獣までが、皆一様に荒野の中に骸を埋めていた。おそらく四年前——全ての始まりとなった西方大陸戦争の終局で戦い、果てた物達である。

「みんな、必死に戦ったんですよ、ジェイ……あの頃の私達と同じように。ツヴァインさんやコンボイ大尉、グロック少尉。相手を害したかった訳じゃない、敗死の先にあるであろう絶望を遠ざけるために……大切なモノを守るために、ただ必死に、戦った」

ジェイの手を放して一人、砕けた機体へと寄ったエリサ。残骸の一角へ寂しそうに触れて、撫でた彼女の言葉に、ああ、と静かに頷いたジェイは、敵も味方も無い、砕けたゾイド達の方へと一様に踵を向けて、目を伏せる。

——惑星Ziの戦乱は、未だ終わってはいない。

戦乱の舞台は中央大陸デルポイへと移った。ガイロス帝国・ヘリツク共和国を謀り、その国力の大半を削いで、デルポイの地に誕生したネオゼネバス帝国と、長きに渡る戦いによって国家としての体裁さえも失った共和国残党軍が、戦いを続けている。

止めぬ争いが在るのならば、せめて傷つける側ではない、戦いの中で傷つき、虐げられた無垢の人々に——そして戦場で朽ちながらも、それでも自分を、大切なモノを守るために戦い果てて言った魂たちへと、安らぎを与える者になりたい。

暗黒大陸・セスリムニルでの戦いから三年。混沌の中で軍を離れ、戦争の爪痕の残る二クスの地からこのエウロペまで流れながら、二人は戦火の残滓燻る町を廻り、またこうして忘れ去られた雄達の墓標を見つけては、吊っている。

戦いの果てに、贖罪の道を探す——かつてコンボイ小隊長がそう論じた道標への、ジェイの答え。

兵士として戦乱の片棒を担ぎ、数多の命を奪って来た自分が執るべき道として、その行いが正解かどうかは、分からなかった。正しさなど無い、単なる偽善かもしれない。それでも——共に戦い、去って行った仲間達は今の彼を、彼が選んだ贖罪の選択を、後押ししてくれる気がした。

蒼天は、何処までも続く。今は会えぬ仲間達を思って、青空を煽い

だジェイは、傍らに寄り添ったエリサの手を、そつと握った。

——※※※——

暗黒大陸を出た大型輸送艦《ホエールキング》の格納庫。そこに、共和国の友軍の証として鮮やかなブルーの塗装を施されたガイロス製戦闘機械獣が立ち並ぶ。

本土決戦で多大な損害を被り、対ネオゼネバス帝国を掲げヘリック共和国と同盟を組みながらも、主だって前線に立つ力は残されていない。かつてガイロス帝国軍だが——この度西方大陸に存在するネオゼネバスの主力戦闘機械獣『完全野生体ベース機』の原型となる野生ゾイドの生息地域を抑えるために、この『ピース・メイカー隊』のエウロペ大陸への派兵が決定した。

ガイロス製恐竜型ゾイドの中に、ただ一機だけ四足の猛獣型戦闘機械獣が混じっている。

他の『ピース・メイカー』の面々と同様にブルーカラーで全身を彩っているそれは、先の暗黒大陸戦争末期にヘリック共和国が完成させた狼型の新型ゾイド《ケーニツヒウルフ》、その火力と装甲の増強型・通称《ヘビーアームズ》だ。西方大陸エウロペでの任に際して、土地勘のあるエウロペ出身の傭兵が同道する事となった。共和国側に長らく従軍していたその男は、先の戦いでの戦果を買われ、軍の最新鋭ゾイドすら任された腕利きのゾイド乗りでもある。

「エウロペ出身の傭兵、か。故郷に戻るのは、何年ぶりになる？」

《レブラプター》や《ジェノザウラー》、《レッドホーン》……かつては銃火を向け合う強敵の象徴であったその姿を見上げながら、傭兵は紙巻タバコに火をつけた傭兵は——ふと背後、人の気を感じて、眉を顰める。

振り返った先に、『ピース・メイカー』の隊長を務める男性士官が立っていた。

「焼かれ、傷ついていく故郷を見て来た……その復讐を誓って共和国

に組し、故郷を発ち、ニクスまで戦い抜いた——そうだな？」

摂政ギンター・プロイツェンの策謀が噛んでいたとはいえ、西方大陸エウロペでの戦いの発端となったのは、間違いなくガイロスだ。負い目を覚えたのであろう、「ピンとこないのではないか？ 途端、我らガイロスが友軍と称されても……今でもお前は我らの背を背後から撃ち抜きたいと、そう願ってるのだろうか？」とごちた将校の目は、どこか自嘲的な色を湛えている。

傭兵は、そんな彼の瞳を数秒見据え返していたが——やがてハッ、と息を吐くや、「うるせえよ」と頭を振ってそっぽを向く。

「アンタに同情される謂れなんざねえ。なにより、お前ら軍人への復讐にかまけて、傷ついたエウロペに背を向けたつもりなんて、これっぽっちも無いんだよ。今も昔も、俺は故郷のために俺の出来る事をやっていく……それだけさ。アンタも、少しでもエウロペに贖罪をしてやりたいって言うんなら——俺に憎まれ口を叩くんじゃなくて、お前に出来る事をしてやってくれ」

「……ッ」

傭兵の言葉に言葉無く目を剥いたガイロスの将校は、やがて静かに瞼を閉じ一言、「すまなかつた」と項垂れた。

傭兵は彼にそれ以上の言葉をくれてはやらなかったが、かつてこの男と同じように、彼とエウロペに心を割き、真正面から向き合おうとした青年士官を思い出す。（ドイツもコイツも、軍人てのはおせっかいなヤツばかりだな）と胸中でごちた彼は——懐かしい戦友の顔を脳裏に見て、思わず目を伏せていた。

——※※※——

西方大陸エウロペ 赤の砂漠・古の戦場跡にて

『私の知り得る限り 最高のゾイド乗り ここに眠る』

全身を金属細胞の異常増殖に蝕まれ、視力も殆んど残っていない。



それでも彼女は、砕け散った鉄塊の一角に刻まれた碑文に触れ、また目を凝らす事で、そこに残された意をはつきりと読み取る事ができた。

以前にも、ここに訪れた事がある。

人智を超えた魔物、ヘリツクが凶戦士と呼んで恐怖し、ガイロスが超越者イモータルと畏れた究極のゾイドへと立ち向かい、討った英雄——それは間違いない戦場の恐怖すら超越し、人と機獣の心を一体として力を発揮したゾイド乗りの究極であり、この碑の末尾にある通り『全てのゾイド乗りの指針となるべき』物なのであろう。

そして——彼女もまた、そう在りたいのだ。

全身が疱瘡に覆われ朽ちていく最中にある今の彼女は、既にゾイドに乗ることなど叶うまい。腐り落ちていく軀を麻布で包み隠し、道行く人々に忌み嫌われながら——尚。彼女はまだ、それを願いつづけている。

震える指先で懐を弄ると、彼女の手元にただ一つ残された「戦利品」を取り出して、空へと翳した。銀色の認識票ドックタグには、『最高のゾイド乗り』に王手を掛けていたあの日の彼女に、偶然と確固たる執念を武器にして挑み——土を掛けた兵士の名が刻まれている。刻まれた文字を読み取るとは、遙か前から出来なくなっていたが——視界を失う前から幾度も反芻した名前は、彼女の脳裏にしかと焼き付いている。

「争いの絶えぬ現世……それでも、楽しみましよう、ジエイ・ベック少尉——私達、最高のゾイド乗りになるために」

うわ言のように囁いた彼女は、空に翳した認識票ドックタグに舌尖を伸ばして——ゆつくりと、己が口内へと含んだ。

——※※※——

中央大陸デルポイ、とある山間部。雪深い氷雪の峰、その中腹にネオゼネバスの掃討部隊を逃れて集まった、ヘリック共和国残党軍の秘密基地が設けられている。

物資の補給もおぼつかず、戦力もまばらなゲリラの拠点。その格納庫内で、レイモンド・リボリーは日々の業務である残存兵力の機体整備に明け暮れていた。

ガイロス帝国との停戦から程無くして共和国軍は崩壊し、レイモンドもまた急場しのぎの再編軍と共にデルポイへと帰還する事となり—— 食料さえ碌にない困窮状態と過労が相まり、ふくよかだった躰は瘦せこけ、似合わぬ無精ひげまで生え放題だ。おぼつかない意識のまま、ただひたすらに手を動かしていた彼だったが——、

「——機影確認！ 『ミラージュ』だ！ 北方より、新たな同士が駆けつけてくれた！」

整備兵の誰かが上げたけたましい叫び。

ギ、と軋んだ鉄製の扉が上がるや、冷えた山風がブアと舞い込んで疲弊に呆けた脳裏を冴えさせる。ビュウと鳴った風の音に戦闘機械獣の轟咆と、重厚な駆動音が混じって—— 見ると、雪を被った白い獅子の群れが、格納庫内へとなだれ込んできた。歴戦の猛者たる使用痕夥しい《ブレードライガーミラージュ》が十機弱、そして《ミラージュ》同様、パールホワイトとワインレッドという隊のパーソナルカラーをあしらった《ライガーゼロシユナイダー》が、その先頭に立っている。ゼロのkokピットが開いて、共和国軍高速ゾイド乗りの雄たる『レオマスター』が一人、ピーター・アイソップが姿を現すと、基地内の士気が急速に高まるのが見て取れた。

「レオマスターが、来てくれた！」

「暗黒大陸で活躍した共和国高速戦闘隊のエース『ミラージュ高速戦闘隊』……これなら百人力だ！」

と、活気づいた基地内。喧噪の中、レイモンドもまた人ごみを掻き分けて、立ち並ぶライガーへと駆け寄っていく。

ニクスでの総力戦から、3年。レイモンドはずっと、彼が死地へと送り出した友の安否を探していた。戦乱の中、レイモンドにとっても

掛け替えのない友人を取り戻すために戦った漢。彼が最後に所属していた部隊こそ『ミラージュ』高速隊であり、3年の時を経てようやくとそれと再会できたのだ。

『ミラージュ』隊……！ 青い《ブレードライガー》は、ジェイ・ベック中尉は何処だッ!?)

逸るレイモンドだったが、整備ラックに入って行く《ブレードライガーミラージュ》達の中に、親友の象徴たるアーリータイプ・『ブルー・ブリッツ』の姿は無かった。ピーター・アイソップ、コーネル・ロドニーにタクマ・サンダース……名だたる英雄との合流に沸き立つ基地の中で、レイモンドは胸中に突き刺さった悲壮な予感に涙し、膝を付く。

——その時であった。

「リボリー、さん……?」

おずおずと問うた女性の声が、背に掛かる。

澄んだ鈴の音に似た声色に、どこか懐かしさを覚えて振り返ったレイモンドは——次の瞬間「君か……ッ」と驚愕し、立ち上がった。ポサボサの金髪を乱したまま、虚ろな翡翠色の瞳で視線を寄越す、華奢な体躯の少女士官。見に纏う華美な礼服はあちこちが擦り切れていたが、間違いない。ニクス大陸・エントランス湾の前線基地で、常にジェイの傍らに立っていた若い女性士官の出で立ちだ。ジェイの隣で話込むレイモンドを、不機嫌そうな眼差しで見ている彼女の姿を、今でも鮮明に覚えている。

取り立てて気心の知れた仲間でも無かったレイモンドに、声を掛けた事を後悔したのだろうか。女性は怯えた風に貌を強張らせると、俯いて、口を噤んだ。気まずそうな彼女だったが——対してレイモンドは、先までとは打って変わった胸の透いた想いで、少女へと微笑みかける。彼と共に戦い、その選択を間近で見に来たのだろうか少女士官との再会は——何故かどこかで、ジェイ・ベックもまた生きているのであろうと、予感させる物であった。

穏やかな風が、二人の合間を駆け抜ける。

墓標の如く戦場に残された機獣達の亡骸に、葬送の華を手向け終えたジェイとエリサ。「……行こっか」とはにかんだエリサに頷くと、ジェイは彼女の手を引いて《ブレードライガー》の機体へと乗り込み、終わらぬ旅路へと繰り出していく。

駆ける機獣が揺籃の如き緩やかな揺れを生んだコクピットの中、心地よさに思わず目を伏せたジェイ。そんな彼の背後、エリサが身を乗り出すと、「ねえ、ジェイ。私達、どこまで目指すの？」と、横顔に問うた。

どこまでも、と、ジェイは彼女に振り返り、笑みを見せる。

「エウロペを往ったら、次はデルポイまで。その先にもまだ、俺達が力を必要とする人達が居るのなら、そこにだって……どこまでだって行くんだ。ようやっと見つけた、俺がゾイドに乗って、戦う理由。君と一緒になら、やり切れる気がする。長い道のりになるけれど——まだ傍に居てくれるかい、エリサ」

「うん……一緒に居ます。貴方も私も、そうしてないときっと挫けて、また泣いちゃうから」

冗談めかして言ったエリサだったが、ジェイにとっては、それが真理だと思えた。

「——ありがとう、エリサ」

囁くようにごちたジェイは、心持ちを新たに《ブレードライガー》を扇動する。力強い咆哮を上げた青い機獣は流星の如く疾駆し、果て無く続く地平の先へと、どこまでも駆けて行くのだった。